

# インフィニット・ストレートス ファントム

OLAP

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

幼い頃に両親を失ってしまった織斑一夏。

そんな彼のお話し

投稿は不定期

# 目次

## 第一章 プロローグ

|            |    |
|------------|----|
| 僕が優れているもの  | 1  |
| 誘宵アリサ      | 8  |
| 篠ノ之神社にて    | 12 |
| 「私の家に来ない？」 | 19 |
| 始まり？       | 29 |
| ハワイへGO!    | 32 |
| バカンスはお終い   | 40 |
| 白騎士事件      | 48 |
| 誕生日は彼女と一緒に | 54 |
| 新学年        | 63 |
| 織斑家にて      | 70 |

## 第二章

### 亡国機業

|               |     |
|---------------|-----|
| 一夏の……         | 76  |
| プロローグ……お終い    | 82  |
| 新たな始まり        | 93  |
| 彼の出会い         | 104 |
| 彼は目覚めて彼女と再開する | 112 |
| そして彼は力を手に入れる  | 121 |
| 強くなるための道      | 132 |
| 挨拶を済ませて彼は行く   | 148 |
| No. 000       | 156 |
| 専用機           | 175 |
| 大晦日の日         | 192 |
| モノクローム・アバター   | 214 |

|          |   |     |
|----------|---|-----|
| 最初の任務    | — | 232 |
| 再会と戦闘    | — | 238 |
| シロノ      | — | 265 |
| ティファとの再開 | — | 272 |
| 量産コア     | — | 277 |
| 妹との隔たり   | — | 284 |
| 市街戦闘     | 1 | 294 |
| 市街地戦     | 2 | 302 |
| 市街戦闘     | 3 | 309 |
| No.004   | — | 322 |
| 宵の誘い     | — | 333 |
| 誘宵アリサ救出戦 | — | 343 |
| 貴方を誘う、今宵 | — | 353 |

|             |   |     |
|-------------|---|-----|
| 変化は始まる      | — | 360 |
| 同僚との会話      | — | 367 |
| 第二回モンド・グロツソ | 1 | 373 |
| 第二回モンド・グロツソ | 2 | 381 |
| 第二回モンド・グロツソ | 3 | 387 |
| 亡国機業総帥      | — | 394 |
| 轡木十蔵        | — | 402 |
| ネオの猛者       | — | 411 |
| 死の音         | — | 421 |
| 指輪を貴方に      | — | 430 |

|              |     |            |     |
|--------------|-----|------------|-----|
| 破壊者          | 437 | 一夏一日       | 532 |
| 次の舞台へ        | 445 | 転入生        | 540 |
| 第三章          |     | アドルフ       | 555 |
| IS学園         |     | 学年別タッグマッチ1 | 560 |
| 入学準備         | 449 | 学年別タッグマッチ2 | 574 |
| 黒零計画         | 453 | 学年別タッグマッチ3 | 581 |
| 孵化           | 461 | 学年別タッグマッチ4 | 589 |
| 黒零           | 471 | 砂漠の襲撃戦1    | 597 |
| 白に舞う黒        | 480 | 砂漠の襲撃戦2    | 605 |
| 世界最初の男性IS操縦者 | 487 | 砂漠の襲撃戦3    | 616 |
| クラス代表決定      | 496 | アナザー・ゼロ    | 626 |
| 舞台の裏で        | 504 | 銀の福音対策会議   | 635 |
| クラス代表戦       | 514 | 銀の福音1      | 648 |
| クラス代表戦決勝     | 526 |            |     |

|         |      |      |      |      |      |      |        |       |       |       |       |       |
|---------|------|------|------|------|------|------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 降り立つ破壊者 | 第84話 | 第83話 | 第82話 | 第81話 | 第80話 | 第79話 | 学園祭準備編 | 銀の福音6 | 銀の福音5 | 銀の福音4 | 銀の福音3 | 銀の福音2 |
| 803     | 793  | 783  | 771  | 760  | 734  | 725  | 718    | 704   | 687   | 678   | 665   | 657   |

|      |      |      |      |      |     |      |      |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|-----|------|------|------|------|------|------|------|
| 第98話 | 第97話 | 第96話 | 第95話 | 第94話 | 就職  | 第92話 | 第91話 | 第90話 | 第89話 | 第88話 | 第87話 | 第86話 |
| 964  | 959  | 951  | 942  | 916  | 903 | 897  | 884  | 880  | 871  | 858  | 841  | 824  |

第 111 話 第 110 話 第 109 話 第 108 話 第 107 話 第 106 話 第 105 話 第 104 話 第 103 話 第 102 話 第 101 話 第 100 話 第 99 話

11161107109410891082107310641050104210291011 993 980

デートを遂行させる  
第 122 話  
第 121 話  
プログラム  
最終章 妖精戦争  
第 119 話  
第 118 話  
第 117 話  
第 116 話  
第 115 話  
第 114 話  
第 113 話  
第 112 話

1231122212131209 11991187118211721158115011411124

|               |               |               |               |               |               |               |               |               |               |               |               |   |
|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---|
| 第<br>136<br>話 | 第<br>135<br>話 | 第<br>134<br>話 | 第<br>133<br>話 | 第<br>132<br>話 | 第<br>131<br>話 | 第<br>130<br>話 | 第<br>129<br>話 | 第<br>128<br>話 | 第<br>127<br>話 | 第<br>126<br>話 | 第<br>125<br>話 | 終<br>わ<br>り<br>が<br>始<br>ま<br>っ<br>た<br>日 |
|               |               |               |               |               |               |               |               |               |               |               |               |   |

1393138113711355134513321313130112851271126312561249

第  
137  
話

|



# 第一章 プロローグ

## 僕が優れているもの

両親が死んで、義妹が誘拐されてからどれくらい経っただろう。

その二つの事が原因で僕たち兄弟は変わってしまった。お互いの性格は歪んでしまい、両親がいた頃は兄弟の仲は良好だったはずだ。しかし、今となってはそんなことは過ぎてしまったこと。いつ喧嘩が勃発してもおかしくない状況。

弟はとても頭が良い、小学生ながら高校生が解くような問題を解いている。そして義姉さんは運動神経がとても良い、剣道を習っておりその実力は全国大会を連覇できるほどだ。

では、僕の優れているものは何だろうか？

僕は同学年の小学生と比べれば勉強はできるし、運動神経だってそこまで悪くはない。だが周りの人々は二人と比べて劣る僕を貶す。同級生は僕を苛めてくる。

でも

「俺が悪かった、許してくれ、頼む！」

放課後の小学校の校舎裏、ここに1人の児童の叫び声がこだまする。少年の近くには二人の児童が気絶して倒れている。そして、彼の目線の先にもう1人の少年。

「……」

少年は無言で児童へと近づいていく。少年の右手は血で汚れている。おそらく、気絶している少年を殴った時に付着したのだろう。それに対して児童は尻餅をつきながら後ずさりしていく。少年が児童に近づくに連れて、児童の震えがましていく。

「君たちが僕をここに呼び出していきなり殴ってきた。だから僕は殴り返しているだけだよ、だって、殴らないと倒されちゃうから」

淡々と喋る少年。その様子に児童はさらに恐怖心が増していく。

「悪かった、お前を苛めて悪かったと思っている。だから許してくれよ！」

しかし、児童の叫びは少年には通じない。少年は小学生とは思えないような鋭い蹴りを児童の顎にぶつけた。すると児童は痛みによってきぜつしてしまった。

気絶している3人の児童を見る少年。少年の頬には一回だけ殴られた跡があるが他には一切傷がない。たった一回殴られただけ、後は少年による一方的な暴力だった。

「そろそろ帰って、ご飯作らないと」

少年はバッグをからって、児童達をほったらかしたまま、帰って行った。

「ただいま」

玄関の戸を閉め、靴を脱ぐ。帰宅の挨拶をしたが返事はない。いつもの事だ、もしかしたら家に弟がいるかもしれないが、返事なんかは決してしない。

自分の部屋にバッグを置いた後、台所に向かう。台所につくと冷蔵庫の中身を先ず第一に確認する。

（キャベツ、豚肉に焼きそばの麺があるから……焼きそばでいっか）

冷蔵庫の中身を確認し、今日の献立を決めた少年は具材を取り出し、料理を始める。慣れた手つきで料理をする少年。焼きそばが完成するとフライパンのなかで焼きそばを三つに分け、そのうち一箇所を皿に盛り付ける。

「いただきます」

孤食。子どもが成長する際にこの行為はあまり好ましくはないと言われている。しかし、僕にとってはこんなこと日常茶飯事である。両親がいた頃や義妹がいたころはみんなで揃って食卓を囲み、仲良く食べていた。でも今は

、義姉さんは部活動で毎晩遅くに帰ってくるし、弟は何処にいるのかわからない。そ

れが今の僕の家族。

ご飯を食べ終わり、皿を片付けると自分の部屋に戻る。そして直ぐにバッグから宿題を取り出して取り掛かる。

一時間もすれば出された宿題は全て終わる。そうすれば次はおふろの準備に取り掛かる。風呂を洗い、沸かし始める。風呂が沸く迄の間、僕は今日干していた洗濯物を畳む。いつもの事だ、いつも僕が家事をする。義姉や弟には任せてはられない。なぜかと言うと、より悲惨になつてしまふからだ。義姉の部屋は足の踏み場もないと言つていいほどだ。あの人には家事の能力が皆無らしい。だから僕が家事をする。

洗濯物を畳み終わると同時に風呂が沸いた音声が聞こえる。そして風呂場へと向かい僕は一日の疲れを癒す。

風呂から上がり自分の部屋に戻ろうとする。ふと、リビングの方を見てみれば二人分の声が聞こえる。楽しそうな会話。すごく虚しくなってくる。自分だけが仲間外れ

……

今日は小学校の修了式、午前中で学校は終わり今は放課後である。

僕は図書館でいつもの様に時間を潰していた。ここはいい場所だ。

何処迄も続く様な沈黙が空間を支配し、まるで時が止まっている様にも感じられる。僕は普段、授業が退屈な時は何時もここでさぼっている。

時計をみると時間は既に午後2時を回っていた。正午に放課されたから、かれこれ二時間本を読んでいた事になる。そろそろ帰ろうと思ひ荷物に手をかける。そこで僕は忘れ物があることに気づき、教室に戻る。

教室で忘れ物を取り、帰ろうとすると僕は隣の教室であるものを発見する。2人の少年が1人の少女を教室の隅で蹴ったり殴ったりしていた。すると2人のうち1人が僕の存在に気づいて近づいてくる。

「お前何見てんだよ！」

近づくと同時に殴りかかってくる少年、僕はそれをわざと食らう。倒れはしなかったが、やはり少し痛い。すると、少年は何を思ったのかニヤニヤと笑い始める。

「これ以上痛い目に会いたくなかったら帰りな」

少年がそんな事を言ってきた。だから僕は持っていた荷物をおろして。

ドスッ！

少年の鳩尾に一撃、お返しとばかりに拳をぶち込む。少年が弱いのかそれとも油断していたのかわからないが簡単に攻撃できた。身体くの字に曲げて痛みを抑えている彼の頭を両手で抑え、膝蹴りを三発おみまいする。少年から手を離すと彼は口から血を出し、床にうつ伏せになる様に倒れた。

「さて、次」

僕はそのまま残りの一人に近づいていく。残りの一人は僕に近づいてきて殴ってくる。僕はそれをかするようにはぐれ、ガラ空きの際に右アッパーをたたき込む。アッパーの衝撃で膝から倒れこむ少年、僕はそれを見逃さず少年が倒れるタイミングに合わせ、少年の顔に蹴りを入れる。

「……」

スローモーションの様に仰向けに倒れる少年を見る。少年の頬をパチパチと叩き気絶しているのを確認すると、少女の方に歩み寄る。

「大丈夫？」

目の前で一方的な暴力を振るったやつがこんなことを言うのはおかしいとおもいながら、彼女に声をかける。

「えっ……えっ……いじめないで」

教室の隅で座り込み、震えながら細い声で呟く少女。やはり驚いているのかビクビク

しながら僕を見ている。

「大丈夫、僕は君をいじめないから。それよりも怪我とかは……あるか。保健室1人で  
行ける?」

彼女に手を差し伸べる。すると彼女は僕の手を掴んだので僕はそれを引つ張り彼女  
を立たせる。彼女は立った時にバランスを崩してしまい、倒れそうになってしまったの  
で僕はそれを受け止める。

「大丈夫か?」

「うん、うん……その、助けてくれてありがとう……1人で保健室にはいけないから」

彼女はそう言うのと僕から離れ、荷物を持つと急ぎ足で教室から出て行った。僕も荷物  
を持つと気絶した2人をほったらかして帰った。

## 誘宵アリサ

春休みも終わり今日から4年生だ。学校に行くとは下駄箱の近くにクラス割りが発表されていた。僕は自分のクラスを確認し終わると教室へと向かう。教室に入って自分の席を確認するとそこへ向かい、着席すると同時に寝る体制になる。HRが始まる迄にはまだ時間がある。

ふと気づくと僕は周りから指を指されたり、此方を見ながらヒソヒソと話しているのに気づいた。

(多分、修了式に二人気絶させたのが原因だろうな……どうせみんな怖がるか、虐めだすかのどちらかだから、このクラスでも友達はできないのか……)

新学期早々、絶望的な事に気づいてしまった僕は気を紛らわせる為に机に突っ伏す。

しばらくすると周りが騒がしくなってくる。顔をあげて見ると既に先生が来ていて挨拶をしていた。起こしてくれればよかったのに……

先生の話を頬杖をつきながら聞く。正直言つて退屈です。大体こう言つた時に話されるのは決まっている、だから聞かなくても大丈夫だろう。そう思いながら、僕は再び眠りについた。



誰かが僕の体を揺らしている。僕は顔を挙げて僕の体を揺らしている人の顔を確認する。

(先生か?)

「やっとな起きてくれた」

嬉しそうな声でしゃべる少女。綺麗な藍色の長い髪に翠色に近い瞳で、どこか大人しい印象を与える少女。

周りを見回して見ると教室には

僕と彼女しかない。

「みんなどこ言っただよ」

「みんな、始業式の為に体育館に行ったよ」

「あれ?じゃあ、君は何でここにいるの?」

「わたしはあなたを待ってたの、あなた此処で寝てたから」

「じゃあ、悪いことしたねゴメン。そういえば自己紹介がまだだったね、僕は織斑一夏。えっと、君の名前は?」

「誘宵……誘宵アリサ。一夏くん、この前はありがとう。わたしをその……助けてくれ

て」

そこで僕は気づいた。彼女は修了式の日にいじめられていた少女であるということに。

「いいよ、気にしなくて。でも、どうしていじめられてたの？」

正直この質問をしたのは失礼だと思った。

「わたし……その、昔から人見知りでみんなと上手く付き合えなくて……だからみんなからいじめられたりしたの。だから……わたし、嬉しかったんだ。その……家族以外から優しくされたのが」

俯きながら手をもじもじさせる誘宵さん。

「それに……わたしの髪の色と瞳の色がみんなと違うからさ、馬鹿にされたり……」

「そうかな、僕は綺麗だと思うよ、君の髪と瞳の色。本当に」

僕は彼女の眼を見て真剣に応える。彼女の髪や瞳の色は確かに日本人からしてみれば確かに変かもしれない。しかしそうであっても、彼女の髪はよく手入れされており、瞳は何もかも見通す様に澄んでいる。それを綺麗と言わずしてなんと言う。

「あ、ありがとう。そ……その、嬉しいです。そんなこと言ってもらえて」

「それよりもこれからどうするの？今さら体育館へ行っても仕方が無いから、僕は図書館に行くけど」

「わ、わたしも行く」

僕たちはそのまま荷物を持って図書館へ行った。

## 篠ノ之神社にて

ある日僕は姉さんと弟に連れられて、ある場所に来ていた。篠ノ之神社、夏には祭りが催され、神社の中にある剣道場では剣道教室が開かれている。姉さんが昔通っており、今は弟が門下生として日々精進している。僕も何度か行ったことがあるが、道場の師範代の娘を倒してからはやる気がなくなりやめてしまった。代わりに僕は今、体を鍛える為に柔道教室に行っている。

僕は姉さんから許可を貰い、境内の中を散歩している。お参りシーズンでもないため参拝客は誰一人いない。僕はその辺にあつた石でできた椅子に座り空を眺める。

『聞こえる?』

突然僕の頭の中に少女の声が響く。僕は慌てて辺りを見回すが誰一人いない。僕は不気味に思い、姉さんの元に急いで戻った。

姉さんたちの元に戻ると、新しく高校生ぐらいの女性とポニーテールの小学生の少女がいる。2人の内、1人はわかる。篠ノ之箒、僕が昔通っていた道場の師範代の娘。僕がまだこの道場に通っていた頃、何度か手合わせした事があるが彼女は一度も僕に勝つ

事はなかった。それから僕は剣道にやる気をなくしてしまったため、道場をやめてしまった。結果としては勝ち逃げという事になる。その事が彼女にとつては気に食わなかったのだろう。学校で会う度に勝負しろ、勝負しろといってくる。正直言つて面倒くさい、今彼女と戦つたとしても僕は勝つ自身がある。だから僕は彼女を適当にあしらつている。

篠ノ之箒は近づいてくる僕を睨んでいる。だが、僕が気になつていのはもう一人の高校生ぐらいの女性だ。彼女はジロジロと僕を好奇心たつぷりの眼で見ってくる。

「来たか一夏。紹介するぞ、こいつは篠ノ之束。この神社の神主の娘で私の同級生でもある。束、挨拶しろ」

僕の姉である織斑千冬が高校生ぐらいの女性、篠ノ之束を紹介する。

「わかつたよ、ちーちゃん。わたしが天才の束さんだよー♪君のことはちーちゃんからよく聞かされているよ、宜しくね、いっくん♪」

「よろしくお願ひします」

彼女は僕に手を出して握手を求める。だから、僕も手を出して彼女と握手をする。

『早く来て』

まただ、またあの声が聞こえる。僕は辺りを見回したが、声の主はどこにもいない。

「ねえ、いっくんどうしたの?」

僕の様子を不審に思ったのか僕に質問する。

「いえ、なんだかさつきから幻聴が聞こえるんです」

僕がそう応えた瞬間、東さんは僕の肩を両腕でしっかりとつかみ、前後に揺さぶり始める。あまりにも速く揺さぶるため少し気分が悪い。

「本当！本当！いつくんそれどんな声！」

「どんな声って言われても、少女の声でした」

その言葉を聞くと東さんは僕を抱き寄せる。

「すごい！すごいよいつくん、まさかあの子達の声が聞こえるなんて！ねえ、ちーちゃん。この子もらつていい!？」

「やるか馬鹿」

「ちーちゃんのけち、ならいつくんついて来て」

東さんがそう言うのを僕を抱えたまま何処かに向けて走り出した。

「ふふーん♪ついたよいつくん」

東さんに抱きかかえられること数分、僕は神社のはずれにある小屋に連れてこられた。そして先ほどよりも僕の頭の中に響く声が強くなっていることから、此処に何かが

あるのは間違いない。

「それじゃあ入って♪入って♪」

東さんは小屋の扉を開けて、僕を手招きする。僕はそれに従い小屋に入る。

小屋の中は至って普通だった。どこも変わったところは無い。木材などが置かれており、普段ここは物置として利用されているのだろう。

そして僕は東さんが小屋の奥で何かをいじっているのが見えた。するといきなり、小屋の床が動き出し地下へと進む階段が現れた。東さんが機械でも使ったのだろう、でもどうして此処に機械で動く床があるのか。

「さあ、いっくんついて来て」

東さんはゆっくりと階段をおりはじめ、僕は東さんについて行った。

階段を降り終わり何歩か廊下を歩くと、鉄でできた扉の前で止まった。東さんが此方に振り返った。その顔は暗くてよく見えないが何処となくこれから起こる何かを期待している様な、それとも同族を見つけて喜んでいいのか、そんな顔であった。

彼女は息を整えると僕の眼を見る。そして

「改めて自己紹介するね、私の名前は篠ノ之東。ちーちゃんとは同じクラスで発明家と

しても有名だよ」

彼女の行った自己紹介は最初に行った好い加減な物とは違う。僕の眼を見て自己紹介を行う。

「今から君を私のラボにご招待します、さあオープン♪」

東さんがそう言うと同時に彼女の背後にある鉄の扉が両側に開き始める。暗い廊下に照らされるラボからの光。それはまるで僕に新しいなにかを届ける様な光、または新しい世界への入り口にも見えてくる。

僕は東さんに手を持たれ、中に連れられる。

僕がそこで見た光景、それは現実的であり、かつ非現実的さを感じさせた。広めの部屋には明るい証明が灯され、奥にはなにかを隠す様にカーテンがある。幾つも並べられたパソコンのディスプレイ、そこには幾千を越える文字や記号が流れて行っている。カーテン近くの巨大なディスプレイにはデフォルメしたウサギ耳を付けた東さんが笑顔で走っている。

でも、僕が気になったのはそこではない。この空間の中で僕が最も気になった物は、巨大なディスプレイでも幾つも並べられたパソコンでもない、カーテンの奥にある何



か。見えてはいないが確かに何かがそこにはある。多分それは僕の頭の中に響く声の正体だろう。

「気になつてゐみたいだね、いっくん」

するといきなり部屋の証明が消される。そしてスポットライトが点灯しカーテンの前にいる東さんを照らす。

「今から君に見せるのは、私が今まで作り上げて来た物の中でも間違ひなく最高傑作、その名もインフィニット・ストラトス。さあ、ご覧あれ！」

カーテンが開き、奥にスポットライトが照らされる。そこにあつた物は白色の機械……いや、パワードスーツがあつた。

あれからラボに来た姉さん達、そしてその後には東さんによるインフィニット・ストラトス、略してISの基本的な説明会がラボで開かれた。

曰く、ISはISコアという物を使うことで初めて動かすことができるマルチパワードスーツである。

曰く、これは何故か知らないが女性にしか扱えないらしい。この事は東さんもよくわからないそうだ。

曰く、女性にしか扱えない事が原因となり、学会で発表しても誰も興味をしめさなかつたらしい。だから、現在はスポンサーを探しているそうだ。

そして最後に……ISコアにはそれぞれ意思がある。

「私の家に来ない？」

「ねえ一夏くん、今度の日曜日って暇？」

放課後の図書館、机で本を読んでいた僕にアリサが声をかけてきた。クラスでも席が前と後ろという事で普段からよく話しているし、僕の学校では給食ではなく弁当なのでよく一緒に食べている。最初はおどおどとしていた彼女だが、今は僕と普通に話せる様になった。他の人はまだ無理だが……

「その日は柔道の練習が無いからいいけど、どうしてだ？」

「えっと……その、良かったら私の家に来ない？」

「アリサがいいなら行くけど」

ちなみにだが彼女のごとは前まで誘宵さんと読んでいたが、彼女からの希望でアリサと読んでいる。

「良かった、なら午後1時に学校の校門で待ってて」

嬉しそうな顔で話すアリサ。そして僕たちはそのまま下校時刻まで図書館ですごした。

そして約束の日曜日、僕は何時も学校にきていく様な服でアリサを待つていた。現在午後12時45分、日曜日という事もあつて学校にはクラブ活動で来ている野球少年達がグラウンドで大騒ぎしている。僕は少し早く来てしまったので、バックから本を取り出して、ベンチに座り読み始める。

「……………」

じつくりと本を読む、一字一字を確かめる様にゆつくりと。もうすぐこどもの日という事もあつて、

あちらこちらの家に鯉のぼりが揚がっている。

時々だが車が目の前の車道を通り過ぎていく音が聞こえる。一台、また一台と、僕の目の前を通り過ぎて……………行く？

ブロロロロロ……………

通り過ぎて行く筈の車が僕の目の前で止まった。本から眼を離し僕の目の前に止

まっっている車を見る。

リムジンだった……リムジンだった!!

特に大事な事でも無いが二回言った。それだけ僕は驚いている。テレビなどで見た事はあるが、実物で見た事は今まで無かった。長さ自体は対した事では無いが、こんな場所にリムジンがくることに驚きが隠せない。

だが、何故僕の目の前で止まったんだ？僕の知り合いにリムジンに乗る様な人間はいない、強いて言うならば発明でお金を稼いでいる束さんくらいだが、あの人は車を運転できる年齢でもないし、誰かに頼んで運転してもらっているのは考えにくい。では誰が乗っているのだろうか？いや、もしかしたら乗っているのは赤の他人で僕の知り合いではないのかもしれない。

そんなことを考えている内にリムジンの後ろの扉が開き、中から人がおりてくる。黒色のワンピースをきていて、服のサイズから少女だと言うことがわかり、僕は少女を足からだんだんと顔を見るように動かす。

アリサだった

「ごめん一夏くん、待った？」

普段学校学校に着てくる様な服とは違う。気品の溢れる綺麗なワンピース、彼女の美しい長い髪を少し高そうな髪留めで留めているおかげで彼女の澄んだ翠色の瞳が見え

ている。

でも、何故彼女がリムジンから降りてきたのか僕にはわからなかった。しかし、彼女はリムジンから降りてきたのだろう。

「う、うん。今来たところですよ、はい」

そんな事を考えているせいかな、僕の言葉使いは非常におかしかった。

「ついたよ、一夏くん」

あれから約一時間後、俺はアリサと一緒にリムジンに乗って住宅街から市街地へと移動した。リムジンの中にはなかなか豪勢な作りになっていました。リムジンから降りるとそこにあつたのは巨大なマンション。いわゆる富裕層、それも上位の人間が住む様なマンション。

「ここが私の家だよ」

「ま、マジですか……」

「さあ、行こう!」

アリサに手を引かれて中に連れていかれる。

あれからマンション中に入り、エレベーターが登ること数十階分。エレベーターは停止して扉が開いた。

扉が開くとその先には一組の夫婦が待っていた。男性の方は藍色の短い髪に黒の瞳、年は大体30代だが体を鍛えているらしく下手な若者よりか肉体年齢は若いだろう。女性の方も三十代だろう。腰迄届く様な紫銀の髪をかんざしで止めている。顔つきから見て、日本人ではない。

「ただいま！パパ、ママ」

アリサは駆け足で二人の元にいくと、男性の方に飛びついた。普段の学校生活の何倍もアグレッシブな彼女をみて驚いてしまう。ああ、この人達は家族なんだ。僕の今の家族とは違う。しっかりとした目に見えないもので繋がっている。

「おかえり、アリサ。君はアリサのお友達かな？」

男声はアリサの頭を撫でながら此方に目を向ける。僕はピクリと体を震わせ、きをつける。

「は、はい! アリサさんとはクラスメイトで仲良くさせてもらっております。お、織斑一夏です!」

僕が自己紹介をするとアリサの両親は驚いた表情をした。

「織斑……そうか、君が。まあ、玄関で立ち話もなんだから上がってきなさい」

男性はそう言うのとアリサを抱えたまま、奥さんと一緒に廊下の奥の扉に入って行った。僕も靴を脱いでスリッパを履いてついに行った。でも、僕にはアリサの父親の言葉がどうも気になっていた。

「ようこそ一夏くん。改めて自己紹介するね、僕は誘宵皇くいぎよいこう。そしてこっちは」

「妻のレインです。アメリカ出身よ」

あれから僕はリビングに案内されてアリサが隣に座り、向かい側にはアリサの両親がすわっている。今僕が座っているソファアーもかなり柔らかい、きつとかなり高価なものなだろう。



「この家について気になってるようだね」

皇さんが僕の眼を見て訪ねてきた。その様子はまるで自分の子どもを見る父親の様に。

「君は誘宵グループって知ってる？」

誘宵グループ、それは世界的にも有名な一大財閥であり、その分野は一般の生活用品から工業製品など幅広く事業を展開している。その名を知らない人はこの日本ではない程だ。それくらい市民の生活に浸透している。

「勿論知ってますよ……誘宵？あのもしかして」

「そう、その通り。僕は誘宵グループの現会長で、レインは僕の秘書を務めてるよ」

驚いた。ということはアリサは令嬢ということになる。なんだろう、そう考えると僕の背中に嫌な汗がダラダラと流れる様な気がしてならない。

「一夏くん。実を言うとな、僕は君に感謝しているんだよ」

「感謝ですか？」

僕は今日初めて皇さんとであった。それなら感謝される様なことなど何も無いはず。

「アリサの事だね」

皇さんがそう言うのと僕の隣にいるアリサがギョツとした眼で皇さんを見る。

「パ、パパ何をいうの」

「僕たち夫婦はね、アリサを小学校までは一般の公立小学校にかよわせたんだよ。僕もそうだったからね。それで通わせてみたものはいんだけど、アリサは人見知りが激しいらしくてうまく友達を作れなかったんだ。だから、僕たちはとても心配したんだよ」

「……うう」

俯きながらそしてどこか気恥ずかしそうにしているアリサ。そういえば確かに彼女とは学校でよく一緒にいるが、僕以外と一緒にいるのは見た事がない。……まあ、僕も友達いかなかったんですけどね。

「でもね、四年生になったある日、学校から帰ってくるなりすぐにレインに抱きついてね。『今日学校で一夏くんね……』って君と学校で起きた出来事を話したんだよ」

染み染みと話す皇さん。ふと隣を見るとレインさんがハンカチで目元を拭いていた。

「僕はすごく嬉しかったんだよ。アリサに友達ができた事もそうだけど、何よりあんなに楽しそうに話すアリサは見たことなかったからね。僕も学生の頃はよく君の……って話しがずれてしまったね」

君の? 皇さんは何を言おうとしたのだろうか。

「そういう事だから僕達は君に凄く感謝しているんだよ。これからもどうか娘を頼むよ」

そう言うくと皇さんは僕に向かって頭を下げてきた。

「パ、パパ！」

「そんなの当たり前ですよ。彼女は僕にとつての最初の友達でもありますし」

そう言うくと皇さんは頭を揚げる。その顔はまるで端から僕がそう言うとは見抜いてい  
るようだった。

「君ならそう言ってくれるとしんじていたよ、それでこれからどうするんだいアリサ？」  
皇さんがアリサの方を見る、僕もアリサの方を見ると耳朶まで真っ赤にしてうつむい  
ていた。そしていきなり立ち上がると

「もお！パパなんてしらない！」

アリサはリビングを飛びたして行った。僕はアリサが飛び出して行った後、ふと皇さ  
んの方を見て見ると。

「アリサにもうしらないって言われた。僕はどうすれば……」

「大丈夫よ、貴方。アリサは少し照れて恥ずかしかっただけですから」  
(凄え落ち込んで!!)

ソファアの上に体操座りしながら、レインさんに慰められてた。

「反抗期になったら言われるって覚悟してたけど、こんなに早く、こんなにきついものな  
のか」

僕は皇さんをほうっておいて、アリサの後を追いかけた。

それから僕は姉さんに電話で遅くなると伝えた後、アリサの部屋で一緒に遊んだ。僕が彼女に勉強を教えたり、本と一緒に読んだりしながら。すごく楽しかった。これが友達と一緒に遊ぶ事だと思えたり、笑っているアリサの顔を見て僕はさっきの話もあつてかすごく嬉しかった。その後、僕はレインさんに晩御飯を食べていけないかと誘われたのでご馳走になった。すごく美味しかった。そしてとても暖かかった。

そして僕は改めて思った。

この家族は確かな絆でつながっている。

## 始まり？

「ふんふんふん、なるほどねー」

僕が今いるのは束さんのラボ、そして今ここにいるのは四人。僕と束さん、そしてアリサと皇さんの四人。なんでアリサと皇さんがここにいるかというところの前のアリサの家に遊びに言った時に遡る。

「ところで一夏くん、君はロボットに興味はあるかい？」

レインさんの作ったご飯を皆で食べながら、皇さんがそんな事を聞いてきた。

「いえ、僕はあまり……」

僕がそう言うと、皇さんは少しがっかりしながら「そうか……」と呟く。

「でも、僕の知り合いに篠ノ之束っていう人がいるんですけど、その人が色々ロボットを作っています」

「ほう、彼女と知り合いなんだね。彼女はこっちでもかなり有名でね、幼い頃からいろいろな物を特許申請しているからね」

「はい、確かそう言っていました」

「今度、彼女を紹介してもらえるかな。この前彼女が発表した物は少しきになっていたからね」

そして現在、休日を利用して束さんのラボに来た皇さんはジロジロとインフィニット・ストラトス、そしてその第一号機である白騎士を観察している。

白騎士

束さんが言うには現在あるインフィニット・ストラトスの核とも言えるISコア、その中でも460個近くあるコアのCOAN0.001を使用した機体。なんでも戦闘もできるという優れたものらしい。

僕とアリサはラボにあるソファアールでいられたてのインスタントの紅茶を飲んでいる。アリサもキョロキョロとラボの中を見回していて、時々不思議そうな顔をしている。それにさつきからISコアの声がガンガン頭に流れて来る。意識しなければ聞こえないのだから、意識しない様にしよう。

東さんは東さんでジロジロとISを観察している皇さんを心配するような表情で見ている。

「よー」

皇さんが移動して、東さんの前に立つ。東さんの表情は妙に緊張していた。さつきわかった事だが、この人はどうも人見知りがあるらしい。それに対して皇さんは真剣そのものだった。今ならば世界的な財閥の会長と言われても信じる事ができる。

「ISについてだが、我が社で前向きに健闘させてもらいます。それと、ISについて少し、僕に教えてもらえますか？」

皇さんがそう言うと、東さんの顔がパーっと明るくなる。そして皇さんと東さんは固く握手をする。

「はい！ありがとうございます。それじゃあ、説明会始めますね」

皇さんとの握手をし終えた、東さんはそそくさと説明会の準備をし始める。

思えばこれが始まりかもしれない

# ハワイへGO!

七月の中旬、今僕のいえでは兄弟三人でご飯を食べてもいないのにテーブルを囲んでいる。その理由は夏休みについての事だ。

「一夏、私と百春が剣道の合宿が重なってしまつてな。お前は どうするんだ?」

姉である千冬姉が僕の目を見てきた。姉さんと弟はなかなか強いらしい。僕には夏休みの予定がない。姉さんは家を開ける一週間、僕が1人になるのでそれを心配しているのだろう。

「1人で過ごすよ」

僕が返事をする。「そうか……」と言つた。

「だが一夏、本当に大丈夫なのか?」

姉さんがそう言うのと、今まで黙っていた弟が口を開いた。

「兄さんが大丈夫っていつてるんだからいいんじゃないの、千冬姉」

姉はそのことばをきくと黙つてしまった。



翌日、今日は終業式。僕はいつもの様に図書館でアリサと過ごしていた。僕はよく図書館にいる。僕は授業が退屈な時はよく抜け出して、この図書館の司書室で勉強なんかして過ごしている。司書の先生はしかるかと思いきや、別に先生にも報告したりするどころか、僕を匿ったりする。それが二年生ぐらいからの僕の過ごしからだ。それでも成績は悪くない、弟には劣るがな。最近ではアリサも一緒に過ごしている。

「一夏くん、ちよつといい?」

アリサが話しかけてきた。僕は本から眼を離して、対面に座っているアリサに眼を合わせる。

「その……夏休みなんだけど、良かったら一緒に旅行にいかない?」

「旅行?別に夏休みの予定は何もないから、別にいいけど。お金はどうするの?」

僕が言うと、アリサは「大丈夫」と呟く。

「お父さんが一夏くんの分もだしてくれるらしいよ」

皇さんが……だったら好意を無駄にしちやいけないな。

「いいけど、日にちは?」

「えつと」

アリサが旅行の日程を言うと、偶然にもその日は姉さんたちが合宿に行く日だった。

「わかった、いいよ。それで何処に行くの?」

「ハワイ」

そして、時間は過ぎて旅行当日。学校の校門の前で待っていた僕にアリサの家のリムジンが止まった。僕はリムジンに乗り込むとアリサ達が歓迎してくれた。

そして飛行機に乗ってみて僕は驚いた。僕はエコノミーに座ると思っていたが違った。何故かファーストクラスだった。ファーストクラスってあれなんですね、凄いんですね。色々。

そして無事に空港に着くと、僕たちはホテルに向かった。ホテルにチェックインして部屋に入ると、僕はかなり驚いた。なかなか広く、ベッドは3つありベランダからはハワイの綺麗な海が見渡せる。こんなところで一週間近くも過ごすのか。

「凄え……」

思わず言葉を漏らしてしまった。それほど迄すごかった。

「ははっ、気に入ってもらって良かったよ」

皇さんが僕に言ってきた。

「すいません、僕の方も料金を支払ってもらって……」

僕が申し訳なきように言うと「気にしなくていいのよ」とレインさんが言ってきた。

「子供がそんなこと気にしちゃダメよ」

「一夏くん、早く海いこー!」

アリサもテンションが上がっている。僕も海に行きたいのだが、もう時間は遅い。

「アリサ、海なら明日でも行けるだろ。それに一夏くんも疲れてるし、明日いこうな」

皇さんがアリサを宥めた。宥められたアリサはしゅんとしていた。その後僕たちはホテルで料理を食べた後、明日に備えて就寝した。何故か僕とアリサが一緒のベッドだった。

翌日

「一夏くーん、早く早く!」

アリサがビーチを走っている。僕はその後ろを追いかけて、皇さん達はニコニコと微笑んでいる。

僕は水着の上に水色のマリンパーカーを羽織っている。アリサはフリルのついた水着の上に僕と同じ様なマリンパーカーを羽織っている。

「待ってよ、ちよつと」

アリサがはぐれたらいけないから僕はアリサを追いかける。

アリサに追いついて、皇さん達の元に戻ると、すでにビーチパラソルなどが用意されてた。僕とアリサは一緒に水遊びをした。

その後、一休みするためにビーチパラソル迄戻る。そして、昼食を取るためにホテルに戻る。ホテルのレストランはバイキング形式なので食べる分を取って席に戻る。少ししてからアリサとレインさんが戻ってきたので、食べ始める。やはり高級ホテルのレストランということもあってかかなり美味しい。

「おー、皇じゃねえか。偶然だな」

突然、誰かがこちら側に声をかけてきた。声のしたほうをみるとそこには金色の髪の毛のダンディーな男性とクリーム色の髪の毛の女性、そして女性の手を握っている僕と同じくらいの年齢のクリーム色の髪の毛の少女。

「ジル、それにシェリル！久しぶりだな」

皇さんとレインさんは立ち上がって、ジルと名乗った男性達との会話に華を咲かせる。残された僕たちはどうしようかと悩んでいたところ、少女がこちらに近づいてきた。

「ティファニア・ノームです。よろしく願います」

ペこりと僕たちに挨拶して来る。僕たちは一瞬あつけに取られたがすぐさまこちらも自己紹介する。

「誘宵アリサです」

「織斑一夏です」

僕が名前を言うのとジルさんが此方を見てきた。その顔は信じられない様な物を見る様な表情だった。そのまま首だけを動かして皇さんを見る。皇さんは首を縦に振って何かを肯定する。

それから僕たちはノームさん達と一緒にご飯を食べた。

ご飯を食べた後、僕らは再びビーチに戻った。今度はティファニアと一緒に水を掛け合つて遊んでいる。レインさんとシエリルさんは此方を暖かく見守っているが、皇さんとジルさんの姿が見当たらない。

「一夏くん、泳ぐ」

一旦、ビーチパラソルまで戻るとアリサがマリナーパーカーを脱いでそう言ってきた。ティファニアもきていたパーカーを脱いで泳ぐ準備をする。

「いや、僕は着たままで大丈夫だからさ」

すると、ティファニアが僕の前に立つといきなりパーカーを脱がせ始めた。

「そんなこと言つてないでほら！」

「いや、本当に大丈夫だから！」

抵抗も虚しく僕はパーカーを脱がされた。

「おい皇、あの一夏つてのはもしかして」

「もしかしなくてもそうだ。織斑つて名乗ったんだから気づくだろう」

ホテルの中にあるカフェ、そこに誘宵皇とジル・ノームはいた。二人の目の前には珈琲が置かれている。

「お前、いつあいつと知り合つたんだよ」

飲んでいる珈琲をテーブルにおいて一息つくくと、皇は話始める。

「ついこの前だよ。娘が友達を連れて来るつていつたら、そしたらそれが一夏くんだったんだよ」

「マジかよ……とんだ偶然だな」

「ああ、僕もそう思っているよ。まさか娘と同じ学校に通ってるなんてね」

軽く苦笑いしながら話す皇、その様子を見たジルはしつかりとした眼で皇を見る。

「だがまだ信じられねえぞ、あいつにはあれがあつたのか？」

「さつき確認したけど、二つ。それも綺麗にあつたよ……」

「二つ！マジか……」

皇の言葉を聞いたジルは額にてを添えて思わず天井を見る。

「やっぱり、彼は数児たちの息子だよ」

## バカンスはお終い

「えっ……」

僕の背中をみて、アリスとティファニアが驚いた表情をする。それもそうだこんな物を見りゃそんな風にもなるだろう。

背中にはつきりとある、背中一面を覆い尽くすもの。二つある、二つで一つであるかの様な模様

僕が虐められる原因の一つでもある背中の中の模様、いくら洗おうが決して取れることはないもの。まるで呪いの様に僕の背中に張り付いている。

プールの授業の時にこれを見た奴が気持ち悪がってみんなに話した。それから誰もが僕を気持ち悪がるようになった。今までこれを見て気持ち悪がらなかったのは両親と妹だけ、姉さんと弟はわからない。僕の記憶が正しいならば弟にはなかった。

どつぷりと僕の中に浸かっている忌々しい思いで、不気味だの化け物だのと言ってきた、石を投げたり殴ったりしてきた奴ら。そんなのは全員、僕が殴って黙らせてきた。「……凄いだらう、これ。これを見たら皆僕を避けてきた。販してきた。二人もそう思っているんだろ」



自笑気味に喋りながら僕は二人を見る。僕はパーカーを拾って再び羽織る。これを見たら皆、僕から避けてきた。だから、見せたくはなかった。せつかくできた友達なのに嫌がられてしまうから。

だから、彼女たちも同じ感情を抱くのだろう。

「ううん、そんなことないよ一夏くん！綺麗だよ。それに私は一夏くんの事を嫌わない」  
「そうだよ、気持ち悪くないよ！」

……え、僕の中に何かが壊れた。もしそれを表現するならば価値観と言ったものだろう。初めて言われた、家族以外から生まれて……初めて。僕のコンプレックスでもある背中の模様を綺麗と言ってくれた。バカみたいだな……僕。

「うう……うう、うう」

思わず泣いてしまった。嬉しかった、初めて言われたことだから凄く嬉しかった。

そんな様子に驚いた二人は僕の元に駆け寄る。

「大丈夫!?一夏くん」

「その、ごめんなさい」

「いや、大丈夫だし気にしなくていいよ。それよりも泳ごう、ね！」

僕はアリサたちの手を握って、砂浜まで走った。

「つーかよ、これからどうなるんだらうな」

ジルは腕を組んだ状態でカウンタ―席の背もたれに体重をかける。その様子を見ていた皇は頬杖をつきながら、目の前にあるお菓子を食べる。

「数児たちもとんでもないものをのこして死んじまったな」

少し淋しそうに語る皇。目の前に置かれたグラスの淵をなぞっていた手が止まる。そして、ジルは体制を元に戻すと。

「そういえば、お前。一夏のことを話したのかよ」

「何処に？」

「<sup>きな</sup>季菜ちゃんの実家にだよ。お前まさか、まだ言っていないのか？」

「……ああ、まだ言っていない。せめて一夏が中学に上がつ……いや6年生になったら連れていこうと思う。その頃になったら彼もじぶんで考えられる様になるからね」

「そうか……なら俺も黙っておくでしょう」

あれからしばらく泳いだ後、皇さんとジルさんが戻ってきた。時間も時間という事もあつてか泳ぐ事を辞めて、ホテルに戻った。ホテルに戻った僕は水着から着替える。なんだかドツと疲れてしまったな。ジルさん一家とのご飯の約束までは少し備え付けのソファアで休もう。

「……………ん、んん」

僕は自分の頬に違和感を感じた。誰かが指で押すような感触。反対側では優しい肌触りの物が触れている。それに首の位置が高い。あれからどれくらい、僕は眠っていたのだから。それよりもこの感触はなんだろう。僕はそんな事を思いながら体を起こして、目をこすりながら周りを確認する。

「あ、起きた」

「おはよう、一夏くん」

僕の隣にはアリサが、そして目の前にはティファニアがいた。だがおかしい、ぼくが今まで寝ていたのはソファア。しかも、僕は頭のほうを端に寄せていたために誰かが座

る事なんて不可能だ。それなのに何故、アリサは僕の隣に座っているのだ。

「何してるの、二人とも」

「ん？一夏がさつき落ち込んでたから励まそうと思ってアリサと一緒に来た」

ティファニアがそう答えた。しかし、僕の頭にはまだ疑問が残っている。そしてティファニアはまた口を開いた。

「それで一夏が寝てたからさ、アリサが起こさないほうがいいって言って、そのままアリサが一夏を「わあああ！」ん！」

突如としてアリサが立ち上がり、続きを話そうとしたティファニアの口を塞ぐ。

「どうしたんだ、アリサ？」

アリサの様子に不審がった僕は尋ねてみる。

「ううん！何でもないよ。それよりもご飯の時間だから行こう？ね！」

アリサはティファニアの口から手を離すと、今度は僕の手を持ってティファニアと一緒にレストランに向かった。

レストランに着くと、既に皇さん夫婦とジルさん夫婦が待っていた。僕は同じ様にバイキング形式のご飯をついで、席に着く。円周上に八つある席の一つに座ると直様その両隣りにアリサとティファニアが座った。その様子をジルさんや皇さんは微笑ましく、そして何処か嫉妬しているかの様な目線で僕を見ていた。

夜はさらに深くなり、深夜のバー。このカウンターに二人の男性が座っている。1人は誘宵皇、そしてもう1人はジル・ノーム。

「聞いてくれよ皇」

グラスを目の前に置き、隣にいる皇に目を向けるジル。皇は「どうしたんだい」と返事をして、ジルからの言葉を待つ。

「娘がな、一夏さんと遊べて楽しかったって言うんだよ。それは良いんだよ、娘に友達ができるということは親にとつちや嬉しいからな。でもな、どこかその眼が恋する女の子の眼のようだったんだよ」

頭を抱えながら話すジル。

「ははっ、そうだね。実は僕の娘もね、そんな眼を彼に向けているんだよ」

少し笑いながら答える皇。

「やっぱ数児の息子だよなあ、あいつ」

「そうだね、数児は学生時代はモテていたしね。でも結局、最後に選んだのは季菜くん  
だ」

そう答える皇にジルは目の前にあるつまみをたべながら

「そうなんだよな、まああの二人はお似合いだったしな。そんなことよりも、お互い娘が  
一夏に惚れてると思うが、一夏はどっちを選ぶんだろな」

その言葉を聞いた皇は少しばかり笑みを浮かべる。

「時代は少子高齢化だし、政府はそろそろ一夫多妻を認めてくるんじゃないかな。だから僕は両方選ぶと思うな。それにもし一夫多妻がなくても一夏は両方を選ぶと思うよ」  
皇からの発言に対してジルは訝しげな表情を見せる。なぜなら彼は皇の言葉を理解してはいないからである。

「どうしてだよ?」

「なんとなくだよ、なんとなく。きつと彼ならそうするとおもってね」

皇はそう言うのと、目の前に置かれたグラスを手に取り口まで運んだ。

そして一週間が過ぎ、僕たちは日本に帰ることになった。ホテルをチェックアウトし

終えて、空港に向かうとノームさん一家が見送りに来ていた。皇さんやジルさんたちはそれぞれ他愛もない会話をして別れを済ませた。僕やアリサもティファニアとの別れを済ませ、ゲートに向かおうとした所。僕はティファニアに顔を抑えられて頬にキスされた。

「またね！」

少し照れながら見送るティファニアに僕とアリサは手を振って別れた。

## 白騎士事件

僕は東さんのラボにある画面である映像を見ていた。今、このラボにいるのは四人。僕、東さん、アリサそして皇さんの四人である。目の前の画面に写っているのは一機のIS、その名も白騎士。白騎士は今現在、太平洋海上のとある数隻の戦艦から日本の首都である東京に向けて放たれたミサイルを備え付けられてある近接ブレードなどを使い撃ち落としていく。ミサイルを爆発させることなく切断していく白騎士、今それに乗っているのは僕の姉である織斑千冬。

「なんで……なんでこんなことになっちゃったんだろ」

東さんは両膝を床につけて、顔を両手で覆いながら泣いている。

あれは東さんが偶然制作してみたもの、宇宙空間での行動における障害物などの排除を目的とした武器を積んでいた白騎士。その試験運転をしていたその時、事件は起きてしまった。



『今から三十分後後、太平洋海上の

艦隊から日本の首都、東京に目掛けてミサイルを発射する。それを見事にISで防いでみよ』

突如東さんのパソコンに送られてきた謎のメッセージ、それを見た僕たちは誰かからの悪ふざけかと思つたが、次に送られてきたメッセージを見た僕たちは絶句した。

それは生中継の映像だった。内容はテレビのニュースでよく見るような何処かの省の大臣が会見を行う様な場所だった。そして中央には老人が写っていた。会見の内容はこうだ。

『つい先程、日本の領海内に正体不明の戦艦数隻が侵入してきました。今のところ戦艦には何の動きも見られませんが、もしかしたら万が一という事態もありますので、各地に自衛隊を配備させております』

映像は途切れ、沈黙が僕らの世界を支配する。どういふことだ、これはドッキリか？ 達の悪いイタズラか？ エイプリルフールならとつくの昔にすぎちまつたぞ。嘘だと言つてよ、誰か……

「ちーちゃん……聞こえる」

沈黙を破つたのは東さんだ。

『どうした、束？』

「今太平洋から日本に向けてミサイルが放たれ様としているの、だからそれを撃ち落とすにいつて」

『どういふことだ？』

「いいから行って！」

『！』

東さんは千冬姉に連絡をとって、ミサイルを撃墜する様に頼んだ。姉さんも最初は訳がわからなかった様子だが、滅多に見せない東さんの真剣な言葉に姉さんは従うしかなかった。

### 白騎士事件

のちのこの騒動の一般的な呼び方である。あるジャーナリストはこれは篠ノ之束がISを宣伝するものと言った。しかし、事実がちがう。

結果としては発射されたミサイルは白騎士と既存の軍隊の手によってすべて打ち落とされて、被害はなかったという。勿論白騎士は事件の後直ぐに軍隊の前から消えた。

東さんはソファアに座りながら頭を抱えている。

以前束さんが話した事だがISには兵器としての可能性もあると言っていた。何故かと言うとISには特徴的なシステムが幾つかある。搭乗者を守る絶対防衛などなど。ISを開発する段階でコアが発現させたと言ったそのシステム。それは間違いなく兵器として転用すればかなりのものとなる。それを恐れた束さんは宇宙開発という面を重視して学会で発表した。それは人類を新たな場所に連れていくISのあるべき姿だと思っただからだ。

しかし、現実はその甘くはなかった。いざISを発表したものの、只の女子高生が発表した物などまともに相手にもされなかった。普段から色々な物を発表している束さんが今回は今までの物とは違った。

ようやく理解してくれた誘宵グループ、束さんの思いが叶う。そう思った矢先にこれだ。

僕は束さんになんて声をかけて良いのかわからなかった。それはアリサも同様でさつきから僕の腕にしがみついている。皇さんは皇さんでさつきから席を外している。そして時間は過ぎて行った

「やってくれたな、全く」

とある日本式の屋敷、その縁側に一人の老人が座っている。白髪ではあるが禿げてはおらず、どこことなく若々しいオーラを放つ男性。右手に扇子を持ち、先程からそれで左手の掌をパシパシと叩いている。

「これは儂が動いたほうがええな」

老人は近くにおいてあつた羽織を着るとそのまま立ち上がり、屋敷の中へ入って行つた。

「やれやれ、面倒事を起こしおつて。少子高齢化に女尊男卑の傾向など解決しなくちやならん事がまだあるのに。それにまだみつからんようだしのお」

はあ、とため息をつく老人。

「まあ、それも儂の腕の見せどころかの。はーはっはっは！」  
豪快に笑う老人。

「この轡木十蔵の」

## 誕生日は彼女と一緒に

白騎士事件から数ヶ月後、あの事件以来世界は明確な変化を迎えた。ISは世界中にその名を轟かせるようになり、それと同時に東さんの名前も有名になった。

あの事件が起きてからの日本の対応は凄まじかった。あるジャーナリストが言うにはまるで別の誰かが裏で操っているようだ。日本政府は直様、篠ノ之東とその家族の安全確保に身を乗り出した。無理も無い、もしここで彼女をテロリストなどに誘拐されてしまつては元も子もないからだ。そして、それから数日と経たないうちにIS委員会なる物を設立、これに関しては東さんが何処まで関わっているのかは僕は知らない。

そして、次々と世界の国々はISについて知りたがった。たかが1人の女子高生が作り上げたパスワードスーツ、そう言われていた物が今では世界各国が欲しがらるものとなった。しかし、ISに必要なコアは現在467個しか無い。これ以上作れないのか、はたまた作らないのか。さらには東さんの発表した論文から独自にISコアを作ろうとした奴らもいた。しかし、それらは全て失敗に終わった。

そして日本のIS委員会は世界各国からの要望で国際IS委員会となった。

そして、現在。

「誕生日おめでとう、一夏くん！」

パーン！

静かな部屋にクラッカーの音が木霊する。

「ありがとう、アリサ」

ここはアリサの家のリビング、ここには僕とアリサだけがいる。どうして僕ら二人だけかというと、本来なら皇さんやレインさんも僕の誕生日パーティーに参加するつもりであったが、急遽会社のＩＳ開発の会議ができてしまったため参加できなくなった。なので二人で誕生日パーティーをする事になった。

「パパ達もいてくれたら良かったのに」

「しょうがないよ、今が一番忙しい時期だからね。それよりもありがとう、わざわざパーティーを開いてくれて」

「一夏くんに喜んでもらえるなら私は嬉しい」

笑顔でアリサがそう言った。彼女の笑顔をみるとなんだか僕も落ち着く。

最近、僕の周りは大変な事になっている。東さんはＩＳの製作者なので世界中を転々として、説明会などを行っている。皇さん夫婦は会社でＩＳ開発部を制作した。さらに

皇さんのおかげでIS開発部門で他の会社を僅かにリードしている。千冬姉は千冬姉で東さんと一緒に飛び回り、実際にISに乗り込んでいる。

だからか、最近僕の周りには凄く慌ただしい。時代が変わってゆくのを蚊帳の外で見学しているような、そんな気分である。

アリサもアリサで皇さん達がいないのでよく僕を家に呼んでいるし、僕がアリサの家に泊まる事もある。

「一夏くん、これプレゼント」

「本当かよ、ありがとう」

僕はアリサから包みをもらう。アリサが早く開けて開けてと急かすので僕は丁寧に包み紙を開けた。中に入ったのはかなり高級そうな箱。

(これ、中身の値段やばくないか?)

僕は中身の値段にビビりながら、恐る恐る箱を開けていく。箱を開封して中身を取り出してみる。

ネットレスだった。やはり高級そうな。シンプルなデザインでありながら他には無い。一箇所だけ石の様なものが埋め込まれていた。

「どつー」

「すごい、凄く良いよ。ありがとう、アリサ！」



僕がそう言うのとアリサは自分の胸元から僕のと左右反対のデザインのネックレスを取り出した。なるほど、ペアネックレスね。

「凄いでしょ、パパがどうせなら二つで一つの物にしなさいって」

「そうか、皇さんが」

アリサは嬉しそうに僕のと自分のをくつつけている。

「ありがとう、アリサ。大事にするよ」

あれから暫くして、僕が帰る時間になった。今は皇さん達も帰ってきて、アリサだけになる事は無い。

玄関に居るのは僕とアリサの二人。

「今日はありがとう、アリサ。友達に祝ってもらうの始めてだったんだ」

「いいんだよ、一夏くん。私も一夏くんと一緒にいれて楽しかったし」

少し照れながら話すアリサ、僕もその言葉にコクリと頷く。

「じゃあ、またね」

僕は玄関を開けて、アリサの家から出て行った。

帰ってきた僕は家の中の騒がしい事に気づく。そうか、今は百春の友達がこの家で百春の誕生日パーティーでもしてるのか、僕も低学年の内は家にいて終わるのを待っていたな。でも今年はアリサに祝ってもらったからかなり嬉しい。

僕は静かに二階に上がり自分の部屋に入る。部屋に戻った僕は上着をハンガーに掛けてクローゼットに収納する。アリサからももらったネックレスは入っていた箱に入れておく。

「ふう〜」

片付けが終わると僕はベッドに横になる。本棚に目を向ければ僕が様々なものが飾られてある。一つはトロフィー、僕が初めて出場してそして四年生では初の優勝者になった時にもらったトロフィー。あの時はアリサが応援に来てくれた。姉さんは百春の大会があるとか言っていてこなかったなあ。

そして他には三つの写真立て、一つにはこの前のハワイに行った時の皇さん一家とジルさん一家との写真が入っている。二つ目は幼い頃の僕と両親の写真。そして最後に僕と妹のマドカと一緒に写っている写真、マドカは昔誘拐されてしまつて行方不明だ。でもいつか会えると僕は信じている。

そんな事を考えていると玄関を出て行く音が聞こえる。もう、誕生日パーティーは終わったのだろう。僕はベッドから降りてリビングに向かった。

「終わったか？」

「もう、終わったよ」

リビングに戻るといくつかのプレゼントを抱えている弟がいた。後片付けは皆でしたのだろう。僕はソファアに座つてテレビをつける。流れているのはニュース番組、I Sに関する事のニュースが報道されている。

「兄さんは今日どこに行つてたの？」

突然、百春から声を掛けられた。弟から話しかけるなんて珍しい、以前は直ぐに喧嘩ばかりしていたが最近では大分落ち着いている。

「友達の家で誕生日を祝ってもらった、かなり楽しかったさ」

「そう、珍しいね。それよりも兄さんはどうなると思うの、これから?」

多分百春の聞きたい事はこれからの家族についてだろう。千冬姉は今では世界で最初のIS操縦者として有名だ。これからは取材とかでこの家にも記者が来るだろう。

「僕は有名になると思うよ、この家は。そしたら記者が家にくる。そしたら……」

僕は一旦、言葉を切る。

「そしたら?」

百春は僕の言葉に疑問を浮かべる。僕は息を整えてゆっくりと言葉を出す。

「マドカについて呼びかける」

僕の言葉に驚いた顔をする百春、それもその筈だ。マドカは数年前に誘拐されてもう死んだと言われている。例えば僕のやろうとしている事が無駄でも、僕はやってみる。

「もうマドカは死んだんだよ、何年も帰ってこないし。千冬姉だってもう諦めてるし、兄さんだってわかってるんじゃないの!?!」

「でも、僕は可能性に賭けてみたい。僅かな可能性に」

僕はそう言って、部屋をあとにした。

コンコン……コンコン

深夜、僕は誰かが窓を叩く音がしたので僕は目を冷ましてベッドから起き上がってみる。眠たい目を頑張って開けながら窓を覗いて見る。するとそこには。

「やつほー、いっくん♪」

今現在世界を騒がせている東さんでした。

僕は窓を開けて、東さんを中心に招く。

「なんのようですか、東さん」

「んーつとね、いっくんに誕生日プレゼントを渡そうと思って」

東さんはそういうとポケットからUSBメモリを取り出して、僕に渡す。なにが入っているんだろう。

「それはねー、いつかいつくんの助けになるものだよ♪でもまだ開けちゃダメだよ、いっくんが必要とする時がいつかくるから」

助けになるもの？なんだよそれ。

それに必要とするときっていつですか。

「それじゃあね、いつくん」

メモリを渡した東さんは窓から何処かへ行ってしまった。

## 新学年

あれから時間は経って今は四月、I S 関連についてはある程度の落ち着きをみせた。国際 I S 委員会は今年の夏に I S を競技に使った大会、モンドグロツソが日本の東京で開かれる。さらに I S のコアは世界各国の企業や政府に分担されることになった。そのなかでも誘宵グループは他の企業に比べてもかなり多い量のコアが配布された。

さらに年明けには各国から第一世代と呼ばれる I S が発表された。

さらには、I S の操縦者を育てるための高等専門学校、I S 学園が各国の予算から出され、建設そして運営される事が決まった。

ちなみにだがモンドグロツソには千冬姉が日本代表として出場する事になった。その事に関して、家に取材がきた。そしてその時僕はマドカについて話した。しかし、動きは何もなかった。

様々なことが起きてきたこの一年、そしてまた新たな年がはじまる。

「あつ、また同じクラスだね一夏くん」

今日は新学年の始業式、僕とアリサは張り出されたクラス分けの紙をみて、アリサが喜んだ。今年もまたアリサとクラスは同じらしい、それも出席番号も前後している。

因みにだが、去年篠ノ之箒が用心保護プログラムか何かで引越しをした。最後に僕と決着をつけたかったらしかったので、思いでになるように徹底的に叩き潰してあげた。最後らへんは泣きかけてたが遠慮せずに戦った。

「そうだな、クラスは……二組か。よし行こうか」

僕はアリサと一緒にクラスへ向かった。



「……だね」

クラスの前についていた僕たちはドアの前で止まっている。一旦息をついてとつてを横に引く。

「馬鹿な男子、これからは女の時代よ！ さっさと言う事聞きなさい」

なんか高そうな服を着た女子とその取り巻きが教壇の上でなんか喚いていた。あれだろう、最近出てきている女尊男卑精神の女。確かあの子は鹿狩瀬裕子<sup>かがせゆうこ</sup>、母親は有名な女尊男卑推進派の国会議員の一人だ。

女尊男卑はISが完成してから活動が過激になってきている。ISは国家の防衛の重要な物になる。だからこそ扱える女性を優遇すべきだと。しかし、政府の考えはこうだ。「ISは女性にしか扱えないが、扱えるのは本の一部でありまともに扱えない女性もいる。さらに、ISに携わるのは操縦者だけでなく、それを整備する男性もいる。なら

ばその男性も優遇しなくてはならない。だから女性だけを優遇するわけにはいかない」と。だから今は女尊男卑などはなく、男女平等となっている。だが、女尊男卑活動が盛んになっているのは事実だ。たぶんこの鹿狩瀬も親の影響で女尊男卑精神に染まっているのだろう。

僕たちは無視して自分の席に座る。よくよく考えれば僕の後ろは名前に鹿狩瀬だった。すげえ嫌な気分だ。周りを見れば男子は凄いイライラしてる顔だし、女子は女子で十人十色な顔色している。

まあ、そんな事は関係なく、僕とアリサは二人だけの空間で話し合った。

あれから暫くして先生が来て、ホームルームがあった。次に始業式なので体育館に向かった。

始業式では転校生の紹介があった。名前は鳳鈴音、中国からの転校生だそうだ。まあ、どうでもいいけど。そうしていく内に無事式は終了した。

「ねえ、あなた。確か織斑千冬の弟よね」

始業式のあとクラスに戻ってきた僕にいきなり鹿狩瀬が声を掛けて来た。アリサは今席を外している。

「そうっすけど、何か」

「織斑代表の弟がこの学校にいと聞きましてね、どんな物か見たくなったのよ」

ああ、面倒くさい奴だ。

「それでどうしたんだ？用が無いなら帰れ」

「下品な喋り方、だから篠ノ之博士は女にしかISを動かせなくしたのよ。野蛮な男じゃなくてね」

ああ、こいつ今なんて言いやがった。束さんが何だつて。何も知らねえだろうが、I

Sが動かないのは東さんでもわからないのに、こいつは何を言ってるやがる。

「きつと篠ノ之博士は私達女性が男性を支配するために作り上げた物なのよ、ISは」

こいつ、東さんの事を何も知らねえのに語ってるじゃねえよ。

バアアアアアン!!

僕は気づいたときには机を叩き、立ち上がっていた。周りの皆はこちらに注目する。鹿狩瀬は僕の様子に驚いたのか、さつきより一步引いている。

「何なのよ、あなた！何か文句でもあるの、この野蛮な男！」

そう言うのと鹿狩瀬は僕の頬を叩いた。それを見た男子達は信じられない顔をした。それはそうだろう、暴力的で知られる僕に暴力をふるったのだから。

「やり返せないでしょうね、どうせあなた何かに。まあ、あなた何かと一緒にいるあの子どもどうせバカなんでしょうグエア！」

僕は彼女が喋り終える前に彼女の口にストレートをぶち込んだ。

このクソ野郎、アリサを馬鹿にしやがったな。僕を馬鹿にするのはいいが、彼女を馬鹿にするのは許さない。

「てめえから売った喧嘩だ。買ってやるよ！」

ふらつく彼女を髪を掴み引き寄せて、腹にボディブローを入れる。そして続けざまに顔面に頭突き、そして思いっきりなげとばす。机を巻き込みながら転がっていくあの野

郎。

周りのクラスメイトは僕らの様子に全く手を出せないでいる。それだけ僕の様子がヤバイのだろう。

「おら、どうした!」

倒れている野郎の左腕を踏み潰す。そして、その後左腕そして左肩をつかんで、昔図書館で見た本のやり方で、一気に関節を外す。

「ああああああ!!」

悲痛な叫びが教室に木霊する。僕は彼女に馬乗りになって体のあちこちを殴る。何度も何度も何度も一方的に殴る。

「おい織斑、止めろ」

僕は騒ぎに気づいた教師に押さえつけられて、この騒ぎは終わった。

## 織斑家にて

「どうも、すいませんでした」

あの後僕は指導室に呼ばれてかなり説教された。そして今は包帯を巻かれた鹿狩瀬と教師からの連絡で駆けつけた鹿狩瀬の母親の三人だけのへやにいる。僕は鹿狩瀬にたいしてポケットに手を突っ込んだまま謝罪した。アリスを馬鹿にしたやつに謝る意思なんてない。

「それが謝っている態度ですか！何もしてないうちの子を一方的に殴って、これだから男は」

そういうと鹿狩瀬時子は僕にたいして平手打ちをしようとしてくる。僕はすかさずポケットから手を取り出して平手打ちのコースに割り込ませる。手と手がぶつかりそうになる。

グサリ

「いやあああー！」

何か刺さる音がすると同時に時子が手を抑えて悶え苦しむ。僕の手を持っているの

はペン先の出たボールペン。

「危ないですよ、自分からボールペンに刺さりにくるなんて」

僕は時子を見下しながら喋る。時子の方はこちらを睨んでおり、今にも襲いかかってくるさうだ。

「それに、一国会議員が小学生を叩こうとするなんて馬鹿ですか？」

僕の言葉を聞くと、鹿狩瀬親子は悔しそうな顔をした。それから暫く沈黙が続いた。いまから帰ったところでありサはすでに帰っているだろう。

ガララララララ

扉が開かれる音がしたのでそちらを見る。するとそこには僕の姉である織斑千冬がいた。

千冬姉は中に入ってくると扉を閉めてこちらによつてくる。千冬姉は僕の頭を掴むと強制的に下げさせて、自分も頭を下げた。

「このたびは弟が失礼しました」

その様子にあっけにと取られた鹿狩瀬時子ははつと我に帰り、ベラベラと喋り始めた。その内容は羨がなつてないだの、教育ができてない、男の癖に生意気だなどなど。千冬姉は僕にかなり怒っていた。

「どうしてあんな事をしたんだ、一夏!？」

夜の家、そこでは千冬姉が僕にたいして凄い剣幕で怒っていた。

「それはあいつが「言い訳はいい……なぜあんな事をしたんだ!」

さつきからずつとこの調子だ。僕が訳を話そうとすれば言い訳はいらなど、一向に話は進まない。

「……あいつにムカついたからだよ、それ以外の理由はない!」

「そんな事で人様を殴ったのか、おまえは!」

凄い怒気で話す千冬姉。



「……………」

「どうした？」

僕の中の何かが変わった。

「千冬姉……大切な人を馬鹿にされたから殴っちゃいけないの、ねえ！」

「！」

僕の豹変ぶりに驚いたのか千冬姉は一步下がる。

「大切な人を馬鹿にされたから許せなかつたんだよ、確かに大人からみたら馬鹿げているのかもしれない。でも僕には許せないんだよ！ねえ、千冬姉の大切な物は何？」

「そ、そんなのお前たち家族に決まって「嘘だ！」!?」

僕の叫び声に驚く千冬姉。でもまだ止めない。

「じゃあ何でマドカのことを諦めるなんて言った！家族じゃねえのかよ、あんたの大切な家族！巫山戯んなよ、何が家族だよ。あんたは一回でも僕の柔道の試合に来たことがあるかよ、いつもいつも百春の試合ばつか優先しやがって。あんたの大切な家族は百春だけだろうが！あんたら二人にはマドカの家族面なんかさせねえ」

僕の様子に千冬姉はすこし怯えた様子でいた。

「に……兄さん。それぐらいにした方がいいんじゃないの」

百春がおどおどしながら声をかけてくる。

「百春、これは僕と姉さんの問題だ」

僕がそういうと百春は黙ってしまった。

「まっつてくれ一夏！違うんだお前は私の大切な家族なんだ！」

「こんな時だけ家族面しないで！さつきだつて僕の言いたい事を何も聞かずに叱ろうとして、家族なら聞いてくれてもいいんじゃないの？」

僕はそれだけ言つて、自分の部屋にもどつていった。

なんだつたんだよあれは

兄さんが部屋から出て行つた後、僕は足が震えていた。千冬姉が怒つた事は今までに何回もあつたが、兄さんがキレる事なんか一回もなかつた。正直言うと、千冬姉の何倍も恐ろしかった。なんて言うかオーラと言うか背後霊とか何か不思議な物を感じさせた。はたから見ててこれだからもろに受けた千冬姉はそうとうなものだろう。

「私は……私は」

千冬姉はさつきから膝をついてこの調子だ。  
これから僕らはどうなってしまうのだろうか。

## 一夏の……

「荷物の準備は終わった」

僕はいま自分の部屋で荷造りをしていた。理由は簡単だ、来週から行われるモンドグロツソに出場する千冬姉の応援に東京に向かうのだ。そのための荷造り。

始業式に起きた暴力事件はその後何もなく、収束した。あれから鹿狩瀬は僕に怯えてくるようだし、男子は男子で「あの野郎を殴ってくれてありがとう」みたいな視線で見てる。だが、相変わらず友達と呼べるのはアリサだけだ。まあ、僕はそれで全然構わない。

「兄さん、準備はできたの？」

百春が部屋の中に入ってきた。

「ああ、できてる。明日は早いからお前も早く寝ろ」

僕の言葉を聞いて、百春はそのまま部屋を後にした。

そして翌日、駅へと向かい電車を待っている。僕たちはこれから電車で会場へと向かい、そのままその近くのホテルで大会が終わるまで過ごす。なんでも過ごすホテルは日本でもかなりの高級ホテルらしい。

僕と百春は切符を買って、改札を通ろうとする。すると

「一夏くん！」

呼ばれた声があったので振り返ってみるとそこにはアリサと皇さん夫婦がいた。アリサは僕の前で立ち止まる。

「どうしんだ、アリサ？」

「一夏くんの見送りにきたの」

ニッコリと笑いながら答えるアリサ。

「ありがとうアリサ」

「ううん、私がしたかったから良いんだよ……あれ？一夏くん、ネットクレスはどうしたの？」

僕はアリサの言葉にハツとなる。首元を確かめると、たしかにネックレスは無かった。アリサには悪いこととしてしまったな。

「ゴメン、着けるの忘れてきました」

「そう……」

目に見えて落ち込んでいるアリサ、ここはなんとかしないと。

「アリサ、ゴメン？ 帰ってきたらちやんと着けるからね、だから落ち込まないで」

僕がそう言うと、アリサは「わかった」と言ってもとに戻った。

時間をふと確認してみるともう、電車が到着する時間だ。百春はもうホームに行ったのだろう、ここにはいない。

「アリサ、もうそろそろいかなきゃいけないから。それじゃあ」

アリサに別れを済ませて、振り返り、僕はキャリーバッグをもって改札に向かう。

「待つて」

いきなりアリサに肩を掴まれるとそのまま、ふりむかされる。そしてそのままアリサは両手で僕の肩を掴むと僕の顔に自分の顔を近づけて

唇と唇がふれあった

すこしばかりの沈黙が続いた。

「そ……その、いつてらっしやい」

「い………いってきます」

俯きながらそして顔を真っ赤にしながら恥ずかしそうに喋るアリサ。僕もキスされた恥ずかしさからかアリサから目を離して返事をした。そんな様子を皇さんは血涙を流しながら、レインさんは微笑みながら見守っていた。

「じゃあアリサ、いってくるね」

「またね、一夏くん」

僕はアリサとの挨拶を済ませて改札をくぐった。アリサは僕に手をふっていたので、僕も彼女が見えなくなるまで手をふった。

こうして僕は東京のモンドグロツソが開かれる会場まで向かった。

そして



織斑一夏は死んだ

## プロローグ……お終い

今日は凄く楽しみな日だ。第一回モンドグロツソが終わり、一夏くんが登校してくる日だからだ。第一回モンドグロツソは無事に一夏くんのお姉さん、織斑千冬選手の優勝で終わった。

一夏くんのいない生活はかなり淋しかった。話す相手は誰もいないし、図書館にいてもつまらない。私はこの日にちを早くこないかなー、早くこないかなーと待ちわびていた。

でも、実際会うのは少し恥ずかしいかな。だって、見送る時にキスしちゃったから。今思えば何であんな事したんだろう。確か、一夏くんがどこか遠くにいつてしまう、そんな気持ちになってしまったからだ。

それにしても一夏くんが来ない、普段ならもう席について私とおしゃべりしてる時間なのに、さつきからくる心配がまったくない。そうこうしてるうちに予鈴がなくなってしまふ。一夏くん、応援の疲れで今日は休みなのかな？それだったら学校が終ったらお見舞いに行かないと。

そんな事を考えていると担任の先生がやってきた。どこかうかない顔でいる。どうしたんだろう。

「みんなに悲しいお知らせがある……織斑が死んだ」

……………え？

一夏くんが死んだ？嘘だ嘘だそんなの絶対に嘘だ。だってだって

「火災に巻き込まれたらしい。おい、誘宵。どうしたんだ誘宵！」

私は席を立って荷物を持つとそのまま教室の扉を開けて、帰っていった。信じられない、どうして一夏くんが。

「もしもし、ママ？あのね……一夏くんが死んだ

私は気づいた時にはママに電話をかけていた。

その日の夜、私は一夏くんの通夜の会場にきていた。

あの後私はママに迎えにきてもらい、家にかえって私はママの胸の中でたくさん泣いた。ものすごく悲しかった。一夏くんは家族以外で初めて私に優しくしてくれた人だった。私にとって一夏くんは光であった。なくてはいけない、私にとって何割かを占める存在、それが一夏くんだった。それが今ではもういない。ぽっかりと胸に穴が空いた……そんな気持ちだ。

通夜には、私以外にも何人かのクラスメイトがきていた。そして私はある人を見つけた。織斑千冬、彼女の顔はものすごく悲しそうだった。そして何かを後悔しているようなそんな表情だった。

私は受付を済ませると一夏くんの棺の前までやってくる。遺影には笑顔で写っている一夏くんがいた。私はこの写真を知っている。確かこれは一夏くんとハワイにいったときに撮った写真だ。

私は遺影を暫く見た後に、棺の中を確認して一夏くんの遺体を見る。先生の話だと火災で死んじゃったから、火傷の跡とかたくさんあるんだろうな。そんなことを思いなが

ら棺のなかを覗き込む。

「……………え？」

そこには何も無かった。たとえばではなく本当に、一夏くんの体だと証明するものは棺のなかには何も無かった。でも一体どうして？一夏くんの死亡は確認されたんでしょ、それだったら死体はあるはずなのに。

パパもママも私と同じように驚いている。するとパパが私たちの元から離れて一人の男性に話しかけた。すると二人は少し離れた場所に移動した。何を話しているんだろう。ここからだつたら聞こえない、私はママにお手洗いに行つてくると言つて、パパの跡をつけてみた。

「いったいこれはどういうことだ！」

パパが凄い形相で怒っていた。私の前であんな顔を見せたことはない。それに恐怖しているのか、男の人はビクビクしている。

「お、落ち着いてください。これにはわけが」

「なんだ、話してみろ」

「では」

男の人の話によると今回の事件の内容はこうだ。

事件が起きたのはモンドグロツソ決勝戦の前、突如政府に対して織斑一夏を誘拐したという電話がかかってきた。最初政府はいたずらだと思ったが念のため、織斑一夏がどこにいるのか確認して見たがどこにもいなかったらしい。犯人の要求は全くわからなかった。そして、織斑千冬に一夏が誘拐された事を伝えると今にも試合を棄権しそうであった。しかし、政府は国の威信の為に千冬をなんとか説得して試合に出す事に成功した。そして政府は犯人からの二回目の電話の後、犯人の居場所を特定する事に成功して直ぐに特殊部隊を向かわせた。だがそこで特殊部隊が到着すると同時に織斑一夏がいるとされる建物から火が上がった。部隊はすぐさま突入して救出しようとするが、ここで悲劇が起きた。監禁場所に爆弾が仕掛けられており、それが爆発したらしい。爆発の影響で捜索は困難になり、少し火の手が収まってから一夏を発見したらしい。しかし、その時には既に一夏は骨が僅かに残るぐらいしかなかった。そしてその周りには一夏

と同じ様な子供の焼死体が何十体もあったそうだ。そして何故一夏の遺体か確認できたかと言うと、その遺体の近くに一夏の所有する携帯電話が落ちていたそうだ。

これが織斑一夏誘拐事件の全て。

私はこれを聞いて、ある事を考えてしまった。

一夏くんは生きている

確かに一夏くんの携帯電話を見つける事には成功した。しかし、その近くにあった焼死体が一夏君であるとは限らない。もしかしたら誘拐犯が一夏くんは死んだと見せかける為にしかけたかもしれない。でも何の為に？私はそこまで考えて悲しくなってしまう………

「アリサ？何してるんだ」

声を掛けられたのでふと見てみるとそこにはパパがいた。

「今の話、聞いていたのか？」

私は無言でうんと頷いた。するとパパは「そうか」と言っただけで私の手を繋いだ。そして私はパパに連れられてママの所に戻った。

通夜の行われた後、ここには二人の男女がいた。

「誘宵さん、私はこれから姿を消します」

一人は篠ノ之東、世界でも有名な発明家で I S の開発者。

「そうですか、何か困ったことがあったら僕に相談してください。隠れ家や食料など用意しましょう」

そしてもう一人は誘宵皇。世界的な企業でもある誘宵グループの会長だ。

「すみません、私がしっかりしていればいっくんは」

「気にしないでくれ、もう過ぎてしまったことだ」

そう言い合う二人の間には重たい空気が流れていた。

「でも僕は一夏くんが生きっていると信じている」

「そうですね、私も信じてみますよ、いっくんのことを」

そう言うのと篠ノ之東は振り向く。

「それじゃあ、誘宵さん。ありがとうございました」

I S を展開して篠ノ之東は空に向けて飛んで行った。



一夏が誘拐されたと聞いたのは決勝戦前のことだった。政府の人間からそのことを聞かされた私は今すぐ試合を放棄してでも一夏の所に行きたかった。しかし、政府は国のためにそれをさせなかった。私は政府からの説得で試合に出ることを決めた。今思えば、私は一夏の事をどこか蔑ろにしていたのだろう。だから試合に出場した。

一夏が死んだ。私は表彰式が終わり、インタビュもあらかた終えた所で私はそのことを聞かされた。私はその場で崩れ落ちてしまった。私が行けばもしかしたら、私が出場しなければそんな思いにかられてしまった。だが、悲しんでいる暇はなく、直ぐに百春と共に家に戻って葬儀の準備をしなくてはならない。

家に帰って葬儀の準備をしていた所で私はあることに困った。それは遺影についてだ。一夏と写真を撮ったことはあったがどれもこれも笑っている写真はなかった。一夏は笑わない子だった。まだマドカがいた頃は笑っていたがマドカがいなくなつてからは笑わなくなつてしまった。もしかしたら一夏の部屋にも写真があるかもしれない。そう思つて私は一夏の部屋に入った。一夏の部屋に入るのは初めてだった。一夏の部屋は綺麗に掃除機がかけられており清潔にされている、私の部屋とは大違いだ。部屋の中で探していると私は柵に飾られてある物を発見した。柔道のトロフィーと三枚の写

真。トロフィーは一夏が初めて出た大会で優勝した時の物だ。あの時は百春の大会と被って見にいけなかった。二枚の写真は両親とマドカと撮った物。どれも子供の頃の一夏が笑っている。

しかし、私が注目したのは最後の一枚。去年とったものだろう、そこには一夏が写っていた、笑って。

『家族面しないで』

一夏から言われた言葉を思い出して、私は泣いた。

一夏くんの葬式も終わって、私は今自分の部屋のベッドの上にいる。パパもママも今は仕事に出かけている。部屋の電気も全て消して、部屋の中に聞こえてくるのはカチツカチツと淋しく音を出す時計の秒針の音。無情にも時計は鳴り、ただ……ただ時を刻んでいく。私の中にあつた一夏くんの時間、それは突如として私の中から零れ落ちてし

まい。すぎていく時の中に残されてしまった。

「一夏くん……………」

机の上に置いてある写真を見ながら、私は呟いた。大切だった。好きだった。でももう彼は戻って来ない。もしかしたらまだ生きているかもしれない、いやきつと生きている。だから私はまだ生きていたい。いつか彼とまた会えると信じて……………」

第一章

完

## 第二章

## 亡国機業

## 新たな始まり

あれから何ヶ月の時間が過ぎてしまったのだろう。アリサは心配しているのか。ここからなんとかして抜け出さなくては、そんな事をこの汚いベッドの上で考えている。

僕が今いるのは何処かの施設、ここでは日夜少年少女たちが生きるために殺し合いをしている。僕もそれをさせられている。なんでこんな事をしているのか僕にはわからない。何処かの組織に送りつけるのか。

僕が普段生活しているのは鉄の扉の出入り口に汚いベッド、そしてトイレや洗面台があるだけだ。ここで僕はいつもいつもマズイ飯を食っている。何ヶ月もここで過ごしていればマズイ飯を食っていればなれるのだな、最近では舌がおかしくなつたと勘違いしてしまいそうだ。また、明日も殺し合いだ、生き残らなければならぬ。そんな事を考えながら俺は眠りについた。

眼を覚ませば扉の前にはご飯が置かれている。僕はそれを食べ終えると鉄の扉が開く。これから殺し合いが始まる。俺は立ち上がり、扉から出た。

『E52、O10開始しろ』

職員の場合と共に僕ともう1人の金髪の少年が構える。O10、それがこの施設での僕の名前だ。ここは訓練施設の一つ、体育館程の大きさに市街地を模した障害物が設けられている。ガラスの向こうの管制室で安全な場所から見物する職員ども。

僕の今の格好は迷彩服に小型化されたアサルトライフル、さらに腰のホルスターには威力と反動をできる限り抑えた拳銃。さらにワイヤー十数メートル分、ナイフとグレネード数個とスモークグレネード二個、フラッシュグレネード一個を携帯している。相手の少年も同じ様な装備である。さらに首にはチョーカー、腕にはブレスレットがつけられており、僕たちが逃げ出そうとすれば直ぐに管制室からこのチョーカーに向けて電流を流す命令を出す。

ズドドドド!

向こうが此方に向けてアサルトライフルを発砲してくる。僕は直ぐに建物に隠れて弾丸をやり過ごす。弾丸は無限にあるわけではない、いずれ必ず尽きる。そんな事を考

えていると銃声が止まった。僕を警戒しているのか、それともマジで銃弾がなくなったのかわからない。だから僕は足元のテニスボール台の大きさの瓦礫を投げる。

パン！パン！

二発、拳銃の発砲音が聞こえる。グレネードと瓦礫を勘違いしたのだろう。それだけ極限状態でいるのだろう。ならば今度は本物のグレネードを投げ込む。栓を抜かれ空中を彷徨うグレネード、今度は発砲音はせずにそのまま爆発する。

「うわああああ!!」

E52の絶叫が響く、まさか本当に投げ込んでくるとは思ってもよらなかったのだろう。混乱状態に陥った奴はさつきから銃弾を発砲し続けている。弾切れも時間の問題だろう。僕はすぐさま建物の死角を利用して奴の背後に回り込む。奴はまだアサルトライフルを乱射している。今度は建物の影に隠れながら拳銃で彼を狙う。銃弾をうち続ける彼だが実際は一步も動いてはいない。だから建物からゆつくりと狙いを定める。距離にしてどれくらいだろうかそれ程離れてはいない。背後から彼の頬をかするようにゆつくりと引き金を引く。

掠った。それだけで十分だ。

彼は此方をギロリと睨みつけるとアサルトライフルを打ち始めた。僕はその場から立ち去り、再び隠れる。アサルトライフルが空になると彼はアサルトライフルを投げ捨

て、僕のいた所に向けて拳銃を打つ。やがてそれもなくなると今度はグレネードを投げつけた。どれだけ彼は焦っているのだろう。そんな事を考えながら僕はスモークグレネードを構えて投げた。煙に飲み込まれる彼は既に遠距離武器はなく、残されたのはナイフと己の体のみ。しかし、それでは僕には勝てない。

僕は彼の叫び声から位置を予測して石を投げ込む。ゴンという鈍い音がした。そしてすぐさま円を描くように彼の背後に回りながら近づく。まずは背後から一撃、石を食らったことで前面を警戒していたのか、背後が無防備だった。

そしてそのまま距離をとる。だんだんと煙が晴れていく。煙が晴れると奴は立ち上がっておりナイフを構えている。前面に対する集中。

しかし、僕がいるのは前ではなく後ろ。奴は僕の位置を見誤ってはいなかった。確かに真後ろから殴られたので真後ろに振り返って構えた。けれども僕はその振り向くまですぐに後ろに回り込んでいた。

「ふう」

息をはきながらゆっくりと拳銃の引き金を引く。狙いは足元、ギリギリ立てなくなるくらいのだメージを奴に与える。一撃与えた所でもう一発ぶち込む。膝から倒れこむ奴、僕は近づいて行って持っていたナイフを蹴り飛ばす。これで彼は何もできない。

「……………!」



日本語では無い言葉で叫ぶ彼、その眼には涙が浮かんでおり、死の恐怖が心を占拠しているのだろう。

『早くやれO10』

職員からの催促がきこえる。奴の口にアサルトライフル突っ込む。そして

「バーン！」

銃声のモノマネをした。実際には何もしていない。僕はそのまま銃を直して、奴の元から離れる。奴は既に気絶している。どうせまた電流がくる。

『早く殺せ！O』

職員が話しかけていると突然、アナウンスと電気が消えた。なんだ今までそんなことは無かったぞ。管制室を見れば職員たちは慌てふためいている。だがこれはチャンスだ逃げだすための。俺は直ぐに自分の首にナイフを当ててチョーカーを切断する。切れやすい素材で助かった。それに今の事をして何もないということは電気が完全に止まっているのだろう。

ドツギアアーン！

突如として天井が破壊され何かが落下してきた。それはよく見てきたものだった。しかし、形が違う。

「IS！」

灰色のボディに包まれたそれを見て僕は驚いた。機数二機、そのうちの一体がE52を回収していた。

(逃げなきや)

僕は走り出した、幸いにもISは僕に気づいてはいない。出口に向かつて。グレネードの栓を抜き、塞がれている扉に向けて投げつける。見事に爆発したグレネードは扉を碎いた。僕はその穴から抜け出す。

「O10、奴を倒せ！」

外に待ち構えていた職員が命令してくる。チョーカーの無い今、こいつらの命令を聞く必要は無い。アサルトライフルを構えて、膝に向けて発砲。直撃すると同時に膝から倒れこむので下からアサルトライフルの銃口付近を持つて振り上げる。顎に当たったことよって気絶する職員。僕は奴の白衣を剥ぎ取って羽織る。さらにポケットの中を漁っていくとカードキーを抜き出した。そしてまた走り出した。

少しすると僕は普段俺らが寝泊まりしているとエリアに到着した。僕はすぐ様、カードキーを使って鉄の扉を一つ開ける。中にいたのは橙色の髪の少女、年齢は僕と同じくらいだろう。少女は僕をみるとビックリしていた。僕は少女の手をつかんで外に出るとまたカードキーで扉を開ける。

僕は少女にカードキーと拳銃を渡すと他の子達の扉も開ける様にとジエスチャーする。

「何をしている！」

職員が数人きやがった。僕はアサルトライフルを横薙ぎに払いながら打つ。職員たちは足を打たれて倒れてしまう。すると一人がポケットから銃を取り出したので職員の肩目掛けて放つ。弾丸は見事に肩に当たり、職員は悶え苦しむ。僕は近づいて行って全員の頭をアサルトライフルで殴る。そしてその後、手荷物を調べてカードキーを取り出すとそれらを救出された子供達に渡していく。数分もしないうちに全員を救出する事に成功した。

救出された男子達は職員からの奪った武器を持って出口を探しに行く。僕の周りには女子達が身を寄せ合っている。暫くすると男子達が戻ってきた。どうやら出口を見つけたようだ。僕は直ぐにみんなに出る様にジエスチャーする。

ドオオオオン！

壁を突き破ってISがでてくる。他の奴らは混乱してしまい出口に向かって走り出す。ヤバイな。このままじゃ全員捕まってしまう。

(ならば)

僕はグレネードをISの足元に投げ込む。爆発して足元を崩す、ISは爆風を防ぐために構えていたので飛行していなかった。そしてそのまま床と一緒に落下して行くIS。

(「こんなじゃダメだ」)

僕は近くの柱にワイヤーを巻きつける。近くにいた子供達に逃げる様に指示を出す。最初は僕も一緒に来いみたいなニュアンスでジェスチャーを送っていたが、僕は手を突き出して拒んだ。ここでこいつを好き勝手にやらせたらみんな逃げられない。だから誰かが足止めしなければならぬ。みんな納得したのか出口に向かっていく。

最後に残ったのは最初に助けた橙色の髪の少女、彼女は僕の右手をしつかりと握って何か言っていた。多分頑張れみたいな事だろう。

少女が過ぎ去ったあと、僕はISに向けてワイヤーを使いながら降りた。

無事に落下したぼくは目の前の敵に銃を構える。

IS

束さんが作り上げたワードスーツ、こんな形で再び出会う事になるなんて思いもよ  
らなかつた。

「……………」

ISは何もせずに此方を見てくる。

灰色の全身装甲、フルフェイスタイプのヘルメットにはゴーグルの様な目が合った。

「ふー」

初めに動いたのは僕、アサルトライフルを思いつきり発砲する。しかし、ISにこん  
なのが効かないのはわかっている。少しでも減らせればいい、そんな僅かな可能性にか  
けて。暫くするとISが動き出して此方に近づいてくる。僕は銃を構えたまま、後ろに  
走り出した。

今回の戦いで僕が考えなければならぬのは二つ。先ず一つはみんなが脱出する時  
間を確保する事。五、六分で出口がわかって帰ってきたため、五分稼げれば良い。すで  
に一、二分経過しているから残り四分。そして二つ目は僕自身の脱出経路の確保、な

ぜかというところのISにはまず勝てない。だから僕は逃げ続けなくてはならない、だからワイヤーを使って上に登ろうとしてもその途中で捕まってしまう。ならばどうやって脱出しよう。考えられるのは二つ、偶然出口を発見するか、下水道などを利用しての脱出。前者はそんな都合のいい事があるはずが無い。だったら後者だ。幸いな事に先ほどからチラホラとマンホールや下水道に続く格子が見える。あとはあれをグレネードで破壊するだけだ。

そんな事を考えながら僕は走り続ける。だが不思議な事にISからの攻撃はまるでない。どういう事だ。それによくよく考えたらなぜ僕についてきている。僕より皆を狙えばいいのに、それとも飛行能力が無いのか？さつきから足に装備された車輪で移動している。ならば後者だろう。ならばちようどいい。

俺は狭いパイプを潜り抜けたり、狭い隙間に入りながら攻撃を続ける。

(そろそろ時間だ)

僕はフラッシュグレネードを使い目眩ましをすると狭い通路に入り込み、ISとの距離を離す。流石にISと言えど狭い通路に入り込むのは不可能。そして僕はISとある程度の距離が取れた事を確認すると床にグレネードを仕込む。

ドオオン！

爆発音と共にマンホールが吹き飛ぶ。あとは下水道に入って逃げるだけだ。そんな事を考えているとISがやってきた。僕がマンホールに

入ろうとしているのを見ると慌てた様に此方に近づいた。しかし、僕は下水道に飛び込んだ。そして僕は落下しながら見た、ISが此方に向けて手を伸ばしているのを。

## 彼の出会い

「ハハ……何処だよ」

眼を覚ました僕はあたりを確認する。どうやらここは何処かの河原のようだ。空は真つ暗であるがあちらほらと街灯が見えるため市街地である事は間違いない。では何処の国の市街地だ。そんな事を僕は考えていた。日本ならば最高、それ意外なら最悪だ。

あの施設を脱出するために下水道に飛び込んで、そのあとに気絶してからどれくらいの時間がすぎたのだろう。アサルトライフルは途中で落つこととしてしまったが、なんとかナイフは落ちないでいた。あの子達は無事に逃げられたのだろうか。そんな事を考えながら僕は立ち上がり、歩き出す。

だが僕は自分の格好が気になった。怪しすぎるのだ。迷彩服の上には身の丈に合わない白衣、僕が警察官だったら職務質問をしているだろ。それに腕にはブレスレットがされてある、これも一応外しておきたい。僕はナイフを取り出して、ブレスレットを切断しにかかる。数分もすればブレスレットはきれたのだが、僕も自分の腕を傷つけてしまった。ブレスレットを捨てて、再び歩き出す。



「最悪だ……」

思わずそう呟いてしまった。施設が存在した場所、それは日本ではなく海外であった。アルファベットで描かれた看板、車の右側通行などなど。日本ではない要素がたくさんあった。

ならばどうやって僕は日本に帰ればいいのか。こんな所を警察に見つかれば直ぐに何処かに連れていかれるだろう。それにパスポートも持っていないから不法入国者扱いである。言葉もわからない。

「マズいな」

僕はそんな事をを考えながら、ビルとビルの間に入って行った。

シュー！

ナイフが空を切る音が鳴る。続けざまにもう一発、目の前にいる浮浪児に向けて威嚇

の一撃。ナイフに驚いた浮浪児はそのまま逃げて行った。

あれから数時間後、僕は今ビルの中で浮浪児と戦った。この数時間、この街を探索して見てわかったことがいくつもある。

先ず一つはこの街はゴーストタウンであるということ。いや、正確にいうとゴーストタウンになりかけの街、半ゴーストタウンであるということ。そのためにこの街にはまともに車が通っていないし、店も少ない。

それにこの街にはかなりの数の浮浪児がいる。さっきの浮浪児もその一人で、ビルとビルの間を歩いてきたのでナイフを見つけた。子供ならば勝てると思っただろう、いきなり僕に襲いかかってきたのでナイフを取り出して体の数箇所を切り裂いた。

これからどうすればいいのか、そんな事は今の僕にはわからない。でも、生き残らなければならぬ。生きていればまだ可能性がある。

ぐうぐうぐう

忘れていた。そういうええばどれくらいの間ご飯を食べていないであろうか、施設を脱出する直前の訓練に食べたご飯が最後だろう。だいたい一日から二日ぐらいか、はたまたそれ以上の期間食べていないのだろうか。もう僕の胃袋は限界だ。

重たい足をゆっくりと動かし始めて、食べ物を探しに歩く。どうすればいい。言葉は通じない、店も既にしまっているし何よりお金がない。そんな事を考えながら歩いてい

ると僕はある物に目がいった。それは大型の蓋つきのポリバケツ、正式名称ポリペール。そしてそれが置かれてある場所はとあるレストランの裏口。

ゴクリ……

思わず僕は唾を吞んでしまった。いや、これは駄目だ。もしかしたら残飯が残っているかもしれない、けれどこれは食べてはいけない。食べてしまったら僕は戻れなくなってしまう気がする。だけど、僕は飢えを見たそうとする本能には勝つことができなかつた。

ガツリ、ガツリ

「はう、はあはあ」

あれから数分後、僕はポリペールの中の生ゴミを食い漁っていた。マズイ、ただ単にマズイ。でもこれを食べなければ飢えて死んでしまう。だから食べる事を決して辞める事はない。

ご飯を食べ終え、また僕は歩き始める。ポツポツと雨が降り始める。雨はどんどん僕

の体を濡らしていく。僕は雨を防ぎ、眠るための場所を探している。ふらふらとふらふらと歩いて行く。

「……………」

後ろで誰かが騒ぐ声があったので振り返って見るとそこには先ほどの浮浪児ともう2人、少年がいた。多分、さっきの浮浪児の仲間だ。僕に仕返しに来たのだろう。

先ほどの浮浪児がこちらに向けて走ってくる。走りながら拳を構える、僕との距離がなくなると彼は思いつきり拳を振るつた。顎目掛けて飛んでくる拳を体をそらす事で躲す。大振りの拳を躲された事でバランスを崩す少年、僕は彼の頭を掴んでそのまま四、五回膝蹴りを彼の顔面に食らわせる。蹴り終えて彼を離すとそのまま倒れてしまった。

「……………」

少年の仲間達が何か叫んでいる。1人は恐怖していて、もう1人は怒っている様子だ。怒っている少年は手にナイフを持って此方に走ってくる。手に持っているナイフは僕が持っている様な軍隊で使われそうなものを小型化したものでは無く、ただの果物ナイフだ。ナイフを構えながら突き進んでくる少年。ここは狭いビルとビルの間、狭い通り道なので彼は突っ込んでくる事しかできない。僕に近づくとナイフを突き出す、だから左手を下から上に腕を払い相手の手首にぶつける。彼は手首の痛みに思わずナイフ

を手放してしまう。そして彼が怯んでいる隙に軽快なリズムでワン、ツーと顔を殴る。  
「ふっ……ふっ……」

そして殴り終わると同時に腹に蹴りをいれる。そしてそのまま右腕を掴み、後ろに向けて放り投げる。ごろごろと転がって行く少年。

「ふう」

一旦息を吐いて残りの一人に向けて振り返る。

「……………」

最後の一人がナイフを持って突っ込んできた。その距離は約大股二歩分、躲す事はもうできない。

ドスッ

僕の腹にナイフが刺さった。しかし、完全には刺さってはいない。なんとか刺さりきる直前に彼の手首をつかむ事で刺さるのを阻止したのだ。刺して来た少年は驚いた様子だ。痛い、流石に痛い。僕は左手で彼の手首を掴んだまま右手でナイフを取り出して、勢いよく彼の左肩にナイフを突き刺した。

「……………」

酷く痛がる少年は暴れ出して、僕の腹からナイフを脱いてしまった。僕はそのまま彼の腹に蹴りを入れて飛ばした。

蹴り飛ばされた少年はナイフが突き刺さったまま何処かに走り去った。そして僕の後ろから殴られた少年が通り過ぎて、最初に倒された少年を抱えるとさっきの少年と同じ方向に走って行った。

「はあ、はあ……」

僕は思わず肩から息をしてしまう。僕はふらつきながらビルの壁に寄りかかると、そのまま座り込んでしまう。白衣を脱いで傷口の周りに白衣を巻きつけて血が出るのを防ぐ。

(やばい、意識が遠のいてきた)

僕は壁に寄つかかっていたまま、倒れこんでしまう。雨は先ほどよりも酷くなり、僕の体温を低下させていく。腹の周りの水たまりはほのかに赤く染まっている。

このまま僕は死んでしまうのだろうか……嫌だ、そんなのは嫌だ。まだアリサと合わなければならぬし、マド力を見つけないければならぬ。

だんだんと意識が遠のいていく。

バシヤ……バシヤ

誰かが此方に向けて歩いてくる、誰だろう。誰が此方にきているのだろう。僕は其方に向けて眼を向ける。そこにいたのは三人、一人は豊かな金髪で千冬姉ぐらいの女性、そして残りは黒色と橙色の髪の色をした僕と同じ年ぐらいの二人の少女。この人たち

はこの街の住人ではない。あまりにも服装が綺麗すぎる。金髪の女性はドレスの様なものを着ている。

僕はなんとか両腕を使って、彼女たちの元に這いずって行く。彼女達の所に行けば助かるかもしれない、そんな事を考えながら僕は進んで行く。そんな中、黒髪の少女が傘を投げ捨てて僕の元に走ってくる。

「お……………ちゃん……………ちゃん……………」

少女が僕を抱えながら何かを言っている。何だ、意識が遠のいているせいで何を言っているのかよく聞こえない。力の入らない首をなんとか動かして彼女の顔を見てみる。

「マド……………カ?」

そこにいたのは数年前に誘拐された僕の妹、織斑マドカだった。本当にマドカなのか? いや、きつとこれは血の力で幻覚でも見ているのだろう。じゃなければこんな所にマドカがいるはずがない。でも幻覚であっても、マドカを見て良かった。僕はなんとか左腕を動かして濡れているマドカの頬を撫でる。

「大きくなつたな……………マドカ」

僕はそう言うと気絶してしまった。

## 彼は目覚めて彼女と再開する

「(トト)は……」

一夏は目を覚めました。自分が今何処にいるのかわからない。記憶はビルの間で倒れたところで途切れていた。

(確か……誰かが来て、それで……)

清潔感のある天井に目をやりながら、匂いを嗅ぎ、耳を澄ます。すると薬品の臭いと心電図の音がしたため、ここが何処かの病室だということがわかった。

起き上がろうとするが、力が入らない。自分がどれだけの間眠っていたのかわからない。一週間なのかそれとも一ヶ月なのか……

「あら、起きたのね」

1人の女性が部屋の中に入ってきた。女性は長い豊かな金髪で、年齢は織斑千冬とさほど変わらないと思う。

「あな……たは……」

一夏は彼女に見覚えがあつた。あの雨の日に一夏が意識を失う前に最後にみた女性にそっくりだった。



女性は一夏の寝ているベットに近づくとリクライニングベットを起こし、自分はそのそばにあつたイスに座つて一夏と対面する。

「始めまして、織斑一夏くん。私の名前はスコール・ミューゼル。」

一夏はスコール・ミューゼルと名乗つた女性が自分の名前を言つた事に驚いたが、それよりも気になる事がある。

「僕は……どうなつたんですか……」

一夏が力を振り絞つて言つたその一言には多数の意味が込められている。その言葉はとても弱々しく、そして震えていた。

「……………」

沈黙

スコールは一夏から目を逸らしてしまふ。目を逸らす。たつたそれだけの行為、たつたそれだけ。しかし、一夏にとって知るには十分だ。

「あなたは……戸籍を消されているの」

気持ち悪い汗が背中流れて行くのがわかる。

「あなたは死んだ事になつているの。それどころか、今迄あなたという人間がいなかつた様にされているだから、今までいた場所には戻れない」

一夏の中で何かが割れた。

スコールさんからの言葉を聞いた瞬間僕の頭が真っ白になるのがわかった。否定したい、その言葉を否定したい。

「ふっ……ふっ……」

だんだんと呼吸が乱れてくる。早く息を吸わないと、でも今迄どうやって息をしていたのかわからなくなって来た。確か、空気を吸って、吸って、吸い続けてそれからどうしてた？

今までの様に生きられない。つまりはアリサや誘宵さんたちにも会えない、マドカを探す事もできなくなってしまう。

嫌だ

「はあ、はあ……うお……うつつ」

呼吸もできないし、吐き気も催して来た。このままじゃ死ぬ。



スコールさんが優しく頭を撫でてくれる。暖かい、久しぶりに感じる人の暖かさ。その後、僕はスコールさんの胸の中で泣き続けた。

「すいません、迷惑をかけてしまつて……」

あれから数分後、泣き止んだ僕はスコールさんと面と向かつて話している。

「いいのよ、気にしなくて」

スコールさんは僕が泣いている間、何も言わずにずっと頭を撫でてくれた。誘拐されてから始めて感じた人の暖かさ、それが僕にとつてはとても嬉しいものだった。

「それで、あなたの誘拐事件の顛末について話すけど、構わないかしら？」

「……はい、大丈夫です」

返事をするスコールさんは深呼吸をする。そして僕の目をジッと見て話し始める。

「あなたを誘拐したのは『ネオ』という組織」

「ネオ……ですか」

「それでそのネオと私達、ファントム・タスク亡国機業は長い間世界の水面下で争っていたのよ」

「そうですか……でもどうして僕は誘拐されたんですか？」

「それは……えっと、織斑千冬を棄権させるためとあなた自身を殺すための道具にするためよ」

「……やつぱりそうでしたか」

スコールさんが少し戸惑ったのが気になったが、やはりそうだったか。気づいていた。でも一応聞いておきたかった

「それで、僕はこれからどうしたらいいんでしょうか？ 戸籍も既に消されているんですよ？」

僕がそう言うとスコールさんは「ふふっ」と軽く笑い。

「大丈夫よ、私達があなたを保護するから。それにもしあなたが私たちの保護から離れると、またネオに誘拐されるかもね」

クスリと微笑みながら言い放つその言葉に思わず背中からゾクリと何か不気味な物を感じてしまった。この人のいつている事は本当だと僕の本能が叫んでいる。でもこの人は悪い人ではないとも叫んでいる。確かに、もし僕がこの組織を抜けてもとに戻るというのであれば、今度は僕の身近にいる人、アリサに迷惑がかかってしまうだろう。そんな事は駄目だ。

「それに」

スコールさんが続ける。

「あなたに会いたがっている子もいるしね」

スコールさんがそういうと同時に入り口が勢いよく開かれた。中に入ってきたのは一人の黒髪の少女。彼女は僕の姿を見ると、勢いよく抱きついてきた。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！よかった、よかった」

僕に抱きついてきた少女、それは。

「マドカ！本当にマドカか！」

織斑マドカ、僕の誘拐された妹。よかった、あれは夢じゃなかったんだ。

「おにいちゃーん！私、嬉しかったんだよ。お兄ちゃんがテレビで私の事を気にかけてくれた事」

マドカが泣きながら話す。そうか、マドカはあの放送を見ていたんだ。無駄じゃなかったんだな、よかった……でもなんでマドカがここに？

「マドカ、泣かないで。泣いたらお兄ちゃん悲しくなるからさ」

僕はなんとか腕を動かして抱きついているマドカの頭を優しく撫でる。昔はこうやって泣いていたマドカを泣き止ませていたっけ。そんな事を考えながら僕はスコールさんの方を向く。マドカは撫でられて安心したのか泣き止んで僕から離れた。

「どうしてここにマドカがいるんですか？」

「それはね、彼女があなたと同じ様にネオに誘拐されたの。それで私たちが救出して保護しているの」

「そうなのか？」

「うん。それでずっとここで生活していたんだよ」

素晴らしいながら僕を抱きしめる力が強くなっていくマドカ。そんな様子を見たスコールは微笑みながら、席を外した。

しばらくするとマドカは泣きつかれたのか椅子に座ったまま僕のベッドに寄りかかって寝てしまった。

「ん〜、ん〜」

ゆっくりと寝息をたてながらぐっすりと眠っているマドカ。思わず微笑んでしまう。何年ぶりだろうか、こうやってマドカの寝顔を見るのは。誘拐された時よりも当然成長している。僕は力を込めてなんとか動かして布団から手を出して、彼女の頭をゆっくりと撫でる。ゆっくりとゆっくりと、彼女を傷つけない様に大切に撫でる。

「ゴメンな、マドカ。今まで心配かけちゃって、でもこれからは大丈夫だから……」

涙が出てしまう。数年振りの妹との再開の嬉しさ。そして、そんな状況であるのにも関わらず、まともに接してあげる事もできない自分に対する嫌悪感から涙が出てしまう。

「お兄ちゃん……強くなるからさ」

そんな事を言いながらも僕は撫でる手を辞めない。

『だったら早く来て』

「!」

僕はあたまの中に響いた声に驚きながら辺りを見回す。しかし、音の発生源は何処にもない。当然だ、もしあれがこの病室になんかあったら大変な事になってしまう。

「……ISがなんで僕を呼んでいるんだよ」



## そして彼は力を手に入れる

「はい、口を開けて。あーん」

お粥の乗ったスプーンを僕の口に近づけるスコールさん。その表情は物凄くいい笑顔である。この人、これをすごく楽しんでるよ。僕は恥ずかしさで顔を赤くしながらお粥を食べる。

「よくできました」

さらにからかうスコールさん。笑っているその顔は思わず見惚れそうになる。なんでこんな事になっているかと言うと、マドカが席を外して代わりにスコールさんがこの部屋に入って来た時に始まった。スコールさんは僕のためにお粥を持って来て、ベッドに備え付けられているテーブルに置いてくれた。僕はそれを食べようとスプーンを手にとったときだ。僕はスプーンを手にとるとそのまま落としてしまったのだ。しかもそれが一回ではなく、何回も。どうやらまだ上手く力が入らない。僕の腹を手術した時に麻酔を使ったのだがそれが原因じゃないかとスコールさんが答えた。「なら私が食べさせてあげる」

スコールさんからの突然の提案にめちやくちや驚いた。そしてスコールさんはそのままテーブルに置かれたスプーンを手にとると、お粥を掬うと僕の顔に近づけて来た。それが今の状況になるまでの過程だ。

「ごちそうさまでした」

「よく食べたわね」

「ご飯を食べ終わった僕はスコールさんに対してお礼を言う。スコールさんは微笑みながら返事を返してくれた。久しぶりに食べたまともなご飯、施設ではマズイ飯を食わされて、ゴーストタウンでは生き残るために生ゴミを食べて来た。久しぶりに食べたまともなご飯はすごく暖かくて美味しかった。だけど少し我儘を言わせてもらえるのであれば、早く美味しいお肉が食べたいです。

（やばい、飯食ったら眠くなってきた）

満腹感と安心感からか僕は眠気に襲われた。目をしばしばとさせながら眠りに就こうとする。

## ガラガラ

「あら、食器を取りに来たの？」

扉が開かれると同時に一人の少女が部屋の中に入ってきた。虚ろげな意識の中で、僕はこの部屋に入ってきた少女をみる。その少女は橙色の髪で僕と同じくらいの年齢だ。思わずハツとした。僕はその少女に見覚えがあった。忘れるはずもない、僕が施設を脱出する時に最初に助けた少女、その子だった。でもどうしてここに？

「！」

僕の方を見た少女は驚いていた。そして急いで僕のベットに近づくと食器を持って部屋から出て行つた。僕は呆気に取られた。

「あ……あの、スコールさん。なんで彼女がここにいるんですか？」

顔だけを動かしてスコールさんに訪ねてみる。

「ん？ああ、そういうええ言うのを忘れていたわね。あなたがいた施設には私たちが襲撃をかけたのよ。そこで脱出していた彼女達を保護したのよ」

その言葉を聞いた瞬間、僕の力が抜けた。そうか、そういうええあの雨の日にスコールさんやマドカと一緒にいた女の子、橙色の髪の毛だったな。でもまてよ、だったら。

「もしかして、スコールさんはあの場所にいたんですか？」

「ええ、いたわよ。それもISに乗って」

「それってつまり……」

「そうよ、あなたによつて床を爆破されて落下したISに乗っていたパイロットよ」

「あははは……すいませんでした」

僕は思わず謝った。まさかあのISが僕らをさらに来たのではなく、救出をしに来た。つまり、僕が下手な事をしなければもう少し楽だったのだろう。

「それで下水道に逃げ込んだあなたを、あなたのつけていたブレスレットの発信機からあなたがついた場所を探し出して、迎えに行ったわけ」

「そう……ですか」

僕は目を瞑る。そうか、そういうことだったんだな。なら他の奴らもここにいらんだな。そう思いながら時間はすぎた。

『ねえ、早く来てよ』

「大丈夫？ お兄ちゃん」

僕は今、ベッドから起き上がって上半身の服を脱いでいる。そして側にはマドカが濡れたタオルで僕の身体を拭いている。ことの始まりは数分前、スコールさんが部屋から出て行ってゆつくりとくつろいでいた時の事だ。いきなりマドカが部屋の中に水の入った桶とタオルを持ってやって来た。どうやら僕がまだ風呂に入れない事を知ったのか僕の上半身を拭きに來たらしい。

「ありがとな、マドカ」

「ううん、気にしないでお兄ちゃん。私がやりたいだけだからさ」

そういうながら、僕の身体を拭き 続けるマドカ。首、腕と拭いていった。そして背中を拭こうとした所でマドカの手が止まった。そしてそのまま僕の背中 of 模様を触った。

「やっぱりまだあるんだね、この模様」

「そうだな、多分一生消えることは無いだろうな」

「でも……これはお兄ちゃんだっていう証だよ」

「……ああ、そうだな」

マドカからの言葉に思わず微笑んでしまう。むかしはこれがコンプレックスで仕方がなかった。皆から気持ち悪がられ、友達は碌にできなかった。でも今ではアリ

サやティファからの言葉のおかげで気にしなくなつた。

「何かあつたの？」

「いいや、なんでも無いさ」

そして翌日、担当の医者から自由に歩いて回つていいという判断を貰つた。だから僕はスコールさんとマドカに亡国機業の内部を案内してもらえないかと頼んだ。二人は快く承諾してくれた。

「よいしょつと」

ベッドから降りて、近くにあつた松葉杖を使い歩き始める。一步一步、慣れない松葉杖を使いながら歩いていく。そして僕は病室に備えられた鏡に目が行つた。そこに写つていたのは醜い人間、髪はボサボサで頬は痩せこけ、かつてあつた強い眼光是すでに弱つていた。

(あんなことしてりやそうなるわな)

そんなことを考えながらまた一步一步歩いていく、扉の前に立ち取っ手を横に動かして扉を開ける。

目の前に広がっていたのはゴミ一つない近代的なデザインの廊下、左右どちらを見てもゴミは無く清潔にされているのがわかる。そして廊下のあちこちにこの病室と同じような扉がある。

(確か待ち合わせ場所はこの廊下を左に進んだ先にあるロビーだったよな)

僕はマド力達と約束を思い出しながら廊下を進んでいく。最初はマド力が迎えにいくと言っていたが僕からそれを断った。なんでかはわからない、でもここで頼ってはいけないと思った。

暫く歩くとロビーに着いた。そしてそこには既に二人が待っていた。

「お兄ちゃん！」

「あら、やっと来たのね」

そして僕は二人にこの施設を案内された。

暫く施設を案内されてわかったことが幾つかある。

まず一つ目、今僕がいるこの場所はとある国にある亡国機業の本部らしい。どうやら亡国機業は様々な国の政治に根深く関わっており、またネオも同様に様々な国の政治に根深く関わっているらしい。

そして二つ目、亡国機業は世界各地に支部を設立しており、たくさん構成員を送っているらしい。

そして僕は今、僕が寝ていた治療区を抜け、この場所に住んでいる人が暮らしている居住区を移動して、ISなどを開発している開発区を移動している。亡国機業の本部はかなり広く、ここまで来るのにかなりの時間がかかった。慣れなかった松葉杖も今では上手く使いこなせている。

「ふっ、ふっ」

少し疲れてきて、息が荒くなつて来ている。



「大丈夫？ お兄ちゃん」

「ん？ ああ、 大丈夫だぞ」

マドカが心配してくれるが、僕は大丈夫だと答えた。でも実際のところはかなり疲れている。けれど、ここで手を借りるわけにはいかない。そんな事を考えながら僕は歩き続ける。

『やっと来てくれた』

また……声がした。しかも今度は今までよりもはつきりと、声の発生場所はわかる。僕は歩くのを止めて、ある場所を見る。パスワードのかけられた扉、扉の上には整備室と書かれている。

「どうしたの？ お兄ちゃん」

マドカが声をかけてくるが、今の僕には気になる物がある。僕は方向転換をして扉へと向かう。パスワードによって鍵がかけられている筈の扉は、僕が目の前に立つだけで一人でに開いた。これは僕を招いているのか？

「嘘、なんで開くのよ」

スコールさんが驚愕している。それもそうだろう、開く筈のない扉が開いたのだから。

僕はその部屋の中に入っていく。部屋の中は真っ暗で入口付近だけが廊下か

ら差し込む光で照らされている。奥は何も見えない、でも奥には何かがある。この感覚はいつ以来だろう、確か初めて束さんのラボに行った時にISを見つけた時の感覚にそっくりだ。

「君かい、僕を呼んでいたのは」

僕はまた一步踏み出して、光の届かない暗い、暗い闇へと足を踏み入れる。松葉杖を捨てて自分の足だけで歩く。

「お前か、俺を呼んだのは」

『久しぶりですね』

また声が出てきた。

「お前はそこにはいない、そこにいるコアを通して俺に話しかけているだけだ。白騎士」

そして歩くのを止める。目の前は真っ暗で何も見えない。でも手を延ばす。

「動け、ISよ!」

そして更に手を延ばして何かに触れる。その瞬間、部屋一面に光が満ちた。

## 報告

我々が保護した織斑一夏。彼は正式に我々の組織に入ることを承諾し、施設を案内していたところ整備室にあったISを動かした。よって彼は私、スコール・ミューゼルの部隊で預からせてもらいます。

スコール・ミューゼル

## 強くなるための道

俺が I S を動かしてから二日間、身体検査などを行った後、正式にスコールさんの部隊に配属になった俺。

そしてその数日後、亡国機業の本部の中にある I S 訓練施設のアリーナにいる。アリーナの中には俺とスコールさんの二人しかいない。互いに I S スーツをきている。ちなみにだが俺の着ているスーツは、俺が I S を動かした後に大急ぎで作られた物であり、女性ものしかなかった I S スーツで初めての男性用のデザインだ。初めてこれができた時、俺は心の底から喜んだ。なぜなら、これがなければ俺は女性もの I S スーツを着用しなければならいからだ。そんなの、あまりにも恥ずかしくない。

「よし、それじゃあ I S を展開してみて」

目の前にいるスコールさんから命令が下る。スコールさんは既に以前俺が見た、あの施設を襲撃した I S を使用している。

「わかりました、こい『ライダー』！」

俺は右手を突き出して、I Sの名前を叫ぶ。すると右手に着けられた籠手が光、僕の体を包み込む。一秒ほどで俺の体にI Sが装着された。名前は『ライダー』、今スコールさんが使っている物と同じ物である。灰色のボディの全身装甲タイプだが、重装甲と言うよりは軽装甲で機動力が高い機体だ。でも今は二人ともヘルメットを展開していない。背中には突起状のスラスタが装備されている。そして何よりの特徴としては脚部に装備されている地上を移動するためのホイール、ランドスピナーである。故にこのI Sは空中戦闘よりも地上戦を得意としている。

「展開するまでに約一秒……まだI Sの操作に慣れてないと考えるとこのタイムは上出来よ」

スコールさんからお褒めの言葉を頂いた。

「それじゃあ次は歩行練習よ、私は少し離れるからそこまで歩いてきて」

スコールさんはそう言うと、ライダーのランドスピナーを使用して器用にバック走行を行き距離を取る。凄いな、あんな簡単に操れるなんて。

そして俺はI Sを動かしてからの記念すべき一步を踏み出そうとする。まずは右足を動かす。I Sで歩く感覚はあまりいつもの様に歩く感覚と酷似していて、違和感はない。

(良し！)

初めの一步が成功したことに俺は喜んだ。また一步、今度は左足を動かす。そして左足が地面につこうとしたとき

「あれ？」

俺はバランスを崩してしまい倒れてしまった。なんとか倒れる瞬間に前受け身をとったのであまり痛みはない。思っていたよりISでの歩行は楽だが、油断は禁物と言う事だろう。

「大丈夫？ 立てる？」

スコールさんがランドスピナーを使って近づいてくる。俺が立つのを手伝うつもりなのだろうが、ここで手伝ってもらったら駄目だ。ここで手を借りたら、きっと俺はこれからも弱いままにいるだろう。だから

「大丈夫です。一人で立っています」

右手を前に突き出して拒否を示す。そしてそのまま左手を地面につけ、左膝を立てて右足から立ち上がる。立ち上がった瞬間、またバランスを崩すがなんとか踏ん張る。

「よっしゃあー！」

立ち上がった事に思わず叫んでしまった。その様子をスコールさんは暖かく

見守っている。そしてそのままランドスピナーを使用してスコールさんは元の位置まで下がる。

今度は失敗しないように気をつけながら歩く。一步一步確かめるように歩いていく。今度は順調に

歩いていく。

「あんよは上手♪」

スコールさんが俺に向けて手拍子をしながら、母親が歩き始めたばかりの子供に言うように話す。確かに、今の俺の歩き方は凄いきこちなくて、歩き始めたばかりの赤ん坊みたいだろう。恥ずかしい、恥ずかしい。多分今俺の顔をみたら真っ赤になっているかもしれない。そしてなんとか俺は歩き進めて、スコールさんの元までたどり着いた。

「よくできました」

俺の頭を撫でるスコールさん。凄い恥ずかしいです。

あれから二時間後、なんとか歩行練習と走る練習をし終えた。一時間も練習すればなんとか不自由なく地上で活動できるようになった。それで今はランドスピナーを使用した滑走練習を行っている。最初は歩くのとも、走るのとも違う感覚に最初は戸惑っていたが今ではなんとか曲がれるようになった。曲がれるようになったのも何回も転けてそして立ち上がり、また滑走するのをくりかえしたからだ。それでもまだまだスコールさんには及ばない。あの人は俺と同じ機体を使っているはずなのにスピードが俺よりも速い。

「はい、止まって」

スコールさんからの声がかかる。俺はアリーナの周りを滑走するのを止めてスコールさんに近づく。

「だいぶ良くなっているわね。それじゃあ次は飛行訓練よ」

スコールさんはヘルメットを展開して、スラストから推進剤を噴射して上空へと飛翔する。

俺もヘルメットを展開する。そして両足を肩幅ぐらい開いて膝を軽く曲げる。昔東さんが言っていた事だが、ISで飛翔する際にはPICと言う物が重要らしい。これがある事によってISは空中で浮遊または加減速を行う事ができるらしい。なんでもこれはISコア自身がプログラムの案を出して、それを束さんが作り上げたらしい。



(まずは30センチメートルぐらい浮いてみよう)

軽く推進剤を吹かして浮き上がる。PICのお陰でその場にとどまる事ができる。

(凄い、これが浮くってことなんだ。なんだか初めての感覚で少し戸惑うな)

次はいよいよ上昇だ。ISはイメージで飛べると束さんが言っていたがどれくらいの物なのかはわからない。取り敢えず少量ずつ推進剤をスラスタから放つ。

スーツ

ゆっくりではあるが確かに俺は上昇している。

(飛べたー！)

飛べた事に感動しながらどんどん進んでいく。ISで飛行するというのは、地面を走ったり、地面を蹴ったりして飛び上がったたり、自転車で思いつきり坂を下るといった感覚とは全く違う。説明し難いが鳥が飛ぶのはこんな感じなのかもしれない。

順調に飛んで行き、スコールさんにさんの元まで辿り着く。案外簡単に飛ぶ事はできた。でもこれはまだ初歩中の初歩、飛行が上達するにはまだまだ練習が必要だ。

「初めてにしては上出来よ。次はもっと速く飛んでみて」

スコールさんはまた距離を取る。今度はさつきよりもかなり長い。

速く飛ぶにはもっと勢いよく推進剤を噴射しなければならないな。だから

さつきよりも大胆に放つ。

スオオ！

勢いよく噴射した推進剤は俺の体を予想よりも速く移動させる。

(ヤバい！)

俺は慌ててブレーキをかけて減速を行う。そしてある程度制御できるくらいまでスピードを落としたところで、そのスピードをキープしながらスコールさんの元まで飛んでいく。そして距離が近づいたところでゆっくりとブレーキをかけていき、丁度良くスコールさんの元に到着する。

「すいません、スピード制御を失敗してしまいました」

俺はスコールさんに頭を下げる。

「大丈夫、初めての操縦でここまでできるのはなかなかのものよ。それじゃあ次は今出せる最大の速度で直線的な移動をしてみて」

スコールさんは頭を下げている俺の顔を優しく撫でた。そして俺は顔を上げて再び構える。スコールさんは少し距離を取る。

(最大速度か……ええつと、一気に加速するにはどうすりゃいいんだよ)

取り敢えず制御も何も考えずにスピードを出す事だけを考えてみよう。イメージはなんとなくできている、取り敢えず推進剤のために溜めて一回吐き出してから

それを素早く戻して再噴射。確か……瞬時加速とか言うものをイメージしてみた。

グオオオオオ!!

「はっ。」

勢いよく噴射した推進剤は俺の体を勢いよく前方に押し出して、予想よりもものすごいスピードになる。今までに生身で体験した事のないような速度に。

(やばっ……このままじゃ壁にぶつかる)

どんどんとアリーナの壁が迫ってくる。このスピードでアリーナの壁とぶつかったら一溜まりも無い。今更ブレーキをかけたところかどうかにかなるとは思えない。こうして考えているうちに迫り来る壁……ならば一か八か。

「うおおおおお！」

体を振り向いて、進行方向とは反対側をむく。そしてそのままスラスタから思いつきり推進剤を放つ。徐々にスピードが落ちていき、それと同時に俺の体に負荷がかかる。しかし、なんとかそれに耐え切つて無事に静止する。焦った、ほんつとうに焦った。思わず両手を膝に置いて肩から息をする。まさかあんなに速いとは思っていなかった。練習すればあんなの、焦らずに冷静に対処できるのだろう。でも今の俺にはあれで精一杯だ。まだ俺は直線的な飛行しか出来ないけど、いつかは自由自在に空中を飛行できるようにはなりたい。

「おーい、大丈夫?」

スコールさんが飛んできた。

「まさか瞬時加速紛いのことを初めての起動でするなんて驚いたわ。これからが楽しみね」

ヘルメットで顔はわからないが、多分今出せる笑顔でいるのだろう。俺は息を整えて、膝から手を離す。

「それで次は何をするんですか?」

「今日の訓練はもう終わりよ」

「そんな!まだいけます。だからもつと教えてください!」

思わず叫んでしまった。

「ダメよもうかなりの時間練習してるからあなたの体力が心配だし、それに次にこのアリーナを使用する人たちが待っているのよ」

その言葉を聞いて、俺は黙ってしまった。まだまだ練習しなければ強くはなれない。でも、スコールさんの言うように体を壊してしまったら元も子もない。だから俺はその言葉に従った。

「ふう……」

訓練を終えてISを格納庫に直し終えた俺は一息ついた。俺は正式にスコールの部隊に所属してはいるがまだまだ実力やIS操縦の経験がないためにしばらくはこうしてスコールさんによる個別特訓が行われる。いつかは部隊での任務に加わる事になり、様々な違法施設などを襲撃することになるだろう。

「疲れたな」

思わず床に座り込んでしまった。訓練している最中には感じなかったのだが、こうして訓練を終えて一息つくとも体中が疲れているのがわかる。まだまだ練習しないとな。

『疲れてるみたいだね』

頭の中に少女の声が響いた。

（白騎士、どうしたんだい）

俺は目の前にあるISSのコアを介して話しかけてくるISSのコア、コアNo. 001白騎士のコアに返事をする。

(そういや、お前は今どこにいるんだ?)

『私?今は束のところにいるよ、でも白騎士としてではなくてただのコアとしてね』

そうか、白騎士は分解されたのか。

『それで今回あなたに話しかけた理由はね、あなたに取りに行ってもらいたいものがあるの』

(取りに行つて欲しいもの?)

『それはね、あなたが束から貰った誕生日プレゼント』

は?つまりそれは一度あの家にもどれと言うことか。でもなんで今更そんな事をこいつは言い出したのだろうか。

(それは俺にこの組織を抜け出して、あの家にもどれと言うことか)

『ううん、違うよ。私はあなたが決めたことに口出しする気は今は無いです。それに、あなたが束から貰ったものはきつとあなたの力になる。だから私からのお願いを聞いて』

確かにあの時束さんは俺に対してこれは助けになるものだと言っていた。でもなんでこいつはそのプレゼントに拘る。何かあるのか?

(……わかった、スコールさんと相談してみる)

『ありがとう、それじゃあまたね』

そう言うとう白騎士からの声は聞こえなくなった。

白騎士との会話を終えて、自室に戻ってきた。自室と言ってもスコールさんの部屋にお邪魔しているだけなのだが。なんでこんな事になったのかなと言うと、無事に病室から退院した俺は新しく居住区に増設される部屋に入る予定だったのだが、増築工事に数日の遅れが出てしまったために俺の泊まる場所がなくなった。病室に泊まればいいと言うかもしれないが、あそこは病人が寝るところなので、俺みたいな元気なやつはダメらしい。

そこでスコールさんが私の部屋に泊まらないかと言ってきた。もちろん最初

は断つたのだが、スコールさんから強制的に部屋に連行された。

スコールさんの部屋はかなり広く、そしてとても清潔に保たれていた。同じ年齢くらいなのに織斑千冬とは大違いだ。それに部屋が広いのは一部隊の隊長だからだそう。亡国機業の実働部隊では部隊長や副部隊長にだけ個室が設けられるらしく、一般兵は何人が一緒に部屋の集まって生活するらしい。マドカもこっちの集団部屋で生活している。

部屋に入るとスコールさんはいなかった。どうやらまだ帰ってきてないらしい、ならば先にシャワーを浴びさせてもらおう。そう思い、部屋にある自分のクロゼットから支給された衣服を取り出してシャワールームに行く。個人部屋にはそれぞれシャワーとバスタブがあるが、集団部屋にはそれがないので集団浴場などを使う。

シャワールームに入る前にノックしてから中に人がいない事を確認する。そして返事がないので中にはいる。そして服を脱いで選択カゴの中に入れる。

「これからもっと練習しなきゃ……そして強くなって……強くなって」

そう呟きながらお湯を出してシャワーを浴びる。疲れが癒されていくようでとても気持ちがいい。施設にいた頃には考えられなかったことだ。



シャワーを浴び終えて服を着て、部屋に戻るとそこにはマドカがいた。

「どうしたんだ、マドカ？」

「お兄ちゃん今日から病院食じゃないんでしょ？ だったら食堂を案内するついでに一緒に食べたいなーっと思って」

そうだった、今日から俺は病院食を卒業して一般の食堂でご飯を食べるようになってる。そのことを思い出して口に涎があふれてでくる。思えばここ数ヶ月間真面目な食事を食べてはいない。誘拐されてから施設を脱出する迄は不味い飯を一日二食、それが数ヶ月間も続いた。そして施設を脱出してゴーストタウンで食べた飯は、そこいらにあった生ごみ。あんな物を食べるのはこれから二度と無いと思う。そして亡国機業に入ってから食べたものといえばお粥や病院食と言った満腹感を満たすには足りないものだ。いや、文句を言ったらいけないのはわかっているがそれでも早く満腹感を満たす食事が食べたかったのだ。だから、今日これからある時間は俺にとつてとても大切なものなのだ。

「おう、良いぜ」

「それじゃあ行くー！」

マドカに手をひっぱられながら俺は食堂に向かった。

「そういえばマドカ、お前英語話せるのか？」

食堂までの廊下を歩きながら俺はマドカに気になった事を話した。この亡国機業では基本的に英語が公用語として用いられているが、マドカやスコールさんは日本語を話していた。スコールさんは日本人じゃ無いから英語を話せるのは当然だと思っただけ。けれどもマドカは日本人だ。しかし、ここにいるのだからマドカも話せるのかもしれない。

「なんの問題もなく話せるよ」

「はは、やっぱりそうか」

俺の妹ながら、この年で自由に英語を話せるなんて凄いな。そんなことを考えると同時になんだか凄く落ち込むな。

「でもお兄ちゃんも直ぐに話せるようになるよ。スコールさんから教えて貰ってさ」

「そうだな、ありがとうマドカ」

俺は少し落ち込みながら廊下を歩き続けた。

## 挨拶を済ませて彼は行く

閑静な住宅街を俺はただ歩いている。もう世間は十二月らしい、けれどもここに来るまではそんな感じは一切しなかった。空気は乾いており、あたりの気は所々葉っぱが落ちて剥けている。

訓練後の整備室での白騎士との会話から数日後、俺はスコールさんに頼み込んで日本、それも俺が住んでいた住宅街に連れてきてもらった。なぜかというところから貫つた誕生日プレゼントを取りにきたからだ。最初はスコールさんもダメだと言っていたが、俺からの説得によってとうとう折れてくれた。だが同時にある条件を出された。今までの知り合いに誰も合わないこと。俺はその条件を快く呑んだ。今更織斑千冬にも織斑百春にも会いたいとは思わない、けれども……

俺は無事に家につくことができた。今は平日の午後三時ぐらい、織斑千冬と織斑百春は今家にいないとスコールさんから連絡が届いた。だから安心して侵入することが出来る。つい何ヶ月前までは住んでいた家なのに入る事が帰宅ではなく、侵入すると表現するのは些かむずかゆい。

玄関の前に置かれてある植木鉢の底に隠してある鍵を拾う。どうやらこの隠し場所は俺がいた時から変わってないみたいだな。拾った鍵を鍵穴に差し込んで鍵を開ける。

ガチャリ

ゆつくりとドアノブを引いて家の中に侵入して、素早く扉を閉める。そして内部の状況を確認する。

ゴミはそれ程なく、埃も積もってはいなかった。俺がいない間に変わったな。

そんなことを考えながら靴を脱いで目的の場所に向かう。廊下を少し進んで階段を登る。階段を登り終えて、とある扉の前で立ち止まるとそのまま扉をあけた。まず最初に感じたのは長い間使われていなかった倉庫に入った時のように、俺の鼻の中に大量の埃が入り込む。

「ゲホッ、ゲホッ」

思わず咳き込んでしまう。部屋の中を進んで行って学習机の前に立つ。そして一つの引き出しを開けて中から一つのUSBメモリを取り出した。更に引き出しの中から三枚の写真を取り出す。一枚目は俺と両親が写っている物、二枚目は俺とマドカが写っている物。そして最後の一枚はアリサやティファの家族と一緒に写っている写真。それぞれ棚に飾られている物とは別物の写真。これぐらいなら持ってきても良いと思う。

「あ……」

引き出しを閉めた俺の眼が机の上に置かれてある物に注意が行く。

アリサから貰ったネックレス

あの日つけ忘れた俺の大切なもの。今はもう一度着ける事ができる。だからゆっくりとそれに手を延ばして首元まで持つていく。そしてゆっくりと首につけていく。そしてつけられたネックレスを大切に触つて行く。

「……はー」

俺は慌てて時計を見た。そこに表示されていた時間は集合時間ギリギリだった。俺は直様家にいた形跡を消去して家を出た。

「すみません、遅れました」

あれから数分後、俺は待ち合わせ場所に向かい、駐車されていたワゴン車に搭乗した。スコールさんは助手席に座っており、あとは運転席に一人だけ座っている。

「お疲れ様、欲しい物は手に入った？」

「はい、これです」

俺はそう言っつてポケットからUSBメモリを取り出す。それをスコールさんはじっくりとみる。そして見終わると前を向く。

「最後に何処か行きたいところはある？」

「そんなわがまま言っつても良いんですか？」

「ええ、大丈夫よ」

そう言う事ならわがままを言わせてもらおう。

「ならーーー」

あれから数分後、俺はとある霊園を歩いている。ここは家から車で数分で行く事のできる高い丘にある霊園、ここには俺の両親の墓がある。だから、一応挨拶を済ませておきたいと思ったから、スコールさんにわがままをいつて連れてきてもらった。

石で作られた道を一人で歩いて行く。辺りには人はいない、まあ平日の4時ぐらいだからいなくてもおかしくはないか。そんな事を考えながら、両親が眠っている墓まで歩いて行く。そして墓が肉眼で確認できるようになつたとき、俺は誰かが墓の前にいる事に気づいた。俺は思わず体を隠せそうな物に隠れて、隠れながら音を立てないように近づいていく。そしてそのまま相手に見られないように相手の姿を見る。藍色の髪に僕より低めの背丈の少女。

「……アリサ」

誘宵アリサ、俺の最初の友達で大切な人の1人。最後にあつたのは第一回モンド・グロツツに織斑千冬の応援に行くために駅にいたときだ。あの時は何も言わずにいきなり見送りに来たから凄く驚いたな。それに……ああ、恥ずかしい。別れ際に呼び止められたと思ったらいきなりキスされたな。いきなりだったから凄く驚いたな。……



別に嫌ではなかったけど。

俺は彼女にばれないよう隠れながら彼女を見る。彼女の纏っている雰囲気は沈んでいた。俺と初めてのあつた時と非常に似ている。

悔しい

あんな風になっている彼女に対して何もできない自分に対して……思わず右手でネックレスを握りしめ、唇を噛みしめ、彼女から目を逸らしてしまう。もうこれ以上、今の俺にとって彼女を見るのは辛い。だから早くそこから立ち去ってくれ。

「じゃあ一夏くん、またね」

彼女の声があったので驚いて彼女を見て見る。気づかれたのか？そんな事を考えてながら確認すると、彼女は墓の前から立ちあがってそして別れの挨拶に手を降りながら霊園から出て行った。

アリスが立ち去った後、隠れていた場所から出て来て墓の前に立つ。墓の前にはここに埋葬されてある人の名前が彫られてある。

一つ目は織斑数児すうじ、俺の父親で職業は……あれ？父さん、仕事なにしていたっけ。決して無職ではないが、何をしていたのかは思い出せない。鍛えられた体のおかげで幼心でもすぐく頼もしく見えた。休みの日にはよく家族サービスをしてくれた。大人になつたらこんな父親になりたいなど思わせる人だった。

二つ目は織斑季菜きな、俺の母親で職業は何処かの大学で研究をしていた。何を研究していたのかはよく知らない。昔から体が弱かったらしくて、俺が小学校に上がる直前になくなつてしまった。母さんの作る料理は幼いころにしか食べた事はないけど、すごく美味しかった。あれがお袋の味と言うやつなのだろう、今まで食べた食べ物の中で一番美味しい物だ。

そして三つ目

### 織斑一夏

やつぱり、もう死んでる事になつてんだな。んなもん亡国機業に入った時から覚悟はしていた、だから悲しくもなんともねえ。

俺は墓の前に座り、眼をつむって手を合わせる。そして眼を開けて手を離す。

「父さん、母さん久しぶり。そこに名前が彫られてあるけど、俺はまだ元気で生きているよ。この一年間で俺も世界も変わったよ。まあ、俺に至ってはこの半年間で住む環境とか色々変わったよ。でもそのおかげでマドカと再会できたよ。父さん、母さん。俺は親不孝者かもしれない、墓参りだって次はいつできるかわからない。それでも俺は行くよ

……」

そして俺は立ち上がり。

「いってきます」

「スコールさん、これからどこに向かうんですか？」

家に戻ってから数日後、俺は無事に亡国機業の本部に戻ってきた。そしてその翌日、俺はスコールさんに連れられて開発区を歩いている。ここは俺が所属している戦闘を主に行う実働部隊とは違い、ISなどと言った物を開発している開発部や整備などを行う整備部などが活動を行っている。

「ん？これから開発部の部長のところに行くのよ、あなたが貰ったUSBメモリを調べるためにね」

スコールさんは俺が持っているUSBメモリを指差す。

「そうですか」

そしてそれから二、三分ほど歩くとスコールさんはある扉の前で立ち止まる。

そしてそのまま扉をノックする。すると扉は自動で開いた。

「入って」

スコールさんは手招きをしながら室内に入って行った。

「あの……スコールさん、開発部の部長さんはどこにいるんですか？」

部長の部屋に入ってみるとそこには誰もいなかった。部屋の中には綺麗な机にパソコンが入り口側を向けられて置かれている。さらに壁のあちこちに画面が設置されている。待ち合わせをしているらしいがこの部屋にはおれとスコールさん以外誰もいない。いったい開発部長とはどういった人なのだろう。

「いるわよ、ほらそこに」

スコールさんはパソコンのディスプレイを指差す。そこには誰もいませんけど。そんな事を思っていると一人でパソコンの画面が付いた。次第に明るくなって行く画面、そこにはデフォルメ化された紫銀髪に金眼でドレスを着た女性がいた。

「あ……あの、スコールさんもしかして開発部長って……」

「そうよ、彼女が開発部長よ」

「君が織斑一夏くんだね。私の名前はリリス、気軽に読んでくれて構わないよ」

落ちていた女性の声色で話すりリスさん。でもこの人は何者だ？初めて会っ

た筈なのに初めて会った気がしない。

「ああ、そうか。君は私は何者なのか気になっているようだね」

その瞬間、リリスさんのいた画面の電源がきらられる。そして次に壁にかけられてある画面が点灯するとそこにはリリスさんがいた。

「私は、元人間で今は………簡単に言えばI Sのコアにある人格、それと非常に似ているっていうか、それと同じ物っていうのかな。まあ、私にもよくわかってないんだよね。それでも自分で考える事も悩む事もできる」

画面の中でジェスチャーをしながら説明をしていく。I Sのコアにある人格………そうか、初めて会った感覚がしなかったのはこう言う事だったのか。

「まあ、私もこの姿になったのはつい最近の事なんだよねー、それもI Sのコアについて研究していた時に偶然ね。君も束博士にも聞こえるんでしょ、私と同じ様にコアの声が。みんないつているからねー」

驚いた、この人も俺や束さんと同じ様にコアの声が聞こえるのか。

「君の事はI Sのコアにある人格………私たちの間でサイバーエルフと勝手に呼んでいる存在から聞いているよ。特に白騎士のコアからね」

サイバーエルフ、それが彼女たちの名前。

「そうですか。それで今日はこれについて知りたいんですよね？」

ポケットの中からUSBメモリを取り出して机の上に置く。

「そうだ、ではパソコンのコネクタに繋げてくれ」

リリースさんがそう言ったので、ノック式のUSBをノックして接続部分を出そうとする。すると、

ピカア!

USBメモリが発光して俺は思わず目をつむってしまう。

「なん……だよ?」

発光が収まったのでゆっくりと目を開けるとそこにはUSBメモリは無く、代わりにあったのは何かの直方体状の機械。大きさは中々あり、どうやらISの量子変換技術を応用しているのだろう、束さんらしいな。そしてこの機械の中には何かがある。

「…………ふむ、どうやらこの中に何かが入っているみたいだね」

リリースさんも気づいているみたいだな。でもどうやって開けるのだろうか。そんな事を考えながら機械を手にとって周りをみてみる。するとある一面に指紋センサーの様な物がつけられてある。なので俺はその面を上向きにして、再び机の上に置く。スコールさんが近づいてきてじっくりと箱を観察しており、リリースさんも近寄って見ているのを表現したいのか、画面を覆うぐらいの大きいのがめんがある。

「ねえ一夏、あなたならそれを開ける事ができるんじゃない?」

そうか、確かにこれは束さんから俺に向けて渡された物だ。ならば開けるための方法は俺自身が持つていてもおかしくはない。

「そうだな……一夏、センサーに触ってみてくれ」

「わかりました」

右手の人差し指をゆつくりとセンサーに近づけてみる。その距離はだんだんとなくなり、感知する部分と指が触れた。

ブウウン……………ピピ!

僅かな起動音の後に認証完了の音となる。ついに機会の中身が見られると浮かれていたが、今度は機械の一部が開き、またセンサーが出てきた。今度はどうやら網膜センサーのようだ。束さんも随分と用心深いな。そんな事を考えながら、センサーに顔を近づける。そしてまた、認証完了の音がなる……………そういえば、いつ俺の指紋や網膜のデータを打ち込んだのだろう。

「ついに開くな」

「ええ、そうね」

リリスさんが眩くとスコールさんは机から一步離れながら返答する。それよりスコールさん、何で離れるんですか!?!もしかして発光してしたから今度は爆発すると思っているんじゃないんですか!?



そして機械は再び発光する。今度はあまり驚かずに冷静に目を瞑った。暫くしてから眼を開けるするとそこには仄かに光る球体状の物と二つ折りにされた紙があった。

「……コア？」

おれは球体状の物を左手で掴み確かめてみる。こいつからはISのコア特有の何かを感じられる。

「どうやらそうみたいだな」

何時の間にかパソコンのディスプレイに移動していた。リリスさんも同じ事を言っているのので、どうやらこれはISのコアのようなのだ。

「二夏、取り敢えずそっちの紙を見てみなさい。何かこれに関する事が書かれているかもしれないわよ」

スコールさんがそう言ってきたので「わかりました」と返答をして、コアを一旦机の上におくと今度は右手で二つ折りにされた紙を広げてみる。二つ折りにされた紙はどうやら手紙のようだ。

「ええつと………いっくんへ。いっくんがこの手紙を読んでいると言う事はISを動かせるようになったのですね。正直な事を言うといっくんの役に立つかはわかりませんが、これをあなたにあげます。No. 000のISコアを………No. 00

「0！」

No. 000、何だそれは。ISのコアNo. は白騎士の001から始まるはずだ。それなのに000はどう言う事なのだ。この000には何らかの問題があつて001のナンバーをつけなかったのか、それならどうして俺に渡した。

「その子は変わり者です。少しでは無くてもつもなく。ですがいつくんならきつと使いこなせる筈です……………以上です」

手紙を読み終わると再び折り曲げて机の上に置く。周りを見るとスコールズさんは顎に手を添えて考え事をしており、リリスさんはリリスさんでNo. 000のコアに興味津々でいた。

「二夏、そのコアを貸してくれないか？丁度コアを搭載していない機体があるんだが、よかつたらつけさせてくれないか？」

俺はスコールさんの方を見ると無言で頷いた。スコールさんは機体の事に関しては何もリリスさんに全幅の信頼を置いているのだろう。

「わかりました」

「そうか、ならば三十分ほど暇を潰していてくれ。準備ができたなら第一整備室にきてくれ」

俺とスコールさんはリリスの言葉にしたがつて部屋をあとにした。

そして三十分後、ここは第一整備室。この部屋の中にいるのは俺とスコールさん、そして部屋の中にある画面にはリリスさんが何かについて悩んでいるような表情で写り込んでいる。

「どうかしたんですか?」

リリスさんのようすが気になったので思わず声をかけてみた。

「ああ……コアを機体にはめ込んで接触不良がない事は確認したんだが、その……なんと言えればいいか。スコール、取り敢えず動かしてみてくれ」

「? わかったわ」

スコールさんは首を傾げながらも部屋の中に鎮座しているISの起動キーに手をかける。普通ならばなんの問題もなく起動する筈のIS。

しかし

「あれ？」

起動はしなかった。

スコールさんは何かのエラーかと思い、何回も起動キーに手を添えて起動しようとするが、ISは一切反応しなかった。

「どういうことなの、リリス」

ISから離れてスコールさんがリリスさんに問いかける。

「あー、それがわからないんだ、なぜこいつが動かないのかは。接触不良でもないし、コア自体が動いていないわけではない。それなのにこいつは起動しない。なぜなのだ」

画面の中で頭を抱えて座り込んでいる。動かない？機体に問題がないと言う事はコアか？でも束さんが不良品を使わせるわけないし……取り敢えず俺も試してみよう。

「スコールさん、俺も試してみますね」

「ええ、いいわよ」

一歩一歩近づいて行き、ISの前に立つ。そしてゆっくりと起動キーへと手を伸ばす。

(No. 000、束さんはどうしてこのコアにこんな番号をつけたのだろう。それより、

俺の助けになるって書いてあったのに動かせなかったら意味がな……………いい？)

俺が触れた瞬間、ISは光出しそして

『……………やつとききたか』

凜とした青年の声でした。そして俺は光に包まれた。

光が晴れた時、俺は整備室にはいなかった。シミ一つない綺麗な真っ白の壁にそれと同じような真っ白の床。そして部屋の中には低めのテーブルと二つの一人用のソファがテーブルを基準に対象に置かれている。そしてソファもテーブルも真っ白だ。

「白いし何処だよ(汗)」

部屋の中を見回したが特に気になる物はなかった。暇だったので取り敢えず部屋の中を探索しようとしたその時

「……………」

部屋の一部が光り、徐々に人が姿を表していく。身長は180センチメートル以上、腰の近くまで伸ばした金髪。翠の瞳、そして凛として整った顔立ち。何処かのモデルと言ふよりは歴戦の戦士と言つた方がしっくりとくるだろう。

「来たか……まあ座れ」

金髪の男は俺にソファに座るように急かす。俺はそれに従つてソファにすわる。そして対面には金髪の男性が座る。

「初めましてだな、一夏。オレはNo. 000のコアの人格だ」

この人がNo. 000の人格、白騎士は少女だったけどこいつは青年なんだな。

「初めまして。それよりなんであなたは俺の名前を知っているんですか？」

「ああ、オレはオマエがタバネのラボに来た時から知っている。なんせ俺は初めてタバネが創り上げたコアだからな」

そうなのか。東さんのラボにいた時からこいつは知っていたのか。ならばもう一つ疑問思っていることがある。

「あの……どうして俺以外はこのコアを動かすことができなかつたんですか？」

「ああ、それか。それはな、オレがそいつらを選ばなかつたからだ」

「は？それってどう言うことですか？」

「そうだな……オレは他のヤツラとは違ってオレが選んだヤツしかのせないんだ」

「ええつと、それはつまり俺はあなたに選ばれたってことでいいんですね」

「ああ、そうだな。オマエはオレたちの声が聞こえるようだし、何よりオマエの持つチカラに惹かれた」

俺の持つ力？ どう言うことだ。

「おつと、もう時間だ。オマエはオレを上手く動かしてみせろ。時期がくればまたお前を呼び出す。じゃあな」

No. 000が右手を高くあげた瞬間、俺を再び光が包み込んだ。

「……あ」

光が晴れて眼を開ける。するとそこには驚いた顔でいるスコールさんとリリスさんがいた。俺はというとISに乗り込んでいた。

「一夏、体は大丈夫？」

スコールさんが声をかけてくる。とりあえず体に痛みはないが念のために確認しておこう。両手を握ったり開いたりする動作を繰り返し、今度は腕をあげたり足をあげたりする。違和感は何処にもない。

「はい、大丈夫です。今から降ります」

そしてそのままISを待機状態に変換する。左腕にISの待機状態であるブレズレットがあるのを確認するとスコールさんの元まで戻る。

「どうしてそいつを動かさせたんだい？」

リリスさんが両手にクエスチョンマークの付いたプラカードをもって聞いてくる。

「それが、こいつは自分が選んだ奴しか乗せないらしくてですね」

「そうか、ならばスコールが乗れなかった理由は選ばれなかったから。と言うことは君はNo. 000に選ばれたということだな。なるほど……」

「ええ、そういうことになりますね。東さんがどうして001ではなくて000を与えたのかわかります。こいつは我が強すぎて乗るやつを選ぶから、次に開発した白騎士に001の称号を与えたんだと思います」

俺は喋り終わると取り敢えず待機状態のISを見て見る。

「なあ、スコール。そのコアは一夏にしか使えないんだったら、いつその事一夏に専用機



を与えないか？」

「はあ!？」

リリスさんがいきなりとんでもないことを言ってきた。専用機って確か部隊長しか持てなかったはずだよな？

「それもいいかもしれないわね。今度の会議で話し合ってみようかしら」

スコールさんはこの話に随分と前向きなようだ。

「そうと決まれば一夏、待っててくれよ!」

リリスさんがこちらにサムズアップしてきた。俺はそんな気分じゃなかったのだが弱々しく返事をした。

とあるラボ、ここで一人の女性が黙々とキーボードを叩いている。ラボの中にはコンピューターが起動する音とリズム良く刻まれていくキーボード音が辺りを占めている。

しかし、突如ラボにあるモニターに『No. 000』の文字が映し出される。

「む？むむむ！」

女性が頭につけているウサギの耳型の機械がピコピコと生きているように動き出す。そして女性は

キーボードを打つのをやめる。

「No. 000が起動したってことはいつくんが生きているってことだよ。あれはいつくん以外まだ誰も選んでいないから。……でもどうしていつくんはちーちゃん達のものに戻らないのかな？何か事情でもあるのか、それともいつくん自身が帰るのをやめたのか……まあ、私はいつくんの決めたことを優先するんだけどね」

そういいながら女性は再びキーボードを打ち始める。

「それでは定例会議を始めます」

スーツ姿の眼鏡をかけた女性の号令のもと、円状のテーブルの周りに座っている人間が一斉に頭を下げる。人間はそれぞれ数カ所にそれぞれ二つずつ置かれている椅子に座っている。ある所は二人で、またある所は一人しか座っていない。そして二人とも座っていない場所もある。

「欠席も多いですが、今回の会議では来年度の予算分配などを主に行わせてもらいます」  
眼鏡の女性司会のもと、会議は進んで行く。

「それではそれぞれの部隊から報告はありますか？」

ある程度会議が進んできた所で眼鏡の女性が会議に参加している人たちに問いかける。

「それじゃあ私から良いかしら？」

一人の金髪の女性が発言した。そして彼女の隣には誰も座ってはいない。

「ではスコール部隊から報告をどうぞ」

スコールと呼ばれた女性は立ち上がり。

「今回私が話したいことは、つい先日私たちの部隊で保護したISを動かせる男性である織斑一夏についてです」

スコールの言葉に室内の雰囲気に変化する。世界で初めてISを動かせる男性……その重要性はこの部屋にいる誰もが理解している。だからこそ皆がスコールの言葉に真剣に耳を傾ける。

「彼は私たちの部隊が保護した後、ISを動かせるのが確認されたので我々の部隊に入隊しました。ここまでは前回の定例会議で話した通りです」

スコールさんは一旦、話を区切る。

「そして今回は彼が持っていた篠ノ之束からのプレゼントについてです」

また一層雰囲気の変化する。

「そのプレゼントの中身ですが、ISのコア……それもNo.000ということがわかりました。そしてこのコアなのですが少し問題がありまして。このコアは操縦者を選ばらしく、現在の所これを扱えるのは織斑一夏しかいません」

「それでどうしたんだい?」

いきなり1人の男性が声を上げた。男は年齢30〜40代くらい、髪の色は赤色に近く、豊かな顎鬚と一括りにした長い長髪が特徴的な屈強な男。そしてその隣には十代ぐらいで髪型はスキンヘッド、そしてサングラスをかけている男性。

「ええ、それで特例ではあるけど彼に専用機を持たせようと思うの。もちろん開発部や整備部とは話をつけてあるわ」

「そうですか、開発部や整備部と話をつけてあるのなら我々としては文句は言いません。それでは他に話がある方はいませんか?」

眼鏡の女性が問いかけると返事はなかった。

「ならば今回の定例会議はこれで終わりとさせていただきます」

「セルゲイ」

会議の後、スコールは会議室を立ち去ろうとしている先ほどの赤髪の男、セルゲイに声をかけた。

「どうしたんだ、スコール」

「あなたに折り入ってお願いがあるのよ」

スコールからの言葉にセルゲイは意外そうな顔をする。

「あんたが頼みごとなんて珍しいな。まあ……頼みごとの内容はわかっている。織斑一夏を鍛えて欲しいんだろ？」

「ええ、そうです。それで返事のほどは？」

「勿論いいぜ！お前から頼みにこなくてもこっちから鍛えに行く気だったからな」

「ありがとう、セルゲイ。それではまた」

話が終わるとスコールは立ち去った。

## 専用機

「はい、それじゃあ。一夏の専用機のお披露目式を始めるぞー」

ここは第一整備室、今ここでは俺専用のISのお披露目式が行われている。この部屋の中にいるのは俺、スコールさん、マドカと壁に設置された画面にリリスさんが写っている。俺達三人は横一列に並んでおり、目の前には俺の専用機になるISがあるのだが幕で隠されている。

「まあ、面倒くさい話は無しで早速お披露目デース！」

リリスさんが画面の中で右手を挙げると同時にISを隠している幕が下がる。

そこにあつたのは墨色の『ライダー』。

「これが俺の専用機ですか？」

専用機に触りながらリリスさんに訪ねてみる。

「ああそうだ。残念なこと普通のライダーの色を灰色から墨色に変化させただけだな。量産機として使われるはずだったものを急遽専用機にした。だから性能も変化はないし、専用機特有の一次移行もできない。まあ取り敢えず起動確認してくれ」

起動キーに触れて、ISに乗り込む。今まで動かしていた感覚と至って変化はない。そしてヘルメットを展開して装着する。

「お兄ちゃん、すごい」

マド力がすごいキラキラした目でこつちを見てくる。ちよつと恥ずかしいな。

「よしそれでは武装を確認するぞ。まずライダ全機の共通武器であるガンブレード、『キアストレート』を展開してくれ」

リリスさんからの指示のもと、右手を前に突き出して武器を展開する。現れたのは柄の部分に引き金がつけられ、さらには銃口までもあるブレード。この武器はリリスさんからの説明があつた様に剣とビームガンが一体となつた武器であり、剣の部分は取り外し可能でありビームガン単体でも使える。

「ガンブレードに不備はなさそうだし、展開時間も悪くはない……次はアサルトライフルを右手に、シールドを左前腕に展開してくれ」

今度は右手にアサルトライフルを、左前腕にシールドを展開する。シールドを展開するとカチリと装甲と噛み合う音が聞こえる。そしてそのまま銃とシールドを構える。

「次はアリーナに行つて機動確認するぞ、スコール相手を頼む」

スコールさんは快く承諾していた。



「あれ？スコールさんの機体変わりましたか？」

アリーナで待機しているとスコールさんが飛んできた。しかし、今まで見てきたライダでは無くてライダに似た別機体に乗ってきた。

「ええ、そうよ。この機体の名前は『ライダⅡ』セカンド。名前の通りライダの後継機よ」

ライダの後継機か……灰色のボディカラーはそのまま所々金色ラインが目につく。機体のシルエツト自体はそこまで変化は無いがヘルメツトが、ライダは少し丸みを帯びていたのに対して、こっちは流線系のように見える。そして肩のアーマーも後方に少し曲がっている。

「因みに私が今まで使っていたライダは今貴方が乗っている機体よ」

「え？」

「新たにこの子が開発されて私に与えられることになったから余ったその子を貴方の専用機にすることになったの」

なるほど、だから俺の専用機がライダーなのか。

「それじゃあ先ず好き勝手に飛んでみて、その後にはフリースピート状の目標が5つ射出されるからそれをキアストレートで破壊しなさい」

「了解」

一旦スコールさんから離れて飛行の準備をする。好きに飛んでいいと言われてたがどうすれば良いのだろうか？ 瞬時加速か………それとも円周上運動？ でも瞬時加速は上手くできるようになったが円周上運動はまだまだだし。

「………よし」

飛行内容は決まった。ゆっくりと目を瞑り、体の力を脱いて行く。そしてゆっくりと自然落下を開始する。

落下していく感覚がISを通して伝わってくる。このまま何もしなければ地面に激突してしまうだろう。でもまだ何もしない。

10メートル

まだ何もしない。

5メートル

俺は目を開き、スラスタを吹かせ始める。

### 3メートル

体の向きをわずかにずらして、瞬時加速の準備をする。

### 1メートル

一気スラスタから推進剤を放出して、瞬時加速を行う。地面との距離は1メートルにも満たない、しかし地面にかする事無く綺麗に地上ギリギリを飛行している。

そして壁に激突する直前に進行方向を変えて上空に飛んでいく。そして一回、二回と立て回転を行って減速していく。

「二夏、ターゲットが射出されるわよ」

スコールさんからの秘匿回線での連絡があつた。するとヘルメットのモニターに射出された目標が映し出される。

「行くぞ」

キアストレートを展開して素早く目標に接近していく。0.6秒、最初に比べればコンマ3から4秒ほど短縮できたけどまだまだ短縮できる。まず一機を接近してブレードで切断する。そして近くにあった一機に向かって瞬時加速を使ってすれ違わずに切断する。

そして柄にある引き金に手をかける。俺はそこまで射撃場がうまい方ではない。けれども一定の動きをするフリスビーぐらいならば撃ち落せる筈。

一発、引き金を引いて銃口から放たれたビームはターゲットの中心を撃ち抜いた。

二発、ビームはターゲットの中心に当たる事はなく、端っこに当たって軌道を変えただけとなった。

「ちっ」

外してしまった事に少し苛立ちながらも一発放って今度は確実に撃ち落としました。

残り一機

すぐさまモニターで最後の一機の場所を確認する。

「あつた」

地面に今にも落下しそうなターゲット、急いでスラスターを吹かせて瞬時加速を行う。

「はあああああー！」

今にも地面についてしまいそうなターゲット、キアストレートを逆手に持ち替えてすれ違いざまに地面にターゲットごと突き刺す。ターゲットはキアストレートの刃に突き刺さっている。

そして勢いそのままにランドスピナーを使い、飛行機が着陸するようにスピードを落としていく。

「終わりました」

停止してスコールさんに無線を繋ぐ。

「初起動には上出来よ。それじゃあ、ISを待機状態に戻して」

スコールさんの指示の元、ISを待機状態に変換する。俺の専用機である墨色のライダーの待機状態は墨色のプレスレット、そしてさらに頭にはインカムが装備されている。専用機をもらう時に一緒に貰ったのだ。このインカムはリリスさん特製のものである。これはこのインカムで捕らえた英語を自動で日本語に変換して、俺が話す言葉

を英語に変換してくれるものだ。因みに俺が聞く言葉はその人の声で聞こえ、俺が話して変換された声は俺の声になるという優れものだ。

「それじゃあ次は貴方のフィジカルを鍛える人を紹介しにいくわよ」

スコールさんもISを待機状態に治してアリーナから出ていった。

「お前が一夏だな、俺の名前はセルゲイ・アゼフ。この部隊の隊長だ。よろしく」  
「同じく副隊長のアレクサンドル・アゼフ、気軽にアレキサンダー若しくは先輩って呼んでいいぜ」

俺に自己紹介をしてきたのは赤い髪の三十代から四十代ぐらいの男性、着ている制服

の上からでもわかるぐらいに鍛えてある。そしてもう一人の方の男性はスキンヘッドにサンングラスをしており、十代だろう。どことなく軽い雰囲気を感じている。

「よ、よろしくお願いします」

スコールさんに案内された場所はトレーニング施設、室内に置かれてあるのは様々なトレーニング機器でどれも最新の機器のようだ。それに他にも冷蔵庫や戦闘用のエリアがある。

「じゃあ一夏、後はこの二人に任せてあるから」

スコールさんはそのまま退室して行った。

「一夏、俺らはISを教える事はできねえが、身体の鍛え方や格闘技を教える事ができる」

セルゲイさんは腕を組みながら話す。

「それにお前が悩んでいる事があつたら気軽に相談してくれ、女性に話しにくいことがあつても俺らになら相談できるだろ」

セルゲイさんは何処か頼りがいのある父親を連想させる。

「そういうわけだから、特訓始めるぞー」

アレキサンダー先輩は俺の背中を押して施設の中に連れて行く。

「僕らがお前にするのは筋力トレーニングと格闘技術を教えることだ。筋力トレーニングに関してはこれから来る成長期に影響を及ぼさないようにやっていくつもりだ」

今俺がやっているのはテレビで良く見かけるようなトレーニング機器を使つての筋力トレーニング、重りの個数をギリギリまで持てるぐらいにセルゲイさんが設定して、上げたや下げたりしている。もともと柔道や剣道をしていたので同い年と比べたら筋肉はついていた方だが、正直言つて結構キツイ。

「大丈夫か？無理ならギブアップしても良いんだぜ」

俺の顔をのぞきながら先輩はニヤニヤと笑っている。ここで辞めてしまつたらアウトだ。

「まだ……いけますー！」

「良いぞ、あと三十」



「ウツス！」

「ほーら一夏。そんなんじゃあたんねえぞ」

「まだまだ！」

今度はアレキサンダー先輩とのナイフの特訓、使用しているのは特訓用の切れないナイフ。セルゲイさん曰く、アレキサンダー先輩は亡国機業の中でもトップクラスの格闘技術を誇るらしい。

さつきから攻撃をしているのだが、悉く余裕の表情で防がれていく。俺も施設にいた頃はナイフを使っていたことがある。

そう、使っていただけだ

俺が相手をしていたのは俺と同じように誘拐されて来た素人の子供だからこそ攻撃を当てることができた。しかし、今相手にしているのは本職の軍人であり、素人の子供とは訳が違う。ナイフの軌道は一瞬にして読まれ、かわされてしまう。

「足元がお留守だぜ」

先輩が足払いを仕掛けてきた。しまった、攻撃するのに集中しすぎて防御を怠ってしまった。足払いをくらい、容易く倒されてしまう。そして続けざまに先輩は仰向けに倒れている俺に向かってナイフを突き出して来る。

「危ね！」

慌てて転がりながらナイフを避けて、すぐさま立ち上がる。

「やるじゃん、でもまだ訓練は続くぜ！」

近づいて来る先輩に俺は再びナイフを構えた。

訓練を終え、ご飯も食べ終わり、風呂にもはいった俺はスコールさんから英語を教えてもらっている。最初はアルファベットを書くことから始まりはや一ヶ月以上が過ぎようとしている。今では日常会話ぐらいなら何とかなるようにはなってきたいるがまだまだ、日本語で会話するのと同じくらいのコミュニケーションが取れるようにならないとまずいだろう。これからこの組織にいるのであれば。

「一夏、セルゲイとの訓練はどうだったの」

いきなりスコールさんが声をかけてきた。訓練がどうだったと言われればすぐく為になったと言うべきだろう。スコールさんは基本的にはISの操縦技術を教えるから、ああいった近接格闘のやり方はよくわからなかった。

「そうですね、とても良かったです」

「それはよかったわ。貴方にはこれからも私によるISの訓練とセルゲイたちによる訓練を同時進行でやってもらうことになるから」

「わかりました」

「それと来月中には新たな寮が完成するのよ、だから貴方はそこにうつってもらおうことになるし、そしてそれと同時に私の部隊で訓練を受けてもらうことになるわ」

「そうですね……やっつとですね」

思わず安堵した。

「あら、私と同室は嫌だったの？ 悲しいわ」

「い、いえ。そんなんじやありません」

「ふふ、冗談よ」

からかうようにスコールさんは喋る。

スコールさんには感謝しているが少しこの生活はキツかった。何がキツかったって精神的にキツかったです。俺だって健全な青少年です。スコールさんの様な魅力的な

女性と一緒の部屋で寝ることはすげえドキドキした。

スコールさんの寝ているベッドはかなり大きく俺とスコールさんが一緒に寝ても問題ないとスコールさんは言っているのだが、流星に恥ずかしいので俺は部屋に置かれてあるソファアールで眠っている。

けれどもある日、朝目覚めた俺は何時の間にかベッドの上で寝ていた。そして目の前にはスコールさんが起きていて、俺の顔をじつと見ていた。俺は慌てて起き上がり、スコールさんからどうしてこうなったかの説明を受けた。

曰く、連日の特訓で俺が疲れていると思っただけらしく、寝ている間に俺をベッドに運んだらしい。

俺はスコールさんからの説明を受けて心配をかけてしまい申し訳ない気持ちになった。それに対してスコールさんは嬉しそうに微笑んでいた。

「今日はもう遅いわ。明日に備えて寝なさい」

思い出に耽っているとスコールさんから声をかけられた。ふと、時計を見てみれば既に時計は11時をまわっていた。確かに子どもが起きているには遅い時間だ。それにこれ以上起きていたら明日の訓練に支障が出るかもしれないな。

「わかりました、おやすみなさい」

「おやすみ」

スコールさんに挨拶を済ませて、勉強用のノートを閉じて椅子から立ち上がると毛布の置かれてあるソファアーに向かう。

明日もまた、頑張らないといけないな。ISだって専用機を貰ったのは良いがまだ完全にライダを使いこなせてはいけない。円周上運動、二重瞬時加速などなど、習得しないといけないことはまだまだ多い。それにセルゲイさんたちによる特訓も勉強の習得も頑張らないといけない。そしてもつともつと強くなつて………いや、考えるのはやめてもう寝よう。

ソファアーに寝転がり、体に毛布をかけてゆつくりと目を瞑っていく。暫くするとだんだん意識が薄れていき、やがて俺は眠りについた。

で。

そして翌朝、俺はスコールさんのベッドで起きた。今度は抱き枕にされた状態

## 大晦日の日

今日は大晦日、今年は本当に様々なことが起きた。俺は誘拐されてわけのわからない施設で戦闘を行わされ、そしてISが襲撃をしかけてきたのでそれに乗じて脱出した。そしてその後にはゴーストタウンで死にかけ、目が覚めたら亡国機業の病室にいてスコールさんと出会い、マドカと再開した。

マドカと再開したことは凄く嬉しかった。長年会えなかったから、無事に出会えたことに俺は安堵した。けれども、マドカに対して真面に接してあげることのできない俺自身の弱さに嫌悪感を抱いた。

そしてその後、ISを動かせることがわかったので、スコールさんの部隊に配属されることになった。そして束さんからの誕生日プレゼントであるNo. 000のコアをリリスさんによって専用機に埋め込んで貰った。

本当にこの一年色々なことが起きたとしみじみと感じる。



「それじゃあ一夏、今年最後の訓練を始めるわよ」

「はい！」

目の前にいるスコールさんに対して頭を下げ、挨拶をする。俺もスコールさんも互いに自分の専用機を身にまとっている状態にいる。

「それでスコールさん、今日は何をするんですか？」

「そうね、今日は今までの集大成ということで私と模擬戦をしてもらおうわよ」

その言葉を聞いた瞬間、俺は思わず唾を飲み込んだ。マドカの話によると、スコールさんは亡国機業に複数あるIS部隊の隊員の中でも最強らしい。そんな人と模擬戦をするなんて正直いうと緊張する。けれども緊張してはいけない、今おれにできることを最大限しないといけない。

「わかりました。よろしくお願いします」

地上から約10メートル程の高さに二人は滞空している。両者は互いにヘルメットを装備している。

「武装、装甲ともに異常なし」

ヘルメットに内蔵されている画面に流れる情報を確認しながら、一夏は手をつぎったり開いたりしながら機体の様子を確認していく。一夏が今適度な緊張状態の中にいる。筋肉はそれ程硬直しておらず、いつでも準備万端でいる。

やがて機体に異常がないことを確認し終わると、一夏はガンブレード『キアストレート』をコールする。コールするまでにかかった時間は0.5秒を切っている。そしてキアストレートを構え、試合開始の合図を待つ。

「一夏、今回の模擬戦で私は手加減するつもりはないから覚悟してね」

一夏の耳にスコールからの声が聞こえた。そして一夏はその言葉を聞くと首をゆつくりと縦に降った。

『3』

画面に数字が表示された。一夏はキアストレートを右手で構え、ゆつくりと息を吸う。それに対してスコールは両手をフリーにしてスラスター軽く吹かせている。

『2』

キアストレートをより一層強く握り、一夏もスコール同様に軽くスラスターを吹かせる。

『1』

一夏は瞬時加速の準備をし始める。一夏の狙いは開始早々の奇襲、スコールとの距離をできる限り詰めて戦うしか、射撃の技能に不安を持つ一夏にとつて開始早々できる策の一つ。距離を取るのも良いが、今回は一夏ができることを知るための戦い。

そして

『START』

画面に文字が表示されると同時に一夏はライダの背部にある突起上のスラスターから一気に推進剤を噴出して、瞬時加速を行いスコールへと突撃し

スコールに蹴り飛ばされた。

一夏は瞬時加速をおこない距離を詰めようとした。それはスコールも同様だった。しかし、スコールが行ったのは唯の瞬時加速では無く二連瞬時加速、それは瞬時加速を素早く二回行いスピードをあげるといふもので、使うにはそれなりの技術が必要で、今の一夏ではまず不可能だ。

瞬時加速を行い、距離を詰める。

そんな単純な動作なのに操作技術の高さと戦闘経験の有無によつて二人には差ができてしまい、一夏は初手で負けてしまった。

「なろう……」

一夏は左手で腹を抑えながら、右手でキアストレートの銃口の向きをスコールから離さずに吹き飛ばされる。

(手加減しないとは言ってたけど、まさかこれ程……！)

スコールはあるものを見て、その目を疑った。

ロケットランチャー、それを一夏に向けて構えているスコール。

(いくらなんでもロケットランチャーはないだろう)

いくらISに絶対防御が搭載されていようと、衝撃を完全に打ち消せるわけではないし、装甲だつてそこまで丈夫ではない。だからもし直撃でもしたら肉体にダメージをくらつてしまうかもしれない。

スコールの指がゆっくりとロケットランチャーの引鉄にかかる。そしてそれを勢いよく引き、ロケットランチャーが射出される。

「ちー！」

一夏はキアストレートの引鉄に指を掛け、射出されたロケットランチャー目掛けて二度引鉄を引く。

一発目、放たれたビームはロケットランチャーのみぎを通りすぎた。二発目、ロケットランチャーと真正面からぶつかりロケットランチャーが爆散する。

「よし……！」

ロケットランチャーを撃ち落としてわずかに安堵していた一夏は突然首を横に動かした。そしてその横を爆煙を突き破ったビームが通り過ぎて行った。

(来る！)

一夏は左前腕にシールド  
——を展開する。——  
大きさは左腕が収まってしまいうほど

そして数秒後、爆煙は切り裂かれその背後からスコールがキアストレートを  
もって接近してきた。一夏はわずかに下降して、地面に着地して攻撃に備える。

「はあー！」

片手でキアストレートを振るうスコール、一夏はその一撃一撃をシールドで防  
いでいく。

「どうしたの、防いでるだけじゃ勝てないわよ！」

「わかってますッ！」

スコールがブレードを大きく挙げた。一夏はその僅かな攻撃と攻撃の間の空白を見  
逃さなかった。折りたたんでいたランドスピナーを伸ばして地面へと接地する。そし  
てキュルキュルと音を立てながら回転し出す。

そして背部のスラスタターを利用しながらスコールにむけてシールドを前面に  
押し出しながら突撃する。

「甘いわよ、一夏」

スコールが突然振り上げていたキアストレートを収縮し、突撃して来る一夏の

両肩を軸にしながら鉄棒を回るように一夏の上を通り過ぎていく。

「なにッ！」

一夏はランドスピナーを利用しながら後ろを振り向く。そして再びスコールに向けて突撃する。

（流星はスコールさん、強い）

スコールへと接近しながら一夏は

（もつと！もつと強く！）

キアストレートを握る手により一層力が入る。一夏はスピードを保ったまま、スコールに向けてキアストレートを振り下ろす。スコールは再びキアストレートを展開し、その刃で一撃を受け止める。スコールはキアストレートの衝撃で僅かに後方に下がる。

「そうよ！一夏、もつと本気を出しなさい。あの日のように、私が貴方と初めて戦ったあの日のように！」

（あの日？どういうことだよ、あの日は確かにスコールさんと戦ったけど今とそんなに違ったのか）

スコールからの言葉に一夏は首をかしげた。それ程迄にスコールからの言葉の意味がわからなかった。一夏の技術は施設にいた時よりも向上している。そして今

は本気でスコールに立ち向かっている。それなのに、施設にいた時の方が今よりも本気を出していると言っている。

（もつと本気を出せって言われても……あの時は確か時間を稼ぐために必死だった。その時のことを思い出せ！）

罅迫り合いをやめ、一旦スコールから距離を取る。そして両手で剣を構える。（集中しろ。目の前にいるのは仲間ではなく敵。落ち着け、心は静かな湖畔をイメージしろ）

ゆっくりと目をつむり息を整える。内側から何かがあふれるような感覚が第六感を通して伝わってくる。そして目を開ける。

「行きます……」

ブレードを片手で構えて、シールドを収縮し瞬時加速をする。スコールもブレードを構えて、一夏を待ち構える。

一夏はブレードを振りおろしてスコールの頭部を狙う。しかし、スコールの持つキアストレートによって防がれる。そして一夏のブレードが弾き飛ばされて空中を舞う。

だが一夏はそれをあらかじめ予測していたように次の行動に移る。飛ばされたガンブレードには目もくれない。一夏は右足を軸に左脚でスコールの右手首を狙う。





勢いそのままにスコールの体を地面へと叩きつける。一夏はフランケンシュタイナーを決めた直後、両脚をスコールから離して距離をとった。

いくらＩＳに防御用のシールドがあっても衝撃までは完全に打ち消すことができない。一夏はその事をつけて、篠ノ之束から聞かされていた。だからこそ一夏はこの一撃を狙った。相手の体重を武器へと変化させる技を。

（正直こんなふうにうまくいくとは思わなかった。テレビで見たプロレス技をこん何もうまく再現できるなんて思わなかった）

一夏はテレビでよく放送されている格闘技の番組が好きだった。プロレスを見ていた。ボクシングも見ていた。異種格闘技戦も見ていた。

一夏がそれを見るようになったのは今は亡き父、数児の影響だろう。まだ一夏が小学校に上がる前、まだ三歳かそれ以前の事だ。数児は胡座をかいてテレビで格闘技の番組を見ていた。そして、よく一夏を胡座の上に座らせてテレビを見せていた。一夏はその時の父の顔が凄く楽しそうだったのを僅かながら覚えている。

だから一夏は父が死んだ後も一人でそれを見ていた。

「まさかＩＳの戦闘でフランケンシュタイナーを食らうなんて思っても見なかったわ

……けれど二度目はないわよ」

フランケンシュタインをくらったスコールはゆっくりと立ち上がった。マスクで表情はわからないがきつと怒っているのだろう。体から漏れている気配でわかる。

「もう……容赦はしないわよ」

「……は、はい」

「もう……無理」

結論から言おう、俺はあの後スコールさんに一方的にやられた。ブレードを拾おうにもスコールさんにそれを阻まれ、最終手段として格闘戦に持ち込もうとしたが力及ばずスコールさんに倒されてしまった。

今はアリーナのピットでライダの破損状況を確認している。

頭部……ヘルメットは左半分が碎けてしまい、被ったら相手と目が合ってしまった。ヘルメットの中にある画面も罅が入ってしまった使えない。

胴体……胸の部分の装甲が所々剥がれてしまっている。さらに背中のスラスタも壊れてしまった。

両手両脚……こちららも胴体と同じで所々装甲が壊れてしまっている。

数分もしないうちに破損状況を確認し終えた。そしてライダの待機状態であるブレスレットを外す。スコールさんの話によるとこいつは修理に出すらしい。

「一夏、確認は終わったの？」

「はい、終わりました」

部屋にスコールさんが入ってきたので立ち上がり、返答する。

「そう、それじゃあブレスレットを渡して頂戴。私から整備部に出しておくから」

「ありがとうございます」

「今日の模擬戦なかなかだったわよ。これなら来月から私の部隊で頑張れるわね。今年

一年お疲れ様」

「ご指導頂きありがとうございます。来年もよろしく願います」

俺が頭を下げてお礼を言うと、スコールさんは微笑みながら出て行った。

「お兄ちゃん、訓練どうだったの？」

「ん？どうだったって言われても、今日は何時ものメニューと最後に模擬戦をしたよ」  
「それで結果はどうだったの？」

「惨敗だよ、惨敗。けどスコールさんのエネルギーを四分の一は削ったよ」

「それでも凄いなと思うよ。だってスコールさんはここの操縦者の中だったら一番だっ  
はなしだよ」

スコールさんの模擬線の後、マドカと会った俺は食堂にきている。今日は大晦日という事もあって食堂ではどこもかしこも宴が行われている。そんななかで俺とマドカは二人、隅の方でひっそりと年越し蕎麦を食べている。厨房にいるシェフが海老の天ぷらをサービスしてくれたので嬉しい。

亡国機業には様々な国の出身がいるので、それに合わせて様々な国の料理がメニューとして用意されている。

「そうか、ならもつと頑張らないとな………それよりマドカ、友達と一緒に食べなくて良かったのか？」

こう言うのもあれだが、マドカは友達が多い……いや、俺が少なかつただけだろう。なんせ小学校に行つてた時に出来た友達はアリサだけで、学校以外で言うティファニアもか。施設に居た時は自由時間は僅かながらあつた。けれども日本語が話せないやつがほとんどだったから、まともに話したのは一人か二人だけだ。

「大丈夫。友達にお兄ちゃんとお食する事話したら、私たちの事は気にしなくていいよつて言われた」

「そうか、そいつはよかつた」

マドカはいい友達をもつたな。

そして、暫く黙々と蕎麦を食べているとマドカが食べている箸を止めてこちら

を見てきた。

「……ねえ、お兄ちゃん。前から気になってただけだし、そのネットクロスどうしたの？」

マドカは俺の胸にあるネットクロスを指差して言った。俺は普段からこのネットクロスをつけている。流石に訓練なんかのときには外すけど。

アリサから貰ったこれはモンドグロツソにいく時に家においてきてしまったが、コアを取りに行ったときに持ってきた。

「ん、これか？これは友達から誕生日プレゼントでもらったんだよ」

「えー！お兄ちゃん友達いたの!？」

マドカ、お前酷くね？お兄ちゃん泣くよ、マジで。

「いるよ、一人だけだけどな」

「へー。お兄ちゃんつてき、なんか他の人とは違うって言うかなんと言うか、浮いてる？幼稚園の時も他の子と雰囲気違ったから誰も近寄らなくて、友達いなかっただしよ。だから小学校でもいないと思っただんだ」

「小3迄は確かに友達いなかっただけど、小4から友達が出来た。そいつも友達がいなかったから、誘拐される迄はそいつと一緒に遊んだり、旅行に連れて行ってもらったりしたんだ」

「その旅行って姉さん達も？」

「いや、俺一人だけだ」

「ふーん。それでその友達がそれをくれたんだ」

「そう、その友達……名前はアリサって言うんだけど」

「え、女の子？」

俺の言葉にマドカは驚いて箸を落とした。大丈夫か？

「え……その友達って女の子だったの」

恐る恐る尋ねるマドカ。なんだ、そんなに俺に女の子の友達がいるのが驚きか。

「そうだ。それでこのネットワークレスはその子のとペアになってるんだよ」

「へー。そうなんだ。お兄ちゃんに友達がいてよかったよかった」

マドカは落ちた箸を拾い、テーブルに置いてあるティッシュで拭くと、再び食べ始めた。

「ねえ、ちよつといい？」

「んあ？」



飯を食べ終え、一段落いれていた時、誰かきら声をかけられた。その声は少女の物だった。

声をかけられた方を見てみるとそこには俺が施設を脱出する時に最初に助けた橙色の髪の少女がいた。

「あれ?どうしたの」

マドカが彼女に親しそうに話しかける。二人は友達なのか?そういえば、あのゴーストタウンで彼女を見たような、見てないような。

「ちよっとね」

彼女はそう言う俺の方を見てきた。

「その……助けてくれてありがとな」

少し俯きながら喋る彼女。

「いいよ、気にしなくて。それに感謝するなら俺じゃなくてスコールさん達にしてくれ。俺がいなくても君は助かったはずだ。それに、俺が混乱を引き起こしたんだ。俺がいなかったらもう少しスムーズに進んでいたよ」

少し苦笑いしながら答える。彼女が俺に感謝するのはおかしい。あの脱出に關しては俺は明らかに邪魔だったはずだ。救出しているスコールさんに攻撃をしかけたり、脱出したのは無意味だったし。

でも

俺が答えた後、彼女は小さな声ではあるが力強く呟き、そして

「あたしを助けたのはあなた。だからあたしはあなたに感謝してる」

強い思いが込められた言葉が俺のなかを通って行った。

「……ふ」

思わず少し笑ってしまった。決して彼女の言葉がおかしかったからではない。

なんといいばいいのだろうか、嬉しさ……多分そう表現するのが一番適している感情が俺の中を占めていった。他人に感謝されるのなんて滅多にあることじゃない。だから誰かに感謝されたのが嬉しくて笑ったんだと思う。

「ありがとう、そういつてもらえると嬉しいよ」

「うん。そう言えばあなたの名前は？マドカのお兄ちゃんだったことはわかるんだけど、名前がわからないんだ」

「一夏。君は？」

「オータム」

「……なかなかね」

他に誰もいない部屋でスコールは椅子に座り、パソコンに表示されているデータを眺めながらつぶやいた。

今、スコールが確認しているのは一夏に関するデータ。画面の中には様々なグラフが表示されている。グラフに殆ど変化がない物もあれば、ドンドン上昇して行っているものもある。

「それをみてどう思う?」

突如、スコールとは別の人間の声が部屋に広がった。扉が開いたというわけでも、最初からスコール以外の人間がいたというわけではなかった。だが新たに女性の声がした。

「そうね……まだよくわからないわ」

新たな声にも反応することなく、平然と返答するスコール。

すると、スコールが覗いているパソコンの画面に一人のデフォルメされた女性が見える。彼女の名前はリリス、亡国機業の開発部の最高責任者である。

リリスはその手にもっていたフリップを投げると、画面に表示される。

「それは？」

「一夏のI・S適性」

リリスから渡されたそれを眺める。

I・S 適性 S

「確か……一夏つてつい最近迄はAマイナスかBプラスぐらいだったわよね、それがなんでこんなに早く上がっているのかしら」

「正確に言うとなん、0000のコアを手に入れてから急激に上がったな。もともとサイバーエルフと会話できるのだ、このぐらいの数値が出てても可笑しくはないだろう」

「これが彼の限界？」

スコールが尋ねるとリリスは少しだけ鼻で笑った後

「これが限界？そんなわけないだろ、スコール。彼はまだ卵から孵った……いや、もしかしたらまだ孵ってすらいないかもしれない。もつと伸びるよ、一夏は」

リリスは答えた。

「それよりもだ。身体面の方ではどうなのだスコール。セルゲイに一夏の体作りのことは任せてあるんだろ？」

「セルゲイの話だと、一夏自身柔道や剣道をしていたから同年代とくらべたら身体ができているらしいわ。これから数年間掛けてじっくりと鍛えていくそうね」

「そうか、それはよかった」

リリスは頷きながら話を聞き終わるとどこかへ消え去り、スコールはキーボードを使いドンドン文字を打ち込み、部屋には静寂が訪れた。

## モノクローム・アバター

「二夏、今日から貴方には私の部隊『モノクローム・アバター』に所属してもらおう事になるわ。でもその前に渡すものがあるわ」

年が明けて初めての訓練の日、俺は今日からスコールさんの部隊『モノクローム・アバター』に所属することになっている。

今は整備室で改修してもらったライダを受け取りに来たのだが、スコールさんは俺にライダを渡す時に真剣な表情している。

「貴方には渡すものがある」

スコールさんは近くにあった棚から何かを取り出して俺に持ってきた。

それは亡国機業の制服と顔全体を覆うような仮面

「なんですか、この仮面？」

「貴方は世界でただ一人の男性I S操縦者、だからその素顔を隠すためにこの仮面が必要なのよ」

そういう事か。気を使ってくれんだ。そんな事を考えながらその二つを撮ろうとした時、スコールさんに止められた。

「二夏、これを貴方が取るっていう事はこれから任務を受ける事になるのよ。それは貴方に人殺しをさせる事にもなる。施設の襲撃、暗殺、殲滅戦、様々な事が貴方に殺しをさせるの。それに戻れなくなるわよ」

スコールさんが俺を諭すように話しかける。

それだけか？

そんなものISを動かした時から

誘拐されたときから

俺はゆつくりとスコールさんに近づき、スコールさんが持っていた仮面を右手で掴む。そして左手で伸びた髪の毛をかきあげると仮面を装着する。仮面の側面から

二本のベルトが飛び出して、後頭部の位置で二本のベルトが引っ付き、頭部に固定される。視界も普段とそんなに変わらない。よくここまで綺麗に視界を確保できるな。仮面を通して見る世界は何処となく異なる印象を受けた。

理解カクゴしている

「スコールさん……そんな事もわかっていなかっただら銃なんて握りませんよ。銃を持っているのに人を殺す覚悟がないなんて甘い事は言わない。そんなのもわかっていなかったら訓練なんて受けていません。戦闘の技術も覚えません。戻れないのであれば進むしかないでしょ、進まなければ死んでしまう」

俺がそう言うと、スコールさんは妖艶に笑った。何もかもを魅了し虜にしてしまいそうな笑み。そして

「ふふ、貴方ならそういつてくれると思ったわ。ようこそ、私の部隊『モノクローム・アバター』に。コードネーム『ゼロ』」



「今日から此方の部隊に所属することになりました、コードネーム『ゼロ』です」

目の前のソファーに座っている人たちに向かつて一礼する。声は仮面に付けられたボイスチェンジャーによって無機質なものになっている。

今俺がいるのは『モノクローム・アバター』に与えられた部屋、亡国機業の実働部隊の部隊一つ一つにそれぞれ作戦会議などを行うための部屋が用意されている。

室内にいるのは俺とスコールさんを合わせて五人、黒色のボブカットの二十代前半の女性、背中まで伸びた赤いロングヘアの女性、そしてオータム。

三人の女性が俺のことを訝しむ様に見える。無理もないか、身長は一般的な

小学五年生よりか高いが、成人女性の平均身長と比べると低い。そんな奴が奇妙な仮面をつけて、さらにボイスチェンジャーまで使えば怪しまれることは間違いない。

それより、何で味方なのにわざわざ素顔を隠す必要があるんだ？

遅かれ早かれ俺の正体がバレるなんて明白だ。それなのに何故？

スパイ対策？それともこの亡国機業の中にいる女尊男卑の考えを持った人間から守るため？

思考張り巡らせながら、俺は横目で隣にいるスコールさんの顔を窺う。スコールさんは俺の目線に気づいたのかニコツと微笑んだ。

はたから見れば、俺を安心させるために「大丈夫」や「心配ない」という意味で微笑んだように見えるだろう。

しかし、俺にとってはこの微笑みは別の意味に見える。

「なあ、スコール。一つ聞いていいか？」

「なにかしらシルヴィア」

ソファアに座っていた黒髪のボブカットのシルヴィアと呼ばれた女性が手を上げる。

「なんで、その子は仮面つけてるんだ？」

「これ？ええつとねえ、彼女は顔に酷い火傷をおってしまったてるのよ。だから彼女自身

が顔を他人に見せたくないらしくて、かめんをつけているのよ」  
嘘ダツ！

今のスコールさんの発言でわかったよ、この人は初めから俺を嵌める為に仮面をつけさせたのか。

「そうか……よしスコール。今からゼロの歓迎会を兼ねて風呂場に行くぞ、裸の付き合  
いというやつだ」

シルヴィアさん、何言ってるんですか？俺、男ですよ。ああ、そうかこの人た  
ちは俺を女として認識してるんだな。なら、そういうことを言っても仕方ないのか？

「あら、いいんじゃないの」

スコールさん、貴方は俺が男だつて知ってるじゃないですか。そこは普通止め  
るでしょ。なんで同乗してるんですか。

やつぱりあの時の目は安心させる為のものではない。これから起こるかもしれ  
ない愉しい事に対して期待していた目だ。俺を抱き枕にして寝ていた時も同じ目  
をしていた。

逃げよう

そう思い、出口に向かって歩き出そうとしたその時、肩をスコールさんに掴ま  
れた。スコールさんは俺に対して笑みを浮かべているが、瞳は笑ってなどいなかった。

そして俺を掴んで離さないスコールさんの艶かしい手、先ほどから他の三人にばれないように振りほどこうとしているのだが、一向にふりほどけない。それどころかどんどんつかむ力が強くなって行き、俺の肩を今にも砕こうとしているのかもしれない。あれだな、スコールさんは始めからこの状況を作り上げようとしていたんだ。そして俺の正体が男だとわかった時の隊員たちの反応を楽しみにしているに違いない。「ほら、あんたもそんなの付けてないでさ。アタシ達はそんな火傷なんて気にしないからさ。外そうぜ」

シルヴィアさんが俺の仮面に手を伸ばしてくる。顔がばれてはいけない、そう思い、左手で仮面へと手を伸ばすシルヴィアさんの腕をつかもうとしたその時。

ゴキリと右肩から変な、聞いたこともなく、聞きたくもない音が聞こえた。

まあ、簡単に言うくと右肩をスコールさんに外されました。……よくもやりやがったな。

右肩を起点にして、体全体に痛みが走る。俺は思わず左手で右肩を治そうとする。

しかし、そうしているうちにシルヴィアさんの手が俺の仮面にかけられる。そして仮面の側面にあるスイッチを押して留め具を外し、ゆつくりと顔から仮面を外していく。

もう、無理

「え？」

俺の顔を見て驚くシルヴィアさん、よくみると残りの二人も驚いている。

「……ど、どうも」

「「はああああああ!?!」」

女性三人の心からの驚愕の声が部屋に響いた。

あれから数分後、俺は部屋の中に備え付けられているソファアームに座り、目の前のテーブルにはたくさんのお菓子やジュースが並べられていた。

どうしてこうなってる

俺の正体が発覚した後、軽いパニック状態に陥った。女性にしか使えない筈のISを使う部隊にまさか、男が入隊してくるなんて考えもしてなかったんだろう。

そしてそのパニックをスコールさんがあっさりと収めて、それからは俺に関する説明の時間があつた。最初は三人とも信じられないといった表情だったが、ライダを部分展開したのを見せると納得してくれた。

そしてそれからは自己紹介を軽く済ませて、俺の歓迎会の準備をしている。

「どうなってるのよ、スコール。アタシは聞いてないわよ、男性IS操縦者がいるのも、ウチに入隊してくるのも。会議で話上がった？」

「会議には上がっていたわよ、シルヴィア。あなたが休んでいた一回だけだけね。それにこのことは副隊長以上の者しか知らないわよ」

「……あんときか、確かにアタシはいなかったけどさ、ひとこと言っても言ってくれても良かったんじゃないの？ これでもこの隊の副隊長よ」

「そうね、次からは気をつけるわ」

ふと部屋の隅を見てみれば、スコールさんとシルヴィアさんが軽く口論をしている。まあ、少ししたら収まるだろう。

オータムはオータムでいそいそと用意している。

さて今のところ問題は

「……………」

さつきからおれの顔をじつと見ている赤髪の女性、確か名前はクーネさん。スコールさんやシルヴィアさんよりか若い。

何だこの人は、俺の顔を見てそんなに面白いのか？そんなことを考えているとクーネさんが此方に近づいて来た。そして俺の前に立つと、中腰になり俺の肩に両手を乗せてガツチリと掴む。そして顔だけをスコールさんの方に向ける。スコールさんもクーネさんが見ているのに気づいたのか、シルヴィアさんと一緒に此方を見ている。

「ねえ、スコール……………」

クーネさんがゆっくりと口を開き

「どうしたの、クーネ」

「……………この子もらつていい!?!」

突然変な事を言い出した。

「だめよ」

「何故に！それよりスコール、この子何処で見つけたの。凄くないこの子の目、何か物凄  
い何かを秘めているような目。この子きつと将来有望よ！だから、ね！」

息を荒げながら説得するクーネさん。

「アンタは落ち着きなさい！」

何時の間にかシルヴィアさんがクーネさんの背後に移動して、クーネさんの首裏を手刀で叩いた。するとクーネさんは先ほどの興奮が嘘のように倒れた。

「悪いねえ、こんなやつだけどさ本当はいい奴だからさ。唯の子供好きだから、嫌いにならないでくれ」

気絶したクーネさんを肩に担いだまま、俺に話しかける。シルヴィアさんは少し怖い人かと思っていたけど案外優しいんですね。

「よし、それじゃあ一夏の歓迎会はじめるわよ！」

シルヴィアさんの号令のもと、パーティーが始まった。

部屋の隅で気絶しているクーネさんを放って置いて……



「あー……つれえ」

歓迎会を終えた俺はダンボールを抱えたまま新たにできた宿舎を歩く。

あの後順調に歓迎会があつた。お菓子を食べて、騒ぎ、話をしたりして盛り上がり終わった。

訓練は明日からあり、今からは新しくできた寄宿舎への引越作業。とはいってもダンボール二個分の衣服と勉強道具を運ぶだけだ。家具は既に向こうに用意されてあるらしい。家具を新しく買うのは部屋に住む本人たちの自由らしい。

因みにだが、亡国機業の隊員達にはそれぞれ給料が支払われている。開発班や整備班などは時給制にボーナスがつく。実働部隊は基本給プラスのこなした任務によるボーナス。基本給は隊員の階級によって違う。給料は個人の口座にちゃんと振り込まれる。

そんなこんなで部屋の前につきました。扉は木製で鍵付き。中にはいれば、入

口付近に二段ベッドがそれぞれ二つずつ。どうやら四人部屋の様だ。

二段ベッドを通り過ぎて奥にいけば、マットが敷かれている。そこにはテレビやテーブル、奥に行けば簡易型のキッチンまである。収納スペースもたくさんあり、窓からは新鮮な空気が入ってくる。

良いな。全体的な広さはスコールさんの部屋と同じくらい。ここが今日から俺が暮らす部屋か……………

「誰かいるー？この部屋の入居者なんつすけど」

扉が開く音がして少年の声が聞こえた。俺は振り返って、少年に挨拶しようとする。

「いますよー、同じくこの部屋の住居……………者……………の？」

入ってきた少年の顔を見て、空いた口が塞がらなかつた。それは向こうも同じ様だ。

「E52……………」

「O10」

二人とも、かつての番号で呼び合ってしまった。

俺の目の前にいるのはあの日俺が戦った少年、E52。やっぱりあの後ここに入ってたんだな。

そんな事を考えていると室内に嫌な沈黙が広がる。俺の目の前にいるのは俺が殺そうとした奴、相手の目の前にいるのは自分を殺そうとした奴。何を話したらいいかわからない。でも

「まあ、なんだ……中で話そうか」

「お、おう」

「久しぶり……ですな」

「そうっすな」

とりあえずテーブル越しに床に座り、自己紹介を済ませようとするが話が繋が

らない。

ならば

「すいませんでした。マジで俺も生き残るので必死だったんだ」

テーブルに両手をつけて頭を下げる。

「謝らなくていいさ、俺もお前の立場だったら殺してた。だから罪悪感は抱かなくていい。むしろお前があの中の時の相手で助かった。別のやつだったら俺は今頃あの世だからな」

「そうか、すまない。そういえば自己紹介がまだだったな、俺は一夏。一夏と呼んでくれ」

「よろしく、イチカ。オレはグレイ・ジーンズ、グレイって呼んでくれ」

「ああ、これからよろしくなグレイ」

「他の奴らが来るのを待つか？」

「そうだな」

「失礼します」

「入るぞ」

あれから二人で暫くくつろいでいると、部屋の中に新たに二人の少年が入ってきた。

「ええつとこの部屋で生活することになりましたジーク・オーバーです。よろしくお願  
いします」

深緑色の髪をした、黒い目の少年。グレイとは違って落ち着いているみたい  
だ。

「アドルフ、よろしく頼む」

もう一人は銀色の髪に赤い瞳の少年。何処か殺伐とした雰囲気を漂わせてい  
る。

「二夏だ。よろしく」

「グレイ、こつちもよろしくな」

「それでこれからどうするよ」

部屋の引越しも全て終わったところでグレイが話を振った。

部屋のベッドの割り振りは俺とジークが二段ベッドの上段、グレイとアドルフが下段になった。

「どうするって言われてもな」

「そうですねえ。もう遅いですし、お風呂にでも行きませんか？」

「裸の付き合いですか？」

「なら行くか！」

四人とも制服を着込んで、風呂場に出かけた。

「つーかよお、一夏。なんでお前ネックレスなんてしてんだ？」

「なんだグレイ、つけていたら可笑しいのか。これは大切な人から貰ったんだよ」

「へえ、そうか」

脱衣場には俺たちの他に誰もおらず、他に衣服もなかったことから俺たちの貸し切りみたいだ。

上着を脱ぎ、ロッカーの中に入れる。そして全ての服を脱ぎ捨てて、ハンドタ

オルを持ち風呂場に向かう。

「二夏、君の背中どうしたんだい!？」

ジークがいきなり、俺に向かって叫んだ。

ああ、そういえばこいつらは俺の背中のこと知らないんだよな。

昔はこの背中のことが嫌いだった。もし昔のままの俺だったら背中のことは隠していただろう。

けれど今は違う。アリサやティファに褒められてからこれに対する俺の意識は変わった。

だから

「いいだろ、これ。気に入ってんだぜ」

少し自分で誇ってみよう。

## 最初の任務

「ふうー、ふうー」

「なあ、一夏。貧乏ゆすりやめないか？ 凄いこつちに振動が来てるんだけど」

「オータム、これは貧乏ゆすりじゃない武者震いだ。そうだ武者震いだ。そうに違いない」

そんな軽口を叩きながら、俺は震える足を両手で抑える。

今俺がいるのは亡国機業が所有する飛行戦艦、その出撃待機室である。部屋には壁に沿うように椅子が設置されており、俺の隣にはオータムが座り、他の隊員たちもそれぞれ椅子にすわっている。

今日は俺の初めての任務、その事が告げられたのはつい昨日のことだった。訓練の後のミーティングの時に任務に行くと言われた。俺にとつては初の任務だ。

任務の内容は簡単、これから俺たちはとある研究施設を襲撃する。その施設というのは俺が誘拐されてから数ヶ月間いたような、誘拐して来た奴らに殺し合いをさせるような場所である。そんな場所があつた場所以外にもあるというのははなからわかつていた。でも、こつとも早く、そして俺の初めての任務に当てられるなんて思いもしな



かった。……いや、俺の初めての任務だから当てられたのか。

「なんだ一夏、緊張でもして震えてんのか？」

「いえ、武者震いです」

俺に声を掛けて来たのは『モノクローム・アバター』の副隊長であるシルヴィアさん。

「そんな無理すんな、アタシも最初の任務の時はそうやって震えていたんだから。アタシの初任務の時より若いオマエが震えていたって可笑しくねえよ」

「……すいません、心配をかけてしまつて」

ぺこりとシルヴィアさんに頭を下げる。

この人が副隊長だというのはすごく納得できる。ISの操縦技術が上手なのはもちろんのこと。スコールさんとは違い、姉御肌というのだろうか非常に頼りになつて安心することができる。

そうか、シルヴィアさんでも最初の任務の時は震えていたんだ。なんだか意外だな。シルヴィアさんはいつでも凜としているから、最初の任務の時もいつもと変わらないようにしていたと思つていただけ。

でも、やつぱり震えを抑える為に少し黙想でもしておこう。そう思いながら目を閉じようとしたその時

「やーん！震えてるの？ねえ、ふるえてるの？大丈夫お姉さんが守るから」

室内に広がっていいこうとしていく沈黙をぶち壊す様にクーネさんが俺に絡んでくる。

「……………クーネさん、すいませんが今は集中したいので話しかけなくてももらえませんか？」

「つーめーたーい、でもそういうことならしょうがないわね」

俺の話に納得したのか、クーネさんは自分の席に戻って行った。

『そろそろ目的地に到着する。準備しな』

俺が黙想を始めようとしたその時、室内にあるモニターに一人の老人が映し出される。

頭には帽子をかぶり背中近くまで伸ばした白髪と口の周りに生えている髭、そして左の目元に傷がある老人。その名はステイーブ・H・フォスター、彼はこの艦の艦長である。スコールさんが言うにはステイーブさんは亡国機業に在籍している人間の中ではかなりの古参らしい。

『一夏、任務頑張れよ』

「了解しました」

ステイーブさんからの激励の言葉に俺は返答する。

「みんな準備して、カタパルトに行くわよ」

今まで沈黙していたスコールさんが立ち上がり、俺たちに指示を出す。それを見た俺たちは全員椅子から立ち上がると着ていた上着を脱ぎ捨ててISスーツになる。

既にスコールさんたちはカタパルトから出撃して残り俺一人だけになった。

「ライダー、行くぞ」

俺は発射台の前で俺の機体の名前を呼ぶ。すると一秒もしないうちに体にISが装備される。

その名はライダー、この機体に関していえば正式名称は『ライダー・カスタム』。この機体は俺の専用機、ライダーのカスタム機。

これを作ったリリスさん曰く、こいつは実験機らしい。推進力などは他のライダーと対して代わりはないが、装備に試作品が装備されている。例えば、腰に付けられた

二丁のビームマシンガン『デスペラード』、キアストレートのビームより一撃の威力は劣るが連写性能に長けている。他にも試作品はあるのだが、紹介は省かせてもらおう。

さらにこの機体の股間部だけは他の機体と違う。開発部の男性たちが俺の為だけに股間部に少しゆとりを持たせて、更には最高の衝撃吸収剤が使用されている。「もしものため」だそうだ。お心遣い感謝します。

『ゼロ、出撃お願いします』

ヘルメットのモニターに一人の女性の顔が映る。彼女はこの艦のオペレーターのひとりである。

「了解しました」

オペレーターの指示の元、おれは両脚をカタパルトの上に乗せる。

「発進準備完了」

『了解、射出タイミングをゼロに譲渡します』

ゆつくりと深呼吸をしたのち、薄暗いカタパルトの奥を見る。そこにあるのは新たな世界、一夏がゼロとして行う初めてのこと。

さあ、出撃だ

「……………あ」

『どうしたの?』

「いえ、こういう時って何って言って出撃するんですか？」

『ふふ、何でも良いのよ。頑張ってるね』

オペレーターからの激励の言葉を貰い、再び出撃の為に構える。

「ライダー・カスタムはゼロで行きます」

出撃コールの後、俺の体に後ろ向きに力がかかり前に進んで行く。スラスターを吹かせる。段々出口へと近づいていく。

そして発射台の先端に到着し、カタパルトのロックが外れる。

その瞬間、スラスターを一気に吹かせて加速させて外に勢いよく飛び出す。

## 任務開始

## 再会と戦闘

艦を飛び出して目の前に広がった光景、目下に雲の海が広がる夜の星空。世界の果てまで広がっていきそうな雲の海、点高く広がっていく美しい星空。そんな漆黒の世界に思わず心奪われそうになるが、直ぐに部隊のメンバーの位置を確認する。

二、三秒の探索の後、部隊のメンバーの位置がヘルメットのモニターに表示される。その場所はこの雲の海の下、どうやら先に目標の施設に向かったらしい。

体を下に傾けて、雲の海目掛けて突撃しその中を潜行していく。

この海を超えた先に……

海を超えた先にあったのは吹雪く大地。右を見ても左を見ても針葉樹林が広がっている。しかし、一点だけ林がなくなっている箇所があった。吹雪のせいで視界が定まらないがスコープを使いその場所を確認して見るとそこには人工物があつた。どうやらあれが今回の目的地らしい。

「他の奴らは……いた！」

スコープを使い、仲間がいなか確認する。僅かに探した後、オータムを発見した。スラストアーを使用して体を傾けてオータムに近づく。オータムも近づいてくる俺に気づいたのか手をあげる。

「オータム、スコールさんたちは先にいったか？」

「ああそうだゼロ。私たちは二人で行動しろってさ」

「そうか、了解した」

降下して行くに連れて、施設が大きくなっていく。少しだが心拍数が上がって行くのがわかる。

スコールさんたちが爆破して開けて侵入した入り口から俺たちも入って行く。ISが二機並んで走行するには十分な広さの廊下だ。

「歩兵部隊の突入まで残り三分、とりあえず誘拐されていた奴らはクーネさんが見つめてくれた、か」

施設内をランドホイールで走行すること数分、施設内の探索も一段落ついたところで俺たちはいったん停止している。

「んー」

何だろう、この違和感は。モヤモヤと俺の頭の中を漂っている違和感は。

もしかしたら何かまだ見落としている何かがあるのかもしれない。そう思いながら、五機のISが走行して得たデータを元に作られたこの施設のマップをヘルメットのモニターに広げて見る。

三階建ての作り

誘拐されていた子供がいた場所

……あれ？あの場所がない。もしかして違和感の正体はこれか？

「……なあ、オータム」

「どうしたんだ、ゼロ」



「ここが俺たちのいた施設と同じ様な場所なら殺しあうための場所があるはずだろ。でもなこのマップにはそれが書かれていないんだよ」

「ああ、そんなの見落としてるだけじゃないのか。この施設結構広いし」

「いや、このマップと上空から見たこの施設の形を照らし合わせて見たが見落としてる場所なんて一つもない。それに俺たちはこの施設の周から中心に向かう様に動いて行き、今は一階にいる。ならば何処にそれがあろうと思う？」

オータムは俺の問いかけに数秒間だけ考えた後

「……地下、か？」

「多分な。まあ、運良く俺たちは一階にいるからな。虱潰しに探していけばいつか見つかるだろう。オータム、スコールさんに連絡を頼む。俺はどうにかして見つけるから」

取り敢えず簡単なのはこの施設にいる人間を一人か二人捕まえて聞き出すのが一番手っ取り早いんだけど……その手のことに関しては何も習ってないし、見様見真似でやってみるかな。

そんな事を考えていると廊下のT字路から一機のISが飛び出してきた。

全身装甲、薄く地味な黄土色と緑を混ぜ合わせた様なボディカラーに、丸みを

帯びた両肩のアーマー。右腕には西洋風のランスが固定されている。そしてガスマスクを装着した上に安全ヘルメットを被ったかのような特徴的なヘッドパーツ。

「どうやら、俺たちが当たりだったようだな。奴を倒して情報を聞き出すぞ」  
「わかった」

二人同時にキアストレートを展開する。そして直様俺が敵に向かって突撃し、その背後からオータムが追尾していく。敵も右腕の槍を構える。

次第に距離を詰めて行き、互いの武器が相手に届く範囲にまではいる。

初手、敵からの鋭い突きが俺の喉元目掛けて襲いかかる。咄嗟にしゃがみ込みながら、キアストレートをランスに擦り付けるように動かす。金属同士が擦り合う高い音が響く。手元に近づくに連れて半径が増していくランス、そして手元まで近づいたところでランスを弾く。敵はランスを弾かれたことにより僅かに体制が崩れる。

そして、その一瞬を待っていたかのようにしゃがんだ俺の頭の上をオータムが撃ったビームが三発通過する。敵の両肩、腹にビームが直撃する。

敵は体制を立て直そうと後ろに下がろうとする。俺はキアストレートを持っていた右手を離すと、

右手を突き出しながら背中のスラストターを噴出して勢いよく飛び上がる。

狙うは一点、それは敵の顎。

敵の顎に吸い込まれるように俺の右手から繰り出した掌底が直撃する。敵が倒れこみそうになるが、力強く地面を踏みしめ、キツと此方を睨んでくる。

何だろう……このモヤモヤとする違和感は。

ISと言うものは機体数が467……いや、俺の000も含めれば468機しかこの世界に存在していない。それなのにそんな貴重ISがこんなところにいる事にも驚いているのに、なんでこいつはこんなにも弱いんだ？

最初の突きだつて俺が反応できるくらい遅かった。ISに乗るくらいならもう少し速くても良いはずだ。それなのに何故……

何か裏があるのか、それにこいつからは……

「まあ、後でゆっくり考えるか」

キアストレートを背後に投げ、腰につけられているデスペラートをそれぞれ抜き取り、両手に装備する。

引鉄に指をかけ、迷うことなく引く。その瞬間、銃口から大量のビームの弾丸が敵目掛けて放たれる。敵は腕をクロスして弾丸を顔から守る。

引鉄を引いたまま、ランドスピナーを使用してしゃがみながら後ろに交代していく。

ブン

空を切る音とともにオータムが俺の上を飛び越える。オータムの両手にはオータムが展開したキアストレートと俺が投げ渡したキアストレートが握られている。

オータムが前に出たのを確認すると、俺は引鉄から指を離してさらに距離をとる。

「ハアアッ！」

オータムは一方の剣で敵のランスを捌き、もう一方の剣で果敢に敵に対して攻撃をしかけている。

「~~~~~!!」

敵も押されたままではいるのは癪なのか、何かを叫びながらランスを深く構えオータムの胴体目掛けて突きを放つ。

「甘いー！」

放たれた突きを、オータムは剣と剣の刃で挟み込んで動きを止める。

ギリツ、ギリツと音を立てるそれぞれの武器。オータムは剣をハサミの様に使い、敵の武器を切断していく。敵もオータムの目的に気づいたのか、ランスを剣から離そうとするがオータムがそれをさせない。

そしてランスの耐久力が限界を超えたのか、ランスが剣によって切断される。

オータムはすかさず敵の腹に蹴りを入れた後、後方に下がる。

前衛後衛の交代、スラスターを噴出させ敵に向けて直線的な移動を開始する。

瞬時加速を行い、更に速度をましていく。そしてある程度の距離まで近づいたところで俺は跳躍する。そしてそのまま足を前方目掛けて突き出し、敵の顔面を狙う……いわゆるドロップキックという奴だ。

敵の装甲に足がめり込む感覚が、ISを通して伝わってくる。膝を曲げ、最大限の力を溜める。そして限界まできたところでバネを利用して脚を伸ばして敵を吹き飛ばす。

敵は床を転がりながら壁にめり込んだ。………めり込んだ？勢いよく蹴つて、ISの重量があつてもめり込むのはおかしいだろ。それによくみたら壁の一部が外れている。これはもしかしたら……

「オータム、運がいいかもしれないぜ」

「どういう事だ？」

「近づけばわかるさ」

オータムは近づいてきて、俺にキアストレートを投げ渡す。俺はそれを受け取り、ランドホイールを使用して敵の元まで近づいていく。

敵は気絶したのか、全く動かない。顔のパーツはドロップキックの衝撃で碎け

ている。

「……やつぱりな、どうやらこの先が地下に続いているみたいだな」

壊れた壁を見ながら俺は呟いた。

「行くのか？」

「いや、先にスコールさん達に連絡を………は？」

連絡しようとした矢先、俺はあるものを見て驚いた。それはスコールさん達全員がそれぞれ I S と戦闘を行っているということを見て。

地図にあるそれぞれの機体を表す印が I S との戦闘中のものになっている。

これは異常だ

「どういう事だよ、おい」

「どうしたんだ、I S と戦っているのがそんなにおかしいのか？」

オータムはこの事に気づいていないのか、問いかけてくる。

「オータム、今世界には何個 I S コアが存在している」

「467個だろ」

「そうだ、もつと正確に言えば俺の000も含めたら468個。そう世界に468個しかない。それらは全て管理されていて、保管されてある。まあ、俺たちの様に奪った奴らもいるがな」

「それでどうしたんだよ、今の話とこの状況に何か関係があるのか？」

「なんでそんな貴重なものがこんな辺境の地に四つもあるんだよ。おかしいとは思わな  
いか。それにさつき戦った奴も妙に弱かった。つまり、何でこんな辺境の地に四つも  
あつて、敵が弱かったかという」と

「……コア自体が量産されていて、ある程度の人間には配備されているってことか？」  
「多分な……取り敢えず、敵の機体を捕獲するぞ」

そう言つて、敵に向かって手を伸ばしたその時、モニターの左側に警報が表示  
される。俺は慌てて左側をみるとそこにはアサルトライフルを二丁構えている先ほど  
と同じタイプのISがいた。

「避ける、オータム！」

俺はオータムに向かって飛ぶ。そして廊下の壁に隠れながら、オータムの盾に  
なる様に抱きしめる。そしてその僅か後にアサルトライフルから放たれた弾丸が俺た  
ちがいた場所を通り過ぎた。

「サンキュー、ゼロ」

「気にするな、つてヤバイ」

倒された敵の指が僅かに動いた。その事に気づいた俺は行動に移そうすると  
敵が此方に切断されたランスをむけてきた。そして煙をあげながらランスが射出され、

俺目掛けて飛んでくる。キアストレートの腹でそれを咄嗟に防ぐ。

そこからの敵の行動は早かった。壁から離れると此方を一瞥もせず仲間元まで飛行して行く。オータムはそれを追いかけてようとしますが、敵の蹀のあたりあった筒が装甲から離れる。その数秒後、筒から光が漏れ出して当たり一面を光で包み込む。俺たちは目を塞ぎ、光が収まるのを待った。光が収まるのを確認し、目を開けるとそこには敵がいなかった。

「逃走用のスタングレネードまで用意していたのか……どうするゼロ、追う?」

「いや、捕まってる奴らの保護が優先だ。急がないと敵がここから脱出してしまう」  
「わかった」

壊れた壁まで向かうと、手を使って壁を剥がしISが通れるだけの隙間を確保する。

さあ、行こう。そう思った時、スコールさんからの通信があった。敵は倒したみたいだ。

『ゼロ、あなたはもう気づいてる?』

「敵がコアを量産してるかもしれないってことですか?」

『そう、よくわかったわね』

「こつちでも一機倒したんですけど、別の奴が増援にきてのがしてしまいました」



『安心しなさい、私が一機捕獲したから。貴方達は任務に集中しなさい』

「わかりました、俺たちはこれから地下に向かいます。場所は既にマッピングしてあります」

『了解』

その言葉と同時に通信が切られた。

「オータム、行くぞ」

俺は空いた壁から地下に向かった。

(あと何機いやがんだよ、全く)

地下は意外にも広がった。おそらく俺とオータムがいたのもこれくらい広がったのだろう。そう思いながら探索すること一、二分、俺たちは連れてこられた子供達の宿舎を発見した。

「似てるね」

「ああ、似てるな」

そんな感想を互いに述べてしまうほど、その場所は酷似していた。無機質な壁、通路の両側にそれぞれつけられている錆かけの鉄製の扉。作りまでも似ている。

「どうやって、扉開ける?」

「こじ開けるか、切るしか無いだろ。俺は右をやるから、お前は左側を頼む。救助班がくるまで何分だ?」

「だいたい、五分ぐらいつて」

互いに扉に近づいて行き、そして破壊していく。

一つ目を切り裂いた。中には一人の男の子がいた。多分白人系だろう。多分というのは汚れていてわかりづらいからだ。

男の子は俺に驚いたのか、ギャーギャー何かわめいている。それをライダが自動翻訳し、モニターに表示される。どうやらオランダ語の様だ。俺はオランダ語を話せないから、ライダを介して話す。俺が話した言葉は全てオランダ語に変換される。

「あー、取り敢えず落ち着け。私たちは君を助けにきた。頼むから素直に従ってくれ」  
ジェスチャーを交えながら、

男の子に説明する。すると男の子は次第に落ち着いて行き、俺の話聞く様になった。よかつた聞いてくれて。

1人目を救出し終え、次々と扉を破壊して救出していく。オータムの方も順調らしい。

そして最後の一つの扉をこじ開け、中に入る。中にいたのは女の子、年齢は俺と同じくらいだろう。腰まで届きそうなクリーム色の髪、本当は綺麗なのだろうが今は埃のせいで薄汚れている。少女は眠っているのかベッドの上で全く動かない。

俺は女の子を助ける為にベッドまで近づいて行く。そして薄暗くて入り口ではわからなかった顔を見て、俺は驚愕した。

「何で……ここに……」

彼女の顔は知っていた。初めて出会ったのは一昨年の夏、アリサ達と行ったハワイ。それから五年生に上がる前の春休みにアリサの家に来てた時にもう一度だけ。しかし、顔を忘れることはなかった。

ティファニア・ノーム

何故、ティファアがここにいる。いや、今はそんなことを考えている暇はない。

早く戻らないと。俺はティファを抱きかかえ、部屋から出た。

部屋から出ると既にオータムは全員を救出し終えていた。救助班がくるまであと少し。

「救助班はまだ見たいだな」

「そうだね、それよりその子はどうしたの？」

「ああ、寝てたから抱きかかえつれてー」

俺が喋り終わる前に何かが碎ける様な音がした。俺は音がした方を見るとそこにはI Sがいた。

先ほどの奴に似ているが、色や形が所々異なる。色は地味な迷彩色から淡い紫へと変わり、丸みを帯びていた装甲は何処か角ばっているように見える。恐らくカスタム機、もしくは後継機だろう。つまり、先ほどの奴よりかは格上。

敵のゴーグルが怪しく赤く光る。

考えている暇はない

「オータム、こいつらは任せた。あいつは俺が止めるッ！」

ティファをオータムに渡し、臨戦体制を取る。

「待てゼロ、スコールたちを待つんだ。もしくは二人がかりで」

「んな悠長なこと言つてられるか、それに誰がそいつらを守る………だからこいつは俺が倒すッ！」

敵が突つ込んでくる。俺はそれに合わせて加速して、敵にタツクルを決めてこの場からできる限り離す。敵が破壊してきた壁を通り過ぎ、さらに奥の廊下の壁にぶつかる。

廊下の壁にぶつかるとそれは碎け、より広い場所に出る。

やはりあったか、子どもたちが殺しあう為の場所が。

肌伝わってくるこのピリピリとした感覚。初めてかもしれない。

小学生だったころ何度も何度も喧嘩を売られ、全員を二度と喧嘩を売らなくなるように倒してきた。

亡国機業に入ってからは何度も戦闘のプロと模擬戦を行ってきた。

けれど今まで一度もこの感覚を味わったことはない。小学生のころは所詮子供喧嘩、亡国機業に入ってからこそ所謂模擬戦だけ。

どれも命をかけて戦ったことはない。

これが戦場

これが実戦

これが生命のやり取り

この感覚、気持ち悪くはない。寧ろ心地よいかもしれない。

「行くぞ……」

キアストレートを展開し、腰を低くして構える。剣道のような構えではない、模擬戦を行ううちに自然に作られてしまった構え。

部屋の中はかなり広い、流石に亡国機業のアリーナよりかは狭いけど、あの施設と同じように様々な建物が並んでいる。

互いに同時に動き出して距離を詰める。接近戦での間合いは奴の方がランスである分優れている。

関係ねえ

キアストレートを構え、ビームを三発撃つ。敵は地面を滑るようにかわして行き、どんどんと近づいて行く。

そしてやがて距離はなくなり

ガギンッ！

金属と金属がぶつかり、接触点から火花が散る。キアストレートを持つ左手に

敵の一撃の重みが伝わってくる。

キアストレットをぶつけたまま、剣を滑らせて敵との距離を詰める。右手を伸ばして首を狙う。敵はこれを弾いて反らす。

やはり一筋縄では行かないか。

弾かれた右手を流れるように動かしてデスペラートの引き金に手をかける。そしてそのままデスペラートを抜き取り、うちながら距離を取る。そしてそのまま建物の影に隠れる。

さて、どうしたものか。相手は俺と同格か格上、けれど少なくともスコールさんクラスの人間ではない。持久戦は不利かな？ エネルギの量が差があるのはわかる。

グレネードを展開、栓を抜いて敵めがけて投げつける。数秒後、爆発音が上がる。敵が上空に上がって行くのが、モニターで確認できる。

俺も敵めがけて飛翔する。敵は既に此方に向けて銃を構えていた。放たれるアサルトライフル、弧を描くような軌道で弾丸を躲しながら敵めがけて近づく。

キアストレットを振り、ランスに阻まれる。

そんなのは予測済みである。

キアストレットの刃の接続部分を外して、銃部分だけになったキアストレットを突きつける。



敵の右肩を掴み、できる限りの回数引き金を引く。何度も何度も撃つ。敵は振りほどこうとする。

「~~~~!!」

敵は左足を振り上げて、ミドルキックを放つ。

「イツー！」

体に衝撃が走り、キアストレートを手放してしまう。敵のミドルキックが俺の右横腹に食い込む。いくら装甲があるとはいえ、直撃は身体に堪える。胃から何かが逆流しそうになるが、堪える。

上げられた左脚を両手で掴み、回転し始める。スラスターによる加速を受け、さらに回転速度はましていく。

ジャイアントスイング、そして速度が最大に達したところで建物の目掛けて投げられる。

敵は建物の壁を突き破り、停止する。

両手に武器は持っていない、デスペラートでは決定力に欠ける。

ならば

俺の両手の回りが光、その光が止むと手は新たな装備に包まれていた。

グローブ状の新たな装備はリリースさんが作った試験型の装備、ゼロ距離からグローブにつけられた小型のスラスターによって加速された拳が、最大限の衝撃を相手に与えるもの。デメリットとしては敵に可能な限り接近しなくてはいけないということと、完全に腕が伸び切る前に当てなければ加速した反動で肘を痛めるということ。

その名も『青竜蝦』

「行くぞオッ！」

瞬時加速を使い、地面に倒れこんでいる敵まで数秒で接近する。

拳のスラスターから推進材が噴出し始める。両脚が地面につき、地面に罅が入る。右の拳を一旦引き、そしてスラスターからの補助により加速した拳を振り下ろす。

敵は慌ててスラスターを吹かせて飛びのいた。もう既に拳はとまらない。加速された拳はぶつかりめり込み、地面に罅を作り上げる。地面から拳を引き抜き、再び構える。

疲れた、いつもより息が荒い。心拍数も高い。だが不思議と辛さというものは感じはしない。寧ろ先ほどよりかだんだんと集中し始め、意識がクリアになって行っている気がする。

これが実戦というやつか、生命のやり取りはここまで俺に『生きている』という実感をさせるのか。

スラスターで再接近、拳を引いて小型スラスターを噴出開始。敵も俺に向けてランスを構える。狙いはカウンター……か。

敵を捉えられる範囲に接近完了、後はスラスターの加速を利用して一撃を叩き込む。

腕が敵の胴体に伸びて行く。敵は未だ動かない。てきの胴体に拳が入る、そう思ったその時敵に動きがあった。

バックステップで距離を取った。たったそれだけのことだが俺にとつてはかなりマズイ。このままいけば肘が完全に伸び切ってしまう、痛めてしまう。さらに隙ができてしまう。

何をすればいい。そう思うこともなく、自然に身体が動いていく。

右肘を曲げて拳を内側に巻き込む。それと同時に左肩を動かして回転する。拳のスラスターによる恩恵を受け、ほんの一瞬で一回転し終える。

一回転し終わると既に身体はもう一度拳を撃てる体制になっている。

拳を伸ばすのと敵がランスでついてくるの、どちらが早かったかはわからない。ただ一つ言えることは、敵のランスが俺の横腹を掠めたこと。

火花が散る。金属音になる。

けれど俺は拳を止めない。

今度は直撃した。敵の胸の部分に拳が当たり、敵の装甲にめり込んでいき、敵が後ろに飛んだ。

敵は空中で体制を立て直し、ランスを支えにしながら着地する。

仕留め損ねたか、でも敵も満身創痍なはず。もう長くは続かないだろう。仕掛けるなら次だとおもう。無論俺もだがな。

「ふうーッ」

身体の中の全ての空気を入れ替える様に深く深く深呼吸を行う。

敵がランスを前に突き出しら白煙と共にそれが射出された。狙いは俺の顔面、ならば顔だけを動かしてよける。

敵が近づいてくる。

敵が蹴り上げる。それと同時に敵の脚から筒状のものが飛んだ。

フラッシュグレネード

それに気づくのに僅かに遅れた。その僅かが反応を遅らせた。

フラッシュグレネードが炸裂し、中から膨大な光が漏れる。目を塞ぐ前にその光が届き、俺の目を眩ませる。

ゴグツ！

顎から突き上げられる感覚が来る。敵の掌底が俺の顎を上に向けてぶつける。どれだけの力で殴ればここまでの威力になるのだろう。

脚から力が抜ける

手が痺れる

意識が薄れる

敗北を意識した。このままいけば倒れてしまう。その後になんなるのかわからない。でもここで死んだら、もう二度と誰にも会えなくなる。

そんなのは

「しゃらくせーッ!!」

絶対に嫌だね

こいつを殺してでも生き残る

脚と手に力を入れる

目がやつと戻ってきた

思考能力入らない。後は全て本能に従うのみ

青竜蝦を収縮、首を動かして敵の拳を払いのける。敵は俺に攻撃した後、すぐに離れば良かった。けれどしなかった。

それは命取りになる。

自由になった顔を使い、敵の顔めがけて頭突き。相手がひるむ。

そして相手の顎を左手でつかむ。そのまま背後に回り込み、股下に腕を通して左手で装甲をつかむ。担ぎ上げて、両肩に敵を乗せる。顎を完全にクラツチして敵の身体を弓なりに反らす。

アルゼンチンバックブリーカー

決して逃さず、これで確実に仕留める。敵が暴れる。それに合わせて力の加減を変えて行く。

エネルギー残量の確認既に四分の一は切っている。

仕留めるならば今、上空に向けて跳躍。そして最高地点に到着した瞬間、下方に向けて瞬時加速。この機体が出せる最高の速度で両脚から地面に着地する。

着地の衝撃は俺の身体を通って、敵の背骨に伝わって行く。

それからどれくらいすぎただろうか、敵も抵抗するのをやめていた。

まだだ

まだ

まだ

まだ

もしかしたら敵は俺を騙しているのかもしれない、そうおもうと攻撃を緩めずにはいられなかった。

「おい、もうやめろ」

誰かから肩を叩かれた。肩を叩いた方を振り返るとヘルメットを外したシルヴィアさんがいた。

彼女の顔を見て、俺は安心して

「ゼロ、アンタの勝ちだ。そいつはもう……」

シルヴィアさんの声を最後まで聞かず、俺は意識を失った。



## シロノ

気づいたら白い部屋で寝ていた。あまりにも現実とはかけ離れている白色の空間。俺はそこにある真っ白なソファで寝ていた。

俺はここを知っている。No. 000のコアを初めて動かした時に連れてこられた部屋だ。

取り敢えず起きてみよう。そう思い、体を起き上がらせる。

「起きたのですね」

少女の声が聞こえた。透き通った可憐な声。それは俺にとって聞き覚えのあるものだった。俺が束さんの研究所にいった時に初めて聞いたISの声、そして俺がISを動かすきっかけになった声。

「白騎士……」

No. 001のコアの人格、真っ白なワンピースを着たその少女は俺に名前を呼ばれると、少し不機嫌な顔をした。

「その名前で呼ばれるのは嫌です。シロノって呼んで」

シロノ、それが彼女の名前か。テーブルを挟んでもうひとつのソファに

座っている彼女を見て。

「じゃあ改めて、こうして会うのは始めましてだな。シロノ」

「よろしく、一夏」

笑顔で返事をするシロノ。

そう言えば部屋の中を見回したが、あいつがいない。

「ゼロなら直ぐにきますよ」

「ゼロ?……ああ、No. 000の名前か」

「はい、No. 000だからゼロです。偶然にも貴方のコードネームと同じですね」

あれの名前がゼロねえ。偶然俺のコードネームと同じなんて、凄いな。

「それで、今日はなんで呼んだんだ?」

「ん……ええっと、ほらゼロが呼んだのよ。それなのにゼロの奴、何処かに行っちゃってね。ほらあの子ワガママでしょ。困ったよねー」

何処か動揺してるように見えるシロノ。なんでそんなに動揺してるんだ。

そう思っているとシロノの後ろに誰かが立っていた。

No. 000、ゼロだ。右手にはティーポットを持っており、左手で手刀を作っている。そしてそのまま左手でシロノの頭をコツンと軽く叩いた。

「いてっ………ゼロ、いきなりそれはひどくない?」

頬を膨らませながらゼロに抗議すシロノ。なんか意外だな。

「ひどくは無い。イチカを呼んだのはオレじゃなくてオマエだろ。なんとなく話がしたいという理由で」

「もう、それは言わないでつて言ったじゃん！

「オマエがオレのせいにしたからだろ。それより、紅茶だ」

ゼロはそう言いながら、俺たちの前に置かれてあるテーブルの上にあるカップに紅茶をそそいだ。そしてカップの近くに茶菓子としてスコーンを置いた。

目の前に置かれたティーカップを掴み、一口啜る。

美味しい。精神世界なのに凄い美味しい。ティーカップを一旦置いてスコーンを齧る。こちらも美味しい。

「……まだまだ弱いな。このままだとオマエは何もできないぞ」

ゼロが唐突に呟いた。

『何もできない』

この言葉の『何も』が何を示しているのか、俺にはなんとなくわかる。それは決して確信は持てないけど。

「わかってる。そんなの俺がよくわかってるさ。弱い、このままだと遅かれ早かれ戦場で死ぬだろうな。だからもつと強くなって見せる」

強い眼差しでゼロを見る。ゼロは持っていたカップをテーブルに置き、返すように此方を強く見てくる。

「……………そうか、なら頑張ってみろ。オレはオマエの側で見守っていてやる。困っているなら助けてやる。なんせ、オレはオマエの相棒だからな」

「ふふっ、ゼロも一夏には優しいんですね。その優しさを少しは私にも分けて欲しいな」

「うるせえ……………」

それから、取り留めのない色々な話をした。

数年振りに再会した友人たちのように、俺は今までのことをシロノに話し、それをシロノは頷きながら聞いていた。

そして時間が過ぎていき、俺は二人に別れの挨拶を済ませて眠りについた。

再び目覚めるとまたしても白い部屋だった。でもさつきまでいた部屋とは違い、薬品の匂いで満たされている。首を動かして周りの様子を伺ってみると四方を白いカーテンで覆われている。

(ここは……病室か？なんでこんな場所に)

なぜここにいるのか疑問に思いながら一夏はベッドから起き上がる。まだ目ははつきりとせず妙な気だるさが体に残っている。

「なんで病室にいんだよ。確か敵と戦ってそれでシルヴィアさんが来て……そうか、それで気絶してあの部屋にいたのか。なるほど」

あの戦いが終わって直ぐに気絶してからどれくらいの間が過ぎたんだろう。ここが本部の医務室だから少なくとも三時間は過ぎているはずだ。

「そうだ……ティファがいた。行かないと、早く、早くティファの元に」

ベッドから起き上がって、ベッドの近くにおいてあったサンダルを履く。近くにあった亡国機業の制服に着替えて、出口の扉に向かう。

(ティファがいるのは何処だ？まあ、誰かに聞けばわかるか)

扉の前に立った時、扉が一人で動いた。この扉は自動扉では無いので一人に開くことはない。誰か入ってきたのだろうか。

「あれ？一夏、起きたんだ」

オータム、俺と同じ施設にいた橙色の髪の少女。今は同じ部隊に所属している。

「ああ、今な。身体はどこも異常ない」

「そう、なら良かった。心配したぞ、シルヴィアさんに担がれてお前がつれてこられた時には」

「そうか、すまない。それで俺はどれくらい寝てた？」

「えーっと、確か六時間ぐらいかな」

「そうか、ありがとう」

六時間か……ならティファが起きてる頃か？

早くいかないと。

「俺がお前に渡した女の子、今どこにいる」

「三つ隣の病室だけど、どうして？」

「いや、なんでも無い。ありがとう」

三つ隣か、行くか。

オータムの横を通って病室を出ようとした時、オータムに肩を掴まれた。少しだけ気恥ずかしそうな顔をしながらオータムは。

「あの……その……無事で良かった」

「うん、ありがとう」

## ティファとの再開

病室のベッドでティファは寝ている。初めて会った時よりも成長した顔を見ながら、初めてあつた時よりも艶の落ちた髪を優しく撫でながら、俺は彼女が起きるのを待っている。

病室のベッドの側に椅子を置いてそこに腰をかける。

最後に彼女と会ったのは、去年の四月だ。春休みを利用して、アリサの家にティファの家族たちが

来た時以来だ。あの時は皆で色んなところに出かけたな。

まあ、今は思い出に浸っている暇なんてないか。さつきまで起きていて泣き疲れ寝ているのだろう。目から頬にかけて涙の跡が見える。

安心させたい。

無事だったと伝えたい。

心の奥から感情が漏れ出してくる。喜び、自責、悲しみ、様々な感情が入り混じっていくのがわかる。自分ですらこの感情をどう処理すれば良いのかわからない。



「……ん、んん」

彼女は僅かに声を漏らし、そしてゆっくりと眼を開けた。

何と声をかけたらいいのだろうか。わからない。けれど俺の口は既に動いている。彼女のために。頭では決まっていない。けど心は決まっているのだろう。

「おはよう、ティファ」

何と酷く、情けないのだろうか、己自身が嫌になつてしまう。

何故もつと彼女を安心させる言葉をかけなかつた。

「……………イチ……………カ？」

呆然とした様子の彼女に何と声をかけたらいいのかがわからない。

瞳に涙を浮かべ、今にも泣きそうになるティファ。泣きそうになつたので、安心させようと思つたのもつかの間、彼女がベッドから起き上がり、俺に抱きついてきた。「良かった！生きててくれね良かった！アリサから居なくなつたつて聞いたから凄く心配したんだよ！」

溜まつていた感情を吐き出すティファ、込められていた者を吐き出し、心の奥から喜んでいるのだろう。

居なくなつた……か、アリサは俺がまだ生きているつて信じてくれているの

か。あいつらは死んでると思つて墓に名前まで入れたのに。

「怖かった……怖かった！ パパもママも知らない奴らに殺されて、私も誘拐されて！ 知らない場所で殺し合いして……だから！ もう……」

俺に抱きついたまま、ティファは震えながら泣き始めた。

俺の履いている制服のズボンに大粒の涙が零れ落ちる。零れた涙はズボンに染みを作り、また零れ落ちる。

「大丈夫だ。俺がいる。だから安心して良い」

涙が零れないようにティファの顔を胸元に寄せて強く抱きしめて、優しく、子供をあやす母の様に頭を撫でる。

「……ありがと……ありがと」

むせび泣きながら、ティファは声を出す。

頭を撫でながら、優しくと彼女を抱きしめる。数分で彼女は泣き止んだ。ゆっくりとティファを離し、面と面を向かい合わせる。

「大丈夫か？」

「ありがと、イチカ。まだきついけどだいぶ落ち着いたよ」

ニコリと笑いながら返答するティファ。けどその笑顔も無理をしているのか少し引きつっている。

「……そうだ、イチカ。ちよつと近づいて」

「ん? どうした」

椅子をベッドに近づけてティファに近づく。

「よいしょ」

両手で俺の顔を動かさないように固定するティファ。そして自分の顔を俺の顔に近づけ

唇と唇が触れ合った。

一瞬にも感じ、果てしなくも感じた。意識が元通りになると自然とティファの背中を掌で撫でていた。

変化があつた。

舌が口の中に侵入し、俺という存在を確かめるかのように口の中を動いていく。

それから数秒後、どちらから口を離れたのかわからない。

ゆつくりとゆつくりと時間が過ぎていく。気恥ずかしさが心を満たし、何か声

をかけないと思う気持ちか俺を押し出す。

「えへへ、初めてなんだよ、これ。イチカは？」

答えにくい。キスをしたのはこれで二度めだ。始めてはアリサとしたキス。

不意にされたそれは暖かかった。

だが、嘘をつくわけにはいかない。

「……………いや、二回目だ。初めてはアリサとした。誘拐される前に、アリサからしてきた」

「……………そう、なんだ」

不機嫌そうにして悲しそうな表情をしながらティファが返事をした。

「やっぱり最初はアリサなんだねえ。ちよつと不満」

頬を膨らませながらティファはそっぽを向いた。

それから彼女を宥めるまでかなりの時間をかけた。

これから頑張らないとな、俺。

## 量産コア

「……なんですか、これ？」

ティファの見舞いを終えた後、俺はスコールさんに呼びだされた。正確に言う  
とスコールさんとリリースさんの二人からだが。

リリースさんの執務室にきた俺はスコールさんから四角い箱の様な物を渡され  
た。ISのコアのようにだが声を感じない。

「コアみたいですけど」

「やっぱり声を感じないのね。リリースが聞こえないって聞いたから、あなたを呼んだの  
よ」

椅子に座りながらスコールさんが話しかけてくる。リリースさんはリリースさん  
で、デイスプレイの中で座っている。

それにしても声が聞こえないか、束さんのコアは全て声が聞こえるから。もし  
かしてこれは。

「あの施設にいたISのコアですか？」

「察しがいいねえ」

リリースさんが丸が書かれてあるプラカードを掲げた。

なるほど、確かにあれは声が聞こえなかった。それに数も多かった。

「声が聞こえない……………いや、違うな。心が無いんだと思います。000や001の様  
様に心が無い。というより寧ろ心を排除していると言っているのか？」

俺の考察にリリースさんはニヤリと笑う。

「私もそう思うな。心という余分なものを排除して作り上げられたISコア、私の予想  
だがこれは量産型だと思う。それも篠ノ之束が関与してない」

量産コア、今世界中がそれを作り上げるのに必死になっている物だ。そんなも  
のを束さん以外の誰が作ったんだらうか。

「それはあなたでも作れるの、リリース？」

「そうだな、このコアについてなら六割がた解析がすんでいる。数日後には作り始める  
ことができるだろうな……………でも、もしこれを一から作るとなれば少しキツイかな。  
それだけこれを作った奴が凄いということだろうな……………ネオにはどんな開発部がある  
んだ。技術だけなら相当だぞ」

リリースさんでも作るのが難しいか、これを作った奴は一体どんな人間なんだ？

「そう、なら量産する準備をしておいたほうがいいわね。今度の幹部会で議題にあげま

しょう」

「そうしよう」

量産コアか……俺は使いたくないな。俺には000ゼロがあるし、あれとは搭乗者としての相性が良くなさそうだ。

「もしこれが各国に知れ渡って量産されたらバランスが大変なことになるな」

「そうねえ、各国のIS保有数が増えるのはもちろんのことだけど、誘宵グループ以外にも民間の企業でISを保有する会社が増えるわね」

今現在、ISコアを保有している企業は皇さんが代表を務める誘宵グループしか存在しない。それ以外の企業はISの機体のボディを保有することはあってもコア自体は持っていない。

倉持研究所やデュノア社のような企業も作っているのはボディであり、コアはそれぞれの所属している国から貸し出されるのである。

しかし誘宵グループは他とは違い、自ら機体を開発し、自らが保有しているISコアを使用している。それにより、国との関係を持つことなく独立することができる。

誘宵グループはモンドグロッソに出場させる競技用のISを開発をしているのは勿論の事だが、主に開発しているのは災害時の救助用ISや深海や極寒の地などで

の活用される極地用のISだ。

何故誘宵グループだけがISコアを保有しているかと言うと篠ノ之束の存在が大きく関わっている。コアの分配をする際に篠ノ之束が誘宵グループだけが会社としてコアを持つ事を許可したのだ。

「下手したら何処の企業もコアを持つわね」

スコールさんのいう事は最もだ。製造方法を知らないオリジナルとは違い、製造方法と資源さえ知ってしまえばいくらでも作れる。そうなれば隠れて製造する奴らも出てくる。バランスが崩壊するのも時間の問題だろう。

『おい』

少し不機嫌なゼロの声が聞こえる。俺は今待機形態のプレスレットをつけてはいないからこの近くにそれがあるんだろう。

俺に伝えたい事があるらしく、

ゼロは俺に話しかけたらしい。

「そうだな、だが所詮劣化型の量産コア。オリジナルのコアに勝る部分など量産性しかない。それ以外はオレ達の格下だ………って000<sup>ゼロ</sup>が言ってます」

ISの性能の一部はコアに依存している。例えば武器を収縮しておくための拡張領域などはコアによって差がある。



「そうか、やはりこれは劣化品か……だが使わなければならないだろう」

リリスさんの言葉には同意する。相手はこれを使うのだから自然と敵の数は増える。だからそれに対抗するためにこちらでも使わなければならない。

「……話が以上なら俺は失礼させてもらいます」

「お疲れ様、一夏。初めての任務、お疲れ。無事で良かったわ」

「ありがとうございます。では」

踵を返し、部屋を出て行く。

これからの戦いはより過酷になる。もつと鍛えないと。

「どうすんだあ、糞爺。あの量産コア、亡国機業の奴らに盗まれたじゃねえか」

何処かの一室、地図にも乗っていない極秘の建物の中に存在する部屋に二人の男がいた。

一人は中年の銀髪の男、ヨーロッパ系の人種の男。白衣を身に纏い、ソファアに座りながら、もう一人の男に話しかけている。

「……別に良い、寧ろあれは広めるために作ったのだ。あれを世界に広めれば、農らの計画も早まるというものだ」

もう一人は老人、皺のあまりついてない顔つきに年齢の割に鋭い目つき。白色の髪は禿げている部分などはなく、二十代から三十代のそれに近い量がある。

「呑気だねえ」

「うるさい奴だ。誰のお陰で生きていると思ってる。死にかけの貴様をドイツの研究所から拾ってきてやったのは誰だったかのう……」

「あーあー聞こえませーん。なあんでこんな目にあつたんだらうかなあ、俺」

両手の人差し指を耳の穴に突つ込みながら叫ぶ中年。その姿はまるで無邪気な子供のようだった。

「ふん、知らん。俺は貴様の頭脳を高く評価してるんだがな」

「ほぎくなよお、爺。量産コアなんて作りやがって」

「そんなことはどうでもよかろう貴様にはこれからも働いてもらわなければならない。儂らの為に。そして理想郷のために」

## 妹との隔たり

「ダメだ」

「なんでお兄ちゃんはおわかってくれないの！」

俺は今、マドカと口論をしている。理由は簡単だ。マドカがモノクローム・アバターに入隊しようとしているから、俺がそれを止めているだけだ。

マドカはスコールさんに入隊を直談判したらしいが、そのスコールさんが俺の許可が無い限り入隊させないと言ったらしい。

俺としてはマドカには戦ってほしくない。理由は簡単だ。マドカが傷ついてほしくないから。戦場では何時死んでもおかしくはない。そんな場所にマドカを送りたくは無い。

「俺はお前に傷ついてほしく無いんだよ」

「私だってお兄ちゃんが傷つくのを見たくない！」

あの時の、最初の任務や廃墟の街でお兄ちゃんを見つけた時、私辛かったんだよ。見たくなかったんだよ、意識も無く運ばれるのを。嫌なの、何も出来ないのが……自分が嫌なの」

自分の両手で顔を抑えながら、マドカは泣き出した。

「…………マドカ」

頭では理解している、マドカの考えを理解すべきだと。だがそれを心が許さない。

だから俺が言える言葉は——

「とにかく、俺はお前に戦ってほしくない。マドカにはここで安全でいて欲しいんだよ…………話は以上だ」

マドカから背を向けて俺は歩き出した。マドカが何か言ってたが、俺は聞かないようにした。それでもしないと……………

「機嫌悪いね、一夏」

「あ？そうか」

「うん、食べ方が何時もより雑だよ」

場所は移り変わり、昼の食堂。今はルームメイトの四人と一緒に食事をとっている。ジークは俺に話しかけ、グレイは人より速く食べ、アドルフは機械的に処理していくように食べている。

亡国機業の食堂は亡国機業自体が世界各国から人が集まっているのでメニューの種類がバラエティに富んでいる。

和食、洋食は言うまでもない。その他にも各国の料理が期間限定で販売されていたりする。

フェアも開催されていたりする。

その他にもお金を払うことで飲食することができる喫茶店、バー、居酒屋、コンビニなど様々なものがある。

「少し、妹の事でな」

ランチを食べながら目の前にいるジークに話しかける。

「マドカちゃんだっけ、彼女がどうしたのかい？」

「ああ、いきなりモノクロームアバターに入りたいと言ってきたんだよ。でも俺としてはなんとか止めたいんだよ」

「僕は妹がいらないからわからないから妹についてはよくわからない。けど、妹さんは妹さんでなにか考えているんだと思うよ」

「ああ、それはわかっているんだがな。だからどうしたらいいか俺にはわからないんだよ。あいつの意志も尊重してやりたいんだけど」

「つーかよお、妹ってそんなに大切なもんなのか？俺さ、家族いなかったからわかんないんだよねえ」

飯を食べ終えたグレイが話に入ってきた。

家族がいなくてどんな生き方してきたんだよこいつは。

「大切だ。勿論。だからこそ、戦場に出したくねえんだよ」

「へえ、そんなもんなのか。俺には家族はいなかったけど、一緒に暮らす仲間はいたけどな。お前はどうかなの、アドルフ。家族と違って大切なの？」

グレイの問いかけに、アドルフは作業を中断する機械のように食事をやめた。

「……わからないな。俺には家族や友達と呼べるような奴らは周りにはいなかった。周りにいたのは競い合い、兵士になるのが生まれた時から義務付けられた奴らだったから

な。だから俺には家族愛なんて知らないし、わからない」

アドルフの話に思わず俺たちは絶句する。

アドルフは俺たちの中で最も生い立ちが悲惨なのかもしれない。生まれた時から兵士になるのを義務付けられ、周りの奴らと競い合っていた。

だが、なら何故今アドルフはここにいるのだろうか。生まれた場所でなにかあつたのだろうか。

「……だが、今お前たちと一緒に暮らしているのは楽しいな。共に競い合う、前の施設の時の敵同士では無く、仲間として。初めてわかった気がするんだよ、友情っていうやつがな」

少しだけ微笑んで話したアドルフに俺たちは少し微笑ましくなった。

「イーチカ」

不意に名前を呼ばれ、後ろを振り返るとそこにはティファとその後ろにオータムがいた。二人とも亡国機業の制服をきている。

あれからティファはモノクローム・アバターに入隊し、今現在は俺たちと一緒に訓練を受けている。

「何かようか、ティファ」

「えーつとね、シルヴィアさんが喫茶店に来てっさ。以上」



ニコツと笑ってから、ティファは離れていった。  
シルヴィアさんからの呼び出しか、なんだろう。

「珈琲でいいか？」

「大丈夫です」

「マスター、珈琲二つ」

飯を食べ終えた俺はシルヴィアさんのいる喫茶店についた。喫茶店にはすで

にシルヴィアさんがいて二人がけのテーブルに座っていた。

亡国機業には食堂の他にも個人で営む店やコンビニに近いものがある。そこには実働部隊を引退した人などが働いている。俺としては

はマドカにはそちらに就いて欲しかったのだが。

「それで呼び出したのは何ですか？」

「ん、ああ。少し強情で素直になれないアホと話をしようと思つてな」

「イラつとくる言い方ですね」

「イラつとくるということは、自分が強情なアホつて理解してることだ」

テーブルに二つの珈琲が置かれる。俺は砂糖を入れ、シルヴィアさんは何も入

れずに飲んだ。

「あんただつてわかってるんだろ、このままじゃダメだつてさ」

「……………マドカの事に関して言えば俺だつてあいつの意見を尊重したい。でも俺はあいつが戦いで傷つくのを見たくないんです」

「それであんたが傷ついて帰つてくるのをマドカの奴は指を加えて泣いて見てろつてか？ あいつだつて怖いと思うぜ、戦いに出るのが。それでもお前が傷ついているのを黙つて見てられないんだろうな」

シルヴィアさんの言っていることはわかっている。でも俺はマドカが戦場に

出てきてあいつが傷つくのは嫌だ。

「俺は……俺は弱いです。だからあいつを守れるのかわからないんです。戦場に出てきたあいつを。あいつが傷つくのが恐いんです。あいつが戦場に出るなら、俺はもつともつと強くないといけない。でもそれができるか俺にはわかんないんです」

思わず本心を口に出した。俺が弱いからマドカを心配させてしまった。だからもつと強くないといけない。あいつに心配されないようにするために。でもそれができるかどうかかわからない、恐い。俺がマドカに反対する理由の一番は俺自身が弱いからだ。

「はあ、あんたはやっぱリアホだねえ。悩みがあるならあたしたち大人に相談しなよ。あんたの周りには立派な大人がいるんだよ。それともあたしたちが信用ならない？強くなりたいたらあたしが力をかしてやる。あんたもまだ若いんだから溜め込まずに外に吐き出していいんだぜ」

「……すみません。確かに強情でした。昔から周りに悩みを打ち明けられる大人がいなかったんで自分で悩んでばかりだったんです。でも、今は違いますよね……シルヴィアさん、俺を鍛えてください」

おれが欲しかったのは他人からの後押しだったのかもしれない。自分では決められないから、他人に後ろを押ししてもらおう。そんな無責任なことを。でも結局、最後

に決めたのは俺だ。だから、言い訳はしない。

「勿論だ。そうと決まれば、行く場所があるだろ？」

「わかってます、失礼します」

残っている珈琲を全て飲み干して、席を立ち上がる。シルヴィアさんに一礼して俺は喫茶店を後にした。

あれから三十分後、俺はマドカを見つけて二人で話し合える場所に来た。

「マドカ、俺はお前がモノクローム・アバターに入隊することを認める」

「本当!?!」

「ああ、でもこれだけは言っておく、お前の俺が傷つくのを見たくないって言ってくれた

のは嬉しい。けど、お前はお前の命を一番大事にしてくれ。俺じゃなくて、お前自身を大切にしてくれ。俺が言いたいのはそれだけだ」

「……………わかった。ありがとう。今からスコールさんの所に行ってくる」

マド力は後ろを向いて歩き出した。しかし、数歩歩いたところで一度止まり、こちらを向いた。

「でも、私はお兄ちゃんを守るよ」

その言葉を言っつて、マド力はまた歩き出した。

安心しろ。そうならない様にお兄ちゃんはもつと強くなるから。

## 市街戦闘

## 1

「カタパルト、発信準備完了。ゼロ、カタパルトに乗って」

「了解。行くぞ、ゼロ」

俺は自分の右腕につけたブレスレットを触りながら自らの相棒の名を呼ぶ。そしてその瞬間、ブレスレットが光り、俺の体を包み込む。

そして直ぐに光りは収まると、そこには鉄の兵士が現れる、

灰色を基本色とした全身装甲、ライダーと比較すると貧相な鎧、武装の数も少なくハンドガンとナイフのみ。この機体の名前は『ウルテナ』、亡国機業によるISでの戦闘の新たな可能性を示す機体。おれとスコールさん、そしてシルヴィアさんの三人に与えられた機体。

「アサルトアームズ展開」

ウルテナの周りに螢火のような粒が現れた。それはやがて形になる。

灰色の装甲に新たに赤色の装甲が装着された。薄い装甲に新たな装甲を足すことにより、防御力と速度をあげること成功した。

これこそ新たな可能性。一つの機体による装備換装をする事で、ライダーの万能性とは異なる特化型の性能を発揮させるもの。装備を変えることにより近距離や遠距離への対応を可能にする。

俺の装備は接近戦用のアサルトアームズ。長剣や大剣はもちろんのこと、ナツクルガード、ショットガンなどもある。

カタパルトに足を乗せ両膝を曲げる。ハッチが開いて外の景色を確認することができる。

「ゼロ、ウルテナ・アサルト。出撃します！」

カタパルトが前方に動きだし、身体に不可がわかる。一瞬にしてカタパルトの外に飛ばされた。眼下に広がるのは普通の街、アスファルトの道路に鉄筋コンクリートの建物。俺たちはこれからこの街で戦う。

今回の任務は内戦の鎮圧、政府軍と革命軍との戦い。とは言っても俺たちは政府軍ではなく革命軍に手を貸すことになる。

なんでも政府軍はネオとつながっており、革命軍は俺たち亡国機業とつながっているらしい。そこで勢力を拡大するために革命軍に力を貸すらしい。そしてもしかしたらネオの方からもIS部隊がくるかもしれないらしい。

だがこれは前代未聞だ。市街地でのISの戦闘など今まで行われたことがない。一

一般人の避難はすでに完了しているために一般人に被害が及ぶ心配はしなくて良いらしい。

それに今回の任務は俺にとっても大事なものだ。今回の任務はマドカとティファが初参加する。マドカにはエムと言うコードネームが与えられた。なんでも兄妹の情を出さないようにするためのらしい。二人とも後方支援型だが、何が起きるのかわからない。あれから俺は色んな人に鍛えて貰った。たくさんの任務を経験した。最初の頃は違う。

『ゼロ、聞こえる』

スコールさんからの通信。

「聞こえます」

『今回の任務は敵の掃討、私達とは別の部隊も動いているから気をつけなさい。それとネオのI Sを確認できたらしいから注意して』

今回の任務は普段より規模が大きく、二つの部隊による合同任務になっている。因みにだがあの時手に入れたコアは量産することに成功しており、それぞれの部隊に配られており、今回の任務のような作戦をできるようになった。

「大丈夫です。それでは市街地に降下します」

地上戦闘用のランドホイールを倒す。地上までの距離は百メートルを切っている。



二台の戦車、政府軍の兵士の姿を確認できる。

こちらにはまだ気づいていない。攻めるならば今、左肩に装備された片刃の赤い大剣を肩から外して手に持つ。

一台の戦車に向けて瞬時加速。強襲アサルトの名前の通り、この機体は直線での最高速度が今までのものよりも速い。

重力による自由落下を合わせたその移動は瞬く間に戦車との距離を詰めてしまう。

戦車の上に着地、金属と金属がぶつかり激しい音を立てる。兵士が此方を振り返る。ゴーグルやマスクのせいで顔が見えないがわかる、相手は驚いている。ならばここで潰そう。

「ハアッー！」

大剣を甲板の上から操縦席に向けて突き刺した。大剣は甲板苦戦しながらも貫通し、操縦席まで届いた。

兵士たちが怯えている。此方に向ける銃口が下がってきている。

《CAUTION!!》

警告、ハイパーセンサーを使い、周囲の確認。後方から戦車の主砲が此方に狙いをつけている。ISに絶対防御があると云えど直撃はただではすまない。

素早く大剣を抜き取り、横方向に跳躍。僅かに遅れて戦車の弾丸が今までいた場

所を通過。

コンクリートの建物の壁をランドホイールで走りながら、戦車に向けて接近。戦車も此方を狙うために砲塔を回転させるが俺の動きに間に合わない。ISの武器はこの小回りの良さと言える。

壁を蹴って接近、砲塔の上に着地して砲塔に凹みをいれる。そしてもう一度跳んで甲板に着地。そして大剣に体重を乗せて、思いつき振り抜いた。

美しい断面を作り上げられ、砲塔は二つに別れた。戦車の中から兵士が飛び出し、銃を構えていた奴らと一緒に逃げ出した。追撃はしない。俺は兵士がいなくなった操縦席に手榴弾を入れて蓋をして、飛び降りる。

くぐもった爆発音が聞こえた。

「次は……」

センサーを確認、既に数機のISが政府軍と交戦をしているみたいだ。基本的にツーマンセルで行動してるらしいな。

敵機発見、此方に近づいてくる。大剣を構える。敵の姿が見えた。俺らと同じ全身装甲タイプ、顔つきから見てもあの施設にいた『ガスマスク』と同じだろう。ガスマスクは俺らが読んでる通称で正式名称はわからない。

どうやらネオの奴らも出てきたみたいだな。

大剣とランスのぶつかり合い、峰の部分に備え付けられた取っ手を駆使しながら素早く攻撃を繰り出していく。

横薙ぎに払われたランスを大剣で受け止める。罅迫り合いの形になる。今の俺なら力で押し返すことができるだろ。だがそれでは攻撃に繋がらない。

罅迫り合いを繰り広げていない方の足を振り上げてハイキック、空いていた頭にぶつかり敵は飛ばされる。

追撃は至ってシンプル転がる敵に向かって、軽く跳躍して両脚で踏み潰す。その際に瞬時加速を行い、威力を上げる。

音がした。装甲に罅を入れ、余った衝撃が敵に伝播していく音が。

「……………うお……………お」

少しだけ呻き声を上げた敵は動かなくなった。動かなくなった敵を一方的に痛めつける。大剣で装甲を何度も切り裂き、ショットガンで敵を何度も撃ち、拳で顔を何度も殴った。絶対防御が発動しようと関係ない。それが発動しなくなり、解除されるまででぐった。

ISを解除され、ISスーツを身につけた女性が現れた。俺はその女性の心臓にナイフを突き刺した。そしてすぐにナイフを抜き取り、女性のISスーツで血を拭き取り収納する。

敵は殺さないといけない。殺さなければ仲間被害が出てしまう。だから容赦はしない。こいつらにも事情があるかもしれないがそんなの知ったことではない。同情はしない、俺とこいつが敵だから。

「……ん、交戦中？場所は近い、行くか」

交戦中の表示が出されているのは今いる道路の近く。ランドホイールを駆使すればすぐに到着できる。背中のスラスタールとホイールを使い、移動する。

視界の隅に表示されるレーダーを頼りに進んでいく。

発見、二体一で互角のようだ。此方が二、相手が一。俺の存在に気づいてはいないようだ。

一気に加速、背後から敵に近づくと、味方は此方に気づいたようだ。少しでも相手の気を引くために闘っている。

大剣を持ち替え、投擲。槍投げの様に真つ直ぐ跳んでいくそれは吸い込まれる様に相手の頭に直撃。

敵が此方を振り向く。だが俺は止まらない。敵とはぶつからずに通り過ぎながら相手の腰に両手を回し、膝を曲げて後ろに跳躍。美しいアーチを描き、相手を頭から硬いアスファルトに叩きつけた。

ジャーマンスープレックス

プロレスの技ではあるが、叩きつけられる先はリング上ではなくアスファルト。通常とは比較にならないほどのダメージを与える。

そしてこれは生身でのプロレスではなく機械であるISの戦闘。一撃で終わりはない。

スラスターを吹かせて強引に体制をかえ、相手ごと持ち上げる。そしてもう一撃のジャーマン。

相手は動きを止めた。殺し合いにレフェリーはいない。ただ、相手を殺した方の勝利、他にルールはない。

起き上がり、大剣を拾ってから味方に近づく。

「大丈夫？」

「ありがとうございます」

「次行くから、他の人と合流して」

「わかりました」

スラスターを点火、俺は空に飛び立った。

## 市街地戦

## 2

左手に大剣、右手にI S用ハンドガンを構えて敵と対峙する。

鋭く突き出されるランスを剣の腹で受け止め、右手のハンドガンで敵の顔に突きつける。敵は顔を動かすが、銃は囷。右足にローキック、僅かに体制が崩れた所を後ろ回し蹴りで吹き飛ばす。

センサーが上空より飛来する機体を確認、味方機、首を少しだけ上に動かして味方機を確認する。

そしてまた首を元に戻し、敵に接近。今度はハンドガンを取縮する。素早く懐に潜り込み、大剣を下から振り上げる。振り上げられた大剣は敵に掠りはするが直撃はしない。

下から上に振り上げる最中に大剣を手から離して上空に放り投げる。僅かだが敵の意識が剣に向かれた。そこで腹に一撃、しかしそれを防がれる。

「ナイスだ、ゼロ」

上空からシルヴィアさんが落下してきた。俺と同じくウルテナに乗ってはいるが装着しているアームズが異なる。確かシルヴィアさんのは近接特化の俺とは違う、平均的

に優れているバランスアームズ。

シルヴィアさんは俺が投げ渡した大剣を振るう。背中を切り裂き、敵の推進機を破壊する。

翼は腕いだ。シルヴィアさんは大剣を地面に突き刺し、俺と同じく拳を構える。

挟み撃ち状態でのインファイト、俺の攻撃をかわせば背後からシルヴィアさんの攻撃を喰らい、背後からの攻撃をよければ俺に殴られる。

サンドバッグになった敵は目に見えて動きが鈍くなってくる。攻撃を裁こうとしていた手もだらんと下がっている。

「ゼロ、行くぞッ！」

シルヴィアさんが敵の背後から臍の辺りを両腕でホールドする。放つのはジャーマンスープレックス、しかし俺に合図を出したと言うことはツープラトンを仕掛けるのだろう。

しやがみ込んで、スラスターを噴射準備、シルヴィアさんが持ち上げると同時に点火。敵の脇を両足で蹴る。加えて敵の両足を掴む。それと同時にシルヴィアさんが敵を持ち上げる。

半円を描き、敵が地面に叩きつけられた。スラスターを利用した高速ジャーマンズープレックス、その威力は伊達ではなかったみたいだ。

互いに敵から離れる。

「ゼロ、今ので何機倒した？」

「四機です。数が多つすね、今までで最大の数ですな」

「ああ、どうやらネオも相当な数導入してるらしいな」

「俺はまた別の地点に向かい——」

交戦状況を確認、脳に電流が奔る。それからの行動は素早い、近くに刺さつてある大剣を抜き取り、肩に装着。ランドホイールを展開し、ホイールを回転させる。

「別の場所に向かいます！」

スラストを噴射して初速度をあげる。ランドホイールでアスファルトを駆け抜ける。選択するのは最短径路、一秒の無駄も許されない。

交戦中の機体を確認、ライダーIIとガスマスク。ライフルを持ったライダーがガスマスクに押されている。

青竜蝦を両手に展開、瞬時加速を使用して両者に割つて入る。

「どけえええッ！エームッ！」

エム、マドカが俺の声に反応し、敵との距離を離す。敵も此方に気づいたが関係ない。突き刺しにくるランスを拳で上に弾き、もう一方の腕で敵の顔に一撃。

流れるようにリバーブロー、ガゼルパンチのコンビネーション。



体で無限を描く。体の動きと青竜蝦のスラスタにより加速された拳で殴打の往復。

デンプシーロール

激しい連激は敵を休む事なく追い詰めていく。

「終わりだッ！」

右の一撃をわざと空振りにさせて一回転、そして遠心力を利用したストレート。胸を抉る一撃、そのまま敵を地面に叩きつける。

「ガッ！」

敵の胸部装甲に罅が入る。敵が動かなくなる。俺の兵装の中でもトップクラスの破壊力を誇る青竜蝦による殴打は敵を簡単に倒した。青竜蝦を解除してエムに近づく。

「ごめん、ゼロ。気づいたら敵に近づかれてた」

申し訳なさそうに話すエム。

「気にするな、近くにシルヴィアさんがいるから合流しろ。俺は別の場所に向かう」

「……わかった」

少しだけ不満そうにエムが返事した。

後方より敵機の反応。上空からこちらを狙っている。振り向いて敵を確認。

その位置は不味いぞ。

敵機が爆発した。正確に言うとは飛来し、直撃した砲弾が爆発したのだがな。敵も手負いだっただろう。普通ならあんな砲弾をかわせて当然だ。

跳躍してアツパーを爆発の影響でふらつく敵に一撃、さらに両脚を掴む。そしてそのままリバースパワー・ボムでさっきの敵の上に叩きつける。

「良いアシストだったでしょー」

無線でティファが話しかけてきた。そして俺の真横に着地。ライダⅡを身に纏い、背中に自分の身長並みの砲撃用の火器を背負っている。

「ああ、助かった」

「ふふん、もつと褒めなさい」

腰に手を当てて胸をはるティファ。俺はティファの頭に軽くチョップする。

「あまり浮かれるな。それよりティファ、エムを連れてシルヴィアさんと合流しろ」

「了解、ほらエム行こう」

ティファはエムの手を掴んで走り出そうとするが、エムが俺の方を向いたまま止まっている。

「頑張つて、お兄……………ゼロ」

それだけ言つて二人は立ち去った。

「ふう……ふう」

肩で息をしながらゆっくりと呼吸を整えていく。

被弾数はほぼ無い。近接格闘を主体にした戦闘のために弾薬の消費は少ない。エネルギーもまだ十分にある。戦闘続行だ。

敵を探すためにセンサーを使用する。敵はすぐ近くにいた。近くの建物の天井。

上を確認しようとしたその時、俺の近くに何か激しい音を立てながら落下してきた。

首を動かして落下物を確認する。それはライダだった。無惨なスクラップになったそれは内側から赤い液体が流れ出ている。外観からでもわかるほどの破損、中にいた人間は既に死んでいるのだろう。

そしてもう一度落下音、今度はスクラップではない。

見たことの無いIS、敵の新型だろう。禍々しい色彩。細身の全身装甲。ガスマスクとは異なる形状の顔、そこにつけられている二つの黄色い目が俺を見つめる。両肩には可動式のシールドバインダー、右手には黒と赤色のレイピアを持っている。

レイピアを此方に向けてくる。成る程、敵は強さに自身があるのだろう。

「挑発行為ありがとう。なら乗らせて貰おうか」

「こちらにも長剣を展開、白と赤色の長剣。」

「スコールさん、新型を発見、交戦は避けられません」

秘匿回線でスコールさんに話しかける。

『わかったわ。誰かを援護に行かせたいんだけど、私も含めて全員交戦中なの。できるだけ早く、誰かを向かわせるわ。それまで一人でやれる？』

「大丈夫です」

回線を切断する。

仲間は来ない、敵の実力も装備も未知数。

けれど一人で奴を倒してやる。

## 市街戦闘

## 3

剣戟が繰り広げられる。気を抜けない瞬間が続いて行く。長剣でレイピアを弾き、いなし、受け止める。

敵のレイピアが当たる度に衝撃が伝わってくる。重みが違う。ティファを見つけた施設で戦った奴ともこの戦場で戦った誰よりも一撃が重い。それでもまだスコールさんやシルヴィアさんには及ばない。

ここで引くのは不味い。俺に防御用の装備はほとんどない。近接格闘メイン、守るなら攻めるがこの装備の理念。

バックステップ、そして左手にショットガンを展開。敵に向けて構える。引き金を引こうとしたその時、敵は半身になりバインダー盾にする。

引き金が引かれ、弾丸が放たれた。それらはバインダーに阻まれてダメージは与えていない。

「クソッ！」

ショットガンを格納、代わりに前腕部分に新たな装備を展開。円錐状の棘が生えた長方形の装備、アサルトアームズにのみつけられた装備。

滑らかな動きで敵が迫り来る。俺は左腕を近くの建物の壁面に向ける。

レイピアによる突き刺し、しかしそこに俺はいない。俺は壁面に張り付いている。空を刺したレイピア、敵は僅かに動揺していた。

壁面を蹴り上げて、接近。此方に気づくが遅い。上半身はバインダーに阻まれているために攻撃は不可、狙うは下半身。

掠った。敵も反応が早い、攻撃が当たる寸前にバク転をして直撃をまぬがれた。

着地すると同時に後方に下がる敵。

左腕の円錐を敵に突きつける。円錐が射出される。円錐には紐がつけられていて、さらに円錐から三本の鉤爪が飛び出した。

フックショット、それがこの円錐の正体。壁に突き刺して移動し、敵の動きを拘束して強制的に近接格闘に持ち込むための武器。

「くっ！」

しかし、バインダーに阻まれる。そんなのは予想済み、フックショットの紐を掴み振り回す。

左手を軸に頭の上で、フックショットを振り回す。フックショットは忽ち鞭へと姿を変える。

「シヨツ！」

弦がしなり、敵へ迫る。バインダーで弾かれるが、戻ってくるフックシヨツトをもう一度敵に振るう。

今度も動揺に弾かれ……違う受け流された。体を回転することによって俺の攻撃を受け流した。

しかもそれだけでは無く、回転を利用して俺に近づいてくる。急いでフックシヨツトを巻き上げ、右手に持った長剣でレイピアを防ぐ。

長剣でレイピアを捌き、蹴りを脛でガードする。

隙について敵に蹴りを入れて、すぐそばのシヨツピングモールの入り口の扉を破壊しながら入店する。

スコールさんが被害は考えなくて良いと言っていた。だから躊躇い無くこの中で戦える。

敵が追撃してくる。その手にはレイピアとアサルトライフル、薄暗いシヨツピングモールにアサルトライフルの発射光が眩しい。

あちこちに立っている柱を盾にしながら迫る。壁や天井を蹴り、敵の死角を狙っていく。

まずは一撃、天井から背後に迫る。しかし、それを体制低く前方に回転して躲

される。

追撃の二撃め、転がった敵の背中に一文字切り。しかし、転がり終えた敵も此方に振り向きざまにレイピアで俺を突き刺さんとする。

腹にレイピアが掠っていく。だが俺の一撃は止まらない。敵のボディを切り裂くが浅い。飛ばれた。振り向きながらスラストアスターを使って僅かに距離を離されてしまった。

「マズっ」

ランドホイールを床に接地、そしてそのまま敵から離れる。敵もスラストアスターを使い此方に迫る。

長剣を収縮、代わりに二丁のアサルトライフルを展開。ランドホイールで床を滑る。銃弾が後方より飛んでくる。ジグザグにもしくは滑らからに移動して躲していく。

此方も振り向かず後ろに向けてアサルトライフルを射撃、流石に当たりはずず躲かされてしまう。

一撃をいれるための次の手を探しながらショッピングモールを駆け抜けていく。生半可な技では一撃は通らない。

見つけた。直様思考。決定打にはならないが少しはダメージを与えられるだ



ろう。

右手にフラッシュグレードを展開、一秒くらいは目くらましになるだろう。栓を引き抜き、前方に投げる。瞬時加速、つられて敵も瞬時加速を行う。俺の真後ろ、敵の目の前で閃光が放たれた。

「なっ！」

敵の驚愕する声が聞こえる。無理も無い。目の前にいたはずの俺がいなくなっていたのだから。

敵の背中が見える。俺の現在位置は敵の真上、一階と二階そして天井をつなぐ吹き抜け空間に移動している。

俺が行ったのは天井にフックショットを引っ掛けて直進する勢いをそのままにして天井を中心に扇状に移動して吹き抜け空間に飛んだ。上空に飛んだことで敵はいきなり消えたように見えたのだろう。

両手に構えたアサルトライフルによる弾丸の雨。床に降り注ぎながらも敵の背後に直撃する。

敵の左肩のバインダーが伸び、持ち手が展開される。そのまま持ち手を掴み、此方に先端を向けてくる。

バインダーに備え付けられた銃口が此方を睨む。

あれは多分マシンガンだろう。それも俺の使っているアサルトライフルよりも連射性能も威力も高そうだ。

回避行動に移る。僅かだが敵の武器に気を取られていた。コンマ数秒の遅れだが、命取りにならないとは限らない。

フックショットを二階の天井に射出。スラストも利用して二階に飛び移る。敵から放たれた弾丸が下半身をかすめていく。二階の天井に転がりながらも着地、背後で吹き抜けの硝子の破片の雨が降りそそいでいる。

ランドホイールで二階を駆け抜けていく。敵も一階から此方を追いかけてくる。敵の位置はセンサーでわかる。

引いていても埒があかない。

アサルトライフルを収縮し、徒手空拳で敵の出方を伺う。剣で攻めても銃で攻めても両肩のバインダーが邪魔になる。

ならばいつその事、徒手で迎え撃てばいい。

神経を研ぎ澄ます。チャンスは一度、下から迫ってくる。敵はどう攻めてくる。俺の後ろにあるさつきとは別の吹き抜けからしかけてくるのか、それとも床を壊して攻めてくるのか……………

来た。

足元から振動が伝わる。そう思った次の瞬間には敵が左のバインダーを盾にしながらタツクルで床を破壊して来た。

「リアアアアアツ!!」

渾身の力を込めた右の掌底を敵のバインダーにぶつける。敵からの衝撃と俺が与えた衝撃が腕に伝播してくる。

一瞬、俺たちは動きが止まった。ならば次はどちらが先に動くか……これによつて、これからが決まる。

右肘を曲げ、回りながら敵の懐に接近。そして先ほどとは逆の左手による掌底。狙うは敵の胴体では無く、邪魔なバインダーと本体とを繋ぐアーム部分。

アームにぶつかり、折れ曲がる。伸び切ったままの左手に長剣を展開、そして長剣でアームを切り落とした。

勝機が訪れた。片側だけでもバインダーがなくなったのなら俺にも勝つ可能性がある。

そう思ったのも束の間、残されたもう一つのバインダーによるリアアットが俺を吹き飛ばした。

並の衝撃ではない。気を抜いてしまえば意識がとんでしまいそうになる。二階から一階に飛ばされた。

エネルギーは既に半分以下になっている。けれどまだ死んだわけではない、戦闘続行。

敵が二階から此方にむけて飛んできた。スラスト点火、突撃してくる敵に此方もカウンターの様に瞬時加速のタックル。敵の腹に直撃、呻き声を敵が漏らした。

「飛ばええええええ!!」

右手を相手の股を通して背中を掴み、左手で肩を掴む。

最高速度において亡国機業のISの中でこのアサルトアームズを超えるものはない。故によほど相手の性能が良くない限り、速度で競り負ける事はない。

敵が何度も何度も俺の横腹を殴りつける。拘束を振りほどくために執拗に殴る。

そんな攻撃には怯みはしない。より一層拘束を強め、硝子の天井に突っ込む。敵を盾にしながらの突入のために俺のダメージはほぼゼロ。

「離せッ!」

左足の蹴りが俺の横腹に入る。衝撃に耐えきれず思わず敵を離してしまった。

敵がレイピアを展開、此方も長剣を展開。地面に落下しながらの空中での斬り合い。バインダーのなくなった左側を執拗に責め立てる。

僅かな隙について敵の左のマニピュレーターを切り飛ばした。だがそれは此

方も同じ、俺と敵の左マニピュレーターが宙を舞う。

切断された左手の断面で敵の顔面を殴りつける。

そしてさらに幾度の攻防の末、もといた道路に着地する。

「私は……私は生きるんだッ!!」

敵が叫ぶ、どうしようもない絶望から抜け出す様に声を出す。声の感じから俺と同じくらいか？

敵までの距離は二十メートル。ここで決める。長剣をより強く握り敵へと迫る。

敵のバインダーが伸びる。またマシンガンか、しかし違った。バインダーに備え付けられているものを見て息が止まった。

ロケットランチャー、歩兵が戦車を打ち破るためのそれはISでも直撃したのならただでは済まない。

なれど引く事も止まる事もならない。放たれた砲を紙一重で躲す。そして敵に接近し。

もう一つのロケットランチャーを見た。どうやら敵のバインダーには二つのロケットランチャーが備え付けられていたらしい。これを喰らえば俺は死ぬかもしれない。けれどももう回避動作は間に合わない。敵がロケットランチャーを発射する様子

が恐ろしいほどゆっくり見える。

敵は後方に下がりがりながら、俺に銃口を向ける。

俺は死に直面しながらも意外なことに落ち着いていた。

持っていた長剣をロケットランチャーに突き刺し、ロケットランチャーは爆発した。

吹き飛ばされる両者、アスファルトを転がり続け、やがて止まった。

「クソツ！腕が壊れやがった」

立ち上がるうにも両腕が爆発の衝撃で壊れてしまい動かない。それは敵も同じらしい。

動かない手を使わずに足と胴体を動かしてなんとかたちあがり、敵を睨みつける。敵も同じく此方を睨む。

敵は重りになるバインダーを外している。敵のヘルメットに罅が入っている。互いにまともな戦闘を戦闘を続けられる状況ではない。

しかし、俺たちは闘志を消さない。どちらかが潰れるまで続けていく。

駆ける。スラスターには頼らずに両者は己の両脚で敵へと突き進む。

「おらああああああ!!!」

「うりやああああああ!!!」

ハイキックとハイキックがぶつかる。力では俺の方が上、敵の脚を押し返して後ろ回し蹴りの準備をする。

敵もただでは負けない。押し切られた脚を素早く振り回してから、俺と同じく後ろ回し蹴り。

互いの腹に蹴りが入った。一瞬も怯みはしない。

残されたエネルギーは残り僅か、次で何とかしないといけない。

敵の脚を振りほどき、大きく一步を踏み出す。上体を大きくそらす。

これが最後、残りの力を全て込めての一撃。

己の頭を撃鉄の様に勢いよく振るう。ヘッドバット、狙うは敵の顔面。吸い込まれる様に頭と頭がぶつかった。

飛んでいく。敵が飛んでいく、その光景を見ながら俺は何もできない。エネルギーが切れたとかいうわけではない。力が入らないのだ。重いISで垂れ下がる両腕に体全体が持つていかれそうになる。

立つな、立つな。地面に倒れる敵に願う。

しかし、その願いは叶わない。ふらつきながらも敵は立ち上がった。もう俺にはどうしようもない。目が霞む。これ以上はまともに闘えない。

「はあ……はあ……生きて、あいつに会うんだよ。だから……お前を……」

ヨロヨロの足取りで近づいてくる敵。だが突然その足を止めた。

「なに……撤退……わかった」

誰かと通信しているのだろう。撤退というワードが聞こえてきた。

『ゼロ、聞こえる』

スコールさんから通信がきた。

「はあ……聞こえます」

『革命軍が政府軍に押し勝ったわ。ネオも撤退しだしたは、私たちも撤退するわよ』

「了解」

通信が切れ、互いに見合う。

「この勝負……お預けだ」

「らしいな、助かるぜ」

「あたしの名前はガーベラ………あんたは？」

「ゼロ」

「……ゼロか、イイねえ。覚えた」

それだけ言つて敵は何処かに飛び去った。俺はその光景を見ながら尻餅をつ

いた。

動けない。誰かに来てもらわないとここから動けない。力を使い果たした。



大の字に転がり、天を見上げる。青い空と白い雲、殺し合いをしたばかりだというのに美しいと感じてしまう。

目を閉じれば寝てしまいそうだ。

《未確認機接近》

眠気が飛んだ。

天から何かが落ちてくる。スコープを使い、接近してくるものを確認する。

それは小型の空中戦艦だ。ISが登場するよりもずっと前に作られたそれは現在、ISの輸送などに使われている。俺たちも今回この地に来るために空中戦艦を使用した。

敵の援軍か？だがその可能性は少ない。いま敵は去ったばかりだ。

ならあれは何だ？

俺の戦いはまだ続く様だ。

## No. 004

疲れ果てて体がまともに動かない。空から迫り来る空中戦艦を見上げながら何もできな

ない、ただじっとしている。戦艦はある程度の高度まで到達するとその場にとどまり始めた。何をするわけでもない、ただじっとしている。

亡国機業かネオか、それとも新たな第三者か。できれば亡国機業であってほしい。『ゼロ、無事!』

スコールさんからの通信だ。心なしか少しだけ焦っているはようだ、珍しい。

「生きてますけど、骨自体は無事ですが、腕の装甲が壊れて動かなくなりました。できれば誰かに来て欲しいです」

『わかったわ、私が向かうから待つてなさい』

「了解」

体を軽くするために腕部の装甲を収縮。そしてゆっくりと腕を使わずに立ち上がる。

できることなら腕部を展開しておきたいが、今の俺の体力ではきつい。軽くなるの

はいいのだが、その分腕への攻撃には絶対防御が発動しなくなってしまう。こんな状況で奇襲をされたらまずい。

腰装甲の収納部分を開いて、携帯食料のパック詰めゼリーを取り出して飲み干す。そして再度収納する。

何処かに隠れるか、シヨッピングモールか。とりあえずスコールさんがくるまで逃げておかないと。

『安心しろ』

コアの人格、ゼロが話しかけてきた。こいつは普段は黙っているのだが、たまに話しかけてくる。いつもは自分のコアの世界に閉じこもっているのに。

「安心しろってどういうことだよ」

『あれは敵ではない、タバネの船だ』

「タバネ?.....つーことはあれは東さんの船か?」

『そうだと言っているだろう』

あれが東さんの船、と言うかあの人あんな物持ってたんだ。

秘匿回線で通信が入った。誰だ。知らない番号からの通信だ。

『ヤッホー! いっくん、篠ノ之東さんだよー!』

無駄に元気な声で東さんが通信して来た。それにしても久しぶりに東さんの声を聞

いたな。いつ以来だろうか、真面に会話したのだからNo. 000を貰った夜以来になるのか？

「お久しぶりです、東さん。なんで俺がここにいるとわかったんですか？」

『簡単だよ、いつくんが000を起動させた事はわかってたから、その反応を追ってここに来たんだよ』

「なるほど、わかりましたそれで俺は何をすれば良いんですか？」

『取り敢えずこつちまで登ってきて、話はそれからね』

「わかりました。今行きます」

東さんとの通信を切断して、今度はスコールさんに通信する。

『何かあったの、ゼロ』

「ええ、あの戦艦の正体がわかりました。あれは篠ノ之束の船です」

『え!? 篠ノ之束の?』

スコールさんが珍しく驚いていた。それもそうか、篠ノ之束なんていうビッグネームが現れたのだから。

「それで、東さんに呼ばれたので今から向かいます」

『……………わかったわ。無事に戻ってきなさい』

スコールさんとの通信を切断する。

そして背中のスラスタの調子を確認する。戦艦との距離は数十メートル、飛行する分には問題はない。

飛翔開始、徐々に戦艦に近づいて行く。

そう言えば何処から入れれば良いんだ？

その矢先、戦艦の一つのハッチが開いた。あそこから入れということだろう。

速度を落としながら戦艦に近づいて行き、ハッチに侵入。それと同時にハッチが閉じた。

戦艦の内部には明かりが灯っていた。

敵に攻撃する心配はないからISを解除して、内部を進んでいく。内部の通路は意外にも綺麗にだった。

通路には矢印が点灯していて、俺を案内している。少し歩くと扉の前についた。扉を開けようと足を踏み出すと一人で扉が開かれ、俺は部屋に入った。

「やあ、いっくん。久しぶり」

部屋の中には東さんがいた。ふだん通りの訳のわからない衣装にウサミミ、そう言えばリリスさんもこんな格好だったな……天才はこんな格好をしたがるのか？

「お久しぶりです、東さん。それで御用件は？」

近くにあった椅子に腰をかける。先ほどからISコアの声がしている。数十近くの

別々の声、シロノの声はしないから何処か別の場所においてきたのだろう。

東さんは少し俯いて泣きそうになっていた。

「私はいつくんに謝らないといけない。私がISなんて作ったから、いつくんは誘拐された。ISがなければいつくんはアリサちゃんとも今も一緒にいられたのに」

普段は見せない東さんが泣いている姿、白騎士事件の時以来だ。

「東さんが謝る必要はありません。謝るのは俺です。俺はISが宇宙開発用の物だと知つていながら、それを踏み躪つて戦闘に使っている。それに不思議なことに思うんですよ、俺は遅かれ早かれ、ISがあろうとなかろうとこうなる運命だったんだと」

「はは、ゴメンねいつくん気を使わせちゃって」

涙を拭き取りながら東さんは少しだけ微笑んだ。そして今までにみたことのないような暗い表情をして、呟いた。

「こんななら世界なんて滅べば良いのかな」

身体が震えた。

今まで闘ってきたどんな者よりも恐怖を感じた。

目の前にいるのは東さんかどうか疑わしく思えた。

「東……さん？」

オドオドとしながら東さんに声をかける。

「ん、ああごめんねいっくん」

いつもの束さんに戻った。感じていた恐怖心もなくなり、身体の震えも治まった。

「それでねいっくんに少し話しておかないといけないことがあるの」

「話しておかないといけないこと？」

「No. 000を含めた始まりの五つのコアについて」

「始まりの五つ、なんですかそれは？」

俺のゼロ、白騎士のシロノ、後三つはなんだろうか？

「私が最初に作り出した私の強すぎる五つのコア。自分の認めた者しか乗せず、コア自体の性能も他のを超越している。例えば初期化する必要は無いし、量子化して収納できる物の量も桁違い。まあ他にもあるけど」

確かにISの性能はコア自体に依存する。量産型のコアよりも束さんのオリジナルのほうが高い性能を持っている。でも。

「待ってください束さん、俺の000は確かに初期化しなくてすみますけど、収納できる量は他と変わりませんよ」

「それはそうだよ。だってその子自身が制限をかけてるんだから。いっくんに合わせて000も制限を解除していくつもりみたい」

つまり俺が未熟だから000が制限をかけているという事か。なんか複雑な気持ち

だ。

「まあ、お話はそれまで。あとはいっくんたちにプレゼント」

俺ではなくて俺達に？なんだろうか。

ロボットアームが動きだし、東さんの手元にISコアを持ってきた。

「それは？」

「No. 004、私が持つてる三つのコアのうちの一つ」

No. 004、なるほど確かに000と同じ気配がする。

「三つ？あとの一つはどうしたんですか？」

計算が合わない。全部で五つあって、そのうち俺が一つ持っているのなら四つではな

いのか？

「一つは、No. 003は信頼できる人に渡してるよ」

東さんが信頼できて貴重な物を渡せる人となると……なるほど。

「皇さんですか？」

東さんが信頼できる大人は皇さんしかいない。確かに皇さんなら預ける事ができる

だろう。

「ピンポーン！いっくん鋭いね」

「東さんが信頼できる大人は皇さんしかいないと思って」



「ハハ、確かにね。それで本題に戻るね、この子がいつくんたちの仲間の誰かに反応を示したの。だからこれをいつくんにあげる」

東さんは手に持っていたコアを俺の手に移した。

「……………良いんですか？俺で。もしかしたら無茶苦茶な使い方するかもしれませんが」

「大丈夫、私はいつくんを信じてるから」

「わかった。これはもらっておきます」

手に持ったコアを量子化して収束。

そろそろ帰還する時間だ。戻らないと。

「すみません、時間が無いので帰りますね」

「うん、私もごめんね。時間が無いのに呼んじやつて。久しぶりだからつい嬉しくなつて」

「また機会があればきます」

東さんに向けて礼をしてから立ち上がる。そして出口に向かって歩き出す。

「いつくんは何か変わった？」

部屋から出る直前、東さんからそんな言葉が投げかけられた。

「変わってませんよ、俺は俺です」

変わった変わった変わった変わった、変化する……そんなことはない。俺は変わってなどいない。住む場所が変わっても人殺しをしようと俺は変わらない。

「よし、一夏。004の起動準備できたぞ」

東さんとの再開から数時間が経過して、俺は今本部の整備室にいる。目の前には004を繋げたISが鎮座している。

今から行うのは004の適性検査。誰が扱えるかを調査するためのものだ。リリアさんや整備班協力の元で行われている。

「わかりました。今からよんできます」

被験者となるのはあのとき戦場にいた奴ら全員。今から集合をかけるにいくところだ。扉に向けて歩いていると一人で扉が開き、中に誰が入ってきた。

「やつぱりイチカここにいた。探してたんだよ。ご飯食べに行こう」

ティファだ。どうやら俺を探しにここにきたらしい。でもどうしてわかったんだ。

「なんでここにいると思ったんだ？」

「んー、しいていえばここにいてるって思ったから」

「なんだそりゃ」

まあ、一人呼ぶ手間が省けたのは丁度良い。ティファはここで検査を行おう。

「良かった。俺もお前を探してたんだよ」

「え、なんで？」

「いいからさ」

ティファの背中をポンと押してISの前に押し出す。

「そのISを起動させてくれ」

「なんでそんなのするの？別にいいけどさ」

文句を垂れながらティファがISに触った。

すると起動するはずないそれが光始め、起動した。

「嘘だろ!？」

「えっ?なにこれ!?!ちよつとイチカ!なにこれ!?!」

マジかよ。まさか最初の最初でアタリかよ。

## 宵の誘い

「ラアッ！」

「甘いッ」

漆黒の太刀を振るう。しかし容易く受け止められる。足払いをくらい体が上下逆さまになる。

そしてつづげさまに顔面に向けての蹴り。咄嗟に顔の前で手を十字に組んでガードする。

蹴られた勢いで後ろに飛ばされる。剣を収束して両手にビームピストルを展開。姿勢を立て直しながら敵に向けて撃つ。

しかし、敵はそれら全てを掻い潜りこちらに近づいてくる。ビームピストルを収束、再度太刀を展開して構える。敵は真正面からこちらに向かってくる。

太刀対徒手空拳、普通ならば太刀のほうが有利ではあるがこれはISの戦闘。何が起きるかわからない。

敵が己の間合いに飛び込めば、敵が攻撃をしかける前に一撃を入れて倒してみせる。

二メートル。

一メートル。

ゼロ。

上段からの振り下ろし、敵目掛けて放たれるその斬撃は並の盾ならば容易く切り裂いてしまう。

敵の肩に太刀が触れそうになる。俺はその時、僅かながらの勝利への確信を得た。だがそんなものは瞬きをするよりも速く、俺の中から消え去っていった。

太刀が側面に打ち込まれた掌底によってへし折られた。

かなりの実力と集中力がなければ不可能な芸当だ。いや、それらに加えて俺が未熟なものも要因の一つか。思いのほか速度も出なかったし。

俺は咄嗟に太刀から手を離して後方へと下がる。しかし、既に遅い。太刀のお返しと言わんばかりの踵落としが俺の肩に直撃した。

膝から崩れ落ちそうになったがなんとか留まった。

敵が拳を構え、全力の右ストレート。

直撃する。

そう思ったが、拳は俺の顔の前で寸止めされた。

「よし、今日はこれで終わりだ」

敵がISを解除した。こちらも同じくISを解除する。

「ありがとうございます、シルヴィアさん」

俺は自主練習に付き合ってくれた人物、シルヴィアさんにお礼を言う。

「気にしなくて良い。言っただろ力を貸してやるって、良いんだよあんたはまだ子供って言える年齢なんだからさ」

「そう……ですね」

かれこれシルヴィアさんとの一対一での訓練を始めてかれこれ数ヶ月となる。週に二回か三回のペースでIS用の訓練場が取れる時に訓練している。

数ヶ月すぎているので普通ならば小学六年生なのだがそんな俺には関係ない。俺の最終学歴は小学校中退、下手したら幼稚園卒業だ。まあ、元の生活に戻る気は今は無いのだからいいか。

よくよく考えれば小学校六年生の俺が戦場の最前線で戦っているのは可笑しいのだが、俺自身が選んだ道なので少年兵と言われようが構わない。

そして束さんとの再開からも数ヶ月となる。あれ以来000にはこれといった変化は生じていない。そして束さんから貰った004は結局ティファ以外に扱えるものがないなかったため、ティファに貸すことになった。

「あたしは戻るからあんたも速く戻りな」

「わかりました」

訓練場を出て更衣室にはいる。

「ふう……」

ベンチに座り込み、ため息を吐いた。疲労感が出て行く気がする。更衣室に入る時  
持ってきたスポーツ飲料の入ったペットボトルを口に加える。

喉を流れていくスポーツ飲料が気持ち良い。全てを飲み干してくずかごの中に捨てる。

訓練をつけて貰っているのは嬉しいのだが、どうも最近上達している気がしない。何  
か目の前に壁がある気がしてならない。

今のままじゃいくらやっても無駄なのか？シルヴィアさんに相談してみるべきか。

〈通信が入りました〉

通信が入った。インカムのみを展開して通信を受け取る。

「はい……」

『あら、お疲れみたいね』

通信の相手はスコールさん、何のようだろうか。

「今までシルヴィアさんに付き合って貰って自主練習してたんですよ」

『それはいいことじゃない。それじゃあ、お疲れのところ悪いんだけど任務があるわ。』



数日間の泊りになるから、準備してから私の部屋に來なさい」

任務か、何日ぶりだろうか。入隊してから幾つの任務を受けたのかわからない。何人  
の人を殺したのかさえ覚えていない。

「わかりました」

通信がきれたのでインカムを収縮。ゆつくりと立ち上がってから着替え始める。I  
Sスーツを脱いで下着を履き替える。脱いだISスーツは収縮する。シャツを着てそ  
の上から白を基調とした亡国機業の制服に袖を通した。最後にアリサから貰ったネッ  
クレスを付けて、着替えは終わった。

さあ、任務だ。

「日本支部への視察なら俺がいなくても良かったんじゃないですか？」

助手席に座り、肘をつきながら窓の外を流れていく景色を眺める。日本の首都、東京  
は平和そうだ。

訓練から数時間後、俺は任務でスコールさんと共に日本の東京にきている。

今回の任務はスコールさんと合同で行われる亡国機業日本支部の視察。

亡国機業には世界中に支部が存在しており、時折本部からの視察員が派遣される。支部の主な活動は支部のおかれている国やその近隣の国でのスパイ活動、そして本部と同様に実働部隊での戦闘行為などなど。更に支部長は半年に一度本部で行われる総会に参加しなければならない。

「そうね、確かにそうよ。けど今回の目的はそれだけじゃない。貴方に休息を取らせるためよ」

「運転しながらこちらを見ることなく、スコールさんが答えた。

「どういうことですか？」

モノクロームアバター全体の休みならちゃんと貰ってるし、休息が必要なわけではない。

「それなのにどうしてこんな事をしたのか。」

「貴方、最近自主練ばかりして休んでないでしょ。あと少し壁にぶつかってるらしいじゃない。シルヴィアから聞いたわよ」

「確かに俺はここ最近自主練ばかりしてあまり休んではいない。

「確かに休んでませんけど。それに伸び悩んでるのは誰にも言ってますよ」

「意外にそういうのはわかるのよ、大人っていうものはね」

「わかる物なのか、大人というのは凄いな。」

「支部につくまで時間はあるわ、少し寝ていなさい」

「命令ですか？」

「違うわ、お願いよ」

スコールさんは運転に集中しながら、こちらにウイंकをした。

そういうことならお言葉に甘えさせてもらおう。

それから無事に支部の視察も終わり、現在は亡国機業の傘下の機業が経営しているホテルの一室。俺とスコールさん、それぞれに一部屋ずつ案内された。

飯は既に食い終わり、あとは風呂に入って寝るだけとなった。

ベッドの上に寝転がり、やることもなくただ天井を見上げている。普段ならば操縦技

術をあげるためにISを腕だけ部分展開して、糸がきれないように綾取りをしたり、お手玉をしたり、裁縫をしたりするのだが、スコールさんから禁止された。

スコールさんからの命令は只管身体を休めること、筋トレは勿論禁止。任務は明明後日まであるらしく、俺たちは日本国内を観光していくらしい。

もしできるなら家の墓にも行きたい。親不孝なことをしてるから、いく資格もないかな。

「……………アリサ、どうしてるかな」

姉も弟もどうでもいいが、アリサが今どうなっているのかがきになる。

最後に見たのは見たのは俺がはNo. 000を取りにいった帰りに墓の前にいるのを偶然見かけた時、あの時のアリサはまるで最初に見た虐められていた時の雰囲気そのものだった。

歯がゆかった。彼女に何もできない俺が悔しかった。彼女に悲しい思いをさせた俺が悔しかった。彼女を後ろから抱きしめて安心させたかった。

でもできなかった。

それをしてしまえば覚悟は鈍っていた、今この裏の世界で生きて行くという覚悟が。だがいつか必ずあってみせる。この身を血で穢してしまってもあってみせる。

身につけているネックレスを握りながら俺は思った。

「……そろそろ風呂に入るか」

ベッドから起き上がり、風呂場へと向かう。久しぶりに一人で風呂にゆっくりと入れそう。亡国機業の風呂場は集団浴場だから、ゆっくりと入ってなんかられない。

グレイのやつが騒ぐから俺とアドルフが黙らせるために沈め、それをジークが静観するのがいつものことだ。

だが今日は違う俺の入浴を邪魔するものはいない。さあ、どれくらい風呂に入っただろうか。

「一夏、いる？」

この声はスコールさんか、何のようだろうか。今日は部屋に戻って寝なさいとさつきレストランで言われたのだが。

「はい、何かようですか？」

扉を開けて、スコールさんの中に招く。スコールさんは備え付けのソファアームに座り、任務の時のような真剣な表情を見せている。俺も対面するように座る。

「一夏、貴方に緊急だけど任務よ」

「任務？俺は明々後日まで休息じゃなかったんですか？」

身体を休めろと言ったのはスコールさんだ。それなのに任務とはどういったことなのか。

「ごめんなさいね、今 I S を持っていて、日本にいるのは私と貴方ぐらいなのよ」  
「……………つまり、I S が必要だと?」

I S は貴重なため、支部にはおかれておらず本部にしかおかれていない。

だから俺に白羽の矢が立ったのか。それにしても I S を必要するなら相手も I S を保有しているということか?

「そうよ」

「それで、その任務っていうのはなんですか?」

スコールさんはよりいっそう真剣な表情になり、任務内容を告げた。

「数時間前、誘宵グループのご息女である誘宵アリサが修学旅行中に突如現れた国籍不明の I S に誘拐された。一夏、貴方の任務は誘宵アリサを救出することよ」

「……………」

## 誘宵アリサ救出戦

私の時は再び止まった。

あの日一夏くんがいなくなつてから私は心をゆるせる友達がいなくなつた。

一夏くんがいなくなつてから行く意味がなくなつてしまい、学校にはいなくなつてしまつた。所謂不登校というやつだ。それでも勉強だけは続けていた。

そんな生活を続けていたのは五年生が終わるまで、六年生になる時に私は私立の小学校に編入した。学力の方は何の問題もなかつた。

新しい環境で友達を作つて欲しいのがパパやママの願いなんだと思う。けれどそうはうまくいかない。一夏くんがいなくなつて心にポツカリと穴が空いた気がした。

一夏くんが死んだなんて今でも思つていない。あの葬式の日に見た物を覚えている。何も入つていない棺、あれが憎いと思つた。

お墓には一週間に少なくとも二度は行つていたと思う。あそこに行けば一夏くんが近くにいるような気がして、ママに連れて行つてもらつた。

話は戻るけど、私立に入つてからもクラスメイトとは馴染めずにひとりぼっちだつ

た。

修学旅行も一人だ。バスで京都まで向かう途中のサービスエリアで私は一人で休んでいた。

そしたら突然、目の前にISが現れた。あまりにもそれは怖かった。足は震えて、腰を抜かしてしまい、どうしようもなかった。

私はこのまま誘拐されてしまうのかな？

助けてよ、一夏くん。

「目標確認しました。落下体制に移ります」

「了解」

ヘリコプターの上で目標のトラックに狙いを定める。その高度差はおよそ二百メートル、俺は上空から山道の交通量の少ない高速道路を走り抜けるトラックに向けて、ノーパラシュートのスカイダイビング。行う。

何故俺がこんな事をしているかと言うと、あれにアリサが乗っているからだ。いや、正確に言うとうとアリサは誘拐された後にあのトラックに載せられたらしい。



何故それがわかったかと言うと、俺がアリサの携帯電話の番号からGPSをゼロにハッキングさせて調べ上げた。そしてGPSの発信源を辿り、高速道路やその他の場所の監視カメラをハッキングして何処にも所属しておらず、ナンバーも正しくないトラックを見つけ、正確な位置を割り出すことに成功した。

警察の捜査も此方から妨害している。敵と闘っている途中で警察がこられたら厄介になる。しかし、俺が戦っていれば遅かれ早かれ警察がくるのは間違いない。

なので俺は警察がくる前に誘拐犯を皆殺しにしてアリサを救出する必要がある。そのためなら手段を選ばず、容赦もしない。時間をかけずに終わらせる必要がある。

(ゼロ、頼みごとがある)

『何だ?』

(高速道路の監視カメラを停止させ、入り口を封鎖しろ、出口はしなくていい。警察がこなければいい)

『……わかった。要件はそれだけか?』

(あと、誘宵皇さんの携帯にメールを送ってくれ)

『なんてだ?』

(俺がアリサを助けます……って)

『わかった』

ゼロが己の意識層からインターネットへと侵入して行くのがわかる。

どうやらＩＳコアの人格、通称サイバーエルフには電脳の中を進みハッキングをすることが出来る。その中でもゼロはその能力が他と比べて高い。

仮面をはめてから、扉から身を乗り出す。目標に向けて狙いを定める。

「行きます」

ヘリコプターから飛び出す。身体を矢のように真つ直ぐ伸ばして敵へと近づいて行く。ＩＳを展開すると敵に気づかれてしまう恐れがある。

風が身体を殴り続ける。少しでも体がずれてしまえば目標には届かない。

そしてギリギリまで近づいて行ってからＩＳ、ウルテナを展開。今回も前回と同様にアサルトアームズを使用している。

トラックの上に着地、そして拳を握りしめてルーフを殴りつける。

「何ッー！」

女の声が出た。恐らくいきなりの襲撃に驚いたのだろうか、車体が大きく蛇行し始めた。

振り落とされないように左手で車体を掴みながら、トラックのルーフを引き剥がしていく。

女が二人乗っていた。顔つきからして日本人のようだ。運転席の女は俺を振り落と

そうと必死でハンドルを動かしていく。

右手を伸ばして助手席の女の胸倉を掴み、トラックの中から引きずり出し、後続車がないことを確認してから、高速道路に投げ飛ばした。

続いてもう一匹の処理をしないといけない。此方はできるだけ丁寧にはトラックが事故らないようにしないと。

左手にハンドガンを展開、無駄な弾は撃たない。一撃で脳天を射抜いて見せる。女は此方をチラチラと確認しながらもひたすらにトラックをうごかしている。

引き金を引こうとした瞬間、銃を持つ手に何か絡みついた。それは鞭、伸びる先は後方。

どうやら誘拐したI Sに乗っていたのは運転席ではなくて助手席の女だったみたいだ。

振り向いて敵の姿を確認する。

ラファール、確かフランスのデュノア社が開発した機体。特にこれと言って秀でた性能ではないが、満遍なく良い性能を誇っている傑作らしい。

それがどうした、こっちはそんなのよりもスペックにおいて上、更に近接格闘では負ける気がしない。だが、問題は相手が勝つためだけでなく、守るための戦闘を行った場合。

考えてもしょうがないか、守らせなければ良いだけだ。

あれがアリサを誘拐したI.S。それを考えるだけで心の奥底からドス黒い感情が湧き上がり、蠢く。戦闘においてこんな気持ちは初めてだ。

コロシテヤル

明確な殺意を持ったのはこれが初めてか？昂揚感は覚えがあるが殺意はない。今ならばどんな残虐なことでもできる。

「ブツコロスッ!!」

トラックから飛び降りる。ハンドガンを収縮して、右手に最近開発された試作武装、ビームブレードを展開。縦長い柄を握りしめて、棒状の翡翠色の刃を作り出す。

それで鞭を引き裂いて敵へと迫る。トラックとの距離を考え続けながら闘い続けなければならぬ。

敵は両腕にシールドを持っている。敵は守りの闘いを続ける気か？

厄介だな。

攻める、攻め続ける。敵が守るといふのなら此方は攻めるしかない。

一手一手豪快かつ繊細に、矛盾を孕んだブレードよ一撃を加え続ける。針の穴に糸を通すように、敵のガードの隙を縫っていく。

だが連撃は長く続かない。トラックとの距離が離れすぎた。敵に蹴りをいれてその反動でトラックに向けて、走り出す。ホイールを地面につけて滑走する。

後方からの弾丸、体重移動で機体の起動をずらしてよける。モニターで敵の様子を確認、片手にアサルトライフル、もう片方にランスを構えて此方を追いかけてくる。

止まるわけにはいかない。だが敵は倒さないといけない。

「ふうーッ」

タイミングを見計らう。ゆっくりと息を整えながら敵の出方を伺う。

敵がランスを構え、突っ込んできた。

今。

敵がランスを突いてくるタイミングに合わせて、上に跳躍。そして両膝で相手の頭を挟み込み、空いている左手で相手の頭を押す。更に背中のスラスタ吹かせて一気に加速をつけて相手を顔面からアスファルトに叩きつけた。

敵から離れてトラックを追いかける。トラックも必死に逃げようとしているのだが、いかんせん俺の方がスピードは速い。トラックと俺の距離は次第に縮まっていく。

走りながらブレードを構える。そして中にいるはずのアリサを傷つけないようにトラックの荷台のコンテナのとびらを切り裂く。

いた

暗い暗いコンテナの中にアリサはいた。僅かに入り込む月明かりが彼女を照らす。

泣いている。

それが堪らなく嫌だ。奥歯を血が出そうなほど噛みしめる。今すぐ顔の装甲を外して、俺の顔を彼女に見せたい。安心させたい。

仮面につけられたボイスチェンジャーの機能を停止させる。普段の任務中なら男であることを隠すために停止することは禁止されている。

けれど

「待ってろッ！今俺が助けるッ!!」

叫んでしまった。

「えっ?」

アリサは驚いている。無理もないか、女にしか操縦できないISから男の声がしたんだもんな。

ブレードを収縮、両腕で扉をこじ開ける。

「アリ……ッ!」

名前を叫ぼうとしたところで首に先ほどと同じ鞭が絡まった。

まだ生きてるか、ならば次で終わらせる。より深く、一撃でその生命を絶たせてみる。

トラックから飛び降りる。

右手に再度ビームブレードを展開、刃を顕現させる。ブレードで鞭を切断、そして敵

に斬りかかる。

敵も実体長剣で応戦、対向車線にも移動しながらの斬り合い。剣の実力は俺の方が高い。しかし、相手は前腕にシールドを装備しているため、上手く攻撃が通らない。

より心を研ぎ澄ませていく。より鋭く、より強烈に、相手を葬るための一撃を。

『……少しだけ制限を外してやる』

ゼロの声が頭に響いた。珍しい、彼奴が斬り合いの真つ最中に声をかけるなんて。

そう思ったのも束の間、横薙ぎに振ったブレードが敵の剣を切り裂いた。

「ナツ!？」

敵は武器を投げ捨て、俺から距離を離そうと前に進む。

何だ今のは？ 異様な程の鋭さを持っていた。今の俺では不可能な一撃だった。それに異様に反応速度が速い。これが制限を解除した力か？ 性能が上がっているのがわかる。

だが考えている暇はない。敵を追わねば。敵はついにトラックを追い越し、俺もまたトラックを追い抜いた。

ドス黒い感情を刃に載せる。機体から力が溢れてくる。

何だこれは？ 訳がわからない。力がこみ上げてくる。

刃を構える。溢れるエネルギーに耐えきれず、形を保てなくなった刃が霧散する。

そして新たに刃が生まれる。

それは今までの翡翠色の刃とは異なる宇宙の如き漆黒の刃、あまりにも美しく、しかし連想するは死。これから放つ一撃は生命を枯らす零させるだろう。

敵もこの刃の危険性に気づいたのかシールドでガードを先ほどよりも深く固める。だがそんなものは意味がない。この刃にその程度の守りなど無いに等しい。

落ちろ

墜ちろ

墜ちろ

その名は。

「――」



## 貴方を誘う、今宵

鮮血を撒き散らしながら身体を両断された敵の肉体が速度を失い、俺を通り過ぎて敵のトラックに直撃した。

振るった劔は敵の盾を真正面から切り裂いていく。発動するはずの絶対防御は発動するがその直後に刃に打ち消されて行く。

刃は盾を切り裂いて、敵の腕にその牙を向ける。皮膚を裂き、肉を切り裂いていき、骨を断ち、また肉を切り裂き、再び皮膚を裂いた。

そこまでも敵の顔は何一つ変わっていないかった。いや、正確に言うとな脳が認識することを拒んでいたのかもしれない。劔を振るってから腕を断つまでに数秒もかからなかった。

そして漆黒の刃が己の肩に触れた時、敵は己の死というものを確信した。本来の時間は一瞬の出来事だったのだろうが、俺にとってはゆっくりと見えた。

触れた刃が敵の身体をなぞって行くごと敵の顔は絶望に歪んでいくのがわかった。

臓器を切り裂いていくのが刃を伝播して俺の手に伝わってくるのがわかる。

そして完全に敵を切り裂いた。敵の命が止まるのがわかった。命と共にISも終わり、やがてその力が消えて行った。

命を枯らす一撃、これはそう例えるべきだろうか。

トラックの動きが止まった。機能を停止したISがトラックにぶつかったださい、運転していた敵にISが直撃したのだろう。運転席から動くものの気配がない。即死だったのだろうか？

トラックに近づいていき、誘拐犯達の様子を確認する。ISに乗っていた女は俺に身体を切り裂かれて息をしておらず、もう一人の運転していた女はトラックとISがぶつかった際に押しつぶされて死んでしまったようだ。

なんとも呆気なく終わってしまったな。それにしても最後に振った一撃は訳のわからない威力だった。ブレードの柄を見るとビームを放出する場所が焼き溶けていた。リスさんは限界まで威力をあげても溶けないと言っていたのに。

トラックの後方に回り込んで破損しているコンテナの扉に手をかける。扉をむしり取って、地面に投げ捨てる。

仮面は装備したままISを解除してからトラックのコンテナの中に乗り込んだ。

いた、肩を震わせながら怯えながらこちらを見ているアリサが。  
「いや……やめて」

怯えている。アリサを悲しませてしまった。その事がズキりと心を切り刻む。

安心させてやらないといけない。ある種の使命感に心が駆られてしまう。だがこれをしてしまうのは良い事ではない。けど俺はやらんといない。

仮面に手をかけて留め具を外す。そして仮面を持ったままゆっくりと顔から離す。

「……助けにきた、遅れたけど」

相変わらず無様だな。ティファの時もそうだったけど、俺はどうも言葉を選ぶセンスがないな。

「……え」

アリサが俺を見て驚いている。無理もないか。

「大丈夫か？」

「……………一夏くん？」

アリサの目が涙で満たされていく。涙目で俺を見つめ、嗚咽を漏らし始めた。そして我慢できなくなつたのか、立ち上がって俺に飛びついてきた。

「良かった、良かった！一夏くんが生きてて！」

「ごめんな、もっと早く言えたらよかったんだけど」

大泣きするアリサの頭を優しく撫でる。

「ううん、良いの。一夏くんが生きていただけでいいの。悲しかったんだよ、いきなりいなくなつて！ティファちゃんもいなくなつたんだよ」

そうか、確かティファも死んだ事になつてゐるんだっけか。

「安心しろティファもちゃんと生きてる。俺と同じ組織に所属している」

「本当？良かった」

「ああ、本当だ。それよりここから出ようか。動けるか」

アリサに問いかけるとアリサは俺の服をギュツと強く掴むと首を横に振つた。

「運んで」

数少ないアリサからのお願ひ事、聞かないわけにはいかないな。

「……わかつた。しっかり掴まつてろよ」

腕と脚の装甲を展開してからアリサを抱え上げた。その体制は所謂お姫様抱っここというやつだ。

「わっ！ちよつ、一夏くん!?!」

いきなり抱っこされてアリサが驚いている。さつきよりも抱きしめる力が強くなり、顔も近くなる。うん、いつ見ても可愛い。

「嫌か、こういうの」

「嫌じゃないけど……うん、これはこれで」

頬を赤らめながら顔をそらすアリサ。

トラックから降りて、道の端による。そこでアリサを下ろすと、アリサは俺から離れた。俺も展開していた腕と脚の装甲を収縮した。

「一夏くん、説明して。あの時から何があったのか」

アリサが今まで見せた事のない不満げで、かつ真剣な表情をしている。

流石にアリサには説明しないとな。誘拐されてから今日までの事を。

「わかった」

「取り敢えず、こんなもんだな」

「……………」

アリサに説明する事数分、アリサは言葉を出せずにいた。

「……一夏くん、しゃがんで」

「ん？わかった」

アリサに言われた通り、その場にしゃがみこんだ。するとすぐにアリサが俺を包み込むように目の前から抱きしめた。

「アリサ？」

「ゴメン、今はこうさせて。なんだか一夏くんが遠くに感じたから、近くにいて欲しいの」

「悪い、離れすぎてたな。でも俺にはやる事があるんだよ、だからまた行かないといけないんだよ」

俺がその言葉を言うとアリサの抱きしめる力がました。俺を離さない様により強く。

「わかってくれ、俺は行かないといけないんだ。また戻ってくるから」

「やだーもつといてよ、なんで一夏くんは何処かに行くの!?!私は一夏くんといたいの!ここで離れたら一夏くん今度は本当にしんじやうかもしれないんだよ!」

力強く抱きしめる腕を離して、アリサの肩に両手をおいてアリサの目を見つめる。

「アリサ、俺は死なん。だから待っていてくれ、この国に俺の居場所はないんだ。また必ず会える」

「一夏くん……」

アリサが俺の顔をじつと見据える。瞳は涙で潤んでおり、悲しげに俺を捉えている。

『一夏、撤退命令だ。誘宵と警察のヘリがこつちに来ている。数分もしないうちにこつ

ちに着くはずだ。』

(了解)

話しかけてきたゼロに言葉を吐きださずに返事をする。

撤退するという事はアリサから離れないといけないという事か。

「アリサ、ここにもうすぐヘリがくる。俺は戻らないといけない。わかってくれるな」

俺が諭す様に話すと、アリサは涙を堪えながら微笑んだ。

「わかった、いつかは戻ってきてね。私、待つてるから」

微笑むアリサの肩に両手をおいて、俺は優しくそつとアリサの口に口をつけた。

一瞬だったが永く感じた。ゆっくりと口と口を離すとアリサは信じられないくらい顔が紅くなって、顔から湯気が出てしまいそうになっている。

「またな」

一度微笑んでから、アリサに背を向けて俺は高速道路のフェンスを乗り越えて、山の中に消えていった。

## 変化は始まる

「アリサ！大丈夫か!？」

へりから降りた誘宵グループの長、誘宵アリサの父である誘宵皇が娘のアリサに駆け寄る。

「パパ……」

アリサが呆然としながら皇の方に振り向く。皇はアリサを力強く抱きしめた。

「すまない、私の所為でお前に迷惑をかけてしまって。不甲斐ない父親ですまない」

「パパ、大丈夫。心配しなくていいよ。一夏くんが助けてくれたから」

その言葉を聞いた皇の動きが止まった。そしてゆっくりとアリサの肩を持つと、アリサと目線を合わせた。

「どういう事だアリサ？一夏君が生きていた？」

「うん、生きてた。何でか知らないけどISに乗って私を助けにきてくれたの」

「ISに?………アリサ、その事は誰にも言うんじゃないよ」

数秒の沈黙の後に皇は真剣な表情でアリサに話しかけた。

「わかっている。これは一夏くんの秘密、大切な大切な。だから誰にも言わない。それに



「パパ、私決めたの」

ジツトリとした纏わりつく様な声色で話し、自分を抱きしめるそぶりをするアリサ。今までに見た事のないアリサの姿に皇は戸惑いを隠せない。

「IS操縦者になる。守る力のために、一夏くんに会うために。誰にも止めさせない、私の純粋で貴い感情を」

「アリサ……………」

決意を秘めたその瞳に皇は驚きを隠せないでいた。

「目標地点までもう少し」

アリサと別れた後、俺は合流地点に行くために山の中を走っていた。誰かに見られないようにISに保管していた迷彩服を着て、明かりをつけるわけにはいかなかったので仮面

につけられている暗視スコープを使う。

アリサと話したい事がたくさんあったので非常に心残りがある。だがそれ以上に心配しなければならぬ事がある。

ISコアの確保。最後の一撃で奴の体ごと破壊したはず、だから俺は回収すること忘れてしまっていた。余りにも愚か。スコールさんになんて顔をすれば良いのかわからない。

それにあれからは声が聞こえなかったから、多分ネオ製の量産型コアだろう。この一件にはネオが絡んでいると言う事なのだろうか。

そんな事を考えているうちに合流地点の道路についた。既に迎えの車が到着していた。

「お疲れ様、ゼロ」

「スコールさん……」

スコールさんが既に俺の事を待ってくれていた。正直、どんな顔すれば良いのかわからない。俺のミスで亡国機業にどれだけの損害がでるのかわからない。

「スコールさん……すいません。俺……」

「話はまず此方から」

スコールさんに言葉を遮られた。

「多分、貴方も感づいていると思うけど今回の件にはネオが関わっている」  
俺は無言で頷く。それは俺も気づいていた。

「それでついさつき、本部からある情報が送られて来たのよ。各国に量産型ISコアの設計図が送りつけられたってね」

「……嘘だろ」

あのコアの存在を知っているのはネオと俺たちだけだ。俺たちが発信じゃないとするとネオが送りつけたのか？だが何のために？奴らの目的が何かはよくわからないが、あの量産コアの情報は貴重なはず。それともそれ以上の何かがあるのか？

「ゼロ」

思考の海に潜りかけていたところをスコールさんに戻された。

「今のところ、貴方がやれる事はない。けれどすぐにも変化は訪れるはずよ。遅かれ早かれ、小さくか大きくか、表も裏も世界は変化し始める。そうなるモノを奴らは出して来た。一度廻り始めた水車は水が尽きるまで廻り続けるのよ。だから覚悟しておきなさい」

スコールさんはそれだけを言うと車に乗り込んだ。

「……………」

俺にはまだ難しい事はわからない。これからどうなって行くのかも理解できない。

未熟すぎる。世界情勢なんかも知らん。ただ目の前の事を考えるだけでも大変なんだよ。

だから今はこんな言葉しか言えない。

「ムカつく」

「アリサ、これから僕は君に反対はしない。それなり覚悟はしてるかい？」  
「勿論、私は止まっていたくない。一夏くんにむかうために進み続けるの」

あの誘拐事件から数日後、私はパパに連れられて誘宵グループのＩＳ開発部につれてこられた。今はテーブルを介して対面にソファアに座っている。

誘宵グループはＩＳ開発企業において世界でも一位になっている。そして企業で唯一、ＩＳコアを保有している。他の企業はＩＳのボディのみを使っているが、こっちは違う。そして国際ＩＳ委員会の理事に企業として入っているが、委員会から命令を下

される事はない。理由は束さんが絡んでいるらしいが私はよく知らない。

そしてこのグループのＩＳの特徴としては製造されるＩＳの殆どが極地活動用や災害救助用である。無論、競技用も作られてはいるがそんなの全体の半分にも満たない。極地活動用は放射線汚染地域や深海などで用いられ、宇宙活動用も試作され続けている。

災害救助用は火事、地震、遭難、物資の運搬など様々な場面で用いられ、既に何回も派遣されている。

「……わかった。それじゃあ、君を僕たちの企業の一員として迎え入れるよ」

「ありがとう、パパ」

私はこれから誘宵グループ専属のＩＳのテストパイロット、またモンドグロツソなどの大会に出場する企業代表になるために訓練を積む事になる。それでも構わない。

「それと……これは束くんから」

そう言うとパパはテーブルの上に何かを置いた。よくわからないけど、特別な何かを感じる。

「これは……」

「僕が束くんから譲り受けたコアの中で唯一使用してなかったコア。乗る者を選ぶが始まりの五つのコア、四番目に作られたNo. 003のコア。これは束くんから君へ渡して

くれと言われたよ。このコアの自我がアリスを気に入ったからってね」

パパの言っていることがよくわからない。つまりコアの中の意思が私を選んだってこと。東さんのところで聞こえていたのは、私を呼ぶ声だったの？

そんな事を考えながら、私はコアに触れた。

目の前が変化した。白い光に包まれて、優しい声で囁かれる。

『はじめてまして』

## 同僚との会話

亡国機業本部訓練棟の武道場。今は訓練の時間である。

「ふうう……」

「……………」

俺の目の前には構えをとる同僚のアドルフ。こいつとは何度も闘っているのだが今のところ負け越している。同じ年の人間との喧嘩は誘拐される前は一度も負けたことはなかった。けれど、こいつとであってから何度も負けている。無論、俺も勝つてはい

る。  
アドルフの紅色の瞳が俺を見据える。余りにも鋭い、この年齢でこんな目をできるのか信じられない。

かれこれ数分ぐらい試合をしているがケリが付かず、今は膠着状態になっている。肌  
にまとわりつく嫌な緊張感。動けばやられるか？

ピーーーー!!

「はいやめ、お疲れさん」

室内に電子音が響き、試合を見ていたアレキサンダー先輩が試合を止める。

俺たちは互いに構えを解いて、礼をする。

「今は俺が負け越してるっけ？」

「……ああ」

抑揚の無い声でアドルフが返事をした。アドルフはテンションが高い方ではないが、ノリが悪いわけではない。むしろ良い方だ。

「飯？」

「ああ、ジークは先に行ってると言ってた」

「じゃあ、行くか」

「おーい、一人忘れてっぞ」

武道場を出ようとしたところを先輩に呼び止められた。先輩の方を向くとある方向を指差していた。そちらを向くと、ジークとの試合で気絶したグレイがいた。忘れていたぜ。

「右」

「なら、左」

顔を合わせることなく、俺が左足を、アドルフがジークの右足を掴んで引き摺る。このまま食堂まで行こう。グレイが目覚めたらそれで良いだろう。



「恥かしい……本当、なんで起こさねえんだよ」

食堂、目の前の料理に手を付けることなく、グレイは両手で顔を覆っている。

結局あの後グレイは起きることなく、食堂の前で俺たちが叩き起こすことになった。一応、気絶している間に俺とアドルフで更衣室で着替えさせた。

周りにいた人に爆笑されていた。その事が恥ずかしかったのか、先ほどから顔を覆っている。

「いや……まさか……なあ、アドルフ」

引きつった笑いをしながら俺はアドルフに目を向ける。アドルフは俺やグレイと目を合わせないように視線をそらした。

「まさか……最後まで起きないとは思わなかったんだよ。途中で起きると思ってたからな……だから、なあ」

俺もアドルフもグレイから目を逸らす。

だって予想外だもん。

「それにしても、僕たちがであってから一年以上が経ったよね」

場の空気を戻すためにジークが話題をふる。それに思わず俺たちは救いを感じた。流石俺たち同室の良心。

「そうか……もうそんなにか」

思い返せば色々なことが起きた。

アリサにキスをされ、誘拐されて、スコールさんに助けられ、マドカと再開して、I Sを動かして、部隊に入って、こいつらにあって、任務に出て、テイファを助けて、束さんとあって、アリサを助けて、アリサにキスをした。

「訓練きつかったな」

何時の間にかグレイが立ち直っていた。

思い出す訓練の数々、何度も死ぬような思いをした。

山中での実戦訓練、無人島やジャングルでの一週間ほどのサバイバル生活。

「色々ありすぎたな」

「色々あったよな」

「色々だな」

「色々……か」

四人とも苦笑いしている。

「中でもあれだな」

グレイが話をし始めた。

「この前の無人島サバイバルはやばかったな。ナイフ持たされて、一週間暮らせつて言われたやつ。水を見つけて大騒ぎして、火をつけて興奮したよな。最後のほうは殆ど野生児みたいでさ」

ケラケラと笑いながらグレイが話す。確かにあれは辛かった。

「まあ、一番思いで深いのは訓練が終わって本部に戻ってきた時だよな」

こちらをみてニヤリと笑うグレイ。そしてジークがその事を思い出したのか話し始める。

「ああ、一夏がティファニアに抱きついたのでしょ。確かにあれは凄かったね。一夏、叫んでたもん。性欲が溢れたんだろうね」

「あれは仕方がないだろう。一週間も禁欲的な生活をしていて、帰ってきたらティファアが抱きついてきて、風呂上りなのか知らないが匂いがした。なら、わかるだろ。抱きついてきたから、抱き返して、匂いを嗅いだんだよ。そしたら、内側から本能が芽を出したんだよ。俺の雄が雌を叫んだんだよ」

抱きついたことも、叫んだことも否定はしない。だって事実なのだから。

「まあ、あの場面ならそうなるわな。俺もそうするよ、相手がいれば。けど……いないだろ」

グレイが捨てられた仔犬のような悲しげな瞳をして呟いた。

「でも、本当に早いなだね。時間が経つのは」

ジークの言葉には同意せざるを得ない。ここにきてからは生きてる実感があるからかわからないが、時間が経つのが早い。

だからかな、もうすぐで始まるんだよ。第二回モンド・グロツソが。

## 第二回モンド・グロツソ

1

肉体にまとわりつく

コールタールのように深い粘りつくような怒り

怒りは俺の肉体を変質させていく

怒りは鎧になる

殺意という鎧に

アリスを救う時に感じた殺意とは種類が異なる

耳に入る戯言が鎧を鍛えていく

鎧は俺の体を完全に包み込む

鎧という繭は俺を変質させる

手に持つは破壊を司る慟哭の劔

さあ、行こうか

目の前の敵を屠ろうか

「一夏、貴方今身長はどれくらいになったの？」

目の前のソファアに座っているスコールさんがいきなり訪ねてきた。

「ええつと、この前の健康診断の時には170を超えてました。ここにきてから20ぐらい伸びましたね」

亡国機業に入ってからというものの、俺の生活週間は変わった。沢山の食べ物を食べて、血を吐くような訓練をする。そのお陰と成長期が重なって、かなり身長が伸びた。

「そう、やっぱり。ちょっと前までは私より低かったのに、最近は殆ど同じ目線だっからね。この調子だとすぐ抜かれちゃうわね」

微笑むスコールさん。その視線が恥ずかしくて俺は目をそらした。

「それにしても、なんで俺はスーツをきているんですか？」

俺は今スコールさんを買って貰ったスーツを着ている。普通のサラリーマンが着るようなあれだ。まさか十二歳で着るとは思ってもいなかった。しかも値段が高く十万

はしていたと思う。支払いはスコールさんのポケットマネーから。

「いいじゃない、似合ってるんだから」

「それにサングラスまで」

「貴方、まだ顔つきは子供っぽいからね。誤魔化すためよ。こういう場所は大人の場所なのよ、ほらもうすぐ始まるわよ」

スコールさんは指を口に添えながら色っぽく話す。

窓の外に目をやる。そこでは二機のISが死闘を繰り広げていた。ISの性能を比較すると俺たちとどっこいどっこいだが、どちらも俺よりか技術力がある。部隊の中でも

スコールさんかシルヴィアさんぐらいだろう、あれに勝てるのは。

俺たちがいるのは第二回モンド・グロツソが行われているスタジアムのVIP席。完全個室になっているため、俺たち以外には誰もいない。

今は準決勝が行われている。

「態々俺を連れてくるなんて、どういうつもりですか？俺がコレ嫌いなもの知ってるでしょ」

前大会の時に俺は誘拐された。だから俺はこの大会の事を好ましく思っていない。その事をスコールさんも知ってるはずだ。

「そうね、そんなのは百も承知よ。けど、それ以上にコレを見る事で得られるものもある筈よ」

「……………確かに、そうですね」

「それより、貴方は何処が勝つと思う?」

「下馬評通りなら、イタリアか日本でしょうね。まあ、勝敗には興味ないけど」

「そう、それで一つ聞きたいのだけれど。貴方は織斑千冬についてどう思っているの?」  
その言葉を聞いて俺はスコールさんを睨みつけてしまった。サンングラス越しでも視線は感じている筈だが、スコールさんは態度を変えない。

「それは……………憎いと言えば憎いですが、しょうがない気もします。まあ、今となればどうでもいいんですけどね」

「……………そう」

俺の話聞いたスコールさんは何処か悲しそうだった。

沈黙が部屋の中を占領していく。別に嫌というわけではない。ただこんな空気を作り出してしまったことに対する罪悪感があるだけだ。

そんな空間を壊すように携帯の呼び出し音が室内の空気を塗り替えた。

スコールさんが携帯を取り出して受け答えし始める。

会話を続けて行く内にスコールさんの顔が険しくなっていくのがわかる。どんな事



をはなしているのだろうか、気にはなるが聞いてはいけないうらう。

「……………ふう」

会話を終え、携帯を切るとスコールさんは目の前に置かれてあるアイスコーヒーを手にとって啜った。

一息いれる。

「ゼロ、任務よ」

コードネームを呼ばれて、私から公へ心を入れ替える。ISを装着している左腕に妙な力が入る。

「織斑千冬の弟、織斑百春が誘拐された。私たちはその救出にいくわよ。まあ任務は誘拐犯の排除だけどね」

「……………バカなのか」

その言葉を聞いて、生まれた感情は衝撃ではなく呆れ。実の弟が誘拐されたというのに悲しいな。

「俺の時に日本は学習しなかったのかよ。警備はいるはずだろ？」

「それがいたけど相手の方が手練れだったそうよ。弟くんが泊まっていたホテルを襲撃したらしい」

成る程、もうどうでもいいや。

「わかりました。行きましようか、どうせ織斑千冬はこない。ならせめて、兄である俺が行きますよ」

織斑千冬は俺の時と同じで助けに

こないはずだ。

じゃないと俺は……………

だが意外にも救出劇は簡単に終わった。場所は港近くの倉庫、もう少し場所を考えなかったのかベタすぎるといいたくなる。

探し出したのは亡国機業の技術の賜物だった。

作戦なんてモノは録になかった。敵に気づかれないように俺が屋根に登って、ISを展開してから屋根をぶち破って中に侵入。

敵が驚いている間に剣や銃をコールして、切ったり撃ったり撥ねたり捻じったり潰し

たりして皆殺しにした。

実力のある者たちだったのだろうが、いきなりの事で戦闘体制に移れなかったり、I Sによる高軌道戦闘についてこれずにいた。

皆殺しにするまでは三分も時間はかからなかった。火薬の匂いが倉庫の中をみたくしている。

今は眠らされて、目隠しと猿轡をされ、倉庫の柱に紐で結び付けられて座っている弟に銃口を突きつけている。

呑気に寝てるなあ、俺が引き金を引けば簡単に命が終わるな。

「何をしてるのかしら？」

ハイヒールを履いた足で、倉庫の中に足音を響かせながらスコールさんが入ってきた。

「いやさ、任務は誘拐犯の排除ですよね？ だったら撃つてもいいかと思ひましてねえ」

「言い訳ないでしょ、早く戻るわよ」

「了解」

I Sを解除しようとした瞬間、扉が吹き飛んだ。スコールさんも咄嗟にI Sを展開した。

埃が舞う、よく目を凝らして扉のあった場所を観察する。

そこにいたのは鉄の武士、右手には剣を持っている。俺はよく知っている。こいつの事をよく知っている。だがどうしてここに来た。どうして来てくれなかった。

「お前たちが百春を誘拐した犯人か」

殺気を静かに孕みながら武士は此方に剣先を突きつけてきた。そんなモノを向けるなよ、どうして来たんだよ。

忘れようとしていた怒りが内側からこみ上げてくる。あの日の記憶を思い出し  
まう。

来ると信じて裏切られ、家族だとほざいていたくせに見捨てやがって、そこまでして栄光が欲しいのかと罵った。

慟哭はあの場所をみたしていった。犯人たちは俺には何もしなかった。

何も見えずに暗い暗い絶望がそこにはあった。何も見えなかった。

今回も助けにくるはずが無いと思っていたのに。

それなのにコイツは、コイツは……………

力を貸せよ、ゼロ。俺と共に奴に一泡吹かせてやるぞ。

「私の大切な人を失うわけにはいかん、覚悟しろ！」

それじゃあ俺は……………何だったんだよ。

どういう事だよ、教えてくれるのか？なあ、織斑千冬。

## 第二回モンド・グロツソ

## 2

大切な人か……なら俺は違ったのかよ。俺はあんたのなんだったんだよ。家族と言ったのは嘘だったのか？

「覚悟しろよ、誘拐犯どもが！」

先に仕掛けてきたのは織斑千冬、己の獲物である雪片を手に持ち此方に迫る。

鬼が宿ったようなその顔は見たモノに恐怖を抱かせるだろう。

「俺が一人でやります。逃げる時にはお願いします」

実体剣を一本コールする。今までの作戦で慣れ親しんで来た武器の一つだ。

「ちよつと待ちなさい」

スコールさんの言葉を無視して俺は織斑千冬に向かつていく。

倉庫の中に剣戟の音が響いていく。此方が劣勢、当たり前だ。相手はI S界においては世界最強の称号を背負う阿魔。だがそんなのはさつきまでだ。世界最強の称号を捨ててまで、家族を助けに来た。

引くも負けるもいけない。

織斑千冬が来た時に銃を百春に突きつけながら撤退すれば良かったのかもしれない。スコールさんと協力して戦えば勝機はあったのかもしれない。

だがそんな事では俺の怒りが収まらない。この闘いは俺の我が儘、エゴのための闘いだ。

俺は勝たなければならぬ。でなければ俺は進めないのだろう。俺は何一つ変わる事ができないのだろう。

故に戦う。

神経を最大限まで尖らせる。気を抜くな、倒すこと以外に考えることなどはない。

ISを最大限まで使え、俺の方が機体とコアの性能が高い。実力の差はそれで埋めてしまえ。

紛い物を振るうモノにオレは負けるはずがない。

呼吸を合わせろ、俺達は一心同体。No.005と呼吸を合わせられない奴には負るな。

「くっ！」

僅かだが俺が押し始めた。何故ここまで攻められているのか俺にはよくわからない。ただただ俺が押し始めた。

ただひたすらに自分の中から湧き上がる怒りに身を任せているだけだ。

両者つばぜり合う。

「どうした、そんなのかよ。折角、自分の弟を捨ててまで手に入れた称号を、弟を救うために放棄してきたのによお！」

心からの嫌味だ。こんなことぐらい言っても罰は当たりはしないだろ。

「……なんだと」

顔色が変わる。戸惑っているのかわからないが一瞬だけ力が緩んだ。

なんだ、動揺するなよ。お前は俺を捨てたんだろ。

「織斑一夏の時はよく覚えてるぜえ」

「まさか、一夏の時も貴様らが……」

「さあ、どうだかな。でもよく覚えてるぜ、お前に来てくれと助けを求めてたよ」

「貴様……」

阿魔からの剣の力が増してくる。

「それでお前が来ないと分かる泣き叫んでいたんだぜ、笑えるよなあ」

最初から来ないとわかっていたのに……………

「貴様がああああ!!」

激昂した織斑千冬に押し返された。怒れよ、もつと怒ってみろよ。それ以上の怒りを俺はあの時と今孕んでいるんだよ。

なんで来なかつたんだよ、なんで来たんだよ。

俺と百春の違いはなんだ。生意気だったのか、なあ教えてみろよ。聞く気は無いけどな。

「お前を憎んでいたのかもなあ、織斑一夏は。何度も何度も雑言を放っていたんだせ」  
事実、あの時の俺は何度も何度も言つてたよ、

「貴様が一夏の何がわかるんだ!!」

黙れよ。

「お前が語るな!」

俺の事を語っていいのはアリサやティファのような俺の大切な人たちだ。

貴様じゃねえよ。

「一夏は、一夏はそんな子じゃない」

だったら、だったら。

「ははははははははは!!」

不思議だが、笑いがこみ上げて来やがる。怒ってるのに、怒ってるのに。

なんでだよ……

その思いが一瞬の隙を作ってしまった。

見逃されるはずはない。袈裟懸けをくらい、そして腹にも蹴りを一撃もらった。



意識が飛びそうになる。視界が暗くなっていく。だから……  
力を入れろ、剣を握りしめろ。目の前の敵を倒せ。

覚醒、追撃を仕掛けて来た阿魔に一太刀をいれる。だが暮桜の非固定ユニットに阻まれる。後ろに飛びながら右手に持っている剣を収縮、右手には新たにビームサーベル。

再度構える。

息を整えていく、冷静になれ。有利なのは俺だ。

だがまだだ。もっとこみ上げていく怒りを現せ。

力が必要だ。

ねじ伏せる力が。

存在を証明するための力が。

「貴様のような奴と話していても拉致があかん。百春を誘拐したことと、一夏を誘拐して殺したことを償ってもらうぞ！」

雪片が真つ二つに別れ、鏢の位置から白い美しい刃が現れた。

零落白夜、織斑千冬の戦鬪の代名詞とも言える単一能力。絶対防御を無効にして敵を切り裂く、必殺の劔。

黙れよ、俺の仇なんてとってんじゃねえよ。

「マガイモノが、オレにそれを見せるのか？ 贗作風情が、オレに嫉妬を向けたのか？」

「貴様は何を言っている？」

内側から力が溢れてくる。そうか、これはあの時のか。

そうだ、行くぞ。

俺達<sup>オレ</sup>がやるのだ。

奴らに見せつけろ。

こみあげろ、絶望を見せてやれ。

何もかもを零にさせ、全ての命を落とさせる。

これ喰らえば二度と光を拝めると思うな。漆黒の闇に落ちてみる。

ビームサーベルの刃が消え去り、また新たな刃を生み出した。

それは零落白夜とは対照的な漆黒の刃。死を連想させる色ではあるが、禍々しさを感

じさせない。余りにも美しい刃。

さあ、行くぞ。

これは俺達<sup>オレ</sup>の力。

この刃の名は。

「零落極夜」

## 第二回モンド・グロツソ

## 3

白と黒、相対する色の刃の剣戟が行われる。

二つの刃は共に一撃必殺の劔、まともに食らってしまったのであれば死から逃げる事などできない。

俺たちは既に数十を超える打ち合いをしている。

暮桜の両肩の非固定ユニットは既に破壊されているが、俺には特記すべきほどの損傷はない。

先ほどとは格が違う。一撃でもまともに喰らえば敗北、だがまともに当てれば此方の勝利。

僅かだが、奴の太刀筋を俺が読める。そして躲すのはオレが行う。未だ未熟な俺を補う戦い方。

体がI Sの反応速度についていけず、鎧の内側から俺の肉体をズタズタに壊して行く。

だがこれは些か疲労感が溜まる。俺の体に無理をかけながらI Sを動かし続けるの

だ。耐久戦はない、はなから短期決戦。

それは相手も同じ、アレを発動させている間は常にシールドエネルギーが減り続けるはずだ。此方もか。

時間はない。だが勝つのだ。勝利には俺の方が飢えている。

勝つてみせる。俺が進むために、あんた達と決別するために勝つんだよ。もつと力を。

負けるわけにはいかない。No. 005相手には、オレの目の前で紛い物振るう見苦しい奴には。

「リアアアアアアア!!」

今の俺はあんたを越えられない。

けど。

俺オレならば超えてみせる。

零落白夜に変化が現れた。零落極夜と何度も何度もぶつかり、その美しい刃が壊れ始めてきたのだ。

「なっ?」

驚愕の表情をする織斑千冬、だが止まれない、引くわけにもいかない。

だが更に攻撃を重ねていくうちに形がゆらいでいく。壊れるまで秒読み、お終い。

もう終わらせてくれ、あんたとはこれ以上戦いたくはない。  
失せろ、贋作。

そして対に織斑千冬の力の象徴ともいえる零落白夜は消え去った。

雪片を破壊した。

打ち勝った。

これでとどめだ。

振り下ろすのは破壊の象徴。避けられない。このまま真つ二つに………ダメだ。

僅かに切るのが遅れた。それだけであいつは避ける事ができる。とはいっても絶対  
防御を掠め、そのエネルギーの残りを零にした。

ISの重さに耐えきれず、更に疲労感が溜まり織斑千冬は地面に倒れ伏した。

勝ったのか？

俺の方も体が限界を迎えているな、ISが無理に動きすぎて下手したら骨がいかれて  
いるかもしれない。

闘いが終わり、アタマに登っていた血がおりていく。ゆつくりとゆつくりと冷静にな  
れていく。

俺はやっぱり切れなかった……捨てられないのか？俺は、俺はあいつをまだ家族と認  
識しているのか？



動きが止まった。今度は完全に気絶したみたいだ。だが倒れはしない。屈強な意思が籠った瞳は俺からそれる事はない。

「もう、わかったよ。千冬姉……だから……」

目の前の視界が暗くなっていく。

ああ、そうか。俺も大分無理をしたもんな……………

次に目を覚ましたのはホテルの一室だった。

あれから何があつたのか全く記憶がない。多分ゼロが機体を操作して、スコールさんが運んできたのだろう。

「お目覚め？気分はどう？」

すぐ近くにスコールさんが座っていた。俺のことを心配していたのか、俺が目覚めるのを見ると安堵の表情を浮かべた。

「良いと思いますか？」

腕が上手く上がらないし、頭もガンガンと痛い。

「そう、軽口が言えるなら大丈夫よ。それと織斑千冬が引退したわよ」

何気なく語られた重大な事実、そうか引退したのか。

理由はなんだろうか、前回や今回の事を含め百春に危険がいくのを恐れたためか、それとも他の理由があるのか、よくわからないし、わかってとも思わない。

「驚かないの？」

無反応すぎた俺にスコールさんは疑問を感じたみたいだ。

「何となく今回の事件があった時から、引退するんだろうと考えていたんですよ。あれの思考ならね」

「悔いはないの？あの場所で貴方は素顔をさらして、ここから抜けても良かったのよ」

確かにスコールさんの言葉は正しいのかもしれない。闘いが始まる前に素顔を晒せば良かったのかもしれない。

けどしなかった。

「俺にもわかりませんよ。ただあの時は殺意が湧いたから殺そうとしたんですよ。それ



に俺は今の在り方に悔いはありません、これが運命なのだど理解してますから。だから俺はこの道を進みます」

「そう、でも無理はしないでね。貴方はまだ幼いんだから」

スコールさんは立ち上がって 俺を優しく抱きしめてくれた。いつ以来だろうか、確か俺が亡国機業に保護された時以来だと思ふ。

優しさに包まれて泣きそうになってしまう。でもなくわけにはいかない。弱さを見せてしまつてはいけない。

抱きしめられる事十数秒、スコールさんは俺から離れた。

「明日本部に帰る事になつてゐるから、今日はゆっくり休みなさい」

それだけを伝え、部屋の電気を消してスコールさんが部屋から出て行つた。残されたのは俺一人。

他に誰もいない部屋で俺は虚空に話しかける。

「俺は弱いのか。彼奴を殺せなかつたのは弱さか、それとも情を持つていたのか。見捨てられようと家族としての情があつたのか？捨てるよ、これ以上は悲しくなるから」  
静かに泣いた。

## 亡国機業総帥

目を覚ました。

隣を見た。

ティファが裸で寝ていた。

ああ……………そっかあ。

「元氣だしな、一夏。良かったじゃないの、これで大人の仲間入りだ」

シルヴィアさん、それは傷つく。

俺は今、亡国機業内で営まれているカフェで朝食後の珈琲をシルヴィアさんと一緒に

飲んでる。

あの後には直ぐにシャワーを浴びて、副隊長用の新品の制服に着替えて、グツスリとい顔で寝ているティファを叩き起こして、汚れたベッドを綺麗にするために二日目にしてクリーニングに出して、そして食欲はなかったけど朝食をとって、今に至る。

「苦っ」

副隊長になったから、つい気取ってブラック珈琲を飲んでみたらまだ苦くて好きではないな。

「ほれ、調子にのって。舌はまだお子ちゃまだねえ。砂糖入れな」

ニヤニヤと笑いながらテーブルの端に置かれてある砂糖瓶を俺の前に置いてくるシルヴィアさん。

少しムカつく。

砂糖はありがたく使わせてもらいます。

砂糖をいれて、スプーンで珈琲を混ぜる。一口口に含む。

うん、丁度良い。

珈琲を飲みながら、シルヴィアさんの方を見ると、俺はあるものを見つけた。

「あれ？シルヴィアさんって結婚は………ああ、あれは左手の薬指か」

シルヴィアさんの右手の親指に指輪が嵌められてあった。シンプルな作りのそれは

女性のシルヴィアさんが付けるよりか、男性が付けた方が似合いそうなデザインであった。

今まで見たことは無かったが、傷の入り方などを確認すると前々から身につけていたのだろうと想像がつく。俺が気づかなかっただけのようだ。

「ん、こいつかい？」

俺の目の前に右手をかざして確認させる。俺は無言で頷くとシルヴィアさんは自分の胸の前に手を持ってきてきて大事そうに左手で包んだ。

「これはな、お守りなんだよ。あたしがここに入ってから最初に配属された部隊の隊長から貰ったものなんだよ。元はその人が付けてたんだけどね。カッコいい人だったよ、惚れてたね」

指輪を触りながら話すシルヴィアさん。指輪の触り方から大切な人だったのだろうと想像できる。

「その人は今何処にいるんですか？」

「死んだよ、あたしのミスでね」

「んっ」

吐こうとした息が喉でつかえた。

至らぬ事を聞いてしまった。

「すいません、嫌な気にさせてしまいましたね」

「気にするな、事実だからな。あたしがその部隊で副隊長になってからの初めての任務でさ、失敗してしまつてな。それで隊長が死んじまつたんだよ。その時隊長があたしにこの指輪を渡したんだよ。これからの為につて言つてさ」

「それじゃあ、それは大切なものなんですね」

「そゆこと。ほら、珈琲飲んだんなら仕事に移るよ。あんた、スクールに呼びだされてるんだろ」

珈琲を飲み干して、席から立ち上がつて会計を済ませる。そして店から出る。

「ええ、そうですよ。なんでも総帥に合わせるとか言つてましたね」

「ああ、あの人か」

シルヴィアさんが露骨に嫌な顔をした。

「どんな人なんですか？」

「あたしも何度かしか会つたことないから。言いにくいな、悪い人ではないな。寧ろ良い人だと思ふ。ただ、底が見えないというか、接しやすいんだけど、接し辛い。そんな感じの人だよ」

シルヴィアさんにここまで言わせるとは、恐ろしい人だな、俺たちのトップは。

「それじゃあ、失礼します」

「おう、頑張れよ」

その後スコールさんと合流して、ある部屋に向かう事となった。その部屋に向かうには副隊長以上の権限がないと不可能らしく、俺も未だその資格を正式に持つていない為、スコールさんがいないといく事ができない。

通路には俺たちの二人以外は誰もいない。

「それで、昨日はティファとお楽しみみたいだったじゃない」

「言わないで下さい」

「あら、私は嬉しいのよ。あんなに小さかった子供が何時の間にかこんなに大きく、私よりも大きくなって」

何時の間にか俺よりも背丈が低くなっていたスコールさんを見ながら、俺は溜息を吐いた。

「今度、私も相手してもらおうかしら」

スコールさんがこちらに妖艶な笑みを浮かべてきた。

これは捕食者の目だ。俺にはわかる。昨日のティファがそれだったからだ。

「ご冗談を」

スコールさんと会話していくうちにある部屋の前についた。ここが総帥室のようだ。

「私はここまでだから、後は貴方に任せるわ」

「わかりました」

スコールさんは踵を返して、元の道を辿って行った。

残されたのは俺一人、息を整える。身嗜みを確認する。問題は無し。よし。

ノックを二度。

「入りなさい」

扉の内側から声が聞こえた。男の老人の声だった。だが不思議な事に老いている雰囲気を感じさせないものであった。

「失礼します」

部屋の扉を開けて、部屋の中に入る。そしてゆっくりと扉を閉める。

部屋の中には一人の老人がいた。顔つきから判断するとアジア系の顔、いや寧ろ日本人のソレだ。白髪ではあるが禿げてはおらず、どことなく若々しいオーラを放っている。服装は日本の羽織り。

これが総帥か、予想とは違うな。

「はじめまして、コードネームゼロ」

総帥は俺に礼をしてきたので、俺も慌てて礼で返す。

「君の活躍は僕の耳にも入っておる。篠ノ之束くんと繋がりもあるらしいな。リリースくんが会いたがっていたよ」

「ええ、こちらにくる前から交流がありましたので」

「そうか、それは大切にしなさい。ソファアに座りなさい、君には話す事があるのでな」  
総帥が部屋に置かれてあるソファアに座るように手で招く。俺は。そちらまで歩いて行き、総帥と机を挟んで座る。

総帥は机に置かれた急須から二つの湯呑にお茶を注いで一つを俺に渡した。

「あ、ありがとうございます」

俺がそう言うと、総帥はニコリと笑った。なんだか、感覚がずらされる。

「では自己紹介をしようか、僕の名前は轡木十蔵。この亡国機業の総帥を務めておる」  
轡木？ 確か I S 学園の学園長がそんな苗字だった気がする。



「そして……………今は織斑一夏とっておこう」  
なんだ、今の言い方は。

「織斑一夏、君の祖父だ」

……………

「……………はあ!?!」

## 轡木十蔵

「君の祖父だ」

その言葉は俺がここに来てから聞いた言葉の中でも三本の指にはいるほどの衝撃的な一言であった。

祖父？ どういう事だ。確かにここにくる前から親戚については知らなかった。だが何故ここに？ 考えても考えても考えつかない。

「それで——」

総帥、轡木十蔵は話を続けようとする。

「待ってください」

右手を前に突き出して、話を一旦止める。このまま話されてしまったのならば整理できずにより混乱してしまうだろう。なのでここは少し時間が欲しい。

「どうかしましたか？」

「その、すいません。まだ状況が読み込めませんが、貴方が俺の祖父であるとして、母と父、何方ですか、それとその証拠はあるんですか？」

この人が俺の祖父だという証拠はない。だからこのまま話を信じる言葉は、例えば総帥

であつてもできない。

「ふむ、そうですね」

目の前に座る総帥は腕を組んで考えはじめた。そして考えること数秒後、口を開いた。

「僕は君の母親、轡木季菜の父親だ………そして、それを証明するには君自身が証明してくださいよ」

「………どういうことですか？」

話が読めない。何故俺が証明になるのだ。DNA検査でも行うのか？だがそんなものはいくらでもデータを改竄するのは簡単だろう。このコンピュータは大半がリリスさんの管理下に置かれているのだからな。

「君の背には生まれながら翅があるだろ」

ハネ？………そういう事か。

「ええ、確かに。物心ついた時にはそんな模様が背中についていましたけど、それがこの話に関係あるんですか」

背中のハネ、生まれた時から存在していたソレは俺が同級生たちに疎外される原因にもなった。まあ、アリサとティファが認めてくれたからいいけど。

「関係はあるさ。何故ならその翅は轡木家の血を継ぐもの一部に代々あらわれてきたも

のだからね」

そう言うのと轡木さんは着ていた羽織をはだけさせて、左肩を露出させる。そして後ろを振り返って、俺に背中を見せつける。

そこには俺と同じように、鮮やかで美しい蛾の翅が存在していた。しかし、俺のモノとは違う。俺のは完成された一对の翅なのに対して、総帥のモノは左側の翅しかなく、右の翅は存在していない。

「これで、君と僕に血縁関係がある事を理解したかね？」

服装を整えながら総帥が聞いてきた。

「ああ、どうやら本当みたいですね。でもどうして今になって現れたんですか？父さんたちが死んでから、いくらでも俺たちに会う時間はあつたはずですよ。それに右の翅は何ですか」

父さん達が死んでから今日この日までかなりの時間があつた。一年や二年ではない。五年以上もあつた。だが俺がこの人の顔を見たのは今日が初めてのはずだ。

何故会いにこなかった。何が目的なのか、それを探る必要がありそうだと。

「まず、右の翅については君の父親、織斑数児の血が関わっているね。アレもコチラと同じ、唯の家紋のようなモノだからさ」

「という、父さんの家も何か特別な………そもそも轡木の家ってなんなんですか」

背中に翅の模様がある人間なんて俺を除いて他には聞いた事がない。

それなのに今の総帥の話し方では、轡木そして父さんの血筋の人間には当たり前のようにも聞こえた。

「轡木、そして君の父親の家系は遙か昔より日本に存在している、名家のようなものだ。一説によれば飛鳥時代、下手したらより昔から存在している。だが決して表に出る事はなく裏から日本を見てきた一族、それが轡木だよ。そして背中の翅は代々家を継ぐ資格があるモノの背中に現れるのさ。といつても今の時代じゃほとんど関係ないけどね。何故背中に翅が現れるのかも科学的に証明されていない」

「そんなものが存在するんですか？」

「疑っているけどこれは事実だ。莫大な資産を持って日本を見て、世界を知ろうとした一族。今でも日本国内でもそれなりの力はあるよ」

「マジかよ」

今でも信じられない。そんなモノがあるなんて。

「話を戻そうか、儂が君たちに関わらなかつたのは幾つか理由があつたんじやよ」

右の翅は父さんの血のモノか。となるとこの血筋はどういう意味なのか。それに。

「理由？」

「一つは君の両親の頼みでね。季菜は昔から病弱でね、現代の医学でも治療が困難なも

のだった。医者からは長くないと言われておったんだ。轡木の女は早死にすると昔から言われていた」

感慨深そうに話し出した総帥。目には死んだ子を思い浮かべているのか、悲しんでいるように見える。

「それで、二人に頼まれたんじやよ。残りの人生は子ども達と暮らしたいってね。それで君と弟、そして養子だった千冬くんとマドカくんを連れていったんだよ」

三歳までの記憶を人は忘れてしまうと聞いた事がある。俺も轡木の家に行った事があるという事か。だがその話だと、織斑千冬はこの家の事を知っていると思うのだが、一度も話した事はなかったはずだ。

「……それで、もう一つは」

真打はこっちだ。

真剣な表情で尋ねた俺を見て、総帥は満足気な表情を浮かべた。

「その顔は、よく分かっているねえ。もう一つの理由は君達家族を隠す為だよ」

「隠す？」

「そう、隠すことさ………君はモンド・グロツソの時に誘拐されたら？」

「はい」

何故今その話をする。こんな場面でする話であるのだから、関係ない事ではないのだ

ろう。

「あれは君が織斑千冬の弟だから誘拐されたわけではない。君が君だから誘拐されたんだよ」

「……どういう事ですか？」

あれは織斑千冬の決勝戦出場を阻む為にやったものではないのか。だが何故俺だから誘拐されたのだ。

「気になる事が沢山あるみたいだね。ではその事も含めて、少しばかり君の爺さんの話を聞いてくれ」

それから話をされた。

血筋について、ネオと亡国機業について。

正直な事を言えば信じられない。言葉を頭で処理することができない。

爺さんからの話を聞いて、俺は顔を伏せ続けていた。頭をあげることができないのだ。

「……………一つ、聞いていいですか？」

顔を伏せたまま爺さんにあることを尋ねる。

「なんだい？」

「亡国機業の目的は何だ、そもそも亡国機業とは何だ」

上司に向けるような目つきではない鋭い射殺するような目を総帥に向けてしまう。

俺は今まで亡国機業に所属してきたが、その目的についてはスコールさんから少しだけ教えられたが、それは多分枝にすぎない。だからこそ今の俺には木を知る必要がある。

「その目は似てるな。いいですよ、君も幹部予備軍の一人ですから、知る必要がありますね」

ニコリと優しい笑みを浮かべ、話し始めた。

フロントム・タスク、日本名で言えば亡国機業。その起源は第二次世界大戦以前に遡



る。世界中には轡木一族のように裏の世界で活躍するモノたちが沢山いた。

そしてそいつらは技術が発達して行く世界を見てこう思った、世界というモノは無数に散らばる小さな国から一つの大きな国へと変貌していくだろうと。

そこで一部の裏の人間たちは手を取り合って、世界を円滑に統合する為の組織を作り上げることにした。

本部をとある小国に隠し、その国の実権を握り、組織を立ち上げた。

それが亡国機業。ファントム・タスク

幻影のように世界の裏から動き、与えられた仕事をこなす。

国を亡ぼし、小さな国から巨大な世界を織りなしていく機業。

それこそが亡国機業。ファントム・タスク

「こんなものかな。今の裏の世界はほぼ二つの勢力に別れている。亡国機業とネオ、亡国機業が一つに結ぶ為に活動しているとすれば、ネオはほどこくために活動していると言ってもいい。二つの組織は表にも力はある。亡国機業はアメリカやイギリスなんかだね。それで、他に聞きたいことは？」

爺さんがこちらに問いかけてくる。

「いや、ないよ。爺さん」

俺はそれを言つて、ゆつくりとソファから立ち上がる。

やることは決まつた。

「ありがとうございます、総帥。貴方の話でやることは決まりました。俺が、俺のこの手でネオを滅ぼしてみせます。それが俺のすべきことですから」

今の俺の顔は何処まで醜いのだろうか、まだ見ぬ何かに対する殺意を胸に俺はこの世界を生きていく。

## ネオの猛者

「あははーどうした、どうしたあー！」

目の前から敵、ガーベラが迫る。後方からも三機。

凌げるか、武器を確認する。残弾数はほぼ零。接近戦用の武器はまだまだ余裕がある。だが残りのエネルギーは半分以下になっている。

何故こうなった。俺たちは任務だとある国の暴動を収めるために市街地で、その暴動を扇動していたネオと戦っていた。

敵をほぼ殲滅した時のことだった。新たにネオの軍勢が襲来し、俺は他のみんなと分断された。そして目の前には何度も戦ってきたガーベラという女とその部下三人。

多勢に無勢、しかもこちらは消耗した状態での戦いとなったために追い詰められている。

右手には長剣を一本、左手は徒手。スラストアー、起動系になんら問題はない。

どうやってこれを突破する。

敵はガーベラを主体にしながら、部下三人が俺から一定の距離を取りながら戦い続けている。

俺の機体は『ウルテナIII』、従来のウルテナ同様に基本パーツとは別にアーマーをかぶせることにより、特化した性能を発揮させる。俺が今被せているのは近接特化型のアサルトアームズ、白と赤のコントラストが象徴的なこれは、加速度だけなら全部のISの中で最高クラスである。

だがその加速度を何処で発揮させる。下手な事をして、対処されれば終わりだ。攻めて四を三に減らせれば、まだにげきれる。他の誰かが駆けつけてくれる可能性がある。

「ソコォー」

ガーベラからのランスが迫る。腹に突き刺さるそれを身を捻じる事がかわず。そして回転を利用して、背後に回り込み、ガーベラの背中を足場にして敵のうちの一機目掛けて最高加速を行う。

瞬きする間に敵との距離をゼロにする。敵は俺の加速度に驚いているようで、僅かに反応が遅れていた。

他の三機とは距離が離れている、だがそれも三秒もあれば詰められてしまう。ならばその三秒の間に状況を変えてやる。

敵が距離を取ろうとバックステップを行いかける。だがそれよりも早く俺のハイ

キックが敵の頭を捉える。そして動きが止まったところで顎に掌底、体が浮き上がったので胸ぐらを掴んで、残りの三人に向けて投げつけた。

「わ、わわ！」

投げられた敵を慌ててキャッチする一人。そしてそこにはガーベラ以外の三人が集まっている。

俺は離れる。

「何やってる！早く……ッ！」

他の三人に声をかけて近づこうとしていたガーベラが、突然方向を変えて三人から高速で離れる。

そして投げ飛ばされた人間を中心に爆発が起こった。投げ飛ばす際に爆弾を取り付け、集まったところで爆発を起こした。ガーベラのやつは気づいたが、2人を巻き込めたのは幸いだろう。

「やるじゃあ、ないか！」

背後からガーベラが襲って来た。振り向き、後方に移動しながらガーベラに剣を向ける。ガーベラもランスを構え、俺に向けて突いてくる。

捌く、躲す、いなす。

自分が今どの位置にいるのかを意識しながら、味方がいる位置にまで行こうとする。

だが。

空からビームが降り注いできた。

ガーベラも巻き込む、ビームの豪雨。ガーベラから距離を取って慌てて左手にシールドを展開する。

シールドを傘のようにしてビームの雨から身を守る。ガーベラは何発かが直撃したが、ビームの範囲から離脱をした。

「おい、クルーシャー！ テメエはあたしごとく殺す気なのか！ ああ!!」

ガーベラが空を見上げながら、怒声を放つ。

「問題?」

空から声がした。白、果てなく続く白を連想される声に釣られて、俺は天を仰ぐ。

そこにあつたものを表現するのであれば巨大な機械天使。

純白のボディ。ISのサイズとしては俺たちが搭乗しているモノよりも一回り程大きい、四、五メートル。何よりも特徴的なのはその形だ。普通のISが人が装着する鎧のような形であるとするれば、アレは殺意を具象化させた巨大な十字架。十字架の横棒、人で言うならば脇の部分からアームが伸びており、先端には通常のISサイズ程の手。

あまりにも不気味。今までに戦ったどのISよりも悍ましい。

「宿敵?」

修飾語の抜けた文ではあるが、言わんとしている事は俺でもある程度は推測できる。  
青色のモノアイが俺を見据える。

「手エだすなよ、あたしのフラストレーションの発散だ」  
「やだ」

二機のISが迫る。そして俺は一切の疑いを抱く事なく二機から逃げる。今は勝てない、万全な状態で戦うならまだしも、シールドエネルギーは半分を切っており、弾丸の数も残り少ない。まして相手は俺と同格と言える。コアに差があるといつてもこの状況は不利だ。

せめて、他の奴らがいるところまで逃げないと。

十字架の手の指先から放たれるビームが硬いアスファルトの土地を割り、俺に迫る。  
少ないシールドエネルギーではあるが、瞬時加速を使用して距離を離す。

「逃げる」

「逃げるかあ?」

十字架が速度を維持したまま降下し、ガーベラはランスからレイピアに持ちかえて接近戦を仕掛ける。

「ララララ!!」

芸術的なレイピアの連続攻撃が俺を攻め立てる。シールドを駆使して、直撃を避け

る。何度も何度も

吹き荒ぶ風のように俺の身体を打ち続ける。

熱源反応。

ソレの元は十字架からだった。指先をこちらに突き出し、指先と十字架の交差点にあたる部分にある砲門からビームが放たれようとしている。目測だけでそのビームの威力を予測するのであれば、マトモに食らってしまったのならば絶対防御が発動して、活動停止しまうだろう。

逃げなければ、だがその思考が行動に移るよりも速くにビームはガーベラを巻き込む勢いで放たれた。

ビームに対して正面を向き、盾を構えながら後方に跳躍する。周囲の空間を焦がしながら突き進むビーム。

反応が遅れていた。ビームがシールドに直撃した。勢いが殺せない。シールドに罅が入った。

どうする事もできない。余りにも勢いが強くビームから逃れる事ができない。

ビームに吹き飛ばされて、周囲の建物を打ち砕いて反対側の道路まで飛ばされ、シールドは破壊された。

「……あんたもヤバそうだな」



背後から先ほどとは違う安心する声が出た。

「シルヴィアさんもですよね」

シルヴィアさんがいた。

俺と同じようにシルヴィアさんも酷く手傷を追っているようだ。周囲にはガーベラと同じ機体が一つ、その部下と同じのが二つ。

どうやらシルヴィアさんも危険な状況らしい。互いに背中を合わせながら、敵を見据える。

「クルーシャ！今のは死にかけてぞ！」

「死んでない」

建物を破壊しながら、こちらにガーベラと十字架がやってきた。

「切り抜けるのは、ちよつと困難だな」

「珍しく弱気ですね。まあ、気持ちはわからなくもないですが」

「シールドエネルギーは？」

「半分を切ってます」

「あたしもだ。単一能力は使えないのか？」

「……無理ですね。アレは怒りや殺意と言った感情が極限まで昂らない限り使う事ができません。それにアレを使ってもこれを切り抜けるか」

No. 000のコアの持つ単一能力『零落極夜』、シールドエネルギーを消費する代わりに、絶対防御すら破壊してしまう刃を生み出す。俺とコアの？がりが高いが故に使用できるソレは俺自身が極限まで感情を昂らせない限り使用する事は不可能である。

「打つ手無しか？」

「かもしれないですね。前向きに考えて、これが終わったならなにするか考えます？」

「いいかもねえ、あたしはゆつくりと珈琲でも飲むよ。あんたは？」

「生存欲求が高まつてる、だからティファを抱くア！」

「……あんたらしいね」

「御相談は終わったかい？」

ガーベラと同じ機体に乗っている奴から話しかけられた。ガーベラを含め周囲の敵は何時でも攻撃が仕掛けられるように待機している。

「ザマア無いね」

酷くイラつかせる声、言い方であった。

「スカーラどうする」

ガーベラが問いかける。

「そうだねえこいつらが、命乞いをして、土下座して、ISを渡すんなら、逃がしてやつ

てもいいかなあ？」

神経を逆撫でるような、酷くイラつかせる話し方であった。ヘルメットに覆われていても、ニヤついている表情をしているのだという事は容易くわかった。

命乞いか、した事がないな。今の状況ではこの場を乗り切る事は不可能に近い。スコールさんたち、他のメンバーも今は敵と戦闘中。こちらに人員を割くことができないという事は、ヘルメットのモニターに映し出される映像から判断できる。

ここで命乞いをして、見逃してもらって、醜く生きて、アリサの元に戻るのも一つの手か。

決断。

「ゼロ、一丁やるか」

「そうですねえ」

どうやらシルヴィアさんの決断も俺と同じようで、安心した。

「はは、決断したのかい？なら早く見せてくれよ、イ、ノ、チ、ゴイ！」

スカーラと呼ばれた女が俺たちを蔑むように、見せ物を見る時のように笑っている。

息を整える。やる事は一つなのだ。難しい事ではない。

俺とシルヴィアさんは背中合わせになったまま、互いの背中を預けたまま、己の敵に向けて、右手の中指を突き立てた。

「バーカ、誰がそんなことするかよ。我ら亡国機業はなあ、貴様らのように惨めに生きる方法を知らないんだよ。命乞いをするくらいならなあ、気高く戦って死ぬことを選ぶんだよ！」

声高らかに宣言する。

「そういうことだ。私たちは諦めが良くないんだよ。残念だったねえ」

スカコーラという女の動きが止まった。そしてゆっくりと肩を震わせ始めた。

「そういうことかい、なら。ヤッチマエ！」

「命令してんじゃねえよ」

「五月蠅い」

戦闘再開の合図だった。

## 死の音

「行くぞ、ゼロ」

「リアアアアツー!」

二対七、数だけで判断するならば絶望的。それに加えてシールドエネルギーも残弾数も半分以下。どうしようもない。

「正面突破でスコール達の元に行くぞ」

目指すはスコールさん達がいる場所。ここから一キロも離れてはいないがそれ以上の距離を体感する事になるのは確かだ。

息を合わせて勢いよくかける。

「やれええええ!!」

スカーラという女が号令をかける。それに合わせてガーベラとクルーシャ以外の二人が突撃して来た。なんだ、あの三人は仲が悪いのか。

一人がシルヴィアさんにもう一人が俺にくる。二丁のアサルトライフルを展開。残り少ない段数、その全てを敵に向けて放った。数秒もしないうちに弾は切れ、敵もほぼ無傷といったところか。こちらに剣を構えて突撃してくる。

グリップから手を離して、アサルトライフルを半回転させて銃口付近を掴む。弾が切れた銃はどう扱うか。

簡単だ。

鈍器にすればいい。

二丁のアサルトライフルで敵を殴る。こんな事をしてしまえば銃身がおかしくなつてつかいものにならなくなるかもしれない。だが弾がないなら関係ない。

リズムカルに、踊るように敵を殴る。数度勢いよく殴り続けると銃身が曲がつてしまった。

銃を収縮して徒手になる。一度右足で怯んでいる相手の顎をアッパーのように蹴り上げ、追撃の跳躍回転蹴りで吹き飛ばす。

シルヴィアさんを見れば、既に相手の首をへし折っていた。相変わらずお早いこと

で。何も言わずシルヴィアさんは駆け出した。スコールさん達がいる場所まではまだ距離がある。

「スコールさん、援軍はまだですか。こっちは少しヤバイです」

『応援を行かせたいのはやまやまなんだけど、こっちもこっちで数が多いのよ』

どうやら、救援は望めそうもない。

どうするか。

敵が迫る。

右手に長剣を展開。

襲いかかるガーベラからレイピアによる高速の突き。

捌く。

躲す。

「どうした、向かって来いよ」

「言われなくても」

右足でガーベラの腹に蹴りを入れ、間髪いれずに十字に切り裂く。

更に追撃でもう一度切りかかろうとした時、俺の右腕にロープが巻きつかれた。ロープの元を辿ればガーベラの部下から放たれていた。そして反対側からももう一人の敵がロープで俺を捉えようとしている。

……みくびるな。

もう一人からのロープが飛んでくるよりも早く、俺はスラスターを吹かせて敵に突撃する。

手始めに左脚の浴びせ蹴り、ロープを相手の首に巻きつけて締め上げる。肩車するよ  
うな形になり、頭頂部に左のエルボー、エルボー、エルボー。

敵はロープを収縮して、俺を振りほどこうと必死に暴れる。敵から飛び降りて、アツパーを一撃。

視界の端の画面から他の敵の様子を探る。ガーベラとは違うやつがこちらに突撃してくる。

ガーベラはスカーラという女と一緒にシルヴィアさんの方についている。さすがにシルヴィアさんでもガーベラと同格の奴と一緒に相手するのは分が悪い。

武器を収縮、武器を持たなくなった右手でアツパーを食らわせた相手の首を掴む。背後からランスを持って突撃してくる敵に合わせて振り向く。

敵がついてくるのに合わせて、ランスを左肘で軌道をそらす。そしてランスを逸らされて態勢の崩れた敵の首を勢いよく掴んだ。

この程度の重量であれば、俺の相棒は飛行できる。反撃させるよりも早く飛び上がり、ガーベラ達に向けて掴んでいる敵を投げつけた。

ガーベラ達はソレをかわすが、投げられた奴らは地面に落下した。

地面に落下した奴らを高速で踏みつけた後、シルヴィアさんとガーベラ達の間に入り込む。

「シルヴィアさん、大丈夫ですか!？」

「銃弾がほぼない。だがまだやれるさ」



背中を合わせて敵へと向き直す。

できる限り一対複数の状況を避けなければならない。二人で全ての敵に向き合わなければ。

迎える。

乱戦、背中を取られないように互いが互いをカバーしながら敵を迎え撃つ。

だが流石に相手の数が多すぎる。二人では直ぐに隙ができてしまう。

それでも防御を優先しながら戦う。

二対四、なんとかやれるはずだ。

………四？

敵は七人いたはずだ。

俺が一人、シルヴィアさんが一人やったはずだ。

なら後一人は………

十字架だ。

肉体に悪寒が走る。

逃げろ。

本能が告げる。

その直後、警告と共に俺の視界が光に埋め尽くされた。

腕が動かない。シールドエネルギーも完全に空になった。ヘルメットの画面に表示されている機体状態を読み取った。左腕は完全に故障、それ以外の部位はエネルギーがあれば動くが、肝心なエネルギーがない。

シルヴィアさんは何処だ。うつ伏せになったまま顔だけを動かして無事かどうかを確認する。

いた。随分と吹き飛ばされたらしい。先ほどの衝撃で半壊した建物壁にもたれている。意識がないのか、一切動いていない。あの様子だったら、シルヴィアさんもエネルギーがなくなっているのだろう。

やられた。

認識外からの高高度のビームの砲撃、先ほどの一撃よりも強力であった。味方ごと巻き込んでまで、俺たちを殺しにかかった。

「クルーシャー！貴様、私ごと巻き込んでうちやがったな！殺すぞ！」

「そのまま死ねば良かったのに」

「でも敵は倒したんだからイイだろ」

どうやら敵も巻き添いにあつたらしい。こちらに近づいてくる。

「巫山戯んなよ………まあ、いいか。こうして」

スカーラと呼ばれる女が俺の頭を踏みつけてくる。

必死に抵抗する。頭を上げようとしても、腕が動かないために踏ん張る事ができない。足掻いても、足掻いても相手は足を退けない。

「クソムカつく敵を倒したんだからな。おい、やれ！」

その合図と共に他の量産機に乗っている二人が、俺の腕にワイヤーが巻きつける。

そのまま体が持ち上がっていき、空中で宙づりになった。

終われるか、こんな所で終われるか。

藻掻く。足掻く。それでもワイヤーは外れる事はない。

「せめて、いい声で死んでくれよ」

スカーラがランスを持ってこちらに近づいてくる。あれで俺を殺すつもりなのだろう。

「最後に言いたい事はあるか？今なら命乞いしたら許してやるかもな」

黙れ。

「死ね、クソアマ」

腹に一撃、蹴りが入れられた。よほど気に入らなかつたらしいな。最高の言葉だと思っただがな。

「そうかい、なら死ね！」

スカーラが俺から一旦離れる。速度をつけて絶対防御を貫通させるためなのだろう。

近づいてくる。

一呼吸を終えるうちにはあのランスに俺は貫かれているのだろう。

走馬灯が見える。

アリス、ティファ、マドカ、亡国機業の人たちと過ごしてきた日々の記憶が一瞬で頭の中を駆け巡って行った。

それでも終わりたくはない。

気を効かせろよ、ゼロ。

こんな時は不思議な力で覚醒って奴じゃないのか。

突き刺さる。

そう思い目を瞑りそうになった瞬間、俺の前に影が塞がった。

機体を砕く音、肉を貫く音が聞こえた。

発生源は俺ではない。

発生源は………シルヴィアさんだった。

## 指輪を貴方に

鮮血が顔にかかる。一瞬のうちに世界が曇る。

呼吸が止まった。叫びたい、しかし肉体がそれを許可しない。聞こえない慟哭を漏らす。

シルヴィアさんが俺を庇った。

俺の目の前には心臓の近くをランスで貫かれているシルヴィアさんがいる。

腕は力なく垂れ下がり、生気を感じさせない。僅かに残ったエネルギーを使用して俺を守ってくれた。

俺が弱いから。

「死に損ないが」

スカークがランスを振り回して、突き刺さったシルヴィアさんを強引に抜いた。

地面に叩きつけられた。シルヴィアさんのISが解除される。シルヴィアさんの着ているISスーツには血がべつとりとついている。

急がないと、まだシルヴィアさんは動いている。助けないと。

俺の大切な人が死んでしまう。

幾らでも人を殺してきた。それでも大切な人が無事ならばそれで良かった。でも今、死にそうになっている。

許せるモノか。

急いで助けなければ。

足掻いてもワイヤーはとけることはない。剣をコールして切り裂こうとしても手首ごと巻きつけられてしまっているために握る事ができない。最後の手段はISを解除する事だが、解除したらその瞬間にはワイヤーが巻きつくだろう。

「さあ、さつきは邪魔されたが今度はいかねえぞ」

スカーラが気を取り直してと言わんばかりにランスを振り回している。

終わりか。

そう思ったが、モニターに表示された情報を見る。

遅い……

次の瞬間、風を切り裂く音と共にワイヤーが撃ち抜かれた。両腕が自由になり、地面に落下した。五点着地の要領で着地の衝撃を軽め、直様動かないISを解除してシルヴィアさんの元に向かう。

「大丈夫!?お兄ちゃん!」

マドカ……エムが応援にきてくれたようだ。

それに続いて数機の反応、他のモノクローム・アバターのメンバーだろう。

「ゼロ、シルヴィアの治療をお願い。エム、ゼロの援護を」

スコールさんから指揮が飛んでくる。

俺がシルヴィアさんを抱え上げ、俺をエムが抱え上げて一時戦線を離脱する。

「エム、安全圏に離脱したら直様シルヴィアさんの応急処置にとりかかるぞ。これは……まずい」

俺の手に伝わってくるシルヴィアさんの鼓動が段々と小さくなつていく。何回も人を殺してきたからわかる。シルヴィアさんの命が途絶えようとしていることが。

数十秒のうちに安全圏に離脱することができた。そのまま付近のビルに入り込み、そこで応急処置をすることにした。

「エム、急いで応急具を出してくれ」

「落ち着いて、お兄ちゃん」

普段の俺ならここでお兄ちゃんと呼んだ事を注意するのだが、今の俺にそんな余裕はない。

エムが地面に布を敷き、そこにシルヴィアさんをねかせる。応急処置用の道具を受け取り、直様処置にとりかかる。

亡国機業では戦闘員の生存率をあげるために戦闘員ほぼ全員に応急処置用の医療道



具が持たされている。

何度も何度も練習してきたことだ。

しかし。

「……やめな。もう無理だ」

治療しようとする俺の手をシルヴィアさんが掴んで止めた。その手は普段の力強さからは信じられないくらい弱りきっていた。

そしてわかった、シルヴィアさんがもう死ぬということが。

視える、燃え盛る火炎が既に今にも消えてしまいそうな火種になってしまっている。

俺は、何も言えずに手を止めてしまった。

「お兄ちゃんー！」

マドカが手を止めてしまった俺を促す。早く治療してあげると、シルヴィアさんを助けてくれと。

シルヴィアさんはマドカ、そして俺にとつても姉のような頼れる存在であった。優しく、頼りになり、困った事があればいつでも相談に乗ってくれて、アドバイスもしてくれた。

大切な存在だ。

俺も失いたくない。

けど。

「やめてくれ……………」

こんなちっぽけな言葉しか言えない。

惨めすぎる。

「それで……………いいんだ」

シルヴィアさんが弱り切った手で指につけていた前の隊長の物だという指輪を取り外した。

「生を醜くしないでくれ」

そして俺の右手の親指にソレをはめた。指輪から伝わる冷たさは死を教えてください。

「一夏、ソレはあんたにあげる……………お守り……………呪いの指輪なんて……………言うなよ。悲しくなっちゃまう」

シルヴィアさんが薄く笑みを浮かべた。その笑みは美しかった。

「言いません。大切にします」

零れそうになる涙を堪える。

「……………そうか、よかった。あんたは強いけど、弱々しさがあるからね」

シルヴィアさんがゆっくりと目を瞑った。啞々、そうなのか。

「シルヴィアさん!」

泣きつ面になつてゐるマドカが叫んだ。

「マドカ……いい子にね。妹みたいで可愛かつたよ。ありがとう」

「っはい」

マドカは涙を流しながら、強がりの笑みをした。

「シルヴィアさん、ありがとうございました」

言いたいことはたくさんある。感謝の念は積もりに積もつて計れない。だからこの言葉を言った。

「うん、ありがとう………」

その言葉の直後、シルヴィアさんの心臓の動きが止まつた。ゆつくりと眠るようになつた。

頬にそつとふれ、優しく撫でる。生を失つた肌は残滓が残つてゐる。

そしてなにも言わずにシルヴィアさんの唇に唇を合わせた。

一瞬なのか永遠なのか、判断がつかなくなつた。それだけ、愛を込めた。

ゆつくりとシルヴィアさんの身体に衣服をかけてから離れ、そして立ち上がる。

やらねばならぬことがある。

「エム、シールドエネルギーを半分よこせ。俺が行く」

ケリをつけなければ、それが手向け。

「待って！お兄ちゃんのISは半壊してるんだよ！それなのに今いつでも……」

エムが俺を止める。

「だからだよ。だからこそ俺が出るんだよ。ケリをつけるために、示すために」

「……………戻ってきてね」

エムは諦めた様子で。シールドエネルギー移動用のチューブを取り出した。

ISを展開、チューブでISとISをつなげる。

エネルギーが送り込まれてくる。其の間に機体の現状を確認する。左手は完全に壊れているが他の部位はまだ使用することができる。装備はビームナイフ数本とビームブレード一本。殺れる。

数十秒のうちに補給作業は終了した。

「お兄ちゃん、戻ってきてね」

背後でエムがそう言った。

「わかってる、心配するな。シルヴィアさんを頼んだ」

ビームブレードを展開し、俺は再び戦場に向かった。

## 破壊者

ビームブレードを構える。

静かに、静かに心の奥底より静謐な殺意を汲み上げる。汲み上げたモノは器に注ぐ。

さあ、力を貸せ。

殺せ。

落ちろ、墮ちろ、墜ちろ。

全てを零ゼロにしろ。

零落極夜

敵を背後から瞬時加速を行い、一瞬で距離を詰め、防御をする腕ごと一人の兵士の首を刎ねた。

首の飛んだ胴体を蹴り飛ばし、戦いの中心に突入する。

「ゼロ!? 大丈夫なの?」

突入してきた俺に驚いたのか、スコールさんが珍しく慌てた様子で声をかけてきた。

「エムから補給を受けてきました。戦えます」

スコールさんが聞きたい事はこんなことじゃない。でもその事から逃げてしまった。

「シルヴィアは……………そう」

スコールさんは俺の様子でシルヴィアさんが死んだという事に気づいた。声色が凄く落ちていた。

「……………すいません、俺のせいです」

「気にしないで。職業柄、慣れてるわよ」

そんな事を言っただけはいるが、スコールさんは凄く辛そうだ。長年付き添ってきた相棒を亡くしてしまったのだ、それはとても辛い。

けれどその事を俺に悟らせまいと必死に強がっている。

「スコールさん、ここは俺が殺ります」

「駄目よ。貴方のIS左腕が動かないでしょ。それなら無理させるわけにはいかないわ」

スコールさんのいう事は正しい。

けどここで俺がケジメをつけないといけないんだ。

「零落極夜が発動してます。下手したら、皆を巻き込むかもしれません」

「……わかったわ、なら貴方が主体でやりなさい。私たちが援護するから。オータム、ティファ、聞こえた！」

スコールさんが回線を繋いで他のメンバーと連絡を取る。

「了解」

近くで戦っていた二人が返事をする。

「ゼロ」

冷たい声音でスコールさんが俺に話しかける。

「了解」

スラストアーを吹かし、敵に向かう。あのスカークとかいう奴だけは、この場で殺してみせる。

今俺が一人殺したために残りの敵の数は四人。そのうちの三人はかなりの実力者、一人相手にするだけでもきつい。

けどやるしかないだろ。

「戻ってきたのかい」

ガーベラがこちらに突撃して来る。手にはランスを構えている。

零落極夜の刃を振るう。風を切り、空を裂き、命を刈る。

黒い軌跡を描き、ガーベラの持つランスを切り飛ばした。続けざまに胴体を袈裟懸け、しかし直前で後方に下がられ、胸の装甲の表面を僅かに抉る程度の事しかできなかった。

胸の装甲を触るガーベラ、無理もない。絶対防御を無効にされ、切られたのだから慌てるはずだ。

「全員下がって！ヤバイー！」

ガーベラが咄嗟に大声で叫んだ。いい判断かもしれない。だがなあ！

俺に正面を向けたまま、ガーベラは高速で後ろに下がりはじめた。背を向ければ殺されてしまうと思ったのだろうか。

熱源反応。

「ウザいー！」

横から迫り来る強烈なビームを零落極夜の刃で真つ二つに流れを切り裂く。

「嘘？」

十字架のISに突撃する。先ほどまで俺たちを苦しめたビームでさえ今は赤子の手を捻るように簡単に無効にできる。

「クルーシヤー！気をつけろ！そいつは零落白夜が使える。あんたとの相性は最悪だ！」



零落極夜だ。

十字架から放たれる大小様々なビームの弾丸を打ち消し続ける。

敵を間合いに入れ込むなど簡単なこと。一振りでこいつを殺せる距離まできた。

十字架もアームの先についている巨大な腕で殴りかかり、体を回転させながら俺に対処する。だがこいつはどうかやら接近戦が苦手らしい。ガーベラやスカーラとかと比べたら、下手な部類に入る。

一本、左のアームを切り落とした。残りは右の手だけ。

構え、切り落とそうとしたところで相手の右手に変化があった。こちらに握り拳を向け、そして打ち出された。それはまさにロケットパンチ。その反動を利用することで、十字架は大きく後退していった。

飛んできた拳を一振りで切り落とす。

「クルーシャ、戻るぞ。アレはダメだ」

「……………わかった」

ガーベラとクルーシャとかいうのは戦線から離脱するようだ。

だがそいつらよりも殺さなければならぬ奴がいる。

「死ねええええ!!」

俺の背後、上空からスカーラが切りかかる。速度は速いけどなあ……

「貴様がアアアアアア!!」

振り向きざまに切り上げ、敵の武器ごと、右腕を切り落とした。神速の一太刀。

「あ……………ああ!」

宙を舞う右腕、スカーラはそれすら認識できず動きが止まる。

金的、浴びせ蹴り、トゥーキック、ムーンサルトキック。ながれるような連続攻撃。手を緩めるな、此処でこいつは殺さないといけない。

エネルギー残量を確認……少し極夜を使いすぎたか。

ブレードを収縮、落下してきた腕を掴み、その腕で、殴打、殴打、殴打!

腕がグチャグチャに潰れていく。血飛沫が飛び散り、肉片が落ち、骨が飛び出る。

それでも俺は攻撃をやめない。自機が破損しても、相手が戦意を失おうと、攻撃の手をゆるめることはない。

もつと冷静に、冷徹に、冷酷に、冷血に、相手を潰す。

「やせるかー」

とどめの一撃を放とうとしたところで、ガーベラが戻ってきて、俺とスカーラの間を割り込む。さらにそこに、合わせてビームの嵐。下がったのはフェイクか……

使えなくなったスカーラの右腕を放り投げて、ガーベラ達に向かおうとする。

しかし機体の動きが止まる。零落極夜を使い過ぎたようだ。もともとマドカから渡されたエネルギーも少なかったため、僅かな時間でからになったみたいだ。

空中で動きが止まり自由落下を始める。数メートルの距離を落ち、五点着地で衝撃をいなし。

「くそが……あいつ、殺す！腕が腕がアアアアア!!」

「ざまあないね。死なないうちにもどるぞ」

スカーラの首根っこを捕まえて、飛びたつていくガーベラ。

待てよ……待てよ。

動け、あと一撃で相手を倒せるんだ。こんな中途半端な終わり方でいい筈がない。

畜生が。

「アアアアアアアアッ！」

俺はその様子を何もできず、叫ぶしかなかった。

その後、俺たちは本部に戻った。

シルヴィアさんの葬儀は班員とシルヴィアさんと仲が良かった者達だけで行われた。

泣いているマドカを優しく泣き止ませながら、俺は涙が一つも出なかった。悲しいのに。

それ以上に心がある感情に支配されていた。

いつもシルヴィアさんと珈琲を飲んでいた喫茶店、二人がけのテーブル、対面には誰もいない。

今まで二人で過ごしていたが、今は一人だ。

目の前におかれてある珈琲カップを手にとり、口に含む。

「……………苦い」

その珈琲はどうしようもなく苦かった。

## 次の舞台へ

そこは無だった。

何も存在しない、何も嗅げない、何も聞こえない、何も感じない。

地に足がついていないのに、浮遊感を感じられない。どちらが上でどちらが下なのかすらわからない。

そこには俺以外何も無い。

なぜ俺がここにいるのかがわからない。

気づいたらここにいた。

生まれた頃の無垢な裸の姿で、俺は彷徨い続ける。

不気味な感覚が俺の周りをみたしている。

右腕が痺れてきた。何も動かしていない筈なのに、筋肉が痙攣を起こしてきた。血管が膨れ上がってくる。熱が感じられなくなってくる。

右腕が弾け飛んだ。肉も血も骨も吹き飛んだ。

そして弾け飛んだ肉体の奥から新たな肉体が生まれる。

それは精錬された有機と無機が融合しあつた精錬されつくした漆黒の鎧。ソレは本当に俺の肉体になっている。生まれたソレは溶岩のように熱い血液が流れている。

続いて両脚が吹き飛んで、右腕と同じように脚が漆黒の鎧になる。

そして左腕も同じように。

四肢の全てが自分の肉体でない、全く異なる鎧になる。

無機と有機の完璧なる融合、矛盾を吹き飛ばした姿。左右の腕の形状が異なりアシンメトリーを作り上げている。

肉体の熱が上がる。薄い皮膚の内側で肉が、骨が、血管が、内蔵が融解した鉄のようになどドロドロと溶けていく。それはまるで幼虫から成虫へと進化するための蛹の中のように、姿を変質させていく。

そして、俺の全てが鎧に変わる。外面は血の通っていない冷徹さを押し出してはいるが、内面はそれとは真逆に灼熱が通い続ける。

これは俺の肉体ではない。だが俺の肉体である。

名前は知らないはずなのに、俺はこいつの名前がわかる。

そうだこいつの名前は……………

目が覚めた。

思い返してみれば、不気味な夢であった。自分の肉体が変質してしまう夢。

気分でも直すか。

ベッドから起き上がり、カーテンを開けて朝日を浴びる。時間は太陽の位置から推測して、およそ朝の六時。いつもより少し遅い。

このところ訓練をより過酷にしたからなのだろうか、妙に疲れてしまっている。マドカやティファからは心配されているが、強くなるためにはやめるわけにはいかない。

薄暗い部屋を朝日が満たし、清潔感を生み出す。

「……ん？メールか？」

執務机に置かれてある支給されたタブレットにメールが届いている。

執務机に近づき、タブレットを手に取るとメールの中身を確認する。

差出人は………：No. 000

その名前を見た時に俺は急いでメールを開いた。メールには一つのファイルが添付されており、それをタッチして開く。

ファイルの内容は……I S の設計図であつた。その設計図に簡単に目を通す。リリスのような専門家ではないが、ある程度の知識は有しているため、少しは読み取れることができる。

その設計図は余りにも異質すぎた。今までみたどの機体よりも斬新で、新鮮で、衝撃的であつた。

これはNo. 000が作ったモノであろう。それも他の誰でもない、ただ俺を乗せるためだけに作り上げたモノであろう。この機体こそが俺とNo. 000に相応しい。

世代は今現在亡国機業でも少しだけ生産され、隊長、副隊長にのみ与えられている第三世代と同じだろう。性能も生産されているのより高い。そもそもこの機体を世代という枠に嵌めていいのかさえ不明だ。

この機体の名は……………

「黒零」  
コクレイ



## 第三章

### I S 学園

#### 入学準備

誘宵グループ、それは世界でも一二を争うほどの巨大財閥であり、I S 委員会から I S コアの所有を認められた唯一の企業。

その始まりは明治時代、もしくはそれよりも前に遡るかもしれないが、明治時代以降急速に世間に知れ渡るようになって行った。

様々な傘下のグループを保有しており、誘宵グループなしでは生活ができないと言われるほど民衆の生活に溶け込んでいる。

現在では I S の開発に力をいれているが、そんなモノは誘宵グループの利益には殆ど繋がらない。

I S コアを独自に所有しているため、グループ内には一つの軍隊、いや救命救急部隊があるといつていい。地震や津波、噴火、雪崩と言った自然災害が起きた場合に I S で駆けつけ、避難民の救助や食料、医師の運搬などを行い、世界各国の災害現場で活躍している。それでも活動するにはそれなりの手続きが必要なのだが。

企業であるため各国が揃って I S を軍事利用しようと考える中、誘宵グループは前述

した災害時の救助や宇宙開発に役立てようとしている。

そんな誘宵グループのIS開発の中心部とも言える場所、ではなく一般の家庭のリビングではある親子が進路に関して話し合いをしていた。

「アリサ、IS学園に進学するのか？」

テーブルを間に挟み、話し合うのは誘宵グループ会長、誘宵皇とその娘、誘宵アリサ。「行くよ、パパ。IS学園からも特別推薦枠貰ってるから」

背中まで伸ばした流麗な藍の髪を揺らしながら、アリサは父である皇に答えた。

特別推薦枠、それはIS学園への入学方法としては毎年一人か誰もいないかのどちらかである。

推薦といっても自分からするわけではない。IS学園からされるのだ。

推薦基準は高い技量を保有している事。

それも代表候補生程度では推薦されない、国家代表レベルの技量でなくてはならない。い。

昨年度の特別推薦枠に選ばれた生徒は今ではIS学園の生徒会長になり、更にはロシアの国家代表にまでなっている。

更に特別推薦枠で選ばれた生徒はいくつかの授業を免除される。それはISの訓練

であつたり、座学であつたりと様々だ。

「そうか、アリサはそれで良かったのか？」

「大丈夫、それに企業代表としての面子もある。けど一番の理由は多分あの場所にいればいつかは一夏くんに会えると思うから」

ニツコリと笑うアリサ、その娘の顔に皇は少しの恐怖を感じた。

アリサに恐怖心を感じたのはいつからだろうか、確かアレは誘拐され、救出された後の会話だつただろう。

「……………わかつた、手続きはこちらで済ませておく」

「ありがとう、今日は訓練もお休みだから自分の部屋に戻るね」

アリサはソファァーから立ち上がると自分の部屋に戻つて行つた。

「……………ふう」

皇はソファァーの背もたれに身体を預けた。娘と話すだけだというのに、何故こんなに疲れたのだろうか、歳か？そんなことを考えた。

アリサは真つ直ぐに育つてくれた。特に目立つた反抗期もなく、パパの服と一緒に私の服を洗濯しないでなんて一度も言われたことはない。

ただ少しベクトルがおかしかった。

「愛……………だな」

娘の成長の要因を眩きながら、皇は優しく笑った。

「ようやく会える。一夏くんと」

自室に戻ったアリサはベッドの上で愛おしそうに抱き枕を抱きしめながら、何処にもいない誰かに声をかける。

「え？なんでかって。そんなの簡単だよ」

アリサはベッドから起き上がりより一層強く抱き枕をだきしめた。

「私が一夏くんを愛してるからだよ、アイリス」

物語は新たな章に入る。

## 黒零計画

亡国機業開発部開発長室、ここには現在二人と一体がいる。

一人は織斑一夏、世界で唯一の男性IS操縦者であり、亡国機業実働部隊『モノクロームアバター』の副隊長であり、総帥警護長の役職も兼任している。IS乗りとしての実力も申し分なく、現在では亡国機業内であれば五本の指には確実に入る。

二人目は一夏の上司であるスコール・ミューゼル。

そして最後に開発局長、電脳妖精リリス。

「それでリリス、今回の件に関して総帥は何て言ってたの？」

スコールはディスプレイに写ったリリスに問いかける。

「それが、予算の事は考えなくて良いらしい。今回の事は亡国機業でもある程度の利益を得られると考えたのか……それとも唯孫が可愛いだけなのか」

「孫が可愛いは余計だ。予算考えなくていいって……このIS作るのに普通の量産機何機作れんだよ、一とか二じゃねえよ。五機は作れるぞ」

机の上におかれた書類を睨みつけながら一夏はそんな事をつぶやいた。

今回集まっている理由は一夏にN.O. 000のコアを送りつけて来たIS設計図について話し合うためだ。

「しかしこれが完成し、一夏が乗ったとすれば、そこいらの兵士が乗った五機のIS以上の戦力になるとは思うがな」

「それって、俺に五倍働けって事か？俺の一日は百二十時間じゃなくて、二十四時間だという事を知ってたか？」

「初耳だ」

「なら、その莫大な頭脳の半分の容量使って刻んどけ」

全く笑わずに目を合わせずに軽口を言い合う二人。

「それより、これどうやって制作するつもりなの？性能は今までのISの中でダントツだけど、幾つかの作業で無理が生じてくると思うのだけど」

脚をくんで設計図を読んでいたスコールがリリース訪ねた。

無理が生じるという事は亡国機業の技術力を持ってしても不可能な部分が生まれてくるというわけか。それとも別の理由か……

「特にこの『精神力発生装置』ってなんだよ、聞いた事ないぜ。マジでこんなもの作れるのか？リリースさんよお」

設計図の一部を手の甲で叩きながら、一夏はたずねる。

精神力発生装置は今回制作するIS『黒零』の象徴とも言えるもので、電腦妖精のリリースでさえ全てを理解してはいない。

「そうだ、問題はそれなんだ。流石の私でもこの装置に関してはよくわからない事が多い。だから今回は専門家に任せようと思う」

「専門家？誰だよ……」

一夏の動きが止まる。そしてゆっくりと懐に手を伸ばして、拳銃を取り出した。

安全装置を解除して、天井の排気口に銃口を向ける。

人の気配。

「誰だ降りて来い。イーサン・ハントのつもりか？三秒以内におりてこなければ発砲する」

その言葉の直後、通気口の蓋が落下して一人の女性が落ちて来た。一夏は暫くの間、銃を女性に向けていたが、女性が誰かわかると安全装置をして懐に銃を収めた。

「何やってるんですか、東さん」

呆れ顔で一夏は言った。

落ちてきた女性は篠ノ之束。ISの生みの親。

「いやー、久しぶりだねいっくん。今日はその妖精さんに招待されたんだよ」

ビシッと指差した先には『私だ』と書かれたプラカードを画面内で担いでいるリリース

がいた。

「I Sの専門家はI Sの生みの親が一番だろ？だから彼女をこの本部に招待したのだよ。無論、総帥からの許可は頂いている」

「そーゆーこと。そのリーちゃんと同じ合つたのは前にいっくんが私の船にやつてきた時。それから何度か交信があつたんだよ。彼女には聞きたいことがあつたからね、電脳妖精のなりかたとかね」

ジェスチャーを加えながら話す束。

そこに今まで呆然としていたスコールが話しかけた。

「あの、篠ノ之博士。私、スコール・ミューゼルと申します。以後よろしく願います」

軽く自己紹介を済ませてスツと一礼するスコール。束はその様子を見て、固まった。

「あ、はい。よろしく願います」

ぎこちない様子で挨拶をする束。それを見たスコールはそつと一夏に耳打ちをする。

「なに、私嫌われたの？博士の様子が何処か変だけど」

「大丈夫です。唯の人見知りですから、暫くすれば慣れてくると思いますよ。そしたら、テンション高く話しかけてきますから」

「そう、それならいいけど」



「それで、本題に戻りましょうか。東さんが今回来たのはこのISを作るためでしょ」  
スコールと一夏を無視して、自分たちの世界に入り込み、良くからない議論を続けている東とリリースを一夏は引き戻した。

「あー、うんうん。そうだね、彼女との議論が楽しくて忘れてたよ。それで、ISについてだよ」

東は空間投影式ディスプレイを展開させる。そして凄まじい速度でキーボードに何かを打ち込んでいく。

リリースもそれに合わせて作業をしていく。そして部屋に備え付けられてある巨大なモニターに東の画面が表示される。

「今回いづくんに届いたその設計図、ソレはNo. 000のコアがいつくんの為だけに作り上げたもの」

「ゼロが？俺に？」

「そう、コア自体が蓄積した戦闘データを元に自らが選んだ相棒の為のISを制作する。始まるの五つのコアにしか搭載されていないというか、あのコアたちが勝手にやってることかな」

「一つことは、俺の他にはティファとアリサにもソレが作られるってことか？……………」  
「あれ？」

何故アリサが乗っているのがわかったのか、一夏にはわからなかった。

「それで、その設計図で作り上げたI Sは特徴があつて、その作り上げたコアと搭乗者にしか反応しない。しかし、性能は普通の機体よりも高い」

モニターに合わせてたんたと説明していく束。その説明は暫く続き、ようやく終わった。

だが話の本番はこれからだ。

「それで今回のI Sの制作に関してだが、共同作業でいきましょう。私の方は精神力発生装置を作りますので、後はお願ひします」

ペーリと頭を下げる束。

「了解した。ならば我々亡国機業は後の全てを担当しよう。それで良いか?」

「構いませんよー」

「それでは、制作と行こうか。最高の機体の為に」

技術者たちはまだ見ぬ世界を思い笑った。

「それで、今は何の作業なんですか?束さん」

あれから暫くして、一夏は現在束による精密検査を受けている。亡国機業にある一室で、ISスーツを着て身体中に小さな機械を貼り付けている。

一夏は先ほどから機械を貼り付けまま計測用の部屋の中で束の指示に従って体を動かし続けている。

束はその間ずっと空間投影式ディスプレイと睨めっこしている。

「んー？ISの為にいつくんの生体データをその貼り付けた機械からとってるんだよ、今回作るISは脳波コントロールが可能だからね、それに必要なんだよ」

「なるほど」

体を止めることなく、一夏は体を動かし続ける。

「……………ねえ、兄さん。この状況には何も言わないの？」

「なにが？」

「……………いや、なんでもない」

束の膝の上に座らされているマドカが不満そうな声色で一夏に問いかけたが、一夏はそれを躲した。

何故こんなことになってしまったかと言うと、一夏と束がこの部屋に向かう途中にマドカと偶然会ったのだ、いや会ってしまったのだ。

それからの束は凄かった。目にも止まらぬ早技でマドカを拘束。そしてそのままこ

の部屋に連行すると、自分の膝の上にマド力を乗せて作業を開始した。

マド力はその間、自分の後頭部から感じる胸の感触が酷く気に食わなかった。

「いっくん、次は武器を使って」

「了解」

一夏は壁に立てかけられてある武器を手に取り、扱っていく。

剣、槍、斧、銃と次々に取り替える。

全ての作業は終わるまでに一時間ほどかかっただろう。作業を終えた一夏は体につけられた機械を取り外して、汗を拭きながら束の元に行った。

「良いデータは取れましたか？」

「そうだね、凄いデータが取れたよ。ちーちゃんにも以前これと同じことをしたんだけど、総合的なデータで比較すると今のいっくんとN.O. 000は全盛期のちーちゃんを凌駕しようとしている」

「そうか……そうなのか」

束から視線を逸らし、壁を見つめる一夏。それは束にとって悲しいものであった。

胎動は始まった。

卵より孵った戦士は……災禍を招く。

## 孵化

『黒零』の制作開始から一週間ほど経ったある日、ソレは遂に完成した。本来ならばもう少し時間のかかって良いものなのだか、流石は天災達の所業。

現在は黒零の最終調整の為に実践を行おうとしている。

ISの訓練施設の中にあるピットに立ち入り、一夏の目に最初に飛び込んできたのは一つの塊。灰色のまるで卵のような造形のソレは、相棒が来るのを今か今かと待ち望んでいる。

「やーいつくん、ようこそ」

ニツコリと笑い手をふりながら篠ノ之束が待っていた。

一夏は羽織っていた上着を脱ぎ、近くのベンチに置く。ISスーツだけを着了た状態で束に近づく。

「完成……したんですね。黒零なのに、白？」

自分の愛機となる黒零を撫でながら、一夏はそんなことをつぶやいた。

「正確に言うと、それはまだ初期段階。今から戦闘して一次移行させることでようやく

完成。普通だったら、戦わなくてもいいんだけど、この子は戦わないとダメみたい」

ポンポンと機体を叩きながら、束は優しく微笑んだ。

黒零が変形して、一夏を招き入れる。胸の装甲が開き、座り込むような形になる。

「よつと」

一夏はISに乗り込む。胸部が閉まり、全身を装甲が包んでいく。ヘルメットの内部に映し出される映像を確認していく。

異常がないことを確認し、ゆつくりと立ち上がる。

体を細かく動かす。

「調子はどう?」

「問題ない。少し重い気がするが、すぐになれると思うさ」

一歩一歩歩き出して、発射台の上に乗る。

「じゃあ、いっくん。私は管制室で見守っているから頑張つてね」

それだけを言つて、束は外に出て行った。

たった一人残された部屋で一夏は意識を集中していく。これから戦う相手はスコール、しかもスコールが乗るのは亡国機業の第三世代の最新型IS『ゴールデンドーン』。油断して戦える相手ではない。

「……ゼロ、準備は良いか?」

一夏は天井を見上げたままここに居ない誰かに声をかける。

「……無視かあ」

返事が無いので悲しくなった。

一夏は気を取り直して、アリーナにむけて飛び立った。

「武装は……ビームガンと実体剣……酷だな」

装備の少なさを嘆きながら、一夏はスコールの元まで飛んでいった。

「調子はどう?」

全身装甲型のＩＳに包まれながら、スコールはたずねてきた。

「ゴールデンドーン、この機体の特徴は炎。さらに臀部から伸びる蠍の尻尾のような装備。」

「さあ、どうでしょうかねえ」

リラックスした様子で返答する一夏。

「そういえば、こうして貴女と本気で戦うことになるのは初めてではないか?」

「そうね……確かに最近は戦ってなかったし」

一夏はスコールとは以前は何度も戦ったことがある。しかし、それは常にスコールが手加減して戦っていた。

だが今回は違う。

リリスと束からの要求は本気の殺し合い。それも一夏の闘争心を極限まで高めるためのモノだ。

現在のスコールと一夏の戦闘能力はほぼ互角と言っても語弊はないだろう。故に。

「さあ、行きましようか」

一夏は昂りを感じる。

右手に実体剣を構え、スコールの出方を伺う。

「なら……行くわよ」

スコールの両手から攻撃用の爪が伸びる。

そして。

衝撃が走る。

剣と爪がぶつかり合い、甲高い音を響かせる。

一瞬前までの呑気な会話の雰囲気は消え去り、互いが互いを殺そうと必死になっている。

戦闘は既に並のIS操縦者の領域を超えている。両者の実力は国家代表、それも上位にはいるほど。

そんな両者が遠慮もなしに殺しあっている。



一夏は右手に持った剣のみで、スコールの両手からの攻撃を凌いでいる。

「炎は使わないんです？」

「なら使つて、あげようか？」

ゴールデンドーンの尻尾につけられてある顎が大きく開く。獲物を捕食するために。尻尾がうなり、一夏を捕食しようとする。

一夏は剣で爪を大きく弾くと後方に大きく飛んだ。

「逃げるの？ 貴方らしくないわね」

ゴールデンドーンの両手と尻尾の先端から火球が打ち出された。火球は全て一夏の元に飛んで行く。

「ふっー！」

それを一夏は一振りで打ち出された三つすべてを切り落とした。だがスコールはさらに何十の火球を打ち始めた。

一夏は速度を変化させながらスコールの周囲を飛び回り、火球を躲していく。

どのタイミングで仕掛けるのかを探る。左手にビームガンをコール。直撃コースにある火球を撃ち抜いていく。

(近づいたところで、スコールさんにはプロミネンス・コートがある。下手な攻撃ならふ

せがれしまいだ)

……一撃だ

一撃で切り裂くしかない。

瞬時加速でスコールとの距離を一気に埋める。

スコールはその動きを見切り、自分の周囲に球状のエネルギーフィールドと火炎の合わせ技、プロミネンス・コートを展開する。

この武装は現在亡国機業に存在しているどのI.Sの防御より堅牢である。

一夏はその鉄壁の防御に剣を突き立てる。速度と力任せにこの盾を打ち破ろうと試みる。

「無理よ、この盾はそんな簡単には破れない」

「わかってる!」

一夏は空いている左手にビームガンを展開し、剣とバリアの間目掛けて連射した。

剣がバリアに沈み込んでいく。もしかしたらバリアを敗れるかもしれない。だがそうは上手くいかない。

「貴方らしくないわね」

プロミネンスコートを内側から突き破り、ゴールデンドーンの尻尾が一夏を捕まえた。

一夏は攻撃を避けようとしたが、反応が遅れてしまった。

「……反応速度が遅いわね。普段の貴方なら簡単にかわせたはずなのに。そうしなかったのはまだ機体に慣れてないから。だから貴方は焦ってらしくない事をした」

「(名答)」

スコールが地面に向けて落下していく。尻尾に掴まれる一夏もそれに合わせて落下していく。

「はあー!」

尻尾が鞭のようにしなり、一夏を地面に叩きつけた。受け身も取れずに背中から叩きつけられ、気を失いかける。

だが直ぐに追撃が入る。ほぼマウント状態からの火炎と爪の連続攻撃。一夏はこれを今のこの機体の唯一の長所ともいえる頑強な装甲で防ぐ。

「どうしたの? 貴方の力はそこまでなの?」

「くっ!」

「ここに来てから何も変わってないのね。貴方は自分が何かを失って傷つきたくないから戦っている。自分のセカイのためにたたかっている。それなのに、弱いまま」

「……あ?」

「弱いから失うの。これじゃあ、あの織斑千冬以下ね」

「……………俺は、俺は」

爪からの攻撃を素手でつかんだ。

「俺だアアアアアア!!」

そしてそのまま起き上がり、スコールを投げ飛ばした。スコールは空中で体制を立て直して、着地した。

一夏にとつて織斑千冬との比較はタブーである。最近はなりをひそめていたが、この場所に来た当初は比べられるだけで激怒していた。

それが今再び。

様子が激変した一夏を見て、スコールはヘルメットに顔を隠されたまま笑った。

「そうよ、それでこそ貴方よ。貴方は貴方。それが私が惹かれた織斑一夏よ」

両手を広げて喜ぶスコール。

一夏はそんな様子のスコールの元に武器を捨てて突撃していく。

激昂しながらも精彩さをかくことのない、四肢から放たれ続ける芸術的な連続攻撃。

「そうよ、それで良い。もっと闘志を高めて」

攻撃の隙間をぬって、スコールは一夏を蹴り飛ばした。

一夏は地面を転がりながらも、最後には地面に立った。

興奮している。

内側から何か弾け出ようとしている。

それは一夏にとっては久しぶりに感じられる喜びであった。

両手で頭をガシガシと乱雑に掻き始める。

「来やがった……」

不気味に笑いながら一夏は呟いた。

「一夏、行くわよ」

スコールの上空に巨大な火炎球が出現する。ゴールデンドーンが作り上げられる最大のサイズにして最強の火炎。飲み込まれればISと言えどただでは済まないだろう。

それを一夏は両手を広げてその火炎を招き入れる。

火炎球は一夏の肉体を飲み込み、半球状に広がる。

その様子を見てスコールはヤバイと感じた。まさか避けないとは思わなかった。

手加減なしの一撃は下手すれば絶対防御を貫き、パイロットを殺してしまうかもしれない。

しかし、その心配は杞憂に終わる。

火炎の中で一夏を中心にまるで壁でもはられてあるかのように炎の侵略を阻んでい

る。「孵化の始まりだ」

黒零の灰色の肉体が胎動を始める。母胎の中で存在を証明させるかのごとく。火炎の子宮の中で黒零は急速に変化していく。

「時間か？」

『時間だ』

「俺<sup>オレ</sup>達は」

『一人』

「行くぞ、相棒」

『行くぞ、相棒』

「生まれよ、黒零」

火炎を吹き飛ばし、戦士は生まれる。

## 黒零

火炎が吹き飛んだ。スコールがそう思った直後、火炎の奥からそれは姿を現した。

漆黒の肉体とその肉体に所々走る血管にも見える黄金のライン。有機性と無機性が完全に融合しているが、その姿には矛盾性はない。

顔には翠の宝石の様な瞳とその周りから涙線のように流れる黄金の線。

左右の腕のデザインも異なり、アシンメトリー状の肉体がより美しさを際立たせている。

そして流麗に靡く絹糸のような銀色の髪のようなモノ。

そのデザインは今までに作り上げてきた亡国機業のモノとはかけ離れすぎている。

機体のコンセプトは『圧倒的な一の戦力』。

近距離であろうが、中距離であろうが、遠距離であろうが関係ない。

一対一、一対多、多対一、多対多、人数なんて関係ない。

寒くても、暑くても、砂塵が吹き荒れようと、水圧も関係ない。

この機体はそれらを全て支配し、常に最高の状態で戦う事ができる。

それこそが黒零。

一次移行。スコールは確信した。

「一夏、調子はどう」

回線を繋いで目の前に存在するISに乗り込む一夏と連絡を取る。

「……………凄いな、最高なのか。乗ってるだけでわかる。コイツは俺だ」

スコールには一夏の言葉の意味がよくわからなかった。だが一夏の中では既に意味付けられている。

余りにも肉体にISが馴染みすぎているのだ。ソレはまるで己の肉体と完全に同化しているかの如く。

「…………スコール、少し戦ってくれないか？こいつの真価を図りたいんだ」  
「構わないわよ」

それが開戦の合図であった。

一夏は右手を前に突き出し、指先をスコールに向ける。

そして指先から大量にうちだされる極小サイズのビームの弾丸、一撃一撃の威力は極めて低い。本来は飛来してくるミサイルを撃ち落とすために使用するモノだ。

一次移行した黒零の右腕の武装『多機能式攻撃腕』、それは簡単に言ってしまうと様々



なビーム兵器を右腕に収めたモノだ。大量のエネルギーを保有するNo. 0000のコアだからこそ持つ事の許される武装。

スコールは迫り来る弾丸を躲しながら、二つの火球を一夏に向けて打ち出した。ビームの弾丸は火球に飲み込まれ消失する。

「来い、零砲」

一夏はある武器をコールして黒零の両腕で掴む。左右の手に一丁ずつもたされたソレの名は『零砲』、中距離ビーム武装であり一撃一撃の威力は高い。

零砲を迫り来る火球目掛けて発砲、二発だけ放ちその両方が火球にぶつかり相殺した。

零砲を収縮して、一夏は次に一本のビームブレードを展開する。

翡翠の色に真つ直ぐ伸びる刃、柄には刃と同じ色の宝石のようなモノが嵌め込まれている。名は『無零<sup>ブレイン</sup>』。

追撃で放たれた三つの火炎球を一振りで斬り落とした。その斬撃は舐めるような動きであった。力が入っていない。

「精神力発生装置……起動」

その言葉に合わせて、黒零の左腕から奇妙な光が漏れた。左手から小さな光の粒が飛

び出す。

「壁よ、在れ」

一夏はその言葉を自分の心に言い聞かせる。それが精神の力を生み出す方法であるのだから。

精神力はそれこそオカルトの力と言える。

願い、意志、欲望、そんな目には見えない力を可視の力に変質させたモノが精神力である。

一夏は左手を前に突き出すとその掌の目の前を中心に波紋が広がった。精神力発生装置の主な機能、世界との壁。

ゴールデンドーンから放たれた火球、初期段階では苦戦していたそれらも、一次移行を完了した黒零の前では簡単に屠られてしまう。

黒零の目の前に展開された波紋は容易く火球を防いだ。

黒零は飛行を始める。

驚くべきはその動きの滑らかさ、まるで清流の上を滑る木の葉のように空間で踊る。

スコールはその軌道を目で追っていく。

だが次の瞬間、黒零の姿がスコールの視界から消え去った。スコールは少しだけ気を

抜いていた。本来の目的を達成し、今は唯の調整に近い感覚でいた。

しかし、一夏達はそうではなかった。

黒零の持ち味は機動力の高さと現行する全てのI・Sの中でもダントツの加速度。つまりはゼロからマックスへの切り替えの早さである。最高速度は言わずもがな。

だがそんな黒零にも問題はある。それは加速と減速に真面目な操縦者ならばついていけない事だ。

けれどこれは一夏のためにN・O・O・O・Oが設計し、亡国機業と篠ノ之束が作り上げた機体。一夏が使いこなせれば、他人なんて関係ない。

スコールの周囲を黒零が飛行し続ける。

その軌道はまるで蜻蛉のように空中で急停止、そして急加速を何度も繰り返す。その緩急の激しさは不気味過ぎる。

スコールはこんな動きを見た事はなかった。

そしてスコールはある事に気がついた。一夏は周囲を回るだけで一向に攻撃をしかけてこない。

「……なるほど」

スコールは一夏の企みに気がついたのか、プロミネンススコートを展開した。

「さあ、一夏。この防壁を破ってみなさい」

声高らかにスコールは一夏に呼びかける。

「多機能式攻撃腕、精神力発生装置起動」

黒零の両腕がそれぞれ異なる発光を始める。優しい光と殺意の光。

「真つ向、潰す！」

プロミネンススコートを一夏の両腕が侵略する。スコールの破られた事のない鉄壁の防壁が暴力的に野蛮的に一夏によって侵されていく。

プロミネンススコートに黒零の左手が侵入し、右手がそれを広げる。

火炎の奥より現れた黒零を見て、スコールは僅かな恐怖を感じた。今まで破られたことのないスコールは、プロミネンススコートを破壊した圧倒的な力、それでも底の見えない力。

プロミネンススコートをブチ破り、黒零はスコールに追撃を仕掛ける。

だがそれよりも速く、プロミネンススコートを破壊される事を読んでいたスコールがゴールデンドーンの尻尾で攻撃を仕掛ける。

「ふんっ」

黒零はその一撃を躲し、更に尻尾を左腕で抱え込む。そしてそのまま遠心力を利用して地面に向けて投げ飛ばした。

投げ飛ばした威力はそこまで強くなかったため、スコールは綺麗に地面に着地する。

「……一夏、終了よ。降りてきなさい」

ヘルメットを外して、スコールは一夏に呼びかける。一夏はそれに無言で従い、地面に向けて降下する。

そして着陸するや否や被っていたヘルメットを脱いだ。その様子には焦りが感じられた。

「ふう」

汗に濡れた髪をかきあげて、一夏は一息ついた。

「どう、機体の調子は」

「……最っ高。機体の反応速度は今までの中で一番早いし、接近戦を好むから、加速度と機動力が高いのは有難い」

一夏は機体を待機状態に変化させる。

黒零の待機形態は黒いガンレット、一夏はソレを左腕にはめた。

「けど、まあ、疲れた」

一夏はその場に尻餅をついてから、仰向けに寝転がった。肩で息をしながら、近くにいるスコールを見上げた。

「慣れれば楽になれるのかもかもしれないが、これは……辛いな」

「そんなに？ 貴方がそんな様子になるのははじめてじゃない？」

「かもな……束さあん！ 終わり？」

一夏は大声を上げて管制室にいる束に声をかける。

『そうだね、終わりだよ。黒零は一回調整するからリリスちゃんに預けといて』  
「わかった」

一夏はその場から起き上がると、訓練場の出口に向けて歩き出した。その足取りはどこか重たかった。

「じゃあ、失礼します」

出口に向けて歩く一夏の背中を見て、スコールは声をかけようと思ったがソレを一夏は拒んでいた。

「いっくん、調子はどう?」

訓練場の男子更衣室の中で一夏は、何故か侵入して来た束に声をかけられた。

ベンチに腰掛けたまま気だるげに束を見た。

「だいぶ楽ですね。思った以上に精神力つていうものを消費しましたね。慣れれば良いんですけど」

「そう、それならよかった」

一夏の返答を聞いて、束は優しく微笑んだ。慈愛に満ちたその表情は普段の無邪気な

笑方をする束からは想像も出来ないものであった。

「あれ……飛べます」

天井を見上げながら、一夏はポツリと言った。

「あれは完成系なんですよ。乗ったらわかります」

不気味に、束に向けて話しかけているわけではない。一夏はここにいない全ても含めて話しかけている。

「あんなにも近くにあるのか、手を延ばせば抱きしめられそうだ。ああ愛おしい」

天井に向けて手を延ばし、何かをつかむ動作をしてから胸に抱き寄せた。

「未完成の完成系。時間はかかりそうだ」

「そうだね……じゃあね、いっくん。またいつか」

それだけ言つて束は何処かへ去つて行った。一夏は見もせず、何も語らなかつた。

「……ようやくだな、ゼロ。よろしく頼むぜ」

自分の左腕につけられた黒いガントレットを見ながら、一夏はポツリと呟いた。

## 白に舞う黒

「はあ、はあ……」

少女は雪原を素足でかける。

夜の凍てつく風を薄い病院着のような服から零れた肌で感じながら、何処へ行くのかもわからずに、ただ走り続けることしか出来ない。

少女の走ってきた足跡を逆にたどってみれば、そこには一台の車が焔を上げていた。

そしてその上空には少女に機銃を突きつけるヘリコプターが一台とその周囲を二機のISが飛び回っている。

「なんで……なんで」

なんでこんなことになってしまったのだろう。少女は凍えてしまった喉では何も言えず、心の中で慟哭する。

つい最近までは普通の学生だった。いつものように学校に行って、友達と遊んで、家族とご飯を食べるような普通のありふれた当たり前を過ごしていた。

それがあの日に終わりを告げた。突然家族を惨殺され、自分は拉致されて変な施設に



連れていかれた。ここでは毎日毎日機械をつけられて検査をさせられた。慰み者にならなかつただけマシンなのかもしれないと思えた。

そしてそれも終わつた。今日この日、施設は謎の集団に襲撃を食らつた。中にいた職員は殆どが皆殺しにされ、少女は救出された。

その後は施設の外に連れられ、車に乗せられた後、施設から遠ざかつていた。施設から逃げる際に見た光景は何機ものIS同士の戦闘。

それらが注意を引きつけてるうちに施設から離れる予定であつた。しかし、現実はいかにかない。ヘリコプターとISが追いかけてきたのだ。

ヘリコプターの機銃が車を撃ち抜き、車は大きく横転した。そこで、少女は救助された人たちに逃げるように言われ、先ほどの状況になつた。

「嫌、嫌」

少女の足が限界を迎えた。冷えた大地は少女の足をあつという間に奪い去り、行動を取れなくした。地面に倒れこみ、冷気から伝わってくる絶望感は少女の心を蝕んでいく。

死にたくない。

普通の生活がしたかつた。よかつた。少しオシャレな喫茶店でアルバイトをして、彼氏を作りたかつた。

あの日では普通にうんざりしていた。非日常に憧れていた。けれど今は普通を渴望する。

銃が少女に狙いを定める。引き金を引けば容易く殺されてしまう。

「私は……私は、死にたくない！」

震える声で少女は叫ぶ。その声は吹雪によって容易く消え去った。

銃が放たれる。

そう思った次の瞬間。

漆黒の奇跡が夜闇を切り裂いた。

少女には何が起きたのか理解できなかった。ただ気づいた時にはヘリコプターが空中で大きく揺れた。

その原因は一機のＩＳが高速で掴まったため。

掴まったＩＳを一言で表すならば『黒』、まごうことなき『黒』。

二機のＩＳはその黒いＩＳに銃を突きつけるが、それよりも速く黒いＩＳは行動に移る。

ヘリの機体に両足を付け、スラスターを一気に吹かせることでヘリを振り回し、地面

に叩きつけた。

その光景は少女から見ても異様だった。幾らISが強力な兵器として扱われているとしても、それよりも重量のあるヘリコプターを投げれるとは思えない。だが目の前のISはそれを容易くやってのけた。

黒いISは再び宙に飛び上がり、二機のISに向かって行く。

黒いISの目が赤く光り、次の瞬間、圧倒的な加速度で距離を詰める。

二機のISが銃口を突きつけようとするが、黒いISはそれを拒む。不気味な軌道と急速に変化する速度。

その速度に上手く反応できず、一機のISが黒いISに距離を詰められた。

一機のISは近接武器を展開しようとするが、そんなことは黒いISがさせない。野蛮な殴打と蹴りの連打が襲う。自由を奪われ、一瞬で嵐の中に呑み込まれた。

黒いISが一機に気を取られているうちに、残された一機は少女に銃口を突きつける。

それに気づいた黒いISは殴っていたISを放り投げて、少女の前に移動した。

銃口が引かれ、マシンガンから弾丸の雨が降り注ぐ。少女は目を瞑り、その光景から目を逸らしそうになる。

しかし、弾丸は空中で急停止した。何かの壁に阻まれているかのように。そして弾丸

は自由落下で地面に落ちた。

それから黒い I S は一本の長刀を呼び出し、左手に持った。その刀は歪みのない、美しい深黒の刃だ。その刃を降るだけで、ふり落ちる雪を切り落とした。

そしてもう一つ、毛皮のコートを呼び出して少女に投げ渡した。コートを受け取った少女はそれを着込んだ。

黒い I S は地面に放り投げた I S に向ける。一瞬で距離をゼロにつめ、そして一瞬で両手を切り落として行動を制限させる。

右手が激しく発光し、エネルギーが右腕から生み出される。

右手を I S の胴体に付け、圧倒的な量のエネルギーを叩きつけた。

その衝撃は凄まじく、直撃を食らった I S は機能を停止し、地面に仰向けに倒れた。残り一機、逃げ出そうと黒い I S に背を向けて全力でスラスターを吹かせた。

それを見た黒い I S は一瞬で最高速度まで持つて行って、逃げた I S の背後についた。

黒い I S の両足に鳥の脚のような装備がつけられる。三本爪のソレは鷹の様に獲物を狙う。

左足が頭を掴み、右足が腰を掴んだ。そして速度そのままに地面に擦り付ける。肉体をボードにしたサーフィン、その様子はまるでインフェルノ。

地面に擦り付けられるISは逃げ出そうと必死に足掻いてはみるが、機体の性能差とパイロットの実力の差が現れ逃げ出せない。

数十秒もしないうちに腕がだらしなく地面にだらしなく地面に打ち付けられる様になった。

黒いISは宙返りを一回行つて、掴んでいたISを放り投げた。気を失つたのかわからないが、動きが止まっている。

そこに黒いISは三度の本気の蹴りを入れて、戦闘が続けられないことを確認した。

「……………」

少女はソレを見ながら何も言えなかった。助けた際に感じたのは救世主、絶体絶命のピンチを華麗に……とは言えないが救ってくれた。もしこれでパイロットが男だったら惚れていたのかもしれない。

けれどISに乗れるのは女性しかいないからそんなのはあり得ない。

黒いISが飛翔し、少女の前に降り立った。

幾つもの言語を話し始め、少女が反応した言葉を使い始めた。

「大丈夫か？」

ボイスチェンジャーで変化された器械的な声は少女を安心させるものではなかった。

「は、はい」

寒さと恐怖に震えながら、少女は返答した。

「唾々、怖がらせたか。無理もないか。あの戦闘はなあ」

ヘルメットをつけたまま、黒いISのパイロットは頭をかいた。

「少女よ」

パイロットは問いかける。

「は、はい！」

「無事か？」

「へ？……なんとか」

「そうか、それはよかった。取り敢えず、君の身柄は此方で預かる。その後の選択は君に任せるよ」

「あ、あの……貴方たちは？」

弱々しい声で少女が尋ねる。

「我々は亡国機業ファントム・タスク、世界の裏に住む者たちだ」

## 世界最初の男性 I S 操縦者

「あー、やる気ねえ」

訓練もない日、グレイは一夏の部屋に備え付けられてあるソファアーの上でだらしなく寝転がりながら、そんな事を呟いた。

「うるせえな、グレイ。ついさっきまで総帥の使いで任務に行ってたんだよ、その前はモノクローム・アバターでの任務。疲れてんだよ」

ベッドの上で寝転がりながら、一夏は悪態をついた。

「まあ、そう言わない。一夏も苛つくのは良くないよ。それよりも、そろそろ映画が始まるよ」

ソファアーに座っているジークが一夏に話しかけると、一夏はベッドから起き上がると、グレイ、ジーク、アドルフがいるソファアーに移動する。

「……今日は、何だ？」

ソファアーの前のテーブルに置かれてあるポップコーンをつまみながら、アドルフはテレビ番組を尋ねた。

「確か、コメディ系ミリタリーの作品じゃない？でもやつぱり、軍を退役した元軍人が誘拐された愛娘を救出する奴とか見たいな」

「アフリカで特殊部隊が正体不明の地球外生命体に狙われる話もいいなあ」

「……未来を変えるために、現代に殺人アンドロイドを送ってくる話」

「お前らの趣味偏りすぎてねえか？」

そんな話を話しているうちにテレビに映画が映り始めた。四人は何も言わずにテレビの画面を見始める。

20世紀キツネさん特有のテツテレテーな音楽のオープニングが流れ始めると、四人のテンションは最高潮に上がった。

日本ではそろそろ受験シーズン終盤だなあと一夏はふと思ったが、最終学歴が幼稚園卒業か小学校中退かよくわからないので関係ないと思った。

よくよく考えたら小学校中退はヤバイと思ったが、マドカも同じ様なモノなので、一夏は気にしないようにした。

映画が始まり、四人は取り敢えずテンションをあげた。普段は戦場で歴戦の猛者を狩っている戦士ではあるが、こんな時だけは年相応の幼さがうかがえる。

こんな時にハシャがなくて、何が亡国機業の一員だ。亡国機業の戦闘員のモットーは巫山戯れる時に巫山戯ろだ。



明日死ぬかもしれない。だから悔いの残らない様に今を愉しむ。行事やイベントも全力だ。クリスマスの日には、デスメタルを歌って邪教崇拜紛いの事を行う奴もいる。

そして、映画が盛り上がる場面になったところでききなり画面の映像が変わり、女性キヤスターが現れた。

『臨時ニュースが入りました』

「は？なんだよこれ、いきなりニュースかよ。三流映画だな」

ポップコーンをつまみながら、グレイは悪態をついた。

「ドンパチやれよ、ドンパチ。それともニュース読みながら機関銃ぶつ放すのか？」

「ドンパチ！ドンパチ！」

「イエス！」

「ドンパチ！ドンパチ！」

酒が僅かに入り、かつ日頃の鬱憤やストレスが溜まっている四人は既におかしなテンションに突入し、常人では理解し難いコールを叫び続けている。

そんな四人の要望を画面内のニュースキャスターは聞くわけもなく、淡々とした様子で原稿を読み始めた。

『先ほど日本で、世界最初の男性IS操縦者が見つかりました。名前は織斑百春。元プ

リユンヒルデ、織斑千冬さんの弟だそうですね』

ニュースの内容が読み上げられると、その場にいた四人は沈黙した。

……そんなわけではない。

「うるせえよ、いちいちその程度の事で臨時ニュースなんてしてんじやねえよ！」

「男性 I S 操縦者なんて、何年も前から見てるから見飽きてるよ！映画やれや！」

「で、その見飽きてる I S 操縦者は何処だ何処だー？」

「何処だー？」

「……だー!!」

一夏はテーブルに右手を突き上げ、片足を乗せながら勢いよく立ち上がると、他の三人は指笛を鳴らしたり、拍手をしながら騒いだ。

完全に四人とも可笑しくなってる。

「テハハハハ」

「モガモガ」

「ニヤガニヤガ」

「シャババババ」

意味不明な笑い声をあげる四人。

「この調子なら、映画は中止だろうな。マジで俺たちの癒しを砕いた奴ぜつてえ許さなえー！」

「いいのかあ？弟じゃねえのかよ」

「何年も会ってねえし、あいつらの場所に戻る気もねえし。俺が戻るなら、俺を愛し、俺が愛する人の元にだ」

「うわー、キザな事言うね。一夏も」

冗談を言ったりや茶化しながら笑い声を上げていると、執務机の上に置かれてある携帯電話がなり始めた。

一夏はソレに気づくと、ソファアから立ち上がり、執務机に近づいた。

携帯を手に取り、通話ボタンに手をかけ、耳に当てる。

「テハハ……………はい、一夏です」

巫山戯た笑い声を挙げていたのが嘘だったかのように、一夏は一瞬で気持ちを切り替えた。

『一夏、今の見た？』

通話の相手は上司であるスコール・ミューゼル、その人だ。

「ああ見ましたよ、主人公が彼女を救うためにバターナイフ一本で銃を持ったテロリス

ト達に立ち向かうシーンでしたよね？」

至極真面目に一夏は答える。

『……………貴方が何を見ていたのか察しがつくけど、そっちじゃなくてニュースの方よ』  
「ああ、そっちですか。確か世界で最初の男性 I S 操縦者の登場ですよ？世界で最初の男性 I S 操縦者ですか、その御尊顔を一度でいいから目にしたいですね」

『鏡を見なさい。今すぐミーティングルームに集合』

「……………啞々、わかりました。では十分後に伺います」

一夏は電話を切り、執務机に置いた。

「おら、今日は解散だ。いきなり仕事が入った」

二度手を叩いて三人に促すと、三人は少し不満げな表情をしながらソファから立ち上がり、扉に向かって行った。

「おい……………片付けしろよ」

結局、四人で一夏の部屋を片付けた後、一夏は亡国機業の制服に着替えてミーティングルームに向かった。

「座って」

部屋に入るやいなや、既に部屋にいたスコールに促され、ソファーに座った。

「まず最初に聞きたい事は……貴方以外にISを操縦する男がいると思う？」

「……………いるだろうな。私的意見ですが、ISの中の意思が最初に触れたのが東さん、つまり女性です。だから女性はISを動かせる。そして俺はISに気に入られたから、ISを動かせるようになった。だから、俺とよく似た遺伝子を持つ百春は動かせる。あとは……そうですね、例えば俺のクローンも動かせるかもしれませんね。あくまで憶測で言ってるだけですけど」

ソファーによりかかり、差し出された紅茶を飲みながら、一夏はスコールに対して自分の意見を言った。

スコールはなるほど手を顎に当てる。

「それで……要件はそれだけじゃないはずだ。わざわざ呼び出すくらいだからな。今回の事もニュースで報告されるよりも早く、情報をつかんでいたはずだ」

「あら、ばれた？そうね、貴方の言う通りよ。そして本題だけど、総帥命令で私たちモノクローム・アバターはIS学園に対して当たる事になった」

「IS学園にねえ……彼奴は研究所じゃなくて、IS学園に送られるのか。あの爺、あの場所は自分が用務員として働いていたはずだが。まあ、どうでもいいや」

飲み干したカップをテーブルに置いて、一夏は天井を見上げた。

「具体的には何するんだ？」

「主にデータの採取かしら。それと彼を狙う組織の撃退。そんなところかしら」

「なら他の部隊でいいだろ。わざわざ俺たちじゃなくて」

「それは無理よ。今回の任務は少数で挑む事が多くなるから、私たちが適任なのよ」

亡国機業の実働部隊の中には幾つかの I S 部隊があるが、それぞれコンセプトが異なる。

あるモノは工作、ある部隊は多数による殲滅。

そしてモノクローム・アバターのコンセプトは少数精鋭。班員の数は存在する部隊の中で最少だが、班員一人一人の実力と一機にかける金の量は突出している。

機体で言えば、スコールのゴールデン・ドーン、一夏の黒零、そして最近になって黒零と同じように N o . 004 が設計して作り上げたティファニアのシエル。

これら三機を創り上げるだけでも、量産機十機以上の金が絡んでいる。

しかし、その分性能も量産機と比べれば高い。

班員一人一人の実力にしてもそうだ。少なくともこの部隊に入るためには最低でも代表候補生クラスの実力が必要であり、毎年毎年入隊を希望する人間が後を絶たない。

その中でも一夏とスコールの二人の実力は班の中でも突出している。それこそモンド・グロツソで上位入賞、または優勝を狙えるほどである。

「最悪の場合は、弟くんと戦う事になると思うわよ。それに織斑千冬ともね」  
「構わん。とうに袂を別ったからな」

一夏はソファから立ち上がると、扉に向けて歩いて行った。

「黒零の調整を行ってきます。さつきからどうもごいつが騒いで煩いんですよ」  
一夏はそれだけを伝えると足取り強く、部屋から出て行った。

出て行く一夏の背中を見て、スコールは寂しさを覚えた。

さあ、いざ舞台へ

## クラス代表決定

「それでは、七組のクラス代表は誘宵アリサに決まりだ」

既婚者の担任の言葉の元、ホームルームはすんなりと終わった。

ＩＳ学園の入学式も終わり、その次の日の授業でのホームルームで行われた、今度のクラス代表戦に出場する選手が他薦で私に決められた。

最初は、企業代表の仕事で忙しいために断ったのだが、担任の先生曰く、代表戦が終わった後は殆どお飾りみたいなものだと言われたので、受けた。

担任の先生が教室の外に出て行ったのを合図にクラスメイト達は一斉に何処かに向かった。行って行った。

大方、新しく入った男性ＩＳ操縦者の織斑百春でも見に行つたのだろう。

そんなになってまで見に行くものなのか私にはよくわからない。

男性ＩＳ操縦者なら一夏くんがいるし、兄弟だからと言って私が織斑百春になびく事はない。私は一夏くんが好きなのだから。

私はそんな事を考えながら、左手の薬指につけてある指輪を愛おしく撫でた。



「アリサちゃん、噂の男子生徒の所に行かないの？仲が良いんじゃないの？」  
後ろの席から、中学時代からの友人である榎木智沙が声をかけてきた。

「……………どうして？」

「え？だってアリサちゃんの荷物の中に百春さんと写ってる写真あったじゃない、子ども時代の」

……………は？

私が織斑百春と写真をとった？

私にそんな記憶は無いし、彼と話した記憶も一、二回。しかもそれらは一夏くんが一緒にいた時の事だから、私が織斑百春と仲が良いなんて事はありません。

……………そうか。そういうことね。

「智沙ちゃん、あれは織斑百春じゃなくて。織斑一夏、彼の双子の兄よ。私は織斑百春じゃなくて、一夏ちゃんと仲が良かったの。そこは勘違いしないでね」

智沙ちゃんにむけてニッコリと笑うが、智沙ちゃんは酷く怯えていた。何故だろうか、わからない。

「さてと、今日の授業は終わったみたいだし。部屋に戻る」

机の横にかけてあった鞆に荷物を詰め込んで、肩にかけると、私は教室を後にした。

廊下に出てみれば、一つの教室の前に女子生徒たちが蟻のように集まっている。

量から判断すれば、二、三年生もきている、物好きだな。

だが、寮までの道のりで一番の近道はあの集団を通り抜けるルートなのだが、正直な事を言って面倒くさい。

なので遠回りをする事になるが、人ごみを避ける事にした。

「お待ちになつて」

後ろから声をかけられた。振り返って見れば、そこには金髪ドリルがいた。

何処かで見た事がある。

確か誘宵グループの諜報部から送られてきた資料で見たことがある。

名前はセシリア・オルコット、イギリスの代表候補生で試験を受けなかった私を除いた生徒の中で、最も入試結果が良かった生徒。

誘宵グループと比べれば格は幾つも落ちるが、其れなりの規模の財閥のご令嬢さんだったかしら。

専用機は第三世代機IS、ブルー・ティアーズ。BT兵器と呼ばれる遠隔操作型の武装を持っており、セシリア・オルコットはこの武装を扱う適性が高かったために与えられたそうた。

カタログスペックを比べれば、私のISの性能の方が高い。当たり前だ。こっちはコアが作り上げたのだから。

そして特筆すべきは、根っこからの女尊男卑精神の持ち主らしい。その事だけで私は彼女と仲良くなろうとする気はない。

ISが使えるから女は偉いなどと勘違いしているらしいが、そんなモノは不安定すぎる。ISに整備は付き物だし、開発も必要。その中で男性が占める割合は高い。それなのに男性をけなすと言う事は自分の首を締めるも同義。

付け加えるならば、男性の中でもISを使える人はいる。

ああ、一夏くんに心ゆくまで甘えたい。

全く、女尊男卑家は六組のあの女だけで嫌なのに。どうしてアレが日本の代表候補生になって、IS学園には入れたのかわからない。親のコネ？

……私が言えた事ではないな。

彼女の自身に満ちた目は何処からくるモノなのだろうか。教えて欲しい。

「誰でしょうか、見たところ一年生ようですが」

取り敢えずは、彼女を見極める為に探りでもいれてみようか。本部もブルー・ティーズのデータが欲しいと言っていたし。こちらの手を隠しながら模擬戦ができれば、

最高のの。

ワザと怒らせるような発言をしてみた。プライドの高い彼女なら、この一言はイラつくはずだ。

「……私をご存知ない？」

餌を与えられてない釣り堀の魚のように簡単に引つかかった。

チヨロい。

「ええ、知らないわ。有名人の方ですか？それとも、只の自尊心の高い女尊男卑家の方ですか？」

「私を、イギリスの代表候補生にして、入試成績トップのセシリア・オルコットをご存知ないのですか!？」

「国家代表ならともかく、百人以上いる代表候補生、いちいち覚えてられないわよ。それと、私は入試免除で参加してなかったから、よくわからないのよ」

事実、私は特別枠のために入試を受けていない。

私の言葉を受けて、オルコットさんは酷く怒っている様子だ。

「誘宵グループのご令嬢がまさか、ここまで失礼な方とは思っていませんでした。やはり、極東の人は……」

後半の方は小声で言っていたが、しっかりと聞こえている。

「その極東の人間が作つてるモノで遊んでゐるイギリス人は何処の誰でしょうか」  
「何ですって！」

「別に貴方の事だとは一言も言つてないけど。それで、御用は何かしら。今日は月命日だから、一夏くんのお墓参りに行きたいの。だから早く済ませて」

「一夏くん?……貴方は優秀な女性だと思つていましたのに。まさか馬鹿な男にたぶらかせていたなんて」

先ほど私に嫌味を言われたからそのお返しなのだろう。なんとも言えないかな。  
けど

「ねえ」

「っ！」

只声をかけたのにそんなに驚いた様子をしないですよ。

「私はね、貴方達女尊男卑家が何を言おうが知つたことじゃないの。どうでもいいから」  
オルコットさんの額に汗が流れる。暑いのかしら。

「でもね、一夏くんとパパの悪口を言う奴は許さない。覚えていてね」

その瞬間、オルコットさんは青ざめた顔で唾を飲み込み、地面にへたり込んでしまつた。

彼女に背を向けて、私は廊下を歩き出した。

それから数日後のことだ。私は自室のパソコンでクラスメイトに撮影してきてもらった他のクラス代表の映像を確認している。

明日がクラス代表戦なので、私以外……正確に言えば四組の子もか、練習に熱が入っていた。

対戦カードも発表され、織斑百春や、いきなり二組に転校してきた中国の代表候補生とは決勝で当たることになっている。

二人の映像は確認したが、相手ではない。織斑百春は専用機である白式を与えられ、単一能力である零落白夜を使えるが、武装は剣一本しかないので、戦法は瞬時加速による奇襲が主だと思われる。

二組の代表は専用機、中国の第三世代機 I S 甲龍を使用している。厄介な武装を持っているが、対処の使用はある。実力も機体性能も私たちの方が高い。

そして私の一回戦の相手は六組のクラス代表、そして日本の代表候補生である『鹿狩瀬裕子』。女尊男卑家。

正直な事を言えば彼女との戦いは勝ったも同然。

問題はどれだけ手札を隠した状態で勝つかだ。

彼女の戦い方は、あの織斑千冬に憧れているのかわからないが剣を主体にした戦い方をしている。

……そうだ、ならばこっちもブレード一本、かつ性能を落とした状態で戦おう。うん、それがいい。

パソコンをシャットダウンして、一息いれる。

「明日が楽しみだね、アイリス」

左手の薬指につけた指輪型のISの待機形態をなでながら、私は笑った。

## 舞台の裏で

「こちら、ゼロ。準備完了」

IS学園アリーナ周辺の物見台。そこにゼロはいた。今回の任務はクラス対抗戦への乱入とデータ収集。

「どれくらい楽しませてくれるのかあ、二兄弟」

そろそろ目当ての試合が始まる。長い間同じ場所で見つとしていたために体がなまって仕方がない。

「そこで何をしてるのかしら」

サングラスから仮面へと付け替えようとした時に、後方から声をかけられた。

仮面をつけてから、ゆつくりとゼロが振り返ると、そこにはIS学園の制服を着て、手には扇子を持った水色髪の女がいた。

「見てわからないか？ 試合観戦だよ、チケットが取れなかったからここでみるしかなかったんだよ。ご理解頂けたかな、更識楯無くん」

更識楯無、それが彼女の名前だ。IS学園の生徒会長、その称号が意味するものは生徒最強。そしてロシアの国家代表。



「貴方が誰かわからないけど、怪しいから拘束させてもらうわね」

そういうと更識は己の相棒の I S を展開する。亡国機業が使用するような全身装甲型の I S とは異なり、四肢に装備が集中している。

「モスクワの深い霧……………いや、ミステリアス・レイディだったか」

「ご名答、抵抗しないでね。生身で I S に挑むなんて馬鹿な行為しないわよねえ？」

装備のランスを突きつけながら、挑発するように微笑む更識。

それを見て、ゼロもまた笑った。

「俺は馬鹿だからな、挑ませて貰うよ。スコール、事態が変わった。使うぞ」

左耳のインカムを抑えながら、上司であるスコール・ミューゼルに連絡をとった。

『別に今回の任務は成功しようが失敗しようが関係ないから、使っていていいわよ。ただし、負けたらただじゃおかないわよ』

「勿論だスコール」

それだけを言っ、ゼロは通信を切断した。

「言いたい事は終わったのかしら？」

「ああ、そうだな。それじゃあ、はじめようか。言っておくが、俺は強いぞ」

ゼロは左袖を捲り上げる。そして腕につけている装飾品を見せつけるようにする。

それは黒色のガントレット。

「それは……嘘でしょ」

更識はその正体を一目見ただけで判断できた。だがそれと同時に疑問を持った。何故奴が持っているのかと。

「何故貴方がISを。男は乗れないはずよ、百春くんを除いて。もしかして貴方、女？ 男みたいなのに女！ 性転換したの!？」

一人の例外がいるがISは女性にしか乗れない。それなのに目の前の男は何故、更識の頭を駆け巡る。

「生まれた時から付いてるよ。行け、行け、黒零」

ゼロの体を黒い光が包み込み、鎧を纏わせた。

黒零、ゼロの相棒。両手に中距離用武器『零砲』を構えている。

「行けぞ」

その言葉と同時にゼロは凄まじい速度で上空に飛び上がった。楯無はその速度に思わず見ほれてしまったが、ゼロを追いかけて飛び上がった。

僅か数十秒にして、遙かに上空に二人は着いた。

「貴方、何者？ 男なのにISを使えるなんて、信じられないわ」

口を開いたのは更識。

「俺か？ 俺は誰だろうな！」

零砲による不意打ち気味の発砲、だが流石は国家代表。容易くその一撃をかわす。

続けて一定の間隔を開けて、二丁の零砲からビームの弾丸が放たれる。その隙間を縫って、迫り来る更識。ゼロも同様に更識から一定の距離を撮り続けている。

(銃撃主体の攻撃、遠距離型と見た)

手に持った槍、蒼流旋に力が入る。そして僅かに存在する銃撃の隙間をぬって、瞬時加速を行って一気に距離を詰める。

穂先を突きつけて、一閃。

ゼロは向けられる槍を見て、仮面の奥で笑った。髪のような銀糸がたなびく。

その次の瞬間、ゼロの動きが変わった。今までの動きは遠距離を得意とし、かつ近距離戦闘が苦手な奴のソレに告示していたが今は違う。

動きの質が変わった。代表候補生級の動きから国家代表、ソレもモンド・グロツソでも優勝できるほどの実力者の動きに変化する。

突きつけられてきた槍を身をよじる事でその一撃を躲し、更に二丁の銃口を突きつけた。

二度の射撃の直撃をくらい、更識は後方に下がった。

「……………貴方、性格悪いわね。油断させて引きつけて、自分の領域に入り込んだ瞬間、

動きを豹変させて殺す」

「だろうな、俺も自分の性格が良くない事を自覚している。でもなあ、戦場なら性格が悪い方が良い性格だろ?」

二丁の武器を収縮し、徒手格闘の体制に移る。

「それが貴方の戦い方?」

「さあ? どうだろうなっ!」

ゼロがトンボのような軌道で、楯無との距離を一気に詰める。楯無はその見た事も無い軌道に戸惑いはしたが、冷静に対処する。

両手両足による連続攻撃が楯無に襲いかかる。見事な綺麗な連続攻撃であるが楯無にとっては躲すのはたやすいモノである。

しかし、突如として拳が不気味な加速を始め、避けるタイミングが狂い始める。

(なに、この動き?)

不気味な加速の正体は両肘に取り付けられたスラスタによる噴射。それにより通常のパンチよりも遥かに速く拳が飛んでいく。

そして一撃、左手から放った一発の拳が楯無の顔面に迫る。

「くっ!」

楯無はとつさに目の前に水の壁を作り上げた。厚いその壁はゼロの視界を塞いだ。

しかし、圧力を込め、堅牢な壁にしても所詮は水。ゼロ左の前腕から光が漏れ、そのまま左の拳を水面に接着させる。

「防げるか？」

左腕が震え、精神力発生装置により生み出された不可視の衝撃波が水中を伝わり、楯無を襲った。

(何……が?)

楯無には何が起きたのか理解できなかった。ハツケイのような武術の一種かと想像してみたが、構え方から除外した。

黒零の前腕の光が収まる。精神力発生装置は一度使用すれば長時間のクールタイムを必要とする。それは機体の都合もあるが、一夏自身の肉体への影響もある。

一夏は右手に長刀をコールして、衝撃を与えた事で、震えている水の壁を切り落とし、落とした。

楯無は慌てて、蒼流旋を構えて、追撃の斬撃を防いだ。

さらに加えて袈裟懸けが迫る。

楯無はその一撃を槍で防ごうとする。

しかし、一夏は袈裟懸けを仕掛ける途中に左脚でガラ空きになった楯無の右の脇腹に蹴りをいれた。

更に全身につけられているスラストターを噴かせる事によつて、袈裟懸けの動作を中断させる。体を捻じり、回転させ、逆方向から切り上げる。

「くっ！」

「まだ行くか？」

楯無にとつて一夏の戦いは見たこともないものであった。

一夏の戦闘スタイルは戦闘に関する知識を何もかも、無差別に食い散らかし、ありつたけ吸収した。

そして得た知識を活用して、理性的かつ本能的な動きで戦う。敵が弱ければ最小の手段で殺し、敵が強ければ最大の手段で倒す。

戦闘は一夏が有利に事を進めている。搭乗者の実力は僅かに一夏の方が高い。しかし、乗っている機体で差が大きく開いている。

楯無はミステリアスレイディを己の力で作り上げた。性能も高く。自身の戦闘スタイルに合わせ、親和性も高い。

だが、黒零はソレらを遥かに凌駕する。

一夏の斬撃が勢いを増す。気を抜いてしまえばカタをつけられてしまいそうになる。

それでも、楯無は牽制を交えながら、I S 学園から一夏を離れさせる。被害を増やさないためなのだろう。一夏は楯無の意図を理解し、態々ソレに乗っけてあげることにした。

「……ん？」

ヘルメットに備え付けられてあるセンサーに一つの反応があった。

上空を見上げ、雲の先にいる何かをみる。

一夏がサマーソルトキックをしかけ、その勢いのまま雲の上まで上昇する。速度も凄まじく、瞬く間に楯無を振り切った。

楯無は追撃の中断を考えたが、その考えを直様頭の中から消去した。

遅れること十数秒、楯無も雲を突破する。

そこには四肢を破壊され、達磨状態になった一機の正体不明のI SとそのI Sの頭部を右手で掴んでいる黒零がいた。

四肢の破壊され方も全てバラバラ、切断面であつたり、強引に力任せに引きちぎられたり。

あの目を離れた僅か二十秒ほどの間にこれが行われたのかと思うと、楯無の背中に冷や汗が流れた。

「貴方、ソレは……」

「無人機だ」

「無人機？」

黒零の銀糸が蠢き、正体不明のISに絡みつく。

「解析……………成る程。あの人のやりそうなことだ。貰っておくか」

その言葉の直後、黒零が左手に持っていた正体不明機の腕が粒子になって消え去った。ISによる収縮を使ったのだろう。

マズイ。

あれを奪われてはならないと楯無の本能が告げる。

瞬時加速によつて距離を詰めて、蒼流旋による攻撃を仕掛ける。

しかし、それよりも早く黒零は無人機を回収した。更に両脚に鳥趾状の装備をみにつける。

「……………試合が終わった？ 負けたのかよ……………なさけない。わかつた帰還する」

脚を振り上げ、槍を持つ楯無の右手を爪のついた左脚で掴む。更に右脚で左手を掴み、両脚を開脚させることにより楯無の胴体をガラ空きにする。

そして楯無の鎖骨に両手でトマホークチップを叩き込む。

そして体を捻じりながら脚を閉じ、それと同時に楯無を上に乗る。

錐揉み回転をしながら宙を舞う楯無、一夏は彼女に向かって飛翔する。それに合わ



せ、鳥趾状の装備に備え付けられたスラスタを放つ準備をする。

一夏は楯無の両足の裏と自分の足の裏をピッタリと合わせ、爪で固定する。

「最後に一つ、俺は亡霊だ」

「亡……霊？」

一夏から言われた一言に楯無は首を傾げた。亡霊とは死者の魂、ならば目の前にいる人間は死んでいるのか？

否、生きている。

「行きますよ、フアントム・キャノン！」

一夏は足裏とスラスタの勢いを利用して楯無を打ち飛ばした。

高速で地に落ちて行く楯無、必死に体制を立て直して、一夏を追撃しようとするが、一夏はその場からいなくなっていた。

「なんなのよ、あれ」

楯無は今の戦闘を振り返って、敵の正体を探る決意をした。

それと同時に一つの疑念が起きた。

「アレは……誰？」

## クラス代表戦

クラス代表戦当日、私はアリーナの中にある待機室に入らずにアリーナの周りを散歩している。

一回戦が始まるのは今から三十分後、それに私の試合は第三試合、機体の調整は完璧、問題はない。

アリーナの入り口には既に生徒達の行列ができている。

「……………」

人の気配？

それも強い、生徒のものじゃない。

懐かしい。

気配の出どころは、あの物見台。

……そうかあ。

「ふふっ、そういうことね」

気配を出しているのが誰かわかった。

さあ、待機室に行こうか。

「久しぶりね、誘宵アリサ」

待機室に入って早々、二組のクラス代表であり、中国の代表候補生の鳳鈴音が親しげに話しかけてきた。

可笑しいな、彼女とは会ったことがないと思うのだけれど。

「すみませんが、初対面じゃないんですか?」

その言葉を聞いて、鳳さんはずっこけた。

「ちよつと!小学生の時、同級生だったじゃない。忘れたの?ほら、アタシが百春の家に行つたとき、何回も一夏と遊んでるアナタとあつたじゃない」

そう言われてみれば、そんな気もしなくはない。

……ああ、五年の時に来た転校生か。ずつと一夏くんと居たから、覚えていなかった。

「ああ、はいはい。思い出したわ」

「……………あんた雰囲気変わった?小学生の時はおとなしくて、おどおどしてた印象だけ。今あつてみると、どこか一夏に似た雰囲気を出してるわね」

「そう、褒めてくれてありがとう」

「褒めたつもりはないんだけどな………それより貴方の相手、あの鹿狩瀬じゃない、仲悪いでしょ」

鹿狩瀬、正直なところ彼女とは会話したくない。

「どうしてそう思うの」

「あの学校で、貴方と一夏が鹿狩瀬と仲悪いなんて有名じゃない。一学期だけだったけど、今までの学生生活の中であの事件が一番衝撃的だったわよ」

「そうね、鹿狩瀬とその取り巻きが私を虐めてたのを一夏くんが見て、全員半殺しにしたアレね」

小学五年生の一学期、私と一夏くんにも力ついたので、鹿狩瀬とその取り巻きは私を一度だけ人の少ないところに連れて行って暴行を加えた。

それを一夏くんが見つけて、五人くらいを近くにアツた物や手を使って動けなくなるくらいまで殴った。それでも一夏くんは止まらなかった。

この騒動を見つけた生徒が先生を呼びに行き、先生が来て一夏くんを止めにくるまで、惨劇は続いた。

「アレ、野次馬として見てたけど、今までの人生の中で一番怖かったわよ」

「そう言われても、一夏くんは一夏くんだし……そろそろじゃないの、貴方の試合」

「え？ああ、そうね。じゃあ、また」

鳳さんは試合の準備のため、待機室から出て行った。

待機室には私の対戦相手はいない。というか、私しかない。他の六人はそれぞれ別の部屋を割り当てられたらしい。

待機室のソファアーにどっかりと座り、アリーナの様子がわかる備え付けのモニターを見る。

響木理事長が挨拶を行い、来賓の各国のお偉いさん……あとついでにパパもいる、が来賓席で観戦している。

挨拶も終わり、ようやく第一試合。観客の歓声の上がり方から、この一戦がどれだけ注目されているのかがわかる。

織斑百春と鳳鈴音の一戦。

織斑百春はあのイギリスの女を倒したそうだが、撮った映像を見る限りまだまだ実力不足、やられた代表候補生はどれだけ油断していたのか。

愛機は『白式』、使用されているのは二番目に作られたコアNo. 001、白騎士に使われたコア。その事から想像するに束さんが関わっているのだろう。

相手の鳳鈴音は短期間で中国の代表候補生になった努力型の人間。

データを比べれば、十中八九鳳が勝つだろう。

けどそんなのどうでもいい。

優勝するのは私だ。

「一夏くん、来てるのに来ないな」

さつきからあの物見台から、一夏くんの I S のコアである N o . 0 0 0 の気配がして  
いる。という事は一夏くんもいるはずだ。

多分、用事があるからこつちに来ないのだろう。

試合が始まった。試合は初っ端から鳳が有利に戦闘を進めている。

『……ゼロが闘ってるわね、相手はあの生徒会長かしら』

私の I S のコアである N o . 0 0 3 の電脳妖精、アイリスが声をかけて来た。彼女と  
は日夜生活を共にしている、一夏くんの次に友達と言える。

少し離れたところで、一夏くんと生徒会長が戦っているらしい。

「一夏くんが優勢なのね」

『……私、何も言っていないけど。まあ、合ってるけど』

「そう、ならいいわ」

ゆつくりと目を瞑り、瞑想を始める。

数分後、試合は織斑百春が負けて、鳳さんが勝利した。

「……あ、一夏くん何処か行った」

ゼロの気配が遠くに行っている。つまり、一夏くんは帰ったのか。  
なら、次は私の番か。

「アイリス、準備はいい？」

『ええ、良いわよ』

アリーナのピット内、私は誰もいないこの場所で虚空に話しかける。

左手の薬指につけてある指輪状のISの待機形態に意志を向ける。

指輪が光り、私を包み込む。

光が収まると、私の肉体は金属の鎧に覆われていた。

これが誘宵グループが保有する全てのISの中で唯一、戦闘を行う事ができるIS。  
彼女が設計図を作り上げ、誘宵グループの総力と束さんの力を少し作り上げたIS。

その名も『アイリス』

コアと同じ名前であるが、気にしてはいない。

一夏くんが褒めてくれた、私の髪の色に似た藍色の装甲。

学園にあるような部分部分に装備がついているタイプではなく、全身装甲型になっている。

腰の周りにはスカートのような形の装備がついている。動けば、翻る。

姿を例えるなら、鋼鉄のドレス。

さあ、行こうか。

「誘宵、勝てよ」

「勿論」

担任の先生からの激励の言葉を受け取り、私はアリーナに飛び出した。

アリーナに飛び出すと、歓声が一層強くなった。成る程、私にも注目が集まっているのか。

対戦相手は既に待っている。

「久しぶりね、誘宵アリサ」

鹿狩瀬裕子、日本の代表候補生で与えられた機体は打鉄。最近では量産コアが出回っ



ているので、彼女みたいな代表候補生でも専用機を与えられている。

「あら、真面に喋れるのね。五年生の時は歯がなくて喋れなかったのに、入れ歯でもしたの？」

彼女の永久歯は五年生の時に一夏くんが全て、殴って叩き折った。だから、こうして彼女に生えている歯は入れ歯なのだろう。

「ええ、そうよ！あのクソむかつく男のせいでアタシの歯はなくなったのよ！でも死んで、ザマアないわね」

「……………」

彼女が自分用に改造した打鉄の装備である長剣を振り回しながら、そんな事をほざき始めた。

「アタシに生意気な事を言うからああなったのよ。女は偉いのよ、だからISを使えるのよ」

「ねえ、貴方。ISを玩具と思ってるの？本来の理想とはかけ離れてるけど、これは兵器よ」

「違うわ！これは篠ノ之束博士がアタシ達女性に与えてくれた、男を支配するための……………」

「喋るな」

私のその一声で鹿狩瀬は黙った。

「貴方に東さんの何がわかるの？直接あつて話した事があるの？笑つてるところを見た事はあるの？」

一夏くんに連れられて東さんのラボに初めて遊びに行った時、東さんは緊張していた。人付き合いの得意な人ではなかったから、私と話すだけでもぎこちなかった。

けど打ち解けていくうちに見せてくれるようになった笑顔はとても眩しかった。

「あの日、あの場所で東さんがどうなっていたのかを見てない人が、東さんを語るな」

試合開始まで残り十秒。

「気が変わったわ、貴方は徹底的に叩きのめす。貴方達がどれだけ間違えたかをね」  
「生意気な、すぐに叩きのめしてやる！」

3……………2……………1……………

0

試合が始まった。鹿狩瀬は全力で此方に近づいて来た。長剣を構え、織斑千冬に似た構え。

これが本物の織斑千冬なら、私も苦戦するだろう。

けど

「温い」

タイミングを合わせて、瞬時加速による勢いを重ねた飛び膝蹴りが彼女の顔面に直撃した。

形は似ているが、実力は織斑千冬と比べるまでもない。

蹴りで怯んだ彼女の胸を右足で踏みつけながら、地面に向けて急降下。

地面に鹿狩瀬を叩きつけて、肺の中の空気を全て吐き出させる。

私は右足を振り上げ、打鉄の肩付近に浮遊している非固定ユニットを踏み潰した。

「くっー」

鹿狩瀬は足につけられてあるスラストを噴射して私から逃げるが、私もそれを追いかけて、今度は左手を踏み潰した。

「さっきまでの威勢は？」

「舐めるな！」

鹿狩瀬は立ち上がり、刃を此方に向ける。

その程度では意味がない。

振り下ろして来た剣を蹴り上げて弾き飛ばす。さらに回転蹴りで鳩尾に一撃を叩き込み、鹿狩瀬を吹き飛ばした。

地面を転がる鹿狩瀬を追いかけ、顔面目掛けてスラストターを利用した最高速度の全力の蹴りをおみまいした。

宙を舞う鹿狩瀬、私は彼女の背中目掛けて蹴りを入れ、そのまま彼女の背中をサーフボードのようにしながら、地面スレスレを滑空する。

そしてそのままアリーナの観客席との間に存在している電磁バリアに鹿狩瀬を擦り付ける。

「アアアアアア!!」

鹿狩瀬が悲鳴をあげる。それでも私は電磁バリアの波に対するサーフィンをやめず、アリーナを上昇していく。

頂点に達したところで鹿狩瀬を開放し、気を失いかけた鹿狩瀬は自由落下を始める。

そして鹿狩瀬はそのまま動く事なく、地面に落下した。その後も動く事はなく、私の勝利宣言がアナウンスされた。

「……………恐ろしいわね」

自分の試合が終わり、待機室に戻った鳳鈴音はモニターを見ながらそんな事をつぶや

いた。

モニターに写っているのは、誘宵アリサ。ほぼ無傷で代表候補生を圧倒してみせた。「あいつ、足しか使っていないじゃない。武装も使ってなかった」

試合内容を振り返りながら鳳は身震いをした。

「いくら鹿狩瀬が代表候補生の中でも中以下なのに、圧倒的じゃない。当たるなら決勝か」

鳳は対誘宵用に頭の中で作戦を練り上げるが、情報量が少なすぎるためうまくいかない。

「本当、闘ってる時の雰囲気こそつくりね……怖いわ」

## クラス代表戦決勝

クラス代表戦決勝戦、私は準決勝を対戦相手の子が辞退してくれたので余計な手札を切らずにすんだ。

次の対戦相手は下馬評通り鳳さんだ。

勝てない相手ではない。けれど幾つかの装備をお披露目する必要があるそうだ。

アリーナに二機のISが飛び出して来た。

(ヤバイわね、あいつが出す威圧に飲み込まれそう。こんなの代表と闘った時以来ね)

対戦相手である誘宵アリサの様子を観察しながら、鳳鈴音は震えていた。

それに対してアリサは一ミリも動かずに試合開始までの時間を待っている。

カウントダウンが始まる。

(相手はここまで武装を一度も使っていないけど、あたしは百春との戦いで全てみせてし

まった。不利なのはあたしか)

そして、カウントダウンがゼロになった。

先に動いたのは鈴音、己の得物である二基の大型青龍刀、双天牙月を呼び出し、アリスに向けて突撃する。

「……………」

アリスの右腕がゆらりと動き、右手に一本のビームブレードを収めた。

それを見て、鈴音は緊張感をより強めた。

アリスがこの大会初めて武装を展開した、その事実。

ビームブレードと青龍刀が空中で激しく激突する。二振りの青龍刀から放たれ続ける連続攻撃を容易く防ぎ続ける。

「ならー！」

鈴音は相打ち覚悟で、ゼロ距離で龍砲を放つ構えを取る。

龍砲の弾丸は圧縮した空気であり、不可視。故に躲す事は非常に困難である。しかし

「……………」

アリスは突然後方に下がり、鈴音との距離を取り、腰のスカートに装着されている銃『ショットランサー』に手をかける。

龍砲から二発の空気の弾丸が放たれ、アリサもまた引鉄を引いてショットランサーから鏃型のビームの弾丸を放った。

空中で相殺しあう、両者の弾丸。

見えない弾丸に銃弾を直撃させたことが鈴音は理解できなかった。

そして衝撃が収まるよりも早くアリサが仕掛ける。

瞬時加速による急接近から、踊るような美的運動で鈴音を惑わす。龍砲の照準を合わせようと試みるが、アリサの動きについていけない。

「ならばアタラメー！」

甲龍の非固定ユニットが回転を始め、青龍刀を収納して腕の前に突き出す。

そして両腕と非固定ユニットに装備されている全ての龍砲を無闇矢鱈に連射する。

当たらなくても構わない。その動きを少しでも制限することができたのならば恩の字。

しかし、アリサは左前腕に新たに呼び出した盾を装着させて前に突き出しながら突撃する。被害を最小限にとどめるように一本の槍となつて。

四門の龍砲がアリサに向けられ、一斉に放たれる。

槍と弾丸の衝突が起ころうとした。

しかし、そうはならなかった。アリサは弾丸が直撃する前に軌道を変化させ、急加速、



急変化を行つて鈴音の背後を取る。

鈴音は虚をつかれた。一点に集中して放つた最大火力の砲撃が避けられる。再度発射するまでには数秒の時間が必要。青龍刀を展開するにも少しの時間が必要。

アリサは狙う、厄介極まりない不可視の弾丸を放つ砲台を、己の得物であるビームブレードを手に。

数秒の長い攻防が始まる。

一手目。

ビームブレードが肩に備え付けられている龍砲を狙う。それを鈴音は咄嗟に左手で防ぎにかかる。

だが、そちらに意識が集中している隙に左足のミドルキックが鈴音の右脇腹を震わせた。

「カハッ！」

予想外の一撃であった。狙いは龍砲ではなく、鈴音自身。いくら武器があつても使う人間がいなければ意味がない。

続いてビームブレードが左の龍砲を引き裂いた。

「チッ！」

発射可能になった残された左の龍砲がアリサを捉える。アリサは射線上に盾を構え

ることで牽制を行う。

そして今度は鈴音の腹に蹴りが一撃。鈴音はわざと吹き飛ばされて距離を取る。

(予想以上に強い！流石は今年の特別推薦枠つてわけね。けどなんなのこの違和感はやる気がない?)

追撃をしかけてこないアリサを見て、鈴音はそんな風を感じた。

一回戦でのアリサの戦いは圧倒的なものであった。相手に何もさせず、己の領域で最低限の手札を切って圧勝した。

しかし、今回は違う。

気迫がない。一回戦で感じられた確実に殺すという殺意がなく、流されるままに戦っているかのような印象を、鈴音は受けてしまった。

(ムカつくー！)

再度二振りの青龍刀を展開して、柄と柄を繋ぎ合わせてより長大な武器を作り上げる。

アリサに突撃し、長いリーチを利用した連続攻撃で攻め立てる。

しかし、アリサに対してその攻撃は意味ない。冷静に冷徹にいなす。

そして一閃で両端の刃をビームブレードで切り落とされた。

(これでも……ダッ!?)

突如、鈴音の動きが止まった。何か攻撃をし掛けられたわけではない。唯、目を見てしまったのだ。

アリサの操る『アイリス』の碧の目の奥に存在する、アリサの翠の瞳。

そして鈴音にとっては恐怖の象徴にも近い、ある人間の瞳。

動きが止まる。

呼吸を忘れてしまいそうになる。

その一瞬の間だった。

「————」  
必殺の一撃が叩き込まれ、甲龍の動きは止まった。

## 一夏一日

「ん……んん……もう朝かよ」

目覚まし時計の音を聞いて、一夏は目を覚ました。数人が一緒に寝ても十分な大きさのベッドからもそりと起き上がり、日が漏れているカーテンに近づいてカーテンを両手で勢い良く開ける。

「いい、朝。そして………今日も元気か」

下着しか身につけていない自分の体を見ながら、晴れ晴れとつぶやいた。

一夏は部屋に備え付けられているクローゼットからジャージを足り出して着替える。そしてドアに向かって歩きながら軽く上半身を捻る。

一夏は亡国機業本部の周りを走っている。その速度は朝のランニングにしては速く、他に走っている人たちをどんと抜かしている。途中で手を降ってくる女性に対して笑顔で挨拶している。

六十分走り、そして十分間程ダッシュをすれば一夏の身体は汗をビシヨビシヨにかいていた。一夏は元の場所まで戻り、近くにあつたベンチに腰をかけて体重を背もたれにかける。

「はい、一夏」

「ありがとう、ティファ。また待っていたのか」

一夏はベンチの近くで待っていたティファからスポーツ飲料をもらい口に含む。そしてゴクゴクと音を立てながら飲んでいく、そしてその度に喉が動くのがわかる。

「つーかティファ、お前ここで待ってるぐらいなら一緒に走った方が良いだろ」

「それもいいんだけどさー、一夏の走る速度つてめちやくちや速いじゃない。ほら、私も一回参加したけど直ぐに追いつけなくなつたじゃん。だからこうして私も個人的に走つた後に待ってるのよ」

「そうか、それは大変だな。よし、そろそろ時間だし俺は戻る」

「私はもう少し走ってくるからじゃあね」

「おう」

一夏はベンチから立ち上がって、後ろに手を降りながら部屋のある寮棟に向かっていく。

自分の部屋に戻った一夏はジャージを脱ぎ捨て洗濯籠の中に入れて、バスルームへ入って行った。亡国機業では個室にしかバスルームとトイレは無く、集団部屋の人たちは共同浴場や共同トイレをしようする。もちろん男女別々だ。

音楽を垂れ流し、鼻歌混じりにシャワーを浴びながら、丹念に肉体を洗う。凄く良い、贅沢を浴びている。

朝食は元ルームメイトの三人と食事を行う。他の三人は既に飯を食べており、そこに一夏が加わることになった。

「遅いね一夏、お疲れ？」

席に着くなりそうそう、ジークが尋ねて来た。確かに今日の一夏はいつもより数分程

来るのが遅かった。

「ああいや、大丈夫だ。唯いつもより少し長くシャワーを浴びてしまっただけさ。まあ、疲れているのかもしれない」

「へえ、鉄人のようなお前でも疲れるんだな。初めて知ったよ」

「……殴るぞ、グレイ。俺も疲れるよ、此の所モノクローム・アバターと警護が重なってな、マジヤバイ」

「君がそんなことを話すなんて珍しいな」

「んああ、たまにはな。どうもIS学園に行った日から調子がおかしい。まあ、すぐに慣れると思うが。食欲も出ないし」

そんなことを話す一夏ではあるが、目の前のお盆におかれてある朝ごはんの量は、普通の人間のソレ以上だった。

朝食を食べ終わると、一夏は喫茶店に向かい、そこで珈琲を頼んで、タブレットからニュースを得ていた。

(宇宙コロニー計画進行中、量産型ISによって制作期間の大幅短縮。イギリス、ドイツ、フランスによる合同IS展示会、夏開催予定。ラファール社業績不信………ねえ)

コーヒーを一口。

初めて飲んだ時は苦くて飲めやしなかったブラックコーヒーだが、副隊長になってから毎日飲むようになった為に慣れてしまった。

慣れとは恐ろしいモノだ。一夏は言葉には出さずそう思った。

何をするわけでもなく、ただゆつくりとした時間を過ごす。此の時間だけは誰かに邪魔されたくはない。

これからの一日の為に。

例えそれが親しい間柄の人間であつても邪魔されるのを一夏は嫌う。

「疲れているようだね」

物事には例外が存在する。

カウンターの奥から一人の初老の男性が声をかけてきた。

白髪交じりの黒髪をオールバックして、余った髪をゴムで留め、黒いエプロンを渋く着こなす。

亡国機業本部の中で喫茶店を営む『マスター』だ。

元々は何処かの部隊の隊長を務めていたが、今は退役して奥さんと一緒にこの店をきりもりしている。

一夏とはシルヴィアを通しての付き合いになるが、名前は知らない。いつも『マスター』と呼んでいるからだ。名前を知らなくて困ったことはない。



「……ここ最近はいつもより忙しかつたですからね。長距離移動に、単独での施設破壊。それに加えて爺さんの警護。まあ、直ぐになれますよ」

一夏は極力疲れを相手に感じさせないようにニツと笑った。

「少し休んでみたらどうだい？年相応の子供みたいに遊んでさあ」

「遊び、ねえ……」

空になったコーヒーカップの淵を撫でながら、一夏はマスターの言葉を反芻した。

「してる……つもりなんだけどな」

「そうか、ならよかった」

マスターは何時の間にか用意していた自分用のコーヒーを飲んだ。

「あ、あの」

キッチンの奥から、一人の少女がケーキを乗せた皿を持って出てきた。

一夏が以前任務の時に助けた少女。あの後、元居た土地に戻るわけではなく、本人の希望でこの場所に残り、今現在は勉学に慎み、空いた時間にはこの喫茶店でアルバイトをしている。

日本人であった為に最初は他の人と会話するのに苦労していたが、一夏やマドカが手を貸して、なんとか普段の生活では困らなくなるまでにした。

「ケーキ焼いたんですけど、良かったら食べてもらえますか？」

そう言って、カウンターから差し出されたのはチョコレートのショートケーキだ。作りなのだが形は綺麗に整っており、プロが作ったものだと言われても信じてしまいうだ。

彼女は元々お菓子や料理作りは、同年代と比べれば高い技術力を持っていたのだが、亡国機業に来てからは、それらの道の所謂プロに教えを貰い、より高みへと昇華させた。彼女の次にその手の事が得意なのは意外にも一夏であり、彼もまたスコールや十蔵達の手によってありとあらゆる技術をプロから学ばされ、己の力にしてしまった。

「へえ……」

一夏は皿に置かれたフォークを手に持って、ケーキを一口サイズに切った。そしてそれをフォークで突き刺し、自分の口に運んだ。ゆつくりと噛んで味わい、食事を楽しむ。「うん、美味しい。珈琲に合うね」

そういうながら一夏は珈琲を一口口に吹くんだ。

「そう！そうなんですよ！」

少女はケーキを持ってきたお盆を胸に抱き寄せながら、パアツと明るい笑みを見せた。

自分の意図を一夏にわかって貰ったのが余程嬉しかったらしい。

それから一夏はゆつくりとした時間を過ごした。

「……………これは？」

一夏はリリースの部屋に呼び出され、其処で与えられた書類を見てそんな一言を述べた。

「この前のクラス代表戦でお前が鹵獲した無人ISに関するデータ」

「それで、解析は済んだみたいだな。誰が作ったかは……どうせ束さんか」

一夏は与えられた書類に関係なく、勝手に決めつける。

「そのようだな、本当に驚くよ。流石はISの生みの親なかなか常識外れのことをやってのける」

一夏は書類を一枚めくり、其処に書かれてあることに疑問を感じて、リリースを見た。

「面白い考えだろ？」

「あまり好ましくは無いがな」

物語は進んで行く。

## 転入生

「ふん、ふふーん♪」

IS学園の朝、誘宵アリサは日課のトレーニングを終えて部屋でシャワーを浴びた。シャワーを浴びて、部屋に戻ると自分の携帯電話が鳴っていることに気づき。バスタオルを巻いたままの状態、アリサは携帯の画面をみると、其処には自分の父親である誘宵皇の名前が映し出されていた。

「なに？パパ」

アリサは通話すると同時にそんなことを聞いた。

『なに、ちよつと諜報部から情報が入ってね。伝えておこうと思って』  
新しい玩具を手に入れたように皇は楽しそうな声を出した。

「それで、何？」

催促。

『一年一組に二人ほど、転入生が入ることになった。一人はラウラ・ボーデヴィツヒ、ドイツの代表候補生で黒ウサギ隊の隊長らしい』

「ドイツの黒ウサギ………ああ、織斑千冬が一時期教えてたっていうアレ？」

『そう、そのアレ。けれど本題は』

「そつちのほうでしょ？それで何か面白いこと？男でも来るの」

『いや、来るのはフランスの代表候補生、シャルル・デュノアという子だ。この子に関していえば、デュノア社の社長の息子で、最近代表候補生になったらしく殆どデータがないという事になっている。面白いことに、本名は、シャルロット・デュノアというらしい』

皇からの言葉にアリサは言葉を失った。シャルロットは女性の名前だとわかるが、シャルルは明らかに男性名で女性に付けるのはおかしい。

「……………織斑百春に近づく為に態と男性として入学した？でもそれだとしても、IS学園の中にも仲間がいないと入学はできない」

アリサは自分なりの推論を立てる。

『そうさ、どうやら学園長やIS学園を裏から支える方々はこの機に学園の膿を排除するらしい。その為に彼女を利用するそうさ。まあ、膿を排除した後の彼女の処遇は私の知ったことではないがね』

冷たい声であった。普段は明るい皇ではあるが、こういった場面になると非情に徹する。

自分の所にスカウトすると言わないあたり、あのシャルロット・デュノアがどれほど

の爆弾なのかよく理解しているようだ。

下手に自分のところに招き入れて、デュノア社にデータを渡されてはかなわない。

そしてなにより誘宵グループとデュノア社は仲が悪い。会社の規模で言えば、誘宵グループの方が何倍もデカイ。しかし、ISのシェアの割合で言えばデュノア社の方が高い。

『だから、彼女とは関わるな』

強い口調で電話越しに伝えた。

「……それは父親としての願い、それとも一つの会社の長としての命令？」

『勿論、一人の長としてだ』

その言葉にアリサは目を瞑ったまま無言で頷いた。父としての皇が非情な人間ではないことに安堵したからだ。

「そう、わかったわ………それじゃあね」

皇からの返答を聞く事なく、アリサは通話を切断した。

「……ふう」

アリサは手に持っている携帯電話を机に置いて、一息つく。

同室の人間は未だ朝のトレーニングから帰ってきておらず、部屋の中はアリサ一人だけになっている。

「さあて、これからどうなるのか……ねえ、一夏くん」

机に置かれた写真立ての中にある写真を人差し指で撫でながら、アリサは笑った。

二人目の男性 I S 操縦者の話題に包まれた日の翌日の放課後、アリサはクラスメイトであり友人である榎木智沙に対して、今度開かれる学年別トーナメントに向けてのトレーニングをつけている。

「アリサちゃん、休もう」

「何言ってるの智沙ちゃん。誘宵の I S 部隊に就職したいんでしょ？これくらいの事は簡単に出来ないよ、お声はかからないわよ」

目の前でラフアールに乗り込んだまま仰向けに倒れている榎木に対して、笑顔のまま冷たく言い放った。

榎木は茶色のポブカットの髪を地面につけている事にさえ、気が回らないほど疲れて

いるようだ。

「でもアリサちゃん良かったの？今度のトーナメント、急遽タッグ制に変わったけど、私  
がパートナーで？他に良い人いたでしょ？勝つためなら強い人と組まない」と

今回開かれる学年別トーナメントは急遽タッグトーナメントに変更される事になっ  
た。

そのため一年の生徒達は織斑百春とペアを組もうと必死になっているが、アリサに  
とってはそんな事は至極どうでも良かったので、直ぐに仲の良い樫木智沙とペアを組ん  
だ。

「んー、勝利に興味無いからね。だから今回は智沙ちゃんのレベル上げの機会にするよ」  
「やめて欲しいなー、そういうの。辛いです……………それにしても昨日は驚いたね、まさ  
か一組に二人も代表候補生が転校して来るなんてね」

「二人は確か男子で……………シャルロット・デュノアだったかしら」

真実を知るが故に、アリサは態と本当の名前で呼んだ。

「違うよアリサちゃん、それじゃあ女の子だよ。確かに顔は女の子っぽいけど、シャル  
ル・デュノアでしょ」

「ええ、そうだったわね。そういう事だったわね。女の子見たいだったから、ついそう呼  
んじやった」



流し目をしながらアリサは愉しそうに笑った。

真実を知っているが故に今のデュノアの行動の愚かさを知っている。

「誘宵さん！」

アリーナの中にクラスメイトの一人が入って来てアリサを読んだ。特段仲が良いというわけでは無いが、ちよつとした会話をしたりする仲ではある。

「どうしたの？ そんなに慌てて」

アリーナにきた少女は肩で息をしながら、両手を膝について息を整えて、要件を伝える。

「今すぐ一番アリーナに行つて！ ドイツと中国とイギリスの代表候補生が戦っているの。それで、それで」

どうやら言いたい事が上手に纏まらないようだ。それでも言葉の節々からヤバイという感情はアリサに伝わった。

「成る程、あのチビ黒ウサギとドリルと凰さんが何かやらかしたつていう事ね。大方、織斑絡みか」

アリサは一瞬のうちにISを展開し、全てのスラスターを吹かす準備をする。

「そういうわけだから、ちよつと行つてくる。智沙ちゃん、明日も練習だからね」

「……ハイ」

死を悟った。

超加速、一瞬で二人の目の前からアリスが消えた。錯覚してしまうほどの速度で空に上がった。

上昇、アリーナを抜け出して、騒ぎがあつていゝというアリーナに視線を向ける。スコープを利用して中の様子を探ると、二対一で戦つてゐるのがわかる。

だがどうにも様子がおかしい。

ドイツの機体から伸びてゐるロープに中国とイギリスの機体が首を締められている。

「アイリス、ライフルお願い」

『わかりました』

エネルギーサナイパーライフルを展開、スコープを覗いて、アイリスによるサポートを受けながら狙いをつける。

「そー！」

上空から放たれた二本のエネルギーの閃光は空を切り裂いて、正確無比にロープを撃ち抜いた。

ロープを撃ち抜かれたドイツの代表候補生は上空にいるアリスに視線を向け、肩に備え付けられているレールガンを向けた。

撃たれる前に終わらせなければならぬ。大きな曲線を描きながら降下、アリーナの中に侵入して、倒れている中国とイギリスの首根つこを掴んで壁際まで下がる。

「生きてる?」

「助けていただき……ありがとうございます」

「ゲホッ! なん、なんとか」

口に溜まった血塊を吐き出しながら、残った僅かな力を出して二人は返答をした。

「そう、それなら問題ない」

アリサは振り返り、戦闘の構えを解いていないドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッツヒを見る。

「どうするの? まだ戦うの? もしかして、ドイツの代表候補生様は私刑がお好きなのかしら?」

「誘宵グループの誘宵アリサか。確か今年の特選推薦枠だったな、私と戦え。貴様の実力が、今年の一年生の実力が、どれ程のモノか確かめたい」

アリサの挑発は耳に入っていないのかわからないが、ラウラは左手のプラズマブレードを展開する。

「貴方、話聞いてた?」

「構わん!」

ラウラがスラスターから推進剤を吹かせて突撃する。

止まる気は無い、戦いをやめる気配も無い。

アリサは後ろにいる怪我を負った二人に気を珍しく使い、アリーナの周を回るように移動しはじめた。

アリサは右手にエネルギーブレードを展開し、ラウラを迎え撃つ。

アリサの本来の戦闘スタイルは一夏のような力による圧倒では無く、技巧による翻弄。以前のクラス代表戦では珍しく力押ししただけ。

剣戟による火花が空を舞う。

両者は実力で言うならば一年生の中でも一、二番だ。

それでも、ISとの相性を踏まえたならばアリサの方が強い。

アリサは剣を振り下ろすふりをして、スラスターで勢いをつけた右膝蹴りを叩き込んだ。

IS式格闘術、スラスターなどISの装備を利用して行う格闘術。扱い自体が難しく使用する人間は少ない。一夏が使用しているのもこれだが、一夏はこれのエキスパートと言えるだろう。しかも一夏はこれと剣術などを組み合わせる。

「成る程、ただのお嬢様というわけでは無いのだな」

「そのセリフはやらねながらいうセリフじゃないわよ」

プラズマとエネルギーのブレードが鏢迫り合う。

次の瞬間には両者が刃を弾きあつて後方に飛んだ。

ラウラは肩のレールガンを起動、アリサに狙いをつけるが、それよりも速く狙いをつけられないように軌道する。

アリサが両手にエネルギーハンドガンを展開、レールガンを撃たれないように攪乱する。

「クッ！構うか！」

撃ち出された高速の塊が一直線にアリサに迫る。

そしてアリサはそれを待っていたかのように、ハンドガンを収縮して、再度刃を手に持った。曲線軌道を描いて一気に迫る。

「そー！」

だが待っていたのはラウラも同じだった。右腕を前に突き出し、固有武装であるAICを起動する。

そして、アリサはその力に掴まれ、動きが止まった。

「さあ、動きは止まつ……！」

突如、ラウラの背後で爆発が起きた。理由はアリサがAICに掴まれるよりも先に投げていたグレネードが爆発したため。

A I Cは動きを止めるが、そのためには極限まで集中しなければならない。故に発動している間は敵以外に意識は向けられない。

ならば止められる前に意識の外に、意識を外すモノを作れば良いだけ。

拘束が解かれる。

その次の瞬間には距離が一気に詰められ、ラウラの腹にアイリスの武装『シヨットラセンサー』の銃口が触れた。

「飛びなさい、無惨に」

二度引き金が引かれ、鏃型のエネルギーの弾丸が飛び出し、ラウラを後方に大きく吹き飛ばした。

アリサはその場でI Sにつけられたスカート状の装甲を翻しながら回転、シヨットラセンサーを収縮、回転が終わると同時に右手にエネルギーブレードを挿んでいる。

アリサがラウラに飛びかかる、まさにその瞬間。

「そこまでだ」

アリサとラウラの間に一人の女性が割り込んできた。

「教官」

「織斑千冬」

第一回モンド・グロッソの総合優勝者にして、この学園の教諭。アリサにとってはこ

の学校で唯一会いたくない人間だ。

「二人とも何をしている」

怒気を孕んだ眼で二人を睨みつける千冬。ラウラはそれに怯えているが、アリサは至極どうでも良さそうだ。

一秒でも早くこの場を離れたいという気持ち振る舞いに現れている。

「何をしてるって言われましても。そのウサギちゃん狩りをしていましたので、獲物を助けたら、今度は私が狙われたので返り討ちにしただけです。飼主ならしつかりードは握っててくださいよ、織斑千冬先生」

アリサはISを待機形態に戻し、スーツに付着したゴミを手で払い落とした。

「では、私は戻りますね。そのウサギへの処罰は先生に任せます」

「待て誘宵、お前にも話がある」

「私は貴方と話す事などないです」

「何故お前は私の授業に来ない。特別推薦枠の生徒が授業を免除されるのは知っている、しかし何故お前は私の授業にだけ来ない」

アリサは特別推薦枠というもので入学してきた。その枠で入ってきた生徒は基本的に全ての授業を免除され、自動的に卒業までの単位が入学と同時に与えられる。

ズルいと言われるかもしれないが、それだけの技術と知識を入学前に手に入れている

のだ。

それによってアリサは織斑千冬が担当する教科だけ行っていない。

理由は簡単だ。

個人的な好き嫌い。

「行く必要がないからですよ、それに私は貴方が嫌いですから」

その言葉を聞いて、ラウラがアリサに飛びかかるうとしたが、千冬が手で制止した。

「……………一夏の事か」

その言葉を聞いて、ラウラは始めて聞いたかのように疑問に満ちた表情で千冬を見た。

「よくわかってるじゃないですか、貴方は私から一夏くんを奪った。だから私は貴方には従わない、言葉も聞きたくない。貴方は一夏くんに何をした」

先ほどまでの冷静沈着な様子からはうってかわり、ドロドロとした粘性の高い怒りを放つ。

千冬から見てもその変貌ぶりは不気味に感じられた。

少しでも気を抜いてしまえば飲まれてしまいそうになる。だからこそ、ここで怯むわけにはいかない。一人の人間として、姉として、先生として。

「違う！私は一夏を大切にしていた、思っていた！」



「思うだけなんて誰にでもできる。思うだけだから、貴方は一夏くんから遠ざけられていた。一夏くんは本当は飢えていた。けれどただひたすらに殻に閉じこもって、己を殺していた。貴方にはその飢えを癒せない。だけど私は与えられる、癒す事ができる」

それは狂気ともとれる姿であつた。  
失つたものを願ひ、乞う。

狂愛の使者。

「もう……貴方と話す事はありません」

冷徹に言葉を告げ、アリサは立ち去つた。

「あ、あの……教官」

恐る恐るな口調で、ラウラは千冬に声をかけた。

「どうした、ラウラ」

「一夏とは何者なのですか？教官の弟とは織斑百春のことではなかつたのですか？」

その言葉を聞いて、千冬の顔は目に見えて悲痛なものに変わった。

「……そう言えば、お前には百春の事についてしか話していなかつたな。私には他に弟と妹がいたんだ。そのうちの一人が一夏だ。百春は手のかかる子だったが、一夏は手のかからない子だった。だからなのかもしれない、私は心の何処かで一夏は強い子だと思ひ込んでいたのかもしれない」

千冬は普段は見せない哀愁を纏わせながら、空を見上げた。

「それが、それ故に私は一夏を理解できなかったのかも。誘宵の話す通りだ。私は何もできないまま、一夏を失った。第一回モンド・グロツソの決勝戦の時だ。だからこそ、私は百春を失うわけにはいかなかった。失ったからこそ、もう二度と手からこぼれ落ちないようにしなければならなかった」

「……………教官」

今までにこんな千冬の弱々しい姿を見た事など、ラウラは一度もなかった。

こんなにも脆かったのか、私が憧れていたものは。

違う。きつと違う。

「私が、私が貴方が正しい事を証明する。だからこそ……………だからこそ」

小さな小さな眩きは、憧れに届かない。

## アドルフ

亡国機業本部、その中に存在する部屋の一つ、モノクローム・アバターに与えられた執務室に二人と一つがいる。

「それで、今回アメリカとイギリスから送られてきたISの調子はどうなの、一夏」  
「両方とも問題はない。コアの方は此方で現在使っているものを埋め込むつもりだ。戦闘スタイルから判断すると、アラクネはオータム、サイレント・ゼフィルスはエムに渡すのが一番良いだろう」

テーブルの上に珈琲と紅茶の注がれたカップがそれぞれ一つずつ置かれ、対面状にソファアーに座る二人の人間、一夏とスコールド。

そしてもう一つ、テーブルの上に置かれなノートパソコンのディスプレイからはリリスが姿を覗かせている。

『ゼフィルスの方は流石最新鋭機と言ったところだな。ビットは中々の装備であり、スナイプ機能も高い。アラクネは世代は落ちるが、乗り手によってはまだまだ戦えるさ』  
パソコンの画面が切り替わり、一枚の文書が表示された。

「これは？」

『今度の任務に関するデータだ。よく読むが良い』

そこには一人の人間のデータが書かれてあった。しかしそれは履歴書のようなものではなく、まるで実験動物の観察結果のようなものであった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……………聞いた事のある名前……………か？」

『遺伝子強化体、ドイツの黒ウサギ、などと言えばわかるだろ？』

その言葉は一夏もよく知っているものだった。

「成る程、それは聞いた事がある。そうか……………そういう事か。これは愉しいな」

「……………それで、この子と任務に一体なんの関係があると言うの？」

スコールがリリースに問いかける。

『今度の任務はドイツからの依頼でな、今現在IS学園にいるこいつの機体に搭載されているVTシステムを破壊して欲しいそうだ』

「VTシステムか、あんな胸糞悪いモノをなんでドイツは作って搭載させやがったんだ？」

わかりやすく、一夏の態度が変わった。原因はVTシステムだろう、それは一夏の逆鱗を侵すモノなのだから。

『ネオへの裏切り者がいたそうさ。しかもそれが発覚したのはVTシステムを乗せ終

え、ラウラがIS学園に向かってから数日後。ドイツはその事実を隠すために我々に依頼したそうだ」

「成る程ね、任務に関しては貴方とティファ、それと護衛にエムの三人で足りるでしょ？」

「……ああ、問題ない。俺がああ胸糞悪いモノを壊す」

『それともうひとつ……』

「……………」

実働部隊隊員アドルフは何をするわけでも無く、屋上で星に満ちた夜空を見上げる。

右手には缶コーヒーを持っており、先ほどからチビチビと飲んでいる。

一人の時間をユツクリと過ごす。

「啞々、ハハハにいたか」

ふと誰かから声をかけられた。アドルフは体重を預けていた手摺から離れ、声をかけてきた人間を見た。

「一夏か、どうした」

「少し話があつてな。それよかお前はここで何をしてたんだ？」

一夏もアドルフと同じように屋上を囲う手摺に体を預ける。

「星を見ていた。随分と長い間見ていなかったからな、久し振りにゆつくりと見たくなつてしまった」

「……………意外な趣味だな。初めて知つたよ」

意外な事実だった。

「……………星は良い。どんなに暗い絶望の中でも、その輝きの為なら人は、今も昔も歩き続ける事ができる。俺が……………そうだったからな」

「随分とポエミーな発言だ。意外だよ、お前がそんな言葉を言うなんて。驚きだよ」

「煩い、ダアホ」

僅かな沈黙が二人の間に広がった。

されど嫌な雰囲気はなく寧ろ二人ともこの沈黙を楽しんでいるように思える。

夜風に吹かれて黒と銀の髪が美しく靡く。

「……………今度の任務について書かれてある、お前はこれを必ず読んでおけ」

一夏はタブレットをI Sの拡張領域から呼び出して、それをアドルフに手渡した。

アドルフはディスプレイをフリックしながら、一文字一文字を確かめるように見落としがないように読んでいく。

「……これは本当か？」

「らしいな。俺はよく知らないが、お前はこいつと関わりがあるのらろ？」

「ムカつく話だが、な。そうか、殺し損ねていたのか。ならば今度は確実に殺さないとな」

冷静に喋るアドルフにはあるが、紅蓮の瞳には殺意が込められている。

「そう言うわけさ。じゃ、今度の任務は頼むよ」

一夏はアドルフからタブレットを受け取ると、手摺から離れてその場を立ち去ろうとする。

「アドルフ・ボーデヴィツヒ」

## 学年別タッグマッチ1

「ねえ、一夏。本当にするの？」

「何を今更怖気づいているんだ、ティファ。安心しろ、俺は何度もやってるんだ。お前は何も心配する必要はない。俺に身を任せれば良いんだ」

「でも」

「それ以上は何も言うな。ゆっくり、ほら」

一夏はゆっくりと両腕をティファの背中に回して抱き寄せる。

「さあ、イこうか」

「待つて！一夏、私」

「力を抜いて、俺に委ねて、さあ！」

次の瞬間だ。

一夏はティファを抱きかかえたまま、上空を高速で移動する飛行機から飛び降りた。

「アアアアアアアア!!」

空中に放り出されて絶叫するティファ。



「おお、大丈夫か？」

絶叫するティファとは対象的に一夏は比較的に落ち着いていた。

上空数千メートルからのパラシュートなしのスカイダイビングだというのに、まるで何回も体験しているかのように冷静だ。

「ねえ！一夏、早くI S展開しよ！死ぬ死ぬ死ぬ！」

一夏を抱きしめるティファの手がより一層強くなった。

「啞々、それはまだ無理だな。この高度だとギリギリI S学園のセンサーに引つかかる」  
一夏たちが落ちて行く先には一つの島が存在していた。そしてその島には巨大な人口建築物、I S学園が建てられている。

「あのなあ、飛行機を気づかれないようにするのも大変なんだけど。ハッキングして、僅か十数秒だけセンサーを解除してその隙に俺たちが飛び込む。どれだけ苦労した事か」

「なんで一夏はそんなに落ち着いてるの!？」

「ん？そりゃあ何度も経験してるからな。スクールや総帥からの命令で奇襲戦をやる事がおおいからな……………そろそろかな」

一夏はI S学園との距離を確認するとティファを突然突き離れた。

「ちよつと！一夏！」

ティファは手足をバタバタとさせながら必死に一夏に近づこうとする。

「落ち着け、ISを展開するぞ。センサーはもう大丈夫だ」

「本当!?!」

ティファは一瞬だけ安堵した表情を見せたが、直様自分の置かれてある状況を思い出したのか青ざめた。

「黒零」

「シエル!」

二人はほぼ同時に自分の愛機の名前を叫んだ。

光が体を包み込み、そして晴れる。

一夏が身に纏うのは黒零、漆黒のボディと黄金のラインそして白銀の長髪のような排熱機。

ティファの機体は黒零のような全身装甲、対象的に淡い桃色の装甲は女性特有の華やかさを感じ取れる。

そしてこの機体の最大の特徴は背中から生えている巨大な一对の機械的な翼だろう。

その翼を一度羽ばたかせると綺麗に体制を整えた。

この機体は一夏の黒零、アリサのアイリス同様にISコア、今回の場合はN o. 004によって生み出された機体である。

「さあ、行くかうか」

砂塵が舞い上がり、その直ぐ側にいた四人は事態が飲み込めないでいた。今日はIS学園タッグトーナメント当日。

しかもその初戦。

なにが起きた……………

四人の間に二機の全身装甲型のISが割り込んできた。

しかもその直前、観客席とフィールドを分けるシャッターが閉じられた。

四人はそれぞれ顔を見合わせるが、誰もその機体について知っていないようだ。

「なんだ、あれは？」

その中の一人、白式に乗る織斑百春が声を出した。

百春は割り込んできた二機のISのうち、黒色の機体に注意が注がれた。

「……………」

「ツ！」

見られた。

黒いISがギョロリと翠の瞳を向けた。

それだけで百春は萎縮し、そして笑われた。

百春は隣にいるシャルロットに声をかけようと思った次の瞬間、黒いISが動いた。

四人は殆ど反応できなかつた。ただ反応した時には既に懐に潜り込まれていた。

スラストーによる瞬時加速を生かしたノーモーションの超高速低空タックルがラウラの両足を刈り取つた。

「なっ!?!」

ラウラが動いた時は既に持ち上げられていた時であつた。

機体の出力もパイロットの熟練度も、このIS学園の生徒とは比べ物にならないほど高度であるとラウラは思つた。

「ボーデヴィツヒー!」

ラウラのパートナーである篠ノ之箒がラウラを救出しようとするがもう一人の侵入者によつてそれが阻まれた。

「舐めるなよ!」

ラウラはプラズマブレードを起動させて、侵入者の背中を切りにかかる。

しかし、そんな事は侵入者、ゼロも予測済みである。

掴んでいるラウラの脚を突然離して前方に放り投げる。

ラウラは両足を地面に擦り付けてこけないようにする。なんとか放り出された際の威力は消えたが、直様ゼロが飛んできた。

「クソッ！」

ラウラは両肩から全てのワイヤーブレードを射出してゼロの動きを妨げようとする。空中から迫り来るワイヤーブレード、ゼロはそれら全てを把握した。

「……………」

ゼロは迫り来るワイヤーブレードを全て殴り落とした。

その光景にラウラは心を奪われてしまいそうになった。

ゼロがラウラに近づく。

プラズマブレードでゼロを切り裂こうとした瞬間、ゼロはスライディングのように体制を低くしながら、ラウラの背後に回り込んだ。

ゼロは素早くラウラの胸に両腕を回すと、へその前で手と手を絡め合わせた。

そして両足を強く地面に縫い付けた。

ラウラの肉体がISごと容易く持ち上げられる。

そのまま勢いよくジャーマンスープレックスをぶちかました。

普通のISならばここで沈んでしまうのがオチだろう。

しかし。

「チツ、自分にA I Cをかけたか。反応の良いやつだ」

ラウラは地面に頭部が直撃する寸前に己にA I Cをかけて、動きを止めた。

その反応の良さだけはゼロも素直に認めるものであった。

ゼロはラウラの身体から腕を外すと、直ぐに相方であるティファアの元に飛んで行った。

ティファアも三人相手にそれほど手こずっていないようだ。

「選手交代だ」

「わかった」

ティファアは後方にバック宙をしながら、その途中でゼロと足と足の裏を合わせて、そこを軸に一回転。

ゼロとティファアの相手が変わる。二人は常に一対一と一対三、そしてそれと同時に二対四を進行するように意識しながら戦いを進めていく。

「ソラソラソラソラ！」

ボイスチェンジャーによって変えられた感情の抑え込まれた機械的な、しかし発する本人の気合いが今にも伝わってきそうなほど、圧倒的な連打が三人に襲いかかる。

（格闘戦主体？それにしても、わざの種類の多すぎる）

シャルル………シャルロット・デユノアはゼロの動きを見ながら、冷静に情報を分

析していく。

シャルロットはラウラの加勢にも向かいたいが、ゼロが二人の相手をしながら目線牽制をしかけてくる。

もし少しでも背後を見せたり、ラウラに加勢を行こうという姿勢を見せたのであれば、ゼロは一瞬でシャルロットに近づいて殺しにかかる。

それだけの余裕がまだゼロには残っている。

ゼロの戦闘スタイルが瞬く内に変わり続けていく。

ボクシング、空手、柔道、ムエタイなどなど、それらの全てが高度な領域に達している。

それらが変わっていくタイミングでゼロは毎回拍手をしている。

その行動は明らかに三人を嘲笑うものであった。大人が子供と遊ぶように、わかりやすく、はつきりと。

いきなり攻撃の手を休めて、大きく手を広げながらその場で一回転をして攻撃を誘い出す。

かと思ったら両手をだらりと揺らして、やる気のない姿勢を示す。

その行動の全てが相手からの攻撃を誘うものであった。

業を煮やして、百春と箒の二人が切りかかったと思つたら、両者の刃を手の甲で弾き

逸らしてぶつけ合わせる。

そして一瞬の隙ができた途端に二人を殴り飛ばした。壁際まで吹き飛ばされる二人。「さあ、次はお前だ」

地面を挟りながら駆けるゼロ。シャルロットは得意な戦術である『砂漠の逃げ水』を行いたい、ゼロがそれをさせない。

シャルロットは感覚で悟っている。既にゼロの領域の中に入り込んでしまっているということに。

殴るだけ殴られ、反撃しようと思った矢先に僅かな距離を取られて、右手に埋め込まれてあるビーム兵器の弾丸によって足を取られる。

(強い、それに上手い。実力は代表クラス………一か八か、賭けに出るか)

チャンスは一度切り。

これを逃がしてしまつては勝てる可能性は零になってしまう。

ゼロが再び近づき、接近戦をしかけてくる。

(今だ！)

シャルロットは右腕のシールドの先をゼロに向ける。

そして距離が零になった。

ゼロが右腕を振りかぶつたのを確認して、シャルロットはシールドにつけられた引鉄



を引いた。

盾の内側から鉄の杭が撃ち出される。

『灰色の鱗殻』、第二世代 I S が持つことのできる装備の中で最高の威力を誇るソレを、シャルロットはゼロの腹目掛けて撃ち出した。

シャルロットは勝利を確信した。避けられるはずがない。このほぼ零距离、そしてカウスターの一撃。

しかし。

ゼロの左腕が不気味に動いた。それはまるで、人の動きを超越したものであった。何十何百と数えられる戦いの中で生まれた勘はシャルロットの動きを予測した。

高速で撃ち出された必殺の一撃は容易くゼロの左手に掴まれた。

(予想できたはずがない。つまり、反応した!?)

シャルロットはその光景に背中から冷や汗を流した。

実力が違いすぎる。

「終わりか？シャルロット・デユノアくん」

「……!?!」

正体がばれている。

シャルロットは慌てて近接戦闘用のブレードを取り出して、ゼロに切りかかる。

こいつが何かをしゃべる前に口封じをしなくては。既に織斑百春にはばれているが、これ以上知られてはならない。

しかし、選んだ手は最悪。よりもよってゼロの得意な接近戦を選んできました。

肘鉄、裏拳、掌底、リバーブロー、ガゼルパンチ、目にも止まらぬ早さで打ち込まれていく、ゼロの攻撃。

シャルロットはその攻撃から逃れようと無意識の内に後ろに下がっていく。

そして。

ガンッ

シャルロットの背中が何かにぶつかった。

(なに、壁までは距離がある。だったら何にぶつかっ……い！)

そしてシャルロットは気づいた。自分が何時の間にか、ラウラ・ボーデヴィツヒの背後にまで移動していた、いやさせられていたということに気づいた。

ラウラもシャルロットと同じように移動させられていたようで、驚いている。

「……」

「……」

ゼロとティファの二人がアイコンタクトを取ると挟み撃ちをかけた。

「デュノアア！」

「わかってる！」

シャルロットとラウラは両者ともに避けることができない。どちらかが避けられればどちらかが攻撃を受けてしまう。

ラウラはA I Cを発動、シャルロットは残った盾を構えて攻撃を防ぎにかかる。

「左腕起動、衝拳」

黒零の左腕から光の粒子が漏れた。

ゼロはまるで中国拳法の発勁の如き動き、右足を軸にして体全体を回転させながら、左手で掌底を放った。

貫く、穿つ、刺す、震わす、撃つ、ゼロは心の中で一撃をイメージする。それこそがこの攻撃を放つ為の条件。強き意思がそのまま力になる。

盾に左手が直撃、そしてその直後の事だ。

(……ッ!?)

シャルロットの肉体をミキサードで掻き回すように衝撃が通り過ぎた。

それはラウラも同様だったらしく、A I Cの発動も不発に終わってしまった。

「それ！」

ティファが両手に構えたビームバズーカから巨大な弾丸が二発打ち出された。

「クッ！」

ラウラはとっさに肩に備え付けてあるレールカノンから弾丸を放った。

一撃は相殺したが、もう一発がレールカノンに直撃して、それを破壊した。

「行くぞー！」

「わかった」

ゼロとティファが右腕を挙げ、そのまま高速で意識を失いかけている二人に向けて突撃する。

二人が同時に放ったアックスボンバーがラウラとシャルロットの肉体に直撃した。

「クロスボンバー!!」

首に衝撃が走り、上空に向けて飛ばされる。

その一撃でシャルロットとラウラは宙を舞った。ゼロとティファの二人は追撃を仕掛けるわ

けでも無く、ただ両者近づくだけであった。

無惨に落下した二人、受身を取るわけでも無く、その衝撃に意識を刈り取られないようにすることが今できる精一杯のことであった。

「……………なんだ、ここまでやってもVTシステムを発動しないのか」

「どうするの？これ以上やるとエネルギー切れを起こして発動できなくなるよっ…」

「……………しようがない、最後の手段を使うか」

そう言うのとゼロは振り返って、アリーナの管制室に向けて大声で叫んだ。

「どうした織斑千冬！これ以上やると、てめえが栄光を捨ててまで助けたかった弟ちゃんが殺されちゃうぜ！なあ、降りてこいよ。I Sに乗ってな！あの時の続きをしようぜ、勝ち逃げされるなんて癪に触るだろ？リベンジさせてやるからさ、お前が唯一負けた相手に対してよお！」

その言葉は静寂のアリーナに響いた。

「夏くとティファちゃん、仲良くして。良いなあ」

## 学年別タッグマッチ 2

「奴は……あの時の奴なのか」

管制室で、織斑千冬は衝撃にかられていた。

突然の襲撃者、アリーナ内部との連絡はほぼ取れなくなり、現在は教員達による生徒の救出活動が行われている。

千冬個人の願いとしてはいち早く百春の援護に回って欲しいのだが、その為の人員を回せないのが現状だ。

「あの……織斑先生？」

千冬の様子が急激に変わってしまった事を心配したのか、副担任である山田摩耶が後ろから声をかけた。

「……マズイな」

摩耶の目から見ても千冬は明らかに焦っていた。目の前の画面に映る謎の I S 乗りが喋った事が本当年的だと察することができた。

「山田先生、急いで救出に向かわせてください。アレは……マズイ」

「貴様が、貴様かああああ!!」

ラウラは身につけていた眼帯を外し、金色の瞳を露出させながらゼロに突撃した。

もはや冷静さなど失われてしまっている。防御を捨ててまで、自爆特攻覚悟で突き進むしかなかった。

それでも、ゼロには届かない。躲され、防がれ、僅かな時間の内に無意味なものであると気づかされる。

「何をそんなに怒っているんだ？」

ゼロはヒヨイヒヨイと言った軽やかな効果音のつきそうな余裕の動きを見せる。

躲す度にラウラの振るうプラズマブレードの出力が増していく。

「貴様のような奴がいたから、教官は栄光を捨て！苦しんだ！」

「何を言ってるやがる、そのお陰でお前はその教官様と出会えたんだぜ。感謝されても、怨まれる覚えはないのだからなあ。そう、言わば我々はキューピッドというのかもしれないな！」

ハイキックでラウラの腕を弾き返して、ゼロは一度距離をとった。





口から大量の酸素を吐き出して、苦悶の表情を見せるラウラ。

「さあ、終わりか？じゃあ、もう……………ふっ」

ゼロの背後から百春が攻撃を仕掛けてくる。

ラウラと同じようにその顔は憎悪に溢れていた。

ゼロはラウラから足を離すと、百春を迎え撃つ。

「穢せ、汚せ、濁れ、零雪<sup>レイセツ</sup>」

一振りの刀がゼロの右腕に収まった。柄も刃も漆黒で染め上げられている刀、そして百春の持つ雪片二型に酷似していた。

それはこの戦いでゼロが使う最初の武器であった。

同じ刀を見てきた二人、しかし捉えたものは全く違った。

「お前が、お前が俺を誘拐したのかアアア!!」

「どうだか」

刀と刀がぶつかり、火花を散らす。

現在攻勢なのは百春、怒りに任せた一振り一振りが確実にゼロの肉体を狙う。

「はは、届かないよ」

本気の攻撃もゼロには通用しない。まるでその動きが予想されているかのように、ゼ

口が動かした位置に百春の刃が飛んでくる。

余りにも不気味。

「そうだ、もつと良いこと教えてあげるよ」

「なんだ!」

苛立ちを隠せない様子の百春。

「実は織斑一夏が誘拐された時もさ、あの現場にいたんだよ。どう? 驚いただろ」

「……お前は何を」

ゼロの言葉を百春は理解できなかった。

否、理解したくなかった。

もし今の言葉が本当ならば、自分と兄を誘拐したのが同一の人物または組織ということになってしまふから。

あの誘拐事件は織斑千冬に対する妨害工作。自分のせいで姉を傷つけてしまった思っていた百春は、我慢の限界だった。

「いやあ、無様だったよ。織斑一夏はさ。縛られながら何度も何度も、『助けて千冬姉』つてさ。面白いだろ、笑えちまうだろ。本当に見せてやりてえよ、残念だよ」

来ないことはわかっていた。

「デメエエエエエエエエ!!」

## 『零落白夜』

織斑千冬の代名詞とも言える必殺の一撃が起動した。

当たれば一瞬で敗北が決まってしまふ。

我武者羅に振るわれる刃、それをゼロは重ね合わせるように刃を這わせて、軌道をずらしていく。

必殺の一撃といえど、当たらなければ意味がない。

幾百の戦いを経験してきたゼロと戦闘に関してはほぼ素人の百春。二人の明暗は別れた。

「姉さんは、泣いていたんだぞー！」

「それが、どうした。フツ！」

ゼロは刀を持ちかえて、峰打ちで雪片二型を持つ白式の右手を大きく叩いた。

雪片は弾き飛ばされて後方に飛ばされ、地面に突き刺さった。

百春はバツク飛行で後ろに下がり、刃を手にとった。

そして両者距離を詰めるわけではなく、睨み合う。

「……………」

（強い……勝てない。けれど、やらなきゃいけないんだ）

スラストアーを再度点火しようも思った次の瞬間だ。二人の間に大きな線が走った。顔を動かして発生源を確認する二人。

「巫山戯るな、巫山戯るな。お前のような奴が、教官を穢して良いはずがない。そうしろ、違うのか？」

ボロボロの機体のまま、ラウラが立ち上がった。その様子はまるで修羅を纏っているかのように、先ほどまでとは雰囲気違っていた。

「だから、お前は………」

怒りが、負の感情が頂点に達した。

『VTシステム………起動』

ラウラが漆黒の泥を纏う。そしてラウラの専用機の姿が変わっていく。

その姿は見覚えがあるものであった。特に百春と千冬にとっては。

「暮桜………」

## 学年別タツグマツチ3

『暮桜』が動く。狙いはゼロ。

織斑百春へ向けていた怒りを忘れて、肉体から溢れ出てくる全ての怒りをゼロにぶつける。

模造した暮桜で、贋作の雪片を手に取り、模倣した千冬の構え。

そのどれもが『一夏』と『百春』の両者にとつては逆鱗を逆立たせるには十分すぎるものであった。

「何がVTシステムだ」

「千冬姉の真似だど？」

両者は同じ姿を見た。しかし、見て得たものは違いすぎた。

百春が表を見たとすれば、一夏は裏。

「ムカつきやがる」

「違うー！」

互いに得物を強く握りしめ、『暮桜』に対して突撃した。

奇しくも無意識の内の共闘となつてしまった。

同じ屋根で暮らしていた時でさえ一緒に何かをするということとは、両親が死んでしまった時から殆どなかった。

それが、一夏がいなくなってから数年後の事だ。

零雪と雪片二型の刃が泥によって作られた肉体を侵す。相手に対して攻撃を一切とらせない。

百春一人だけではここまで順調にはいかないだろう。一夏という強力なパートナーがいるために圧倒を可能にする。

無意識の内に一夏は百春に息を合わせる。完璧な連携攻撃で暮桜を仕留めにかかる。

三人分の刃の軌跡を頭の中に思い浮かべる。

一夏は二人の戦い方を知っているがゆえにできる芸当だ。

(誰だ……)

声が聞こえた。それも空気を伝播して伝わってくるような普通の声ではなく、まるで脳内に直接響いてくるような声であった。

(……………ゼロの仕業か)

一夏は声が聞こえる原因を断定した。

頭の中に声が響くなどという異常事態を周りに悟られないように限りなく冷静に振

る舞う。

(誰だ……お前は)

(……知るか)

百春に迫っていた刃を、一夏はカウンターで切り飛ばしたが直ぐに剣は再生した。

暮桜が左腕を大きく振るおうとするが、その直前に一夏が大きく足を開脚させながら蹴り上げて弾いた。

「はあー!」

更に反対側から、百春がすれ違いざまに暮桜の胴体に一閃。グラリと屈強な暮桜が揺れた。

(何だ、この感覚は?)

百春は戸惑っている、自分の真の実力以上の力が無意識の内に引き出させているという事実に対して。

それはまるで糸を使い、操られるようなマリオネットのようだ。

速度が上がり、威力が高まり、キレが増す。

一瞬の先が、理解できる。

これが闘いなのか。

これが強いという事なのか。

圧倒するという事は。

強者の持つ力とはこんなにも恐ろしいものなのか。

違う。

違うべきであれ！

百春は願う。姉の、己が憧れていた、守るための力がこんなものであつてたまるか。

しかし、このままいけば飲み込まれてしまう。只の滅ぼす力に、陰の力に。

故に、逆らう。

「うおおおおお!!」

目に見えぬ、心を操る糸を切り裂き、マリオネットは雛鳥に姿を変え、未熟で小さな翼を広げて飛び立つ。

(……変わった、か)

百春の攻撃に変化が現れた事に一夏は一瞬で気づいた。その事に対して苛立ちを覚えるかと思われたが、寧ろその事を一夏は喜んでいたのかもしれない。

自分とは違う道を進む事のできた弟を見る事ができて。

安堵したのは刹那のみ。直様次の行動に移り始める。

(私は……私は何のために生きている。人のエゴで勝手に、愛もなく冷たい管の中で生



み出された私たちに生きる意味はあるのか？教えてくれ）

暮桜の左肩に踵落としが叩き込まれて、大きく体制が崩れた。一夏は追撃で顎を蹴り上げて、元に戻す。

更に一度後方に跳躍して距離をとった。そして直様スラストで加速をつけた右ストレートがトブ！

（自分で考えてみる！俺たちにいちいち聞いてくるんじゃない！俺も知らない！わかんない！そんなのが当たり前だろうが！）

問答無用の一撃であった。

大きく吹き飛ばされる暮桜の肉体、空中で一回転を行って着地を行う。

「……………」

暮桜が睨みを効かせる。その姿には覇気は無く、目に見えて疲れていた。限りある力を振り絞って、雪片の模造品を泥で作り上げ、手にとった。

「いくぞ、終わらせよう」

一夏は零雪の柄を両手で掴むと、刃を下に向けながら低く構えた。

「指図をするな！」

百春は雪片式型を一夏と鏡移しになるように構える。

「零落極夜」

## 「零落白夜」

相対する至高の刃が、白と黒の必殺の一撃が醜悪な贗作に向けられる。

駆け出す。己の持つ全てを刃に乗せて、同じ胎より生まれた二人は目の前を否定するために刃を振るう。

対極の刃が美しい軌道を描く。

振り降ろされた暮桜の刃。

二つの斬撃が容易くその刃を切り落とした。

暮桜の胴体をクロスするように白と黒のラインが迸る。

崩れ落ちていく泥の肉体、その中から少女ラウラ・ボーデヴィツヒが落ちてきた。

一夏は彼女を優しく受け止めた。

「朽ち果ててろ、過去の栄光よ」

醜悪な残骸を見ながら、一夏は呟いた。

「はあ……はあ」

戦いが終わり、百春は天を仰ぐように地に倒れた。

そんな事をしている場合ではないという事は理解しているが、もはや体力が全く残っていない。敵がすぐ近くにいる事はわかっている。

どうにかして、気絶している篠ノ之とデユノアの救助に行きたいが、そうするだけの体力がない。

理由はわからないが、いつもの操縦以上に体力を使ってしまった。あえて言うのであれば、呼吸を行う事さえも苦痛に感じてしまう。

「VTシステム……………破壊確認。任務完了。これより撤退する」

一夏は近くにラウラを置くと、壁に寄りかかって休んでいたティファの元に歩み寄った。

『終わった?』

『ああ、終わったよ。済まないな、俺の我儘に付き合ってもらって』

秘匿回線越しの会話を言いながら

、二人は飛び立つための準備を行う。

その時であった。

『させないよ』

二人に向けて通信が飛ばされた。

二人はいきなり通信が飛んできた事に焦ったが、その次の瞬間には声の主の正体かわかり、より一層焦った。

開かれるピットとアリーナを繋ぐシャッター。

そこから飛び出してきたのは……

『楽しそうにしてるね、一夏くん、ティファちゃん』  
誘宵アリサであつた。

## 学年別タツグマツチ4

『一夏くん、ティファちゃん。二人で仲良くして、楽しそうだね』

包丁を首元に突きつけられているような感覚が一夏とティファの二人に襲いかかる。

久し振りに感じる、生温さとはかけ放たれている。灼熱で冷徹な恐怖心。

今回の任務で一番緊張しているのはこの場面ではないのだろうかと思えるほどに、二人は震えがっていた。

『ア、アリサちゃん。ひ、久し振り。そうなのよ、この前も一夏と夜二人で……………』  
震えた声でティファが話す。

『夜、一夏くんと、二人で……………私が一人でさみしい思いをしていたのに、二人はそんなことしてたんだ。良いなあ、ティファちゃん。ねえ、一夏くん』

ティファはこの時、地雷を踏み抜くという行為がどれほどまでに恐ろしいかという事を理解し、心に深く刻み込んだ。

『落ちてけ！アリサ！頼むから！頼むから！最初はこいつからやって来たんだ！ていうか、襲われたんだ！』

『あ！売った！』

始まる痴話喧嘩。というか、それはまるで浮気現場を見られたかのような間抜けな男と女、そしてそれを問い詰める妻のようであった。

『……………最初は？』

アリサは丁寧に一夏の言葉を抜き取った。

最初は、ということはそれ以降もあり、そしてその場合はどちらから誘った事になっているのか。

『……………』

『……………』

『……………』

沈黙が3人の間に満ちた。

『……………撤退だ！』

『応ッ！』

これ以上は何も言えなかった。ただ出来ることといえば、今日の前の状況から逃走するということだけであった。

二人は本心からアリサと闘うことを拒んだ。

スラスターを全力で吹かせて、高難易度の操縦テクニクを最大限活用して初速から最高速度を發揮する。

『逃さない』

しかし、アリサはその事を予測していたかのように、瞬時加速を一夏たちよりも早く行い、二人の前に立ちふさがった。

無駄に技術レベルの高い逃亡劇が今繰り広げられる。

アリサは真つ先にティファではなく一夏に狙いを定めた。武器を振るうのでなく、ただ自分の手で黒零を掴みにかかる。

『ゼロ！戦うの!?!』

ティファがそれを見て咄嗟に話しかける。

『無理だ。俺は今まで数え切れないほど女の顔面を殴ったり、切ったり、再起不能にしてきたけどなあ……………アリサは無理だ。闘争意欲が湧かない。逃走意欲は今湧いてるけどなあ!』

アリサから来る掴みの攻撃を一夏は躲していく

『一夏くん、躲さないでよ。そんなに私が、嫌?』

『いや、違うんだアリサ。誤解なんだ。なんなら、今すぐ抱きしめたいさ。でもな、でもなあ!それを任務中の今やちまうと決意が鈍ちまうんだよ』

一夏にとってはアリサの攻撃は絶対に食らってはいけない、弾いてはいけない、防いではいけない。

『だったら、私も連れてってよ！私だって寂しいもん！』

『無理だ』

『なんで』

『お前が、俺にとつての光だからだ。俺は戻ってくる。だから、待つてろッ！』

強い宣言であつた。

それを聞いたアリサの動きが止まり、僅かな躊躇いを見せた。

その次の瞬間であつた。二人の間を引き裂くかのように光の雨が上空より降り注いだ。

『……………兄さん、戻るんでしょ？』

それは上空でサイレント・ゼフィルスに搭乗して待機していたマドカ、エムからの援護射撃であつた。

『良いタイムミングだ。感謝する……………ティファ』

『はいはい』

ティファは一夏に近づき、一夏はティファが伸ばしてきた手をつかんだ。

それからの一夏は素早かつた。現存するすべてのISの中で最速かつ最大加速力をホコる黒零の能力をすべて活用して、他の誰も追いつけない位置まで飛び去つた。

「……………まったく、一夏くんは。でも……………」



誰に聞かせる分けてもなく、誘宵アリサはポツリと呟いた。

「兄さん、なんであの時攻撃できなかったの。可笑しいよ、いつもなら反射的に殴っていったのに」

それは任務を終えて亡国機業の本部へと戻るための輸送船内での出来事であった。

マドカは一夏の異常なまでの違和感に対して、言及せずにはいられなかった。

普段の一夏出会ったのならば、あの場面ではまず間違いなく容赦なく顔面に口撃を加えていたはずだ。それなのに、現実はまだ無様に避けるだけであった。

「あ?……ああ、攻撃できなかったんじゃない、しなかったんだよ」

「? どうして?」

「アリサが俺にとつての大切な人間だからだ。ほら、これをくれたのもアリサだ」

一夏はそう言いながら、自分の胸元にあるネックレスをマドカに見せびらかすかのように掲げた。マドカはそのネックレスを見ると少し不機嫌そうな顔つきになった。

「俺はアリサに攻撃しない。俺がアリサに攻撃するようなことがあったら、それはもう俺が俺ではなく、全く違う存在になってしまったという証拠だ」

少しニヒルに笑う一夏。ただその言葉だけでマドカは一夏、兄にとつてのアリサと呼ばれる人物の大切さを理解したようだ。

けれども。

「私とはどつちが大切なの？」

引き下がりがたくはない。

「……………難しいな。そもそも大切のベクトルが違う。答えはそれで満足か？」

「なら、絶対値は？」

「同じだ」

「……………納得できない」

口を尖らせながらポツリとマドカが呟いた。

「納得するしかないよ、マドカ。一夏にとつてアリサちゃんは特別な存在なんだから」

そんなマドカの様子を見かねたのか、ティファが助言を挟んだ。ティファはアリサと一夏の事を亡国機業に来る前から知っているために、二人がどういう関係なのかを理解している。

「そういうことだ。俺は、寝る」

椅子の背もたれに体重を預けながら、一夏はゆっくりと眠りに入って行った。

「……可笑しい。やっぱり可笑しい」

生徒会長、更識楯無は学年別タッグトーナメントの事後処理がひと段落した頃、とある映像を見ていた。

それは謎の襲撃者と誘宵アリサの戦闘映像。

今の今まで普通に戦っていたはずの襲撃者は誘宵アリサとの戦いになると攻撃はせずに避けることに専念していた。

そのことが楯無にとつてはとてもし引つかかることだった。

「……聞いてみる必要があるかもね」

モニターから顔を離して楯無は椅子の背もたれに体重を預けた。

その時のことであつた。

コンコンと生徒会室のトビラを誰かがノックした。今は放課後、もしかしたら誰かが楯無に対して生徒会長の座をかけて勝負を挑みに来たのかもしれない。

「どうぞ」

背もたれから体を離して、楯無は椅子構えた。

「失礼します」

その声の主が誰なのか、楯無は直接会ったことは一度もなかったが、すぐさまわかった。理由は単純だ。その声が若い男の声であったからだ。

生徒会室の扉が開かれ、中に一人の男子生徒が入ってきた。

「それで、何の用かしら。織斑百春くん」

挑発的で探るような瞳を楯無は入室者に向けた。

入ってきたのは唯一の男性 I S 操縦者と呼ばれている織斑百春、その人であった。

「初めまして、生徒会長。織斑百春と申します。初対面で無礼なのは理解しておりますが、私の頼みごとを聞いていただけませんか」

「何かしら?」

「私を……僕を鍛えてください」

## 砂漠の襲撃戦 1

IS 学園への突撃任務より一週間もたたない日のこと、亡国機業は新たな任務をゼロ達に命じた。

それはネオのとある施設の破壊だ。どうやらそれは先の任務の目標であったVTシテムと関わりが深いらしく、そしてその施設の規模の大きさからか、モノクローム・アバターだけではなく、他にも幾つかの部隊が参加することになったのだ。

自由落下、目標は数百メートル下に存在するネオの研究施設………ただの研究施設のはずが、どうしたものか、警備や滞在している兵が多すぎる、と一夏は思った。

研究施設の四方地平線の彼方まで広がる砂漠となっており、眼下に見える研究施設も砂の中に隠れてある建物の頂点部分が砂から飛び出しているに過ぎない。

ワラワラと巣穴をほじくり返されたアリの様に飛び出してくるネオのIS部隊。

(予想以上だな、だがまだ許容範囲内だ。問題はアドルフたちの部隊だな)

今回の任務は主に2つの部隊に分けられている。施設の外でISなどの相手をする部隊と施設の内部に入り込んで必要な情報を取得する突撃部隊。因みにだが、ゼロはこ

の両方の役目をやるようにとスコールから直接の命令を出されてある。

『ゼロ、切り込みなさい』

『了解』

スコールからの命令を受けたゼロはほぼ垂直に地面に向けて落下していく。敵と敵の隙間をくぐり抜けて僅か10秒にも満たない時間で施設入り口近くの地面に着地した。

これからの一夏のやることは道の確保、取り敢えずは突撃部隊のための道を作らなければならぬ。

そのためには。

「さて、やるか」

周りを囲む敵を皆殺しにしなければならぬ。

ゼロは周囲を敵に囲まれている。それもそのはずだ。そうなるためにこの場所に落ちてきたのだから。

先ずは一人目、シンプルかつ最速で、実力と機体の性能に差がありすぎたためか、ゼロは簡単に背後を取り首をへし折った。

それを見た他の兵士が銃を乱射してくるが、ゼロは殺した兵士を盾にして難なくその攻撃を受け止める。

「悪魔がア！」

そんな叫び声を無視しながら、ゼロは次々と敵を処理していく。無駄に銃弾を消費しないために格闘戦をしながら。

『運搬員、直様来い。今現在は敵はいない。援護はこちらで行う』

ある程度余裕のできた頃、ゼロは突入班を乗せたISを呼びつけた。

『わかりました』

敵を全て倒し終えた直後、ゼロの直ぐ近くに巨大なコンテナを背負った1機のウルテナの後継機が着陸した。ISが着地するやいなや、コンテナの後方部から足が伸びてしっかりと地面に支えを置いた。

コンテナのハッチが開き、中から数名の隊員が飛び出した。全員が特殊な軽めの装甲を身につけており、ISほどではないがそれなりの防御力と攻撃力を持っている。彼らが今回の突入班である。

『アドルフ、任せたぞ』

ゼロは今回突入するメンバーの中でいちばん信頼を置いているアドルフに対して無線で声をかけた。

『わかつている。こちらももしかしたら使うかもしれないがな』

突入班は次々と施設の中に入っていく。

ゼロは周囲を警戒しながら、突入班が全員ISから降りるのを待った。センサーに敵機の反応、急いで分析を行いそのコア情報を取得。

得られたデータに目を通して、思わずゼロは気分が高まってしまった。バキリバキリと右手の指の骨を鳴らす。戦闘準備など出来ている。

突入班を運搬してきたISのパイロットも敵機の接近に気づいたのか、急いでコンテナを運搬状態にしようとして焦りを見せてしまっている。

『落ち着け、俺がいる。危険は限りなくない、いつもやっていることを冷静に行え』  
『でも、先輩』

『取り敢えずはゆっくりやれ………って言いたいが、敵さんは速いみたいだ』

ゼロは右手をピシリと指先まで綺麗に伸ばした。そしてセンサーの反応する方向に指先を向けた。

淡い光が指先から漏れ始める。この段階に入って仕舞えば、後は少しの力を入れるだけで攻撃が開始される。

建物の陰から飛び出てくる1機、元々センサーで感づかれているのに気づいているのか、真っ向から向かってくる。

その機体は以前からゼロ達が出くわしている『ガスマスク』と勝手に呼んでいる機体の後継機なのだろう。所々ソレを思わせる形状をしているが、特徴的であったガスマス



クはなくなり騎士のような面立ちに、両肩のアーマーは花びらを幾重も重ねたような形になっている。

「このコア反応からすると、ガーベラの野郎か。潰すか」

ゼロは右手からエネルギーを放射、ガーベラはそれに対して右手に持っていた銃槍一体型の突撃槍を振るって切り裂いた。

対峙する亡国機業とネオのそれぞれの最新機体。

『先輩、終わりました』

ゼロの背後でコンテナを縮小し終えた兵士が次は何をすれば良いかとしりたがっている。ゼロの掩護をすれば良いのか、それとも別の行動をとれば良いのか、その判断は副隊長であるゼロに任せられている。

『下がれ、そしてそのまま別のやつの掩護に迎え、具体的にはエムの』

振り返りもせずにゼロは素早く指示を出した。

『はい、わかりました。先輩頑張ってください』

『嗚呼』

ヒラヒラと腕を振って返答。

その直後に少し不満げな声を漏らしながら、後輩はエムの掩護に向かった。

「はっー！」

接近してきたガーベラからのランスの一突き。

互いが互いの得意な領域での戦闘。遠距離攻撃は通用しないことは理解している。だからこそ、お互いが全力を出せる距離。

ゼロは半身になってその一撃を躲すのと同時に左腕でランスを抱えるように受け止めた。そして直様右の拳を固く握りしめると、ガーベラの顔面目掛けて放った。

しかし、上手くないかない。

ガーベラは腕からランスを切り離すと、素早くしゃがみこんでゼロに足払いを仕掛ける。

ゼロは一度もガーベラを見ることもなく、ガーベラがとった行動といままでの行動から次の行動を推測して、脚のスラストターを片方だけ噴かせて勢いよく蹴りを入れた。

ガーベラは咄嗟に腕を前にクロスさせてガードするも虚しく、蹴り上げられてしまった。

「フッ！」

そして直様、蹴り上げた脚とは反対の脚で落雷のような、スラストターによって加速された浴びせ蹴りを仕掛ける。

ガーベラは今度こそ両腕でその一撃を受け止める。

が、しかし。

(重い！)

一撃は重すぎた。

腕に意識を集中させていなければ、今頃腕は逆さ向きになっていたことだろう。それでも、ミシリミシリと機体が軋む音がガーベラに伝わる。

防がれたゼロは再度スラストを噴かせて地面に着地、今度は左足で後ろ回し蹴りをガードの間に合わなかったガーベラの腹に直撃させた。

蹴り飛ばされるガーベラ。腹に伝わる衝撃はいかにISの堅い走行に包まれていると言えど、完全に打ち消すことができず今にも胃が破裂しそうになる。

空中で体制を立て直し、なんとか着地を行った。

ココまでか、機体の性能の差にソウ驚かずにはいらなかった。

黒零は圧倒的な性能を誇る。

近距離だろうが、遠距離だろうが御構い無しの戦闘範囲の広さ。

たった一人でも一軍隊とやりあえるほどの殲滅能力。

圧倒的な加速力と最高速度。

搭乗するゼロ自身の技量の高さ。

だが一番の有利な点はその全てを正しく運用するための電腦精霊ゼロと搭乗者であるゼロの動きを通常のISよりも速く、正確に伝えることができる脳波コントロールな

のかもしれない。

「さあ、時間がないんだ。ここでお前は潰すぞ」  
「くっ」

総合力の差でガーベラを追い詰めていくゼロ。  
その姿はまるで悪魔のようであった。

## 砂漠の襲撃戦2

「アドルフ、道はあつてるか？」

「合つてる？初めて通る道だぞ、地図もない。俺にはわからない。今は取り敢えず虱潰しが先決だ」

施設突入から数分後、アドルフ達別働隊は未だに研究所を見つけれずにいる。

この施設は外からみれば二階建てになってはいるが、以前もあつたように地下に施設が広がっているのかもしれない。

そこにつながるための通路を探しているのだが、いかんせん通路が複雑すぎるためか未だに見つかつてはいない。

他の隊員達から送られてくる施設のデータに目を通しながら、アドルフは次に探すべき場所を考える。

「そういえば、前に一夏が言つてたな。壁に通路が隠されていることがあると。だとすれば、ここか」

アドルフは一箇所に目を付けた。

手に持っていた銃を背中にマウントさせて、目的の地点に向けて走り出した。その後ろを追っていくグレイとジークの二人。

「此処だ」

アドルフはある地点で立ち止まると手の甲でコンコンと壁を叩き始めた。何度も何度も一回ずつ壁を叩く場所を変えながら、何かを確認していく。

そして爆弾をその壁に取り付けると急いでその場から離れた。

その直後に衝撃が狭い廊下を駆け抜けた。爆弾は爆炎をあげるわけではなく、衝撃だけを発生させるものであった。

「ピンゴ……」

爆破された壁は砕け、その奥に一本の通路が出現した。現れた通路に光は灯っておらず、闇が溢れ出ているようであった。

一步、アドルフがその通路に向けて歩き出したその瞬間。

ビービービーッ！

けたたましいアラームが廊下に響き渡る。

何故このタイミングで鳴ったのか、アドルフ達は疑問に思ったが、それを深く考えている暇はない。次に起きることを対処することに頭脳を注ぐべきだ。

しかしそんな思考を遮るかのごとく、アドルフと他二人の間にぶ厚いシャッターが高

速で降り始めた。

咄嗟の判断だった。

「グレイ、ジーク！ゼロと連絡をつけて退がれ、俺はこのままこの道突き進む！」

アドルフからの言葉を聞いた二人は素直に従う。

分厚いシャツターによって分断されてしまった。

「……進むしか無いか」

残されたアドルフは壁を破壊して見つけた真つ黒闇の通路を睨みつける。先にあるのは恐らく今回の目的地でもある研究施設であろう。

しかし、だからこそ守りは重くなっているはずだ。

アドルフは自分の左の手首を強く掴んだ。

覚悟を決めるために、突き進むために。

「いっくかー！」

警戒しながら、アドルフは一步前に踏み出し、そしてそのまま走り始めた。

頭につけたヘルメット状の多機能装置の中から暗視スコープを選択して、目の前のモニターに展開させる。暗い廊下は予想よりも広く、少し走ると螺旋状の下り坂になっていた。

光が見えた。アドルフは暗視スコープを解除してその光に向けて走る。

暗い闇を超えた先には眩しい光があった。

「はいは……………」

アドルフが辿り着いたのは広い円柱状の部屋であった。

天井が高く、部屋を構成されている材質はよくわからないが一つの物質で統一されているということがうかがえる。

「やあー、やあー、やあー、ようこそー！」

中年男性が無理しているのでは無いか思えてしまう、陽気な声が聞こえた。

その声を聞いた瞬間、アドルフは眉を顰めた。明確な殺意、今まで間の任務で人を殺すことはあったが、その時には殺意を出したことはなかった。なぜならそれは『仕事』として割り切れるものなのだから。

だが今回は違う。

アドルフが入ってきた方とは丁度真反対に位置しているもう一つの薄暗い入り口から一人の男が姿を現した。

黒いシャツとダメージジーンズの上から研究者が着る様なロングの白衣を纏い。

汚れた様な短めの銀髪をバラバラに、血で染め上げたかの様な赤い瞳。

一昔前に流行ったちよいワルオヤジとやらに分類できるダンディーな顔つき。

「殺したと思っていたのだが、ゲイル・ボーデヴィツヒ」



「お久しぶりだなあ、我が愛しの子供達。その長男アドルフ」

アドルフにゲイルと呼ばれた男はアドルフのことを自分の子供だと言った。つまりそれは二人が親子の間柄にあつたということなのだろう。

「どうして生きてる、貴様はあの時おれがこの手で射殺したはずだ」

追憶する、アドルフ自身のきおくを。返り血を浴びながら寝ているゲイルを射殺した時のことを。

「ふふん、トリックだよ」

悪戯をしたことを自慢する少年の様な表情でゲイルは返答した。

「まあ、冗談はさておいて。俺ちゃんの研究の専門分野、賢くて聡明で、父親を撃つちゃうようなアドルフ君なら何だか分かるよね？」

馬鹿にしたような表情でゲイルはアドルフに問いかける。

「遺伝子とクローン……………クソがそういうことかよ。俺が殺したのはお前のクローンか、だからあの時寝ていたのか」

「ピンポンピンポン！正解！後で飴ちゃんあげるよ」

嘲笑うような顔のまま、ゲイルは大きく拍手をアドルフに送った。高笑い声と乾いた拍手の音だけが無機的な部屋に響き渡る。

「いやあ、それにしても本当にあの日の事は驚いたぜ。何せ、俺ちゃんの遺伝子を用いた

『遺伝子強化個体計画』の、最も優れた能力と軍人としての冷酷で冷静で冷血な精神を持つていたお前に全てを台無しにされたんだからなあ」

ゲイルは笑ってはいるが、赤い瞳には怒りの色が見えた。

「なんであんなことをした!」

怒気を孕んだ声が室内に響き渡る。

先程までとは対照的になった二人。冷静になったアドルフと激怒するゲイル。

何もかもが順調に進んでいた。ドイツ軍の研究者として、自分の叡智を世界中に知らしめるために働いていた。遺伝子強化個体として産まれた子供たちをゲイルは完璧な軍人にすべく育てていた。

愛する祖国のより一層の発展のために、己の研究者としてのプライドのために。

だがそれら全てをあの日、あの夜に失ってしまった。

アドルフが突然起こした裏切り、ゲイルのクローンを殺し、ある一人を除いて遺伝子強化個体を皆殺しにして、姿を消したあの夜を。

その後ゲイルはドイツ軍に事件の責任を問われ、追放された。そして『ネオ』の一員になる。

何故そのようなことをアドルフが起こしたのか、ゲイルには見当もつかない。だからこそ、今ここで問いただす必要がある。

「星が見たかった。ただそれだけだよ」

アドルフの趣味は天体観測、その理由は誰も知らない。

「星が……見たかった？天体………観測ウ？」

訳がわからないと言った表情のゲイル。

だが直様天井を見上げながら高笑いを始める。

「アツヒヤハハハハハハハハ!!星が見たかった？そんなくだらぬ理由で俺ちゃんの今までがためえみたいな、人造人間野郎にぶち壊されちまったってか？それに天体観測ってよお、少し小洒落た趣味じゃないの。似合わない全然似合わねえよ。ヒヤハハハハ!!」

壊れてしまった、自分の築き上げてきた地位も誇りも何もかもがくだらぬ理由で亡くなってしまったのかと思うと、ゲイルは自分を保つことができなかつた。

「そんなに星を見るのが好きなのか？………だつたらツア!!テメエをお星様にしてヤラアツ!!」

顔を歪ませ、怒気にまみれた声を吐くゲイル。

その言葉の直後のことだ。無機的な天井の一部が開きそこから一機のISが降りてきた。

その機体はネオの量産機、亡国機業の内部では『ガスマスク』と言われている機体の

後継機らしきものだ。

アドルフはこの機体と直接戦ったことはなかったが、ここ最近はずゼロが渡してきた資料に目を通していたので、どのような性能なのか、積んでいる武装はどういったものが多いのかというのは知識として知っている。

「おい、そいつを殺しとけ。俺ちゃんは脱出の準備をする。さよならだ、我が愛しくてクソむかつく息子オ！」

ゲイルは踵を返して、手を大きく振りながら来た道に戻っていった。

残されたアドルフと『ガスマスク』、アドルフは逃げるという選択肢を取ろうとしたが、この距離では一瞬で距離を詰められて殺されてしまう。

だが戦うという選択肢を取っても、持っている武器ではダメージをある程度までなら与えることが可能なかもしれないが、倒すことのできる決定的な一打を与えることができない。

もし仮にアドルフがISを使ったのならこの問題は解決するが、あいにくアドルフはゼロのように男の身でISを操縦することはできない。

一步一步、アドルフを惨殺するためにガスマスクが近づいてくる。簡単に殺す気はなく、ジワジワとなぶり殺しにするつもりなのだろう。

「さあ、どう殺してあげようか。お姉さんが優しく殺してあげる」

「……………仕方がない、使うか」

「全くあのジジイにも困らされたものだ。なんで俺ちゃんがこんな辺境の、周りに歓楽街のねえ場所で研究しなきゃなんないんだよ……まあ、それも今日でおしまいなんだけどね」

己の研究室で、ゲイルは施設から脱出するための準備を行っていた。

上司に対する不満をぶちまけながらも、身支度を整えるその手は緩まることはない。「にしても、この施設を捨てるのは惜しいが、他のところとの兼ね合いもあるし。まあ、一つ目は結果としては成功だが、もう一つがなあ、何を考えてるのやら」

研究データをUSBメモリに詰め込み、脱出の準備は完了。後は機を見計らってこの施設から出るだけだ。

「もう死んでる頃かなあ、アレ」

そんな物騒な言葉の直後のことだ。

アドルフ達が戦う広場に繋がる通路の奥から、轟音が迫り、部屋の扉を破壊した。

随分と物騒に戻ってきたのかとゲイルは思ったが、次に目にした光景に目を疑った。

それは先ほどアドルフと戦うように命じた『ガスマスク』の残骸であった。乗っていた人間ごと殺している。四肢や首は2回転以上捻られ、体の至る所にはパイルバンカーで打ち出された鉄杭が刺さっている。

「何だこれは!?! どういうことだ、他にISSが入ってくる時間はなかった。だったら」

ガスリ、ガスリと通路の奥から何かが悠然と歩いてくる。

「何だ、まだ逃げていなかったのか」

姿を現したのはI機のISS、某国機業の量産機『ライダー』の第三世代用試作機、いるはずのない機体がゲイルの目の前に存在している。

「その声……なんで男のテーマが動かせてやがんだ! アドルフ!」

ゲイルはISSから聞こえてきた声を頼りに搭乗者を割り出した。その声は間違いない、ISSを扱えない男のアドルフのものであった。

しかし、目の前にいるアドルフは現実にISSを操縦をしている。

もしかしたらアドルフ以外の誰かが乗っていて、アドルフの声を利用しているだけなのかかもしれないが、ゲイルはその考えを真っ先に消していた。

「ISSを動かしている? 違うな、纏っているのだ」

「纏っている?」

「そうだ、以前手に入った無人ISを利用したのだ。無人機ならば、一人で動くだろ。それを纏う。この方法ならば男でもISというものを使える。つくづく、ウチの技術部長の技術の高さには驚かされるよ。とはいえ、相手はブラックボックスだ。無人機には意識のあるコアが必要らしくてな、量産は無理らしい」

これはゼロは『趣味の悪いモノ』、リリスは『天災と至高の共鳴』などと言っている。しかしこれには幾つかの欠点が存在し、例えば燃費が悪かったり、絶対防御が発動しなかつたりなど。

「それで、今からお前を殺す」

アドルフは無人機に命令を与えて、右手を固く握りしめる。

「ま、待て。殺すのか、親である俺を殺すのか!？」

必死に命乞いをするゲイル。

僅かでも同情を引くことができたなら、まだ助かる道が存在する。そのためには無様にならねばならないと思っている。

「殺す?大丈夫だろ、お前はどうせ前と同じクローンだからな!!」

冷血な拳は本物のゲイルの頭を砕いた。

## 砂漠の襲撃戦3

砂塵が舞う。

ゼロの一手一投足が足元に果てもなく広がっている砂漠の砂が吹き飛ぶ。

金属と金属の直撃が生み出す轟音は、砂漠の砂を震わせる。

「ふう……」

「クツ………性能差が違いすぎる。化け物かよ」

ゼロと対峙するネオのガーベラは、明確に存在する自分の機体と黒零の性能の差に苛立ちを覚えずにはいらなかった。

単純に強い、それがどれだけ厄介なことなのかをガーベラはよく理解している。

ガーベラが乗っているのも一応はガーベラに合わせて作り上げられた専用機ではあるのだが、完全にISのコアが一から作り上げた黒零と比較するにはいくらかお粗末だ。

（距離を取るべきか……）

ガーベラが不意にスラスターを吹かせて後ろに距離をとった。

それは一度体制を立て直すための何気ない行為であったのかもしれない。



しかし、ゼロはそれに合わせて一気に畳み掛ける。

右の拳を強く握りしめ、多機能式攻撃腕を発動。拳の周りにエネルギーがまとわりつき、ゼロはそれごと大きく拳を地面に叩きつけた。

その次の瞬間である。右手に纏わり付いていたエネルギーが弾け飛び、それに合わせて砂の津波が産まれてガーベラに襲いかかった。

「冗談でしょ?」

規模が違った。

一歩下がっただけなのに目の前に砂の壁が生まれてしまった。

そしてとっさに飲み込まれるよりも早く、その壁を突き破るために突撃した。

(そしてこのタイミングで追撃がくる)

ガーベラは砂の壁を貫通した瞬間に目の前に向けて手に持っていたレイピアを突き刺した。

しかし、レイピアは虚空を貫くばかりで、肝心のゼロはどこにもいなかった。

目の前にいるどころか、ガーベラのいる場所からはかなり離れた場所で既に一機を屠っていた。

「舐めやがって!」

ガーベラは直様スラスターを吹かせてゼロに接近する。

ゼロはガーベラが近づいてきたのを確認すると、手に持っていた死体を地面に投げ捨てた。

『スコール、そろそろ俺も施設に突入するが、その前に目の前の敵が厄介だ。実力だけなら、俺よりちよつと劣るぐらいだ………使つていいか?』

『良いわよ、その場で仕留めるならね。十秒いないにしときなさい。ソレ、なかなかエネルギーを使うから』

『わかつてる』

スコールとの通信を切つて早々、ゼロは一本の剣を呼び出した。

剣を持つ左手に意識を集中させ、ありつたけの力と殺意を込める。

目の前にいる人間を殺す。機械ではない、機械の奥に存在する人間を切り殺す。

「零落……」

それは零落極夜を発動するほんの一秒前のことであつた。それまで突撃していたはずのガーベラは突如進路を変えて後方へ逃げて行つた。

(アレはヤバイ、ブリュンヒルデの零落白夜と同質のモノだ。そんなモノあの機体性能で発動されたら逃げられない。て言うかあと一步踏み込んでたら確実に死んでた)

ガーベラはゼロが逃げる自分を追いかけてこないことを願いながら、一目散にその場から離れていく。

「追うか？ ……いや、やめておこう。エネルギーの無駄遣いだ」

『スコール、一人そつちに逃げた。極夜を使う前に逃げられた』

『そう、わかった。こつちで対処するから貴方は施設に突入しなさい』

『了解』

ゼロは剣を収縮すると、施設の入り口に向かった。入口は二人の亡国機業の隊員が守っており、ゼロは何事もなくその間を通って施設の中に入って行った。

施設の中のデータは既にアドルフたちから送られてきており、ゼロはそれを参考にしながら、アドルフが他の班員と分断されてしまった場所まで最短経路で突き進んで行った。

「おう、ゼロこつちだ」

堅牢なシャッターによって塞がれている通路にグレイとジークの二人がいた。二人はアドルフと共に行動をしていたが、突然おりてきた目の前のシャッターによってアドルフと分断されてしまったのだ。

「この先か？」

「ああ、アドルフの奴はこの先にいる。頼めるか？」

「わかっている。ちよつと下がってる。そこにいると衝撃波が飛ぶ。曲がり角まで下がれ」

「了解、ジーク」

「気をつけてね、ゼロ」

ゼロからの命令に従い、下がって行く二人。

「精神力発生装置、起動。左肩部に障壁を集中……………ブチ抜く」

堅牢なシャッターに向けて力を纏った左肩によるシオルダータックルが直撃した。

黒零の最高の加速度と最高速度を生かした破壊の一撃は十数センチは越える厚みのシャッターを一撃で突き破った。

その際に生まれた衝撃波はゼロの言葉を聞いていなければ曲がり角にいる二人を吹き飛ばしてしまいそうなものであった。

「まだあるのかよ」

シャッターを突き破ったゼロの目の前にはもう一枚のシャッターがあった。

「ジーク、グレイ！お前たちは戻って他の部隊と合流しろ。俺は突き進んでアドルフと合流する」

ゼロはそれだけ伝えると、先ほどと同じようにシオルダータックルでシャッターを破壊しながら施設を駆け抜けて行った。

シャッターを抜けた先の道は意外にも一本道であり、ゼロは迷うことなくその道を通り進んで行った。

途中で円柱上の広場に出たが、その場所について、幾つもの傷を確認すると、そこになががあったのかを理解することができた。

「アドルフの奴、使ったのか」

一旦停止していた機体を再度動かしてさらに奥に進んで行った。

広場を出て再度通路を駆け抜け、そして目的地でもある研究室についた。

「……………ゼロか、これを見る」

研究室には既にアドルフがおり、データを検索していた。彼の足元には一人の中年の男性の死骸があるだけであった。

「データはどうだ？」

ゼロは黒零を待機状態に戻すと、キーボードを弄るアドルフの隣に立った。

「……………取り敢えずは俺の機体にデータは移している。細かいことはわからないが、どうやらここで研究していたのは人体についてみたいだ。見る」

そういつてアドルフが近くにあったモニターを指差すとそこには文字の羅列が映し出されていた。

「DNAデータか？でも誰のだ？」

「わからない。被検体に関する情報は一切ないんだよ。この奥にその被検体があるみたいだが、扉を開けるには……………あつた」

その言葉の直後に研究室の中の扉が開かれた。

「ゼロ、先に行つててくれ。俺はもう少し探る」

「そうか、ならば御言葉に甘えて」

この場をアドルフに任せて、ゼロは隣の部屋に行くことにした。

隣の部屋にあったモノは幾つもの巨大な試験官であった。その中には緑の培養液らしきモノで埋め尽くされており、外からでは確認しづらいが、中には人がいる。

「クローンか？………なんだ、胸糞悪い」

暫く歩いているとゼロはあることに気づいてしまった。

試験官に手を触れて、中をより注意深く覗き込む。

そして円筒状の試験官をグルリと一周周り、なかに入っている被検体の姿をより深く確認する。

「成る程、確かに、そうだとすれば、な！」

ゼロは長剣『零雪』を呼び出すと、試験官を切り裂いた。

零れ落ちる培養液とダラリと落ちてきたクローン。意識がないのかピクリとも動かない、既に産まれた時から死んでいるのだろう。

ゼロはクローンの頭を踏みつけると、手に持つ剣で何度も何度も斬りつけた。

瞳は怒りと狂気に満ちていた。

こんな経験があるなんて一度も思っではいなかった。何度も何度も人間を殺してきた一夏だが、なぜこんなことをしているのか理解できなかった。

「おい、ゼロ……なんだそいつ、どういうことだ?」

研究データを全て取り終えたのか、アドルフが此方側にやってくる。

アドルフはクローンを切った際の返り血に濡れるゼロとその足元で倒れているクローンを見て、普段は見せない驚いた表情を見せた。

「どうした、終わったのか」

ゼロは何もなかったかのように振舞う。血で濡れていても気にも止めない。どうでもよさげに近くにあった試験官を再度破壊する。

「アドルフ、ここで見たことは口外するな。誰にもだ。上司にもするなよ。して良いのは俺、スコール、リリスそして総帥の四人だけだ。良いな?」

「……わかった、それにしてもこれは酷いな」

アドルフは部屋を見回しながらシミジミとそんな事を呟いた。アドルフも色々と思うことがあるのか、試験官のなかに存在するクローン達に悲しげな目を向けた。

「……ん?おいゼロ、あれ」

アドルフは一つの試験官を指差した。

アドルフとゼロは指差した試験官に近づいて中の様子を確認した。

「違うな」

「そうだな、だがどうしてこれだけが違う」

「わからんな、趣味か………いや違うな、愛だ。これは愛だ。しかも強烈な狂愛に近い  
か」

「理解できるのか？この実験を行っている奴の気持ちか」

「さあな、だがわかりそうな気がする」

先ほどのような乱暴で粗雑な手つきとは異なり、ゼロはそつと試験官の表面に触れた。そして撫でるように手を動かすと、手を離して後ろを振り向いた。

「これより、施設の破壊に移る。アドルフは下がっている。俺が破壊する……全部だ、何もかもをな」

ゼロは黒零を展開。両手には遠距離武器である『零砲』を構え、試験官に狙いを定める。

「………わかった、後は任せた」

アドルフはそれ以上は何も言わずに部屋の外に出て行った。彼自身、試験官に浮いているクローン達に何か言いたいことがあったのかもしれない、しかしゼロの様子を見て、それをやめた。

「さてと」



部屋に一人残ったゼロは銃の引き金を引いた。  
ガラスの崩れる音が室内に響く。

次々と次々と打ち砕かれていく試験官、中に入っていたクローンは全てエネルギーの弾丸に粉みじんにされる。

エネルギーの弾丸により燃え上がり始める室内、スプリングカラーが水を降らせるが、ゼロはすぐにそれを破壊した。

我武者羅にうち続けられる弾丸は部屋にある何もかもを破壊しつくさんと暴れまわる。

絡みつく蜘蛛の糸を振り払うように、そうでもしなければ自我を保てないとゼロは思った。

数分間の銃の乱射は、球切れという形で静かに幕を引いた。

室内は炎によって燃え上がった。クローンが存在を消すための業火、ゼロはそれを見てため息を一つ吐いた。

## アナザー・ゼロ

ISの生みの親、篠ノ之束と連絡を取れる組織は二つ存在している。

一つは誘宵グループ、ISが世間に出るよりも前にISの存在を知っており、そのシエアも世界の上位五位には入っている。しかし、篠ノ之束と連絡を取れるという事実を知っているのは数名のだけだ。

もう一つは亡国機業、こちらは連絡を取れるようになったのはつい最近のことである。

この二つのどちらにも言えることではあるが、連絡を可能としているのは特定の個人によるものだということだ。

誘宵グループは会長である誘宵皇とその家族、亡国機業は一夏と技術部部長のりりす。

その一人である一夏は任務として、篠ノ之束のラボに向かった。

海底にある篠ノ之束のラボの場所には誰にも知られないように様々なジャミングが施されているが、束本人から案内された一夏にとってはそんなことは関係ないものであつ

た。

ラボのハッチが開かれ、一夏は中に案内された。黒零の操縦を慎重に行いながらハッチに入ると、放水作業が行われた。

放水作業が終わってしまえば、そこは水圧地獄ではなく、優雅な天国のような……とは言えないが少しはマシな空間に移る。

黒零から降りて、ラボの通路を歩いていく。数秒もすれば一つの扉の前があり、その扉は一人で開いた。

「やあやあいつくん、ご苦労様。ささ、座って」

扉の先はごく普通の一般家庭のリビングルームであった。もしここが地上にあったとしたら違和感を感じないのだが、深海に存在するとなれば違和感しか感じない。

一夏は束に催促されて、テーブルを挟んで対面に置かれてあるソファアに座った。反対側には篠ノ之束がおり、彼女の目の前にはクツキーのような茶菓子が置かれてある。

「これ、この前の戦闘でとったデータです」

一夏は上着の内ポケットからUSBを取り出すと、テーブルに滑らせながら束に渡した。

「どうだったの？無人機の外部操縦は？」

USBをポケットにしまいながら束が一夏に尋ねた。

「その件に関してはそのUSBに入ってますが……………そうですね、実際に戦ったやつの話だと、動きは悪くなかったそうです。ただ、ISのコアと意思疎通が上手くできないために絶対防御が発動しなかったりと不安な点があるそうです。ですが、意思疎通できるとすれば問題はなくなります」

「そうなの、ISとの意思疎通なんてできるのはそれこそ私やいつくんを入れて十人にも満たないだけだなあ。まあ、方法はあるかもしれないけど、私は嫌だなあ」

何が、とは聞かなかつた。篠ノ之東が話しながらないのを一夏は様子で察したからだ。

「貴方は……………今のISは好きですか?」

「どうなんだろうね、最近だとISも様々な使われ方してるからね。前みたいな軍事一辺倒じゃなくて、建設なんかにも使われてるからね。ほら世界全体の協力の元進んでいる宇宙コロニー計画とかにさ。だからさ、そういう使われ方してるのは生み出した親としては嬉しいかな」

いつものハイテンションの極地のような態度とは打って変わって、篠ノ之東は今にも散ってしまいそうな花のような淑やかさを見せた。

「そうですか……………すみません」

「いつくんが謝る必要はないよ、私もISが戦闘に使われる可能性は考えてたし、彼らの

中には戦うのが好きな子だっているし」

「そういつて貰えると……………はい」

二人の間に沈黙が流れる。

篠ノ之束は元来コミュニケーションを上手く取れるような人物ではない。極度の人見知りであり、よく知らない人に対しては邪険に扱ってしまうことがほとんどである。

そんなことは一夏が一番よく知っているようなもののだが、一夏も一夏で何を話せば良いのか考えてしまい、言葉が出なかった。

そんな中。

「束様、紅茶をお持ちしました」

備え付けてある厨房の奥から一人の少女が姿を現した。

一夏は彼女の存在には気づいてはいたが、何も言わずに無視していた。どうせ篠ノ之束からの説明があると思っていたからだ。

「誰？」

「くーちゃん」

「……………」

曖昧な表情だった。

少女は手に持っていたティーセットの入っているお盆をテーブルに置くと、一夏に正

面を向けた。

「初めまして一夏様、私はクロエ・クロニクルと申します。束様に拾っていただき、現在は共に行動しております。以後お見知り置きを」

瞳を閉じたまま、流れるような銀髪を揺らし、誰の趣味なのかはすぐにわかるが何故か着ているメイド服のスカートの端をちよこんと両手で摘みながら、クロエ・クロニクルは一夏に一礼をした。

（盲目か？それにしてもはやくに足取りが普通すぎる）

瞳を閉じ閉じたままスムーズに行動するクロエを一夏は不思議に思ったが、もしかしたらただの極度の細目なだけなのかもしれない。

けれどもその可能性はないと一夏の感が告げた。

「くーちゃんはね、生体同期型I Sの実験台だったんだよ」

「生体同期型I S?」

一夏にはその言葉を聞いたことが無かった。新たに聞いたその単語は如何にも物騒なものであると一夏は思った。

「簡単に説明すると、I Sのコアを体内に埋め込んで肉体と同化させるの。成功率は低いけど、成功すればI Sを己の肉体のように操ることができる……らしい」

「らしい?」こいつは何処で拾ってきたんですか? キャベツ畑? それともコウノトリさん

が運んできたんですか？」

「どっちも違うよ、この前襲撃してきた施設で拾ってきたの。くーちゃんの他にも数人いるけど、今は意識がなくて眠ってるよ」

「束様には感謝しています。ただ暗い暗い牢獄の中で過ごす運命にあつた私に、光を見せてくださつたのですから」

クロエはニツコリと微笑んだ。

一夏はその様子を見ながら、クロエによつて注がれた紅茶を口に含んだ。

「それでさ、いっくんに見せたいものがあるんだけど」

「見せたいもの？ さっきから話しかけてくるアレですか？」

「そう、これ」

篠ノ之博士がフィンガースナップを一度行う。

すると何も物がかかつていない壁紙とつぜんせりあがり、奥にラボが出現した。

「あれは？」

一夏がラボの中に存在する一機のISを指差して言った。

それは紅い機体。

一夏の黒零の全身装甲型とはことなる部分装甲型のIS。それを見た一夏の感想は素直に好みでないというものであつた。

「紅椿、今度の臨海学校で箒ちゃんに渡す機体だよ。はい」

束は一夏の前にタブレット型端末を置くと、一夏はそれを手にとって紅椿のデータを見る。

「基本性能が高いですね……というか現行の機体の中で最高性能だ。黒零より高い。それにこの展開装甲……しかし、一番気になるのは。なんなんですか？ 第四世代つて」

「そのままの意味だよ。この機体は私が腕によりをかけて作ったからね。他の機体と同じ尺度で測るのはいただけないよ。それで、いつくんはこの機体に乗った箒ちゃんに勝てる？」

箒とは篠ノ之束の妹の篠ノ之箒のことだ。箒は一夏ではなくその弟の百春とよく遊んでいた。一夏自身も箒とは数度の交流があるのだが、剣道をすぐ辞めてしまったことや、アリサと一緒に遊んだ思い出の方が強いため半分近く忘れてしまっている。

「勝てますよ。いくら性能が高い機体でもパイロットが三流以下じや二流の実力も發揮できない。というか、その機体に乗った俺が相手だとしても俺たちは負けない」

自信に満ちた表情で一夏は宣言して見せた。それは推測でも予想でもなく、確信なのだろう。

「ふふ、いつくんならそう言うと思ったよ。君はその子のことを一番信頼してるからね。」



良かったよ」

東は優しく笑った。それはまるで子供の巣立ちを喜ぶ親のような暖かさと寂しさが混じった顔であった。

「それで……………これだけですか東さん。俺に隠していることがあるでしょ」

その一言に反応した。東は一夏の顔を空虚な瞳で捉えた。先程までの感情に溢れた顔は消え去って、能面のような無がそこには存在している。

「何故？」

「何故って、俺が聞いたのはそいつじゃなくてもうひとつ別の……………なんて言えばいいのか、強烈な反応のやつからなんですよ。それも始まりの五つと同じくらい強烈な自己主張をしてくるやつですよ」

「……………」

東が一夏に近づいて今にも瞳と瞳がぶつかりそうな距離で見つめる。一夏はそれに驚きはしたもののすぐに平常心をとりもどした。

「良いよ」

東は一夏から離れてスカートを翻しながら話し出す。

「いっくんには特別に見せてあげる。私が作り上げたものの中でもっとも禍々しいもの

を」

「禍々しいもの?」

「私が怒りや絶望を込めて作り上げてしまった傑作にして愚作」

周囲を取り囲んでいた一般家庭のリビングのような壁が取り払われてラボに姿を変  
える。

「ラストナンバーにしてもう一つの<sup>ア</sup><sub>ナ</sub>の<sup>ザ</sup><sub>ー</sub>・<sup>ゼ</sup><sub>ロ</sub>」

「アナザー……………ゼロ?」

もうひとつの<sup>ア</sup><sub>ナ</sub>の<sup>ザ</sup><sub>ー</sub>・<sup>ゼ</sup><sub>ロ</sub>、それが表すものなのかは一夏でも理解が追いつかなかつ  
た。

「その名も<sup>ア</sup><sub>ナ</sub>の<sup>ザ</sup><sub>ー</sub>・<sup>ゼ</sup><sub>ロ</sub>!」

ラボの奥からそれは声を放った。

## 銀の福音対策会議

「只今より銀の福音対策会議を始める」

宿の一室で織斑千冬は机状のモニターの前に立ちながら宣言した。

何故こんなことになったのか、私誘宵アリサは考えていた。

今日は本当ならば臨海学校2日目、専用機を持っている人間はその専用機の調整をしたり、専用機を持っていない人間は訓練に励んだりするための時間だ。

それなのに今は電気を消して、モニターの光だけが照らす旅館の一室に閉じ込められている。

ことを簡単に説明してしまえば、軍事用ISが暴走して日本に迫ってきているので撃退しろという話らしい。

納得しない話だが、何処の国にも所属していない扱いのIS学園が介入したとなると角が立たないのだろう。

あまり考えたくない話だ。

こんな作戦早く終わらせるか不参加になって、友達とトランプしたいな。

「私がやります」

作戦は順調に進んでいるときのことだ。

作戦の内容は織斑百春の専用機「白式」の単一能力『零落白夜』による一撃必殺という形になった。

しかし、その作戦には問題がある。銀の福音の移動速度と白式の燃費の悪さである。

白式は燃費が悪すぎて、もし仮に銀の福音の元に行つたとしても零落白夜を発動できる時間はごくわずかになってしまふし、なにより戦うだけの時間が残されているのかも怪しい。

そして銀の福音は速すぎて、もし目的ポイントに時間内にたどり着けなかったら、大変な事態を招いてしまうことになる。

その両方の問題を解決できる機体は、つい数時間前まではIS学園にはなかった。その数時間前までは。

「私の紅椿なら百春を時間内に運ぶことができます」

篠ノ之箒が東さんから貰った紅椿を使用すれば全ての問題が解決してしまう。

第四世代 I S 紅椿、世間では第三代を作り上げるのに精一杯だというのに、東さんはもうその先に行っているのかと驚いてしまう。

現行の I S の中では最高の性能をほこるソレは、私の『アイリス』、ティファちゃんの『シエル』、そして一夏くんの『黒零』などといった I S のコアの意思によって作り上げられた I S よりも性能が高い。

今回の作戦に必要な駒は揃っている。

しかし、けれど、だが。

私や他の専用機持ちの顔つきは険しかった。

誰もが口に出したい事があった。誰もが気づいていた。篠ノ之箒がいるからこそ、この作戦が不可能になりかけていることを。

彼女の機体の性能は確かに私たちの I S のそれをはるかに凌駕している。しかし、それと彼女の I S に関する技量が私達を上回っているかというのは話は別だ。

彼女の技量はこの部屋にいる誰よりも低い。

一流の機体に三流のパイロットが乗ったところで二流の実力にもならない。

もし仮に彼女が織斑百春を運ぶだけなのであれば誰もが文句を言わない。

けれど皆が口走ろうとしている。

理由は簡単だ。彼女が浮かれているからだ。彼女は嫌いな姉から力を貰ったから、浮かれてしまっているのだろう。

銀の福音と交戦することになったら、彼女はまず間違いなく戦ってしまう。勝つのはほぼ無理だろう。

そんな今の彼女に国の命運や、私は違うが自分の好きな人間の命を預けられるのか？

束さんの手前、そしてなにより時間が無いことに気づいている彼女たちは意見しづら  
いだろうから、私が忠告しておこう。

「僕は反対だ」

意外なことに、意見を述べたのは今回の作戦の要と言ってもいい織斑百春だ。

幼馴染に対して苦言をいうのにそれなりの覚悟が必要だったのだろう、顔つきは険しい。

「何故だ百春！私と紅椿なら、お前を運べるのだぞ！」

当然篠ノ之箒は問いかける。

「箒……落ち着いて、君は浮かれてる。それにまだ機体に慣れていない。そんな状況で  
出撃するのは危険だと思おう」

「けれど百春、私は……私は！」

「確かに今考えられる手段は箒と出撃するのが一番早い。けど、それは一番不安要素が大きいと僕は思っている」

「ほう、理由を聞かせてほしい」

私と同じように壁に寄りかかっていたラウラ・ボーデヴィツヒが織斑百春に問いかけた。理由を尋ねているようだが、彼女自身は彼が言いたいことをわかっているのだろう。目的はただ単に篠ノ之箒にわからせるためか。

「簡単だよ、僕たち二人はここにいる専用機持ちの中で最も未熟な二人だからさ。そんな二人がIS……言いたく無いけど、軍用のISに勝てるとは思わない。いくら性能差があっても。僕らは未熟なんだ」

自分の実力のなさを理解しているのか、織斑百春は非常に悔しがっていた。

「大丈夫だ！私と紅椿なら——」

「ならばこうしよう」

篠ノ之箒の言葉を遮って織斑千冬が作戦を提案する。

「作戦は先ほどと同じように百春と篠ノ之箒による奇襲」

その言葉を聞いてペアツと篠ノ之の顔が明るくなった。

「しかし、それと同時に他の専用機持ちを出撃させる。一撃で仕留めきれなかった場合は直様撤退して後を追いかける者たちと合流しろ」

「わかったよ、千冬姉」

「織斑先生だ、馬鹿者」

そのやりとりに私と篠ノ之を除いた人たちがふと笑った。

「誘宵、紅椿を除けばお前の機体が一番速いが、調整は大丈夫か？」

「ええ、問題ありません」

この中では私の『アイリス』が2番目に速い。つまりはもしもの際にどれだけ私が早く二人と合流できるかで二人の安全に大きな影響が出てくる。

「では、総員出撃準備だ」

織斑千冬のその言葉に従って皆が部屋を出て行った。

「私は……お前と並べる力を手に入れたのに、なんで」

篠ノ之の横を通りすぎた時、私は嫌な予感を覚えた。



「アイリス、お願い」

左手薬指につけた指輪型のISの待機形態を撫でながら、私は小さく呟いた。

『了解』

頭の中に声が響き、私は光に包まれた。

「誘宵アリサ、アイリス。準備完了しました」

ISを身に包み、出撃準備は完了。

チラリと横を見れば、私の他に凰とボーデヴィツヒが出撃準備を済ませてある。オルコットとデュノアは機体調整が間に合わず、完了次第合流する予定となっている。

二人ほど戦力は減るが、今は時間が惜しい。

本来は日本の代表候補生がいるようだが、今日は織斑百春のIS開発によつて遅れていた専用機のことですら有事があるらしく臨海学校にすら来ていない。

「皆準備は良いか」

その言葉に任務参加者全員が頷いた。

「では任務開始！」

その言葉と同時に私たちは砂浜を飛び出して、目的地までの航行を開始した。

一番手は織斑百春を乗せた篠ノ之箒が操る紅椿、二番手が私、三番手が他の二人だ。

先頭を飛行する紅椿はこれでも最高速度を發揮していないとなると、その機体性能に

は驚かすにはいられない。

徐々に距離が離れていく、銀の福音には私は追いつけないが、篠ノ之箒ならば追いつくことができる。このペースで行けば二人が銀の福音と戦闘を開始してから5分以内にはつける。

そんな事を考えていた時のことだ。

紅椿の速度が上がった。

より距離が引き離されて行く。篠ノ之箒は最高速度を出しているのか？

このままではまずい。どうにかして速度を下げさせなければ、あの二人は……というか篠ノ之は死ぬ気なのか？

それにあの様子だと織斑は気づいている様子はない。

『篠ノ之、速度を落とせ』

『……………』

返答はない。大方自分と百春の二人で倒せるとでも思っているのだろう。

冷静になってほしい。

『ボーデヴィツヒさん、マズイことになった。篠ノ之が独断専行を始めた。A I Cは使える？』

この中では軍属ということもあつてか信頼度の高いボーデヴィツヒに問いかける。

『……いや、無理だ。距離が遠すぎる』

そうなの。

……………撃つても止めるか？

いや、それはやめておこう。この位置だと織斑に当たってしまう。

『この速度のまま紅椿が行ってしまった場合、こちらとの合流は最低でも10分ぐらいかかるわね』

マズイ、このままではあの二人が危険な目にあってしまう。自業自得な篠ノ之は構わないが、個人的には恨みもなく、一夏くんの弟でもある織斑百春は助けなければならぬ。

『ボーデヴィツヒ、私はこのまま突き進む。わたしと貴方の合流時間は約5分……お願いね』

『わかっている』

このままでは、二人は死ぬだろう。

嫌な予感は当たった。

篠ノ之箒と織斑百春が会敵したという報告から数分後のこと、血塗れの織斑を抱きかかえた篠ノ之が此方まで撤退してきた。

見るだけで織斑の状態が非常に危険であることが理解できる。

背後からは銀の福音が迫り来る。

ラウラ・ボーデヴィツヒが私に追いつくまで約五分の時間がある。

『篠ノ之、下がれ』

『嫌だ、私は百春の仇を——』

『黙りなさい』

顔の青い篠ノ之の言葉を遮った。

『こうなったのも貴方の自業自得よ、独断専行で突っ込んだからよ。頭を冷やして、下がらなさい。ここは私が止めておくから』

両手にビームガンを二丁展開、接近戦では此方が不利だ。それに今回の任務は銀の福音のパイロットの安全も考えなければならぬ。

『すまない、本当にすまない』

織斑を抱きかかえながら、篠ノ之は後ろに下がっていく。

息を整えて。

大丈夫、私には頼りになる相棒アイリスがいる。

この学校に来てからは一度も出していない本気を出さないといけないとなると、かなり面倒だ。

さあ、行こう。

第一射、銀の福音はギリギリのところであわした。無駄な動きはせずに最低限の動きで戦うつもりか。

接近を許してしまったが、まだ問題ではない。

2丁拳銃を持ったまま、足技をメインに置いた近接格闘に切り替える。

殴りかかるのをビームガンを擦らせることで逸らし、放ってくる蹴りを足で受け止める。

………重い、何発もマトモに受けてられない。

距離を取るか、それを考えたが相手の方が加速度も最高速度も此方を上回っている。隙を見て逃げ出すか、それともボーデヴィツヒが来るまで防戦で凌いでみせるか。

凌ぐ。

受け止めた足をいなして体勢を崩させ、お返しと言わんばかりに腹に回し蹴りを叩き込む。

ビームガンを相手の額めがけて構える。そして何もためらうこともなく連射する。この程度の威力であれば絶対防御が発動してもパイロットは傷つかないだろう。

銀の福音は両手で全ての弾丸を弾いてみせた。

そして銀の福音は後ろに下がりながら踊り子のように舞うと、背中 of 巨大な翼から何十発というエネルギー弾が打ち出された。

わたしはそれを上昇することで躲す。

………長時間の戦闘は此方にとって不利である。相手のエネルギー残量は軍属のISということもあってかかなりのもののだが、こちらはただの競技用のIS。積んでいるエネルギーの桁が違う。

それに私は元の旅館まで戻るためのエネルギーも確保しておかなければならない。このままボーデヴィツヒと合流して泥沼状態になってしまえば、まず間違いなく途中で海に沈んでしまう。

さて、どうしたものか。

銀の福音がこちらに迫ってくる。

あと数分は凌がねばならない。  
やるだけやってみる。

そんなことを考えていると、それはやってきた。

黒い閃光の軌跡を描きながら、雲を突き破り、目にも留まらぬ速度でその機体は銀の福音の背中に乗った。

私にはその機体に見覚えがあり、私のもっとも大切な人が乗っている。

「一夏くん……」

一夏くん、そしてその愛機であるN o . 0 0 0の作り上げたI S 『黒零』が私の前に降り立った。

## 銀の福音 1

(予想外だな……偵察のつもりで上空を飛んでいたのだが、これは如何に)

ゼロ……一夏は戸惑っていた。

本来ならば彼の任務は銀の福音の戦力分析のために単独での偵察なのだが、気づいたときには銀の福音と誘宵アリサの戦いに割って入っていた。

(どうしたものか、装備は殆どが計測機器みたいなものだし。エネルギーも十分ではない……殴るか……いや、それだとパイロットの安全まで保証はできない)

武装の確認、銀の福音をタイマンで倒すことのできる装備を持つてはいるが、頭の中で作り上げた作戦を実行するととなると、確実に撤退する際のエネルギーがなくなってしまう。

「♪」

歌うような音声とともに銀の福音が一回転してゼロを振り落とす。

「戦闘開始」

マニピレーターの調子を確認しながら、ゼロは銀の福音に突撃する。

遠距離での戦闘となると銀の鐘に集中してやられてしまうことがあると判断したた



め、それが撃てない距離まで近づぐことにした。

防御はいらない

撃たれる前に手を打つ。

距離を詰めてしまえば、問題ではない。得意な接近戦に持ち込んでしまえば良い。

しかし、問題がある。パイロットの身の安全である。このままゼロが殴つてしまうと  
なると下手をすればパイロットの骨が折れたり、後遺症が残ってしまう恐れがある。

アメリカ政府から依頼された今回の任務の依頼内容はパイロットの安全を確保した  
上での銀の福音の機能を停止させること。

「面倒だ」

何時もならば何も考えずに暴れて倒して仕舞えば問題はないが、今回はあくまで捕獲  
がメイン。

片手に長刀、零雪を呼び出して構える。

撃ち込まれてくる拳や蹴りにゼロは素早く体を反応させて最高の威力を発揮する前  
に止めていく。

そして隙をみては確実に一太刀ずつ攻撃を与えている。薄くではあるが正確に装甲

を剥いでいる。

そして銀の福音の右足から放たれた大ぶりの一撃に合わせて、ゼロはカウンターを仕掛けて右のつま先を切り飛ばした。

(ああ、凄いなあ。一夏くんは)

戦いを近くで見ている誘宵アリサはゼロの姿に見惚れていた。勇ましく精悍で逞しいその振る舞いにアリサはドキドキしている。

こんなに近くでゆっくりと彼を見たのはいつ振りなのだろうか、アリサは記憶を辿っている。

『誘宵、無事か?』

誘宵にボーデヴィツヒからの通信が入る。

『ええ、無事よ。なぜか知らないけど、黒いISが割り込んできたわ。今は黒いのが銀の福音の相手をしている』

『黒いのが……』

ボーデヴィツヒは他にも何か言いたげではあったが、誘宵の状況を確認するのが先であるかと判断して言葉を放つ。

『何方が優勢だ』

『黒い方、接近戦で圧倒してる。元々接近戦用に作り上げられたのかしら。スペック自

体が高すぎる、それにパイロットの腕も代表級ね」

『銀の福音を圧倒………私が向かう。可能ならば漁夫の利を狙う』

『それまでモてばいいけど』

会話を終えた誘宵は未だ戦っているゼロに目を向ける。

銀の福音からの攻撃をゼロはかすつてはいるがまともには一撃も直撃を食らつてはいない。

それに対してゼロは一撃一撃確実に薄くではあるが攻撃を当てている。

(まるで子供だ……ドンドン攻撃に荒さが増していく。暴れているのはこのISの意思か?)

刀を振るいながら、冷静に状況を確認していくゼロ。刀で傷を付ける回数は最初に比べてペースが短くなってきている。

一度蹴り飛ばして距離を置き、その隙に武器を収縮して、新たにビームブレード『無零』に持ち変える。

右手を前に突き出して、掌から収縮したエネルギーを放ち銀の福音を怯ませる。

「終わりだ」

高速で接近、両手でビームブレードを持ち振り上げる。

銀の福音の顔前まで迫る刃、勝利を確信させるには十分であった。回避不可能の距



何十何百を超える戦場で戦ってきた。何百ものI Sを屠ってきた。それでもこんな光景を見ることは一度もなかった。篠ノ之博士と出会ってからもなかった。

『コアの覚醒だ』

「コアの覚醒？」

相棒であるN o . 0 0 0から言われた聞きなれない単語が飛び出した。

「コアの覚醒？」

『ええ、そうよ』

その光景を同じように遠くから見ていたアリサもまたコアであるN o . <sup>ア</sup>0 0 <sup>イ</sup>3 <sup>ス</sup>から説明を受けていた。

「何それ？」

『そうねえ、簡単に言ってしまうえば私たちがみたい**な**強烈な自我を持つ事ね』

「つまり、始まりの五つ——N o . 0 0 0からN o . 0 0 4までの電脳妖精は覚醒したコアって事？」

『そういう事。覚醒したコアは強烈な自我を持つがゆえに、乗り手を選び、自分と乗り手にあつた最前にして最優、最強の機体を作り上げる』

『だが、我々以外が覚醒するのは初めてだ。しかし、アレは急激に自分を覚醒させていると言つていいだろう』

「零落極夜で、一気に片付けるか？」

「エネルギーの繭であるのならば零落極夜で切り落とす事ができる。しかし、N.O.O.O.Oは否定的な態度でいた。」

『止めておけ、今のアレを傷つける事になればコアの精神を破壊する事になってしまう。そうなれば搭乗者を傷つける事になる』

その言葉を聞いて、ゼロは武器を収めた。これ以上の攻撃は任務の妨げになると判断したからだ。

「待つか？」

『引いておけ、あの状態になったら例え核を打ち込まれたとしても無傷で済む。それに

オレ達はエネルギーが切れかけてるだろ?」

チラリとエネルギー残量を確認する。先ほどのエネルギーの繭の攻撃によつてかなり持つていかれたらしく、戦闘を続行するには不十分な量しか残っていないかった。

『気をつけろ、覚醒したコアが相手だという事を。それにアレが目覚めたとき、前と同じ機体ではなくオレ達と同列になっている』

「成る程、それは確かに引くべきだ」

オレたち黒零と同列という言葉を一夏は重く受け止めてはいたが、それと同時に少し楽しくもあつた。

「二度戻つて装備の調整をし直すか」

残りのエネルギー量に気をつけながら、一夏は立ち去ろうとした。

「一夏くん」

アリサに呼ばれ、機体の動きが止まる。

「何?」

「助けてくれてありがとう。あのままだったら私も危なかつたかもしれない」

久しぶりに聞いた優しい声、一夏は安らぎを感じたが直ぐに頭から投げ出した。

「気にするな、アリサの危機なら俺は助けるだけだ。それ以上の事は何も――

――ツチ!」

ゼロが突然機体を落下させる。

頭上を通り過ぎるレールガンの弾丸。

「嗚呼、折角の別れが台無しだよ。またなアリサ」

落下し、水面ギリギリでスラストを噴かせて方向転換。そのまま、水面ギリギリを飛行しながら高速で何処かに去っていった。

「誘宵、無事か？」

アリサの隣にボーデヴィツヒがやってくる。

「ええ、無事よ。戻りましょう。ええ、戻りましょう」

「不機嫌なのか？」

「気のせいよ」



## 銀の福音2

「ただいま帰還しました」

「ご苦労だった」

任務を終えて宿に戻ってきた誘宵とボーデヴィツヒを待っていたのは織斑千冬だった。た。

織斑千冬の目元の化粧は崩れており、先ほどまで泣いていたのだろうと誘宵は思った。

「銀の福音はどうなった」

「私たち二人の手にはおえなかったので撤退しました」

「なぜあのまま戦い続けなかった」

織斑千冬から飛び出たその言葉は八つ当たりに近いものであった。自分の大切な弟が瀕死の重症にあったのに何もできない自分に苛立ちを覚えたから。

「無駄死にしろと?」

その言葉に怒りを覚えたのか、誘宵は千冬を睨みつけながら尋ねた。

「そうは言っていない」

「そうとしか言っていないません。ただでさえ相手は性能が上の機体。私たちには倒すだけだはなく、帰還する必要もあった。作戦が失敗したのは篠ノ之箒が速度を想定以上に上げて、会敵地点がずれたことも原因の一つです。文句があるなら彼女に言ってください。八つ当たりしたいなら、そこらへんの岩でも砕いてみてください」

千冬は何か言いたそうだったが、それを無視して誘宵は宿に向けて歩き出し、それをボーデヴィツヒが追いかける。

「誘宵、言い過ぎでは——なんで笑っているんだ？」

誘宵の隣に立ったボーデヴィツヒはあることに気づいた。

誘宵の口が僅かに上がり、わらっているというように。

ボーデヴィツヒは誘宵が笑っているところなど初めて見た。

なぜ笑っているのか理解ができない。何か楽しいことでもあったのか、しかしいくら考えてもボーデヴィツヒはこの数時間のうちに誘宵にとって楽しいことがあったとは思えなかった。

「誘宵」

「なに？」

僅かに声音が上がっていた。

「なぜ笑っている」

その言葉に誘宵はキョトンとした表情を見せた。

「何故？嬉しいことがあったからに決まってるでしょ。それより、汗かいちやっただし温泉に入りましょ。私疲れちゃった」

「あ、ああ」

笑う誘宵にボーデヴィツヒは恐怖した。

「あ、アリサちゃんおかえり。トランプでもする？」

温泉から上がって自室に戻った誘宵を待っていたのはトランプをする友人たちであつた。

「ごめんね智沙ちゃん、ちよつと疲れちゃったから昼寝させてもらうね。誘ってくれてありがとう」

アリサは押入れから布団を取り出して、畳の上に敷いた。クーラーの程よく効いた涼しい部屋なので、アリサはタオルケットを体にかけて寝転がった。

「ねえ、アリサちゃん」

数少ない友人の榎木智沙が眠ろうとしているアリサに尋ねる。

「なに？」

横になって目をつむったままアリサは聞き返す。

「どんなことがあったの？ さつきから先生たちが大慌てなんだけど」

「んん、内緒。それ話すと色々と面倒なの。というか話してはいけない決まりになってるの」

「そうなの？」

「そうなの。だから、お休み」

それから数分もしないうちに、アリサは綺麗な寝息を立て始めた。

「で、スコール。作戦はどうする」

亡国機業の保有するIS専用の潜水艦の中でゼロを含むモノクロームアバターの面々、スコール、オータム、エムの四人は今回の任務のための作戦を立てていた。他にもメンバーはいるのだが、今回はこの四人だ。

「単純よ、貴方の黒零による単騎の力押し。覚醒したコア、貴方の黒零と同等かそれ以上

の機体性能となると、エムやオータムでは対処できない。二人にはサポートに回ってもらって、ゼロ主体で戦ってもらおうわ」

「わかった。けどゼロはそれでいいの？」

黒いタンクトップにホットパンツ姿のオータムが尋ねた。

「何がだ」

「いや、一人で戦って勝てるのかと思つてき。相手は同格なんだろう？」

「勝つさ、問題ではない」

「それならいいんだがよう」

「私たちは、兄さんのサポートをすればいいの？」

「いや、どっちかという戦い終わった後の運搬だと思う。エネルギーを使い果たすと思うからな………スコール、黒零の補給はいつ終わる？」

亡国機業の制服を羽織りながら、ゼロはスコールに尋ねた。

「十分程で」

「なら、それまではゆつくりさせてもらうよ」

それだけを伝えてゼロは部屋から出て行った。

「違つたわね」

「違うな」

「違うね」

ゼロが部屋から出て直ぐ、三人は目も合わせずに同じようなことを言った。

「いつもだったらもう少し静かに話すよなあ？」

「そうね、あんなに多くは話さないと思うわ……………女ね」

「女ア!?! 兄さんが? いつ?」

「さつきでしょうね。戦う必要のない戦闘を行ったのだから、おかしいと思ったのよ」

妖艶な笑みを浮かべながらスコールはグラスに注がれた水を煽った。

「へえ、珍しい。あいつもあんなになるんだな」

オータムはスポーツ用のゼリーを飲む。

「なんか、嫌」

ムスツとした表情でマドカはつぶやいた。

「私の所為で百春が……百春が」

とある旅館の客室、ここには気を失って布団で横になっている百春とそのすぐ近くに座っている篠ノ之箒がいた。自らのミスで大切な人が傷ついてしまい、箒は落ち込んでいた。

「あんたがそんなに落ち込んでいてどうするのよ！」

いきなり障子が開けられ三人の女子が入ってきた。鳳鈴音、セシリア・オルコットそしてシャルロット・デュノアの三人だ。

「あんたが落ち込んでいて、百春が治るの!? 答えてみなさいよ！」

鳳は箒の胸倉を掴み、叫ぶ。

「そうですわ、篠ノ之さん。落ち込んでいても仕方がないですわよ」

「そうだよ、箒」

オルコットとデュノアも話す。

「あたしたちはこれから百春の仇を取りに行くけど、箒はどうする?」

箒は俯いたままその声を聞いていた。そして、徐々に顔を挙げていく。挙げられた顔は決意を露わにしていた。

「私も行く! そして百春の仇をとってみせる!」

「そう……なら行くわよ、三人とも!」

鳳の掛け声と共に四人は部屋から飛び出し、ISを展開して大空へ飛び立った。



## 銀の福音3

「目標まで数百メートル、二人とも準備はいいか？」

「大丈夫だ」

「問題ないよ」

太平洋上空、エネルギーの繭に包まれ、覚醒の時を待つ『銀の福音』よりも更に高度の高い位置でゼロ達三人は作戦の開始時刻まで待機していた。

集中力を極限まであげる。作戦が開始するのは『銀の福音』な覚醒が完了するその瞬間、それよりも早く攻撃を開始してしまったのであれば、彼女たちに何の後遺症が残るのかわかったものではない。

ゼロは理解している。これから闘うのは今まで戦ってきたどの相手よりも強いのであろう。可笑しくなった昂ぶる心を落ち着けていく。

ユラユラと長い長い銀の機械の髪が海風に揺れる。

「ん？」

センサーにもなっている銀の髪先が此方に迫ってくる敵を感知する。正確にいうならば、ゼロ達ではなく銀の福音に迫っているのだが。

「四機、コアの反応からするとIS学園の奴らか。邪魔をされるのも面倒だ………  
オータム、マドカ、お前たちは待機している。俺はウォーミングアップをしてくる。補給の用意を頼む」

「わかった、けれど一人でいいのか？」

「無論、問題はないだろ。疼く心をなだめてあげたいんだ。わかるだろ？」

「いや、わかんねえよ」

「わかれ」

黒零を纏ったゼロが落下していく。狙いを定め、瞬時加速を行い急加速。

雲を突き破り一瞬でIS学園の四人の前に現れた。

「止まれ」

いきなり目の前に現れた黒零にやってきた四人は驚きながらも身構えた。

今にも開戦してしまいそうな雰囲気なのだが、ゼロはその雰囲気強引に潰す。

「引く気はないか？」

「黙れ、貴様と話す言葉は私は持たん」

紅椿に乗った篠ノ之箒が太刀の切っ先を突きつける。

「そうかならば、そこから少しでも前に動いてみる。その時は、本気で闘ってやる。前とは違う本気だ。死んでも知らんぞ」

ゼロは抑揚のない声でやってきた四人に告げる。

ゼロは任務の前にスコールから一つ言われたことがある。

邪魔をする人間がいるならば殺しても構わないと。

ゼロの纏う雰囲気が前回とは異なうことに四人は気づいている。言葉は本気なのだろう、目の前の人間であれば殺すのに躊躇いを持たない。言葉は本気なのだ。

それでも愛する物の敵討ちのためにはこの壁を越えなければならない。

「やあー！」

紅椿を身に包んだ篠ノ之箒が両手に刀を持ってしかけてくる。

他の三人もゼロを取り囲むように展開する。

「さあー！」

空裂で顔面を狙った一突き、ゼロはそれを首だけ動かしてこれを躲す。

「道場剣術があ……」

箒にはゼロの体が沈んだように見えた。

そして次の瞬間には強烈な蹴り上げが顎に直撃していた。スラストターの加速を生かしたムーンサルトキックによる攻撃。

ぐらつく箒、絶対防御が発動したため死には至らなかったがかなりのダメージを食らってしまった。

「次」

箒の背後に回り込み、ポニーテールを掴むと背中に膝蹴りを叩き込んだ。

胃液を撒き散らす箒、一刻も速くゼロとの距離置きたいがポニーテールを掴まれているためすることができない。

「……」

背後からの敵意。

ゼロはそれが放たれる向きに箒を蹴り飛ばすと、紅椿にBT兵器から放たれたレーザーが直撃した。

「信じられませんわ……」

BT兵器を展開させた張本人、セシリア・オルコットは信じられないと言った様子でいる。

ゼロは両手にビームガン零砲を呼び出した。

ゼロの周囲を囲み銃撃を続けるBT兵器達。それら全ては首を動かしたり体を上下反転させることだけでかわしていく。

位置と起動を確認、相手がどの程度の軌道を描くことができるのかを見極めていく。

(なんだ、マドカの方が上じゃねえか)

判断は付いた。

もう考える意味もない。

軌道を予測、そしてBT兵器目掛けて零砲を連続で発砲した。

瞬く間に砕け散っていくBT兵器。

「え？」

オルコットは理解が追いつかなかった。今まで戦った相手でここまでできる人間はいなかった。相手は本当に人間なのかと疑いたくなかった。

「複数の機体を相手するよりも楽だ。簡単で、単純すぎる」

零砲を収縮、瞬時加速で距離詰める。

「くっ！」

オルコットは慌てて腰の部分にあるミサイルポッドを起動、ゼロ目掛けて至近距離で撃とうとした。

しかし。

黒零の右手の指先から放たれたエネルギーの弾丸がミサイルを爆発させた。

撃たれる前に撃たれた。

下半身に諸に爆風が直撃した。威力が高いものではなかったことが不幸中の幸いなのかも知れない。

「くっ！」

落下していくオルコット、爆発でスラスターがいかれてしまった。

「沈め、鋼鉄の戦艦よ」

落下していくオルコットの背後にゼロが回り込んだ。

両肩をオルコットの背中付近に合わせ、背負いこむようにへその位置に後ろ手でオルコットを掴む。

スラスターを最大まで噴かして、落下速度をあげていく。オルコットはこの拘束から逃れようとはしているが、腕の交差が硬すぎてほどくことができない。

「栄華は沈む、零落の果てに」

瞬時加速による再度加速、肉体にかかる重力は通常よりもはるかに重い。

「バトル・シップシンク!!」

海面に勢いよく叩きつけられるオルコット、彼女は自分の機体が砕けていく音が確かに聞こえた。

腕の拘束がほどかれ、海中に投げ入れられる。

ゼロはオルコットを海面ギリギリで投げ捨て、その勢いを利用して一回転。再び上昇する。

（反応が近づいている、強烈なコアの反応が。来い、来てみる、弟）

ゼロは此方に高速で迫ってくるISの気配を相手が遙か遠くにいるのに感じ取って

いた。

気持ち昂ぶる、それを押さえ込もうとして理性が抑えにかかると本能が理性の鎖を引きちぎろうと暴れ狂う。

降り注がれる弾丸の雨霰、碌な殺意のこもっていないソレらはゼロにとつては邪魔で邪魔で仕方がなかった。

体も温まって来た。

「時間がないんだ、任務の邪魔になる奴らは……てめえらは敵だ」

ゼロの動きが変化する。軌道も速度も何もかもが先ほどまでとは違う。

目視とセンサーを活用しながら必死にゼロを追いかける三人、銃撃を当てたいが攻撃をしかける前にその場所にゼロはいない。

「当たらない、当たれ！」

両手に持ったサブマシンガンを乱射するデュノア、しかし銃口はゼロに追いつけず明後日の方向に飛んでいく。

「当た——ッ!？」

ゼロが目の前で消え去り、そして強烈な殺気を背後から感じ取った。

死神に生きたまま首を刈こぼれのしたノコギリでじわじわと斬られ殺されるように、

死という感覚を振り返るまでデュノアは感じ続けた。

振り向く時間がこれほどまで長く感じたことはなかった。

振り向けばそこにはバケモノがいた。

一瞬でラファール・リヴァイブの両肩に付けられてあるシールド代わりのバインダーの根元が手刀によって切断される。

「離れ——」

「温い」

接近戦は不利だと理解していたのでデュノアは距離を取ろうと少し後ろに下がった瞬間、ゼロの連打が肉体に叩き込まれる。

重い打撃はデュノアの意識を僅かに失わせた。

デュノアの腹にゼロの右掌が添えられる。

「さあ、弾ける」

ゼロの右手が光り、その光をデュノアの肉体に叩き込んだ。

デュノアの肉体を衝撃が駆け巡っていく。装備を砕き、意識を細切れにしていく。

黒零の装備の中で純粋な破壊力であれば一二を争うこの『多機能式攻撃腕』は黒零の持つ武装であり、圧倒的なエネルギーの量を直撃させるモノだ。

最もこの技を使うには時間がかかってしまうため、高軌道性能で相手を翻弄する戦い



を好むゼロは極力使いたいとは思っていない。

落ちていくデュノア、そんなものに目もくれずゼロは次の敵に向かつていく。

「マズイ、箒マズイ」

「わかつている、わかつてる！」

残った二人が震え上がる。

見誤っていた。

血が登りすぎていた。

相手の本気がこれほどまで高いなどとは思ってもいなかった。あの時の、タツグマツチの時はどれほど手を抜いて戦われていたのか、箒は理解した。

この恐怖心は何なのだろうか、なぜここまで恐怖しているのか、風は湧き上がってくる走馬灯を目の裏で見ながら、一度感じたことのあるこの感情を探す。

ゼロは右手にエネルギーブレード『無零』、左手には実体剣『零雪』を持つ。ゼロは元々左利きではあったが、両親に子供の頃から矯正されていたので今では両利きになった。

左手で篠ノ之と戦い、右手で風の相手をする。それぞれの腕が個別で意識を持っているかのように別々の動きをする。

「ハイハイ！」

風の愛機、甲龍の両肩に付けられてある龍砲が起動する。

見えない空気の圧縮弾丸を放つ龍砲、風は躲せるはずがないと思い、放った。しかし。

顔を目掛けて撃たれた空気の弾丸は容易くゼロに躲される。その動きはまるでその位置に弾丸が来るのがわかっていたかのようだった。

「なんで？」

戸惑う風。

「どうした、狙っているのがバレバレだったぞ」

ゾクリと風の肉体が震える。

ゼロが箒の肉体にキツチンシンクを叩き込んで遠くに蹴り飛ばす。

一対一の形になる二人。

風の双牙天月の握る手が震える。

ゼロの武器を握る両手がより一層強く得物を握りしめる。

「零落……極夜」

右手に持つ『無零』の刃が翠から黒に染め上げられる。

吹き荒れる暴力の風が甲龍を襲う。

装甲を剥ぐように無零で切り裂き、零雪でシールドエネルギーを減らしていく。

風は何もすることができない。圧倒的な実力差の前に蹂躪されるだけである。

(ああ、そうか。そうか、この感覚は……)

エネルギーが尽きて落下していく。

後少しだ、後少しで思い出せるのに、風は悔いの念を胸に抱きながら、落ちて行った。

「さて、残されたのは君だが」

零落極夜を解除したゼロはただ一人残った篠ノ之箒を見た。

「どうする、帰るか?」

ゼロ本人としては闘う前から結末の見えている戦いに興味はない。

「ふざけるな、私は百春の仇を取るんだ!その為に私にはこの機体がある!」

「成る程な、ならば君に朗報だ。織斑百春が此方に向かっていて。あと数分もすれば此方に着くはずだ。だからそれまで生き残ってみろ」

ゼロは此方に迫って来るISの気配を感じ取っている。そのISのコアはゼロ——一夏にとつてとても馴染みの深いモノなのだから。

「なに?」

僅かな希望が生まれた。

「希望が生まれたか？それは気の狂いかもしれんぞ。それに、数分持つのか？」

手始めに、回転を加えながらの接近と流れるような踵落とし。

箒はそれを両手の太刀で受け止める。

「なんだ、やるんだ。この性能、いい機体だ」

「当たり前だ。姉さんが作ったこの紅椿は最強の機体だ。負けるはずがない！」

紅椿が蹴りを押し返す。

「でもなあ」

次は逆回転からの右足の浴びせ蹴り。

もう一度刀で防ごうとする。右手に持つ刀、『空裂』が受け止めた衝撃でへしおれる。

「なに!？」

「乗っている人間がド三流じゃあ、泣き叫んでるんだらうなあ」

空中ということもあつてか、体制も位置も無視した蹴りの連続攻撃、一撃一撃が鈍器で殴られたような衝撃を箒に与える。

「一流の機体と三流のパイロットなら」

ゼロは箒の手首を掴んで刀の動きを制限し、その状態で何度も何度も執拗に膝蹴りを叩き込む。

「意味がねえ」

箒も必死に離れようと抵抗はしていたが、とうとう力がなくなり手から刀がこぼれ落ちてしまった。

手首から手を離して今度は首を締める。

苛立っていた。

なぜ自分でもここまで饒舌になっているのか理解できないほどに、ゼロは目の前の人間に苛立っていた。

感情は隠せと何度も自分に言い聞かせていたのに、それを自分から破ってしまっている。

「どうだ、どうした。威勢だけなのか、もつと来てみるよ。大切なモノを犠牲にしたくせに。光を見せろ、輝いてみ——何でだ？」

ゼロはそれを見た。

水平線の向こう側から来るソレはゼロの予想の何倍も速く此方に迫って来ている。

「そうか、そんなのか」

掴んでいた箒を投げ捨てて、迫り来る気配に正面を向ける。

「進化したのか、ならば迎え撃とう」

仮面の奥底で、ゼロは久しぶりに笑った。

## 銀の福音 4

「箒達に何をしたあああ!!」

雪片二型が黒零の装甲に擦る。

第二移行を完了させた白式——白式・雪羅の振るう斬撃にゼロは感心していた。

（斬撃の質が高まっている。強い人間に鍛えられているようだ………しかし、方向が違う）

織斑百春は強くなっていた。しかし、ゼロはその強くなった武の違和感を強く感じ取っていた。

百春の刃はゼロ——一夏の刃に似て来ている。

（それは、それは違うだろ）

呼び出した零雪で刃を受け止める。

「随分と汚い剣筋だな」

「ほざけ！」

力任せに雪片で零雪を押し返す。

「そんな刃ではいくら強くなった所でその先にあるのは私の刃の劣化品でしかないぞ」

ゼロの繰り出す刃は薄くではあるが確実に白式の装甲に傷を付けている。

「お前に僕の何がわかる！」

「わかるさ、わかるから言っているんだよ。他の誰でもない、その剣筋を極めた俺だから言えるんだよ」

「……………俺？」

ゼロの言葉に百春は違和感を感じた。

ボイスチェンジャーによつて変えられた声と意図的に作られた抑揚のない話し方から、百春は無意識のうちにゼロの事を女だと認識していた。自分だけが唯一の男性！ S操縦者であると思っていたからというのも要因に含まれる。

だがボイスチェンジャーで変えられた声でもわかるほど、今のゼロの話し方は男のソレであった。

「貴様に教えておいてやる、その武の先にあるモノは……………孤高だ」

「孤高？ 孤独の間違いだろ！」

「違うな、孤独とはなつてしまったモノ、孤高とは成るモノだ」

いくら刀が交錯したのだろうか、最早理解できなくなつてしまった。

ゼロの言っている言葉の違いが百春にはわからなかった。

「理解できないだろうなあ、なにせ貴様はその境地に至れていないのだから」

力は明らかにゼロが上回る。

だがそれでも百春は必死に食いついていく。

「暗い暗い闇の道を背後にある明るくて優しい光を振り返る事なく、ただひたすらに突き進む。どんなに暗くても、どんなに恐ろしくても、一歩進むのがいくら遅かろうと、孤高に至った人間は進むしかないんだよ」

白式の新たな武装『雪羅』のシールドモードがゼロの刃を受け止める。

「孤高とはその境地に至ったモノ達しか理解できない」

防戦一方の百春。

「貴様にソレができるのか？否、不可能！」

シールドが大きく弾かれる。

「何故、そんなことを!!」

弾かれた反動を利用して雪羅をクローモードに変形、ゼロを引っ掻く。

「言い切れる！」

雪羅の爪を刃で受け止める。

「貴様ではこの境地に至れないからだ。貴様がこの境地に至ってしまえば貴様は貴様ではなくなくなってしまう」

「なにが言いたい」



「貴様は何の為に戦っている」

仕切り直し、二人は一旦距離をとった。

「僕は僕の大切なみんなを守る為に闘う、護られてばかりの僕ではないんだ！」

百春が迫り、刃を振り下ろす。

ゼロはその攻撃を雪片を持つ手首を掴んで受け止める。

「それが孤高にはなれないのだよ、どんなに頑張っても我らの境地には至れない。孤独になつてしまっただけだ」

ゼロに掴まれる白式の手首装甲が悲鳴をあげる。

性能は黒零のほうが高く、必死に振りほどこうとしても無意味に終わる。

「俺は俺の為に戦っている。だからこそ孤高に至れる。誰もいない闇の道を突き進むことができる。故に、貴様にこの道は進めない」

空いている手での鉄拳が百春の胸を抉る。衝撃が駆け巡る。

消えかかりそうになる意識の中で百春は雪片を逆手に持ち替えてゼロの胸に突き刺しにかかる。

「僕は孤高にも孤独にもならない、僕は皆と突き進む。お前が孤高になつてしまったのなら、僕は皆と進むだけだ！」

その言葉を聞いてゼロは僅かに安心した。

しかし、その直後にどうしようもない怒り胸のうちからこみ上げて来た。

「だつたらー！」

百春を突き離し、より一層両の拳を強く握り締める。

「何故そのような戦い方をする。それが守るモノの劔か！否、否、否！」

猛攻撃が百春を飲み込む。

「それは殺す劔だ。いくら貴様が守るモノだと言い張った所で、刃を交えれば本質がわかるぞ。貴様は俺以上に性質が悪い。怒りにとらわれようと憎しみに溺れようと、守る刃で守らずにどうする！」

両手を絡め合わせたダブルスレッズハンマーが大きく百春を吹き飛ばす。

右手の爪を立て、指先から細いエネルギーダガーが生まれる。

接近してからの追撃の爪の一振りには白式のビームシールドにうけとめられる。

「だつたら、僕は何を！」

爪をはじめ返して、雪羅のシールドモードをクローモードに変形させる。

爪と爪が幾度も弾き合い、刀と刀は鏝迫り合う。

「守ってみろ！」

ゼロは一度距離を取ると爪を解除して右手に零砲を呼び出す。

銃口を向ける先は百春ではない。近くの岩場に避難していたオルコット達だ。

百春のとつた行動はゼロの動きを止めることではなく彼女たちの盾になること。それを見てゼロは射線を僅かにずらした。

撃ち出される強烈な弾丸。

「零落白夜」

白刃の煌めきが闇を打ち払う。

「傷つけさせるか！」

全ての弾丸が零落白夜の刃に飲み込まれ、消えていく。

「そうだ、それでいい」

零砲を収縮、瞬時加速を利用して距離を詰める。

「僕は君とは違う！君が守ることを選ばなかったのなら、僕は守ることを選ぶ！それが僕の道だ！孤独にも孤高にもならない、皆と共に強くなる道を選ぶ！今は未熟で、誰かに守られていることも理解している！」

百春の刃の握り方が変わる。

「けれど、必ず君とは別の強さを身につけて、皆を守ってみせるんだ！」

「ならば見せてみる、貴様の行き着く先を！この愚かな亡霊に、なり損ないのモンスターになあ！」

互いに両手で得物を握りしめ、全力で振るう。

重い衝撃が両者の身体を駆け巡って行く。

型をなくしてしまった、心の奥底の本能から放つ武は両者の本質を表すようなものであった。

(何だろうか、楽しいな)

それは戦闘においてゼロが始めて覚えた感覚であった。

心の底で感じている純粹な暖かさと楽しさ、今までの戦いの中では一度も経験したことはなかった。

今までに感じていたのは凍てついた空気と命を狙って激しくぶつかり合う殺意だけであった。

(そうか、兄弟喧嘩か……………)

最後に喧嘩したのはいつ以来なのだろうか。

(俺はこいつといつから向き合っていないかった。俺は何をしていたのだろうか)

両親が死んでからは二人の兄弟仲は良いと言えるものではなかった。互いが互いに触れ合わないように、自分たちの世界を作り上げていた。

(だからか、だから俺はこんなにも話していたのか。何年ぶりにこいつに向きあった) 悲しくなった。

僅かだが動きが止まってしまった。

そこを百春は見逃さなかった。

凶刃をすり抜け懐に入り込み、刃を胴体目掛けて一閃。

衝撃を受けた。

暫く感じていなかった衝撃であった。

「一撃イー！」

百春からゼロに対して始めてまともなダメージを与えた。

百春に僅かな希望が生まれた。限りなく遠くに存在していたゼロの背中をようやく見る事ができた。

(押し切る、押し切ってみせる)

(啞々、懐かしんでいた。切り替えろ)

零雪を握り直す。

追撃をしかけて来た百春の斬撃を躲して、雪羅に突き刺す。

百春は雪羅が使えなくなったと判断したのか、腕の装甲から切り離し、雪片でカウンターをいれる。

「甘えよ！」

ゼロの肉体が落ちて刃を躲し、足を振り上げて蹴りをいれる。

吹き飛ばされる百春、直に体制を整える。

「僕は負けない、負けたくない！何故かわからないけど、君にだけは負けたくない！」  
零落白夜発動、この一撃で決めるつもりだ。

戻ることなど考えていない、突き進むことしか、目の前の壁を超える気持ちしかない。  
「いけえええええ!!」

高速の絶技、音も世界も切り裂いてしまいそうな一振り。

「そうか、だがな」

居合切りの様な一閃が空間を斬り裂いた。

柄と刃の狭間を切り、雪片の刃を天高く打ち上げた。

「届かないのか……」

百春から細く声が漏れた。

自然と瞳が瞑られ、諦念を悟った。

「俺も負けられないんだよ」

兄として戦士として。

零雪で峰打ち、鋭く重たい衝撃が百春を飲み込み、気絶した。

腕がダラリと垂れ下がり、ゼロによりかかるような形で眠ってしまった。

「なんだ、強くなつてたんだ」

優しい声音でゼロは呟いた。

## 銀の福音5

「随分とエネルギーを使ってしまった」

気絶した百春を抱えたまま、ゼロはヘルメットの画面に映し出されてあるエネルギー残量を確認した。

既に半分近く消費しており、その事はゼロにとっても予想外であった。

「エネルギーはオータム達から分けてもらえれば問題ないか、それよりも問題は」  
肩に寄りかかる百春を見た。

「まあ、誰か来るだろ」

倒された箒達が上がった岩場に近づくと気絶した百春をその近くにおろした。

「私たちを殺さないの？」

気絶している箒と百春を除いた三人がゼロに向けて護身用の銃を構えている。ISはエネルギー切れの為に使えない。

「殺す？そんな価値もない、殺して欲しいならもつと強くなってみろよ。任務の邪魔にならなくなったためえらなんぞ眼中にない」

ゼロは警戒する三人を鼻で嘲笑うと、空に上がって行った。

残された三人はやり場の無い怒りを感じることしかできなかった。

「終わった、戻ったぞ。銀の福音の様子は？」

「今の所は何もない。エネルギー減ってるだらほら」

オータムは自分の腰の装甲に付けられてあるコネクター付きのチューブをゼロに渡した。

「ありがとう」

ゼロは貰ったチューブのコネクターを腰と背中の中の装甲に突き刺した。

回復していく黒零のエネルギー、エネルギーが回復していくのをモニターで確認するのと並行して、ゼロは装備の状態を確認する。

「それで、作戦は？」

「俺が単騎で突撃する。二人はサポートを頼む」

「私たちじゃ力不足なの？」

不満げな声でマドカが呟いた。

「そういう意味で言ってるねえよ、ただ三人全員が戦って帰還できないほどエネルギーを消費しちまったらダメだろ。それくらい——来るぞ」



ゼロは黒零の腰からコネクターを抜き取ると二人の前に出た。

眠り続ける銀の福音の巨大なエネルギーの繭に変化が訪れる。

ドクリドクリと心臓の鼓動のように繭が動き、どんどんと圧縮されていく。

「なにが始まってんだ」

「覚醒さ。変貌した幼虫は繭を突き破って、今大翼をヒロげる」

銀の福音の繭から巨大な翼が飛び出した。

「壮絶な破壊音と共に繭が突き破られた」

黄金の全身装甲、背中から生えた巨大なエネルギーの翼。第一形態から純粹に進化を果したかのような洗練されたデザイン、日の光に照らされた黄金の煌めき。

覚醒したコアから放たれる圧力に怯む二人、それに対してゼロは前傾姿勢をとって銀の福音の動きに備える。

「♪」

歌うように奏でるように福音が音を出した。

その音はまるで挑発しているかのように聞こえた。

「来る——ッ!?!」

言葉を言い切る前にゼロは防御の構えをとった。

そして次の瞬間には防御の構えをとっていた両腕に速く重たい衝撃が伝わった。

反応するのが精一杯でカウンターなどしかけられなかった。こんな経験はいつ以来なのかと、ゼロは思い返してみるがそれはかなり過去のこと。久しぶりの本気の相手。

高速で接近しての膝蹴りはゼロの予想よりも威力が高く、そして接近する速度は黒零の加速を超えているようであった。

「重ッ！」

ゼロは受け止めた銀の福音を上弾き返して、自分は後退する。

腕の痺れを感じながらゼロは態勢を立て直して此方に高速で迫ってくる銀の福音をみる。

（成る程、俺を相手にしている奴はこんな感じなのか？）

銀の福音から繰り出される踵落とし、踏みつけと言った足技の連続攻撃を受け止めていく。

隙を見て片脚を掴むと、ジャイアントスイングの用量で福音を振り回し海面に向けて投げ捨てた。

「♪♪♪」

銀の福音は三度大翼を羽ばたかせると勢いを殺して海面に立った。

「いいな、久し振りだよ。互角か、それ以上の相手と闘うことなんて」

黒零に乗ってからのゼロはその性能から互角の相手と闘うことはほとんどなかった。しかし今は違う。互角かそれ以上の相手が目の前にいるということがゼロに程よい緊張感を与えてくれている。

深く深呼吸。

静寂。

破裂。

最速と最速がぶつかり合う。

拳と拳が交差した直後、二体は高速軌道での格闘戦に移る。

「何が起きてる」

「わからない、けど狙いがつけられない」

ゼロと銀の福音の戦いを見ながら、二人は戸惑っていた。

機体性能が段違いの二機が全力を出して闘うと、こうも置いてけぼりにされてしまうのかとオータムは思った。

エムはスナイパーライフルで狙いを付けようとするが、機体の動きが速すぎて狙いが定まらない。

「成る程、あいつが待機を命令したのがわかったよ。これはついていけない」

「覚醒したコア……私もあれがあれば」

エネルギーの雨が降り注ぐ。

銀の福音の大翼が羽ばたくたびにゼロ目掛けてエネルギーの弾丸が飛んで来る。

銀の鐘と呼ばれたものが進化してしまった。

拳を躲すように、最低限の動きでゼロは銀の福音に近づいていく。

銀の福音は接近戦に対応する為に両手を手刀の形に変える。指先からエネルギーのブレードが生まれる。

精彩な斬撃だ。

美しい。

攻撃を躲しながらゼロは素直に賞賛した。

手を振るだけでエネルギーの斬撃が飛翔する。何度も刃が生まれ、その度に飛ばして来る。近づこうにも近づけない。

「なら」

ゼロは両脚を海の中に入れ、人魚のように海を弾いた。

水の壁が銀の福音の前に現れた。しかし銀の福音はそんなことはお構いなしに壁を飛ばしたエネルギーの斬撃で切りさいた。

「♪?」

目隠しの壁がなくなった先にはゼロがいなかった。

「♪!」

背後からの強烈な殺気、銀の福音が振り向くよりも速く、無事に零落極夜を纏わせた斬撃が大翼の一枚を切り落とした。

水の壁を囨に使い、ゼロは海中を高速移動して銀の福音の背後をとった。

相手がエネルギーを使用した攻撃を主体とするならば、ソレを消し飛ばすことのできる零落極夜で対処すれば良い。

しかし、零落極夜は自身のエネルギーを大量に使ってしまったため、限られたタイミングで数秒間だけ使用するのが好ましい。

翼を無くした銀の福音がガクリと態勢が崩れた。

ゼロは追撃を仕掛けるが、銀の福音は高速でその場から離れて再度翼を生やした。翼の煌めきがありました。

(変わった、枷が外れた?)

銀の福音の纏う雰囲気が変わったとゼロは直感でわかった。

銀の福音が拳を握りしめた後、両の掌を前に突き出した。

竜巻が生まれた。圧倒的なまでのエネルギーの竜巻。

ソレは迫っていたゼロの視界を飲み込んだ。二つの竜巻はゼロの逃げ場を無くした。空気を焼き焦がし、海を食い散らかし、ゼロへと迫る。

（突破は……無理か。なら）

願う。

自らを守る壁を。

強く、硬く、自らを守護する壁よ。

「壁よ、あれ」

黒零の左腕が輝き、ゼロの周囲を『力』が覆う。

エネルギーの竜巻を突き進む。少しでも気を抜いてしまえば嵐に飲み込まれ、『力』を解除してしまえば一瞬でエネルギーの残量が零になってしまう。

（勢いが強い、押し戻される）

ゼロは咄嗟に機体の進行方向を垂直に変化させて竜巻から逃げる。

ゼロの周囲から『力』がなくなり、ダラリと左腕が垂れ下がった。『力』を使い過ぎればこのようにクールダウンの為に左腕が暫くの間動かなくなってしまう。

故にゼロはこの装備を使うのを躊躇ってしまう。

（腕が動くまでは十秒、片手で凌ぐか）

無零を呼び出し、右手で掴む。



竜巻を発生させるのをやめた銀の福音は上にいるゼロを見た。

福音が翼を大きく羽ばたかせる。

幾つもの小さい光球が撃ち出され、意志を持っているかのようにゼロに迫る。

(「こんな装備あつたのか? 覚醒したから生まれたのか」)

刃を構える。

小さな光球と光球は点と点を線で結び合わせるように、エネルギーの線が光球達を結び合わせた。

数十の光球が作り上げたエネルギーの網、ゼロの目の前まで小さく纏まっていたソレは彼の目の前で突然大きく広がった。

ゼロを取り囲むエネルギーの網、次に打ってくる手をゼロはすかさず予想し、一瞬でも早くその手に対処しようと零落極夜を発動させる。

後方に後退、その先にはエネルギーの網が存在しているがそんなのは構わない。網が小さく縮退を始める。そんなことはゼロにもわかっていたことだ。小さくなれば逃げ場がなくなってしまう。だからこそ、それよりも前に投げ出す必要があつた。

零落極夜の一閃が網の一边を切り裂いた。

その穴から網の外へ飛び出し、無零を収める。  
下から迫り来る影。

(速い)

アツパーが迫って来る。

顔を狙ったこれを寸前の所で躲した。

福音は一度距離をとって直様膝蹴りと共にゼロに再度迫った。

ゼロは膝蹴りを右手で受け止めるが、勢いを殺しきれずに吹き飛ばされる。

吹き飛ばすゼロ、福音は追撃を仕掛け浴びせ蹴りをゼロの腹に叩き込んだ。

落とされるゼロ、福音はその軌道上に素早く回り込んで更なる追撃をかけようとする。  
る。

「追撃は意味がない」

手を硬く握りしめ、落下線上にいる銀の福音に向かって裏拳を繰り出す。

金属と金属がぶつかり合って激しい音が響き合う。

受け止められ、互いに一瞬の硬直を迎える。

目と目が交錯する。

ゼロは右手を引き戻し、その勢いを利用して左脚でオーバーヘッドキックを仕掛ける。



福音はこの一撃を両腕を交差せて受け止める。福音は受け止めてもビクともせず、それどころかゼロを押し返した。

（パワーも、速度も向こうが上か………だったらこっちももう一段階外すぞ、ゼロ）  
『了解だ、ゼロ』

クールタイムを終えた左腕の調子を確かめながら、ゼロは心の中にある鎖が引きちぎられるのを感じた。

（こいつに勝つぞ、出し惜しみはなしだ）

『わかっているさ、だからオレも制限を外してやるよ』  
重なり合う。

『俺達オレはゼロ、さあ行くぞ』

黒零の動きが変化した。

今まではパイロットであるゼロの体を心配してか、最高速度から零速度までの急激な加速を行ってはいなかったが、今は違う。

パイロットにかかる負荷を無視した全力で銀の福音を相手している。

顔面にストレートが直撃しようと、爪から飛び出したエネルギー刃切り裂かれようが

構わない。

ゼロと銀の福音は互角の戦いを繰り広げている。

それはもうモンド・グロツソの決勝戦並みに激しい戦いであった。

互いの実力がトツプクラス、機体の性能も世界最高峰、申し分ない。

そんななかゼロの動きのキレが増していた。今の今までは手を抜いていたのかと言われるとそうではない。寧ろこの戦闘の途中で限界を超えたような感覚であった。

「♪♪♪♪♪」

銀の福音はゼロに対する変化からくる違和感を感じ取ったのか大きく距離をとった。

ゼロは追撃を仕掛けるわけではなか、その場で福音からの攻撃を待っている。次はエネルギーの放出による遠距離攻撃なのだわかっていようであった。

「『さあ、次の段階だ』」

銀の福音は翼を激しい羽ばたかせ、光球を何十発も撃ち出すとゼロを囲み網を作り上げた。

網は先ほどのよりも目が細かく、範囲も小さい。

福音の翼が先ほどの何倍にも大きくなり、それを羽ばたかせた。

銀の鐘から飛び出したエネルギーの羽の総数は万を超える。一本一本細い針のような弾丸は網の近くにくるとその周囲をグルグルと回り始めた。

網と針が脱出不可能な巨大な繭を作り上げる。

福音は右手を前に突き出し、手を大きく広げた。

繭に変化はない。

「なあ、あれヤバくないか？」

待機を命じられていたオータムは手助けをするべきかいなかで悩んでいた。

相手は自分たちのなかでも断トツの近接格闘能力を持っているゼロと互角に闘うことのできる化け物、機体性能の遥かに劣る自分に何ができる。

「ヤバイわよー！」

スナイパーライフルを構えたエムが正確に狙いをつけて銀の福音に向けて発砲した。

不意打ちに近かった銃撃を福音は一度も見ること無く躲してみせた。

「嘘でしょ？」

その様に驚愕するマドカ、完璧な射撃だったはずなのに簡単に躲かされてしまった。

「あんなのと兄さんはマトモに殺りあつてたの？」

今になってマドカは再認識してしまった。

「♪♪♪」

福音は違和感を感じていた。

あれだけ荒々しく戦い続けていたゼロが何故こんなにも簡単に網に捕まるような真似をしたのだろうか。

何故繭を潰そうとしているのに、繭は全く潰れないのか。

網は今頃潰れ、ゼロを殺しているはずだった。

それなのに、何故、何故。

『目覚めよ、俺<sup>オレ</sup>』

それは繭を吹き飛ばして現れた。

それは黒零ではなかった。

正確にいうと今までの黒零ではなかった。

『黒零第1・5形態』

これは形態移行ではない。

性能の変化は一切なく、ただ装備が追加されただけの変化。

両肩には巨大なバインダー、ソレはゼロの動きを阻害しないように可動式になってい

る。

脚には元の装甲を覆うように追加の装甲、背中にも追加のブースターが取り付けられている。

顔を隠すためのヘルメットにも新たなパーツがつけられている。

『終わりにする』

ゼロは両手に無零を呼び出す。今までの装備は一本だけだったのだが、この形態変化によつて新たに一本作り上げられた。

新たに追加されたスラスターが起動する。

大きく円を描く起動によつてゼロは速度を手に入れる。

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪!!!!」

銀の福音も最強の一撃でゼロを迎え討つ。

両腕を前に突き出し、先ほどゼロを苦しめた竜巻を発動させる。

更に銀の鐘の巨大な翼の前に突き出し、竜巻に巻き込ませる。

これこそが覚醒した銀の福音の究極の一撃、圧倒的で超巨大なエネルギーの竜巻を生させ、相手をその竜巻の中で細かく切り殺す。

例えシールドエネルギーがいくら残っていようとその圧倒的な力の前では全くの無意味、直撃を喰らえば死ぬのみ。

その絶望の竜巻に向けてゼロは突き進んでいく。一切止まる気配はない。それどころか先ほどよりも速度が上がっているようだ。

心を合わせる。

『精神力発動!』

二人の呼吸を合わせ、目の前に『力』が生み出した壁を盾にしながら嵐の中を進んでいく。

『零落極夜』

ゼロが両手に持っていた無零の刃が一度無くなり、新たに零落極夜の刃を生み出した。

竜を腹の中から斬り裂くかのように、竜巻が内側から切断されていく。

その光景を見ていた他の人間達は、余りにも次元の違う戦いに目を疑っていた。

そして終焉は訪れた。

竜巻を突破したゼロによる必殺の二連撃、ほぼ同時に放たれた究極の斬撃に銀の福音は反応することができなかった。

十字の傷が銀の福音に刻まれ、動きが止まった。

ゼロも今までの戦闘で積み上げられた疲労感からピクリとも動かないで止まってる。

「任務……完了」

消えそうになる意識の中、ゼロは小さく呟いた。

## 銀の福音6

意識が消えかかり、I Sのシールドエネルギーが尽きる。

身に纏っていた堅牢な鎧は消え去り、重力に従って落ちていくのみである。

「ゼロー！」

自由落下を始める直前、駆けつけたオータムがゼロを抱きかかえた。

「悪い、オータム。無理しすぎたみたいだ。体ちつとも動かない」

「わかっている、お前は一人でよくやったよ。でもな、これからはあたし達を頼れ。虚しくなっちゃうだろう」

「ああ、出来るだけな………それよりも、福音とパイロットは？」

「それなら大丈夫だ。エムが確保している」

オータムは体を動かしてゼロが見えるようにする。

確かに、銀の福音は黒零と同じようにエネルギーが尽きてしまったのか解除されており、パイロットはエムにお姫様抱っこされて眠っている。

「戻るか？」

「頼む、今にも気を失いそうだ」



ゼロは僅かに残った力を振り絞って、装甲が邪魔なので抱っこをするようにオータムの背中に腕を回した。

そして意識の紐が切れてしまい、気を失うように眠り始めた。

「……こいつがこんな疲れてるなんて珍しい。よつぽどだったんだ………それにしても、役得だな」

「オータム、代わりなさい。私が兄さんを抱っこして帰るから」

「無理言うなよ、眠ってる状態で出来るか！ 戻るぞ」

オータムは我儘を言うエムを無視してゼロを抱っこしたまま帰還して行った。

その際に落ちないように強く抱きしめていたのは言うまでもない。

亡国機業の面々が撤退してから十数分後、誘宵アリサを含めた数人が百春達を連れ戻すためにやって来た。

「この時間じゃあ、旅館に戻っても出来たての美味しいご飯は食べられないわね」  
沈みゆく太陽を見ながらアリサは残念そうに呟いた。

彼女にとって今は晩御飯の方が心配なのかもしれない。

気絶している百春の脈があるのかを確認して生きていることを確かめた。

「早く戻るぞ、私もこんな事はしたくないのでな」

ラウラもどこか気だるそうにA I Cで動きを止めてからスタンガンで気絶させてからオルコツト達を担いでいる。

「ここから旅館まで何キロあると思っっているんだ、こいつらは。教官に迷惑をかけるな」  
「貴方も入学初日から掛けてたじゃない」

「……………それは言い返せない」

アリサは背後に人を載せる事のできるコンテナを呼び出してI Sと連結させる。

そのコンテナの中にボーデヴィツヒは気絶していた、もしくは気絶させた面々をコンテナの中に備え付けてある椅子に座らせ、ベルトを着用させて座席から落ちないように固定する。

全員を固定したのを確認するとアリサはコンテナの入り口を閉じて上空に浮かび上がった。

「帰ったら、彼女たちの分のご飯もいただけるかしら」

「冗談はやめておけ。だが、それも悪くないな」

二人はくだらない言葉を交えながら、長い長い帰り道を飛んで行った。

「ハハハハ」

銀の福音のパイロット、ナターシャ・ファイルスは豪華絢爛なホテルの一室のキングサイズのベッドの上で目を覚ました。

「えっと、確か、実験の途中で銀の福音が暴走して……………そうだ、あの子は!」

ナターシャは周囲を見回して自分の愛機である銀の福音の待機形態を探すが近くには置いてはいないようだ。

そもそも自分が何故この場所にいるのか全くわかっていない。部屋の中には他に誰もおらず、状況を説明する人がいないので状況を飲み込めない。

「……………音? シャワールの音」

ナターシャは部屋にある一つの扉の奥から聞こえてくるシャワールの音に気づいた。シャワールの音が聞こえるところ事は人がいると言う事だ。

音が止まった。浴室の扉を開く音が続いた。脱衣場で体を拭き、その人物は現れた。「なんだ、起きてたのか。体は痛むか?」

その人物は仮面をつけていた。

しかし体格から仮面の人物が男である事はナターシャにはわかった。

百八十を超える背丈に、天性のモノと鍛え抜かれて作り上げられたモノが混じり合った、色気を醸し出す完璧な筋肉。丁寧に手入れされているのがわかる美しい黒い髪。

上半身に衣服は一切きておらず、ズボンだけを履いている。初対面だということにここまで羞恥心を持たれていないのはナターシャの女としてのプライドが傷つきかけた。

その仮面の発言に、思わずナターシャは自分に掛かっていた布団を持ち上げて下を確認した。

「寝てる女を襲う趣味はねえよ、襲われた事はあるがよ」

仮面に覆われていてもわかる。彼は遠い目をしながらつぶやいた。

彼に何が起きたのか、ナターシャはそれ以上聞かなかつた。

「……貴方達は何者?」

「簡単な質問をするんだな。もう少し深く切り込んだ発言をすと思うたが、まあいい」  
仮面の男は備え付けのソファーにドカリと座った。一向に上着を着る様子はなさそうだ。

「我々は亡国機業、わかるだろ?」

「ろ?」

「ええ、聞いた事があるわ。世界の裏から世界を導くなんて言ってる組織。傭兵団のよ

うなもの……あつてるかしら」

ナターシヤはアメリカのIS乗りの中でも上位の実力を持ち、アメリカ軍の中でも其れなりの地位を持つている。

そんなナターシヤのような高い地位でもなければ亡国機業についてはよく知らない。

まあ、何処かのゴシップ雑誌や都市伝説雑誌では取り上げられる事もあるがそんなものは碌な調査も無く適当に噂だけで書かれたものである。

ナターシヤの言葉を聞いて仮面は態勢を改めた。組んでいた脚を元に戻して、背もたれから離れ、両肘を太腿に載せて指と指を絡め合わせた。

「ええ、大体あつていますね。今回の貴方の救出依頼はアメリカ軍の上層部直々の依頼でしたので、我々は貴方の救出を行った。というところでしょうか、俺から説明できる範囲では」

粗暴な口ぶりから丁寧な口調に変わる。

「上層部？」

「ええ、上層部です。明日、貴方を引き渡すことになっています」

上層部というのがアメリカのどの地位にいる人物なのかナターシヤは気になったがそれ以上は聞かなかつた。

「幾つか質問をしてもいいかしら？」

「どうぞ」

「私はどれくらい寝ていたの？」

「そうですね、暴走を開始した時刻から数えて三日程でしょうか」

「貴方は何者？」

「そうですね、私の名前はゼロ」

「ゼロ……貴方が助けてくれたの？」

「何故？私は男ですよ、ISにも乗れない私がどうして最新鋭のISにのる貴方を助けることができるのでしょうか。助けたのは別の人ですよ」

「そうよね、そう……よね」

ナターシャは自分が何故このような事を聞いたのかわからなかった。

自分は最新鋭のIS、銀の福音に乗っていて、そのISが暴走してしまった。故に気を失い、目覚めたらこの場にいた。

「そうだ、あの子は。銀の福音は何処にあるの!？」

ナターシャはここに至るまでの記憶を遡っている内に自分が銀の福音の待機形態を身につけていないことに気がついた。

「落ち着いてください、貴方のISは無事です。しかし、銀の福音のコアは大変なことになると思います」

「大変なこと？それって」

「コアが覚醒しました」

「コアが……覚醒？」

聞いたことのない言葉だ。コアが覚醒したとは一体どういうことなのだろうかから全く想像がつかない。

「簡単に言えば、コアがもう一つ先の段階に到達したということですが、まあそこは専門家に——」

「銀の福音の解析と調整終わったよー!!」

ゼロの話の途中で勢いよく扉を開け、大声で話し出した女性。彼女の顔を見てナターシャは息を呑んだ。

奇抜な服装と紫がかつた髪、そして何よりもその顔をよく覚えていた。

そして部屋に入って来た女性はナターシャが起きてこちらを見ているのに気づいて動きが止まった。

「あ、どうも」

ぎこちなく、どこかオドオドとした挨拶だった。

無理もない、彼女は普段他人と話すことがあまりないため知り合い以外は対人恐怖症になりかけてるのだ。

「紹介します。ISに関してはこの人の右に出る者はいない、ISの生みの親、篠ノ之東博士です」

ゼロは立ち上がって篠ノ之東の隣に立った。

「篠ノ之東です、始めましてナターシャ・ファイルスさん」

「彼女の事はご存知ですか？」

「知ってるも何も、ISに乗る人間で彼女について知らない人がいるわけないわよ。それにしても聞いてた人物とは違うような」

ナターシャの鋭い視線が束の体をビクリと震わせた。

ナターシャが聞いていた篠ノ之東の性格はもつと明るく、頭のネジが何本も外れてしまい、代わりに甘いお菓子でもつまっているのではないのかと言われる程。

しかし実際にこうして直接あってみると奇抜な衣装は着てはいるが、性格は奇抜どころか借りてきた猫のようおとなしい。

今もどうにかしてナターシャの視線から外れようとゼロの背中に隠れようとしているが、ゼロがそれを全力で阻んでいる。

「大丈夫ですよ。今は人見知りして凄く大人しいですが、悪い人でないとわかったら、物凄くテンション高く話しかけてきますから。本当、変わりように驚きますよ」

「そ、そうなの？」



ナターシャはこれからどれ程距離が近くなるのか全くわからなかった。

「そうです。では篠ノ之博士、説明をお願いします」

「え？ やつてくれないの、いつ——」

「篠ノ之博士、頑張りましよ。同年代の人と話す経験を積みましよう」

有無を言わさなかった。

「……はい」

篠ノ之東はそれ以上は何も言い返さず、勇気を振り絞ってベッドに座るナターシャに近づいた。

それはもう、ユツクリと間合いを詰めて行った。

そしてベッドの近くに立つと近くの椅子を引き寄せて座りナターシャと目を合わせた。

「よろしくお願いします」

「よろしく願います」

東がお辞儀をして、それにつられるようにナターシャもお辞儀をした。

「先ずはこれをお返しします」

そう言つて篠ノ之東は銀のネックレスをナターシャに手渡した。

それはナターシャも良く知る銀の福音の待機形態だった。

「ああ、ありがとうございます。良かったあ」

ナターシャは待機形態を大事そうに両手で持つと自分の頬にそつと寄せた。

東はその様子を見てニツコリと聖母のように優しく微笑んだ。

「その子は貴方を本当に心から信頼しています。私も貴方のような人に使ってもらえて嬉しいです」

「い、いえ。篠ノ之博士にそんなことを言ってもらえるなんて光栄です」

ゼロは会話をする二人の様子を見て一安心していた。

「それじゃあ、覚醒したコアについて説明しますね——」

「以上かな」

あれから篠ノ之東の話は数分かけて終わった。

話してある途中でナターシャが程よく相槌を打ってくれたため、東は気持ち良く話す

ことが出来た。

そのおかげか束の話し方も最初の頃に比べると少しフランクになっており、距離もどこか縮まったように見える。

「えっと、つまりこのコアは自分が認めた人だけを乗せるようになって、それが私。銀の福音も私とコアに合わせて進化させた。簡単に言うところかしたら」

「ええ、あっています。私も久しぶりに会えて嬉しいです、コアにこんなにも信頼される人を」

「篠ノ之博士にそんなに言ってもらえるなんて私も光栄です」

ナターシャも篠ノ之束に褒めてもらえるなんて思ってもいなかったらし、朗らかに笑った。

「これからもその子の事、よろしくお願いします」

束は先ほどよりも深くお辞儀をして頼み込んだ。

「いえ、私もこの子の事を大切にします」

待機形態をギュツと強く握りしめて、ナターシャは誓った。

『これからもよろしく』

優しい声がナターシャの頭に響いた。

ナターシャは何処からか聞こえたその声に驚いた。篠ノ之束もその声が聞こえてい

るのか、ニコリと微笑んだ。

「それがコアの声です。覚醒したコアに認められた人や元から素質のある人には声が聞こえます」

「凄い、これが噂には聞いていたISの意思の声」

ナターシャは感動した。

これが、ISの声なのか。なんと綺麗で優しい頭ざわりなのだろうか、意思と意思が繋がっているのがこんなにも嬉しいなんて思ってもいなかった。

「もし何かあればそのコアから個人的に私に連絡をつけてください。可能な事はなんでもします」

「わかりました、ありがとうございます」

「それで、今回の黒零の進化の事で何かわかった事はありますか？」

もう一度ナターシャが眠りについた後、ゼロと束は二人だけで会話をしていた。

ここは亡国機業の傘下の会社が経営する最高級ホテルのスイートルーム。ゼロもようやく上着を羽織った。

互いにテーブルを挟んでソファアに座っている。

「そうだねえ。あれは第二形態移行じゃなくて、それを行うための準備段階であり、そして」

東は一旦間を取って、ゼロ——夏達の反応を伺った。

「いっくんたち二人の力が予想よりも大きくなりすぎたから、耐えられるように改善した」  
「成る程」

「もう少しで、君たちは進化する」

## 学園祭準備編

「ふっ！」

一学期が終わり、夏休みも終わり、二学期が始まり後一月で学園祭が始まろうとしていた日。

IS学園の武道場で、世界で唯一の男性IS操縦者となつてゐる織斑百春はIS学園の生徒会長でロシアの国家代表である更識楯無に特訓をつけて貰つてゐる。

この特訓は学年別のタッグマッチが終わった次の日から始まつたものだ。

ゼロに一方的な負け方をして自分の弱さを再度認識した百春が、学園最強の人物である楯無を頼り、楯無もゼロの存在の危険さを感じていた。

両者の考えが合致して、特訓をつけてもらえるようになった。

ほぼ毎日、ISの基本的な動きから格闘技まで幅広く戦闘の技術を、倒すための技術を教えてもらつてゐる。

百春は楯無に鍛えてもらう前は同級生の代表候補生たちに鍛えてもらつていたので、正直なことを言うと彼女たちは楯無に比べて弱い。

代表候補生と国家代表の間には明確な実力差が存在していた。これが代表候補生の中でも国家代表に最も近いものならば実力の差はあまりないのだろう。しかし、彼女たちは代表候補生でも成り立てなのだ、国家代表との実力差は大きい。

楯無に鍛えられてからの数ヶ月間でメキメキと実力をあげて行った。

特に臨海学校が終わってからの一ヶ月間は百春もより一層真剣に特訓に励んでいた。その様子は楯無から見ても異常だった。

何故かと楯無が問いかけたら、「負けたくない人がいる。皆を守るために僕は強くなる」と答えた。

その負けたくない人が誰なのかは楯無でも想像がついた。

楯無がクラス代表戦の裏で闘ったゼロというIS操縦者に負けたくないのだろう。

報告によれば彼らは臨海学校でゼロという人物に一方的にやられている。

「はい、そうまで」

楯無の槍のように鋭い指先が百春の喉に突きつけられる。

百春は突きつけられる指を見ながら、肩で息をしながら両手を挙げて降参の意を示した。

「だいぶ強くなったわね、代表候補生の中でも上位にいるくらいかしら」

楯無から見ても百春の成長速度は速かった。つい数ヶ月前まではISに一度も乗っ

たことのない初心者だったにもかかわらず、今は代表候補生の中でも上位に食い込めるほどの実力を手に入れた。

無論、それによつて彼と仲良くしている代表候補生達よりも強くなつてしまった。

「お世辞は辞めてください。いくら強くなつても、どれだけ頭の中でシミュレーションしてもあいつに勝つことができない」

百春は悔しそうに粒やいた。

その悔しさは自分以上のもなのだと楯無は思った。

「そんなに落ち込まない、今日の特訓はお終いよ」

織斑百春との特訓を終えた楯無は生徒会室へと戻る途中である人物と出会つた。

服装から一年生であることがわかり、美しい藍色の髪が特徴的な少女。

彼女の名前は誘宵アリサ、I S 学園の生徒の中で確実に三本の指に入る実力者だ。

楯無は彼女と話をしたのは入学式の一度きりだが、もう少し話して見たいと思つてい



た。

彼女には聞きたいことがあるのだが、何故か毎回彼女と楯無はすれ違いになってしま  
う。

「久しぶりね、誘宵さん」

警戒させないように気軽に明るく話しかけた。

「お久しぶりです。確か入学式以来でしたね」

アリサも表面上は友好的な態度を取ってあるが、その本心は楯無でも知ることはでき  
ない。

「幾つか聞きたいことがあるの、時間はあるかしら」

「……少しだけなら、大丈夫ですよ」

僅かだが楯無を見るアリサの視線が鋭くなった。

「貴方は、タッグマッチの時と臨海学校で遭遇した黒いＩＳについて何か知っているか  
しら？」

それは楯無がアリサに対して何度も尋ねようとしたことだ。

楯無はあのタッグマッチでの黒いＩＳの動きを何度か映像で確認し直したが、アリサ  
と戦う時だけ他の人間と戦うのと比べて僅かに手を抜いているようだった。

それどころか一度も攻撃をしていなかった。

「ええ、知っていますよ」

楯無はその言葉に驚いた。知っていても知らないと言われると思っていたのだが、まさか正直に知っていると言われるとは思ってもしなかった。

「更識会長は最初に作り上げたコアが何かご存知ですか？」

「え？」

質問していたのに、まさか質問されるとは思ってなかった。

「それは、確か最初のIS——白騎士に使われたNo. 001のコアでしょ？」

それを聞いてニヒルにアリサは笑った。

「残念ながら、違います。正しくはNo. 000のコア、それこそが真の始まりのコアです」

「No. 000?」

そんな番号のコア、楯無は聞いたことがなかった。

何年間もISという存在に関わってきた楯無だが、No. 000のコアなんて存在があるなんて知らなかった。

そもそもそのようなコアの存在なんて世界中のISを研究する人間全員が知らないだろう。

生み出した束を除いて。

しかしならば気になることがある。なぜ彼女がそのようなコアについて知っているのかと。

楯無はそのことについて尋ねようとしたが、寸前で口を止めた。違う。

彼女……いや、彼女たちならその存在を知っていてもおかしくはない。

誘宵グループは白騎士事件が起こるよりも前に篠ノ之束と接触していた。それならば、篠ノ之束からその存在について知らされていてもおかしくはない。

「そのコアの存在は織斑先生は知っているのかしら？」

「知らないでしょう。あのコアについて知っているのは、私や父さんを除けば、束さんやあのコアの持ち主、そして持ち主の所属する組織の人だけでしょうね」

サリリとアリサは言つてのけた。

「待つて。今までの話の流れから察すると、No. 000のコアはあの黒いISに使われているの？」

唐突に始まった質問と思つたが、先ほどのアリサの言葉を聞いて楯無は全てを悟つた。

あの黒いISにはNo. 000のコアが使用されている。

ISの性能はコアに依存する部分が存在する。もしあれが最初に手がけられたモノ

なのだとしたら、あの狂気的な強さも理由がつく。

「ええ、そうですね。あのコアは私と同じ始まりの五つのコアの一つ。最強のI Sコア。あのパイロットはコアとの適合性が余程高いみたいですね」

「何故篠ノ之博士はそんな大切なコアを……彼にあげたのかしら」

「知りませんよ、多分あのコアに認められたからじゃないですか？あのコアたちは自分が認めた人間しか乗せませんから。逆を言えば認めた人ならば誰でも乗せますよ、それが男性でもね」

「貴方はあの乗り手が男性であると知ってるの？」

少しだけボロが出た。

「ええ、コアに教えてもらいましたから」

「コアに？どういふことかしら？」

「そのままの意味ですよ。それ以外の意味はない……それでは私はこれで」

アリサは踵を返して何処かに立ち去った。楯無はそれを止めようとしたが、アリサの背から放たれる力のようなものに気圧されてできなかつた。

「いい情報が手に入った。これで正体に近づける」

## 第79話

I S 学園学園祭は例年以上の盛り上がりを見せていた。

理由は簡単だ。世界で初めてI Sを動かした男性、織斑百春がいるからである。

ではその彼は今どうしているのかというと。

「織斑くん！次のお客様の接客に行つて！」

「任せろ！」

クラスで行われている『執事メイド喫茶』のホール作業に追われていた。

かれこれ数時間、ほとんど休みなく注文に応えているため疲労困憊。

しかも相手をするのは生徒だけではなく、外部からやつてきた部外者の相手もしなければいけず、その中には自社の商品を宣伝しようとする商社マンもいる。

あと少しで休憩が貰えるのだが、この忙しさと百春に対する注文が大量に発生しているため休めるか不安なのである。

「私、巻紙礼子と申します。もしよろしければ、我が社の商品を使いませんか？」

「い、いえ。そういうのは受け取れないことになってるんですよ」

「そう言わずに、マニュアルだけでもどうぞ」

あと少いで休憩に入れるというところで百春は運悪く、ISの装備を販売する会社のセールスウーマンに捕まっていた。

百春が商品のカタログをいらないと断つても、巻紙と名乗った女性は諦めずにしつこ過ぎる程に勧めている。

誰か助け舟を出してくれ、百春がそう思ったその時だ。

「お客様、只今大変混んでおります。他のお客様の迷惑になりますので、強引な勧誘はお辞めください」

メイド服に身を包んだ、シヨートカットと二つのヘアピンが特徴的な鷹月静寐が助け舟を出してくれた。

「ありがとう、鷹月さん」

「大丈夫よ」

百春は鷹月に軽く耳打ちをしてお礼を言った。

「ですが——」

「そうだね、迷惑になってるよ」

一人の男性が百春たちに近づいた。

百八センチメートルを超える背丈に高級なスーツを着けていてもわかる程のラガー

マンのような鍛え抜かれた筋肉。

顔つきはかなり厳つく、それでも男らしい顔だ。

年は二十代半ばだろうか、巻紙と名乗った女性とほぼ同じくらい。

(この人、鷹月さんがさつきまで接客していた人だ)

「勧誘するなら場所を選んだらどうか。周りの迷惑になつてゐることを考えよう。君は見たところ今年入社したばかりの新人さんのように見えるが、焦つても意味がないということだけ教えておこう」

男は口で巻紙を責め立てると、百春が持ちらつていた巻紙の名刺を手取る。

「それに、『みつるぎ』なんていう名前の企業、私は一度も聞いたことがないのだが？」

「それは貴方の見聞が狭いだけでは？」

「違うねえ、私が聞いたことがないんだ。まるで存在しないかのように」

その言葉に巻紙は肩をビクリと反応させた。

「そういうことだ。早く帰るといい、君達は」

語尾の言葉を少し強調させながらスーツの男は巻紙を優しく説得した。

「……くつ、では失礼しました」

悔しそうな表情をしながら、巻紙はスーツの男を睨みつけながら教室の外に出た行つた。

「あの、ありがとうございます」

百春はスーツの男性にお礼を言った。

「いやあ、気にしなくていいよ。ああいう輩には気をつけた方が良い。私も忙しいからね、失礼するよ……そうだ。これは君に、チップだ。取っておくと良い」

そう言つて男性は財布から幾らかのお札を抜き取るとそれを鷹月に渡した。

鷹月はその金額に驚いた。

「そんな、こんなにももらえません。というか、もらつちやいけません」

「日本じゃ珍しいけど、チップは素直に受け取るべきさ。それでは可憐な少女と未熟な戦士くん」

「……え？」

百春はその言葉に驚いた。スーツの男を止めようとしたが、男は百春を無視するかのようになつたと教室の外に出て行った。

「これ凄いよ。十万円以上はある」

鷹月はチップを数え終わり、そしてその金額に驚愕していた。



（問題はなさそうね、外部からの人間が入ってくる以上警戒しないと）

生徒会長更識楯無は校内の見回りを行っていた。

今日この日、I S学園は大量の学外からの人がやってくる。それゆえに、生徒会や先生方は異常がないかの警備に追われていた。

「あの一、すいません。場所を尋ねたいのですが」

手にパンフレットをもった、ラガーマンのような体格のスーツ姿の男が道を尋ねてきた。

「はい、どこででしょうか？」

警備の他にもこのように道を尋ねられた場合は丁寧に道案内をしたりしている。

「ここなんですが」

スーツ姿の男は手に持っていた学園祭のパンフレットに乗せられてある地図を楯無に肩と肩が触れ合うように見せてきた。

「……………俺以外にもネズミが紛れている。気をつけろ、そいつらは俺たちの仲間ではない」

突然スーツ姿の男の声色が変わり、楯無はその変わった声に聞き覚えがあった。だが、思い出せない。

「織斑百春から目を離すな」

男はパンフレットを手放して、人ごみに混じるかのように消えて行った。

「あれは、そうだ………ゼロ。マズイ」

楯無は思い出した。あのスーツの男は姿が変わってはいるが間違いはない、ゼロだと。

「おいティファ、そっちはどうだ」

スーツ姿の別人の男に変装したゼロは同じように変装してこの学園の中に変装してネオの人間を搜索しているはずのティファに通信を利用して声をかけた。

「そうねえ、流石は世界各国から人の集まるIS学園。食堂のレベルも種類も超一流ね」  
「待て、お前は何をしている」

「なについて、お昼休憩。そういう時間でしょ。ゼロもこつちに来てさ、一緒に食べようよ」

呑気に明るい声でティファニアはゼロを誘った。

「ああ、そういえばもうそんな時間か。休憩を取る時間、確保してたな。忘れてた。俺は休憩は取らないから、お前だけとつてろ」

ゼロはそれを伝えると連絡を切った。

「はあ、やっぱり無理か。一夏は少し張り切りすぎてるのよ、特に今回は。気を張りすぎて無理してる。何とかしないと」

ティファニアはここ最近無理して働いているゼロを心配した。

「これが終わったら気晴らしのためにデートに誘いましょう。そうしましょうしたら、そうしましょう。安らぎは必要だから♪」

少し楽しげにリズムに乗せて歌うように独り言を周りに聞かれないように喋る。

「ご飯を食べ進める。」

「この席、空いていますか?」

誰かが声をかけて来た。どうやらティファニアの前の席が空いているのか知りたいらしい。

「空いてますよー」

本当は一夏が来た時のために開けていたのだが、もう来ないとなると開けておく必要はない。

「どなたか、待っているんですか?」

「ええ、そうなのよ。もう来ないけど」

ティファニアは声をかけて来た女性と顔を合わせることなく、眈々と答えた。

「それって……………。」夏くん?」

「ッ!？」

突然出た一夏の名前に思わず目の前の女性を、ティファニアを見た。

「久しぶりね、ティファちゃん」

その女性はティファニアもよく知る女性、誘宵アリサだった。

「ど、どうして?」

ティファニアはどうしてアリサが自分だと気づいたのかわからなかった。ティファニアも一夏と同じように顔の上に別人の顔のマスクをつけており、顔からは判断することができない。

それなのに、何故。

「ふふ、どうしてかしら?」

アリサは左手の薬指につけられてあるISの待機形態を見せびらかした。

そしてそれだけでティファニアは悟った。彼女は自分が身につけてあるNo. 004のコアの反応で判断したのだ。

「一夏くんは来てないの?」

「……………言えない。任務だもん」

「そう、来てるのね」

アリスは胸元につけてある、一夏が誕生日に貰った物とお揃いのネックレスを愛おしそうに撫でた。

「さあ、ティファアちゃん。お話しましょ」

## 第80話

銃口がロツカールームで雄たけびをあげた。銃口から放たれた凶弾はスーツ姿の女性の左肩を容易く砕いた。

女性は完全に不意をつかれてしまった。

目の前にいる獲物に集中しすぎていた、あと一手で詰みという段階まできたはずなのに、第三者によって盤をひっくりかえされてしまった。

スーツ姿の女性、巻紙礼子に狙われていた織斑百春は現状を理解できずに戸惑っていた。

生徒会長からシンデレラの劇の主役に抜擢され、他の生徒から追い回されるハメになり、そこを巻紙に助けってもらったと思ったら、その女性は本性を表して銃弾を肩にうちこまれた。

「てめえ！よくもー！」

巻紙はISを展開、そのISの背中からは蜘蛛のような八本の足が生えていた。

「なんだ、まだ動けるのか。殺さないで捕縛するようにするつもりだったが、四肢を落と

すか。背中に腕も大量にあるしなあ」

暗いロツカールームの奥から一人の男が姿を表した。

「あの時のスーツの人」

その人物は百春がクラスで巻紙に絡まれている時に助けてくれた男性だ。しかし今はその優しそうな見た目には相応しくない。ISの装甲を左手に纏わせ、左手にはリボルバー式の拳銃を持っている。

「よくもやりやがったなあ!」

巻紙がスーツの男に突進を仕掛ける。愚直でまっすぐな簡単に躲すことのできる突進だった。

「タランチュラ……だっけか? オータムのアラクネの姉妹機のはずだ」

スーツの男は突進を躲して、すかさずISの背中にリボルバーに詰められてある弾丸を撃ち出した。

弾丸はISに直撃はしたが、全て装甲に弾かれた。

「立ち上がれるか?」

「何のつもりだよ、ゼロ」

「……俺は貴様に名前を教えたつもりはないんだがな」

「楯無さんから聞いたんだよ。僕をどうするつもりだ」

「どうもしない、こちらは君の持つものが敵に渡るのを邪魔するだけだからな」

ゼロは黒零を展開、それに合わせて百春も白式を展開した。

「少なくとも、今回はお前たちの敵ではない」

「信じれるか」

「余所見するなああああ!!」

ロツカーに突っ込んで行った巻紙が方向を変えて二人に襲いかかった。

背中の蜘蛛の足と自分の手を合わせた高速の連携攻撃。

「なんて数だ。対処は——」

「落ち着け、よくみる。俺が肩を砕いた左腕はまともに動けてない。それに合わせて左

側の蜘蛛の足の動きは鈍い。だからなあ」

ゼロは黒零を直進させて巻紙に迫る。

「貰ったああ!」

タランチュラの背中の足がゼロに向かってくる。

「やっぱりか」

ゼロは肘と足につけられたスラストーを利用して巻紙の左側に回り込み、砕いた左肩に何度も容赦なく全力の拳を叩き込んだ。

巻紙はゼロと正面から戦おうとするが、ゼロのISの方が機動力が高いため一方的に



砕かれた左肩を殴られるだけである。

「簡単に」

ゼロはタランチュラの左側の背中の中の足を一本掴むと、残り全ての左側の足を巻き込むように飛び十字をしかけてひきちぎった。

「凄い」

百春はその一連の動きに感嘆していた。一方的に相手を封殺している強さに判断力、そして何よりも技能が違い過ぎる。

蜘蛛の足が千切れてしまつては後は一方的だった。距離を離すことができず、常に左側に回り込まれて碌に動かない左肩に必殺の一撃とも言えるような強力な拳が叩き込まれている。

「攻撃腕起動」

黒零の右腕がエネルギーに包まれて発光を始める。

アレはヤバイ、巻紙は本能でそれを感じ取った。逃げなければ、死んでしまう。だが逃げるよりも早くゼロの右手が巻紙の左肩をつかんだ。

「潰れろ」

ぐしゃりと空き缶を潰すような音と共に巻紙は自分の左肩が潰された痛みから悲鳴を撒き散らした。

「さあ、他の奴らはどこにいる。教えてもらおうか」

「そんなこと、言えるか」

巻紙はたった数分で抵抗するだけの体力も失われてしまった。残されたのは死を待つ時間だけだ。

「そうだね、言えるわけないよね」

ロツカールームの扉がぶち破られ、一人の少女が入ってきた。

年は百春やゼロと同じくらい。背丈は百春よりも小さく160くらいだ。

その特徴はなんといっても『白』、病的なまでの白い肌に白い髪、唯一色がある部分と  
言えば瞳の琥珀色だけだろう。

「……ガーベラ様」

「何？」

ゼロは巻紙を漏らしたガーベラという言葉に反応した。

ガーベラとは何度も何度も戦ったことがあり、一度も決着がついたことはなく、どちらも  
も今も生き残っている。

こうして生身の彼女を見るのは今日が始めてだ。

「久しぶりねえ、ゼロ。会いたかったわ」

狂気の潜んだ愛おしそうな声をゼロに向けた。

「こつちは特に会いたくもないんだが」

「なに、つれないわね。私はね、貴方が愛おしいのよ。貴方みたいに強い人間を屈服させて、私の物にしたいのよ。行くわよ、『白薔薇』ホワイト・ローズ」

ガーベラの言葉に合わせて、彼女のＩＳが起動した。

その機体は全身装甲。

黒い基盤の上に白い薔薇の花びらを幾重にも重ね合わせたような鎧、名前に相応しくまさに白薔薇の騎士。

寧ろスカートのように重なり合った装甲から姫騎士と言った方が良いのか。

「おい」

ゼロは百春に声をかけた。

「自分の身は自分で守れよ。俺も厄介な相手と戦うからな」

ゼロは徒手のままガーベラに向かって構える。

「機械の奥にあるその殺意のある瞳、私は好きよ」

ガーベラは自分の右手に薔薇の花弁で装飾された白いレイピアを呼び出した。

「……………」

「……………」

両者の間で殺意と殺意がぶつかり合う。

いざ開戦というところで、二人の眼前を水の弾丸が通り過ぎた。

「そこまでよ、全員止まりなさい」

ぶち破られた扉から御自慢のI Sを身に纏った更識楯無がロッカールームに入ってきた。

手には槍を構え、その槍にはナノマシンで操っている水が巻きついていてる。

「おお、アホンだら。てめえ織斑百春から目を離すなどといったのに何誘拐未遂されてんだよ。バカか、馬鹿だ」

「……侵入者に言われるのは癪だけど、言い返す言葉が存在しない」

「私の楽しい時間を邪魔しないでよ!」

地面を舐めるような不気味な動きでガーベラが楯無に迫った。

ゼロもその背中を追いかける。

レイピアと槍がぶつかる。レイピアの素早い突きを躲しながら反撃の一手を探る楯無、そしてそれを援護するようにガーベラを背後からゼロが蹴り飛ばした。

「楯無さん、何処か戦える場所はありませんか!ここは狭すぎます」

百春が大声で楯無に問いかける。

「それならこのロッカールームの先はI S用のアリーナになってるわ。他の生徒や来客した人は防音性の高い大講堂に集まって貰ってるから、心配はないわ」

百春と楯無の会話を聞いていたゼロはガーベラをこの部屋から出すために突撃した。タツクルをぶちかましてガーベラをロッカーを吹き飛ばしながら部屋の外に連れ出した。

「この隙に……」

巻紙も残った体力でアリーナに飛んで行った。

「追いかけてみましょう！」

「ええ」

三人に連れ、百春と楯無もロッカールームから飛び出した。

「それで、ティファちゃん。今まで何があつたの？」

アリサとティファニアの二人は食度から場所を移して今は屋上にいる。

ティファニアは金網状の柵に体を預け、アリサは近くのベンチに座ってティファニアからの話を待っている。

「どうって、言われても。私はパパ達が殺されて、その後誘拐されて、一夏に助けられて、今の組織にいる事になつたの」

「それじゃあ、ティファアちゃんは何で一夏くんがその組織に入ったのか知らないのね？」  
「詳しくは知らないけど、簡単になら知ってる。どうにも誘拐された後、変な施設にずっといたらしい。私も似たような感じ」

「そう……そうなんだ」

ティファニアからの話を聞いて、アリサは顎に手を添えて考え始めた。

「……他には何か聞かないの？」

恐る恐ると言った様子でティファニアはアリサに尋ねた。

「例えば、ティファアちゃんが一夏くんの寝込みを襲った話とか？」

ドキリとした。

「なんでその話を知ってるの!？」

「この前、うっかり話してたでしょ？」

「あ」

そういえばそうだった。ティファニアにはあのタッグマッチの際にうっかりアリサに話していた事を覚えていた。

「怒ってるの？」

「いいえ、一夏くんはそういう部分があるって理解しているから」

「そういう部分？」

アリサの発言にティファニアは変な引つ掛かりを感じた。

「あら、気づいてないの?」

アリサは意外だと言わんばかりの態度だ。

「一夏くんは誰かから向けられる感情に飢えている。幼い頃に両親を無くして、私と会うまでは殆ど一人ぼっちみたいなものだったでしょ、誰からも理解されないで。だから感情に飢えているのよ」

「……」

「だから優しい感情を向ける人間を大切にすると、ソレを傷つけるものは容赦ない。どうでもいい人は、もしかしたら顔もわからないかもね。それと多分だけど、他にもいるでしょ?」

何が、どういう事を、アリサは詳しく聞かなかつたがティファニアは何を言いたいのかを理解した。

何も言わずにティファニアはうんと頷いた。

「……そう、やっぱりね」

少しだけアリサが微笑んだ。

「それでなんだけどき——」

二人はこの学園の何処かで、N o . 0 0 0 が戦っている事に気づいた。二人や一夏、

そして束にはわかる第六感のような、ISと会話するための感覚が教えてくれる。

(一夏が戦っている。私も持ち場につかないと、けど)

持ち場につくためにはアリサを振り切らなければならぬが、それができそうではない。  
い。

しかし。

「誘宵、ここにいたか！」

校内へ続く扉が勢い良く開かれ、ボーデヴィツヒがアリサを呼んだ。

アリサはボーデヴィツヒの方を一瞬だけ見たが、ティファニアの事を気に向け直ぐに  
振り返った。

だがそこには始めからだれもいなかったかのようには柵だけしかなかった。

「誰かと話していたのか？」

近づいてきたボーデヴィツヒが尋ねた。

「……いいえ、誰も。それよりも——」

アリサはボーデヴィツヒを見ないで、柵越しに一夏が戦っているであろうアリーナを  
見た。

するとそこには大怪我をおいながら必死に逃げようとしている蜘蛛のようなISが  
いた。



「侵入者みーつけた」

「あの総帥、警備ぬるくしすぎだろ。いくらネオをおびき寄せて殺す作戦だからといって二人以上はないだろ！」

「なにをゴチャゴチャ！」

アリーナでガーベラの相手をしながら、ゼロは自分の上司であり、祖父でもある轡木十蔵を罵った。

「うるせえ、こっちの話だ」

ドリルのように回転する抉る事に特化した白薔薇のレイピアを躲しながら、ゼロは反撃の機会を伺っている。

「……お前たちが、銀の福音を暴走させたのだから？」

「ええ、とは言っても私の部隊じゃないけどね」

「ムカつきやがる」

1. 5形態になる事で手に入れた両肩のバインダーにつけられてある取手を掴むと、バインダーが少し伸びた。

バインダーの先につけられてある砲門をガーベラは見た。そしてその直後、両肩のバ

インダーから何十発も撃ち出されるエネルギーの塊の弾丸。

しかしガーベラは容易くそれらを躲していく。

「無意味よ、そんな武器は貴方に似合わないってわからないの!？」

ガーベラが弾丸の隙間をぬってゼロとの距離を詰めた。

ゼロは素早く取ってから手を離すと右手に素早く零雪を呼び出して、レイピアの一突きを受け止めた。

ドリル状のレイピアは掘削音と共に零雪を砕きにかかる。

「チッ!」

ゼロはガーベラの腹に蹴りをいれて一旦間合いを取り直した。

(予想以上に性能が高いな。少し厄介だ……使うか? いや、まだだ)

バインダーの長さが元に戻る。

「ヤッハアアアア!!」

背後から叫び声と共にセンサーにエネルギー反応。ゼロは咄嗟にその場所から離れて、迫って来たエネルギーの砲撃を躲した。

「テメエ、ガーベラ! しっかりと引きつけとけや!」

「黙りなさい、スカーラ。当てない貴方が悪いの!」

ゼロはエネルギーが放たれた方に目をやるとそこには右手だけが異様に発達してい

る I S がいた。

そしてゼロはスカーラという名前には聞き覚えがあった。確かシルヴィアの殺されたあの戦いで、零落極夜で右腕を切り落としたが、殺し損ねたやつだ。

「なんだ、生き延びていたのか。片腕を I S に頼ってるようだな」

「ああ、そうだよ！てめえに右腕を切り落とされたんだよ！でもなあ！そのおかげでアタシはこの腕を手に入れた！最強の腕をなあ！」

薬でもやっているのかと言いたくなるほど、気分が高揚しているようだ。

御自慢の右腕とやらをブンブンと振り回している。

「行くよお！『ガリミューラ』！」

自分の愛機の名前を叫びながら、スカーラが迫ってくる。

更にそれだけではなく、上空から何機ものネオの I S が降って来た。

（俺たちが使った手段か）

「……防衛能力をあげろや。警備はザルかよ、便所の鍵の方が頑丈な気がしてきた。総帥に報告しなければな」

着地と同時に迫ってくるネオの兵士たち。

「させない！」

水の弾丸が兵士たちに直撃した。

更識楯無と百春がアリーナに入ってきた。

「貴方たちが誰か知らないけど、テロリストの争いにこの学園を巻き込むわけはいかな  
いの」

「そいつらの狙いは白式だ。取られるなよ」

「わかってる！」

百春は力強く雪片二型を構えた。

「ガーベラア！てめえは更識をやれ！こつちが残りの二人を押しさえ込んでやる」

「……………ムカつくけど、薬中になんと言っても無駄ね」

ガーベラは不満げではあるが、スカラーの言葉に従って更識の元に向かった。

「さて、こつちもやるか！」

ヘルメットの奥からでもわかる。彼女は今好戦的な笑みを浮かべているはずだ。

ゼロの周囲を複数のI.S.が取り囲み、一機が百春の元に向かった。

「この数に勝てるかア!？」

挑発的な声だ。明らかに勝利を確信して笑っている。

「……………そうだな、この数は俺一人では辛いな」

「なら降参して頭を地面につけよ！惨めったらしく！」

「だから、俺が相手しよう」

ゼロの身を守るようにエネルギーの球体が現れた。

「起動、『0000』」

黒零の1・5形態によって得られた装甲が動き始める。両肩のバインダー、両足の追加装甲、背中のブースター、ヘルメットの装飾。そして元からあった白銀の髪の毛が取り外される。

空中に舞うそれらの装甲。ブースターを中心にして他の全てのパーツが集まる。

ブースターが胴、腰と脚を作る。脚部の追加装甲は裏返るように反転して膝から下の足をつくる。バインダーは複雑に変形して頭、胸、手を作った。

それらのパーツが空中で合体して人の形を作り上げる。

そして最後に残った髪と頭の装飾がつけられて、ソレは完成した。人型の装備、0000。

コレの操縦はNo.0000の意思『ゼロ』が行う。

翠の瞳が光る。

0000が地面に着地した。

「調子はどうかだ？」

ゼロが問いかけると0000は問題ないと言わんばかりに頷いた。

「こうして肩を並べるのは銀の福音以来か、あの時は一瞬だけだったかな」

「二人になったカラってええええ!!」

スカーラがゼロ達に突撃してくる。

ゼロは右に000は左に動いてその突撃を躲す。

「よけるなああ!」

スカーラは不釣り合いな長さの右腕を鞭のようにゼロに向かって振り回した。

ゼロはその一撃をしゃがんで躲し、潜るように動きながら近づいてスカーラの腹を勢いよく蹴り上げた。

宙を舞うスカーラ、そしてその背後から000が両足での踵落としを決めて地面に引き戻す。

「もうー!」

今度はゼロが追撃のオーバーヘッドキックをしかけてアリーナの端まで吹き飛ばした。

000が落下して両者は背中を合わせる。

「嘘でしょ?」

そんな言葉を呟いたのは隊員の一人だった。自分たちよりも強いスカーラが赤子の手を捻るかのように容易く倒されてしまった。

「無零」

ゼロは両手にエネルギーブレード『無零』を装備した。  
「行くぞ、000」

ゼロの言葉に000の翠の瞳がより強く輝きを放った。

000が動く。ブースターによって超高速で動きだし、一瞬で一人の背後に回った。

「……え？」

蹴り飛ばされ、ゼロのいる場所の近くまで飛ばされる。

「零落極夜」

二本の無零が零落極夜を発動させる。

素早く動いて、一人目を零落極夜で両断した。

そして次々と兵士達は000にゼロの元まで飛ばされて零落極夜の餌食にあう。

一分にも満たず、兵士達は全滅した。

百春と戦っていた兵士も無力化されている。

「助けないと」

「やめておけ」

百春は自分でまだ戦えると判断してガーベラと戦う楯無を助けに行こうとしたが、それをゼロが止めた。

「強くなっているようだが、やめておけ。あそこはお前のいる次元じゃない。大人しく

自分の身だけ守ってろ」

ゼロに忠告され、悔しがる百春。しかし実際に二人の戦いは次元が違った。

「デメエエエエエ!!」

スカーラが叫び声をあげながら、ゼロに迫って来た。

「さあ、持ちな」

零落極夜を解除した無零の一本を000に渡し、000が無零を持つと同時に二体は地面を駆けた。

完璧な連携攻撃がスカーラを攻め立てる。ゼロと000、長年ともに戦ってきた二人の息の合わせ方はシンクロの域に到達している。

000の性能は速度や加速度を除けば並の第三代機。稼働時間は並以下。

黒零の本体もコレを発動している間はシールドエネルギーの半分を000に持っていかれてしまう。

そして何よりこれを発動させてある間はN.O. 000による機体のサポートを得る事ができず、一部は機械のプログラムに任せてはあるが、ゼロが自分で制御しなければならぬ部分が出てくる。

その負荷は半端ではなく、分離して戦えるのは合計で数分もない。

分離した姿は、強力ではあるがそれと同時に最も弱くなっている時間でもある。



故に短時間で終わらせる必要がある。

「腕が足りないならモットダアアアアア!!」

ガリミューラの背中に新たにムカデのような何十の節がある腕が二本生えてきた。先端はクワガタムシのようにハサミになっており、挟んで切り裂く事に特化している。

不気味に波を打ちながら伸びて迫ってくるその腕を二機は簡単に蹴り飛ばした。

「零落極夜」

二機が共に零落極夜を放つ。

蹴り上げた腕を唐竹割で切り裂き、地面に着地すると一瞬で両腕が根元から切り飛ばした。

「終わりだ」

ゼロがとどめの一撃を放とうとした瞬間、ゼロと000の動きが止まった。

「時間かよ」

憎らしげにゼロが呟くと、000は分離変形して元の装甲に戻った。これ以上000を使用するのは自分の肉体に負荷がかかりすぎると判断したからだ。

「腕があああ、痛いのおお!!痛み止め、薬、クスリクスリクスリクスリ!!」

無くした左腕から地面に血を撒き散らしながら悶え苦しむスカーラ。以前は右腕を切り落とされ、今回は左腕が切り飛ばされた。

黒零の中に『ゼロ』が戻り、機能の補助を行う。

『調子はどうだ?』

「問題はない。アレは短時間だけだな」

右手で夢零を硬く握りしめて、スカーラにとどめの一撃を刺そうと振り上げる。  
しかし。

「咲け散れ、ビット!」

楯無と戦っていたガーベラがゼロに向かって薔薇の花弁型のビットを幾つもはなってきた。

ゼロは咄嗟に後方に下がってビット達を躲す。

ガーベラは更識を投げ飛ばすと、スカーラの元に近寄った。

「ああ、ああ。無様になっちゃって、また新しく腕がつけられるわね。しかも両腕。今度は薬をもっと使わないと耐えられないでしょうねえ。私は貴方みたいになりたくないなあ」

ガーベラは周囲をビットで威嚇しながらスカーラの治療を簡単に行った。

とはいっても左腕の切り口にゼリー状の止血剤を塗って、固めるだけなのだが。

「ゼロ、楽しかったわ。また今度ね」

スカーラの片脚を掴んでガーベラは飛び立つ。

「待てよ」

ゼロは追いかけてしようとしたが、000を使用した反動から来る激しい頭痛からその場に膝をついてしまった。

逃げて行くガーベラ達。

「……撤退するぞ」

ゼロは手を膝につけながら立ち上がるとスラスターを吹かせて飛び立とうとする。

しかしゼロの背中を楯無が襲う。

ゼロは横に回転してこの一撃を躲すと右手に無零、左手に零雪を構える。

「助けてやった恩を仇で返す気か？ ああ？」

「それはそれ、これはこれ。大人しく捕まってくれたら、お返しでも何でも楯無さんがしてあげるぞ」

「冗談はよしとけ、阿婆擦れ気取りの純情さん。男女の経験を積んでから、そういう発言はした方がいいぜ」

ゲラゲラと楯無をあざ笑う。

「こちらとしてはてめえらは敵じゃねえんだよ。実力だとかいう話じゃなくて、単純に敵じゃないんだよ」

「どういう意味？」

「そういう意味だよ」

「話す気はないのね、なら先生方」

その言葉と同時にアリーナのピットから数人のラファールや打鉄を身に纏った教師がアリーナの中に入ってきた。

「お前らはバカか、こんなに人数いるんならさつき出しとけや。なに問題が解決しようとした時に場をかき乱すために出してんだよ。バカだろ、馬鹿ども」

「……返す言葉がないけど、間に合わなかったのよ。先生達の準備が」

「いや、馬鹿だよ」

その言葉と同時に遥か上空から巨大なエネルギーの柱が二本降り注いだ。

目の前に現れたソレに驚く教師達。

「遅いぞ、ティファ」

『大丈夫でしょう。計画通り私はゼロの撤退の手伝いをするのが任務なのだから』

「なんかあったのか」

『んん、ちよつとアリサちゃんにあつてきた。No. 004の反応で私だつてわかつたみたい。振り切るのに時間がかかっちゃった』

「テヘツ、とでも言いたげな口調だ。」

「そうか」

『あれ？アリサちゃんと何を話したのか聞きたくないの？』

「今は任務中だ。それに、あまり女性同士の会話は知りたくない……………それより、エネルギーをひたすら撃ち続けろ。俺はその間を縫って戻る」

『はいはい、じゃあ本気だすよ。シエル！』

上空にいるであろうティファからの無差別のエネルギー弾の砲撃が激しくなった。

大小合わせて一秒間に何十もの弾丸の雨がアリーナにいる人間の動きを封じる。

ただ二人の例外を除いて。

「零落白夜」

エネルギーの雨を切り裂きながら百春はゼロに近づいて行く。

ゼロはゼロで降り注ぐ雨を見切り、上空に逃げ去ろうとする。

「逃がすか！」

振り下ろされる零落白夜の刃、ゼロは降り注ぐエネルギーの雨を無視してこの一撃に対処するのに全神経を注ぐ。

エネルギーへの対処はN.O. 000に任せる。

「ふうう」

真正面から向かって来る百春の虚をつくように、ゼロは落下した。

百春にとってそれはゼロの予想通りに想定外の事、上空に逃げる事を想定していた刃

は落下する事によつて容易く躲され、百春の体はゼロにとつてエネルギーの雨を弾く傘の役割になった。

百春の背中に何発もエネルギーの弾丸が無慈悲に降り注ぐ。ゼロに気を取られすぎて、不意打ちを食らつた形になりその衝撃から手に持っていた雪片を零した。

「強くなっているが、やっぱり違うな」

体制の崩れた百春を足場に跳躍をおこない、一瞬にして遥か上空に飛んでしまった。

それは誰も追いつけなかった。圧倒的な加速度と負荷を無視した最高速度には誰もついていけない。

「あーあ、一夏くん達何処か行っちゃった」

誘宵アリスは空に飛び立って行くゼロ達を見上げながら、少し残念そうに呟いた。

「まあ、良いか。侵入者は捕まえたし」

彼女は現在ISを身に纏っており、右手はある人物の胸ぐらを掴んでいた。

それはISを完膚なきまでに潰され、息も絶え絶えな巻紙だった。

彼女はアリーナに逃げた際、ガーベラとゼロが戦っているのに乗じて逃げたのだが、それをアリスが見ていた。

あとは彼女をアリサが追いかけて、倒したただけだ。

「この人からは一夏くん達の話は聞けそうにないわね。生徒会長に引き渡しましょう。私には使い道がないから」

## 第81話

「ああ」

一夏は目が覚めた。カーテンの隙間からは陽が漏れ、薄暗い部屋に光の道を作っている。

服はパンツだけを着ており、気だるそうに右膝を曲げてベッドの上に座っている。

曲げた右膝の上に右腕を乗せて僅かに前傾姿勢になる。

何を考えるわけでも無く、たたひたすらに視線の先にある壁を見続けている。

何分間見続けていたのだろうか、簡単に時間なんか忘れてしまっていた。

「今日は……何だろうな」

髪をかきあげながら一夏は首を傾げた。

一夏は今日、上司であるスコールからの休暇を取ることを命令された。理由は簡単でここ最近の一夏は休んでおらず黒零による無茶な機動のせいで身体に負荷がかかりすぎているらしい。

朝の訓練は行っても良いが、それも軽く済ませるようにと釘を刺されてある。



起きてやるかもしれない。事務仕事も昨日のうちに全てを終えてしまっているため、今日は何も仕事がない。

何をするべきか。

気まぐれに散歩でもしてみるか。

イメージチェンジのためには散髪をするか。

綺麗に整理された部屋ではあるが、もう少し綺麗に掃除してみるか。

図書館で本でも読むか。

上手い物をひたすらに食い続けるか。

考えれば考えるほど、アイデアが出てしまう。

こうも沢山アイデアが出てしまったら、結局何もしないということに落ち着いてしまいうのかもしれない。

「あれ一夏、起きたの？」

隣で寝ていたティファニアが目を覚まして声をかけてきた。

彼女も一夏と同じように服を着ていない……わけでは無く、下着だけを着用している。

別に何かしたわけではない。

ただ単にティファニアが一夏の部屋にやってきて一緒に眠っただけだ。

こういった事はティファニアにはよくあることだった。

何故、どうして、何が、そんな事を一夏は聞く気はなかった。ただ彼女が満足すればそれで良いと思っっている。

ただ一言だけ、ティファニアは安心するからとだけ一夏に言ったことがある。それ以上は何も聞かなかった。

「ああ、今さっきな。俺は起きるけど、お前は どうする?」

「私はもう少しここで暖かさ感じてる。ゆっくりと行くから先に行つてて」

寝ぼけ眼でティファニアは返事をした。一夏はティファニアの頬を軽く撫でてからベッドから起き上がった。

ゴキリゴキリと己の首の骨を鳴らしながら、一夏は服に着替えて行く。

亡国機業の制服に腕を通してボタンを閉め終わると、一夏はアリサから貰ったネックレスをした。

そして最後に一夏はお守り代わりの指輪を右手の親指にはめた。

朝の訓練を終えて、食堂と喫茶店でいつものように朝食を済ませた後、ゼロはモノクローム・アバターに与えられた部屋では無くりリスのいる部屋にやってきた。

「調子はどうだい?」

備え付けられてるソファ―に座るやいなや、一夏以外は誰もいないにもかかわらず声が響いた。

「どうもこうもない。いつも通りだ」

「……んん、それならば何故この部屋にきた？黒零の整備なら完璧にしてあるぞ」

執務机におかれてあるモニターにリリスが現れた。

「その黒零についてだ」

モニターの中でリリスが身構えた。

黒零に関してリリスは細心の注意で管理を行っている。戦闘に関するデータや一夏自身のメディカルデータを事細かく調べ、篠ノ之束にそのデータを送ったりもしている。

「多分だけど、そろそろ進化する」

その言葉の意味はリリスもわかっている。

「……予想よりも早いね。八月前に1.5形態に進化したばかりだというのに」

「いや、寧ろ遅いくらいだ。俺個人の予測としてはこの時期には進化していたはずなのだ。1.5形態になって微調整が必要になったのだろう。アレは予想外の進化だから」

1.5形態なるものは元々存在しなかった。亡国機業の面々にとっても篠ノ之束に

とつても、この進化は完全にイレギュラーなものであった。

二人の力をより高めるために、No. 000が黒霧に施した一時的な進化。それによつて二人は分断できるようになり、より強い力を手に入れた。

「篠ノ之東にこの事を伝えておくか？」

「勿論、お願ひします。今日はそのために来たのですから」

それから暫くは一夏はこの部屋で時間を潰した。

「何をしようか？」

ベンチに体重を預けながら、一夏は缶コーヒーを一口飲んだ。

一夏は普段からコーヒーを飲んでいるのだが、今日は珍しくブラックコーヒーではなく、甘めの砂糖の多いコーヒーを飲んでいる。

「お兄ちゃん、何してるの？」

「んん？何もしてないんだよ」

気づいたら目の前には制服姿のマドカがいた。

「お兄ちゃん、仕事がないとそんな感じなの？」

「そうみたいだな。休日はあつたが、こんなに酷くはなかった。いきなり休みを与えられると、つくづく自分がつまらない人間だと思わされる」

「趣味でも持ったら？」

一夏の隣にマドカはそつと座った。

「趣味かあ、そういえば考えたことなかったな。まともな学生生活でも送ってたなら、趣味の一つでも持ってたんだろうけどなあ」

「私たち二人とも小学校卒業してないもんね。でも兄さんはかなり特技持ってなかった？」

「ああ、そうだな。スクールに色々仕込まれたからな」

一夏はこの数年間でスクールによつて仕込まれた技量の数々を思い出した。それらは特に戦闘に関して役に立つという物では無く、どちらかという私生活や癒しと言つた部分で役に立つ物ばかりだ。

例えばエステ、オイルマッサージ、整体、ネイルなどなど、それらを一夏は短時間で学び、プロと遜色の無いレベルまで向上させてきた。

今日も夜にスクールにマッサージをすることになっている。

その他にも事務仕事についても入団当初から教え込まれた。

今となっては書類の処理速度は並の会社員のソレを超える。就職すれば即戦力を狙える。

「それは趣味じゃないの？」

「……いや、どちらかといえば仕事に近い感覚だったな」

チビチビと飲んでいた缶コーヒ―は空になってしまった。

「こんなにもゆつくりとしたのはいつ以来かな。何もせず、一日中空を眺めても怒られない。なんか嫌になってきそう」

「休みの日なんだし、ゆつくりした方が良いよ。副隊長になりたての頃、過労で倒れたでしよ」

「そういえばそうだったな」

今になって一夏は思い出した。

確かに一夏はモノクローム・アバターの副隊長に任命された当時は張り切りすぎてしまい、訓練も仕事も倍の数をこなそうとして、結果としてある日ぶつ倒れてしまった。

その時はスコールとシルヴィアの二人にこつ酷く叱られた。

「こんなことしてたらシルヴィアさんに怒られちゃうな」

親指を空に掲げる。銀の指輪が陽の光にきらめいた。

「……そうね、シルヴィアさんに怒られるよね」

「お前は何かしないのか？」

「このままいさせて。私もゆつくりしたくなっちゃった」

「それで今日一日、休んでみてどう思った？」

夜、スコールの私室に呼び出された一夏は彼女にマッサージを行っていた。

マッサージと言っても子供が大人にお小遣いをもらうためにするような簡単なものではなく、道具から本格的なプロ顔負けのものである。

亡国機業にいるマッサージ店を経営している女性の技術をスコールが面白半分で一夏に教え込んだのだが、予想以上に一夏に才能があつたらしく、今となっては一流の間と顔を並べられるほどである。

その他にも様々な技術を織り交ぜたマッサージを一夏は特技としている。

スコールもこうして頻繁に一夏にマッサージをしてもらうことを楽しみの一つにしている。

「どうと言われてもな。久しぶりに織斑……いや、一夏として過ごせた気がした。ゼロという存在ではなく、一夏としてな」

一夏は今日、久しぶりに張り巡らせた気を緩めた。

「でもなあ、一夏として過ごすのは今は無理だとわかったよ。どれだけ落ち着いて過ごしても、身体が『ゼロ』として過ごすのを好んでいる気がするんだよ」

「……」

一夏の独白をスコールは黙って聞き続ける。

「もしこれが『一夏』ならば、今日のような甘い一日を享受することができたのだと思う。でも今の俺はやっぱり『ゼロ』なんだよ。少なくとも、俺が俺の全てと蹴りをつけるまではな」

「大切な人と共にいればその気も変わるわよ……私は貴方をこの世界に誘ったのは良かったことなのかしら」

それはスコールが一夏に対して始めて見せた迷い。

スコールは少なくとも団員たちの前では決して迷いも弱さも見せなかった。

だからこそ、一夏は僅かに驚きはしたが直ぐに平静になった。

「俺は貴方に感謝しています。あなたがいなければ俺は何もできないまま、自分自身の事も録にわからないまま、戦う事になっていたと思います。それに、貴方が俺を鍛えてくれたおかげで俺は力を手にしました」

スコールの素肌に優しく触れながら、一夏は力強く宣言した。



「自分自身のための力。敵を屠る力を手に入れました」  
「そう言ってもらえると、私も楽になるわ」

時計が日付が変わるのを知らせた。

今日が終わった。だから今日が始まる。

「休暇は終了。これからは『一夏』ではなく、また『ゼロ』として過ごす」

スコールからは顔が見えないが、明らかに一夏の目つきが変わった。それだけではなく、纏うオーラのような物まで変わっている気がする。

「気が早いんじゃないかしら」

「こっちの方が落ち着く」

「そう、難儀なものね。なら早速次の任務を与えるわ」

「そう言うとスコールは何処からか一枚のチケットを取り出すとソレをゼロに手渡した。」

「IS学園のキャノン・ボール・ファストの観戦チケット……しかも特別招待席」

「それね、貰ったのよ。ほら、亡国機業キが経営している会社の一つにそのチケットが届いてね。総帥が私達に行つて来いと」

「成る程、あの爺がね」

ゼロは頭の中で亡国機業総帥、轡木十蔵の事を思い出す。確かにあの爺ならそんな事

を言いかねないと、ゼロは思った。

「任務よ、私とデートでもしましょう」

「ああ、それは面白そうだ……………」

## 第82話

キャノン・ボール・ファスト。

ISを用いた競技の一つでコース上を超高速で移動してタイムを競うものである。

見所は何と言ってもIS同士の妨害合戦であろう。プロの世界のソレはもはや戦争と言っても過言ではない。

「退屈だ。こんな生ぬるいものを見て何が面白いのやら。まだ戦場の方が過激な景色が見れるぞ」

「その発言はどうかと思うわよ。今やつてるのは一年生や二年生の一般機部門、面白いのは専用機部門の方よ。そっちの方が過激よ」

ゼロとスコールの二人はISアリーナの特別来賓席にいる。

二人ともピツシリとビジネススーツに身を包んでおり、威圧感が半端ではない。

特別来賓席は限られた人間しかはいる事が許されず、中は完全な個室になっている。

個室にある一人用の高級ソファーにふんぞり返りながら、ゼロはアリーナで繰り広げられる競技に飽きかけていた。

「レインのやつも出るのか?」

「出るみたいよ。彼女は専用機部門で出るとは聞いてるけど。彼女のこと、気になるの?」

「ああ? 誰がああノズを気になるってか? ああノズは毎回俺に会ったら喧嘩売ってきやがる。何度も何度も」

「なによ、貴方も満更ではないみたいね。仲が良くて良かったわ。酔った勢いでやらないでね?」

「何を聞いている」

二人は競技を観戦しながら、どうでもいい話を続けていた。

そんな中、ゼロは暇潰しに観客を観察し始めた。

「居るなあ、人殺しが。こうやって見るとわかる物だな。他の奴らとオーラが違う」

退屈しのぎの観察であったが、どうやら何名か敵が紛れ込んでいるのに気がついてしまった。

今回は一般の人も簡単に入ることができたため、何処かで警備の穴を掻い潜って敵が入り込んで居るらしい。

「学園側は気づいているの?」

「見たいだな。動きが警戒している。でも、いくら警戒したとしてもネオは関係ない。目的のためなら手段を選ばない。このアリーナにいる人間を皆殺しにしてもな」

「何処からきて、後どれくらいで始まると思う?」

「そうだな、来るならば空か。しかもセンサーに反応しない位置からの急降下。敵がいつ来るかと言われたら、まず間違いない一年の専用気持ちの競技の時だろう。奴らは今 No. 001 にお熱だからな」

「いい推理ね。ならばお手並み拝見といきましょうか」

二人はこれから起こるのであろう事件を前に、嗤っていた。

「起こる事は起こる」

時間は経過し、一年生の専用機同士のレースとなった。

そこで問題は起きた。

ネオの襲撃だ。

突然のテロリストの襲撃に慌てる観客、事前にある程度の事は予測していたのか落ちて着いて避難を指示するI S学園の先生、そしてネオの足止めをしている専用機持ち達。

「どうしましょうか、大人しく避難でもする？」

「個人的には逃走もありだ。でもなあ、さつきからこいつが疼いて疼いて仕方が無い」

ゼロはスーツを捲って自分の左腕に付けられてある黒零の待機形態である漆黒のガントレットをスコールに見せた。

I Sと会話できないスコールにでもわかる、このI Sは今戦いたがっていると。

「戦うの？」

「貴女からの許可が降りれば、今の俺は貴女の部下ですから」

「……………」

スコールは少しの間考えた。

『ああ、二人とも聞こえていますか？』

突然部屋に付けられてあるスピーカーから老人の声が聞こえた。

その声を二人は何度も聞いたことがある。

「総帥……………」

「爺」

亡国機業総帥、I S学園用務員、一夏と百春の祖父、その名は轡木十蔵。

『こちらからは其方の声は聞こえないので、一方的に要件を伝えます。二人とも、敵を排除しなさい。邪魔をするものの処理はお任せします。あと、監視カメラも向こうがハッキングしたように偽装して置いたので、カメラは気にしなくて良いですよ』

「わかりました。ありがとうございます」

組織のトップからの任務、二人は素直にそれに従う。断る意味はない。

ソファーから立ち上がってゼロはスーツを脱いで、スーツをISの拡張領域に収納した。

そして拡張領域から今度は仮面を取り出して、顔につけた。

「先に行ってます。疼いて仕方が無い」

逃げ惑う人を見殺しして、ゼロは人が誰もいない通路を闊歩する。電気は消え去り暗くなった通路の中を外から降り注いでくる光目指して進む。

闇から抜けて光に出た。

「ああ、戦っている」

光の中で広がっていたのは闘争、一方は倒すため、もう一方は守るために戦っているのがゼロの目ではわかる。

戦況は僅かにネオの方が優勢になっている。無理もない、IS学園側は殺しあう戦いに慣れていない人間が多すぎる。

特にコース上で行われている専用気持ちは数名を除いて僅かにためらいが見える。近くの手すりに寄りかかりながら、周囲を観察していく。

「まだ、見物客がいやがったのかああああ!!」

上空から剣を持ったネオの兵士がゼロ目掛けて突撃して来る。彼が逃げ遅れた一般人だとも思ったのだろう。

「0000」

誰に聞かせるわけではなく、ポツリと独り言のようにソノ言葉を呟いた。

ゼロの背後に光が集まり、0000がこの世に姿を現した。

N・0000の意思によって動くこの装備は最近では黒零を起動しなくても使えるようになっていた。

ゼロの意思に関係なく動く0000、瞬く間に敵を排除した。

0000は次の敵を探して、アリーナを飛び回り、ゼロは中央に向けて階段状の観客席を降りて行く。

「止まりなさい」

声をかけられた。



機械のようにギリギリと音がなりそうな動きでゼロはソレを見た。

「更織楯無か……どうした、今の俺は気分がいい。止めるなよ」

そこにいたのは更織楯無、手には扇子を持っており、トントンと腕をソレで叩いている。

「止めるわよ、これは貴方達の仕業？」

「面白い冗談だ。あれは我々の敵だ。そして、ソレを狩るのを邪魔するものは総帥命令で潰す」

「させないわ」

互いにほぼ同じタイミングでISを身に纏った。

黒零は000と分離した時の姿になっている。

微動だにせず、睨み合う。すでに戦闘は始まっている。相手がいつ動くのか、自分がいつしかけるのかその一瞬を探す。

「ッー」

「……ー」

何か合図があったわけではなく、二人は全く同じタイミングで相手に突撃した。

武器を持たない徒手同士のインファイト、力では黒零が優ってはいるが、スピードではNo.000のサポートがないために楯無が上回っている。

(おかしい、明らかにキレと速度がない)

楯無はゼロに対して違和感を覚えた。それは確かなものであり、楯無はそれにつけこんだ。

速度でゼロの攻撃を躲して、素早く一撃を叩き込もうとするが、ソレはことごとくゼロの防御の前に無駄に終わる。

「そらよー」

黒零の光る右手が広げられ、楯無の肩に添えられようとする。

楯無の神経がアレを食らってはならないと警告音を伝える。

咄嗟にスラストを吹かせて後方に下がる。そしてそれに合わせて愛用のランス、蒼流旋を呼び出して、ゼロに向けて水の弾丸を連射した。

階段上手く利用して、上下の移動を考え、周囲の観客席を吹き飛ばしながら楯無へと接近しようと図るゼロ。

しかし、二人の戦闘を邪魔するものたちが現れた。

IS学園の教員、四人である。近接戦闘が得意な打鉄ではなく、遠距離戦闘も可能なラファール・リヴァイブである事から、近接格闘ではゼロに勝てないと判断したのだから。

ラファール四機の左腕には拘束用のロープを放つフックショットが付けられている。

動き回るゼロの行動を制限するかのよう上空から取り囲み、地面に向けて銃弾を乱射している。

「ふう……」

降り注ぐ銃弾を持ち前の機動力で躲してはいるが、No. 000のサポートがないために躲しきれなくなる。

何発かの弾丸が被弾、さらに左腕に拘束用のロープが巻きつけられた。

ギョロりと翠の瞳がロープを放ったISを見た。

フックショットから放たれたロープを掴み、他の機体がフックショットを放つ前に今拘束している機体を潰しにかかる。

左腕でロープを掴み、ロープを手繰り寄せながら跳躍、手繰り寄せられて崩れた態勢のラファールに回転しながらの浴びせ蹴り。

地面に無惨に叩きつけられたラファールに追撃で両足による踏み潰し、それも二回。それでもラファールの拘束はふりほどけない。

「やせるかー」

潰そうと躍起になっているゼロに楯無が鋭い突きで動きを止めた。間一髪で槍は受け止められたが、槍を掴む右腕にロープが巻きつけられた。

ゼロの動きが僅かに止まった事を確認すると、左腕を拘束しているラファールはゼロ

から距離をとった。

更に両足にそれぞれロープが巻きつけられて、完全にゼロの動きを止めた……ように思えた。

「甘いぞ、甘いぞ!!」

黒零はその程度では負けないしかし完全な拮抗状態になってしまい、両者ともに動けなくなってしまう。

この隙に楯無はトドメを誘うとゼロに突撃するが、楯無の前に一つの影が降り立った。

000。

ゼロと楯無の間に割ってはいるやいなや、楯無を素早く蹴り飛ばし、その反動を利用して宙返り、ゼロの肩に乗ると右手に無零を呼び出して一瞬で四本のロープを全て切り落とした。

「気分は澄んだか？満足したか」

000は無言で頷くと、黒零の追加パーツに変形して黒零1・5形態が完成する。

『準備は終わった』

楯無はゼロの纏うオーラが変わったことに気づいた。何か別の物が混じり合ったかのように、先ほどまでとは明らかに違う。

『新たな世界へと進むための進化をしよう』

スラスターからキラキラと光る漆黒の粒子が溢れ出して黒零を包み込む。粒子によつて黒零の姿は見えなくなった。

その間に楯無達は攻撃をしかけるが、全て粒子に阻まれて黒零にダメージを与えられない。

『我らはゼロ』

その時だ。楯無の I S に異常が発生した。

画面に流れる目の前を多い潰してしまいそうな大量の『000』の文字、それはこの場にいる人間の中では楯無にだけ起こっているようだ。

しかし他に戦闘を行っている人間達の反応を見ると、どうやら篠ノ之束が作り出したコアを使った I S だけにこの異常自体が起きているようだ。

「No. 000……」

楯無はアリサに言われた言葉を思い出した。あの時は信じていなかったが、このような事が起こったとなると信じるしかない。

『今、目覚める』

闇の中から腕が生え、腕を振るって全ての黒い粒子を吹き飛ばした。

そこにいたのは一機の I S、その姿を例えるならば『霸王』か。

黒零第二形態移行完了。

## 第83話

黒零第二形態、繊細で細く、見た目から素早さを連想させる事の容易かった第一形態とは打って変わって、その見た目は鈍重で重厚、速度が速いとは思えない。しかし、力だけは第一形態より上がっていると思える。

装甲は一段階厚くなり、特徴的であつた銀色のセンサーにもなつていた髪は失われてしまった。

装甲に覆われた翠の宝石のような瞳が光つた。

右手を前に突き出す。

その一挙一動作に対して周囲にいる楯無を含めたI S学園の人間が警戒を行う。第一形態だつた時も苦労していたというのに、それ以上の力を持ったという事はどういう事なのか、理解している。

楯無は周囲の先生とアイコンタクトだけで連携を計る。

黒零の前に巨大な大剣が現れ、重力に引かれコンクリートに突き刺さつた。

それは刃のみが黄金に輝く、黒を基調とした両刃大剣、刀身は黒零の胴体付近まで存

在し、柄もまたその刃に合わせて長大になっている。

並の人間であれば、その刃を使いこなせずには持て余してしまうかもしれない。並の機体であればこの大剣の真価を発揮する事は出来ない。

両方が揃っているからこそ、この刃を振るう。

柄を持ち、コンクリートから剣先を引き離す。刀身の近くを持ち、片手で振り回しやすいうようにする。構えを撮るわけでもなく、剣先を下げる。

ギョロリと目が動き、アリーナの内部でネオと戦う一年生達に目が向けられる。

意識が戦いの外に向けられる。

その僅かな隙を楯無達は見逃さなかった。

一人の先生が剣と盾を持って果敢に黒零に接近し、それに合わせて他の先生は黒零の周囲に散開する。

一手目、先手を取ったのは意外にも先生の方であった。

剣を振り上げ、袈裟懸けを放つ。それを黒零は先生の振るう剣の何倍もありそうな重さの大剣を、その倍の速度で、片手で振り回す。

カウンターのよう到大剣を、振り下ろされる剣に直撃させて、叩き折った。

宙を舞う刃、ほぼ零距离で対する二名。先に動くのは黒零、大剣を持っていない左手を硬く握りしめ、スラスターの加速を生かした殴打で先生を殴り飛ばした。



その直後、黒零の肉体に三本本のロープが絡みついた。そのロープの先にいるのはラファール・リヴァイブに乗り込んだ先生。フックショットを利用して黒零の動きを封じる、先ほども使った手段だ。

さつきは上手くいった。機体の合計の力が黒零の第一形態を上回った為に黒零な動きを止めた。

だが今回は違う。

黒零は手から大剣を離すと、自分の体を丸めるようにしながら、スラスターで勢いをつけてその場で一回転を行う。

それだけで十分であった。桁外れな力で、黒零はラファールを振り回した。観客席を吹き飛ばしながら、引きずり回されるラファール達。

黒零は右手の指で手刀の形を作り上げると、そこにエネルギーを纏わせて刃を作り上げる。

まずは一閃、右腕に絡みつくロープを切り落とし、腕が自由になればその他全てを一瞬で切り裂いた。

慣性に従って吹き飛ばされる先生たち。

「吹き飛ばー！」

蒼流旋に水のドリルを纏わせながら楯無が突撃して来た。必殺の一突きが黒零に迫

る。

黒零は大剣を左手に取ると、楯無を迎え撃つ。剣先に『力』を纏わせて強化をかける。柄の端を持って、大剣をまるで槍のように構え直すと、向かって来るドリルに向けて突き出した。

水のドリルと剛剣の穂先が激突し、両者の武器が弾きあつた。楯無はその衝撃に後ろに飛ばされたが、黒零は左腕が大きく仰け反るだけであつた。

(クルー！)

楯無は空中に飛ばされながら、直感が叫んだ。体制を立て直し、柄を両手で掴んで、次に打ち込まれてくるであろう黒零の一撃に備える。

黒零は腕のスラスターを利用して鞭のように腕をしならせて、大剣を振るつた。

全力の一振りには楯無の持つ槍の穂先に弾かれ、楯無の肉体の前を通過して、地面に深い切り込みを刻んだ。

眼と眼が合い、より深い闘争心が生まれた。しかし、楯無の瞳の奥には僅かに恐怖心が生まれていたのを本人は知らない。

一撃、また一撃と周囲のベンチを吹き飛ばしながら、ゼロは高速で大剣を振り回す。

未だに扱いに慣れてはいないのか、普段扱っている長剣の太刀筋と比べれば隙がありすぎる。

「終わらせる、次で。長期戦は望まない！」

楯無は体に纏わせてる防御用の水のボールを全て穂先に移す。

「ミストルテインの槍！」

楯無最強の必殺技、防御を一切考えない自爆覚悟の一撃。

黒零は大剣を右手に持ち代えると、今度はエネルギーを大剣に纏わせた。エネルギーの刃が肥大化する。

鋭く、もつと鋭く、願う。

最強の必殺技と至高の一撃。

二つがぶつかり合うと一瞬にして巨大な爆発が観客席を埋め尽くした。

防御がうまく行かず吹き飛ばされる楯無、それとは対象的に黒零は自分の目の前に『力』で不可視の壁を作り上げて衝撃を受け流した。

爆発さえも無傷。

(これは、少しキツイわね。でも、何とかしないと)

楯無のISのシールドエネルギーは殆ど残されていない。今の一撃ですべてを持っていかれたからだ。

動かなければ、戦わなければ。そう思う楯無の心とは裏腹にISは動かなかった。

大剣軽々しく持ったまま、黒零は他の専用気持ちのいる場所まで悠然と闊歩する。

## —— 零落極夜

それは従来のような刃を生みだす零落極夜とは違っていた。自身の右手のエネルギー排出口から零落極夜の力が溢れている。

アリーナを覆い囲むシールドを掴み、ソレを引きちぎった。

崩れ落ちるシールド、残骸は雪のようにフィールドに降り落ちてくる。

全ての機体が黒零を見た。

鈍重な見た目とは裏腹に軽やかな跳躍でフィールドに降りた。

「あれ、どう思う?」

「第二移行? 関係ない! 潰せばいいんだよお! 両腕の仇だ!」

専用機持ち達と戦っていたネオの猛者、ガーベラとスカーラの二人はゼロへの対応を考えていた。

落ちていて状況判断しようとしているガーベラと両腕を切り落とされた恨みからか頭に血が上っているスカーラ。

「やれよオ!」

スカーラは周囲にいた兵士達に命令を飛ばし、兵士達は黒零に向かって突撃して行く。その手には突撃槍。

黒零が屈んだ。目の前には肉体を守るように半球状の『力』の壁が作り出される。

零から最速への殺人的な急加速、兵士達が反応した瞬間にはすでにタツクルが直撃しており、上空にその身を預けていた。

理解不可能なほどの圧倒的な衝撃。

一瞬にして二機を撃破、速度を維持したまま二人に突撃する。

「アレは、無理ね。後は任せたわ。私は他の相手してるから。死にたくないし」

スカーラの背中をポンと軽く押し出して、ガーベラは死から逃れる。

スカーラはスカーラで薬をやっている脳内麻薬がドバドバと出ているのかわからないが、戦うに連れて言動がおかしくなってしまうている。

スカーラの腕はゼロに両方とも切り落とされてしまっているため、現在は義手になっている。

異様に長く大量の節によって動くその腕は不気味に動いている。爪は敵を切り裂くのに適し、腕には幾つものエネルギー発射口が取り付けられており、攻撃も万全。

更には背中にもこれと同じような隠し腕が二本存在している。

だが問題があり、まともな人間ならば使いこなせないという事だろう。特別な薬を使つて脳を僅かにお悪くさせなければ、このISの性能は100パーセント使いこなす事はできない。

製作者曰く、作った人間も使う人間も頭のイカレテイル機体だそうだ。

四本の不気味な腕による連携攻撃が黒零に襲いかかる。鈍重な見た目とは裏腹に軽やかな動きで腕を躲し続ける。一撃も攻撃を食らう事無く距離を詰める。

一振り、大剣で背中から生えた腕を切り落とした。

加えてもう一振りで右腕を切り落とす。

背後から気配を感じる。大剣を横薙ぎに一回転を行い、背後から迫っていた切り飛ばした筈の腕を再度両断した。

その腕はまるで百足の様に切り落としても生きていた。

——零落極夜

大剣の黄金の刃が漆黒に染め上げられる。

無双の連続斬撃が簡単にスカーラの肉体を飲み込んだ。速度、圧倒的な迄の速度の攻撃はスカーラの脱出を許さない。

四肢が全て切り落とされ上空に打ち上げられたスカーラ、その彼女の肉体をガーベラは受け止めた。

「撤退撤退、アレはヤバイからさ」

周りの隊員に対して撤退を指示して行くガーベラ、しかしそんな物はすでに無意味になりかけている。

次から次に黒零は兵士に飛びかかり、屠っている。

「ありやりや、なら私たちだけでも逃げますか」

ガーベラは周囲にスモークグレネードとチャフグレネードを撒き散らしながら撤退して行く。

それを黒零は追いかけない。

戦闘行為に満足したのか、大剣を地面に突き刺したまま一步も動こうとしない。

「どうするの?」

「攻撃を仕掛けなければ動く気はなさそうだ」

専用機持ち達も黒零の強さを悟ったのか、手を出そうとはしない。少しでも迫ろうとすればギョロリと翠の瞳に睨まれてしまい、動きが止まってしまう。

『ゼロ、気は済んだ?』

何処からか観察しているスコールが通信をしてきた。

黒零はそれに軽く頷く。

『なら、撤退しましょう。今総帥からの命令が来たわ。撤退しろと。私は私でさがるから、貴方は貴方でお願いな』

再度首肯を行い、今度は周囲を見回す。

周囲には十数機の専用機や量産機を含んだIS。皆が皆、黒零の一挙一動に注意して

いる。

黒零は指をクイツクイツと動かして挑発を行う。だがそれには誰も乗らない。萎えた。

黒零はそう言わんばかりに両肩を落とし、大剣を収縮した。

次は何をする。皆が警戒する。

黒零は両足を肩幅迄開き、スラストアーで飛翔して、一瞬にして最高速度にもっていった。

誰もが追いつけず一瞬にして逃げられてしまった。



## 第84話

「……マドカ?」

織斑百春は目の前に現れた人物に戸惑っていた。

今日はキャノン・ボール・ファストが終わり、友人達と実家で誕生日パーティーを行っていた。

パーティーも一段落ついた所で、百春はパーティーの主役にも関わらず、会場から抜け出して少し休むために夜風に当たりに行った。

そして彼は出会ってしまった。幼い頃に死んでしまったと思っていた妹のマドカと。なぜ彼女とわかったのかというと、顔が姉である織斑千冬によく似ていたからだ。

「なにを、なにを……今まで何をやっていったんだ」

一步、百春がマドカに向けて歩き出すと、彼女は百春に向けて銃を突きつけた。

「動くな。私にはお前と仲良くする気は更々ない。それにな、今の私はマドカではない」  
「何を、言ってるんだ?」

「私は亡国機業モノクローム・アバター隊員『エム』だ。もう織斑マドカではない」

「亡国機業?」

それは百春が聞いた事のない名前であった。

「お前たちは兄さんを見殺しにした」

「……っ!？」

その言葉に百春の呼吸が僅かに止まってしまった。

マドカが百春の兄、一夏によくなくなっていたのは彼自身よく覚えている。

「だから、許さない」

マドカの指が引き鉄を引いた。

撃ち出された弾丸、それは真っ直ぐに百春の着ている服の胸ポケットに向かって行く。

躲す事はできなかった。

しかしその弾丸は百春に当たる前に横から飛んで来たナイフに弾き飛ばされた。

二人は咄嗟にナイフの飛んで来た方向を見た。

そこには仮面をつけ、亡国機業の制服を着たゼロがいた。

百春は突然現れた人物に対して構えをとった。

百春は相手が誰なのか理解できた。ISに乗っている姿以外は変装した姿だけしか見た事がなかったが、直感が人物を告げた。

「ゼロ……」

「エム、独断専行は俺の専売特許なのだがなあ。今ならば目を瞑っていてやる。戻るぞ。あと数刻後には此方もパーティーがある」

ゼロはゆっくりとマドカに近づくと隣に立った。

「お前が、お前がマドカを誑かしたのか！」

「誑かしたか、言い方を変えればそうなのかもしれないな。俺がいたから、エムはモノクローム・アバターに入隊したと言っても過言ではない」

「だったら、俺は貴様を許さない！」

百春が腕につけたガントレットに触れた。

「私としては同じ男性IS操縦者同士仲良くしたいのだがな」

「黙れ、お前は此処で倒す！」

「まあ、待て。此処で君が戦ったところですぐに死ぬだけだ。意味はない。それよりもゆっくりと話でもしようじゃないか、てめえもそう思うだろ？なあ！」

ゼロは大声である一点に向けて呼びかける。するとその物陰から一人の人物が姿を表した。

「千冬姉」

「織斑千冬」

「久しぶりだな、マドカ」

現れたのは二人の姉である織斑千冬だった。

「会いたかつ——」

「黙れ！」

歩み寄ろうとした千冬をマドカは怒鳴って止めた。

「お前は、栄光を手に入れた！」

その言葉に千冬の心に杭が突き刺さる。

「そして、一人の男の姉である事を捨てた。ならば私に対してもう姉として振る舞うな」  
「違う！アレは、アレは仕方がなかったんだ！そうするしかなかったんだ！」

「それが何か私に関係あるか。お前は兄さんを捨てたんだ。だから私は貴方を捨てる。  
此処でケリをつける」

マドカの指が引き鉄を引きそうになるが、ゼロが掌で銃口を塞いで発砲を止めた。

「落ち着きたまえ、此処で彼女達を殺したところで面白い事は一つもないだろう」

「だが——」

「黙れ」

マドカはそれ以上は言葉を出さなくなった。有無を言わさぬゼロの態度に、彼女は身を隠すように彼の後ろに下がった。

「それでいい」

ゼロはそつとマドカの頭を撫でた。

「こうして直接面を合わせるのはその男が誘拐された時以来だな。息災だったか？」  
「貴様がマドカを誑かしているのか！」

千冬は怒りを瞳の奥に孕んでいる。今にも飛びかかりそうではあるが、寸前の所で心がそれを止めている。

「会話を通じないのか……まあいい。姉弟揃ってつまらない事を聞いてくる。彼女は自分の意思で此方にいる。無論、私もだがな」

「貴様の話など聞いていない。マドカを力づくでも返してもらおうぞ」

「できるのか？今の貴様如きが、牙も爪も無くしてしまった獣風情に何ができる」

「貴様を倒す事はできる」

「凄いい冗談だ。笑えない。貴様はこの辺りを火の海にするつもりか？俺はするぞ」

千冬はその言葉を聞いて、悔しそうに拳を収めた。

ゼロの言葉は冗談ではなかった。逃げるためならば周囲の被害を考えない。自分たちの為ならば誰が被害に会おうと視界には捉えない。

「ほう、理性的な判断ができるのだな。猪武者かと思つたら少しは知性があるようだ」

ゼロはまるで千冬を馬鹿にしたような態度を取る。苦虫を噛み潰したかのような顔

をする千冬、今すぐにも殴つてやりたい。しかし、それはする事ができない。

「貴様らの目的は何だ、亡国機業」

「へえ、その程度の情報は手に入れたみたいだな。この前の態と逃がしたやつを捕まえて拷問でもしたか？」

「そんな事をするか。奴は自分の事は話さなかつたが、貴様らの事は良く話してくれたぞ。何が目的だ」

ギロリと鋭い目つきがゼロを捉えた。

「目的か、世界をより良く循環させることだな。そのためならば我々は幾らでも戦う」

「一夏を誘拐したのもそれが理由か？」

「さあ、どうなのだろうな。俺もあの場にはいたが誘拐した理由は知らないな。ただの暇つぶしじゃねえのか？そもそも彼を捨てた貴様には関係ない筈だろ？」

「違う！千冬姉は兄さんを捨ててない！」

ゼロの言葉を百春は真っ向から否定した。

「違うないさ、彼女は織斑一夏を捨てたんだよ」

「お前に姉さんの何がわかる！」

「何もわからないさ、何かわかりたいと思わない。だから、否定しているんだよ」

二人は相入れない。

「エム、戻るぞ。こいつらと話していても意味がない。それに、パーティーに主役が遅れてしまつては格好がつかないからな」

ゼロの右手にいきなりスタングレネードが出現した。

「それでは、次会う時はケリをつけよう」

「逃すか！」

千冬は咄嗟に走り出した。逃すわけにはいけない。せめてマドカだけでも連れ戻さなくては、その念が千冬を突き動かした。

ゼロが目の前にスタングレネードを目の前に放り投げ、それと同時に後方にエムの手を引っ張りながら走り出した。

スタングレネードが炸裂し、千冬の視界を埋め尽くすが、予め目をつむっていたので光を食らうことはなかった。

しかし、足が止まった。

目を開いてみると千冬の足はトリモチを踏んでいた。

何時の間にこんな物が、千冬は思った。答えは簡単、千冬達と話している途中でゼロの後ろに隠れていたマドカが仕掛けていたのだ。

スタングレネードを使えば千冬は目を瞑ると予想していたゼロがマドカに行動を取らせた。

「大丈夫？千冬姉」

「ああ、問題ない……マドカが生きていたか……姉を捨てた。違う、違う筈だ」

「お兄ちゃんはアレで良かったの？」

「何が良かったんだ？」

二人はISを使って亡国機業の本部に戻ってから、ある部屋に向かっていた。

「あの場所に戻る気はないのかってことよ」

「なんだ、そんな事か。あの場所はもう俺の戻る場所じゃない。だから、興味がない。それによ——」

二人はある部屋の前で立ち止まった。

「今は此処が俺の居場所だ。此処には仲間がいるし、倒さなきゃならない敵がいる。居場所が欲しけりや自分で作るさ………さあ、誕生日パーティーだ」

扉が開かれる。

「飲めや！飲めや！今日は楽しい日だぞ!!」

「主役不在だが、はしゃげやああ!!」



部屋の中に広がっていたのは肅々とパーティーの主役の到達を待つ会場ではなく、パーティーの主役不在なのにも関わらず既に騒ぎ散らしている無残な会場であった。

「凄えな。俺主役不在で此処まで騒げる誕生日パーティー初めて見たよ」

「え？なんで？なんでみんなもう騒いでるの？」

ゼロは目の前の状況を素直に受け入れたが、マドカは理解できずにアタフタしている。

「ああ、なんだゼロ今ついたのでか？」

元同室のグレイが声をかけて来た。

「どういう事だ、グレイ。何故もう始まっている」

「それか、気づいた時には始まった。誰が原因かはもうわからん。お前の到着が余りにも遅すぎたんだ。でも安心しろ、誕生日ケーキはちゃんと残ってるから」

グレイはある一点を指差した。

「……グレイ、俺の目は腐っているのか？ケーキがある筈の場所には食いかけのスポンジとイチゴが一個、その上にあのチョコでできたプレートがあるだけなのだが」

無残な食い散らかし。

「いや、あつてるよ。あれがケーキだ」

「蠟燭を指す場所がない……泣きたくなってきたな」

「気を確かにして、兄さん！」

## 降り立つ破壊者

単眼の怪物。

異形の両腕の兵士。

鋼の乙女。

それらは突然現れた。

急遽開かれる事になった専用機限定タッグマッチ。

更織簪は姉の策略によって自身の専用機の制作が遅れる原因を作った織斑百春と組む事になった。

そしてタッグマッチの緒戦、簪と百春のペアは楯無と箒のペアと戦う事になった。

襲撃者は突然現れた。

アリーナに降りて来る十を超える無人機。

そいつらは四人に襲いかかった。

しかし所詮は絶対防御の発動しない無人機、国家代表の敵ではなかった。

楯無は容易く敵を両断し、屠った。

だが彼女には誤算があり、腹を両断したはずの機体が動き出して楯無の動きを止め

た。

それから楯無の体に数機の無人機が纏わり付き、自爆を行った。

爆発のは楯無の肉体を傷つけることはなかったが、それでもシールドエネルギーを空にするには成功した。

姉を抱きかかえて泣き叫ぶ簪。

助けを求めろ。

されど『英雄』は現れない。

だが。

『破壊者』は現れる。

衝撃的登場。

上空からの落下と合わせて敵の一機を漆黒と黄金の大剣で屠る。

周囲の視線を一点に集めた新たな侵入者、ゼロ。

「亡国機業、ゼロ。篠ノ之束の命により、義もなく参戦した」

突如現れたゼロ、楯無を含めた専用機持ち達は呆気にとられるが、心を持たぬ無人機

達は直様対応する。

ゼロの周囲を取り囲むように無人機達は動き回る。

(東さんの話では暴走したと言っていたが、本当に東さんが暴走させたのか？あの人か？ありえないだろ)

ゼロが今回 I S 学園にやってきたのは、篠ノ之東からのゼロに対する個人的な以来であつた。

内容は暴走した無人機を無力化して欲しいとのことであつたが、その事でゼロは幾つかの疑問点があつた。

しかしそれ以上の事を考える気は起きない。

地面に突き刺していた剣を抜き取つて、一度大きく振り回した。

風が引き裂かれ、空間が震える。

単眼がゼロを捉え、右腕のクローアーム、左腕のエネルギーガンをそれぞれ半々が構える。

一機、ゼロに向けてクローアームを構えながら飛び出した。背後からの攻撃、狙うは背中のスラスタ。

「遅い」

振り向きざまの一閃。腕、胸を巻き込みながらその攻撃だけで量産型の I S コアを破

壊して無人機の動きを止めた。

大剣を右手で持ち替えて、刃にエネルギーをまとわせる。

単眼の左腕からエネルギーの弾丸が放たれ、ゼロは大剣で勢い良くふるってエネルギーの斬撃を飛ばした。

斬撃は弾丸を飲み込み、無人機達を切り裂いた。

しかしそれだけでは無人機は止まらず、追撃の一撃が直撃することで漸くコアが壊れて動きが止まった。

続けてゼロは此方に向けて両腕を突き出して来る無人機、ゴーレムに狙いをつける。ゼロもゴーレムに合わせて剣を地面に突き刺してから、右の掌を前に突き出した。

互いの掌からエネルギーが撃ち出され、エネルギーの激流と激流が衝突する。飲み込まれたゴーレムのエネルギー、流れに押し込まれ壁に激突、機体はバラバラになる。

壊れた敵に興味はない。

スラストを駆使して高速で一機の背後に回り込み、コアがあるであろう心臓の位置を零落極夜を纏わせた右手で貫いた。

腕を引き抜き、別の機体が撃ってきたエネルギーの弾丸を左手に持った大剣の腹で防いだ。

次の狙いは鋼の乙女。

鋼の乙女、ゴーレムⅢは現在ゼロが確認できるだけでも二機存在している。二機は一箇所に固まってゼロの出方を伺っている様子だ。

先に動いたのはゼロ、圧倒的な加速度で鋼の乙女との距離を詰めた。

一振り目は両者を引き離すような縦の一撃、目論見通りに敵は別の方向に別れた。

ゼロは素早く大剣を逆手に持ち帰ると槍投げの要領で一機の鋼の乙女に向けて投げつけた。

大剣は猛スピードで鋼の乙女に直撃して、ソレを大きく後方に吹き飛ばした。吹き飛ばされて壁にぶつかる乙女と地面に突き刺さった大剣。

ゼロはもう一体に迫った。

鋼の乙女は両腕のブレードを構えてゼロに向けて一突き。

ゼロの顔面に向けて放たれた筈の攻撃、気づいた時には鋼の乙女の顔面にゼロの腕が突き刺さり、乙女の腕は宙を待っていた。

零落極夜を纏わせた右手の手刀が乙女の腕を切り飛ばし、次の一手で顔面を抉り取った。

胴体を蹴り飛ばして腕を抜く。顔面のメインセンサーを潰された乙女は周囲を残されたセンサーで警戒するが、その程度ではゼロの動きを捉えることができない。

背後に回り込まれ、頭頂部から左右真つ二つに切り裂かれる。

残すは一機。

鋼の乙女はデタラメにゼロに向けてエネルギー弾を放ち続けるがソレは容易くかわされてしまう。

スラスタで地面を滑るように動いて弾丸を躲しながら地面に突き刺さっていた大剣を拾った。

——零落極夜

一瞬であった。

大剣の刃が漆黒に染め上げられたかと思ったら、ゼロの動きがもう位置段階加速された。

高度な技術である二重瞬時加速による超高速軌道の攪乱と零落極夜の刃による一振り、一瞬にして鋼の乙女は地面にバラバラに崩れ落ちていった。

圧倒的、圧倒的な力。

ゼロは大剣を持ったまま両腕を大きく広げて勝利を示す。

沈黙の勝利宣言。

地面に転がり落ちている無数の無人機の残骸達、百春達は自分たちを苦しめていたあの集団をこうも容易く倒されたとすると自信を失いそうになっていた。



(次は何をしにかけて来る)

百春は雪片二型を構えながら敵の出方を伺う。

ゼロと目が合った。

——戦うか？

奴は無言で語っていた。

……戦わねば。

……勝てない？

……関係ない。

もはやこれは一つの男の意地の話だ。

理解してもらうつもりは毛等もない。

雪片を握る百春の腕により一層力が入る。

そして一歩前に出た。

「……百春？」

隣に立っていた篠ノ之箒が百春の行動に違和感を感じてしまった。

「箒、僕はこれから自分の意地を突き通す」

戦闘開始、三秒前。

「だから」

二秒。

「僕を」

一秒前。

「理解しないでくれ」

零。

瞬時加速によって一瞬で最高速に持ち込んで距離を詰めて、小手調べの一振り。

容易く防がれる。

顔面に向けて蹴りが迫り、百春は咄嗟に腕でこの一撃を受け止める……ことはできずに蹴り飛ばされた。

地面を転がり、追撃のエネルギー弾が百春に迫り来る。転がる途中で自分から大きく後方に飛ぶと弾丸を全て躲した。

雪羅が変形して荷電粒子砲がゼロに向けて放たれ、ゼロも百春に対して右の掌を前に突き出してエネルギー砲を放った。

二つの力がぶつかり合った衝撃を引き裂いて二人は突撃する。

ゼロは大剣を短めに持って速度を上げて攻撃を行う。

「ちつとはマシになったな！それなら少しは誰かを守れるな！」

ゼロは百春の技量の上昇に素直に感心した。

もしこれで少しでも技量が上がっていなかったら、百春は零落極夜の一振りで上半身と下半身が別れることになっていただろう。

「僕はまだ、弱い！」

振り上げられた雪片をゼロは躲した。

「なんだ、何が起こっている」

篠ノ之箒は二人の戦いを見ながらそんな事を呟いた。

原因はゼロと戦っている百春にある。

百春の動きがゼロと戦えば戦うほどに、箒の目から見てもハッキリとわかるほど百春の動きが洗練され始めてきたのだ。

戦っているゼロに、まるで火に誘われる蛾のように、引きずりこまれているようであつた。

このまま戦い続ければ百春は今心に存在している壁を破壊して新たな領域に踏み込むのだらう。

「やめろ……」

しかし箒はその姿に恐怖した。

何故ならば彼女には百春の姿が今は亡き彼の兄、一夏に被つて見えたからだ。

「生まれ、百春！孤独になるぞ！」

箒の叫びに呼応するかのように紅椿に新たな装備が生まれた。

両肩の展開装甲が変形してクロスボウガンを作り上げる。

「百春！そこを退けえええ!!」

ボウガン『穿千』を構える箒、狙いは勿論ゼロ。

百春は危険を感じて咄嗟にゼロとの距離を離して上空に逃げ、ゼロは箒を見た。

大剣を右手に構え直して剣先にエネルギーを送り込む。剣先に大きなエネルギーの

球体が生まれ、一瞬にして圧縮されて小さくなる。

「穿千！」

引き金は引かれ、圧倒的な量のエネルギーが銃口から放たれる。大剣を振り回し、球体を投げ飛ばす。

大地を焼き払う弾丸と回転しながら大地を飲み込む球体。二つはぶつかり合い、強烈な衝撃をアリーナに生み出した。

衝撃を斬り裂いて箒に迫る。

突然箒とゼロの間に弾丸の雨が降り注ぎ、ゼロは咄嗟にスラスターを噴かせて後方に

下がった。

「大丈夫ですか!?!百春さん」

「無事!?!」

上空を見上げれば普段から百春と仲良くしている専用機持ち三人とラウラ・ボーデヴィツヒがいた。

「無事だ。それよりもあいつを倒すぞ。この数なら、倒せる。ここで捕まえてみせる」  
箒は雨月をゼロに突きつけた。顔からは勝利できるといふ自信があつた。

臨海学校で負けてから、箒達は特訓を重ねてきた。

……もう、負けることは無い。

箒の周りに全員が集まる。

構える。

動き出す。

前衛は百春、箒、風の三人。

後衛はオルコット、ボーデヴィツヒ、デユノアの三人が担当する。

手始めにオルコットはBT兵器『青の雫』をゼロの周囲に展開した。

銃弾は何時でも撃ち出せる。

ゼロは呼吸を整えて、冷静に状況を判断する。

敵は六機、一機を除いて機体の性能は圧倒的に格下。パイロットの性能は送られてきた情報から判断するとボーデヴィツヒのみ気をつければ良い。

——問題ない

ゼロは一旦大剣を収縮して、両手を自由にする。大きく手を広げて相手の出方を伺う。

先陣切ったのは箒、雨月、空裂を構えながらゼロに突撃する。

彼女は元々二刀流が得意だったのか知らないが、剣術は中々のものであった。

正確無比にゼロの急所について来る攻撃はゼロにとって予測しやすいものである。

両手の手首をそれぞれ左右の手の甲で弾いて箒の胴体をガラ空きにする。

「倒せる……ねえ。舐められたものだ」

胴体に両手で掌底をブチ込んで勢いよく押し飛ばした。

背後からの気配、ゼロは頭をずらして迫っていたレーザーを躲し、振り向きながら手からエネルギーの弾丸を放って『青の雫』を一機潰した。

百春と凰がゼロに挟み撃ちを仕掛けてくる。

ゼロの両腕のリーチに気をつけながら、長物を駆使しながらゼロの領域の外から攻撃を続ける。

更にそこにオルコット、ボーデヴィツヒ、デユノアの三人からの援護射撃が入る。

ゼロは長物による攻撃は弾き、援護射撃は躲していく。

しかしそれは全てがうまくいくわけでは無い。僅か、ほんの僅かではあるが攻撃が当たり始める。

勝機が見えた。これをこのまま続けたならば勝つことができると思った。

攻撃が加速していき、ゼロもまた加速していく。

——滾る心を抑え込む。

僅かに風の攻撃に焦りの色が見えてしまった。それは本当に僅かで普通の人ならば絶対に気づきはしない。

何年間も命のやり取りをして感覚が研ぎ澄まされすぎていたゼロだから気づくことができた。

ゼロの領域に完全に入り込んでしまった風の得物、双牙天月の柄をゼロは掴んだ。

ゾワリと風の背中に嫌な汗が流れた。

柄を引つ張られ、引きずりこまれる。

腹に膝蹴りを叩き込まれ、意識が僅かに失われる。

風の両腕を抱きかかえながら、閃スプレックスを地面ではなく背後にいた百春に叩きつけた。

余りにも綺麗な流れであつたため、後衛の三人は一瞬見とれてしまっていた。

風から腕を離してゼロは後衛に向かう。

周囲を取り囲むように『青の雫』か動き、弾丸を意にも止めていないかのように簡単に躲しながら突き進んでいく。

「動きを止める！」

ボーデヴィツヒが両肩からワイヤーブレードを六本、ゼロに向けて放った。

そして他の二人はゼロの逃げ道を遮るように弾丸を撃ちまくる。

避ける道はなくなり、目の前からはワイヤーブレードが迫り来る。

受け止める、止まるといった面倒くさい選択肢を取る意味は無い。

逃げる場所が無いのならば作ってしまえばいいだけの話だ。

ワイヤーブレードの軌道を読み取り、先ずは手始めに手の甲で二本のワイヤーを弾いて別のワイヤーの軌道に誘導して二つを絡ませる。

残りの二本のワイヤーブレードを左手で掴み、ボーデヴィツヒを強引にワイヤーで手繰り寄せる。

ボーデヴィツヒもこうなることを予め予測していたのか、ゼロに向けてA I Cを発動……できなかつた。

発動する直前にゼロの右手から飛び出たエネルギーの波がゼロに迫るボーデヴィツヒの肉体を押し返した。



怯んだ所を再度手繰り寄せて、ワイヤーを掴んだまま一本背負いで地面に叩きつけた。

ワイヤーから手を離して、ボーデヴィツヒの腹を両足で一度踏みつけると、残りの後衛二人に向けて跳んだ。

両手に新たな武器を呼び出す。

『零砲・改』

今までの零砲を第二形態様に改良されたもので前よりも幾つかの機能が増えた。

単純な破壊から技巧的な破壊までなんでもござれ。

空中を回転しながら、弾丸を撃つ。弾丸は正確無比に全ての宙を踊る青の雫を撃ち砕いた。

「嘘?！」

バラバラな軌道を描いていた筈のビットを容易く打ち砕かれてオルコットはその射撃の技量の高さに感嘆した。

ゼロが着地、それと同時に両脚でアリーナを駆け回りながら残りの二人に近づく。

二人は下がって距離を取ろうとするが、既に手遅れであった。もう二人のいる場所はゼロの領域の範囲内であった。

一瞬にして距離がゼロに詰められる。

二人の反応が僅かに遅れた。

近接格闘の得意ではないオルコットが手始めに狙われた。ブルー・ティアーズにつけられた唯一の近接武器であるインター・セプターを呼び出そうとしたが、それよりも早くゼロの放った弾丸がオルコットを吹き飛ばした。

宙を舞いながら追撃の弾丸がオルコットの体力をたやすくうばった。

残るはデュノアただ一人になった。

ゼロは武器を収縮、再び徒手になる。両手を硬く握りしめ、右手からエネルギーが漏れ美しく光る。

強烈な一撃が迫り、デュノアは躲さずに咄嗟の判断で左肩のシールドで防ごうとした。

だがそんなものは無意味であった。頑強なはずの盾は容易く砕け散り、ゼロの右手がデュノアの肩を掴んだ。

更に左手も盾を砕いた。

守る術がなくなってしまった。

左手に付着した残骸を振り払い、より一層拳を硬く握りしめた。

無慈悲な殴打がデュノアを襲う。顔面から胴体までくまなくゼロの拳がデュノアを砕きにかかる。

デユノアの膝から力が抜けていく。抵抗しようとしても、体が動くのとはほぼ同時にゼロがその動きを止める。

「……」

大振りのアッパーがデユノアの胴体に吸い込まれる。

沈黙がアリーナを占領した。

崩れ落ちるデユノア。

ゼロは蹴りをいれて遠くに飛ばした。

全員倒れてしまった。

簡単にあっさりとは。

暴虐の戦士が振るった圧倒的な暴力によって。

「どうした、これまでか。もっとやれる筈だろうが、それともぬるま湯過ぎて戦う心もないのか？」

ゼロは近くに倒れていたデユノアを蹴り飛ばした。

「来いよ、織斑百春！ てめえはその程度なのか、なら俺が今この場にいる全員を殺し尽くしてやろうか！ 守りたいなんて二度とほざけねえ様にしてやろうか！」

硬く握りしめた拳を百春に突きつける。

「させるか、そんな事をさせるか」

雪片を杖にしながら、百春は立ち上がった。

「良いぞ、それでこそ助けられた人間だ。ならば刃を向けろ、怒りに染まるな。全身全霊でこの俺を止めてみな」

「うおおおお!!」

ゼロに向けて百春が突撃する。

渾身の力を込めた一振りをしかけたが、手首を掴まれて容易く止められてしまった。

「ほら、簡単に捕まった。こんなんだから簡単に誘拐されてしまうんだよ、モンド・グロツソの時みたいにな」

「……黙れ」

百春の力が増した。

掴まれていない左腕にある雪羅のクローモードで攻撃を仕掛けるが、こちらも簡単に止められてしまう。

「お前の兄貴もそうだったぜ、簡単に捕まって、無様に泣き喚いて、最後には一人で絶望していやがった」

「黙れっつていつてるだろうが!!」

最後に残された蹴りを仕掛けたが、これも予測されていたかの様に防がれた。

「蹴りはこう放つんだぜ！」

鋼鉄の巨大な槍に貫かれたような衝撃が百春の腹を襲った。

「飛べよ」

百春の腕から手を離して、勢い良く百春を飛ばした。

「ああ、ぐあつ！ああ！」

貫かれた衝撃に悶え苦しむ百春。

「ちったあ、マシにはなっているが全然だな。代表候補級にはなったようだが、せめて国家代表級になってくれねえと張り合いがない。雑魚を潰してもつまらない、滾る勝負をさせてくれよ」

言葉を言い終えると同時にゼロはしやがみ、背後から迫っていた箒の攻撃を躲した。

「せめて殺意の線は隠してくれよ。目を閉じていても見れるよ」

「舐めるなよ！」

金色に発光している紅椿に乗った箒が両手に太刀を持ったまま何度もゼロに向けて切りかかった。

（この発光、単一能力によるものか？しかしシールドエネルギーの回復とは厄介なものだ）

ゼロはカウンターを何度も箒に叩き込みながら、減る事なく、寧ろ増え続けている紅

椿のシールドエネルギーを見て、単一能力を見破った。

「この力があれば、私は貴様と戦える。力が生まれ続ける限り、私と紅椿は戦う事ができる。絢爛舞踏、力は生まれ続ける。消費する事しかないお前は、いつか朽ちる！」

「果たしてそうかな！」

大振りの一撃に合わせて、ゼロは箒の背後に回った。

「幾らエネルギーを生み出せると言っても、貴様が強くなつたわけではない」

背後から顎と太腿を掴まれて肩に担がれ、ゼロは左足を軸に激しく回転を始める。

「貴様の骨を全て砕いてしまえば、戦う事ができないだろう。違うのか!？」

回転の勢いを殺す事なく、ゼロは箒を上空に投げ飛ばした。

箒の背中がゾワリと震えた。

彼ならば全身の骨を折るなど容易いという確信があつた。

ゼロも上空に飛び上がり、回転する箒に追いついた。

右手で箒の後頭部を掴み、左手は左脚を掴む。左脚の脛で胴体を抑え込み、最後に右足で胸を踏み潰す。

「力の雪崩に飲み込まれてしまえ」

天高くから瞬時加速を行い、地面に向けて孟加速を始める。

箒は直撃はくらくらまいと必死に足掻いて抵抗するが、ゼロのロツクが余りにも堅すぎ

るため振りほどく事ができない。

「大雪山落とし！」

地面に直撃する、その寸前の事だ。

ゼロに向けて一振りの太刀が投げつけられた。

ゼロは咄嗟に拘束を解除して、その太刀を避けた。

ゼロは着地すると同時に太刀が投げつけられてきた方を見た。

「漸くお出ましか。ビビって尻尾巻いてんのかと思つていたぜ」

その人物は倉持技研が新たに作り上げた試験型第三世代機『打鉄・試三』に身を包んでいる。

「黙れ、これ以上は貴様の好きにはさせない。これからは私が相手だ」

戦乙女、織斑千冬参戦。

## 第86話

異常だ。

楯無は目の前で繰り広げられる戦いを見て、素直に心で思った。もし今戦っている人間が敵でなければ、楯無は闘い方の一つでも教わろうとしていただろう。

身の丈ほどもある漆黒の凶刃を片手で振り回し、四方から襲いかかる勇敢な少年少女を打ち倒していく。

その姿はまるで破壊者。

本能に従い、周囲に災厄を降り撒き散らす悪。

それでも少年少女は立ち上がり、果敢に敵へと攻める。

差がある。

明確な実力差が敵と彼らには存在している。機体のスペックもパイロットの実力も敵の方が高い。

敗北は瞭然。

しかし、一人の戦乙女が舞い降りた。



今世の力の象徴。

破壊者と戦乙女は衝突する。

「貴様がツ！また！」

「どうした？」

ゼロと織斑千冬が衝突する。

冷静沈着なゼロとは対象的に、千冬の頭には血が登っている。

刃と刃が交錯する。黒零の持つ頑強で強大な漆黒の大剣と打鉄の装備している長剣、その重さの違いを刃を通じて千冬は実感していた。

「変わったな」

「何がだ！」

幾度の刃の交錯があっただろうか、千冬の刃がゼロの刃に弾かれた。

そこにゼロからの追撃に回転切りが迫る。

千冬は剣を急いで胴に添えて回転切りを防ごうとするが、ゼロから放たれた回し蹴りが千冬の腹に刺さった。

予想外の動きであつた。斬撃と予測していた動きが途中でまるで別の、蹴りの動きに変化した。

吹き飛ばされる千冬、そこにゼロが迫る。

「弱くなつた!」

右足による踏み潰し、咄嗟に身を振つて躲すが今度はトーキックが横腹に直撃した。

「貴様!」

復活した箒が刃を構えてゼロに迫る。

「部外者が」

一刀を掲げ、己の慣れ親しんだ技を放つ。

それに対してゼロは己の右拳を硬く握りしめ、右手にエネルギーを纏わせる。

「割つて入るなア!」

振り下ろされるタイミングに合わせた必殺のカウンターが箒の胸部に直撃した。

全ての空気を吐き出させ、肉体を容易く吹き飛ばした。

黒零は箒に対して追撃を仕掛けずに織斑千冬に向けて移動し始めた。大剣を片手で持ち、斬りかかる。

織斑千冬は初撃を剣で逸らしたはしたが、その衝撃で打鉄に備え付けられていた剣が叩き折られた。

織斑千冬は今度は打鉄のシールドを呼び出して、次の攻撃に備える。

「所詮今の貴様は牙を無くしてしまつた獣だ。いくら貴様が強者のオーラを放とうがそんなものは紛い物、前線を離れ過ぎて訛つたか！」

左手に刃を持ち、右手を硬く握りしめながら無駄の無い拳の連打が千冬を襲う。

何時ものゼロとは明らかに違う。

己の感情を何も包み隠さずに叫び続けている。

目の前にいる織斑千冬の不甲斐なさに、自分を亡くして手に入れた栄光に嘆く。

そして何よりも、弱くなっている事に怒る。

悲しみ、怒り、喜び、様々な感情が一夏の感情が湧き上がり、理性を殺して本能が喚き散らす。

「守るか！守るのか！？違うはずだ、貴様はア！」

黒零の拳が打鉄の盾を容易く破壊した。

「何ッ！」

「違うだろうが！！貴様の戦いは所詮なにも守れない。大勢を屠りその屍の上でしか生きて行くことしかできないのに、守るのか！」

ゼロの一閃が、千冬の肉体を襲った。絶対防御が発動していなければ、この一撃で確実に千冬は死んでた。

「さあ、来い。牙を生やせ、爪を磨け、全盛期の貴様でなければ……否、例え全盛期であったとしても俺<sup>オレ</sup>たちには勝てないがな」

両腕を広げながら、一步また一步と千冬へと距離を詰めていく。魔王の歩み、死を纏わせた刃片手に覇気を放つ。

「私は勝つてみせる！私が守った百春の為に、守れなかった一夏の為に、貴様からマドカを取り戻すために！」

千冬は新たに双剣を呼び出した。

「笑わせてくれる！」

ゼロは大剣を振り回して一撃で双剣のうちの一本を容易く破壊した。

「お前は織斑一夏を殺したんだよ！守れなかったんじゃない、殺したんだ！理解しろよ！」

更に追撃の一撃を仕掛けるが、千冬は後ろに下がってこの一撃を躲した。

「守れなかった人間に悔いがあるのなら、全員守れなくしてやろうか！そうすれば悔いはなくなるだろ！」

ゼロは手に持っていた柄の長い大剣、大鉾を初めて両手でつかんだ。

漆黒の身と黄金の刃が天高く掲げられる。

「全力を出してやろう、期待に答えてみるよ『零』」

ゼロは武器の名前を叫ぶ。

振り下ろした一撃は地面を砕き、横薙ぎの一撃は空間を斬りさく。

力任せではない、確かな技術力の混じった攻撃を千冬はマトモに受け止めることができなかつた。

（まさか第三世代機に乗っていてもここまで差があるとはな……私が実践を離れすぎていて感が鈍つたのも理由の一つか）

「考えすぎてるぞ！」

思考にはまり、僅かに薄れていた意識につけこみ、ゼロは回し蹴りを叩き込んで千冬を蹴り飛ばした。

「鈍ってるよなあ！そんなんじやあ、子犬一匹噛み殺せないぞ！殺処分されちまつたらどうだ！」

「黙れ！」

打鉄・試三に備え付けられてある武器はまだある。武器があるのならば戦い続ける事ができると、勝つ可能性が残つてあると千冬は思った。

「貴様はさつき束の命令でこの場所に来たと言つたな。貴様は束とはどういう関係だ。

「No. 000のコアとは何だ！」

「簡単だよ、彼女は我々の……正確に言えば俺の協力者だ。彼女は俺に原初のコアであるNo. 000をくれたんだよ、なにせこれは俺以外には使えないからな。篠ノ之博士は貴様に話さなかった理由は知らないがな！」

「束が貴様らと協力だと……信じられるか、そんな話」「信じなくて結構……じゃあ続きを始めるぞ！」

一度大鎧を振り回してからゼロは千冬に突撃を開始した。対する千冬は攻撃を一度もくらくまいと攻撃を躲しながら後方に下がって行く。

逃げる千冬、追いかけるゼロ。そんな様子が数秒続いたころ、変化が訪れた。

突如としてゼロの動きが止まった。

「捕縛完了……」

ゼロに背負い投げを食らって地面に仰向けに倒れていたはずのボーデヴィツヒが何時の間にかうつ伏せになって、此方に手を延ばしてAICを使いゼロの動きを止めた。

「よくやったラウラー！」

千冬はゼロをAICの射程圏内まで誘導していた。そして引つかかっとなればあとは動けぬ敵を叩くだけ。

予備の太刀を呼び出して、構え、ゼロに突撃した。

不可視の網に絡め取られ、身動きが取れなくなる。  
「甘くみるなよ」

黒零の両腕がそれぞれ別の色で発光を始める。

ジリジリとゼロの腕が動き、そして不可視の網を引きちぎった。

「は!?!」

「何!?!」

今までA I Cが破られることはあったがそれらは全て背後からの奇襲などによるものであった。

だが今のは違う。

真つ向から力業で強引に打ち破られてしまった

何という圧倒的な力。

完全に決めにかかっていた千冬は刃を止める事ができずに振り下ろしてしまった。ゼロはそれをスラストを活用して横にスライドして躲す。

千冬は脇腹に膝蹴りが叩き込まれ壁まで吹き飛び、ボーデヴィツヒはゼロの右手から放たれたエネルギーの直撃を受けた。

「どうした!?!それで終わりか? つまらないなあ、つまらないぞ! もっと、本気を出したらどうなのだ!?!」

ゼロは吹き飛ばされた千冬まで歩いて進んでいく。何時でも殺せる自信があるからこそ、余裕を持っている。

「守ってみろや、守ってみろよ!!」

壁に倒れかかっている千冬に向けてゼロは決定打にはならないほど小さいエネルギーの弾丸を執拗に放ち続ける。

何発も何十発も立ち上がるまで撃ち続ける。

「失った人間の為だ!?! だつたら立ち上がれよ、気張れよ! 失った人間の為だとかほざきながら、貴様は失った人間の事を何も理解していないはずだろ! 織斑一夏の事を貴様は理解していたのか! ああ!?!」

弾丸を刃で受け止めながら、千冬は必死になつて立ち上がろうとする。

「黙れ、黙れ、黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ!!」

弾丸を切り裂きながら千冬は立ち上がった。

「貴様に私の何がわかる! 私はいらなかつた! 栄光などいらなかつた! ただ普通の日を過ごせば良かった! 皆で、家族皆で仲良く過ごしたかった!」

千冬はゼロに突撃する。

「でも零れ落ちたんだ!」

「こぼれ落ちたのか、でもなこれだけは言える。お前は織斑一夏を掴まなかつた」



両者つば競り合う。千冬は両手で柄を持って刃を押し込もうとし、ゼロは右手一本で大剣を掴んでそれを受け止める。

「お前は織斑一夏の何を理解していた。理解していなかったはずだろ？それを拒んだはずではないのか？拒んだから、助けなかった」

「違う。私は理解しようとした。でも理解できなかったんだ！けど、私は一夏の事を大切だと思っていた！」

「思う事など、誰にもできるぞ。思いは伝えねばならん！」

片手一本でゼロは千冬を押し返し、右手からエネルギーを放って壁にめり込ませた。

追撃の一撃を仕掛けようとしたが、此方に迫って来た銃撃を避ける為に大きく空に跳んだ。

地面を見下ろせば此方に向け武器を構えている嵐、オルコット、デユノアの三人がいた。

「本当に、本当に、本当に！」

ゼロが右手を大きく開いた。何もかもを飲み込む様なエネルギーが生まれ、先ほどのゴーレムの砲撃を弾き返した極大の一撃を横薙ぎに放った。

地面が焼き払われる。

バラバラに砲撃を躲した三人はゼロに目を付けられる。

瞬時加速を超える二重瞬時加速で、ほぼ間反対にいた三人に近づく。

こんな戦いをしていてシールドエネルギーの残量は大丈夫なのかと思われるが、黒零のソレは普通の倍近くある。これはNo. 000のおかげである。

たった一人の軍隊、それこそが黒零の戦い。

### ——零落極夜

黒零の右手から零落極夜の力が溢れる。

先ずはオルコットを潰しにかかる。

B T兵器ブルー・ティアーズのなくなってしまった彼女に残されたのはライフルであるスターライトMk. IIと近接武器のインターセプターしか残されてない。

ライフルでは高速で動き続けるゼロを捉える事ができないためインターセプターで対処するしかない。

だが彼女はゼロと比べると近接能力がなさすぎる。

ゼロは周囲を飛び回る。そして一瞬の隙について先ずは上空からの踵落としをオルコットの左肩に叩き込む。

反撃を食らう前に喰らい尽くす。

零落極夜を発動させた右手の爪を立て、オルコットの装備を切り裂いた。落ちていくオルコット。

残った二人は一箇所に固まり、ゼロの攻撃に警戒する。だが無意味。

ブリュンヒルデ級の実力を持つゼロも候補生止まりの彼女たちでは余りにも無惨な結末があるのみだ。

龍砲の乱射を掻い潜り、ゼロは容易く間合いに二人を取り込んだ。

対応はもうない。

「もう、終わりだ」

右手に持ち替えた大剣に零落極夜を纏わせ、一振りですぐ二人のシールドエネルギーを喰らい尽くした。

「ほら、お前の守りたいものなんてこんなんだぜ。織斑千冬よお！」

アリーナに転がるゼロが倒した千冬の生徒達、千冬の守りたいもの。それをゼロは全て容易く打ち砕いた。

「まだだ、まだ僕がいる」

百春が立ち上がる。

その足元には金色に機体を光らせた筈が倒れていた。

(エネルギーの譲渡が可能なのか、見方にいれば頼もしいが、敵だどこまで厄介なのか)

右手を箒に向けて突き出し、エネルギーを放出した。

「零落白夜」

だがその攻撃を百春は一振りで払い除けた。

「ああ、それが零落白夜だ。その意思こそが力になる」

ゼロは大剣を左手に持ち換える。

「二人掛かりで来い。出なければ勝てないぞ」

百春の隣に千冬が並び立ち、お互いに得物を構える。

互いのオーラによる目に見えぬ力が空間を冒していく。

先に動いたのは千冬と百春、ゼロを挟み込む様に動き、左右から攻撃を仕掛ける。

左右からの挟撃、ゼロはこれを舞うように回転して剣の勢いを増しながら巧みに防いでいく。そして相手が攻撃してくるのに合わせて右手での砲撃を行って寄せ付けない。

二人掛かりで戦っているのに、ゼロを押し切る事ができない。

機体の性能もパイロットの実力もゼロの方が上である。

もしこれが現役時代の千冬ならばパイロットの実力だけならば対等だっただろう。

しかし今は違う。千冬は余りにも長く実践から離れすぎていた。それによって実力はあの頃に比べて確実に落ちてしまっていた。

それに加えてゼロはコアとの相性が良く、機体の性能をほぼ完璧に引き出している。

それに対して千冬が乗っているのは篠ノ之博士が作り上げたオリジナルコアを使っているが、所詮は急場しのぎの即席ペア。

何十、何百といえる戦場を戦い抜いて来た二人とは潜ってきた場の数が違いすぎる。

百春は二人の戦いについていくのが精一杯であった。

千冬は現役時代に比べて実力は確実に落ちてはいるがそれでも国家代表級の力は確かにある。

そしてゼロは言わずもがな、ブリュンヒルデ級の実力と紅椿並みの高性能機体の組み合わせは現在存在しているIS乗りの中では最強とも言える。

何としてでも喰らいつかねば、百春の中のそんな思いが焦りを生み出す。

ほんの僅かな隙でも生み出せれば、千冬と百春の二人は思うが、ゼロの圧倒的な集中力の前ではそれは期待できそうにない。

「雪羅！」

白式の左腕に付けられた雪羅がクローモードに変形する。

雪片と雪羅による零落白夜の二刀流、零落白夜によるエネルギーの消費は普段の倍になつてしまうが、決定力は遥かに上がる。

零落白夜が少しずつ、しかし確かに黒零の装甲を傷つけていく。

状況の不利を悟ったゼロは挟撃から抜け出した。後ろに下がりながら大剣を右手に持ち換える。

追いかける百春、その後ろからは千冬がくる。

手脚全てを使いながらゼロは攻めの姿勢を取り続ける。

零落白夜の二刀流など長く続ける事は出来ない。ゼロは理解している。それによって生まれる攻めの焦りさえも。

待つていれば勝手に敵から向かってくる。

百春が己の首を締め、瞬間加速でゼロに突撃した。

そしてそれがハナからわかっていたかのように前方に向けて瞬間加速を行い、百春の直前で跳ねた。

「なっ!?!」

百春はその行動が予想外であった。

百春の上を跳び越したゼロ、百春の背後から来ていた千冬に狙いを定める。

両手で大剣を持って彼女めがけて勢いそのままに振り下ろす。

千冬は剣を振り上げて迎え撃つが、力も強度も違いすぎた。容易く千冬の持っていた太刀は叩き折られた。

千冬の手から武器がなくなる。

ゼロは追撃を仕掛けるが、彼の背中に荷電粒子砲が直撃した。

振り返るゼロ、千冬はそれを見てゼロの腕を掴みにかかるが、ゼロは裏拳でそれを阻む。

怯んだ千冬の胸ぐらを掴んで百春に投げつける。千冬は空中で体制を整えて美しく着地する。

「うおおおおおー！」

再度百春が零落白夜の二刀流で猛攻を仕掛ける。

しかしゼロは右手に持った大剣に零極夜を纏わせた大剣で先ずは左腕の雪羅を破壊した。

続けて雪片を持つ右のマニピュレーターを上に向けて斬りとばすが、その際に左肩の装甲が零落白夜の一撃をまともにくらい切り落とされてしまった。

(カウンターを狙われたか、左肩自体を切り裂かれた訳じゃない。まだ戦える)

悔しさに滲んだ表情をしている百春を蹴り飛ばし、千冬にトドメを刺そうとするがその千冬は目の前にはいなかった。

上空にセンサーがIS反応。

ゼロが見上げるとそこには切り飛ばした雪片を持った千冬がいた。

「これで終わりだあああ!!」

零落白夜は未だの残滓が残ってある。このまま切り裂かれたのであれば確実に絶対防御を超えてゼロを傷つける事になる。

だがゼロは避けなかった。

何度その姿を見たか、何度その姿に強い感情を抱いたか。

今の千冬の姿は、牙の抜けきったひ弱な獣ではない。

あの頃の、一夏が見てきた獰猛な獣であった。

(ああ、これが……これが織斑千冬だ)

振り下ろされた刃は黒零のヘルメットを切り裂き、剣先はゼロの僅か数センチメートル前を通過した。

そしてアリーナにいる全ての人間の時間が止まってしまった。



## 第87話

アリーナは静寂に包まれた。

ゼロに対して不意打ちではなく、まともな一撃を与えた。

アリーナにいたIS学園の人間は希望が生まれた。

織斑千冬ならば勝てると。

「一太刀、先ずは一太刀だ」

この生まれた希望の火を消すわけにはいかない。千冬は直様ゼロに対して追い打ちを仕掛ける。

(モニターが壊れた。視界がない)

黒零のヘルメットのモニターは零落白夜によって斬られ、その機能を失ってしまった。

視界が失われた中でゼロは千冬に立ち向かう。

自分でモニターの切り口に指を突っ込んでヘルメットを破壊して視界を広げる。

ゼロの目と千冬の目が交錯する。

千冬が振り上げた雪片を紙一重で躲し、腹に蹴りを入れて遠くに飛ばした。

「唾々、せつかくのヘルメットが使い物にならなくなってしまった。デザインは気に入っていたのだがな」

そう言つてゼロは自らの手でヘルメットを破壊して素顔を露出させた。

「……………え？」

その言葉はゼロ以外の誰かからの自然と漏れたものであった。

「……………一夏？」

千冬の口から一人の人間の名前が零れ落ちた。

それは自分が救えなかった名前。

それは自分が大切だといった者の名前。

それは自分が理解することのできなかつた者の名前。

千冬の手から雪片が落ちた。

圧倒的な虚無感が千冬を襲った。

——織斑一夏の時にも俺はあの場所にいた。

……当たり前ではないか、何せ誘拐された本人なのだから。

加速度的に今までのゼロの言動が繋がっていく。

何故篠ノ之束と繋がっている。

……当たり前ではないか、私を除いて束と一番仲が良かったのは一夏だった。

どうすれば良い、私は次に何をしたら良い。

頭の中は思考の網が張り巡らされているが、次に自分がどんな行動を取れば良いのか  
千冬は何一つわからない。

「——さあ」

ゼロから声が出る。

千冬はその声に体が震える。

——織斑一夏を殺したんだ。

——理解していなかった。

——織斑一夏を掴まなかった。

先ほどゼロに言われて突き刺さった言葉が、今度は織斑一夏の言葉になって千冬の心  
に深く突き刺さった。

「ケリをつけよう。今日はその為に来たのだから？」

ゼロが大剣を両手で構える。

「やめてくれ」

千冬は一步後ずさった。もう戦えない、心は折れてしまった。

目を逸らしたい。

……………悪夢だ。これは悪夢なのだ。目が覚めればまた、また、また、また……………また？

何がまたなんだ？

「どうした、殺したいほど憎いのだろ？来るといい」

「ヤメテクレ!!」

目の前の現実から逃げるような悲痛な千冬の叫び声アリーナに無情に響いた。

「百春さんの……………クローン？」

一夏の事を何も知らないオルコットは素顔を晒したゼロを見て、真っ先に彼の事を百春のクローンだと思った。

彼女の機体は半壊状態にあり、碌に移動する事が出来ない。

「違うわ」

すぐ近くにいた風がオルコットの意見を真っ先に否定した。

彼女は一夏を見た事があるからだ。

「あれは……一夏よ」

「……一夏？誰なのそれは」

デュノアが尋ねた。

「百春の双子の兄よ」

「双子の兄……ですか？」

「ええ、そうよ。でも、彼奴は何年も前に死んだはずよ」

「でも、彼は生きてる見たいだよ」

「だから、わからないのよ。何で生きているのか。何でISに乗っているのか。何で何年も姿を現さなかったのか」

「ほら、構えろよ」

大剣が千冬の喉に突きつけられる。

だが千冬は動こうとしない、いや動く事が出来ない。目の前で起こっている現実を直視できずに、現実を拒んでいる。

「お前は、お前は私を恨んでいるのか？」

漸く千冬の口から言葉が零れ落ちた。

その言葉を聞いたゼロは喉に突きつけていた大剣を引つ込めた。

「そうだなあ、確かに僕は貴方の事を恨んでいた。あの日誘拐された僕は貴方を恨んだ。何で助けに来てくれない。大切だと言ったのは嘘かと」

自らの頭を掻きながら、ゼロは忌々しそうに答えた。

「どれだけ泣いたか、どれだけ叫んだか、どれだけ恨んだか、どれだけ怒ったか、どれだけ絶望したか、どれだけ呪ったか、どれだけどれだけどれだけ!!」

感情の爆発、素顔を晒したゼロは己の心に従うままに感情を暴露し続ける。

その一言一言が千冬の心に突き刺さり、抉ってていく。

「死んでいたと思っていたものが生きていたとわかったのであれば本来は嬉しいはずなのに、ここまで残酷になるとは。」

「ああ、ああ」

千冬の右目から涙が零れ落ちた。

「私は、私は」

「でもなあ——」

ゼロが両腕を大きく広げた。表情は何かを悟ったようであった。

「もうそんな事は俺にとっては関係ない。俺にとってはもう過ぎてしまった事なんだよ」

その顔は笑っていた。

「だから今は——」

「一夏あああああ!!」

復活した箒が両手に刀を持って突撃して来た。

「邪魔するなよ」

太刀筋を見きって、ゼロは大剣で太刀を受け止めた。

箒を見る目は明らかに興味がなく、やる気がなさそうであった。

必死に刃を押し込んでくる箒を、ゼロは簡単そうに大剣で受け止めている。

「お前は！お前は！」

「なんだ、まだ動けるんだ。厄介だな、無限にエネルギーを生み出せるというのは」

「千冬さんがどれだけ泣いていたと思っっている、百春がどれだけ悲しんでいたと思っ  
ている」

「さあ？」

興味なさそうにゼロは言った。

「貴様はあああああ!!」

ゼロが箒に押され始める。

「本当に面倒だ………耐久実験でも行つてやるか。新しい装備を使つてやるよ、天を仰ぎながら盛大に感謝しろ」

黒零の右足が右手と同じようにエネルギーに包まれる。

ゼロは箒を押し返すと直様持つていた大剣を上空に放り投げた。箒の目線が投げられた大剣に移った。

ほんの僅かな隙ではあつたが、その僅かな隙でもゼロにとつては十分なものである。

一打目は持ち上げるような鋭い左アッパーが箒の体を浮かせた。

二打目を警戒して箒は後ろに下がろうとするが、それよりも速くゼロが箒の両肩を掴み、今度は左の飛び膝蹴りを胸に叩き込んだ。

宙に浮かぶ箒、ゼロは流体のように動いて背後に回り込むとエネルギーを纏った右足でスラスターを蹴り、破壊する。

舞い上がった箒に今度は腹に右の浴びせ蹴りを叩き込んで意識を刈り取った。

「さあ、続けようか。話を、何が言いたい？聞いてやるよ。ゆつくりとお話をしよう。戯言でも妄言だろうと虚言でも真実でも、好きにすると良い」

一步一步近寄る。

千冬は尻餅をついたまま、下がっていく。



ゼロは一瞬で千冬との距離を詰めると、ISを解除して彼女の両肩を強く握りしめた。

……目を逸らしたい。

……目を逸らさないと。

……私は一夏を

「僕を見ろ」

落ち着いた声音であったが、千冬にとってそれは一夏の心からの叫び声のように聞こえた。

「逸らすな、逃るな、退くな。獣の様な荒々しき力を持っていたその瞳で捉えて、逃がすな。今度は捕まえられるか、試してみろ」

「違う、違う違う違う違う!!お前は、一夏はあの時死んだはずだ!お前じゃない!」  
そんなことを言っただけはいるが千冬自身はよく理解している。今日の前にいる一夏が偽物でもクローンでもなく、本物なのだということ。

「死んだって、死んだって聞いたんだ!」

千冬の目から涙が溢れ出して、薄い化粧を剥ぐ。

その言葉を聞いて一夏は千冬の肩から手を離し、右手にナイフを呼び出した。  
「じゃあ、確かめるか」

一夏はなんのためらいもなく自分の左腕にナイフで傷をつけた。

血がこぼれ落ちて、アリーナの大地に赤い斑点を作り、それは海になって広がって行く。

まるで見せびらかす様に左腕を高く上げる。

「ほら、生きてる」

ゼロは続けて自分の右手に血を塗りつけ、右手を真つ赤に染め上げた。

そして千冬の涙の跡に自分の血を塗りつけた。

「熱いだろ？熱いだろ。熱いだろー！」

ゼロは笑っていた。

「生きている熱さを感じ取れ、亡霊の冷たさを感じ取れ」

逃げれるならばどれほど楽なのだろう。

狂ってしまったならば今日の前で起こる惨劇を理解せずに済むはずだ。

もう終えてしまってもいいのか。

「貴方が僕を捨てたのなら、今俺は貴様を捨ててみせよう！」

ゼロが千冬を突き飛ばし、彼女は力が一切入らずに尻餅をついた。

「感動的で劇的！」

変わってしまった。

変わってしまった？

……私が何を知っていた？

「さようならだよ、僕」

ゼロは再び黒零を身に纏い、自分の顔にスコールから貰った冷たい仮面を被せた。

呼び寄せた大剣『零』が地面に突き刺さる。

「訣別は済ませた」

大剣を手に取り、己の魂を震わせる。

千冬は尻餅をついたまま体を小刻みに震わせている。最早戦える力は残ってない。

立ち上がる心さえ消え去った。

「覚悟を示せ、世界は止まらぬ。戦うならば生きろ。止まるならば死ぬ。俺は戦い続け

てみせる、俺の因縁を消すために！」

背中が熱を帯びる。

一步ゼロが前に出ようとすると、彼のこめかみ目掛けて槍が飛んできて、ゼロはそれを一瞥することもなく手の甲で払い飛ばした。

少し遅れてゼロは飛んできた方向をみると、そこには妹の更織簪に肩を貸して貰って立ち上がった更織楯無がいた。

「お姉ちゃん、本当に大丈夫なの？」

簪は姉の容体を心配していた。楯無は何機ものISの自爆に巻き込まれてしまい、その身は酷く傷ついている。

ISのエネルギーも無人機の攻撃によって空になっていたが、簪のISのエネルギーを半分分けてもらった事で起動させた。

「大丈夫よ、心配いらないわ」

楯無は簪から離れ、右手に蛇腹剣を持った。膝に入っている力は今にも抜けそうで、左肩はダラリと無気力に垂れ下がっている。

勝てる気配がない。

「無理はしないでね」

「無理してでも止めるしかないのよ」

動き出す楯無、目指すはゼロ。余計な動きをする程の体力は残されておらず、最短の道で行くしかない。

振り下ろされる蛇腹剣、ソレをゼロは容易く徒手で止めて見せた。

まるで自分自身の力をこの場にいる全ての人間に対して見せつけるようなパフォーマンス

マンスのように。

「鈍いな、こんなものでは豆腐も切れんぞ。それにな、我々は君たちの敵ではないのだが？」

「素晴らしいながら、コレは何ー！」

コレとは周囲に広がる惨状の事なのだろう。

敵ではないのなら、こんな惨状を作り出さない筈だと楯無は言いたいようだ。

「降りかかる火の粉ぐらい払わせろ。まあ、払うのが激しすぎたか？」

その言葉の直後、楯無の持っていた蛇腹剣が容易くへし折られた。

追撃の回し蹴りが楯無の横腹を抉る。傷を追った楯無に取ってはとてつもなく重たすぎる一撃、耐えきれぬ訳もなく無力にも吹き飛ばされる。

「ゆっくりと眠るがいい。悪い夢が見れる筈だ」

倒れた楯無に言葉をかけると、ゼロは少しだけ笑った。

上空に熱源反応、上を見れば雨のように降り注ぐミサイルの嵐、ミサイルの発射元は更織簪。彼女のＩＳ打鉄式に搭載されてある『山嵐』による合計４８発のミサイル。

「よくもお姉ちゃんをー！」

ゼロはこれを直様迎撃するのではなく、右手に持つ大剣により一層力を込める。

広がっていたミサイルがゼロに向かって集まり始める。

一瞬であった。

右の肘に取り付けられてあるスラストーを利用した超高速の抜刀、刃を纏うエネルギーが飛び出し、引き裂くように空間に広がった。

簪の誇りを打ち砕くような一撃であった。

簪は膝から崩れ落ちそうになる。あんな簡単にも自慢の武装が打ち砕かれた、簪は目の前の存在に恐怖を感じる。

降り注ぐミサイルの残骸を身に受けながらゼロは簪に接近した。冷たい無機質なマニピュレーターが簪の頬を優しく挟み込んだ。

「啞々、その目だ。昔の俺が持っていた目だ。今にも変わろうとしていたが、まだ変わりがれていない」

仮面の翠の瞳が簪の白うさぎのような赤い目を捉えた。

「貴様は姉に対してコンプレックスを抱いているな。分かる、理解できる、共感できる。俺も昔はそうだった」

「違う、私は貴方とは違う。貴方みたいな人とは違う！私はお姉ちゃんと向き合うと決めたの！」

力強い宣言、逃げる事はしない

自分の力で目の前を歩く強大な姉と並び、そして超えると決めたのだ。

「成る程、俺と君とでは違うようだな。君は姉に見られ、見ながら越えるようだ。だが私  
は見られずに越えた。それが違いだ」

ゆつくりと彼女の頬から両手を離れた。

「だからこそ、俺は君に敬意を払って全力で潰してあげよう」

ゼロの両手がそれぞれ別々の光を放つ。簪は警戒を行う。どのような手を打つてく  
るのか全く想像がつかない。

圧倒的な迄の存在感、そして雑念を一切感じさせない、刀匠によって極限まで鍛え抜  
かれたかのような美しさまで感じさせる程の純粹な殺意。

手始めに左の掌から不可視の『力』による衝撃波が簪の臓器を貫いた。

一瞬で崩れ落ちそうになるが、意識が途切れてしまう寸前の所でなんとか簪は踏ん張  
り、得物である超振動薙刀『夢現』を振り回す。

だがそれは容易く躲される。

そして振り上げに合わせてゼロは薙刀の刃の付け根目掛けて右の手刀を振り下ろし  
た。

両断される薙刀、ゼロは追撃として手刀を作っていた右手を握り拳に変えた。

「零落極夜……」

湖の水面に静かに波紋が生じるような、落ち着いた声音であった。

右手が黒に染まる。第二形態になる事によつて手に入れた零落極夜を手纏わせる能力、必殺の一撃が簪の胸に決りこまれる。

「君も姉と同じように悪い夢を見なさい。そして起きる事に快さを感じろ」

何も言わずに簪は崩れ落ち、うつ伏せに倒れようとするのをゼロが受け止め、優しく仰向けに寝かせた。

「さて、最後まで立ち上がってるのは……やはりお前だよなあ、弟」

「

振り返る事なく、ゼロは後方に立っているであろう百春に声をかける。

「兄さんは……兄さんは何がしたいんだ！千冬姉を倒したり、僕に助言をしたり、皆を倒したりして！僕にはわからない！」

百春は千冬のようにゼロが一夏である事を否定しない。そんな事をする意味はない、細胞レベルの感覚で理解しているのだから。

「それが知りたいのか？ならば答えさせてみる。お前の武を以つて、俺に示して見せろ」

ゼロは振り返り、大剣を構える。

「ならば武を以つて答えさせてみせる。兄さんの心を！」

近くに突き刺さっていた雪片を拾い、構える。

「向かつて来い、弟よ」



「貴方を倒す、越える。兄さん！」

衝突し合う二人、これは互いの意志がぶつかり合った、唯のちっぽけな兄弟喧嘩。

## 第88話

力を求めた、何の為。

力を求めた、誰の為。

力を求めた、倒す為。

力を求めた、護る為。

力を求めた、己の為。

力を求めた、誰が為。

兄さんは覚えているか、僕は覚えている。

あれは父の葬儀の時の事だ。

身内だけで静かに行われた葬儀だった。

あの頃にはもう母さんもマドカもいなかった。

姉さんが喪主を務めた。

僕は何があっているのかわからなかったが、ただ一つ、僕たちの前から皆がいなくなつて行くのがわかつた。

とても泣いてしまった。

姉さんは喪主で忙しいのに、泣いてしまった僕を泣き止ませるのに必死になつていた。

今思い返せば、なんと手のかかる子だったのだろう。

………いや、兄さんが手のかからなすぎただけなのかもしれない。  
きつとそうだ。

泣いている際に兄さんの方を見ると、兄さんは父さんの棺桶の前にいたね。

棺桶の前に立つて、遺影を見ながら、兄さんは涙一つ流していなかった。

あれは悲しくなかつたわけじゃなくて、悲しみを堪えていただけだった。

兄さんだつて泣きたかつたはず、けれど貴方はそれをしなかつた。

ただひたすらに決意の籠つた強い瞳で、亡くなつた父を安心させるように立つていた。

あれこそ、兄さんが言っていた孤高なのだ。今ならば理解できる。

貴方は、あの頃から自分の心に強さを持っていた。

「どうした！威勢はこけおどしか!？」

「まだだ!」

ゼロと百春の兄弟喧嘩は圧倒的にゼロが優勢に進めていた。

ゼロの技量の方が百春よりも高いのはもちろんの事なのだが、それぞれが操縦するI Sの性能に差がある事が、現状を作り上げている。

ゼロの振るう大剣『零』の一撃を百春は雪片で受け止めるが、余りの衝撃に雪片から手を離してしまいそうになる。

横薙ぎの一撃が受け止めるが、衝撃を殺せずに吹き飛ぶ。

「前から気になっていたのだがな、そんな紛い物の武器を振るって面白いか?」

「……………何?」

その言葉に百春の動きが止まった。

「いやな、その剣はお前にあっていないと思つてな。その剣はあの女のモノであつたが、お前には致命的にあつていない」

その言葉はデタラメに、嫌がらせ半分で出た言葉ではないのだと百春は思った。一夏が今この場で適当な言葉を放つような人間ではないと理解している。

……何故此処で言う。

破壊の一撃がより威力を増していく。気を抜いてしまえば雪片ごと両腕を切り落とされてしまいそうになる。

百春は両手で雪片を振るい、攻撃を受け止めている。それに対してゼロは片手で身の丈程もある大剣を百春以上の速度で振り回している。

速度、威力、角度、振り方、それら全てが一撃ごとに変化していき、百春に対処させない。

百春は一度剣を防ぐ衝撃で後方に下がり、両手により一層の力を込める。

「アンタを倒す！」

零落白夜

純白の刃が漆黒の霸王を狙う。

「……だから」

ゼロは大剣を振り上げる。

「それが！」

言葉には怒気が含まれている。

「あつてないんだよ！」

零落極夜

ほぼ垂直に、ギロチンの様に振り下ろされた漆黒の刃は純白の刃を断ち切った。

「……ええ？」

あんなにも容易く太刀筋を見極められ、自分の得物を破壊された。

そんなこと以上に、自分にとって強さの象徴とも言える千冬の愛用していた雪片、それを引き継いだ雪片二型が破壊されたことが百春の心を砕きかけた。

「これがお前のズレだ。倒す？ふざけるな、違うはずだろ」

ゼロは大剣を収縮して、両腕を大きく広げる。

「拳を打ち込んでくるといい、否定してやるよ」

挑発、受けずにはいられない。

砕けた雪片を投げ捨て、両手を握り固め、倒す為の拳を振るう。

一撃が黒零の装甲に吸い込まれる。黒零はその程度の攻撃ではビクともしない。仮面越しではあるが、余裕の表情を浮かべていることが百春にはわかる。

続けざまに何度も何度も拳を装甲叩き込む。百春が今できる最速で最高の連続殴打……のはずであつた。

ビクともしない。

より一層拳に殺意を乗せて敵を殺すつもりで拳を繰り出す。

「……良いことを教えてやる」

それまで拳を甘んじて受け入れていたゼロが突然動き出して、殴りかかった百春の両手を上に弾いた。

右手を硬く握りしめる。それはもう金剛石よりも硬く、突撃槍よりも鋭く。

「殺意を乗せる拳はこう放つのだよ……ッ！」

漆黒の殺意、ゼロが振りかぶる右手に百春はオーラを感じ取った。余りにも黒く、余りにも巨大で、そして余りにも……澄んでいた。

怒りや憎しみといった不純物を排除しきつた純粹な殺意、それが百春を襲った。

殺意の濁流に飲み込まれる。消えかかりそうになる命の篝火、百春はそれを己の心で必死に守りぬく。

ゼロの拳は白式の胸部装甲に叩き込まれ、後ろに吹き飛ばされそうになるところを両足で踏ん張り、後退するだけに済ませる。

「俺は思うんだよ……殺意を込めた拳は殺した人数に応じて威力が上がる。貴様は何人殺したことがある？」

突然の問いかけ、百春は答えることができない。精神的な理由か、いや違う。胸部装甲を砕かれた衝撃で大量の血を口から吐き出した為だ。

「零だろ。だからその程度の威力しかでないんだよ」

「だったら……だったらお前は何人殺した！」

百春は血反吐を全て吐き出し、肺を震わせながら大声で尋ねた。

「……さて、何人だろうな。殺し過ぎて両の手足の指じや足らなくなつたよ。それだけ殺した、それよりも殺した。そしてこれからも殺す、俺の為にな」

「……なんだよ、なんだよそりや！」

百春は、怒った。

目の前にいる一夏はこんな人間であつたのか、自分の見ていた彼は虚像だつたのか。「てめえは命の大切さを、人よりもわかつている筈だろ！父さんと母さんが死んだのどう感じ取つた!？」

「悲しかったさ、父さんたちが死んだのは俺の人生の中でも一二番目に悲しかったさ」



「だったらー！」

「だからこそだ。俺はアイツらを潰さなきゃならねえ。理解しろとは言わねえ、認めろとも言わねえ。ただそれが今の俺だ。何千何万の人間を殺しても、一人の大切な人間が生きていたらそれで良い」

大切なモノの為ならば他の全てを犠牲することを苦にしない冷徹な精神こそがゼロの強さ。

「……そうか、だったらー！」

百春が拳を再度強く握り締める。

決意がより一層固められる。

「アンタの言いたいことはわかる……。けど俺は素直に受け入れられない。だが一つの道は見えた」

ゼロから見ても百春の瞳は甘さが消えていた。戦うモノ、戦士に相応しい精悍な顔つきに変わった。

「僕は守る為に戦う。貴方が倒す為に拳を振るうならば、僕は守る為に拳を振るう。倒す為の強さはいらぬ。守る為の強さを求める」

道は元から違えていた。

理解し合うことなどはできない。出来るのは己を突き通すことのみ。

両者が動く。

「ソラアッ！」

「ウラアッ！」

両者の拳が互いの胸を抉り、両者ともに吹き飛ぶ。

空中で体制を立て直し、地面に着地、そしてほぼタイムラグ無しに再度突撃する。

拳と拳の正面衝突、衝撃は音となって沈黙の空間を引き裂く。

二人以外の音はアリーナにはない。アリーナにいる全員が固唾を飲んでこの闘いの結末を待っている。

「さつきよりは百倍マシだぜ！」

ゼロの拳が百春の脇腹に入る。

「褒められても！何も無い！」

今度は百春の拳がゼロの脇腹を抉る。

「それで良い、それで良いんだよ！」

「覚悟は完了した！」

問答無用の殴り合い、互いに防御することを一切考えない拳の応酬。

殴りたいならば殴れ、両者その思いで一向に殴り、攻撃を受け止める。

互いに相手の攻撃で膝をついてしまう程度の意思は持っていない。

技も体もゼロが勝っている。百春がゼロに勝てる唯一のモノは心のみ。崩れ落ちそうになる膝にカツをいれ、ほどけそうになる拳を握り固める。

「背負うモノの為に！」

「我が運命の為に！」

互いの拳が正面衝突を起こす。

碎け散る白式の右手。

刹那の空白。

（負けるの……か？また……負けるのか？）

百春の脳裏に無惨に倒される自分の姿が浮かぶ。

（……………嫌だ）

拒む。

（絶対に嫌だ！）

強く拒む。

無情に無力に殴り飛ばされる。

立ち上がる力は尽きた。されど立ち上がる意思は消えない。

悲鳴を上げる肉体を偽れ、今はただ目の前にいる兄（トモ）に負けないことを考えろ。

今ならば何故ゼロに負けたくないという思いが生まれていたのか、百春自身も理解で

きる。

兄だったから。

悔しかったから。

強くなりたかったから。

(……倒す……違う。護るための力が、あつたら。もっと僕が強ければ)

望むのは護る力。

「終わりか?ならば」

ゼロは収縮していた大剣『ゼロ』を呼び出した。

零落極夜

『ゼロ』の持つ究極一振りの刃。

兜割の如く、垂直に振り下ろされる刃。

ゆっくりと極限まで濃縮された時間が百春の中を駆け巡る。

何をすれば良い。次に何をすればこの一撃を交わすことができる?

そもそも次に何ができる?

死を目の前にした人間は此処まで時間の流れが遅く感じてしまうのかと百春は思っ

てしまった。

《力を望みますか?》

百春の脳内に少女の声が聞こえた。

百春はこの声を一度だけ聞いたことがある。

アレは臨海学校の時にしにかけた時だった。

あの時に見た夢の中で百春はこの声に救われ、そして新たな力を得た。

(力は……欲しい)

百春は望む。

《だったら……》

(でも、倒す力はいらぬ。護る力が欲しい)

力が、背後にいる皆を守るだけの力が欲しい。

(力があつたら、姉さんを、皆を、兄さんさえも護れるから)

《……………ふふ、面白いですね》

頭の中の少女は楽しそうに笑った。

《いいですよ、それでこそ私を使う人です。ならばあの二人に私たちが一泡吹かせてやりましょう》

少女は自信満々に言った。

(名前を叫べ)

《私たちは》

《《シロ》》

振り下ろされた漆黒の刃。

しかし、振り下ろされた先に百春の姿はなかった。

何時の間に消え去った？

アリーナにいたゼロ以外の皆がそう思った。

ゼロは振り返る。奴はそこにいる。ゼロでさえその超速度の移動に戸惑ってしまっ  
た。

白式

左半身は今迄のソレではあるが右半身、右肩から先が特に異なる。

白の装甲の上に所々重ねられた黄金の装甲。

「成る程、至ったか。貴様の極致に」

ゼロは百春が己のISのコアと会話をしたのを確信した。

「《さあ、行くよ》」

## 第89話

ソレはまるで朝日の光に染め上げられた雪景色のように、純白と黄金が混じり合った、美しい姿だった。

しかしコレは未だ完全な進化を遂げていない不完全な変態。その証拠に右半身の姿は変わってはいるが、左半身の姿は元の白式のままである。

力を求めた百春に呼応したNo. 001が創り上げた、二人の為の進化形態。

ゼロの黒零、アリスのアイリス、ティファニアのシエル、そしてナターシャの銀の福音と同様に覚醒したコアが搭乗者のためだけに創り上げたIS。

その性能は未完成とはいえ今迄の元とは大きく性能差を感じ、そしてそれ以上に機体との一心同体の感覚を味わうのだろう。

人機同体。

こうなつてしまった以上、ゼロは百春に対して驕りを持つことはあり得ない。

一挙一動、最大限の警戒を以つてゼロは百春達を迎え撃つ。

白式が動く。己の変貌を遂げた右腕を前に突き出し、強烈な光と共に新たに創造した得物を空間から取り出した。

雪片とは違う。

コレは百春とシロノの間によって創り上げられた百春の為の武器。

汚れ一つない純白の刀身を持った長剣、目に見えるのは唯の実体剣ではあるが、それだけではない。それだけである筈がないと、ゼロの直感が告げている。

白式の変形を遂げた右の非固定ユニットのウイングスラスターが大きく唸りをあげる。スラスターの推進剤噴出口からキラキラとした粒子が出始める。

そして。

音を置き去りにするかのような超高速移動。

その速度をマトモに認識できたのはゼロを除けば楯無と千冬の二人だけ、それ程迄に白式の速度は速すぎた。

一瞬でゼロとの距離を詰め上げ、すれ違いざまに一閃を浴びせにかかる。

だがゼロもその攻撃に対してカウンタを仕掛ける。大振りの大剣では攻撃は間に合わない。

右手の五本の指先から短めのエネルギーダガーを発生させ、爪を立ててクローを作り上げる。

交錯する両者の一撃、そして両者の右肩の装甲に傷が入る。

(速い、早い、疾い。コイツは今まで戦ってきた誰よりも、ハイイ！)



警戒のレベルを最大まであげる。しかし、それでも目の前にいる相手に対してはそれでも足りない。

「コツチもいくぞで」

『ああ、油断はできない相手だ』

ゼロの纏う雰囲気がいよいよ一層鋭くなる。

一撃の重みを殺して、手数で勝負を行う。大剣『零』を収縮、その代わりに右手には実刀『零雪』左手にはエネルギーブレードの『無零』を呼び出す。

超高速の戦闘、互いの攻撃と攻撃が正面衝突を起こした音が何度もなりひびく。

IS学園の人間たちは戦っている百春に驚愕している。あんな強さの百春を彼女たちは知らないからだ。

彼女たちが知る百春はあんなにも技量は高くはない。彼女が知る百春は代表候補生上位レベルの強さではあるが、今の彼は国家代表レベル、それもトップクラスの技量で戦っている。

アレが百春の意識で戦っているのか、彼女たちはわからない。

ただ自分たちに出来る事は戦いを見ることだけであった。

超高速で行われてる戦闘、一步も動こうとしないゼロの周りを百春が超高速で飛び回り、隙を見ては一撃を打ち込むがゼロもそれに反応して防御を行う。

極限まで緊張の糸を張り巡らせた状態が何分間も続いていく。見ている人間にとっては永遠のように感じてしまえるモノでも、当事者たちにとって時間は刹那にも永遠にも可変していくモノなのである。

ゼロが二本の剣を使って百春を弾き返すと両者は一度大きく距離をとった。

(ヤハリ、こいつは意識がほぼないな。無意識の領域で戦っているのか？コアと意識を統一させているから、意識がないのか)

百春の異変を感じ取りながらゼロは次の一手を模索する。相手は既に数分前まで戦っていた百春とは違う。百春の実力を自分と等しいモノと定める。

ゼロはエネルギーを半分以上消費しており長時間の戦闘は不可能。

それは百春も同様だ。しかし百春の場合は理由が違う。だがそれに気づいているのはゼロだけだ。百春自身もその事に気づけるほどの余裕は残っていない。

それならばこの時間を楽しむだけだ。

ゼロが無零の刃であるエネルギーを斬撃として百春に向けて飛ばす。それも一発だけでなく、数発を一瞬のうちに飛ばす。

白式の右のウイングスラストから半透明の青色をしたエネルギーのマントが発生する。百春はソレを美しくひらめかせて、自分の身をエネルギーの斬撃から守った。

マントを広げ、突撃。

二刀と一刀、手数の方ではゼロが圧倒してはいるが百春の守りは硬い、カタイ。二刀では防御を越えられないと判断したのかゼロは両腕だけではなく、両足も攻撃に混じえる。

剣戟を囿にして蹴りを喰らわせにかかるが、囿は見切られてしまい蹴りを防がれてしまう。

清流のような美しい太刀筋がゼロを狙う。ゼロはソレを反射に近い高速で最低限の回避行動を取り続ける。

互いに攻撃の手を休める事なく、相手の攻撃を躲し、首を狙う。白しいスラストから光の粒子が噴出する。

次の瞬間、ゼロの斬撃に合わせて百春が超高速移動を行い背後に回り込む。振り上げられる刃、アリーナにいる生徒達は百春の勝ちを確信した。

だがそんなに甘い話ではない。

ゼロは予め逆手に持ち替えていたもう一本の刀で背後にいる百春を狙う。それに百春は反応する。

体を捻らせて、刃から避けようとする。しかしそれはうまくいかずに刃によって切り傷が刻まれる。もし何もしなければ大ダメージを負っていたのであろう。

体を捻らせればほんの僅かでも太刀筋にズレが生まれてしまう。

ゼロも体を振じらせて、左肩で刃を受け止める。もし振じらせていなければ今頃はスラストーを破壊されていたのだろう。

一瞬だけ睨み合う両者、互いの蹴りが互いを吹き飛ばし、態勢を立て直した次の瞬間には空中で凄まじい攻防が繰り広げられる。

(そろそろ、終わる。相手から終わらせにくる……だつてそろそろ限界の筈だからな)

百春の持つ得物の一撃に無零と零雪の二本の耐久値が限界を迎えてしまう。

ゼロは前転からのかかと落としで百春を地面に叩き落とし、自身も地面に着地する。

「来な、『零』」

愛刀を呼び出して構える。

速度では白式の方が黒零を上回っているため、動き回ることにはせずに攻めて来たところを神速のカウンターで仕留めるつもりなのだろう。

己の知覚領域を限界以上に広げる。

白式が刃を構える。

スラストーから光の粒子が溢れ始める。

—— 零落極夜

—— 零落白夜

先に動いたのは当然白式、超高速と他を圧倒する旋回能力によって黒零の回りを囲い

込む。

黒零は白式から漏れてくる僅かな攻撃の気配を敏感に感じ取ってみせる。肉体以上に広げた知覚領域は正確に白式を追っていく。

いつ来る。

どう出る。

そして。

白式が旋回運動をやめて突撃する。しかしそれは黒零が態と作り上げたギリギリの隙に突撃してくる。

それには白式も気づいている。だがそれでもそれしか勝機はなく、突撃するしかなかった。

迫り来る白式目掛けて、超高速、神速のカウンターが迫る。

交錯する。

激音がアリーナに響き渡る。

黒零の左肩の装甲、白式の右の装甲が碎ける。

攻撃を終えた二人の動きが止まる。二人は振り返り、互いを見る。

「俺の勝ちだ」

ゼロが高らかに勝利宣言を行う。未だに白式のシールドエネルギーは残っているた

め、このような言葉を出すのはおかしい筈だが、ゼロには一つの確信があった。

白式が一步前に動き出す。

しかしその直後、踏みしめた足から地面に向けて無様に、無力に崩れ落ちて行く。

「何………で」

百春は正気に戻った。

何が起きたのかはゼロ以外にはわからない。何故崩れ落ちたのか、ゼロが高らかに説明する。

「なんでかわからないって感じだな。簡単だよ、ただ単に肉体がお前の想像する最上の動きについていけなかったただけだ。俺みたいに慣れていて、それに相應しい肉体を持っているならともかく。お前は普通の何倍もの力を出して、そして未熟な肉体で挑んだ」  
簡単な話がズレだ。

「とうとう肉体が耐えきれなくなつて倒れてしまった。俺みたいに全身装甲ならば強引に機体を動かすことは可能だが、お前はそうじゃない」

ゼロが大剣を右手に持ち替えて、百春に向けて歩いて行く。

「まあ、コツチも左肩から先が動かなくなつてしまつたよ。それでも他の部位は動くからお前を倒すには問題ないんだよ」

ゼロが大剣ごと右腕を振り上げ、その直後、彼の右肩を上空から降つたきた一筋の光

が穿つた。

## 第90話

黒零の右肩の装甲が降ってきた一閃の光によって碎かれる。

黒零の知覚領域外からの超遠距離の狙撃、普段のゼロならばこの攻撃にも気づくことができたのだろう。しかし今のゼロは目の前にいる百春に対して意識を向けすぎている。

「ぐっ……」

ゼロの手から零が零れ落ち、右腕がだらりと垂れ下がる。どうやら右肩が弾丸の衝撃で外れてしまっているようだ。動かなくなった左腕の装甲を収縮して、自分の左手で強引に肩を嵌めた。

こんな真似を出来る人間、ゼロは数人しか知らない。そして今この場で最も可能性が高い人間を探る。

「どう言うつもりだ！ エムウ！」

自分の妹織斑マドカ、コードネーム『エム』、犯人は彼女だろう。

彼女から通信がくる。



「兄さん、遊びすぎ。帰還の時間はとづくにすぎてる。スコールからの帰還命令が来るのよ」

エムは眈々としている。

「わかった、俺も少し遊びすぎたみたいだな」

ゼロ自身も少し高揚しすぎていたようだ。エムの狙撃によって大人しくなる。

零を収縮。

その後ゼロのすぐ近くに一機のI Sが着地した。

「大丈夫？ゼロ」

薄めの桃色の全身装甲が特徴的な機体『シエル』、操縦者はティファニア。

「問題ない。両腕が動かないだけだ。あいつらぐらいなら脚だけで十分だ」

「うーん、本当にできそうだけど今回はやめてね。あたしがスコールに怒られることになるんだから。ほら、肩に捕まって」

「わかってるさ」

ゼロはティファニアの肩に捕まる。ティファニアはティファニアで空いた手にエネルギーガン呼び出して、辺り一面に近づかれないように撃ち続けている。

「待て……行くな」

弱々しい声で、千冬はゼロにすがりつこうとする。

だがそんな言葉はゼロの耳には届かない。

ゼロは空へと飛んで行った。

残されたものは無情、無力、無念。

一つの小さな戦いは大きなモノを残してしまった。

「兄さん、気分はどう?」

亡国機業の本部へと向かう飛行機の中、ゼロに向けて対面に座っているエムが声をかけて来た。

「どう?……どう?」

ゼロにはエムの問いかけの意味がよくわかっていないようだ。

座席の背凭れに大きく体を預けながら、眉間を寄せる。

「だから、織斑千冬と戦ってどんな気持ちだったってことよ。それに、正体もバレちゃったし」

「なんだ、その事か……別にどうもない。ああ、あるとすれば予想以上に弱かったなって事だな」

窓の外を眺めながら、ゼロは忌々しそうに口元を曲げた。

「それってさあ、ゼロが強くなったって訳じゃないの？ 織斑千冬ってさ、現役引退から結構時間経ってるでしょ？」

隣に座っているティファニアが肩を寄せて瞳を覗き込むように聞いて来た。

「違う。あんなに弱くなかった……あんなに弱かったのか？」

その問いかけは夜闇の中に沈んで行くだけであった。

## 第91話

あの戦いから数日が経ったある日の午後の事だ。織斑百春を除いたあの日あの場所にいた一年生の専用機持ち達はI S学園の食堂の円卓を囲んでいた。

「それで、あの織斑一夏とは何者ですか?」

席に着くなり早々、セシリアは事情を知っていきそうな箒と鈴音に質問をぶつけた。箒と鈴音を除けばこの場で一夏について知っているものはいない。

全員があの日からこの時を待っていた。

「言ったでしょ、百春の双子の兄だって」

「ですが、百春さんから兄がいるなんて一度も聞いたことありませんわ」

「言わなかったんですよ、あいつなりに思う事があったのよ」

百春が話さなかった真意はわからない。だから鈴音は予想するしかない。

「そう言えば一度、誘宵の奴が何か言ってたな。あれ程迄にあいつが気を荒げていたのは他に見た事ないな」

ラウラは転入して来た初日の事を思い出していた。今思えばラウラもあの日初めて

一夏の存在を知ったのだ。

「そう言えば、私も誘宵さんと初めて話した時その名前が出たような」

セシリアも思いついていた。

「ああ、誘宵ね。百春と違って一夏はあまり誰かと仲良くするタイプじゃなくてね、そんな中唯一仲良くしていたのが誘宵よ。私が知る限りだと殆ど一緒にいたわよ、あの二人。昔からそうだったの？ 箒」

「いや、あの二人が仲良くなったのは多分クラスが一緒になった四年からだ。それまでは一夏は一人でいる事が多かった。それに、あいつはよく喧嘩を売られていた」

箒は自分の記憶を掘り返していく。彼女の記憶の中にいる一夏は殆ど一人でいる事が多かった。

しかしいつからだろうか、彼の隣にアリサと言う存在がいたのは。

「そう言えば一夏は喧嘩を売られる事が多かったわね。それも一対多数が殆ど、しかも全部勝ってる。考えたらあいつは昔からおかしかったのよ」

両腕を組んで背凭れに寄りかかる鈴音。

「あのさ、その一夏って言う人と百春って似てたの？ 双子だったんでしょ？」

話に加わって来たのはシャルロット・デュノア。

「全く似てないな」

「全く似てないわね」

「口を揃えて言うほど？」

「あたしはあの兄弟が仲良くしてるところなんて見た事ないわ。それくらい性格が違い過ぎるのよ、真反対と言っていていいわね」

「私もだ。あいつらが最後に一緒に何かしているのを見たのは、一夏の奴が剣道をやめた直後くらいだな。それ以降一夏の奴は何をしているのかよくわからなかった。あのまま剣道を続けていたならば、今頃は数多の大会で勝ち続けていたかもな」

「そんなに強かったのか？」

ボーデヴィツヒが箒に尋ねた。

箒自身が本人の才能もあるかもしれないが努力によって剣道においてその世代の頂点に立った人間だ。

だからこそその彼女がそこ迄言うほどなのかと気になったのだ。

「強かった。あいつは余りにも才能がありすぎた。私は長年剣道をやってきたが、あれ程の才能を持っている人間は見た事がないな」

箒は一夏と出会った時のことを思い出していた。

「あいつと最初にあつたのは千冬さんが道場に二人を連れてきたのが始まりだ。その頃から二人には性格に差があつたな。百春は回りのみんなと溶け込もうとしていたが、一

夏は自分で黙々と試合をしていた父を観察して動きを見ていた。それで暫く練習した後、試しに試合をした。勿論その時は私が勝った。だがな」

箒の表情が僅かに険しくなった。

「面の奥であいつは笑っていたんだ。楽しいと言うよりか……戦闘本能が湧き出ていたのだろう。それからが問題だ。彼奴は何回も私に挑んで、何回も負けて……その度に加速度的に強くなっていった。そして一月が経った頃には私は彼奴に勝てなくなってしまう」

箒は瞳を瞑った、

「そして、それから数ヶ月後には彼奴は剣道場に来る回数は減っていき、とうとう辞めてしまった。何故辞めたのか私は聞いたよ、余りにも才能が大きすぎたからな。すると彼奴はこう言ったんだ、『飽きた』と一言だけ……私は絶望しかけたよ。それから何度も復帰しろと声をかけたが、全部断られた。それ以降、彼奴は様々な武道を学んで同じような事をしていた」

今となつてはいい思い出と言いたのか、少しだけ懐かしそうに笑っていた。

「四年の最後の時だ。私は彼奴に勝負を挑んで、彼奴はそれを受け取って、ボコボコに完膚なきまでにやられてしまった。結局、私には最後まで彼奴の事は何一つわからなかつたよ」

「へえ、あたしが転入する前にそんな事があつたんだ。百春から何も聞かされてないな」  
「最後の事は百春も知らない事だ。言われてないのも無理はない」

あの日の事を箒は鮮明に覚えている。

引越しをする数日前、一夏に勝負を挑み、誰もいない剣道場で一方的に倒された。

何故こんな事をしたのかと聞かれれば、強くなるためだと箒は答えるだろう。

箒にとつて一夏は余りにも大きな壁でありすぎた。

「あたしが転入した時には既に誘宵がいて、ずっと一緒にいた記憶があるわ。それこそ二人とも他を寄せ付けてなかつたわ。ていうか、あたしは一夏と殆ど会話した事ないわね。仲良くなかつたし」

鈴音は自分の頭の中の記憶を掘り起こしてはいるが、どんなに頑張つても一夏と楽しく何かをしたと言う記憶は蘇らない。

寧ろ蘇ってくるのは一夏に対して恐怖した記憶しかない。

「あたしね、人生で本当に怖いと思つた人間は二人いるの。一人は今の中国の国家代表で、もう一人が一夏よ」

鈴音は思わず身震いした。

「六組に鹿狩瀬つているでしょ？クラス代表の。彼奴の歯つてき、何本か入れ歯になつてんのよ、なんでだと思ふ？」



急な鈴音からの問いかけ、他の奴らは何故今そのような事を聞いているのかよくわからない。

「……わからないな」

ボーデヴィツヒは答えたが心の何処かでは既に答えに気づいている。

「一夏の奴が殴つてへし折つたのよ」

その答えにその場にいた鈴音を除いた面々は身震いした。

「鹿狩瀬の奴が数人で誘宵を虐めてね、それを見つけた一夏がその場にいた虐めてた奴を全員、血塗れになるまでポコポコにしたのよ。私が見たのは先生がきた後だったわ。辺り一面に散らばつてる血まみれの机や椅子、彼奴の目を一瞬見たけど本当に怖かった………今思うと臨海学校で感じた恐怖心に覚えがあつたけど、アレは一夏のものだったのね」

鈴音にとつては一夏の記憶は思い出したくないのだろう。話し終わるとすぐに自分で話題を変え始めた。

「……百春と千冬さん、今どうしてるの?」

あの日から数日、百春と千冬が今何をしているのか皆よく知らない。百春は百春で余り彼女たちに関わろうとしない。千冬は教室にも顔を見せていない。

「教官は未だに自室に閉じこもっている……自分が殺そうと思つていた人間が死んだと

思っていた弟となれば、シヨックで仕方ないだろう」

ボーデヴィツヒは何度か千冬の元に赴いたが、その度に帰らされていた。

「百春くんはお姉ちゃんはずっと特訓してる。しかも前よりも何倍も過酷なものをね」

チビチビとジュースを飲んでいた

簪が口を開いた。

「これから……どうすれば良いんだ。私は彼女に勝てるイメージができない。私が強くなっても奴はそれ以上に強くなる。そんな気がする」

簪が珍しく弱気な発言をした。

「そうねえ、次あいつと戦う時は彼女をこつち側に引き戻す時ね………あれ？」

鈴音が食堂に入ってくるある人物を確認した。藍色のロングヘアの女性、話題の中心である織斑一夏と一番仲の良かった人間、誘宵アリサである。

事件のあった日、彼女は所属している企業に呼ばれたため学校を休んでいた。

そのため彼女は一夏が生きている事を知らない。

と、彼女たちは思っている。

「待て、誘宵」

簪が通り過ぎようとする誘宵に声をかけた。簪と誘宵の仲は余り良くない。誘宵と簪の姉である束の仲は良好なのだが。

「何かしら、そんなところで集まって」

誘宵は立ち止まって、円卓に集まっている専用機持ちたちを見た。

柔らかな笑み、完璧に計算された笑顔を箒たちに向ける。流石、本心を隠すのがうまい。

「……一夏が生きてた」

意を決して箒が喋った。

「知ってるわよ」

誘宵の口から予想とは反した答えが帰ってきた。

彼女たちの予想では、誘宵は一夏が生きている事を知らないはずだ。事件の事は、その後緘口令が敷かれた為にあの場所にいた人間以外は知らないはずだ。

それなのに何故誘宵は知っている。

円卓を囲む彼女たちに緊張が走る。

「……あんた」

だがそれよりも重要な事に鈴音が気づいた。

「いつから知ってたの?」

そう、問題は誘宵がいつから一夏の生存を知っていたのかということだ。

他が鈴音を見て、その直後に誘宵を見た。

全員の視線が誘宵一点に集まる。

「んん、私がI Sに乗る前だから四年近く前かしら」  
皆絶句した。

つまり誘宵はこの事件が起こる前どころか、この学園に入学する前から一夏が生きている事を知っていた事になる。

「貴様は……貴様は……」

箒の目には怒りが宿っている。誘宵の襟を掴み、詰め寄る。

それに対して誘宵の目は非常に冷淡なものであった。

「何故言わなかった、百春も千冬さんも一夏の事を心配していたんだぞ！それなのに貴様は！」

「どうして私が知っていることを全て話さなきゃいけないのかしら？そんな必要ないはずよね」

「貴様！」

箒が誘宵を殴ろうとして拳を振るう。

だがその拳は簡単に誘宵によって防がれ、箒は関節技を極められた状態で円卓に叩きつけられ抑え込まれる。

他の皆が誘宵を止めようとするが、誘宵は目で彼女たちに牽制を仕掛ける。

箒は必死に暴れて脱出しようとするが、誘宵の力は非常に効率的で少しの力で抑え込

まれている。

「落ち着きなさい。私はね、貴女たちと事を起こす気なんてサラサラないの。私が一夏くんが生きている事を知っていたのを隠していたなんていつてたけど、それは東さんも同じなのよ」

「何……だと?」

誘宵の言葉に動揺した箒は動きが止まった。

それを見た誘宵は箒から手を離し、反撃を警戒して三步後ろに下がった。

「……あんたは誰の味方なの?」

鈴音が聞いてきた。これは確認だ。もしなんらかの事が起きてしまい、一夏と学園が対立することになってしまった場合、彼女が何方に味方するのか、それは大切な事だ。その為の確認である。

「私が誰の味方?そんなの決まってるでしょ……私は一夏くんの味方なの」

IS 学園内にある寮の一室、この部屋は教員用のモノであり、部屋の主は織斑千冬。彼女はこの数日、部屋から緑に出ずに荒れに荒れていた。

部屋の中は非常にモノが散乱しているが、別にこの数日の荒れが原因ではなく、普段からの怠慢が原因なのだ。

電灯を一切つけず、時間の感覚を忘れたまま、過去の思い出を虚空に見ている。

携帯を使い、通話する。

電話の相手は古くからの友人であり、この混沌の世の中を作り上げた天才で天災な発明家、篠ノ之束。

この数日間何度も電話をかけているが電話は一度もつながることはない。

「はーい、何々？ちーちゃん」

ようやくつながった。

「……知ってたな」

久しぶりに出た言葉は千冬自身が信じられない程に重たく響く声であった。

「なにがー？」

それに対して束の声は非常に軽かった。

「一夏が生きていることだ！」

「うん、知ってたよ。当たり前じゃん、いつくんにコアを渡したのは私だし、あの機体を

作ったのも私」

「何故教えなかった！私が一夏の事をどれ程心配していたのか、お前なら知っていたはずだ！」

事実、千冬は東にあの誘拐事件の時、何度も何度も搜索させた。しかし、結果は見つからなかった。東の技術力を持ってしても無理だった、その為千冬は諦め掛けた。

それが今になってだ。今になって。

「だって、いっくんがそれを望んでなかったから。いっくんはちーちゃんから離れたんだよ。それをちーちゃんは理解すべきなんだよ」

東から放たれた冷たい事実千冬の心は締め付けられる。

「東、今どこにいる」

「何処って、いっくんのいる場所。いっくんと呼ばれてね、黒零の修理して、ついでに一緒に食事をしたの」

「場所はどこだ！教えろ！」

「それはちーちゃんでも駄目、だって場所は教えないって、いっくんと約束だから」

「お前は誰の味方だ、私か？一夏か？」

「面白いこと言うね、ちーちゃん。私は誰の味方でもないよ、私は私の味方だよ」

そう言うと東は勝手に通話を切った。

残された千冬の眼には執念と弱さが宿っていた。  
「私は……どうすれば良いのだ」



## 第92話

「束さん、黒零の調子はどうですか？」

亡国機業本部、開発局のとある整備室、ここには今ISに関して世界最高の技術力を持つ篠ノ之束がいる。

ゼロを通じて束はちよくちよく亡国機業に遊びにくる機会が増えてきた。遊びに来るにはマドカにちよつかいをしかけ、同じような才能を持つリリースと会話に花を咲かせた。

「うーん、殆ど回復してるよ。でも今回は凄い操縦したね、だから結構な量の調整が必要だったよ」

「まあ、相手がN.O. 001となると此方本気を出さずにいられないさ。珍しくムキになっちゃったよ……………それよりも貴女の所にいるクロエ・クロニクル、彼女達には気をつけた方が良い」

「わかってるよ」

「……………そうですか」

そして時は過ぎて十一月、あれから学園に対して大きな動きは亡国機業内部ではなかった。IS学園内部では大きな動きがあったのかもしれないが、ソレは知らぬ話である。

「オータム、昇進おめでとう」

「ありがとう。アンタも総帥直属の部下になったじゃない」

昼、ゼロは珍しくオータムと二人だけで食事をとっていた。

二人ともついさつき急に昇進や転属の指令が出された。

オータムはモノクローム・アバターの副隊長に昇進。

ゼロは総帥轡木十蔵の直属の部隊、とは言ってもゼロ一人だけなのだが、に配属されることになった。

「それにしても、急な転属になったな。アタシは副隊長に、アンタは総帥直属の部隊に」  
「仕方がないさ、総帥の考えたことなのだからな」

「その総帥に今日初めてあったが、普通の爺さんっぽかったな」

「まあな、普段はIS学園で用務員をしてるみたいだしな」

「普通の用務員が実は裏組織のボスだなんて、フィクションすぎるな……それよりもだ、どうしてアタシが副隊長に選ばれたんだ？」

オータムにはどうして自分が副隊長に選ばれたのかよく理解していなかった。実力ではティファニアの方が高く、彼女は覚醒コアの専用機も持っている。

それなのに何故自分なのか、オータムは不思議でならなかった。

「俺が推薦したからだ。実力は申し分ないし、何よりも……彼奴らを纏められるのはお前くらいしかいないだろ？」

「だよなあ」

二人は揃ってテーブルに両肘をつけて頭を抱えた。

モノクローム・アバターは亡国機業のIS部隊の中でも最強の戦力の誇る部隊であるが、隊員は中々にクセのある人間が多すぎる。その中でもオータムは唯一と言っていいほどマトモなのだ。

「スコールさんはああ見えてお茶目爆発させる時があるし、ティファも平時はふざける時がある。マドカもマドカで難はある。新しく入った奴らは先輩をからかいすぎる…………スコールさんを除いた面々で、お前以外にふさわしい奴がいるか？」

「いないな……消去法かあ。お前がいてくれれば楽なんだけど、転属だもんなく」

「無理だな。総帥の勅命を受ける事が多くなるからな」

ゼロの転属先は総帥の直属の部隊に配属されることになる。とは言っても今回急遽作り上げられた部隊であり、隊員はゼロ一人しかない。

「アタシにできるかな」

「できるさ、俺はお前を信じてる。俺だって最初はそうだったさ。環境は人を変えると言う、だから頑張れ」

「……まあ、アンタがそう言うならそう言うことなんだろう」

オータムはゼロに乗せられることにした。もはやどうにでもなれだ。

「そうだ、昇進祝いに何か欲しいモノはあるか？」

ゼロも副隊長に昇進する際にスコールやシルヴィアから様々なモノをもらっていた。だからこそ彼は自身もオータムに何かプレゼントする義務があると考えた。

「欲しいモノ……ねえ、特にはないな。あまりそう言うのは気にしなくていい、欲しいモノなら自分で買えるし」

「まあ、そう言うな。俺もシルヴィアさんから貰ったんだからさ」

「……………そうか、なら、そうだな、チョーカーが欲しい……………かな。最近雑誌見てたら良いデザインの奴があつたんだ。だから、それをプレゼントしてくれないか？アンタの手で、直接」

「チョーカーだな、わかった……………そろそろ時間だ。これからお互いに別の部隊にな

る、頑張ろうぜ」

「応」

拳を付き合わせて、二人はそれぞれの職場に向かっていった。

そしてゼロは総帥より新たな指令が下された。

「本日より用務員としてI S学園で働かせて頂きます、蝶羽チヨウバ一夏です。短い間ですが、宜

しくお願いします」

## 就職

IS学園はようやく、一時的な平穩を迎えていた。度重なる謎の組織からの襲撃も終わり、精神が壊れかけていた織斑千冬も最近ようやく以前のような元氣を取り戻していた。

変わった事もあり、つい最近ISの操縦を教える為により専門の臨時教師が配属された。

平穩な日常がこのままずっと続けば良いと、何処かの誰かは思いました。

しかし平穩というモノは突然の波乱によって破壊されてしまうモノである。

波瀾万丈。

誰かは言った、平和とは鬭争と鬭争の狭間にある束の間の時間であると。

朝、朝礼の時間、講堂にクラスごとに並ばされた生徒達は学園長の退屈な話におとなしく耳を傾けていた。

特に変わった事ない、いつものように面白くもない話があり、事務的に時間が過ぎていく。

「ええ、ここで皆さんに一つお知らせがあります」

学園長のその一言に先生たちは顔を見合わせた。お知らせがあるなど全く知らされていなかったからだ。

だがそんな職員席の混乱を無視して学園長は話を進める。

「用務員である轡木十蔵が病で入院してしまった為、急な話ですが私の独断で、戻ってくるまでの間、代わりの用務員を雇うことになりました」

ざわざわと講堂全体が騒ぎ出す。

「では、入ってきてください」

学園長からの手招きにより、一人の人間が舞台裏から姿を表した。

男だ。

百八十を越える背丈に、着ている漆黒のスーツの上からでもわかる運動のできる人間の肉体、顔立ちは極めて良く間違いない上に分類されるだろう。

登壇した男は学園長に向かって会釈をすると、マイクの前に立った。

その男の顔を見て衝撃を受けた人間は多数いたが、衝撃を受けた理由は人それぞれである。



生徒たちから似ていると声が漏れ始める。誰に似ている。決まっている。この学園にいるもう一人の男性に似ているのだ。

男は生徒たちに向けて一度頭を下げ、そして自己紹介を始めた。

「ただいま学園長より紹介された、用務員の蝶羽チヨウバウイチカ一夏です。名前は蝶の羽に一つの夏と書きます。轡木氏が帰ってくるまでの短い期間ですが、皆様の学生生活をサポートさせていただきます。以後よろしく願います」

簡潔に自己紹介を行い、礼を行なう。その際に少しだけ笑った。完璧な笑顔であった。相手に対して不快感を与えない、完璧な作り笑い。顔の角度から目の細め方、口角の上げ方、その何もかもが計算され尽くしてある。

学園長に一度目配せをしてから再度会釈、生徒の方を見ることなく降壇していく。

生徒たちのざわつきが止まらない中、学園長は再度話を始めた。

平穩は終わった。

一夏は廊下を歩きながら、ネクタイを少し乱雑に解いた。

「あの爺、人を直属の部下に任命して早々の仕事がコレか？全く、なめられたものだ」  
ゼロが今回上司である轡木十蔵から任された任務は合計で三つ、その三つを同時に進行する必要がある。

一つは轡木十蔵に代わって、I S 学園の用務員を務めること。

二つ目はI S 学園をネオの脅威から守ること。

そして三つ目は……

「……」

人の気配、ゼロは反射的に攻撃の構えを取ろうとしたが、こんな場所ではそんな必要ないと思ひ平静を装った。

そして直様誰の気配かを探り当て、警戒を解いた。

優しく、少しだけ微笑んだゼロは振り返って大きく手を広げた。

「二夏くん！」

一人の少女がゼロの胸に飛び込んできた。ゼロは少女を受け止めると優しく抱きとめた。

「久しぶり、アリサ。一段と綺麗になったね」

「二夏くんも、だいぶ逞しくなってる」

少女、誘宵アリサは普段学友達に向ける落ち着いた様子とはかけ離れた満面の笑みで

一夏の瞳を見た。

彼女の長い藍色の髪がゼロの両肩を抱き、二人の顔は近づいた。

ベタベタとゼロの身体を触りながら、アリサはそこに一夏がいるというのを強く強く確かめてる。

「一夏くん、どうして用務員になったの？」

アリサはどうしてゼロがIS学園にやって来たのかわからない。

「んん？上からの命令でな。こっちでやる事があるんだよ」

「それじゃあ、暫くの間はこっちにいろのね」

「そうなるな。まあ上からの指示でどうなるかわからないがな」

「なら、それまでは一緒にいろのね」

アリサはゼロに視線を送って、ゆっくりとおろしてもらう。

「それじゃあ、授業があるからまたお昼ね」

アリサはゼロから離れて、膝下まであるロングスカートを翻しながら振り向き、教室に向かつて行く。

その様子を見ながらゼロは息をははきながらゆっくりと微笑んだ。

「……………まあ、来て良かったのかもな」

窓からの日差しを浴びながらゼロは久しぶりに合う幼馴染に喜んでいた。

IS学園用務員室、ゼロはスーツから作業着に着替え終え、始業時間を待っている。轡木十蔵から渡された一日のスケジュールを見直している。頭の中で段取りを確認し、作業の内容を確認する。

「考えてみれば、普通だったら俺も学園生活を送っていたのかもしれないな」  
頭を過る普通の高校生活、制服を着て毎日学校に行って、誘宵アリサと話して、友達を作って——

「いや、考えるのはやめておこう。そんな世界は都合のいい世界だ。今の現実から目を背けるな。脆くなる。弱くなる。駄目になる。気をつける、俺」

ゼロは自分の両頬を全力で叩いた。  
始業のアラームが鳴る。

さあ、仕事の始まりだ。

「呑気だ、呑気だ………」

仕事に追われる事なく、午前中の仕事をあつという間に終わらせてしまったゼロは用務員室に戻って、ソファアーに体を預けていた。

「そろそくだよな。あの爺さんがやつてたものバリバリの俺がやつたらすぐに終わるよな。考えてなかつた」

貧乏ゆすりの音だけが部屋に鳴る。

「はあ、ゆっくりしてるなあ。普段だつたらなにしてるっけ、訓練して、事務仕事やって、ちよつと息抜きに喫茶店でコーヒー飲んで、また訓練して、飯食って、あいつらと馬鹿やって……いろいろやってたな」

電気ポットがお湯の沸いた事を告げる。ゆっくりとソファアーから立ち上がり、マグカップの中にインスタントコーヒーの元をいれてお湯を注ぐ。

再びソファアーに座ってコーヒーに口を付ける。

物足りない。

「んん、んん？明日からは豆からコーヒー入れようかな。時間もありそうだし」

この数年、毎日のように豆から淹れたコーヒーを飲んでいた為か、ゼロはコーヒーに對して少し煩くなつてしまっているようだ。

淹れる機械はあるし、コーヒー豆も喫茶店のマスターから貰つてある。何も心配する

事はない、コーヒーを淹れる為の手順は頭の中に入っている。

「今日は、こつちに来たばかりで時間もなかったしな。早いうちに荷物を出して、生活できるようにしとかないな」

IS学園の用務員室は並の学校の用務員室に比べてかなり豪勢になっている。

用務員の宿直室も兼ねている為、非常に広い。下手をすれば生徒達の寮の部屋よりも質が高いのかもしれない。

「あの爺、自分がいる部屋だからって態と豪勢にしゃがったな。この学園作るのにもウチが裏から絡んでいたからな……あと一時間、仕事はない。部屋、綺麗にするか」

昼、ゼロは用務員室の中でアリサが来るのを待っていた。

ソファーに座り、テレビでお昼頃に丁度良い主婦向けのバラエティ番組を見ながら、上機嫌に鼻歌を歌っている。

コンコンと扉からノック音が響いた。

「今、開ける」

アリスが来たと思ひ、テレビを消してソファから立ち上がって扉に向かう。鍵を解除して扉を開ける。

「はい、お久しぶりね！」

一人の少女が扉の隙間から顔を出した。

水色の髪に赤い瞳、文字の書かれてある扇子を広げている彼女の名前は更織楯無。この学園の生徒会長だ。

「チェンジだ」

彼女の顔を見た瞬間、ゼロは扉を閉めた。

「ちよつと、いきなりなにをするのよーなによチェンジって、そういうのじゃないから！」  
バンと音を立てながら、勢いよく扉が開かれて楯無が中に入ってきた。

「わかっているさ、少しの茶目つ気だ。それくらい気づいたらどうだ。何の用だ？俺は用がないから帰って欲しいのだが……そうだお茶漬けでも食べるか？」

「そんなに帰したいか」

「正直に言えばイエスだね。入りたいなら入りたまえ。少しはもてなそう」

ゼロは先ほどまでとは別のソファに楯無を案内すると楯無は素直にソレに従った。  
「すまないな、碌なもてなしができてなくて」

そう言ってゼロは楯無の前のテーブルに何も具材が入っていない、お茶ではなくお湯

が注がれたお茶漬けを差し出した。

「お茶漬けは出すのね、普通こういう時はお水とかよね」

「だから、水をだしてやっただろ」

「普通は冷たいでしょ！」

「そう怒るな、これは私のご飯だ。貴様にはちゃんと用意してある」

ゼロは楯無の前に冷たい水の入ったコップを差し出し、お茶漬けを自分の前に引き寄せた。

楯無はもうこの段階でこの部屋に来た事は失敗だと思つたが、なんとか心折れずにした。

「それで、用件とは？」

あつという間にお茶漬けを平らげたゼロが楯無に尋ねる。

「貴方は何の目的でこの場に来たの？」

「今朝朝礼の時に話しただろ、用務員として働きに来たとな。元いた場所をクビになつてな、丁度再就職先を探していたのだよ」

「とぼけないで、そんなんじゃないでしょ。貴方達……亡国機業の真意は何」

楯無の言葉にゼロは目を細めた。

「へえ、そこまで調べたんだ。凄いねえ」



からかうような、嘲笑うような声色で楯無を褒めた。

「私たちを甘くみないで、そんなのとづくに知っているわよ……それで目的は何？」

「さあな、俺にも総帥の真意はよくわからん。あの人は、どうも俺に面倒臭い事を押し付けたがる性格らしい。まあ、総帥直参の人間だから仕方のない事だがな」

「総帥直参……」

総帥、その言葉に楯無は反応した。

亡国機業総帥、その存在について楯無は何度も自分の家の諜報部隊や国を使って調べようとしたがその存在に関する情報は一切集まらなかった。

完全に闇に包まれた存在。

だが楯無は知らなかった。

その総帥が先週までこの部屋で一緒に日本茶を飲んで和菓子を食べ、世間話に花を咲かせていた何処にでもいるような用務員のお爺さん、轡木十蔵だとは知らない。

「総帥とは何者？」

「さあな、教える義理はないな……もしかしたらこの学校の人間かもな」

事実である。

「そんなわけないでしょー！」

本当なのだ。

「それに、貴方達は轡木さんを何処にやったの？この前まであんなに元気だった轡木さんが、いきなり入院するわけじゃないじゃない！」

「あの年の人間は急病になりやすいんだよ………なんて冗談はやめておこう。お前が今にも怒りそうだ。あの御老人の身柄なら我々が預かつてる。安心したまえ、あの方に危害は加えないし、君たちにも危害を加えるつもりはない。俺の任務が終わるまでの間はな」

「……その言葉は信じていいの？」

「信じるなよ、碌でもない人間の言葉だぞ」

殴りたい、楯無の中でこれほど迄の衝動があつたのだろうかと言いたくなるほど、殴りたかった。

「今は大切な人に会えたから気分がいい。何か聞きたい事はあるか？答えられる範囲で答えてやる」

「貴方は第一回モンドグロツソで誘拐された、織斑千冬の弟、織斑一夏で間違いないわね」

「そうだな、だが違う」

「……違う？」

ゼロの言葉に引かなかつた。

「俺の名前は蝶羽一夏だ」

「蝶羽は偽名でしょ？」

「いや、本名だ。織斑はあの女の苗字だが俺の苗字ではない。俺の苗字は蝶羽だ」

「どういう意味？」

「そのままの意味さ……すまないがそろそろお引き取り願う。待ち人が来たのでね」

その言葉の直後、ノックオンが扉から聞こえた。

「さあ、帰っていただこうか」

## 第94話

「一夏くん、入るよ」

用務員室の扉をアリサがノックした。

「良いぜ」

「わかった」

その言葉の直後、アリサが扉を開けて入ってきた。そして入室早々楯無の存在に気がついた。

アリサはゼロに視線をむける。何故いるのかと目が告げる。

ゼロは勝手に来たたと表情、ジェスチャーそして視線で返した。

少し不満気ではあるが納得したような表情のアリサ、それを見たゼロはひとまず安心した。

「それで一夏くん、ご飯食べるんでしょ？」

何の気もなしに、非常に極自然にアリサはゼロの隣に肩を寄せながら座った。

「そうだな、取り敢えずは食堂に行くか」

「……貴方達、仲いいのね」

楯無は人前で堂々と仲良くしている二人を見て、無人島に取り残されてしまったような気分になった。

(ああ、しかもペアネックレスしてる)

二人の胸元を見ればペアネックレスがつけられてある。

楯無はまるでソレを見せつけられているようだった。

楯無は今まで彼氏ができたことがない。時々織斑百春をあの手この手でからかっているが、本人は男女の交際経験が全くない。

彼女は望みが高いのだ。

それなのにこの二人ときたら。

更織楯無、なんだかイライラする。

「というわけで、飯食うんで出て行ってもらえます?」

「そうね、これ以上は毒になる」

「流石はI S学園、食材の質と料理人の腕が一流だ。亡国機業の本部の食堂に負けてない。それに種類だ、様々な国の料理を揃えて各国から来る人間の不満をなくしている。拘りを感じる」

I S学園食堂、調理場の中を覗き込みながらゼロは料理人の腕とこだわりを褒めていた。

時間はまだ昼休みだが、もう終わりがけ、他の生徒はいない。

二人はゆっくりと食事を取ることにした。時間はどうしたと気にしてはいけない。ゼロの昼休憩はまだ充分に時間が残っているし、アリサも卒業までに必要な単位はすでに持っているのです、次の授業を受ける必要はない。というか担当の先生が千冬の為、一回も出席していない。

二人は窓際のテーブルに座った。窓からは水平線が見え、飯を食べるには絶景すぎる。

二人の前にはそれぞれが食べる分だけの飯が置かれている。アリサは日替わり定食、ゼロはとんかつ定食のご飯とキャベツ大盛り。

「いただきます」

一キレのカツを頬張るとそれだけでこの食堂の料理人の腕がわかる。

高い。

暫くは食に関する事は困らないと思ひながら、ゼロはご飯をモソモソと食べ進んでいく。

特にこれといつて会話があるわけではないのだが、二人はただ一緒に食事をするだけでも楽しかった。

こうして面を合わせて食事をするのは何年ぶりなのだろうか、およそ五年ぶりだろう。

時間が経つのは早いものだ。昔はまだ幼げのあつたゼロとアリスも今は立派に育つた。

二人はそんなことを思ひながら、ご飯を楽しむ。

「ごちそうさまでした」

十数分で二人はご飯を食べ終えた。そして食後の余韻を楽しむ。

窓の外を眺め、時間を潰していく。

何時もならば何をしてるのか、ゼロは思った。

訓練がない日なら、今頃はお気に入りのお喫茶店でコーヒーとケーキを食べて、午後からの仕事に備えている。

一人で過ごす時間も良いがこうやって二人で過ごすのも良い。

この落ち着いた時間が暫く続けば良いのに。

「おお、おお！ここにいたか！」

「イーリ、少し静かにしなさい」

入り口の方に二人の人影、そのうちの一人はゼロもあつたことのある人物で、もう一人は写真でなら見たことのある人物だった。

二人がゼロ達に近づいてくる。

「アンタ、亡国のゼロだろ。アタシと戦え」

「出会つて早々の発言がソレとは、アメリカの国家代表の脳は筋肉で埋め立てられてしまっているのか？」

ギョロリとゼロの鋭い目つきが近づいてきた人間の一人に向けられた。

「はっ、そんなつまらない話をする気はないさ。『亡国の黒いIS』、アメリカの上位のIS乗りの間ではちよつとした有名人なんだぜ」

ゼロに話しかけてきたのはアメリカの国家代表『イーリス・コーリング』、今はキャリアウーマンのようなスーツを着ている。

「お久しぶりね、こうして顔を見るのは初めてかしら？」

そしてその後ろから顔をのぞかせているのは『ナターシャ・ファイルス』、彼女もコーリングと同じようにスーツを着ている。



彼女とゼロは面識があるが、彼女がゼロの顔を見たのは今日が初めてだ。

前にあった時、ナターシャはゼロの顔が仮面によって隠されていたので見ておらず、彼女が見たのはゼロの上半身だけだ。

何故彼女たちがこの場所にいるのかというと、これも轡木十蔵の仕業なのだ。

轡木十蔵が亡国と深い繋がりのあるアメリカの大統領に頼んで、この二人をIS学園に呼んだのだ。

二人がこの学園ですべきことは生徒たちの強化、国家代表クラス二人からの指導は生徒たちに良い刺激になっている。

「貴方と会うのは初めてではないのでしょうか？」

「とぼけなくていいのよ、銀の福音が言ってるんだから」

そう言つてナターシャは銀の福音の待機形態を見せた。彼女もISと会話のできるようになった貴重な人間、ゼロの正体についても聞いたのだろう。

「啞々、そうか貴方は声が聞こえるんですね……だったら、隠しても意味がねえな。そうだ、俺が『亡国の黒いIS』その使い手だ」

ゼロの気配が変わった。

そして左手の袖をめくりあげて、自分の左腕に装着してある黒零の待機形態を見せた。

それを見て、イーリスは息を呑んだ。

「ナターシャ先生も声が聞こえるんですか？」

「ええ、あの一件以来ね」

声が聞こえる者同士で会話が盛り上がりつつある中、この場にいる人間の中で一人だけ声の聞こえないイーリスは疎外感を嫌った。

「おいおいおい、今話の中心はアタシだけ。アタシに関係ないことはやめてくれよ……さあ、どうするんだい？今から戦おうぜ、蝶羽」

両手をテーブルにつけながら、イーリスはグイッとゼロに顔を近づけた。

「無理だな」

「何故!?!ビビったのか?」

「違う、そろそろ午後の仕事が始まる。それが終わったら相手してやる。逃げも隠れもしない、安心しろ」

「本当か!?!」

より顔を近づけようとしたイーリスの顔をゼロは驚掴みにして押し返した。

ゼロはコーリングの顔から手を離すと、ゆっくりと立ち上がった。

「但し条件がある。この場にいる四人以外、アリーナに入るのは禁止にしろ。でなければ戦わない」

「その程度の条件なら飲んでやるぜ。それじゃあ、終わるのを待つてるぜ！戻るぞナタル」

「急かさないでよ。それじゃあまたね」

イーリスはズカズカと、ナターシャはゼロに向けてウインクをしてから帰って行った。

「それじゃあ、俺たちも戻るか」

「そうね」

午後の仕事が始まる。

終わった。

「よっしゃあ、それじゃあ始めるぜ」

「ああ、良いぜ」

アリーナで対面するゼロとイーリス。

普段ならば自主練をしている生徒たちで賑わっているのだが、今日だけは静寂が占領していた。

アリーナに居るのは現在四人、ゼロ、アリサ、ナターシャそしてイーリス。

生徒たちは何事かと思つて、アリーナに入ろうとしたが、イーリスが強制的に追い出して立ち入り禁止にした。

それだけイーリスは楽しみなのだ。邪魔をされたくない。

観客席にはアリサとナターシャがおり、広い観客席を独占している。

「それで、本気でたたかうのか？」

「ああ、本気だ。アタシはアンタの本気が見たいんだ。自分達が今何処にいるのか知りたいんだ」

「……そうか」

「それじゃあ行くぜ！」

二人が構え、そして走り出す。

「フアング・クエイク！」

「黒零」

両者、ISを展開。

その直後に両者二重瞬時加速を行い、超高速で距離を詰める。

組合を予想してイーリスは両腕を前に突き出すが、ゼロはそこから更にもう一度瞬時加速を行った。

## 三重瞬時加速。

ゼロは跳躍を行い、すれ違いざまにレッグラリアートを叩き込んだ。

一撃をくらい、地面を転がるイーリス。直様立ち上がるが、既にゼロからの追撃が迫っている。

ローキック、ハイキック、回し蹴り、踵落とし、浴びせ蹴りと蹴り技のオンパレードがイーリスに襲いかかる。

一撃一撃が確実に殺すという意思が見られる。

(これが黒いIS乗りか……強いな。予想よりも強い。近接戦なら、今まで戦ってきた奴の中でダントツだ)

ゼロからの近接格闘を凌ぎながら、イーリスは次の一手を考える。

(それに機体の性能が高い。そしてそれを完全に操れている操縦技術の高さと攻撃に対する反応速度……いいねえ、燃えてきた)

ゼロの実力に喜びながら、イーリスは次の一手を打つ。

イーリスは右手にナイフを呼び出して、素早く黒零の左肩を切りつける。

「先ずは一撃」

「ほざいてろ」

ゼロとイーリスの間にあつた僅かな間合いが更に詰められ、ゼロになる。

詰められる際にゼロは右手でイーリスの右手首を掴んでナイフの動きを制限する。ゼロの背中がイーリスの前面部に触れ、左手が淡い光を放つ。

これまでの時間はほんの一瞬、黒零の高い機動性能がイーリスに対処をさせない。「ハアッ！」

気合の入った声と共にゼロは体内にあつた空気を全てなくす勢いで息を吐き出し、全力のテツザンコウを繰り出してイーリスを大きく吹き飛ばす。

(重ッ!?アレただのテツザンコウじゃない。何か別のが入つてた?)

イーリスは空中で立て直すと、すぐ目の前にゼロが詰め寄つていた。

絡み合う両者、ゼロは落ち着いてイーリスの両手を掴んで力勝負を仕掛ける。

互いに全力でスラスターを噴かせる。パワーでは完全に黒零が上回っており、徐々にイーリスは後方に押し込まれている。

「どうした?アメリカ代表さんはそんなモノか?」

嘲笑いながら、ゼロは退屈そうに呟いた。

「舐めるな!」

イーリスがスラスターを噴かせる勢いを増し、同時に自分の行いが失敗であつたと気づいた。

だが既に遅い。

ゼロはイーリスの体を引っ張り、その瞬間にスラストターを切った。

イーリスの肉体が前向きに傾く。イーリスはスラストターの勢いのままに突っ込み、ゼロはカニばさみでイーリスの肉体に抱きつくつと、ファング・クエイクのスラストターの向きを意識しながら地面にイーリスの頭を地面に叩きつけるように仕向ける。

「ならあつー！」

イーリスはあたまが地面に着くよりも早く両手を地面につけて逆立ちのような体制になる。

そしてそのまま体を捻ってゼロを払い飛ばす。

ゼロは地面に着地後、後ろに大きく飛んで距離をとった。

「続けるか？」

「当たり前だ。今はつきりした。アンタはアタシが戦ってきたIS乗りの中で最強だ。最高のISに最良のIS乗り、敵として戦うのは燃えるねえ」

「そうか、ではもう少し上げるぞ」

黒零の右手がエネルギーを纏いランスを作り上げる。これは今までの黒零ではできなかった形状でこの前の束による調整によってできるようになった。

「そうだよな、まだ手は隠してるよなー！」

イーリスはナイフを収縮して、今度は長剣とエネルギーガンの融合した特殊な形状の

劍……ガンブレードを構えた。

「もう一度だ！」

劍先を突きつけて、発砲。まっすぐに向かって来る無数のエネルギーの弾丸をゼロは滑らかに、アイススケートをするかのように美しくぐり抜けてくる。

ゼロの一突き目をイーリスは劍の腹で防ぐ。

続けて二突き目は素早く横に回り込んでからの攻撃、イーリスはこれも防ぐが今度は背後に回り込まれてもう一突き。

……嫌な戦いをする。

イーリスは思った。自身の機動性能の高さを生かした小回りの効いた今のゼロの戦いを、彼女は好まなかった。

彼女はしたいのだ。もつと力と力が激しくぶつかり合う戦いを。

それなのに、今のゼロは拒むように戦っている。

もつと真正面からぶつかって来い。

願いが肉体を昂らせる。

打ち込んできたランスを力一杯に弾き返す。弾き返された衝撃を利用してゼロはバク宙を行って距離を取る。

(今！)



この一瞬をイーリスは見逃さなかった。

瞬時加速で距離を距離を詰めながら、ゼロに向けてガンブレードで発砲する。宙を舞うゼロはランスでこれを防ぎながら、次のイーリスの行動を観察する。

ランスが螺旋回転を始める。

着地、ゼロの目の前にはイーリスが迫っている。

右腕を前に突きつける。

(スラストアーで移動しながらの突きか?)

次の一手を予想する。

しかし、次にゼロがとった行動はイーリスの予想外のことであった。

腕から射出されるランス、回転のかかっていたソレはまるでライフルの弾丸のように高い貫通性能を持ってイーリスの腹に迫った。

「うおっ!?!」

咄嗟の出来事にイーリスは急ブレーキをかけてランスをブレードで受け止めたが、大きく後ろに下がってしまう。

「驚くのは早いぜ」

ゼロが追撃の一手を仕掛けてくる。

右腕の多機能腕を使用、今度は右手の掌にエネルギーの刃で作られた丸鋸を生み出

す。

超高速回転する鋸が生み出すキンキンと響く高音は他者に恐怖心を芽生えさせる。

「シヤラアツ！」

イーリスはランスを弾き飛ばし、直様迫ってきていたゼロを迎え撃つ。

丸鋸の斬撃はギョリギョリとガンブレードの刀身を削り取っていく。

イーリスはゼロを押し返そうとするが黒零の方がフアング・クエイクよりも力が優っているため、逆に押し込まれてしまう。

だからイーリスは横に転がり、追いかけてしようとしたゼロに発砲して動きを止めた。

「その腕………便利だな」

「だろ、俺も気に入ってるんだ」

「本当………厄介だよ」

イーリスは新たに両腕にナックルガードを装備させた。

近接格闘装備しかないのかとゼロは思ったが、まだガンブレードがあるだけましかと割り切った。

丸鋸からランスに切り替える。

今回追加された二つの機能はゼロの提案によって生まれたモノである。

今までの多機能腕は、殴る、撃つ、斬るといった要素はあったが、穿つや削るといっ

た要素はなかったので提案された。

今日が実践での初めての使用、ゼロ的には満足だったので問題はありません。

本来ならば零落極夜と併用するのだが、今回はやめている。

もし同時に併用したならば、相手の胴体を一撃で貫いたり、装甲を削りながら殺すことになる。

流石にソレを国家代表、それも亡国機業と深い繋がりのあるアメリカにやるのはマズイ。

ランスを超回転させて貫通能力を上げる。零落極夜は使っていないので問題はない。破壊の大槍。

両者ともに技の威力は先ほどよりも上がっている。

それがぶつかる。

攻撃の反動でぐらつきそうになる肉体を両者持ちこたえて、何度も敵に攻撃を仕掛ける。

ランスの回転がもう一段階速くなり、周囲に紫電がまとわりつく。

イーリスの体に悪寒が走る。アレを食らうのはマズイ。

距離をとって防御の構えを取る。

ゼロがランスを大きく振りかぶる。

「超爆裂ー！」

その一撃はまるで一筋の閃光のよう出会ったとイーリスはのちに語った。

防御なんてモノはくだらないといっているかのような圧倒的な攻撃力。

(ヤバイヤバイマズイ！)

飛びかかってきたゼロの一撃を全力で受け止める。しかしゼロの一撃は破壊力が高すぎる。

イーリスのつけているナックルガードが悲鳴を上げる。

破壊音が混じり始める。

このままではマズイと判断して、上に向けてゼロを押し返した。

そしてこの瞬間にイーリスは違和感を覚えた。何故自分よりもパワーがあるのに、簡単に押し返されてしまったのかと。

(……………畏か)

気づいた時には既に遅かった。

上空にはランスを解除して右手を硬く握りしめていた。

躲せるか……いや、不可能だ。相手は何処に逃げててもゼロは追い詰める。

だから彼女は、敗北した。

「気はすんだか？」

「……ああ、満足だ。裏の世界にはアンタくらい強いやつはいるのか？」

ゼロに敗北して、地面に大の字で寝転がっているイーリスはゼロに尋ねた。

表の世界の強い人間とは戦い尽くしたイーリスだが、ゼロのような亡国機業もしくはネオといった組織に所属している人間と戦った経験はあまりなかった。

「……そうだな、守りの戦いだったら上司が俺より優れている。だが、攻めの戦いだったら仲間内にはいないな……敵にはいるが」

「敵にいるのか、アンタ並のやつが」

「同じ機体に乗ったとしたら勝てるか怪しい奴が一人だけいる。まあ、世界探せば他にもいると思うがな」

ゼロは何度も戦ったことのある敵の事を思い浮かべた。

「そうか、世界は広いな。アメリカの頂点になっても、まだまだ上はいるのか。今日はありがとうな」

「……そいつはどうも。おお、寒い」

秋風が身にしみたのか、ゼロはブルリと体を震わせた。コートを呼び出して、羽織そそくさとロッカールームに戻って行った。

戦いが終わったらもうどうでもいい。

シャワーを浴びて着替えも終えたゼロはアリサと一緒に用務員室に向かっていた。

「そういやあ、再来週から修学旅行らしいな」

「ええ、今年は例年と違って海外に行くらしいのよ。一夏くんも行く?」

「ははっ、そいつは無理だな。確か英独仏だろ? かあー、金持つてるよなあ」

周囲は既に薄暗くなっており、アリーナから用務員室に向かうまでの用務員室には枯葉が落ちており、ふたりはパリパリと踏みつけながら歩いている。

「……………アリサ、先に行っててくれないか」

「……………そうね、暫く時間かかりそうね。ご飯はどうする?」

「先に食べててくれ。一人で食う」

「わかった」

アリサは早足に帰って行き、残ったゼロは少し遠くを見た。

「よう、久しぶりだな。織斑千冬」

「……………ああ、久しぶりだな……………一夏」

そこにいたのはゼロの義理の姉である織斑千冬。遠巻きから二人の事を見ていたようだ。

大方、話しかけようとしたが決心がつかなかったのだろう。今も何を話したら良いのかわからない様子で、視線を逸らしたり、合わせたりを繰り返している。

「……………ハア」

そんな様子の千冬を見てゼロは思わずため息がこぼれてしまった。

「目元のクマ」

「……………？」

「一見綺麗にアイロンがけをしているように見えて、実は袖の先までかけてはいないスーツ……………てめえ、まだ家事が下手なのか？それに食生活の荒さも見えるな。晩酌のビールの飲み過ぎだろう……………そんなんじゃないわついた話の一つも聞かないのも納得だ」

再開して早々の遠慮のない駄目だしに千冬は心が折れそうになったが何とか踏みとどまった。

「ここで折れてしまったら、何も進まない。」

「……そうみたいだな。何年も自分で頑張っているんだが、私は家事仕事で不向きみたいだ。人と戦うのは得意でも、家を守る事は不得意らしい」

自嘲しながら話す千冬はとても哀愁が漂っていた。

「……そんな悲しい事言うなよ」

ゼロの小さな呟きは誰に届くわけでもなく、近づいてきた闇夜に吸い込まれて行った。

「その、なんだ、背丈、大きくなったな」

ゼロの背丈は完全に千冬の背丈を抜き去っていた。

一緒に暮らしていた頃はまだ千冬の方が大きかったのだが、行方不明になって、何時の間にか抜かしていた。

「そりゃあなあ、あんたの見てない所でスクスクと育ったんだよ………あんたも、そんなに小さかったか？」

「ああ、ここ数年は身長は変わっていない」

千冬は少しだけ嬉しそうだった。

千冬はゼロ……一夏に声をかけるのが怖かった。本来ならば自分は声をかけるべきではないと思い、迷っているうちに気づいたらこんな時間になっていた。

「そうか……そんなに大きくなかったんだ。もっと大きく見えてたんだがな」



遠くを見つめるゼロ、彼の瞳には少しの悲しきがあった。

子供の頃は大きく見えた背中が、今はなんだか小さく見えてしまう。

馬鹿にしているわけではない。

一夏にとつて千冬の背中は大きく見えていた。

無敵に見えた。

でも大きくなると彼女にかかっていた重さを理解できた。

だから今こうして自分の目の前にいる弱々そうな千冬を見て辛くなった。

「……巣を飛び立った雛鳥達は戻らない」

「……」

千冬の突然の呟きに、ゼロは視線を逸らした。

ゼロは既に飛び立って行った鳥、千冬という巣から飛び去って己の巣を遥か遠くで作

り上げてしまった。

だから、もう戻ってくることはない。

その事を、千冬は理解した。

先日の束との電話で理解した。

それでも理解した事は彼女の進歩の一つなのかもしれない。

「俺は昔はあんたに憧れていた……孤高で強そうだった背中を見ていた……見ていたは

「ずだったんだ」

ゼロは近くにあつたベンチに座り、優しい瞳で千冬を見た。

「あの時、もっと大人だったら良かったのにな……そうすれば、俺とあんたはこんな風にならなかつたんだよ。どっちもどっちだ。あんたは守るのに必死だった。手に持っているモノを零さないようにするのに一杯一杯で、持っているモノに目がいかなかった」

もう手遅れだ。関係は元には戻らない。その事に二人は気づいている。

「俺は飢えていた。誰かからの愛に飢えていた。だからあんたとは相入れなかった。あんたは守る事に精一杯だったからな」

千冬は顔を逸らした。

「そう、気まずそうにするなよ。過ぎてしまったことだ。俺はもう何も思っていない。俺も何も言わなかった。あんたも何も言わなかった。お互い様だよ」

ゼロは薄暗くなった道にポツンと立っている街灯の光を見た。

「俺はあんたらのいる場所には戻らない。決めちゃったことなんだ。俺が自分の意志で、誰からの言葉でもなく、自分で決めたんだ。今はあの場所が俺の居場所だ」

強い信念が込められたゼロの瞳が千冬の目に写った。

その瞳を見て、千冬は瞳を閉じて満足げに頷き息を吐いた。

「……そうか、私も区切りがついた。この前東に言われたよ。一夏は離れた、それを理解

しろとな。その意味がわからなかったが、今ようやくわかった。お前は飛び立ったんだな」

千冬は踵を返して、ゼロに背中を見せた。

「私はこれ以上お前のやり方には何も言わない。だが、これだけはせめて言わせてくれ。同じ業には戻ってこなくてもいい、でもせめて同じ土地には帰ってきてくれよ」

もう家族には戻れない。それならばよき隣人でいてくれないか、千冬はそう言いたかった。けれどそれを言ってしまうのはゼロの道を邪魔してしまうと思い、言えなかった。

それだけを言い残して、千冬は夜道を歩き始める。

「そっか……………ありがとう、千冬姉」

姉と呼ばれた。

千冬は振り返りたかった、一夏の顔を見たかった。

だがそうはしない。振り返れば決断が弱まってしまう。また甘い言葉を言ってしまうことになる。

目から流れ出てくる涙を止めることなく、千冬は気高く振る舞う。それが一夏の憧れていた自分の姿なのだから。

「馬鹿者、織斑さんか、織斑先生と言わんか。お前は用務員で私は教師だ」

わずかながら、涙が声の中にあつ。

それにゼロは気づいた。

「すまん、そうだったな」

けれど言及しなかった。

「そうだ、わかればいいんだ」

涙を拭うことなく、千冬は去って行つた。

残されたゼロはベンチに座つたまま空を見上げた。

薄暗くなった空には満月が浮かんでいた。亡国機業の本部から見ていた者と何か違う気がするするが、ウサギか女神の横顔かの違いだと結論つけた。

「もう良いぜ、出てきても」

ゼロが背後に向けて声をかけると、物陰から一夏の弟である百春があらわれた。

「何か言いたいことはあるか?」

「ないよ、これは兄さんが決めた道だ。僕は何かを言える立場じゃない」

「冷たいな………それにしてもめえは小さいな」

ゆつくりと立ち上がる。

「僕の身長は平均よりも少し高い、僕が小さいんじやなくて兄さんがデカイだけだ」

二人は向かい合つて立つが、ゼロの方が背が高い。双子同士でここまで背丈が変わる

のかと言いたくなるほど、十cmくらいゼロの方が高い。

「それでご用件はなんだ？俺はこれからアリサとの晩御飯を楽しみたいのだが」

高い位置から見下し、挑発的に笑いながらゼロは百春に問いかける。

ゼロは既に百春が何を言いたいのかわかっている。百春の方からソレを言ってくれ  
るのはゼロにとつてはとても都合の良いことであつた。

自分が面倒をしなくて良いので。

「俺を鍛えてくれ」

「良いぜ、だが地獄を見る気でいろよ」

轡木十蔵がゼロに与えた任務は三つ。

その最後の一つは。

『織斑百春の実力を上げること』

## 第95話

「それで、お前の鍛え方についてなんだがな」

場所は変わって用務員室、ゼロは百春を招き入れてソファアに座らせた。

「お前は今伸び悩んでいるらしいな」

「ああ、ここ最近いくら鍛錬しても強くなってる気がしないんだ……なんだか目の前に大きな壁がある気がするんだ」

楯無に鍛えられてからの百春は日に日に確実に成長していた。楯無の教えを吸収してはそれをすぐに次の訓練に生かしていた。

だがある日突然成長が止まった。その事は百春だけでなく楯無も感じていた。

何が原因であるのか二人は考えたのだが結論は出てこなかった。

「当たり前だろ、お前とあいつじゃ見てるモノが違う」

それなのにゼロは既に原因がわかっているらしい。

「わかるの？」

「ラグビーとアメフトって似てると思わないか？」

「え？……あ、ああ。確かに似てると言えば似てるけど。いきなりどうしたの？」

何が言いたいのかわからない。

「そういう事だよ。戦いをスポーツと考えれば、更識のやっている事はラグビー、お前がやろうとしている事はアメフト。似ているけど違う。だからお前の中で無意識にやっている事に対して違和感が生まれてしまって、成長を阻害している」

「……言いたい事は何となくだけどわかる。つまりは僕は僕にあつてない事をしてたつて事？」

「そういう事だ。だから俺はお前をしつかりと方向を持つて教える」

「……」

ゼロはそんなことを言っているが、百春は本当にできるのかと疑っている。

「安心しろ、お前の戦いはわかっている。お前の戦いは誰かを守る為の戦いだ。俺たちとは違う。俺の戦いは殺す為の戦いだから……方向は見えている。振り返ればいいだけだからな」

「信じていいのか？」

「任せろ、俺はお前の兄だ」

自信満々に見下すように微笑むゼロ。

「はは、それは心配だ」

「ハッ、ぬかしてろ」

二人は一度落ち着く為に目の前にあつた熱い日本茶を飲んだ。

「まあ難しいこと言つたが、やる事は簡単だ。お前の肉体を超高速移動に耐えられるようにする事だな。お前、あの時肉体が精神においていかれただろ」

あの時というのは前回ゼロと百春が戦つた時だろう。その際に百春は白式の機動に肉体がついていけずに倒れてしまった。

だからゼロは肉体を鍛える事を優先する事にした。

「幸い、この施設のジムは最新式の設備が整っている鍛えがいがある。まあ、短時間でどこまで鍛える事ができるかわからねえが、やるぞ」

言葉は軽いが目は真剣だ。

「お願いします」

百春は頭を下げた。兄弟という仲であつても、礼儀は必要なのだ。

「おう、任せろ。それに今日はもう帰って寝ろ。明日から早え」



時間は過ぎて消灯時刻、ゼロは全ての仕事を終わらせ、明日の準備を済ませると就寝準備に移る。

警備の方はしなくて良いのかと言われるかもしれないが、警備の仕事は生徒会——更識達の仕事なのだ。彼女たちが代わる代わるで毎夜警備を行っているのでゼロはしなくて良いのだ。

何故そうなっているのかと言うと、前任の轡木が老人だからそれを労わってのことらしい。

軽めのストレッチを行って筋肉の緊張状態を解除する。今日はもうお終い、その事を自分の体にわからせる。

「ふう……寝るか」

黒零の待機形態である漆黒のガントレット、アリスから貰ったネックレス、シルヴィアの形見である指輪を外して貴重品入れに入れる。

ベッドに向かおうとした時、部屋の扉を誰かがノックした。

「待ってる、今開ける」

首を横に振ってゴキリゴキリと音を鳴らしながら扉に近づく。

ドアノブに手をかけてドアを開ける。

「来ちゃった、一緒に寝よ」

扉の前にいたのはジャージを着たアリサだった。学校指定のジャージなのだが、少しでもオシヤレにしようというのがゼロの目から見てもわかる。

手には袋を持っており、中には着替えが入っている。

突然の来訪だというのにゼロは驚いている様子はない。

どうやってきたとも聞かない。抜け出してバレ内容にきたのだろう。

「あれ？驚かないの？」

「来るんだろうなあとは思ってたよ。ティファの奴もそういうことするからなあ」

ゼロは確信はなかったが、アリサが来ることは予想していた。

本部にいた頃は今回のようにゼロの所に来て、二人一緒に寝ることがあった。

「へえ、ティファちゃんが。そう」

「まあ、入りな」

扉を大きく開けてアリサを中に招き入れる。

アリサは中に入ると手に持っていた袋を近くのソファアの上に置いた。

「着替えるなら、他所向いとくよ」

「別に見ても良いのよ、一夏くんなら」

ジャージのジッパーに手をかけるアリサ。誘っている。ゼロはもしこの場所が亡国

機業本部の自室だったら、ガバツといっちゃてるのだろう。

だがゼロは壁を向いた。

流石にこの場所はマズイと思った。

「そういうのはそういう時に見るよ。今は、そうじゃない」

シユルリシユルリと肌と布が触れ合う音が聞こえる。壁を向いているが聴力は全力で背後にいるアリサに向けられている。

普段クールぶっているゼロも所詮は思春期なのだ。興味がないわけではない。

「でもティファちゃんは最後まで見たんでしょ？」

ゼロは壁に両手をつけて膝から崩れ落ちた。

それを言ったらお終いだと背中が静かに告げている。

醜い、数多の戦場を生き残って来たゼロもこの場所では一方的にやられている。

あの時も一方的にやられていた。

「怒ってるのか？」

恐る恐る尋ねる。

肩に手がそつと添えられ、後ろからアリサに抱きしめられる。

「大丈夫、変な話だけど一夏くんはそういう人だつてわかつてる。一夏くんは自分の大切な人を無碍にできない人だつてわかつてる」

耳の中を舐められるような艶のあるアリサの声が入ってくる。

「だからさ、今日はゆっくり寝よ」

アリサがゆっくり離れていく。

ゼロは振り返り、そこにいた寝巻き姿の彼女に思わず見惚れた。

何年もあつてないうちに二人は成長した。だからかもしれないが、昔は何度もお泊りをしてきたのだが、ゼロは新鮮な気持ちであつた。

「昔はこうやって、一緒に寝ることもあつたよね」

「そうだな」

明かり一つない暗闇、一つのベッドの中で互いの温もりを感じながら眠りにつこうと  
していた。

「今日までずーっと夢見てた、一夏くんとこうやって眠れるのを。前はティファちゃん  
も一緒に、一夏くんが真ん中で三人で寝たね」

「そう言えばそういうこともあつたな」

アレは小学五年生に上がる直前の出来事だつた。ティファの家族が日本に遊びにき



一日が終わる。

## 第96話

IS学園一年一組、ホームルームが始まる前の少しの時間、多くの生徒たちは昨日赴任してきた用務員の事について話していた。

そしてホームルームの時間が近づき、生徒達はそれぞれの席についている。

生徒達はこのクラスを中心人物である織斑百春が来てない事に気づいた。普段ならばもう席についていてもおかしくない時間帯なのだが、どうやら今日は来てないらしい。

何かあったのかと皆が心配する。

「失礼するぜ」

教室の前方の扉が勢いよく開かれて一人の男が中に入って来た。

その人物を見てクラスの女子たちは思わず声をあげた。

蝶羽一夏、昨日から用務員としてこの学園に赴任して来た男だ。

こうして近くで見るのは初めてだ。一夏の背丈の大きさに皆が驚き、そして。

「……………似てる?」

誰かが言った。

一夏の雰囲気は百春と似ていないが、顔つきだけは似ていた。双子だから当たり前なのだが、彼女たちはその事を知らない。

百春が優しい雰囲気のある近寄り易い人間なのに対して、一夏は冷たい冷酷で冷静なイメージのある近寄り難い人間。

だがそんな事よりも、注目するべき箇所があった。

「なあ」

ゼロはすぐ近くの席に座っている少女に声をかけた。

「は、はい！」

いきなり声をかけられて驚いた少女はビックリと体を震わせた。

「コイツの席って、何処だ？」

ゼロは自分の左肩に俵式に担いでる気絶している百春を叩いた。

「あの、場所です」

少女が空いている百春の席を教えると、ゼロは軽くお礼を言ってから百春の席に移動する。

百春を肩から降ろして席に座らせ、制服を整える。

「失礼した」

百春を席に座らせ終えるとゼロは直ぐに出入り口に向かった。どうやら用件はこれ



ただだったらしい。

「待て一夏！」

背後から声をかけられ、ゼロは振り返った。

「何だ？ 篠ノ之之之之之之之之之之之」

「之が多い」

ゼロに声をかけたのは百春の幼馴染で、ゼロとは幼馴染とは言えない関係の篠ノ之箒だ。

「お前は何をするつもりだ？ 私にはお前の行動の意味がわからない」

「意味をわかってもらうつもりはねえから、黙ってる。俺がてめえらに話す事は何もないんだよ」

箒を見る事もなくゼロは冷静に告げる。

彼は箒に興味がないのか、この会話すらも面倒臭そうだ。

「まあ、そういう事だ……他の方々はすまないな、朝の大切な時間を邪魔した」  
箒の事を無視して歩き始める。

「待て、話は終わってないぞ」

「終わってんだよ」

ゼロは教室の扉を開けて外に出ようとする。

だかそうするよりも早く扉が開かれる。

「どうした？一夏、何か用か？」

扉を開けたのは百春の姉である織斑千冬。

「いや、大丈夫だ。アレを運んだだけだ」

振り返らずに親指で気絶している百春を指差し、それを見た千冬は思わず溜息を吐いた。

「訓練はいいが、せめて気付けぐらいさせてから連れて来い」

「いやな、気付けさせようとしたのだが中々元に戻らなくてな。顎に拳がクリーンヒットしたからなあ。ま、直ぐに戻るか、お姫様がキスしてやんな。お伽話みたいに目覚めるかもしれないぞ……おっと、あれは逆だったな」

ゼロはスルリと千冬の横を通り抜けて、廊下を歩き出す。

その簡単なやり取りに千冬は嬉しさを感じたが、同時に淋しさを感じて目を瞑ってしまつた。

「馬鹿もん、冗談はよせ……………よせ！」

目を開けた千冬が見たのは百春にキスをしようとする、ラウラを除いた専用機持ち達であつた。

そして夕方。

(どうしてこうなった……どうしてこうなった！)

百春は新たに進化した白式を操りながら、自分のおかれた状況に戸惑っている。

「オラオラどうした！ 攻撃は止まらねえぞ！」

アリーナの中には百春の白式の他にISが四機、そのうちの三機が百春に向けて攻撃を仕掛けている。

一機目は『フアング・クエイク』、パイロットはイーリス・コーリング。

二機目は『銀の福音』、パイロットはナターシャ・ファイルス。

そして最後三機目は『アイリス』、パイロットは誘宵アリサ。

三人は言葉を交わさずに連携を取って百春に攻撃をしかけて、百春はそれを防御しながら隙を見て攻撃している。

今現在はゼロによる百春の訓練の時間、ではそのゼロは何処にいるのかと言うとアリーナの観客席から通信機を使って四人に指示を出している。

本来は百春とゼロの二人でやるはずだったのだが、まず最初にアリサが加わり、次に

面白そうだという理由でイーリスが加わり、それに巻き込まれてナターシャも参加する事になった。

イーリスが参加したのは他にも理由があり、百春にツバをつけておくためだ。少しでも関わりのある方が、アメリカに引き抜きやすくなるからだ。

「百春、動きが鈍くなってる。余計な事を考えているだろ。集中しろ、でなければ乗り切れんぞ」

ゼロが機械を通して百春に檄を飛ばす。

百春が今行っている訓練は強くなるためのものではなく、極限の状態になるための訓練である。

極限の状態とは百春が前回のゼロとの戦いで白式が進化した際になった状態の事で、こうなる事によって機体の性能を引き出す事ができる。

「落ち着いてI Sと息を合わせろ」

「そうは言われても躲すのに精一杯で」

「I Sと呼吸を合わせて、ゆっくりだ。落ち着く事を恐るな。今のお前の機体ならI Sが動いてくれる。次にどうすればいいのかわかるようになるはずだ」

百春はゼロの言葉に従って落ち着いて機体と呼吸を合わせようと試みるが、目の前の三人の対処に精一杯でうまくいかない。

それでもなんとかして呼吸を合わせようとするが、その瞬間に隙が生まれてしまい攻撃を食らってしまう。

「落ち着けと油断しろは違うぞ……………三人とも、次はナターシャをメインにして遠距離から攻撃を頼む」

三人は返答しなかったが指示は通っているようで、距離を取って遠距離攻撃をしかけ始める。

「ウオオ!!」

白式の右ウイングスラスタアが大きく唸る。

次の瞬間には高速移動を行っているが、以前ゼロと戦った時ほどの速度ではない。あの時の速度はゼロでもギリギリだったのだが、今回は肉眼で余裕で確認できる。

それは三人も同様らしく動く百春に向けて正確に弾丸を撃っている。

「なら、これで!」

ウイングスラスタアから薄いエネルギーのマントが現れて弾丸から百春の身を守る。

更にマントで体全体を包み込み込み高速回転を行う。高速で回転する肉体は迫って来た弾丸を逸らし、弾く。

そして十分に距離を取ったところでマントを解除し、回転を止めた。

「……………よし、一旦休憩」

ゼロのその言葉を聞いた途端、百春は大きく息を吐き出した。

かれこれ数十分近く三人の国家代表レベルの人間の相手をしてきた百春の体力は限界に近かった。

無茶苦茶な訓練ではあるが、ゼロから飛んでくる的確なアドバイスのお陰でシールドエネルギーは尽きなかった。

数十分ぶりに落ち着いて吸った空気はとても美味いと感じてしまう。

ドット疲労が肉体に押し寄せてくるが、それでも極限状態ほどの疲れではない。

百春曰くあの状態は肉体と機体が完全な一つの状態になっているらしく、五感……直感も含めた六感がいつもの何倍にも研ぎ澄まされるのは負担が大きい。

正直なところ、あの状態で平然と戦い続けられるゼロが百春は恐ろしかった。

「十分ほど休憩した後、もう一度訓練を再開するぞ」

「応ッ！」

結局、百春はこの訓練を肉体の限界ギリギリまで行った。

## 第97話

「まあ、最低限のレベルにはなったかな」

「……ありがとう、鍛えてくれて」

修学旅行を来週に控えた金曜日、ゼロによる百春の訓練は一段落迎えていた。

その段階とは百春の実力がある程度のレベルに到達する事。この二週間で百春の実力は飛躍的に上昇した。

ゼロのアドバイスを聞いて、その言葉を自分なりに噛み砕き、理解して行動していた。剣の振り方一つ取っても彼なりのモノになっている。

今の彼の戦い方は模造品ではなく、彼自身が作り上げたものになっている。

その事をゼロも密かに喜んでいた。決して表には出さない。それが兄のプライドだ。

「正直驚いているよ、お前がここまでやるようになるとは。まあ俺の教えが良いからだろうな。勿論」

「お前の努力も認めてはいるがな」

「兄さんは凄く面倒臭い性格をしている」

この二週間で二人はマトモに会話ができるようになった。互いに過去の事は聞いていない。今からの事を考えて会話している。

「自分でもわかるよ、I Sの動きがだいぶ改善されている。二週間前とは大違いだ。これも兄さんの言うアメフトの練習をしたお陰かな……でも極限状態にはなれなかった」

結局今回の特訓では百春は極限状態に自由になれるようにはならなかった。

この事に関しては何が足りないのかわからない。コレは百春とシロノの関係の問題であり、ゼロが口出す事はできない。

「あまり気にするな。お前はまだ声が聞こえていない……もし声が聞こえるようになったら、なれるようになるさ」

「I Sの声……か。難しいね」

I Sの声が聞こえない事に悩む百春、ゼロの経験から言うとI Sの声が聞こえた方が楽だ。操縦が何倍も楽になる。

「……そうだ百春、最後にアドバイスしとくよ」

「何？」

百春が聞き返すと、ゼロは少しだけ優しい笑みを浮かべ、直様真剣な顔つきになった。その顔は百春が今まで見てきた兄、一夏の顔の中で最も真剣な顔だった。



心の底から百春の事を思つて、言葉出そうとしている。

百春の身体にも無意識のうちに力が入る。

「百春、お前は憎しみや怒りで戦うな。もし人を殺す事になつても、己の意思で行え。自分の決意を他人に依存させるな。ソレを怠つてしまったなら、お前はお前ではなくなつてしまふ」

「……………兄さんはソレをしたの?」

恐る恐る百春は尋ねた。

「俺の戦いはお前とは違ふ。俺の戦いは殺意や憎しみに塗れた戦いだ。お前のように守るためじゃなく、倒すために戦つてゐる。俺はお前に言つてるんだ。俺に言つてるんじゃない」

ゼロはハハッと乾いた笑いをした。

「決意のない殺しはお前を傷つける。兄として、そういうのは見たくねえ……………そういう事だ。俺は先に戻る。後は任せろ」

アリーナの出口に向けて歩いて行くゼロ、百春は無言でその背中を見ていた。

幽霊、亡霊、幻影、まるでこの世のモノではないかのように思えた。

「頑張つて、シロノと一緒に『真なる零落白夜』を見つけてよ」

「……………え?」

最後に飛び出した発言、百春は耳を疑った。

『真なる零落白夜』、それが何を意味するのかゼロにしかわからない。

「結局、一夏くんは行かないんでしょ？」

「ああ、行かねえな。任務がある。それに旅行だったら落ち着いた時に行きてえよ」

夜、いつものように用務員室に遊びに来たアリサはベッドの上でくつろいで、ゼロは蜂蜜を入れたホットミルクを飲んでいる。

「そっかあ、残念だなあ」

「イギリスに行つて、ドイツ行つて、フランス行つて、帰国か。流石はIS学園だな、お金をたんまりもつてやがる」

「例年通りに海外のISについての研修と観光らしいよ。去年はロシアで一昨年はアメリカとカナダ。まあ私はフランスの研修には参加しないんだけどね」

「……デユノアか。それなら確かに参加しないな」

フランスでIS研修を行うとなるとデユノア社が関わって来るのは間違いないだろ

う。そうなれば同業他社の誘宵グループに属するアリサは参加できない。

「そうなの、その時間暇になるから一夏くんにも来て欲しかったのよ」

「成る程ね、だったらティファの奴に声をかけておくよ。彼奴だったら喜んで休みとつて行くだろ」

「ティファちゃんか、確かに久しぶりに二人で話したいわね」

フフツと花が咲くように笑う。

「さて、そろそろ時間だ。寝るか」

「ええ、そうね」

二人は電気を消してベッドに入り込む。もう慣れた景色だ。

修学旅行が始まる。

それは波乱に塗れた血濡れた旅行、行き着く先は地獄の業火が広がるか。

「さあ、我々も動こうか」

## 第98話

「今頃アリスはフランスか、帰ってくるまであと数日。長えなあ」

アリス達 I S 学園一年生が修学旅行に行つてから一週間と数日、ゼロは屋上で背もたれに寄りかかりながら、時の残酷さを嘆いた。

「でもまあティファもフランスに行くつて言つてたし、今頃は二人で仲良くフランス観光でもしてるのかねえ……………はあ」

溜息を一つ吐いた後、ゼロは自分の左手にハンドガンを呼び出して、物陰に向けて構えた。

「誰だ？五秒以内に出てこないと全力で殺すぞ」

やる気のない声でゼロはこの学園にいる人間のモノではない気配を放つ侵入者に銃口を向ける。

ゼロの殺気を受けて、侵入者は物陰からユックリと姿を表し、その人物が誰なのかわかるとゼロは銃を元に戻した。

「…………クロエ・クロニクルか、久しぶりだな。何のようだ」

侵入者の名前はクロエ・クロニクル、篠ノ之束の下で生活している少女だ。彼女とゼ

口がこうして二人で会話するのは初めてだ。いつもは束が一緒にいる。今日はゴスロリ服を着ている。

「束様から伝言を賜りました。例の計画には賛成だ、との事です」

「伝言ぐらいなら通信で言えば良いと思うのだがな」

「束様は現在手が離せない状況にあるのと、私があなたに直接聞きたい事があったので」

「聞きたい事？」

「ええ」

クロエは瞳を閉じたままユツクリと頷いた。彼女は瞳を閉じたままだ。ずっとずっと、この場に来た時から、そして束のラボであつた時から瞳を閉じている。

だが彼女は瞳を閉じていても問題はない。彼女と一体化してあるISが彼女の五感の代わりになるのだから。

「貴方は何のために生きていますのですか？」

「……………哲学か？聞く相手間違えてるぞ」

「いえ、ただの質問です」

何の為に生きていますのか、難しい質問だ。

顎に手を添えて考える。何の為に生きていますのかということではない、何でこんなこ

とを聞いて来たのかということ。

彼女の問いかけを答えることは簡単だ。心にも思つてもいないことを言えば簡単に終わる。

だがそれはやってはいけない気がする。

何故かと問われたのならば、わからないと答えるしかない。

「……難しいな。そういうお前は何の為に生きている?」

「わかりません、私は何故私が生きているのか全くわからないのです」

クロエの眼がユックリと開けられる。

「……へえ」

開かれた彼女の眼は普通ではなかった。

白目は白ではなく闇を孕んだ漆黒、金色の瞳。それが普通の人間の眼でないことはゼロの眼から見ても明らかにわかることであつた。

「……試験管ベイビー、か?」

試験管ベイビー、ゼロの同僚であるアドルフもそれになる。

人間によつて人工的に作り上げられた人間。

「なぜわかつたのですか?」

「何となくだ。ただお前から感じられるモノの中にあいつと似たようなのがあるから

な」

「そうですか……」

そう言うのと彼女はまた瞳を閉じた。あまり眼を見せるのが好きではないのかもしれない。かもしれない。

「母胎の暖かみを感じる事もなくこの世に生まれ、愛も欲望もなく生まれた。生命を自覚した頃から常に実験が私につきまとっていた。この体に埋め込まれたI S コアもそうだ……ねえ、私は何の為に生きている」

瞼の奥にある瞳がゼロを捉える。

「憧れるんです、普通に生きる女の子に。普通に、普通に生きてみたかった。けれど、それは叶いません」

「……お前は、何がしたい？」

「私は、自分が生まれた意味を知りたいのです」

「……そうか」

何とも言えない気分である。

「それでは、私は失礼します」

「おう」

振り向いて、歩き出すクロエ。ゼロは歩く彼女の背中を見ながら、軽く声をかけた。

「あ、そうだ」

ゼロの言葉に反応して、クロエの足が止まった。ゼロは殺気を放ちながら声をかけたわけではない。それなのにクロエは背後から感じる重圧のせいで体が僅かに震えていた。

「……何でしょうか」

振り向く事ができない。

「お前のＩＳに伝えておいてくれ。イタズラは止めなつてな」

「気づいていたのですか？」

「当たり前だろう、甘くみるなよ。今回は許すが、次は許さないかもな。夢は寝てみたいんだ、起きたまま見るのは現実逃避だからな……良いぞ、帰つて」

その言葉の直後にクロエは消えるように飛び去った。

「……さて、仕事に戻るか」



「で、何でてめえがいるんでしょうか？ ああん!？」

「定例報告にきたんだろうが。ああ!？」

夜、晩御飯を食べる前にゼロは用務員室でとある人物にあっていた。

「てめえに会うのは正直だるいんだぜ、レイン。お前面倒なんだよ。名前とかさ」

レイン・ミューゼル、この学園での名前はダリル・ケイシーと名乗っている。

この二人の関係は良くもないが、それと同時に悪くもない。

ゼロとイーリスの関係は、アリサやティファ、オータム達などとの関係とは異なる。

二人ともあつたら基本的に互いに罵り合う。

何でそうなったのかと言われたら、それはダリルがゼロに対して嫉妬したからだ。

ダリルはスコールに憧れていたが、ゼロがモノクローム・アバターに入隊してからは

スコールはダリルと話す機会が減っていった。

無論、ダリルもモノクローム・アバターに入隊しようとしたのだが、様々な問題が重

なり入隊できなかつた。

それからダリルはゼロに対する嫉妬でよく喧嘩を売るようになり、ゼロもゼロで珍しくムキになって喧嘩を毎回買っていた。

亡国機業の本部ではその光景がある種の名物のようなモノになっている時期もあった。ダリルが本部に帰って最初にする事は上官への挨拶、次にスコールへの挨拶、そしてゼロに喧嘩を売る事なのだ。

もはや仲が悪いのか良いのか本人達ですらわからなくなっている。挨拶が罵倒、それをしていないと違和感すら感じてしまう。

二人をよく知るスコールは「間違えても、その勢いのままに過ちは起こさないでね」と言ったが、その言葉を聞いた二人はもつと早く言えと涙目になり、頭を抱えながら返した。

「喧嘩売るのは良いがためえは俺に何連敗してるのかわかっているのかなあ？」

「それはためえが黒零使ってるからだろうが、アレがなければアタシが連勝してる」

「黒零に乗る前からためえは俺に連敗、惨敗、大敗、完敗してるだろうが！」

「ああん!？」

「ああつ!？」

顔をよせてメンチを切る二人、だがソレに疲れたのか息を吐いてから背もたれに体を預けた。

「それで、何か変わった事はあるか？今は修学旅行中だから教員の数が減っている。問題が起きる前にこつちでなんとかする必要があるからな」

「そうだな、変わった事は特にこれと言ってないな」

「ならば良い」

報告を完結に済ませると二人は黙った。室内にはテレビのバラエティ番組の音が静かに聞こえる。

「……そういや、テメエは総帥にあつた事あるか？」

「…………ねえよ……何だその眼は」

「イヤア、見た事ないんだと思つてな。俺はあつた事あるぜ、なにせ総帥直属になりましたからねえ」

勝ち誇つた、珍しく、ムキになって、宣言した。

「…………給料どれだけ変わった？」

ちよつと入つたゲスな話。

「文字通り桁が違った」

「どれくらいだ」

「――」

「…………マジ？アタシの倍以上あるぞ。嘘じゃねえよな？嘘だと言つてくれよ」

出された数字にダリルは引いてしまった。それほどゼロの給料はスゴかった。

ダリルは聞かなければ良かったと思い、落ち込んだ。

「つたく、落ち込むなよ……あ？」

ズボンの中に入れてある携帯電話が震える。誰かからの通信だと思い、ゼロはポケットから取り出して耳に当てる。

『任務です』

声の主は先ほど話題になっていた総帥——轡木十蔵だ。ゼロは彼の声がいつもよりも重い事に気づいて、体に緊張が走る。

『直ぐにフランスに向かいなさい。学園にいるレイン君は待機させていなさい。万が一の事もあります』

「フランス……フランス？」

轡木から出た目的地にゼロは戸惑った。

何故フランスにいかなくてはならないのか、そして何故こんなにも重いのか、よくわからぬ。

「……おい、ゼロ。テレビ」

「少し黙ってろ」

「いいからテレビ!!」

ダリルの声に従って仕方なくテレビを見ると、彼は言葉を失ってしまった。

テレビの画面は先ほどまでのバラエティ番組ではなく、狂騒に塗れる一つの都市の映像が写っていた。

緊急ニュースなのだろうか、レポーターが必死の形相でカメラに向けて話している。

フランスで大規模テロが発生。

ニュースの内容を纏めるとそのようになる。

『ネオが動き出しました。まさか表舞台でここまで大胆に行動するとは、我々も予想外でしたよ』

そんなことを言っているが、十歳の声は非常に落ち着いていた。

「原因は？」

『ネオとデュノアが裏で繋がっているとは聞いていましたが、新たにデュノア社が発表した第三世代機が原因でしょうね。恐らくソレを作るのにネオからの情報提供があった』

「成る程……他には誰が行けますか？」

『既に現地でモノクローム・アバターのテイファニア君が戦っています。急いで向かっ

てください」

「わかりました」

『それでは、健闘を』

通信が切られ、それと同時にゼロはソファから立ち上がった。既に心は用務員から戦闘員に切り替わっている。今からでも何の問題もなく戦うことができる。

「任務だ。レイン、お前はここで待機している。総帥からの命令だ」

その一言でゼロについて行こうとしていたダリルの動きが止まった。まさか、自分が総帥から命令されるとは思ってもいかなかったから。

「だがゼロ、ここからフランスまで何時間かかると思っている。アンタの黒零でも一時間はかかるだろ。その頃には状況はもつとヤバくなっている。それに長距離移動したらシールドエネルギーもなくなるだろ」

「大丈夫、アテはある。時間がないからもう出る。後は任せた」

用意を終わらせて、ゼロは部屋を飛び出した。

時間を無駄にすることはできない。

「待って！」

部屋を出てすぐ声をかけられる。声の主は更識楯無、ニユースを見て直ぐこの場所に来たのだろうか、息が少し上がっている。

「言いたいことはわかる、時間が無い。来い」

右手人差し指でジェスチャーを行い、楯無は無言で頷いた。

走り出すゼロ、そしてそれについて行く楯無。二人ともISを展開して夜空に向けて飛び立つ。

「更識、修学旅行に行ってる奴らの現在の状況はわかるか？」

「今はフランスのIS部隊と協力して専用機持ち達はテロリストと戦ってるみたい。それ以外の生徒は避難してるわ……………それよりもこのまま行くつもり？ ついた頃にはエネルギーなくなってるわよ」

ダリルと同じことを心配する楯無。既に飛行している場所は海上、この周辺にはエネルギーを補給できる場所はない。

「心配ない、問題ない。ちゃんと手段はある……………来い！黒鷹！」

ゼロが海面に向けて叫ぶ。

漆黒の海面を内側から何か巨大なモノが突き破った。

それは巨大な鳥、機械で作り上げられた漆黒の鷹。大翼が空を切り裂き、勇ましく空を舞う。

それを見た楯無は言葉を失ってしまった。巨大、あまりにも巨大、ISの追加パーツにしてはあまりにも規格外な大きさ、全長およそ三十メートル以上。

「……アレは？」

「黒鷹、篠ノ之東博士が開発した超長距離移動用超高速移動装甲。アレを使えば三十分でフランスに到着する。本当なら使いたくないんだが……まあ緊急事態だし仕方が無い」

黒零の直ぐ隣を黒鷹が飛行する。黒鷹は自動で動くことができるが、今はNo.000が操縦を行っている。

「合体する。頼んだぜ、ゼロ」

その言葉に答えるかのように黒鷹の機首に存在する赤い瞳が強く輝いた。

鷹の足と翼が折りたたまれて無駄な空気抵抗をなくす。

鷹の頭を模した機首が胴体から離れ、その間に黒零が入り込む。そして黒零の背中与黒鷹がドッキングされる。機首は黒零を挟みながら再び胴体と合体。

重たい衝撃がゼロの体に走る。

コックピットが完成、黒零の周囲360度全体にモニターが広がる。

密閉され、コックピットの中に液体が流れ始める。これは別に問題ではない。寧ろこれをしないと命の危機に関わる。

足を所定の場所に置き、両方のマニピレーターでレバーを掴む。本当はこんなモノ掴まなくても黒零から直接操縦すれば良い。



そもそもこの機体はこんなに巨大になる予定はなかった。

ある時何気なくゼロが言った長距離移動できるパーツが欲しいという一言、この言葉に反応した束がノリと勢いで設計図を完成させて、今では良い研究者仲間であるリリスに渡される。

そしてリリスも悪ノリをしてしまい予算度外視でこれを作ってしまった。

本来ならばもう少し小型になる予定だったのだが、本来のモノは現在開発中である。

それにこの機体は操縦があまりにも難しすぎる。少なくとも束の作った正規のＩＳコアと国家代表級の技量がなければマトモに扱うことができずに、機体に振り回されてしまう。

だから今はゼロに渡されてある。渡された本人は乗り気ではないのだが。

「更識、下につけ。格納庫を開く」

「わかったわ」

楯無はゼロの言葉に従って黒鷹の真下に移動する。黒鷹の胴体が開かれて中に入るようになる。楯無は速度を合わせながら中に入ると格納庫の扉が閉じられた。

楯無はそのまま背中を格納庫の天井につけると、天井から生えている固定具に機体を拘束させる。

「固定させたか？」

「ええ、大丈夫よ」

「本当なら運搬用のコンテナがあるんだが、急だからつけられてないんだよ。だからそこで我慢してくれ」

「わかったわ………一つ聞いて良い？」

「なんだ」

「さつきからこの狭い場所を満たそうとしている謎の液体は何？」

楯無の目の前には見たこともない液体がある。それらは狭い格納庫の中をあと数十秒で埋め尽くす勢いで流れ込んでいる。

「ああ、ただの緩衝材だ。安心しろ、その液体の中でも普通に呼吸する事はできる。俺の場所もそれで満たしている。心配せずに呼吸しろ。落ち着いて」

「そうは言われてゴボゴボゴボゴボ!？」

どうやら格納庫は緩衝材で満たされたようだ。安心安心。

「それじゃあ、行くぜ」

その言葉の直後、圧倒的な加速で空に向けて飛んでいく。目指すは空気の薄い遙か上空、そうする事で空気抵抗を抑え込む事ができる。

あつという間に成層圏を飛び越える。

インフュニット・ストラトス無限の成層圏が成層圏を超えた。

「今日日我らは進化を続ける。さあ、祝福と呪いを我らに」  
何者よりも早く鷹は飛んでいく。

戦場を目指して。

## 第99話

いつまで続く。

この地獄はいつまで続く。

何度得物を振れば良い。

どれだけ戦っても地獄は晴れない。

始まりは突然であった。

修学旅行でフランスのパリを観光していたIS学園の生徒達の近くで爆発が発生、それも一箇所ではなく複数同時。

突然の爆発に逃げ惑う人々、そして茫然とする生徒達。

「……何が」

戸惑いが解消されるよりも早く、次の動きがあった。

曇天を突き破って上空から数十機のI Sが降下して来た。さらにそれだけではなく、他にも数十機のI Sを通行人が纏う。

それだけでこれが入念に準備されて行われたモノなのだということがわかった。

暴れ始めるI S、どうにかしてなくてはと思い、専用機持ち達は自分たちの相棒を呼び出して戦い始める。

それがおよそ十分ほど前、敵を殺さぬように、一般人に被害が出ないように戦っているが両立させるのは非常に困難である。

「鈴！避難している人たちの護衛に回れるか!？」

「無理言わないでよ百春、こつちもこつちでテロリストの相手をするだけで手一杯なのよ。こいつら数が多いくせに一人一人妙に強いのだよ！」

互いに背中合わせになりながら、百春と鈴音は自分たちを取り囲むテロリスト達に睨みを聞かせる。

どちらかが避難しようとしている人たちの警護に当たれば本当は良いのだが、今そんなことをしてしまえば残された一人への負担が大幅に増してしまう。

「取り敢えず、アタシ達にできることは現状の維持よ。可能ならば良くしなくちゃなら

ないんだけど、逆に悪くしてしまったら最悪。増援がくるまで持ちこたえるのよ」

「そうだな……………鈴、アレなんだ？」

百春の目線の先には一機のISがあつた。そのISは二人を取り囲んでいるISと同じ機体だということはわかるが一つだけ大きな違いがあつた。両肩に巨大なバインダーがあるということだ。

その特別なISは今現在、地面に片膝をついて動かない。両肩のバインダーが変形を始める。内部からホイールが現れて接地、その状態で機体本体とバインダーは分離される。バインダーはさらに変形を行い、その姿はまるで一輪車に跨る子供のような姿になる。

だが子供と言うには余りにも悍ましい。バイザー状態の目、右腕はエネルギーブレード、左腕はエネルギーガン、そして背中にはもう一つホイールが備え付けられてある。

「アレは……………マズイ」

百春の頭が危険信号を放つ。あの一輪車をこのまま放つておくのはダメだと、今すぐ破壊しろと警告を行う。

「行け」

その言葉の直後に一輪車は動き出す。後ろに倒れこむように変形を行い背中ホイールが地面に接地、今度は一輪車から二輪車に姿を変える。

ウイリーを行い、その直後に一輪車は避難しようとする人々の中に突撃する。

突然の襲来に驚く人々、だが一輪車はそんな事お構いなしに再度人型に姿を変える。

バイザーが真っ赤に光る。その直後、無数の血飛沫が避難しようとしていた人々から上がり、悲鳴が飛び交い、絶望が広がる。

一輪車の名は『アント』、無慈悲に人間を殺す冷徹な自動操縦兵器。対ISではなく、対人間を想定して設計された兵器であるためISほどの起動能力の高さと破壊力は持たないが、それでも人間を殺すには十分すぎる。備え付けられた様々なセンサーを駆使する事によって、人間がどこにいるのかを直ぐに見つける事ができる。

「鈴！アレを止めろ、こいつらは僕が引き受ける！」

「わかった！」

鈴音は龍砲を一点に集中させて放ってアントまでの道を切り開くとその場に百春を残して突進した。

「さあ、こつちが相手だ！」

新たに生まれた自分だけの武器、無銘の刀を持ちながら百春は自分を取り囲むテロリストに宣言を行った。

「アリサちゃん、この数はちよつと面倒ね」

「そうね、できる限り早く片をつけて避難民の警護に当たりたいんだけど、この数が相手だと難しわね」

ゆつくりと二人で観光を楽しんでいたティファニアとアリサは突然のネオの襲来に戸惑いはしたが冷静に対処を始めた。

二人とも冷徹に敵を倒していく。

アリサは銃剣の二丁拳銃、ティファはエネルギーブレードの二刀流で戦っている。

殺しはせず、シールドエネルギーを空にして相手の動きを止める。

「本当はさ、ワタシの機体って圧倒的な火力で相手を潰すのが得意なんだけど、この街中じゃできないのよね……いやあ、こういう時に一夏がいてくれたら楽なんだけどね」

「そうは言っても一夏くんは今日日本にいるのよ、増援は望めないわね」

この場に長時間足止めされるのは二人にとっては民間人への被害が拡大してしまうために非常にマズイ状態である。

さらにそのマズイ状況をより加速させるかのように上空に一つの機影、それは天空に



張り付けにされた十字架。

「ああ、面倒くさい」

「ティファちゃん、なにあれ？」

「確かクルーシャとかいう奴だったと思う。遠距離からエネルギー砲を撃ってくるし、ビットを飛ばして嫌がらせしてくる。正直なことを言うと戦いたくないです」

「でもやるしかないのよね！」

二人に向けて弾丸が飛び、二人はそれを飛んで躲した。

クルーシャに向けて遠距離攻撃を行うが彼女は簡単に躲してしまふ。試しの攻撃とは言え、躲されたのは癪に触った。

『ティファ聞こえるか？』

ティファの耳に通信が入る。声の主は直ぐにわかった、同じモノクローム・アバターに入隊しているエム、織斑マドカの声だ。

「どうしたのエム？まさか増援？」

『ああ、そうだ。丁度任務帰りだったからな。他にも増援はいる……………それにゼロも向かっている』

「ハア!? どういうこと? ゼロは今日本でしょ?」

ティファにはゼロがどうやってこの場にくるのか方法が全くわからない。

『しかも三十分以内にだとき』

「……それもしかしてあの馬鹿でかいの使うの？」

『……だろうな。正直、今のアレをマトモに操れるのはゼロしかないからな』

「それじゃあ、こつちも頑張りますか」

通信を切つて目の前の敵に集中する。

「一夏、来るつて」

「……どうやつて？」

「大きな鳥を纏つて」

「……………意味がわからないけど、取り敢えず一夏くんは来るのね……………ならそ

れまでに場を整えて置きましょうか」

「そうね！」

得物を手に取り、二人は愛する者の来訪を待つ。

パリ市内の至る所にアントの群れが広がっている。あちこちで悲鳴が起こり、次々に命が天に登ってしまう。市内は既に業火に満ちており、平穏安全な場所はこの地の何処

にもない。

魑魅魍魎跋扈するこの地獄変相、救世の戦士はここにいない。

フランスのI S部隊も出撃してはいるがネオに阻まれてしまい救助に人を割くことができないでいる。

百春も鈴と戦いの最中に別れてしまい、今は一人で行動している。

動き動いて気づけばパリのメインストリート、シャンゼリゼ通りに到着している。できるならば平時に静かに観光として来たかったと百春は思ったが今そんなことを考えても仕方が無い。

360度どの方向からも戦闘音が聞こえる。どの方向の戦闘の手助けをすれば状況は改善されるのかと考えるが、一向に案は浮かんでこない。

戦闘経験の豊富で直感に優れているゼロならば直ぐに決めるのだろうが、百春はこういった状況になるのは初めてなので悩むのもしょうがない。

だが悩みすぎるのはダメだ。

それは状況を悪化させるだけだ。

「……………落ち着け、百春。何をすべきなのか決して間違えるな。落ち着いて状況を――」

その直後、けたたましい音と共にセンサーが敵の襲来を告げる。上空からの敵、百春

が得物を片手に敵を見上げその姿に驚愕した。

慌てて、後ろに下がって敵の落下予測地点から離れる。そうでもしなければ敵に押しつぶされてしまうから。

アスファルトの大地を踏み砕く轟音と共にソレは百春の前に姿を現した。

見上げてしまうほどの巨大、四足歩行の化け物。数十メートルはありそうなほどの巨体。

胴体はゴリラのように勇ましく、頭は龍の様、頭部からは二本の雄雄しき角が生えている。

「なんだ、アレ？なんなんだよ、アレ」

ソレがISだと気づくのに百春は数秒の時間がかかった。

あんな巨大なサイズのIS、聞いたことも見たこともない。

龍が大口を開ける。中から光があふれ、極太のエネルギー砲が放たれた。

とっさの判断だった。

瞬時加速を使って射線上から離れるが、エネルギーは背後にあつたシャンゼリゼ通りを破壊し尽くした。あちこちで爆発が起きて、人々が死んでいく。

——止めないと。

無銘の刀を握って百春は化け物の首を落としかかる。

「何だよ、何なんだよオオオオオオ!!!」

化け物の怒号が響き、巨大な腕を百春に向けて振るう。その速度は巨体からは想像もつかないほど速い。体の至る所につけたスラスターを利用して高速移動を行っている。

一撃目は躲した。しかし次に来た反対の腕からの払いをマトモに喰らい、吹き飛ばされる。

重い、質量に任せた一撃は百春の意識を刈り落とそうする。

近くの建物にめり込んだ肉体を動かしてその場から動こうとする。

「逃がすかアアアアアア!!!」

追撃のエネルギー砲、百春は落下する様にその一撃を躲す。そのまま建物に身を隠す。

「返せエー!アタシの肉体を!貴様が奪ったアタシの腕を!脚を!栄光も栄華も何もかもを返せエー!ゼロオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

雄々しき二本の間に一つの巨大なエネルギーの球体が生まれる。その球体を上空に向けて掲げる。

球体から極小のエネルギーの弾丸が撃ち出される。エネルギーの弾丸の豪雨が周囲一面に降り注ぐ。

「雪羅!」

百春は雪羅をシールドモードに変えて降り注ぐ雨を凌ぐ。

(分が悪い、ここは一旦下がってみんなと合流してからコイツを——止まるな、下がるな、引くな、退くな、臆するな)

一度状況を立て直すために引こうとした百春の肉体を、百春の中にある何かが止めた。

ここで引いてしまったら自分ではなくなると叫んでいる。

——何のために自分は戦っている。

——守るために戦うと決めたはずだ。

——ここで引いて何をなす。

——ただ被害が広がるだけだぞ。

——人が泣き、世が嘆くぞ。

——決意は決まってるはずだろ。

無銘の刀を握る百春の手がより一層強くなる。

一振り以降り注ぐ雨を打ち払う。

「勝てないかもしれないな……いや、勝てる。だから一緒に戦おう、シロノ」

百春は名前を優しく呼んだ。

「……………誰だ？」

百春は自分で呼んだ名前が誰のモノなのか全くわからない。なぜこの名前が出た来たのか、百春にはこの名前に思い当たる節がない。

「いつかわかる、そんな気がする！」

白式のウイングスラスターが大きく唸る。

次の瞬間には最高速度で動き回る白式、化け物の股下を通って背後に回り込む。

百春を化け物の体の至る所にある小型のエネルギー砲が視線を向け、一斉に砲撃を開始する。

「行くよ」

ウイングスラスターからエネルギーマントが出現して、百春を包み込んで害から守る。

弾丸の包囲網を抜けて化け物の頭部にまで辿り着く。化け物の眉間目掛けて無銘の刀を突き刺す。

「……………硬い、硬いな」

刀は眉間には突き刺さらなかった。

「いつまで乗ってんだよオオオオオオ!!」

化け物は頭を振り回して百春を自分の頭から振り落とした。

百春の目と化け物の龍の瞳が交錯する。

次の一手、互いに相手の出方を探る。

百春が地面に着地、刀を構える。

「次は……次こそは」

パリは燃えているさ



## 第100話

「この辺りの敵は、もう片付け終わったか」

エムはパリに着くなり、早速ネオのISを数機倒した。

ゼロが到着するまであと十数分、エムはできる限り場を整えることにした。

周囲を索敵、すると此方に向かって来る二機のISが確認できた。どちらも亡国機業のISではない。

エムのIS『サイレント・ゼファイルス』は本来ならば遠距離攻撃型のIS、最近東に改修してもらって近接兵装をつけてもらったのだが、近距離で戦うには不安がある。

エムはその場から離れようとするが、それよりも早く二機が襲来した。

轟音と砂煙と共に何かがエムの横を通過した。

エムがソレを見ると、一機のISが地面に転がっていた。エムはそのISに見覚えはなかったが、パイロットの顔には見覚えがあった。

「……シャルロット・デュノア」

フランスの代表候補生でIS学園の一年生、フランスのデュノア社の社長の隠し子、そんな彼女も今は無様に失神している。

乗っているISは既に半壊、動く気配はない。

「みーつけた」

エムはその声を聞いた途端、体全体に嫌な汗が流れ、命を取られたような感覚があった。

振り向きながらライフルで敵を狙い、頭部を狙って弾丸を放った。

「殺意の射線が正確ね、見切って欲しいの？」

だがもう一機のISはその一撃を簡単に躲けてみせた。

「ソレはネオの……ガーベラか」

エムは面倒な相手と出会ったと思った。ガーベラは近接格闘能力なら、ゼロに比肩してしまいかもしれないほどの強敵。今のエムが相手をするには厳しすぎる。

「王は、どい？」

「……王」

ガーベラが言っている言葉がエムにはわからない。王と言われても、ソレに当たる様な人物を彼女は知らないのだから。

「王よ、それともゼロか……もしかしたら蝶羽一夏と言えばわかるはずでしょ？」

「……!？」

ガーベラの口からなぜその名前が出たのか、エムにはわからない。

彼女の言う王という存在と自分の義兄であり上司でもある一夏がイコールでは結ばれなかった。

「どう言うことだ、何故ゼロが王なのだ」

「貴方には関係のないことよ。まあ、時間が彼を呼び寄せてくれるでしょ。だから、それまでは貴方で愉しませてよ……さつきから頭の中が知らない声で煩いのよ！」

ガーベラが一步前に出ると彼女が纏う白薔薇が不気味な鼓動をあげる。

ISが叫んでいる。早く解き放てと叫んでいる。

彼女から放たれる圧力にエムは無意識のうちに後退していた。

エムはこの圧力に覚えがあった。しかし、それが本当だとすればピンチは大ピンチに早変わりしてしまう。

(……コアの覚醒)

もしそれが本当なのだとしたらエムは一目散に逃げる必要がある。

覚醒したコアと戦えるのは単独ではゼロかティファニアの二人しかない。覚醒したコアとそうでないコアの間には明確な性能差があるからだ。

覚醒の予兆はある、だがガーベラのコアは未だ覚醒していない。覚醒する前ならば勝てる可能性は僅かながらある。

ならばエムが取るべき行動は一つだ。

(撤退しながら、時間を稼ぐ！)

ゼロがやって来るまでの時間稼ぎ、ガーベラに勝てないと判断したエムは逃げを優先した。

勝てないならばそれなりのやり方で戦うだけだ。

周囲にビットを展開しながらエムは後方に下がる。地面に倒れているデユノアの事など一切気にかけていない。そんなモノに気をかける余裕があるならばガーベラに向けた方が良い。

高度な技術である偏光射撃を交えながら射撃戦。背後、側面、正面、全ての方向からエムはガーベラを攻め立てる。

だがガーベラは容易くソレらを見切つて躲す。

「死線が見える。捉えられる。これが、極致!!」

エムの精密射撃をガーベラは簡単に躲して、距離を詰めた。

態とらしく、ガーベラはエムに顔を近づけた。

「どうした？近づいたよ？」

「ツなめるな！」

エムは新たに付けられた二本のランスをそれぞれ掴むと、近づいてきたガーベラにソレで応戦する。

接近戦ではエムが完全に押されている。ビットの射撃で背後から襲いかかってもガーベラには簡単に躲かれてしまう。

「ならばー！」

サイレント・ゼフィルスが出しているビットの配置を変える。

更にガーベラに向けてランスを投げつけて動きを止めて、後ろに瞬時加速を使って距離を取る。

スターブレイカーを構えて、エネルギーを最大限まで貯める。

「ハアッー！」

サイレント・ゼフィルスが行える最大化力の一点集中攻撃。ビットとライフルによる同時攻撃。

突撃してくるガーベラ、直撃コースだ。

「甘くて温いー！」

ドリル回転を行うがガーベラのレイピアが最大化力の一撃を打ち砕いた。

「嘘ッ!?!」

「真実ッ!!」

エムの顔を狙った鋭い突き、エムはこの一撃をかうじて躲すが自身の顔を隠していたヘルメットが破損してしまった。

使えなくなったヘルメットを投げ捨てるエム。

そして、追撃を仕掛けようとしたガーベラの動きが突如止まった。

「貴様は……織斑か？織斑だったのか？」

ガーベラはエムの顔を覗き込む様に近づいた。

「その名前は……捨ててる！」

エムは呼び出したナイフでガーベラの顔目掛けて突きを行う。

だがそれも簡単にガーベラに受け止められる。

「でも織斑だ。その顔がそれ以外に何を示している。織斑だろ!!」

ガーベラの蹴りがエムを吹き飛ばす。

「そうか、お前が織斑マドカだったのか……昔こつちが誘拐して奪われたと聞いていたが、まさか王と一緒にいたとはな。裏切り者の織斑が!!」

ガーベラがエムを投げ飛ばした。

更に追撃にもう一撃蹴りを放つが、エムは腕を十字に組んでこの攻撃を受け止めるが吹き飛ばされる。

「それとも貴様にはわからないのか？そうか若かったな、ならば知らぬが道理。だが殺す」

ガーベラが突撃する。容赦のない攻撃でエムを攻めたてるが、エムは展開している

ビットをガーベラにぶつけながら時間を稼ぐ。

ゼロが来るまであと何分。

「うおおおおお!!」

「はあっ!」

壮絶な音と共に凄絶な破壊音が周囲に響き渡る。

この場所では現在ラウラ・ボーデヴィツヒとネオのIS部隊の一人が戦っていた。

ネオのISはそこらにいる量産機と似ているが細部が少し豪華になっているため特別な機体……隊長か副隊長の機体なのだと言うことがわかる。

かれこれ数分、休みなく戦うラウラの肉体は多少の休みが欲しくなってきた。

呼吸する余裕すら残されていない戦い。

ラウラは敵の腹を蹴り飛ばして大きく距離をとった。

「……厄介だな。増援は見込めないし、何より相手が強い」

相手の実力は自分と同じかそれ以上と見ているラウラは増援を望む。敵に勝つには

自分が有利な位置になるのが手っ取り早い、奇策で勝つための手段を彼女は持ち合わせていない。

正面から打ち破るしかない。

再度攻撃を仕掛けようとした瞬間、横道から一台の近未来的なデザインのバイクが全速で飛び出してネオのISを撥ね飛ばした。

飛び出したバイクはウィリー走行を行いながら、ラウラの前に止まった。

バイクは人が乗るにしては大きすぎる。だが目の前にいる人間は完璧に操縦している。

イマイチ状況の飲み込めないラウラ。

「IS学園の人間か？」

男の声だった。

バイクに乗った男はヘルメットを被ったままラウラに話しかけた。

「そうだ……貴様は何者だ」

「あいつらの敵で、お前たちの仲間ではない。だから敵意を向けるな」

男はバイクから降りるとヘルメットを脱いだ。

銀色の髪が炎に照らされる。

「……アドルフか？」



ラウラはヘルメットを脱いだ男の顔を見て、自分と同じ試験官ベイビーである男の名前を呼んだ。

「何でお前が生きている?」

「お前が殺したからか?」

ラウラが無言で頷いた。

「お前はあの日、私を除いた遺伝子強化体を皆殺しにした日、私が胸を撃ち抜いて殺したはずだぞ」

ラウラの頭の中にその時の記憶が流れている。

遺伝子強化体、アドルフが砂漠で殺したゲイル・ボーデヴィツヒが主導で行っていた優秀な人間を作り上げるためのドイツの計画。

「たかが胸を撃たれたくらいで死んでたまるか、ナノマシンがあるのだぞ。あの程度の傷はすぐに回復する。死体を確認しなかったお前のミスだ」

遺伝子強化体計画はアドルフによって全てを破壊されてしまった。遺伝子強化体はアドルフによってラウラ以外殺されてしまい、責任者のゲイルも殺されてしまった。

「お前は何である日、皆を殺した。そして何故私だけ生かした。私は何年もそれが気になっっていた」

ラウラは遺伝子強化体の唯一の生き残りとしてドイツ軍から期待の目を向けられて

いた。そしてその期待に答えようと常に努力を行ってきた。

だからこそ、自分の瞳を異物と入れ替えもした。

「知りたいのか？」

「ああ」

「それは教えられないな。だからこそ、悩み続ける。生きてる意味を」

アドルフはニヒルに笑った。それはまるでラウラを試しているかのようなであった。

瓦礫をどかしながらアドルフに撥ねられたネオの兵士がようやく姿を現した。

「……さて、こちらでも仕事と行くか」

アドルフがライダースーツの袖をまくって、左腕につけてあるガントレットを露出さ

せる。

「それは……I S? 何故?」

ラウラにはそのガントレットがI Sの待機形態であることがすぐわかった。

何故男であるアドルフがつけているのかはラウラにはわからない。

アドルフが右手でガントレットに触れるとガントレットから起動音が発生した。そ

してソレを口元に近づける。

「……変身」

アドルフの肉体を光が包み込み、それが晴れるとアドルフはI Sのような何かを身に

纏っていた。

「それは？」

「IS擬きだ。進化するためのモノ、TFEと呼んでいる。篠ノ之博士のお陰で漸く実践段階まで進展したよ、まあ今は三機しかないがね」

IS擬き、TFEはISと同じようにISコアを使用している。そもそもコレは以前アドルフが砂漠の研究施設で使った無人ISを纏うという技術を束とリリースの二人によつて発展させて作り上げたモノだ。

アドルフは自分が乗っていたバイクに触れるとソレは分離変形してIS擬きの鎧になってアドルフの身を包んだ。速度に特化したようなシャープな見た目。

「おい、ラウラ」

「なんだ」

「俺たちがあのISの動きを止める。だからお前がトドメをさせ。こつちには決め手がない」

「止められるのか？」

「甘くみるなよ……行くぞ！」

『『応ッ！』』

物陰からさらに二機のTFEが飛び出した。こちらの二機はアドルフのモノとは

異なり、重厚な見た目。

突然現れたI Sコアの反応に戸惑うネオの兵士、何方のTFEに対応しようか一瞬迷い、その隙を突かれてアドルフが真正面から近づいた。

思わず構える兵士、しかしアドルフは何もすることなくスラスターを吹かせて後方に下がる。

兵士はソレを見て、アドルフに向けて突撃するが背後から二本のワイヤーブレードが兵士の両腕に絡みついた。

「よくやったグレイ、ジーク」

二機のTFEがワイヤーで兵士を拘束する。単純な機体のパワーでいえばTFEが上回っているようで、ピンと張ったワイヤーが動きを止めている。

「これで完全だ」

アドルフが両手をネオの兵士に向けて突き出した。両手からシャボン玉の表面の様な色をした膜が兵士を捉える。

「これは……A I Cか？」

A I CそれはラウラのI Sに搭載されている装備で、簡単にいえば物体の動きを止めるモノだ。

「この程度のモノ、我らの技術力を以てすれば簡単に再現できる……さあ、トドメをさ

せ」

「わかつている！」

ラウラがアドルフに促されて敵目掛けてレールガンを放つ。

一発目、胸を抉る様な弾丸が直撃した。動けないために威力を全く殺すことができなかった。

クールタイムを挟んでの二発目、今度は頭を直撃。あまりの衝撃に敵は気を失いかける。

「トドメだ」

アドルフがA I Cを解除する。グレイとジークの二人がワイヤーを利用して敵を上空に投げ飛ばし、ワイヤーを回収する。

ジークとグレイの二人が敵目掛けて跳躍を行い、空中でそれぞれ首四の字と足四の字固めを行う。

「行くぞ」

アドルフの纏うTFEの両肩からツノの様なパーツが出現する。

瞬時加速を行い一瞬で最高速度に到達する。上空にいる二人に向かって突撃、超高速の両肩によるシオルダータックルが敵の背中に直撃する。

三点同時攻撃による破壊の衝撃、背骨、首骨、股関節の全てが碎け散る。

「TFEデコレーションツリー」

三位一体の必殺技、高火力の武装を積んでいないので、代わりに彼らはこの様にして格闘術で相手の息の根を止める様になっている。

これもゼロから習ったもので、相手への詰め寄り方、どの技が使用するのに適しているのかを教わった。

男によるISの操縦に関するデータが大量にあつたから、武器を使わないISによる格闘術に関するデータがあつたからこのTFEは作ることができた。

敵の鼓動が止まる。その段階からもう一段階強く強く締め上げて完全に息の根を止める。

三人同時にしかけていた技を解除して敵を投げ飛ばす。

地面に着地。

「他の場所に行くか？」

グレイがアドルフに問いかける。

「ああ、だが今度は救助活動が優先だ。戦うのは……………来たようだな」

何かを感じ取ったのか、アドルフは曇天の空を見上げた。

曇天の空を突き破って巨大な漆黒の怪鳥がパリの街を舞う。

怪鳥から何か飛び出してパリの街に落ちるように飛んで行った。

「何だあれ？ 兄さんか？……兄さんだ」

シャンゼリゼ通りでゴリラドラゴン（仮称）と相手をしていた百春は怪鳥に兄であるゼロが乗っていると確信した。

どうしてこんな短時間で兄が来れたのかわからないが、増援は非常に喜ばしいことであつた。

怪鳥が空中で幾度も羽ばたきながらその場に滞空してゴリラドラゴンを睨みつける。

ゴリラドラゴンも両手で大きくドラミングを行いながら怪鳥を威嚇する。

先に動いたのはゴリラドラゴン、威嚇射撃として口からエネルギー砲放つ。

怪鳥はこれを躲してゴリラドラゴンとの距離を一気に詰める。だがそんなことはゴリラドラゴンも予想済み、近づいて来たところを硬く握りしめた左拳で殴りにかかる。

その一撃を鳥は右足で受け止め、左足でゴリラドラゴンの顔面に蹴りを何度もいれる。

それはまるで怪獣大決戦、映画のような光景が百春の目の前で繰り広げられている。

怪鳥が翼を大きく羽ばたかせて距離を取り、口を広げる。

ゴリラドラゴンも同じように怪鳥目掛けて大口を広げる。

互いの口から放たれる極太のエネルギー砲、その直撃によつて発生した光と衝撃に百春は反射的に顔をそらしてしまった。

光と衝撃が収まると怪鳥は何時の間にもやら姿を消していた。そしてその代わりに何時の間にか百春の隣に I S が立っていた。

「兄さん、どうやってここにきたの？」

「見てわからなかったか？ 飛んできたんだよ、三十分でな」

黒零——ゼロは三十分で日本からフランスまで無事に到達した。

「テメエエエエエエ!! ゼロオオオオオオオ!!」

ゴリラドラゴンの操縦者が大声を上げる。

「あ? この声聞いたことがあるな。あれか? 四肢切断したスカーラとかいうのか。なんだよ、何時の間にか立派でゴツイ四肢持ってんじやねえか」

「テメエのせいで! テメエのセイデエエエエ!!」

ゴリラドラゴンの全力のパンチをゼロは容易く躲した。

「なんだあ? そんなに四肢切られたのが嬉しかったのか? だったら首も切つて見栄え良



くしてやろうか？ 死体で生け花してやるよ」

「死ねよやアアアアアアア!!」

追撃の一撃、ゼロはこれも簡単に躲して百春の隣に移動する。

「この場はお前に任せていいか？ 大丈夫だろ、アレ雑魚だし。俺が出張るのはアレじゃない」

ゼロは百春の方を見ながら、ゴリラドラゴンを指差した。

雑魚

ザコ

（ズン）

その言葉に激怒したのかスカーラはゼロ目掛けて極太のエネルギー砲を放った。

「だからね」

ゼロは得物である大剣『零』を呼び出して、天高くかかげる。

零落極夜

「それがだよ」

一振りですぐエネルギーの流れを両断してみせた。事も無げにパリの街を火の海に包んだ攻撃を防いでみせた。

「んじゃあ、この雑魚は任せた。俺はこのゲツソリする感覚の原因に突撃する……頼ん

だぞ」

百春の肩をポンと軽く叩いてから、ゼロは何処かに向かつて行った。  
残された百春は巨大な化け物に立ち向かう。

## 第101話

「どうしたの？もう終わり？」

「……………ツチ！」

エムはガーベラに追い詰められていた。

サイレント・ゼフィールスは既に大破、かろうじて残った装甲だけでガーベラの攻撃を防いでいた。

ガーベラは既に勝利を確信して、今はただエムを痛めつける事だけに精を出している。

「さあてそろそろ……………」

ガーベラは突然空を見上げた。

何かが来る。ガーベラは第六感でソレを知った。

その直後二人の間に割って入るように上空から降りてきた漆黒の戦士。

「無事か？エム」

「ゼロ」

漆黒のＩＳを身に纏ったゼロがエムの目の前には立っていた。

エムの方を見る事なく、ゼロはガーベラを睨みつける。

「なんとか大丈夫だが、ゼフィルスは動かなくなってる。下がれないな」

そんな事を言っているエム目掛けてゼロは何かを投げ渡し、彼女はソレを反射的に受け取った。

「代わりのＩＳだ。ソレを使ってアドルフたちと合流しろ。これは命令だ」

「……………わかった」

悔しかった。本当ならば兄と一緒に目の前の敵と戦いたかったが、今の自分では確実に足でまといになってしまうとエムはわかっている。

ここは大人しく下がるしかない。ここで下手に食い下がったら、確実にゼロの邪魔になってしまうと思ったから。

予備のＩＳを展開してこの場を離れていくエム、ゼロはガーベラが動かないように常に目で牽制を行う。

安全圏まで離脱したのを確認する。

「……………」

殺意が爆発する。

既に二人は戦闘準備を完了している。どちらかが動いたら今にも勝負が始まってし

まいそうである。

「今回は……何故このような事をした」

「何故……何故ねえ。考えてみて、ヒントはネオとデュノア社が裏で組んでいたつてことくらいかしら」

「……成る程な、大体わかった。大方、デュノア社が第三世代機を作り上げるためにネオの手を借りたのだろう。何らかの条件をつけられて、そしてその条件をデュノア社が破ってしまった為に今回の大規模なテロが行われた……そんなところだろう」

「正解、それに加えて今回は練習なの」

ガーベラが白い花卉のスカート状のアーマーを翻す。

「これから始まる巨大な戦禍の為の！」

パリの何処かで爆発が起きた。災禍は広がる。こうして睨み合っているだけでも状況は悪くなる。

「……………まあ、アタシがこの場所にいるのは他の理由なのよ」

「……………」

「王、貴方を迎えに来ました」

仮面の奥でガーベラは笑顔を浮かべているのだろう。声色から察することができる。

「俺の事はバレているようだな」

「ええ、何年も探していた人物がまさか敵側で闘っていたなんて思ってもませんでしたよ。まあ、亡国機業にいることはある程度予想できましたけど」

一歩、ガーベラが詰め寄る。

「さあ、王がお待ちです。我々と共に行きましょう」

手を差し伸べる。花のような甘い声で、禍々しい災禍の化身が誘惑を仕掛ける。

「黙れ、今の俺は亡国機業のゼロだ。貴様らの王に告げておけ、死姦が趣味か、とな」

「……………あは！」

我慢していたが思わず漏れてしまった、そんな声だった。

「ああ、やつぱり。だから、だから良いのよ。アタシは貴方を屈服させたい！そして貴方に屈服させられたい！」

狂気開花。

「最近じゃあ誰も相手にならないの、貴方くらいなの、互角に戦えるのは！」

ガーベラの纏う白薔薇が禍々しく光を放つ。

姿が変わる。

コアの覚醒。

銀の福音に次ぐ、新たなる覚醒したコアの誕生。

それに相応しい姿に己の力で強引に変えていく。

戦々恐々、世界が震え上がる。

花の都を魑魅魍魎跋扈する地獄に変える業火を背に、災禍の花は新たな花を咲かせる。

「……ホワイトローズ・カラムィティ白薔薇・災禍」

純白の美しい薔薇の花の鎧に、禍々しい色彩の模様が浮かび上がった。

元の白薔薇から姿は大きく変わっていない。それでもゼロは明確に彼女から出てくる威圧感の違いを感じ取った。

「唾々、凄い。コレが、コレが貴方の見ていた世界……刺激が強い、世界の果てまで見えてしまいそう」

右手を天に掲げながら、ガーベラは新たに手に入れた自分の力に陶醉する。

「さあ、戦いましょう。この姿なら、この力なら、貴方と互角に戦える！」

ガーベラが構えを取る。

ゼロもそれに合わせて、構えを取った。

喧騒に塗れるパリの中で、唯一この場所だけが静寂を保っていた。

亡国機業とネオ、それぞれの組織の最強のIS乗りがそれぞれの最高の機体に乗って戦う。

火蓋は静かに切って落とされた。

先に動いたのはガーベラ、十数メートルはあった距離を瞬きよりも早く詰めた。互いが互いの領域に入り込む。

殴り合い、それも超高速、人が見ればこれだけで二人の異常な実力を見極めることができる。

モンド・グロツソの決勝戦並み、もしくはそれ以上の凄絶で壮絶な戦い。

一撃一撃が並のISが相手であつたら必殺の威力。それが超高速で飛び交う。

二人とも躲しはするが必要以上に避けない。当たるか当たらないかのギリギリの位置を見極めて、相手の動きに合わせてカウンターを放ち続ける。

互いの拳が正面衝突、その直後に二人同時に距離を取った。

「アハッ！ 追いつく、早い速い疾い。これが覚醒したコア、素晴らしい。でも五月蠅い！」

白薔薇が両腕を振ると、袖口から花粉のような小さな小さな粒子が飛び出した。

これが何なのかゼロにはわからないが、経験から言うともズイモノなのは間違いないので右の指先からエネルギーの弾丸を何十発も放って迎撃する。

弾丸と花粉が触れ合うと、花粉は忽ち爆発した。

それはもう酷い爆発であった。近くにあった一軒家が容易く崩壊するほどの威力の爆発、真新しい家だったからローンはまだ残っていたのだろう。



被害はこの際一切考えない。そんな事を考えながら闘って勝てるほど、目の前の敵は甘くはない。

ゼロは近くにあつたバスを掴むと、槍投げのようにガーベラに向けて投げつけた。

豪速で迫る圧倒的な重量の弾丸、だがガーベラは一切躲そうとしない。ただ左手を前に突き出すだけだ。

「アハッ！」

弾丸は世界の中で不自然に止まった。

まるで見えない壁にぶつかったのよう。

ソレが何なのかゼロにはすぐにはわかつた。

「凄いわね、コレ。貴方が使つてるのを見て使いたかつたのよ……ねえ、この力の名前は何か？」

「……チャクラ」

厄介な力を手に入れてくれたとゼロは心の中で舌打ちをした。

チャクラ、黒零の左腕から発生させることのできる人間の精神が持つ力を具現化させたモノ。

「そう、チャクラ……ねえ。楽しいわね！」

バスに花粉が付着して、その直後に大爆発が発生する。

爆炎の奥からガーベラがレイピア片手に突撃してくる。

「さあ、さあ！もつと楽しみましょう！」

(もつと速く、もつと鋭く、もつと強く！)

場所は変わってシャンゼリゼ通り、百春とスカーラの戦いは進展もなく平行線を辿っていた。

百春は無銘の刀で降り注ぐエネルギーの雨を打ち払い、敵に向けて刃を向け続ける。だが悲しいことに、今の百春にはアレを倒せるだけの決定打になる一撃を持っていない。

零落白夜はゼロと戦ったあの日から使えない。雪片もあの戦いで折れてから修復できない状態になってしまった。

今の百春が使える武装は左手の雪羅と無銘の刀のみ。

不利なのは本人が一番わかっている。

誰かが来るまで逃げ続けければ良いのかもしれない。

だがそんな事をしない。

任せたと言われた。百春は兄である一夏から初めて期待され、信頼され、この場所を任された。

だからせめてその期待に応えられるように全身全霊、己の全てをかけて目の前の敵を倒す。

それにここで引いてしまったら今以上に被害が広がってしまう。

護る為に戦うと決めたから、ここで引いてしまったら己の決意を自分で踏み躪ってしまう。

そんな事を百春は許さない。

曖昧な願いでも、突き通してみせる。

その果てにある真意を求めて。

「さあ……さあ！」

猛スピードで白式が空を舞う。無数のエネルギーの弾丸を躲しながら、常に次の一手を探し続ける。

(どうすればいい、どうすればこの弾丸をつきぬけられる！)

探しても探しても、敵に近づくと算段が思い浮かばない。何処かにスキがあるはずだ。それを突くしか勝ち目はない。

兄なら簡単に見切っているのだろう、百春は心の中で思った。

「教えろ」

問いかける。

「教えてくれ」

誰に。

「シロノ!!」

顔も知らない、けれどよく知っている誰かの名前を百春は叫んだ。

『あっちですよ』

百春は幻覚を見た。

自分の背中には誰もいないはずなのに、誰かが背中に寄りかかりながら、後ろから指さしている。

「あ、ああ!」

思わず声を上げる百春。

道が見えた。希望が生まれた。勝利が近づいた。

右の大翼が叫ぶ。その直後、先ほどよりも速く白式は動く。示された道を寸分違わず突き進む。

エネルギーの弾幕を突き抜け、ゴリラドラゴンの頭に乗った。先ほどはここで失敗してしまった。

だから今度は容赦しない。

百春は雪羅の形態を変えてクローモードにすると、その爪でゴリラドラゴンの眼球を抉り取った。

「ナメルナアアア!!」

ゴリラドラゴンが百春を振り落とす。大口を開けて百春を狙う。

雪羅を素早くシールドモードに変形、ゴリラドラゴンの口から放たれたエネルギーを受け止め……きれない。

数秒受け止めるだけで雪羅は壊れてしまった。だが百春は破壊されるよりも早くエネルギーの砲撃から脱出していった。

続け様にエネルギーの雨が降り注ぐ。

(数がさつきよりも多い、防ぎきれない)

降り注ぐ雨を見上げながら、百春は自分の身を護る為の無銘の刀を無意識のうちに収

縮していた。

今の彼は無防備。

大翼からマントを出して自分の身を護ろうとはしない。

(マントで護り続けても意味はねえだろ。もっと、手数だ。手数が必要だ)

百春の両手から紫電が迸る。

「来い、『月』!!」

紫電は光に変わり、光の中から二振りの剣が生まれた。

二刀流、圧倒的な速度と手数で自分に害をなす雨を全て切り落としてみせた。

純白の姿の中にある黄金の刃がその美しさを際立たせてくれる。

百春は月を収縮する。

「その名を呼ぼう、僕らの左腕」

今度は左腕につけられてある雪羅の残骸が紫電を放ち、光を放つ。

「『雪』」

呼び声に応えるように、光を突き破って新たな左腕が顕現する。

前腕部にはシールドのような装置、そして左手はゼロが乗る黒零のようになってい  
る。

多機能式攻撃腕、名前は雪。

黒零を参考にして生み出されたこの武器は、百春に新たな戦略を数多生み出してくれる。

雪羅に倣って、これもまた展開装甲である。

五本の指先を一点に向けて集中させる。

絶大な威力の砲撃、肩に直撃をくらったゴリラドラゴンは後ろに怯んでしまった。

そしてそれを見た百春は上空に舞い上がる。

「来いっ！」

百春の右手に無銘の刀が収まった。

今ならば、今ならばこの刀の名前がわかる。

叫べ。

呼べ。

応えてくれる。

『花』

蕾から花が咲くように、純白の刃に黄金の色が添えられる。

(今なら、できる)

零落白夜

単一能力が発動、三重瞬時加速で敵に詰め寄り、頭にそびえる二本の巨大な角を容易く切り落とした。

(戦える。希望は確かにある)

百春が呼び出した三つの武器が声を上げる。我らを使えと大声で叫んでいる。

「雪」

雪が姿を変える。シールドが前に突き出て内側からグリップが出現する。そしてそれを掴む。

シールドの前部から砲門が出現する。

「月」

双剣が互いの柄と柄を合わせて一つになる。

更にソレが雪と合体して、巨大な弓を作り出す。

「花」

最後に刀。

弓を鞘の代わりにするように、刀身を収めた。

完成した。

その名前は



「雪月花」

巨大な弓、百春は雪につけられてあるトリガーに指をかけ、矢を引き絞るようにする。弓がしなり、月の黄金の刃が更に煌めきを放つ。

地面に着地、構えを取る。

加えて零落白夜を発動。

二発目はない。この一撃で全てを終わらせる必要がある。

百春の目の前にターゲットスコープが現れて、矢の行き先を示してくれる。

ゴリラドラゴンも最後の一発と

言わんばかりに先ほどよりもエネルギーの高い一撃を口から放とうとしている。

「何処だ。敵の弱点は何処だ！」

狙いが定まらない。何処を射抜けば敵が止まるのか、百春にはまだわからない。だから。

『あの場所です』

シロノが優しく指差してくれる。敵の弱点を教えてくれる。

「あの場所だな、あの場所なんだな！」

百春にも見える。命の在りかが見えてしまう。

指を離せば、確実に相手を破壊できる。

だがそれは同時に相手を殺すことになってしまう。

憎しみのままに誰かを殺すな。

自分ではなくなるぞ。

ゼロの言葉が百春の頭を駆け巡る。

だがもう百春の指は止まらない。既に覚悟を決めたのだから、甘えはもうない。殺したくないと嘆きはしない。

「僕が護る番だ。自分で翼を広げ、大空に飛び立ったことを証明する為に、今ここで、撃つ！」

白式がいつも零落白夜を放つ時以上に輝きを放つ。

百春はトリガーを放した。

それと同時にゴリラドラゴンも必殺の一撃を繰り出した。

だが。

ゴリラドラゴンの一撃は容易く雪月花の一撃に飲み込まれてしまった。

圧倒的な威力、先ほどまでのゴリラドラゴンの攻撃なんてこの一撃と比べれば可愛いものであった。

「ヤバイ！」

スカーラが声を上げた。しかし時既に遅し、絶対の矢が巨体を飲み込み消滅させる。目の前からは何もかもが消えていた。

「ははっ、はは」

百春から乾いた笑が漏れた。そして全身の力が抜けて尻餅をついてしまった。

大見得を切ったのは良かったが、百春の心の奥底では一人の命を奪う事に抵抗を感じていたのかもしれない。

「決意はあった……それなのになんで震えている………兄さんが見たら、甘いといえるのかな。それとも……」

機体反応、それもゴリラドラゴンのモノだ。

そんなはずはない。目の前からは完全に消滅したはずだ。百春はそう思いながらセンサーの反応がある場所を見ると、そこには四肢がボロボロになっているISで上空に逃げ出しているスカーラがいた。

間一髪逃げ出していたようだ。

百春は追いかけようとしたが、既に体は動かない。何十秒かしたら動けると思うが、その時にはスカーラは逃げ出している。

ここで、逃がしたらまた誰かが泣いてしまうことになる。

必死に動こうとするのも虚しく、体は言うことを聞いてくれなかった。

「やっぱり、まだまだなのかな。千冬姉……兄さん」

天に右手を伸ばしながら、百春は呟いた。

## 第102話

「ハアアアア!!」

アリサの銃撃がクルーシャの乗る十字架型のISに被弾する。

「よっと」

続けざまにティファニアが背後から襲いかかり、二刀流で機体を痛めつける。

クルーシャが機体を振り回してティファニアを投げ飛ばすと、すかさずアリサが距離を詰めて十字架の中心を蹴り、飛ばす。

アリサとティファニアは二人がかりでたちの悪い戦い方をしていた。クルーシャの得意な遠距離からの攻撃をさせない為に、必ず何方かが近接攻撃をしかけ、もう一方が援護射撃を行う。

常にこの状態のまま二対一で戦い続ける。ただでさえ性能の高い覚醒コアのIS二機を同時に相手取れるほどの技量と機体の性能をクルーシャは持っていなかった。

「アリサちゃん、そのままにしていって」

ティファニアの乗るシエルのウイングスラスターが大きく広がる。背中にある二つ

のエネルギー砲が肩にかけられる。腰にあるエネルギー砲も同様の前に突き出る。

シエルは近距離や中距離の戦闘も可能なのだが、最も得意なのは圧倒的な火力による砲撃戦。相手よりも高い火力で押し切り、遠距離から超威力の砲撃で圧倒する。

「全力全開、最大開放、久しぶりの一撃！」

上空に向けて最大威力の一撃を放つ。決して地上に向けて撃つてはいけない。下手をすれば周辺一帯が更地になってしまうからだ。

合計四門の銃口から放たれるゴリラドラゴンの一撃並、もしくはそれ以上の威力のエネルギー砲。

クルーシヤを飲み込もうとする一撃、しかし彼女の前に数機のISが飛び出して盾になる。それらは先ほどティファニアとアリサが行動不能にした機体で、まさか動けるとは二人とも思っていなかった。

自ら進んで死に行くその光景にティファニアは戸惑ったが、もうこの際なんでも良い。更に火力をあげて盾になったISごと焼き払うことにした。

圧倒的破壊力、シエルの砲撃は一瞬で全てを飲み込んでしまった。

「……………逃した」

クルーシヤを殺し切った感覚はティファニアにはなかった。飲み込む直前に盾になったアイエスを見捨てて上空に逃がしてしまった。

「あと、ちよつと早く撃てば良かった」

シエルが元の形態に戻る。

「ティファちゃん、大丈夫？」

「大丈夫、だけど大丈夫じゃない。敵を逃がしてしまった」

アリスが飛んで来て隣に移動する。

「でも、撃退したなら今はいいじゃない。それよりも他の場所に行って、救助を手伝いましょう」

「そうだね……………気づいてる？一夏のこと」

「うん」

「さつきから尋常じゃない殺気出して戦ってるのよ……………こんなに殺気出してるのいつ以来かしら」

遠くを見つめる二人、その先では激闘があった。

その領域は誰の侵入も許される気配はない。

互いにそれぞれの組織で最強の名を持つことを許された人間たち。

必要最低限の動きで相手の攻撃を躲して、最高のタイミングでカウンターをいれる。

互いに周囲の被害なんて頭に入っていない。ゼロは理解しているのだ、ガーベラ相手に周囲に配慮しながら勝利するのは不可能だということに。

少し戦うだけで近くの建物が崩壊する。

エツフェル塔や凱旋門が未だ崩壊していないのは奇跡と言って良い。

「面倒だな」

実体剣、零雪を振るいながら、ゼロはガーベラの動きにイラついていた。

「アハッ！」

ガーベラはドリルレイピアにチャクラを纏わせて攻撃を行う。一振りが建物を破壊する。

マトモに当たるわけにはいかない。

「もつとー！」

白薔薇の両肩のエネルギー砲が光を放ち始める。

見るだけで危険なのだということがわかる。

「チッ！」

ゼロは自分の足元の道路を踏み砕いて、地下鉄の路線への通り道を作る。



穴に落ちると同時にエネルギーの閃光が今の今までいた場所を通り過ぎた。ガーベラも穴の中に入ってくる。

狭い地下鉄の路線上での戦いは容赦なく施設を破壊するものであった。

空洞を支えるための柱は盾にされ、壁は相手の装甲を削るために利用される。

戦いは移動し過ぎて駅の構内にたどり着く。

彼らが戦っていた路線は既に破壊されていて、修復されるまでにはかなりの月日が必要になりそうだ。

「ああー！」

「はああー！」

ゼロは右手にエネルギーのランスを、ガーベラは実体のランスを呼び出して突き刺し合う。

チャクラの盾で攻撃を防ぎながら、互いに一撃を入れようと必死に抗う。

両者マトモな一撃が入らぬまま戦いは続いていく。

「狭い通路、(ハハ)ならどう!?」

ガーベラが駅の構内に花粉を撒き散らす。狭い場所、マトモな爆発をすればこの場所は簡単に崩壊してしまう。

「ナメんなよー！」

ゼロは躊躇わずにエネルギーを放って花粉を爆発させる。

駅全体に爆発が広がる。二人はチャクラの盾を球体状に張り巡らせながら、爆発を防ぎ、駅からの脱出を目指す。

爆炎を背景に両者同時に街に飛び出す。

背中合わせ、両者同時に放った上段後ろ回し蹴り。それは破裂音とともにつば競り合う。

「やっぱ貴方は楽しい！デユノアの隠し子はずまらなかった。なんか二つコア混じってたけど、あの程度じゃ差は埋まらないの！」

「当たり前だろうが！一流のパイロットが一流の機体によって一流の力になる。二流三流が頑張っても二流三流だろ」

ゼロは右手でエネルギーの丸ノコを生み出す。全力投擲、投げられた丸ノコはガーベラに躲かれ、背後にあつた複数の建造物を両断した。

「それもそうかもね！」

互いに既に極限状態。

相手の僅かな動きで敵の次の動きを予測する。ISとの呼吸を合わせて敵を迎え撃つ。

ゼロは両手に遠距離武器『零砲』を呼び出す。普段は右手があるためにあまり使われ

ない武装ではあるが、ガーベラが相手となると出し惜しみはしない。

チヨロチヨロと蜻蛉のように動き回るガーベラに向けて銃を乱射する。

動き回るガーベラの動きを制限する弾丸、そして制限したところを正確に撃ち抜く弾丸の二種類で潰しにかかる。

弾丸に込められた僅かな殺意の差を見極めながらガーベラは躲していく。

「こりゃあ、面倒ね」

ガーベラは一度後ろに下がる。

ゼロも銃を撃ちながらガーベラを追跡する。

入り組んだ街並みを抜けて二人は広い広場に辿り着いた。

その場所は避難区域の一つに指定されており、今も沢山の避難民と彼らを守っているフランスのＩＳ操縦者とＩＳ学園の生徒がいる。

広場に突然困難が訪れる。あのＩＳが何なのか全員知らない。

二人に武器が向けられるが本人達は気にしていない様子だ。

撃つたら殺す。動いても殺す。気配だけで二人は告げる。

目線を少しでもそらせば、ヘルメット越しでも感じ取ることができる。

膠着状態が続く……………と思われたが。

「ちよつと……ここは何やってるのよー」

ISの群れの中から更識楯無が飛び出した。

彼女はゼロと一緒にこのパリに来て、彼がゴリラドラゴンと戦う直前に黒鷹から離脱させられた。

「……少し黙れ。それとそこにいる奴らを動かすな。動かしたら殺しかねない。手助けは不要だ」

殺しかねないという言葉は冗談ではないのだろう。溢れ出る殺気が物語っている。

その異様な雰囲気には楯無は思わず怯んでしまった。

「手助け不要って、そいつ強いんでしょ？ 一人で戦えるの？」

楯無の目から見てもガーベラは格上の相手だということがわかる。

「テムエらが幾らいても邪魔になる。一度も連携合わせることねえだろ……せめてアリサかティファの何方かがいれば良いんだけどよお。最悪百春だな」

ガーベラの方を向きながらゼロがつぶやく。

その直後、一機のISが群れの中を飛び出してゼロに襲いかかった。その機体は打鉄、つまりはIS学園の人間なのだ。

そしてゼロと楯無は思った。

(コツチかよ！)

せめて向こうを攻撃しろと二人は思った。

殺意の指針は決まった。ガーベラから目線を逸らさずに近づいて来た打鉄に対処する。

だがその瞬間にゼロの意識が僅かに打鉄に向けられてしまった。そしてそれにガーベラは気づいてしまった。

右手で振るわれた刃を受け止め、左手でチャクラの衝撃波で内蔵を貫く。

その隙にガーベラが近づいていた。

「ああ！ああ！」

イラつきと共にゼロは打鉄の右手首をとって肩を砕きながら強引に力任せの関節技をしかけた。背中に腕を回されて悲鳴をあげる。

「アハッ！」

ガーベラがドリルレイピアを持って突撃してくる。

「せめて盾！」

関節技を決めた状態で打鉄を盾の代わりにする。激しい音と共に絶対防御が削られていく。

蹴り飛ばし、後ろに下がる。

「邪魔！」

打鉄がゼロに向けて投げ飛ばされる。宙を舞う打鉄。

ゼロは前進に切り替えて空中にある打鉄の足を掴んだ。

手っ取り早い武器を手に入れた。

質量の大きい武器だ。

「ナアアアアアア!!」

全力で打鉄という名前のつけられてあるハンマーを振るう。中に乗っている人間の  
ことなんざどうでも良い。

目の前の人間を殺すことの方が価値がある。

「チッ!」

ガーベラは横にそれてそれを躲し、ハンマーはビタンという音と共に地面に叩きつけ  
られる。

「もういっちょオオオ!」

両足をつかんで今度はジャイアントスイング、投げ飛ばされて今度は砲弾代わり、だ  
がこれも躲される。

「ウオオオオオオオ!!!」

「ハアアアアアア!!!」

再び近接格闘に移行する。

それを見た他の人間達はその異常な戦いに目を奪われた。

「コイヤアアア!!」

ゼロの手には愛用している零を構えた。

「イイネエエエ!!」

ガーベラもドリルレイピアを回収して、今度は大斧を呼びだして両手でつかんだ。

技術、速度のぶつかり合いとはうってかわって力と力のぶつかり合いに早変わりした。

二人は戦いを繰り返しながらこの広場から移動していく。

武器を振るうだけで周囲の建物が破壊されていく。

移動していくうちに気づいた時にはシヨツピングモールの中にいた。

二人の頭の中に最初に戦った時の記憶が走った。

懐かしくなってしまう。

狭い通路の中で縦横無尽に刃を降り続ける両者、周囲は既にスタボロ。

ガーベラが一步後ろに飛んで吹き抜けを通って一階に移動する。

二階と一階、上にいるのはゼロ。

「どうせ両肩だろ?」

ガーベラの次の攻撃を予測した。

その予測通りに一階から二階に向けてエネルギー砲が放たれた。白薔薇の両肩にあ

るエネルギー砲からの一撃なのだろう。

ゼロは右手の指先からエネルギー泡を放って打ち消す。

「……そしてここでビットからの攻撃」

背後から頭をめがけて迫っていたビットからの砲撃を頭を動かすだけで躲す。

「あら、それも躲す?」

下の階からガーベラが声を出した。続けざまに剣山のように何十発もエネルギーの弾丸が撃ち込まれてきた。

ゼロは吹き抜けから天井をぶち破って屋上に飛び出る。

「ぶっ 飛べー!」

建物の内部に向けてエネルギーが流し込まれる。濁流のようなエネルギーが破壊を続ける。

「アハハハッ!!!」

狂った笑い声と共にチャクラの盾を纏ったガーベラが屋上に飛び出してきた。

傷のついている様子はない。

「やっぱ、やっぱ楽しい! だからもつと——」

その時ガーベラの動きが止まった。どうやら通信が着たらしく独り言を言っている。

数秒のうちに通信は切れて、ガーベラは目に見えてテンションを落としていた。



「どうした？」

その変化に疑問を持ったゼロが尋ねる。

「撤退命令。任務は完了したから戻れとき、アタシの方は完了してないのに」

「そうか、ならば撤退した方が良いな。テムエの任務は一生完了しないんだから」

「面白いこというのね……次こそは跪かせてあげる。そして王として迎えてあげる。だからそれまで楽しみにしてて」

ガーベラが飛び上がり、上空に飛んでいく。

ゼロはそれを黙って見上げた。ここで彼女を追いかけるよりか他の場所の手伝いに行った方が有益になると考えたからだ。

今ここで一つの戦いが終わった。

しかしこれは始まりの戦い。

これから広がって行く激動の始まり。

## 第103話

「東さん、ゼファイルスの修理はどうなってますか？」

フランス、パリでの戦闘から数日後の事、ゼロは久しぶりに亡国機業の本部にやってきていた。

IS学園は臨時の休校、あんな出来事があつてショックを受けた人間が多数いたからだ。

「うーん、そうだねえ。簡潔に言うると修理は不可能だね。機体が大破しているのもあるけど、コア自体が破損してるから、元に戻すのは無理。でもこの子はまだ死んでない」

亡国機業、開発部部長室の中でゼロと東はソファアに座つて対面しながら会話していた。

「……そうですか、となると新たにエムの専用機作る時ですかねえ。丁度エムの奴の戦闘データは大量にありますし。例のモノを使うには彼奴が一番良い」

「そうだな、私もソロソロ作りたくなってきた気分なんだ」

壁に備え付けられたモニターにリリースが現れた。

画面の中で『希望』と書かれたプラカードを掲げている。

「リリスさんはそれよりも亡国のIS部隊に配属させる新型量産機の開発を急いだ方が  
良いんじゃないんですか？ スコールさん言っちゃいましたよ」

「まあ、それは間に合わせるよ。そこにいる束も利用してね」

「リリスちゃん、それは酷いよ………それよりも、新型機を作るとなるとマドカちゃん  
は私が預かっていいの？」

コーラを飲んだあと、束が尋ねた。

「ええ、構いませんよ。今のエムは専用機がない状態、戦場に出れる状況じゃない。厄介  
な事を回されるのが多いモノクローム・アバターなら特に。だから今は束さんのところ  
で大人しくしておいた方が心配せずにすむ」

ゼロはコーヒーを口に含んだ。

「いっくん、心配してるの？」

「少なくとも、死なれるのは嫌だな」

「冷たいね。本心は別のくせに」

ケラケラと束は笑った。

「はあ、それでは御二方とも頼みましたよ」

その言葉を残してゼロは部屋から出て行った。

「ねえー、ゼロ。遊んでよお」

「あー、もう。掃除できないだろうが」

ゼロは自室に戻って、数日間掃除のしていなかった汚れた部屋を掃除しようとしたのだが、ティファニアに後ろから抱きつかれて……おんぶさせられて上手く掃除できないでいる。

IS学園に戻る前に自室を掃除しようと思っていたのだが、部屋にはいる直前にティファニアに見つかってしまった。

「ねえ、いいでしょう。ゼロ、最近はずっとアリサちゃんと一緒にいたんだからさ。たまには私に構ってよ」

「任務で行ってるんだから、しゃあねえだろ」

「いつもいつも任務任務って、私と仕事どっちが大事なの!?!」

「面倒こじらした奴かおい！どっちも大事だ。大事のベクトルが違えから優劣決められえけどよお！」

ティファアをおぶったまま、ゼロは嘆いた。もうなんかどうにでもなつてしまえというような気分だった。

掃除も一段落ついたところで、ゼロは漸くティファアニアをベッドの上におろした。

「疲れた」

「そんなに？」

「お前、人は重いのだよ」

ゼロは冷蔵庫から水を取り出した後、ソファアにどかりと座った。

「ねえゼロ、今年のクリスマス予定空いてる？」

ベッドに仰向けに寝転がりながらティファアニアが聞いてきた。

例年ならばクリスマスとイブの日は亡国機業総出でパーティーが行われる。

ソレは狂乱の宴、誕生祭ではない。特定の宗教や文化に囚われる事を嫌っている亡国機業では、普通のクリスマスでは行わないような事をするのが伝統になっている。

「あ？無理だな。今年はアリスと予定がある。丁度休みが取れたし」

「え!？」

ティファアニアはベッドの上で飛び起きた。

衝撃発言。

「え？」

「いや、買い物しに行くけど」

「それもうコースじゃん！カップルの定番お決まりコースじゃん！そのまま朝までやっちゃうコースじゃん！」

枕をブンブン振り回しながらティファが騒ぐ。そんな様子をゼロは面倒臭そうに見てる。

「かもなあ」

「ダメだよ、ゼロは案外流されやすい人間なんだから」

「流されやすいって……お前最初の時の事忘れたのか？俺流されなかったぞ、寧ろ俺は硬い意思を持っていたぞ」

モノクローム・アバターの副隊長に就任した日の夜の事を思い出しながらゼロはティファニアに喋った。

「違うよ、酔った勢いでレインとやっちゃった事だよ。あの日酔ったまま競い合ってたぶん、酔った勢いでやっちゃったじゃん！」

その言葉を聞いてゼロはソファから崩れ落ちた。思い出したくない事を掘り返されてしまったようだ。

「ティファテメエ、あんまり思い出したくねえ事思い出させるなよ。マジで後で覚悟しとけよ、絶対に虐めてやるからな」

「きやー、それは楽しみ」

この後、暫くの談笑の後に二人は解散した。

「……………ふう」

IS学園に戻る直前、ゼロは行きつけの喫茶店によってコーヒーとケーキを楽しんでいた。

IS学園でも自分でコーヒーを煎れてはいるが、この味には遠く及ばない。最近はずっとIS学園にいたため、今回の来訪を少し楽しみにしていた。

程よい音量で音楽が流れ、空間自体を楽しむ。

ゼロは基本的にこの場所には一人でくるため、今日もカウンターに座って店員の女の

子と軽く談笑したり、新聞を読んだりする。

「うん、良いね。また腕を上げたね」

ケーキを嗜みながら、ゼロはソレを作った目の前の少女を褒めた。

「本当ですか!?! 今回の自信があつたんですよ」

「このままいけば、十分に店を出せるようになると思うよ。ですよ、マスター」

コップを磨いているマスターに声をかけた。

「うーん、そうだねえ。確かにケーキや料理は上手になったけど、コーヒーを煎れるのは未だ未だ修行不足だねえ。今は君の方が上手いと思うよ」

「ゼロさんと比べたら、確かに私なんて未だ未だですよ。でもいつかはマスターに負けないくらい上手くなってみせますよ」

自信満々に胸を張りながら少女は答えた。

その様子が余りにも朗らかで、ゼロは無意識のうちに微笑んでしまった。

そして時間が経つてコーヒーとケーキを食べ終わると、ゼロは席を立てて会計を終えた。

「また来るね」

「はい、お待ちしております」



ニコリと少女が笑い、その笑顔を背に受けながらゼロは喫茶店から出て行った。

## 第104話

「ふんふんふんふん♪」

時は移って師走も終わりがけ、12月24日。つまりクリスマス・イブなのだ。

世間は恋人たちの甘い香りと恋人がいない人間の嫉妬の臭いで満たされている。

そんな中ゼロは何をしているのかと言うと、IS学園に行くためのモノレール駅前の広場で一人ベンチに座っていた。

服装はファッション雑誌で確認した最近の流行りの服装。自分なりに考えて黒を基調にした服装になっている。

今からはアリサとのデート。

IS学園内で待ち合わせしても良かったのだが、アリサの希望で待ち合わせする事になった。

鼻歌を歌いながら上機嫌にアリサを待つゼロ。

周囲を見ればチラホラとカッパルの姿が見える。

ソロソロ待ち合わせの時間。

「一夏くん」

アリサの声がした。

ゼロは直ぐに立ち上がると声のした方向を見た。

「ゴメン、お待たせ」

見惚れた。

目の前に立つアリサの私服姿にゼロは見惚れてしまった。

「どっつ？」

首をかしげながら聞いてくるアリサ。

「良いねえ、美しい。もう一度惚れたよ」

「ふふっ、ありがとう。それじゃあ、行きましようか」

二人は並んでユツクリと歩き出した。

目的地はここから少し離れた市街地。

フランスでの一件の後、世界は大きな変化がおきていた。

フランスという国はかろうじて存在出来るほどに弱っていた。立て直すには何年もかかりそうだ。

死者の数は四桁にもものぼり、国の重要なポストについていた権力者達はその殆どが殺された。

行方不明者も多数出ており、デユノア社の社長夫妻も含まれている。

戦争が近いのではないのかと世間は言っている。

だがそんな事は関係なしに人々はクリスマスで盛り上がり上がっていた。

「そう言えば、一夏くんの所属している組織のクリスマスって何をしてるの?」

人通りの多い市街地を歩きながら二人は亡国機業でのクリスマスの過ごし方について話していた。

「んん? そうだな、酒飲んだり、騒いだり、デスメタ歌ったり、飯食ったり、色々してるな。ミサしたりはしねえな。基本的に好き勝手してる。文化や宗教にとらわれるのをみんな嫌ってるからな」

去年までのクリスマスの過ごし方を思い出しながら、ゼロは楽しそうにクリスマスの思い出を話せる範囲で話した。

アリサもそれを楽しそうに聞いていた。

「それなら、今日は例年以上に楽しい日にしましょう」

アリサが笑った。

「応」

ゼロはこの日のために何度もシミュレーションを行って来た。

デートの場所である街の情報を頭に叩き込んだ。最近流行りの店から、隠れた名店、そして路地の一本一本まで。

アリサの希望には直様対応する事ができる。

ティファニアとの普段のデートと比べて今回のアリサとの初めてのデートは三倍以上気合が入っている。

この男、ドン引くぐらい気合が入ってしまっている。

もしこのデートの事を考えているゼロをティファニアがみたら大爆笑するだろう。

決めるのだ。今日は決めるのだ。

決意を胸にゼロは歩く。

「ゲコツ♪」

そいつは目の前に現れた。

冬だというのに緑色のカエルのレインコートを着た少女。

左手にバナナ、右手にチョコレートのソフトクリームを持って交互に食べている。

それに加えて両腕にはビニール袋に入っている大量のお菓子が見える。

ソフトクリームを食べ終えた少女は口元を手で拭った。

「夏くん、あれ、何？」

アリサは少女を見て何かに気づいた。

違和感、少女から感じられてしまう違和感。

「下がってる」

ゼロはアリサの一步前に出て少女から守る。

「上手いケロ、上手いケロ。もつともつと甘いお菓子を食べたいケロ。やっと食べられるんだからもつと食べたいケロ」

少女の食べる手が止まらない。持っていたお菓子を、食べカスを出しながら全て食べ終えるとゼロを見た。

「お前、ゼロだな。聞いてるケロ、聞いてるケロ」

ゼロは視線だけを逸らして周囲を見渡す

周囲の人々はこの存在に気づいている様子はない。

目の前のカエルレインコートを観察する。

目の前の少女の感覚は何かに似ている。答えを出すのに数秒かかった。

「生体同期型ISか……」

「ゲコツ!?何でわかったケロ!？」

確信はなかったが、相手が勝手にバラしてくれた。

「お前がバカで助かった……それで何の御用だ?俺は、今、機嫌が良いから許してやる」  
優しさの中に明確な殺意を込めながら、ゼロが尋ねた。

「ゲコ、お前にはわすらの計画の為に死んでもらうケロ」

カエルレインコートの肉体が光に包まれ、光が収まるとそこには緑色のISがいた。  
全身装甲、丸みを帯びたボディ、ラインに特徴的なカエルのような顔つきのヘルメツト。

それを見た一般人たちは一斉に逃げ出した。この前のフランスでの事件があったばかりなのだ、皆恐怖しているのだ。

「わすの名前はバーブル・ヘケロット、覚えておくケロ。お前を倒した者の名前だケロ!」

カエルレインコート改めバーブルが宙に上がった。

「一夏くん」

「周囲の警護は任せた、アリサ。さつきと終わらせる」

声をかけてかけてきたアリサを下がらせ、ゼロはバーブルに対峙する。

既に心は戦闘準備完了。デート気分は終わってしまった。

「黒零」

黒零を身に包み、ゼロが飛び上がった。

高速で迫って距離を詰める。

「いくぞケロ」

バーブルが右手の手首から先端無数の小さなクローのついたチューブをゼロに向けて投げつけた。

ゼロはそれを左腕で受け止めるが、巻きつき、クローが装甲に減り込んでしまった。

「ゲコゲコ、それはISのシールドエネルギーを吸収するチューブだケロ。貴様はこのままジワジワとエネルギーを吸い取られて追い詰められていくのだ。ケロケロケロケロケロケロ!!」

豪快に笑ってみせるバーブル。

だがゼロはそんなの気にしていない様子で、チューブを引っ張ったり、エネルギーの減り方を確認している。

「無駄だケロ、そのチューブはそんな簡単に引きちぎれないケロ！」

「

「そうか、なら助かるよ！」

ゼロは左手でチューブを掴み、力任せに引き寄せた。



黒零との力勝負に負けて強引に引き寄せられるバーブル。

「ケロ？」

「オラアッ！」

ゼロは渾身の右ストレートがバーブルの胴体に減り込んだ。

吹き飛ばされるバーブル、だが再び引き寄せられて今度は浴びせ蹴りを食らう。

再度吹き飛ばされ、今度はチューブを両手で掴みハンマー投げのように振り回す。

そもそもバーブルはチューブを巻きつけた事自体が間違いなのだ。

黒零の方が馬力が高いのに、チェーンデスマツチ紛いの事を行うなんて馬鹿なのだ。

硬い硬いアスファルトに受け身も取れずに高速でバーブルは叩きつけられる。

「ゲ……ゲコ」

「オラアッ！」

仰向けに倒れたバーブルの胃袋をゼロら高速で落下して両足で踏み潰した。

「立て」

ゼロが左手でバーブルの胸元を掴むと空いた右手で殴打を繰り返した。

容赦がないという話ではない。的確に殺す方法をとっている。

この男、只今絶賛激怒している。フランスの事件よりも怒っているのかもしれない。

理由は非常に簡単だ。

近くのビルの壁に叩きつける。

「お前は俺を怒らせた。それがなんだかわかるか？」

エネルギーが減り続けているのに、ゼロは気にしている様子はない。

「……か、関係ない人を巻き込んだからケロか？」

バールは罪のない、幸せなクリスマスMASを過ごそうとした人たちに恐怖を与えた。

「否」

壁面にめり込むほどの勢いで叩きつけられた。

「ゲ、ゲゴオオオオオ!!!」

苦悶の声を上げるバール、だが直様息を整えて両肩からオタマジクシ型のミサイルを発射した。

しかしソレはゼロが作り上げたチャクラの壁によって阻まれてしまった。

「いきなり暴れ出したからケロか？」

「否」

背負い投げのように、美しい半円を描きながら地面に叩きつけられる。

「こんなモノ」

ゼロはチューブに飽きたのか両手で掴むと、力任せに引きちぎった。

別に最初から引きちぎれなかったわけではない。少し楽しませてやっただけだ。  
「ほら、まだだろ。立てよ」

「……ゲコゲコ、そんな余裕いつまで続けていられるか楽しみだケロ」  
バーブルの体が膨れ上がった。

そして肉体を球状になるように折りたたみ始める。

「他者のエネルギーを吸って発動する我が奥義、食らうが良いケロ」

スラストを噴かせ、バーブルが超高速回転をしながら突撃して来た。  
地面を抉りながら突き進むバーブル。

「ああ?」

ゼロは迫り来る肉塊をチャクラの壁で受け止め威力を殺し、動きが止まりかけた所で側面を両手で鷲掴みにした。

「止まってしまえば、ただのバランスボールなんだよ!!」

力任せに何度も球体になったバーブルを力任せに何回も地面に叩きつける。  
アスファルトに罅が入っても知ったことではない。

「ゲ……ゲコ」

弱々しい声を漏らしながらバーブルの体が開き始める。

ゼロは最後に力強く叩きつけた後、バーブルを十字路に投げ捨てた。

## ——零落極夜

ゼロの右手が零落極夜を纏う。

悠然と一歩一歩、地面に仰向けに倒れているバーブルに向かっている。

足音はまるで死神の呼吸音、明確な死がバーブルに近づいている。

「嫌だケロ、死にたくないケロ。やっと自由になれたのに、まだいっぱい美味しいもの食べたいのに。なんでわすらばかりこんな目に合わなくちゃならないでケロか！」

バーブルの魂からの慟哭。

彼女はヘルメットの奥で泣いていた。

「知るか」

だがそんな事、冷徹無慈悲のキリングマシンにとっては関係ない。

バーブルの体を跨ぎら右手を硬く握り締める。

「そうだ、最後に理由を教えてやるよ」

「なんだ、ケロ？」

「俺とアリスのデートをぶち壊した事、それだけだ」

無慈悲な鉄槌が振り下ろされた。

圧倒的な破壊力、逃げられなかった衝撃が全てバーブルの肉体にも吸い込まれた。

アスファルトは砕け、崩落し、地下鉄までの通り穴ができてしまった。

「ゲ……ゲコ」

バーブルの活動が停止した。

ゼロはそれを確認するとゆっくり拳を抜いて地上に出た。穴から飛び出して I S を解除する。

「ふう……」

着崩れた服を直しながらアリサの

元に向かう。

「一夏くん、大丈夫だった？」

だがそれよりも早くアリサが駆け寄って来た。

「ああ、大丈夫だ。それよりも何だったんだ、アレ」

何故襲われたのか、ゼロにはわからない。そもそもアレは

何処の組織に所属している人間だったのかすらわからない。

「何なんだよ……」

思考の海に入り込もうとしたその時だ。

街にある巨大な街頭ビジョンの映像が、近日される映画の予告から変わった。

まだ予告が終わっていないのにいきなり変わった。

二人は無意識のうちにそのビジョンに目が移り、そして次に流された映像を見て言葉

を失った。

それは何処かの部屋だった。

薄暗い部屋の一箇所だけがスポットライトで照らされている。

玉座と呼べるような豪華なイスに誰かが座っている。

「一夏くん、アレ……」

信じられないものを見るような目をしながらアリサが隣にいるゼロに同意を求めた。

「ああ、間違いない」

玉座には人が座っていた。御伽噺に出てくる人間の服装をそのまま取り出したよう

な服を着ている。

だがその服には所々赤いシミが見える。

血だ。

着ている人間の血だ。

ゼロの目から見ても、その人間が死んでいるのは間違いがなかったが、そんな事は信じたくはなかった。

何故なら、モニターに映し出された人物をよく知っているからだ。

その人物は。

篠ノ之東。

## 第105話

その映像は世界中で流れていた。

世界中のあらゆる放送局や個人のパソコンなどをジャックして、世界中の人々に見せつけるように流れていた。

今の世界を作り上げた人間、ISを生み出した人間、世界中のありとあらゆる組織がその人間を探している。

篠ノ之束の無残な姿がそこには映し出されていた。

それはまるで一つの時代の終わりと、新たな時代の始まりを世界中に知らしめているように見えた。

『これは世界中の人間に送る、存在証明』

玉座の裏から一人の少女が姿を現した。

銀色の長い髪、常に閉じられた瞳。

「……クロエ・クロニクル」

姿を現したのは束と一緒に生活しているクロエ・クロニクルだった。



『今日、この日、たった今、ISの生みの親である篠ノ之束は我々が殺しました』  
 淡々と喋り始めるクロエ、そして彼女の後ろに六人の人間が並んだ。

全員がクロエと同じような漆黒の黒目、そして統一された漆黒の軍服を身に纏っている。

『我々の名前は進化体<sup>エヴオリユート</sup>、人の身にISを取り込んだ者たち。生体同期型ISを手に入れた人を超えた存在』

『進化体《エヴオリユード》……』

生体同期型IS、ゼロはソレについて束に聞かされていた。簡潔に言えば自分の肉体にISを取り込む事。

『今日この日より、我々は戦いを始める。これは我々の産まれた意味を知るための戦いである……そしてこれはそのための号砲である。鳴れ、<sup>ワールド・バース</sup>黒鍵！』

次の瞬間、世界が悲鳴をあげた。

世界から生命の意思が切り離されていく。

激音、爆音、騒音、静音、ありとあらゆる音が混じり合ったような音がスピーカーを通じて世界に響いた。

「あっ!?!ああああああああああ!!!?!??」

あまりにも理解不能なその音に、ゼロとアリサは思わず耳を塞いでしまったが、それでも脳内に直接響いているように止まらない。

(意識が、切り離される!?)

その音がなんなのかゼロはわかった。

「アリサ！ I S を展開しろ！」

「わかった！」

「音を塞げ、黒零」

「アイリス！」

二人は I S を展開、ゼロはその直後チャクラでドーム状の壁を作り上げて音を遮断する。

I S が音を自動調整する。

「一夏くん、今の音、何!？」

珍しくアリサが取り乱している。

「催眠音声だ。何か道具使って封じてなければ、今頃ぶっ倒れてる。多分世界中寝ちまってるよ。マズいな」

音の正体は催眠音声、黒鍵に元々あった能力を改良したものののだろうか。

今頃は世界中のあらゆるところで人々が意識と肉体を切り離されてしまっているの

だろう。

「アリサ、こうなつちまつたら仕方がない。デートは中止だ。I S学園に戻るぞ……あと、皇さん達の無事を確認してくれ」

「わかった」

二人は空に飛び上がり、I S学園に向かう。

長い長いクリスマス・イブが始まってしまう。

「一夏、誘宵、無事だったか」

二人がI S学園に戻ってくるなり、織斑千冬が出迎えた。

彼女も催眠音声から逃れる事に成功したのだろう。

「ああ、コッチは無事だ。変な奴には絡まれたけどな………ソッチは大丈夫だったのか？」

「私は咄嗟の判断で機械を破壊したから、音を聞かずにすんだ………だが学園の大半の人間はあの音とやらを聞いて眠ってしまったようだ。今は動ける人間で安全を確保している」

「ならすぐに、動ける専用機持ちの人間を集めた方が良い。いつでも動けるようにな。多分、国の機能は大半が麻痺しちまつてる。そつちはそつちで動け、俺は元の場所にくく」

「わかった。それと一夏、束のことなんだ——」

「わかつてる。だが今は時間が惜しい。さつさとこれを解決しないと、寒空に放られた人間が凍え死にまくるぞ」

世界中の人間が眠るといふ異常事態、早く解決しなければ以前のフランス以上の被害が世界に降り注いでしまう。

「アリサ、準備を済ませておいてくれ」

「一夏くんは？」

「一度部屋に戻る。直ぐに行くから、一人にしてくれ」

「……わかった」

急ぎ足で立ち去るゼロ、その背中を見て、首をかしげながらアリサは見送った。自室に向けてゼロは早足で進んで行く。

部屋に着いて扉を開けて中にはいるなり、上着を脱ぎ捨ててソファアに座った。

「ふうーっ」

息を大きく吐き出して、気持ちを整える。天井を見上げること数秒。

千冬にはあんな事を言つてはいたが、束の死をゼロも悲しんでいるのだろう。「で? どういう事ですか? 束さん」

ゼロは部屋に備え付けられたテレビに向けて、死んだはずの束の名前を呼んだ。いるはずがないのに、誰もいないのに、呼んだ。

『あら、ばれちゃった?』

モニターの中にデフォルメされた束が出現した。その姿はまるで亡国機業のリリスと同じような姿をしていた。

「貴方がタダで死ぬわけないじゃないですか。あんな簡単に死んでたら、今頃十回以上は死んでますよ」

『あははー、確かにそうだね。それにしても凄いと思わない? 束さんもリリスと同じようになれたんだよ、サイバーエルフ 電脳妖精にね』

電脳妖精、それはI S コアにそれぞれある人格の事である。

I S コアの強さは電脳妖精の強さと同義と言つても過言ではない。中でも特に私の強い覚醒したコアの強さはしてないコアとは比べ物にならない。

「凄いですね」

『あれ? 意外に反応が薄い? これでも束さん、リリスから話を聞いて頑張ったんだよ。今の束さんは殺される直前のデータが全て入った状態だよ』

画面の中でガンガンに動き回っている束、正直なところ目にうるさい。

「……そんな事より、あの音は何なんですか？ 黒鍵に催眠機能があるのは聞いていましたが、あそこまで酷いとは聞いてませんでしたよ」

ゼロの言葉を聞いて束の動きが止まった。

「束さん？」

その様を異様に思っ、ゼロは問いかけた。

『……黒鍵の力なら、あんな範囲の催眠はできない。でもーちゃんは別のISコアの力を借りて、あの規模の力を発動させてる』

「別のコア？」

『そう。私が作り上げたISコアの中で最悪のコア、ラストナンバー<sup>アナ</sup>NO. 1000<sup>ザー・ゼロ</sup>。

その力をくーちゃんは使ってる……まさか、使うなんてね』

NO. 1000、その名前を聞いた瞬間にゼロの背中に寒気が走った。

NO. 1000の恐ろしさはゼロもよくわかる。アレを感じた時の事をよく覚えてる。

自分の使っているNO. 000と同格のコア、手がかかると判断した。

「NO. 1000、アレも覚醒したコアでしたよね」

『そうだね……そう言えばいっくんにも誰にも言っ、元々NO. 0

00とN0. 10000は一つのコアだったんだよ」

「……………はっ」

東の口、そう言っているのかわからないが、から飛び出した発言に、ゼロは空いた口が塞がらなかった。

『元々あった始まりの一つのコアに二つの人格が産まれてね、それを私が分離させてN0. 0000を作り上げ、何年か後にいろんな感情を込めてN0. 10000を作り上げた。始まりにして終わりのコア』

「なんか、凄え事聞いたわ」

ゼロは東の話に驚かせれ、それ以上聞こうとしたが時間がなかったのでやめた。

「東さん、マドカの専用機は完成してますか？」

『殆ど完成してるよ、後はマドカちゃんのがのって細かい調整するくらいかな……………後は黒鷹も用意してるよ。いつでも出せる』

「わかりました、ありがとうございます……………それでは、行ってきます」

普段着から戦闘服に着替え終え、ゼロは部屋を立ち去ろうとする。

『いっくん、くーちゃんを頼んだよ。彼女はまだ何もわかってないから……………私もできる限り手伝うよ』

「……………わかってます」

部屋を出て、ゼロは長い日に向けて飛び出す。



## 第106話

IS学園の教室に黒鍵の催眠から逃れることのできた専用機持ち達が集められた。

その殆どが一年生であった。その中にはこの学園で楯無に次ぐ実力者であるダリルとフォルテの二人の姿も、アメリカから派遣されているナターシャとイーリスの姿もなかった。

ダリルとフォルテは現在旅行に出かけており、ナターシャとイーリスはアメリカに一時帰国している。

つまり戦力として期待できるのは一年生の専用機持ちと楯無、そしてゼロである。集められた人間と指揮をとる千冬含めて戦闘経験が一番豊富なのはゼロである。

楯無ゆらウラを除いた専用機持ちにあるのは限られた範囲とルールによつて決められた戦場での試合が殆ど。今回のような戦いは経験不足である。

それは指揮官である千冬を含めて。

だからこそ指揮官としての経験もあるゼロの助言が彼らには必要であった。期待の視線がゼロに向けられる。

「あ、俺はお前らと別で動くからな」

だがそんな期待の視線なんぞゼロにとっては知ったことではない。彼は自分の仕事をするだけなのだ。

「どういうことだ？」

千冬が質問した。

彼女も彼女でゼロの頭脳を期待していた人間の一人なのだ。もしここで彼が抜けてしまえば今回の作戦の成功率は間違いなく下がってしまう。

「簡単な話だ。俺の所属している組織でも今回の事件に対する任務を行うことになって  
いるんだよ。だから、俺としてはそっちの方に参加したいのだがな」

ゼロもこの部屋に来る前にスコールとの連絡をとっておいた。

誰が動いて誰が動けないのかの確認を行い、任務に迎える人間を既に此方に向けて派遣している最中なのである。

現在此方に向かっているのはティファニアとアドルフの二人。

エムとオータムも動くことは可能であったが、現在はゼロの指示でとある場所に向かっている。

スコールは本部で万が一に備えて待機している。

そもそも今回の催眠事件の被害を亡国機業の本部は被害をほとんど受けていなかった

た。

それはリリスのおかげであり、彼女がいなければ亡国機業の本部も世界中と同じように行動不能になっていただろう。

「……というのは冗談で、内の総帥からもコッチを支援するように言われてるんだよ。だから、今回だけはテメエらの味方だ」

その言葉にゼロとアリサを除いたこの部屋にいた人間が胸を撫で下ろした。

「さて、それでは作戦会議といきましようか」

進行役は千冬ではなく、このような事の専門家である楯無がとる事になった。千冬はこう言った事は専門外であると臨海学校の際に学んでいる。

黒板にもなる特殊なモニターに文字が映し出される。

「今回の任務の目標は主犯格であるクロエ・クロニクルのISの破壊……でもまだその居場所は突き止めていない」

楯無も自分の家の人間を使って情報を集めようとしたが、その人達も催眠に陥ってしまつた為不可能であつた。

「おっと、その事なら既に此方が情報を掴んでいるから大丈夫だ」

教室の一番後ろで座っていたゼロが立ち上がり、楯無のいる教壇に向かう。

「本当に？」

「ああ、本当だとも。我々の情報収集能力は君の家の何百倍もあるのだよ。規模が違うのだよ、規模が」

楯無は悔しいが何も言い返せなかった。

「それで、どこなのよ」

椅子に座っている鳳が聞いてくる。

「待て」

ゼロは教壇に登り、教卓の前に立った。

「此方が把握した情報によると、敵は現在楽園ユートピアに拠点を構えているらしい」

ゼロの言葉に皆がギョツと目を開いた。

楽園ユートピア、それは数十年以上に複数の海底火山の活動によって誕生した巨大な島に、国連

主体で作り上げた新たな都市の事だ。この場所はどこの国にも属する事はない。

これに加えて、宇宙コロニーの理想郷アルカディア、深海に作り上げられた海底都市アトランティスの三つを総称

して新天地計画と呼ばれている。

「楽園ね……厄介な場所に構えてくれたものだ」

忌々しげに千冬が呟いた。

この場所から楽園まではかなりの距離があり、ISで移動するだけでもかなりのエネルギーを消費してしまう。

黒零や銀の福音のような大量のエネルギーを保有している軍事用IS、もしくは覚醒したコアの機体を持っているなら良いのだが、この部屋にいるほとんどのISはそうではない。

普通にISを使って楽園に向かった場合、大量のエネルギーを消費してしまう事になる。

「エネルギーに関して心配してるかもしれないが、その必要はない。何故ならここに丁度良い電池ちゃんがいるからだ」

ゼロが指差した先には篠ノ之箒が仏頂面で座っていた。

「電池……だと?」

ゼロの電池発言に箒は怒りを露わにするが、そんなモノはゼロに無視される。本質はそこではないからだ。

「……なる程、絢爛舞踏か」

ゼロが言いたい事を百春はすぐに理解した。

「確かに紅椿の絢爛舞踏を使えば、エネルギー切れの心配は確かに無くなる。でも——」  
「その場合、篠ノ之箒に肉体的にも精神的にも負担がかかり過ぎてしまう……お前はそう言いたいのだろ?」

ゼロの発言に百春は無言で頷いた。

紅椿の絢爛舞踏は確かにISのエネルギーを回復させて他者に渡す事を可能にするが、その場合等にかかる負担が大きくなると百春は思った。

それは勿論ゼロも理解している。

「故にこの作戦はなしだ。そして、本当の作戦は俺がお前たち全員を楽園まで運ぶ事だ」その言葉を聞いて百春と楯無を除いた人間が首をかしげた。楯無と百春はその言葉の意味を理解しているらしく、楯無にいたっては顔が完全に青ざめていた。

「貴方、まさか、アレ、使うの？」

「ああ、黒鷹を使う。幸い、ついこの間新しく装備をつけてな。そのおかげで最大で九人まで運搬できるようになった……………だから、今回の任務では7人この学園から出る事になる」

「九人ではなくか？」

ラウラが聞いてくる。

確かに九人まで運搬できるなら九人連れていけば良いはずなのに、七人だけ連れて行くのはどういう事なのかわからなかった。

「今回の作戦では後から我々の組織の人間が二人合流することになっている。だから七人だ」

ラウラはそれを聞いて無言で頷いた。

「では、今回の任務に出撃する八人を決めるぞ」

何時の間にか主導権をゼロが握っていた。まあ、この場で一番強いのがゼロだから仕方がないのだが。

「楽園に向かうのは、俺、アリサ、更識姉、百春、ラウラ、篠ノ之が決定済み。あとの二人についてだが、今呼ばれなかった奴らでジャンケンして決めろ」

名前を呼ばれることのなかった鳳、オルコット、デュノア、更識妹は目に見えてムスツと不満気な顔をした。

特にオルコットはプライドが高い為、ゼロの投げやりな態度にイラついていた。

「そう言う言い方はよろしくないのではなくて？」

オルコットが睨みつけてきた。

彼女も代表候補生の一人、其れなりの実力があると自負しているしプライドもある。

「何がだ？問題ないだろ。俺から見たら残りの奴らはどんぐりの背比べ、実力には差はないだろ」

「だとしても、そんな事で選ばれては、私のプライドが許しません」

「お前如きにプライドがあったとはな、驚きだよ」

「なんですって!?!」

オルコットが机を勢い良く叩いて立ち上がった。

「その言葉、訂正しなさい!!」

「なんだ、今ここで出撃不能にして欲しいのか?それともそのドリルロールを髷のように切り落として、引退させてやろうか?」

ゼロも臨戦体制は整っている。

「セシリアも兄さんも大人しくしろ!」

珍しく百春が声を荒げた。

「おっと、すまねえな。その金髪が茶化しやすかったからついやっちゃったぜ」

ゼロは反省してる様子はなさそうだ。

「ですが、百春さん!」

「セシリア!!」

先ほどよりも強い声で百春はオルコットを止めた。

「今はそんな事をしてる場合じゃない。兄さんの言い方は確かにムカつくけど、そんな事をいちいち気にしてたらキリがない」

「お前ヒドイな。兄に対する態度がそれかよ」

「そうさせる兄さんが悪い」

「まあ、確かにな」

二人の兄弟仲はだいぶ改善されたようだ。



「……………」

放っておかれたセシリアは怒りを何処にも向ける事ができずに無言で座った。

「……………それでは作戦会議を続けようか」

## 第107話

「全員、機体を固定させたか？」

作戦会議の後、其々の準備を済ませた面々はゼロが呼び出した黒鷹に乗り込んだ。

結局、残りの二人として選ばれたのは更識妹と鳳だった。残ったオルコットとデユノアは万が一が起きてしまった際の防御役として残る事になった。

黒鷹には新たな装備として巨大なコンテナが三つ取りつけられており、ここに他の奴らぐり乗り込んで固定されている。

「固定したか？したよな？答えは聞いてない」

ゼロは三つのコンテナのハッチを閉じた。コンテナの内部を特殊な液体で満たして衝撃を和らげる。

『一夏』

千冬からの通信が入ってきた。彼女は今回の作戦の殆どを学生たちに任せてしまっているため、負い目を感じてしまっている。

自分の力のなさを痛感してしまっている。

「なんだい？千冬姉」

上機嫌に鼻歌を歌って機械の調整を行っていたゼロが聞き返した。

『頼んだぞ』

短い言葉だった。

しかし、それだけでゼロにとっては十分な言葉であった。

一瞬だけその言葉に驚いてキョトンとしていたが、直ぐに元に戻って小さく笑うと目を閉じた。

「天下のブリュンヒルデ様に言われたとあっては、頑張らないといけませんねえ」

笑いながら軽口を叩いた。

『はあ、あまり教師をからかうなよ』

「俺は貴方の生徒じゃありませんので、好き勝手にさせてもらいますよ」

『……………はあ、わかった』

千冬は諦めた。

立派になった弟の成長を喜ぶのと同時に、自分の見ていない間にどんな育ち方をしたのか非常に気になった。

「そりじゃあ、行ってくるぜ」

『ああ、行って来い』

千冬は静かに見送った。

『全員、行くぜ』

黒零と繋げられてある黒鷹のスラスターから推進剤が噴出され始める。

最初はゆっくりと進み始めていたが、速度が徐々に上がっていく。海上を進んでいた黒鷹が速度をあげるごとに海面から機体が浮き始める。

機体が海面から離れたところで更に速度を上げる。

目標は楽園、直行………その前に亡国機業から派遣される二人を拾う事になっている。

既に待ち合わせポイントは決まっているため、後は向かうだけだ。

その事を考えていると、丁度スコールから通信が入ってきた。

『ゼロ、そっちは順調?』

「大丈夫だ、スコール。問題はない」

機体に取り付けられてある計器を調整しながらスコールに返答する。

「ティファとアドルフの二人は目的地に向かっているのか?」

『ええ、大丈夫よ。ちゃんと時間に間に合うように行かせてあるから』

「それならば、問題はない。本部の守りは大丈夫か?」

『ええ。万が一の事に備えて、モノクローム・アバター以外の部隊は全て本部に待機させ

てあるわ。だからこそ、貴方達にかかっているのよ』

万が一の自体、ネオの動きを警戒して亡国機業は今回の事件に最小の人数しか送り込んでいない。だが亡国機業の最高戦力を送り込んでるので、油断はしていない。

「わかっていますよ………それよりも、エムは目的の場所に向かわせてますか？」

『ええ、大丈夫よ。オータムを護衛につけて、篠ノ之博士のラボに向かわせる』

「急がせてくれ、今回の任務はアイツの新機体が重要になりそうですから。では、切りますよ」

『ええ、任せたわよ』

スコールからの通信が切れるのと同時にゼロは機体の速度を上げた。今回の飛行は前回と比べてそれ程まで速度は出ていない。それ程出す必要がないのだ。

コンテナにいる奴らは今頃戦闘に向けて精神統一を行っている。ゼロも本当ならばソレを行いたい、今回は役割があるため我慢するしかない。

そして飛行する事十数分、ゼロ達は集合場所の近くに来ていた。合流予測時間まで後一分、ゼロは速度を下げてティファ達の格納準備に移る。

格納する余裕のあるコンテナのハッチを開き、迎え受ける準備を行う。

『ゼロ、目的地にはついた？』

ティファからの通信が来た。

「コッチは既に格納準備も済ませてある。あとどれくらいで着く?」

『うーん、時間びったし? 取り敢えず進行方向に進んで、動きながら格納されるから』  
「わかってる、進行方向に合わせてある」

『流石、私の事良くわかってる』

水平線の彼方から接近して来るISの反応が二つある。ティファニアとアドルフのモノだ。

指示に従って動き始める。ゆっくりとゆっくりと速度を上げて行く。二人はかなり近づいて来てる。

そして、速度を調整して格納庫の中に入ってくる。それを確認してコンテナのハッチを閉めて、再度緩衝剤でコンテナの中を満たす。

入ってきた二機がコンテナの壁に固定されたのが、コックピットの中にあるモニターから知らされる。

速度を上げ、機体は楽園に向かって行く。

「やはり、来るのですね」

楽園の中心都市の丁度中心部に聳え立つ塔の一室にクロエはいた。その部屋は束が殺された場所であり、今も遺体は玉座に座っている。

そして彼女の座る玉座の後ろには巨大な球体が置かれてある。これはNo. 1000を保管するための装置、余りにも力の強すぎるNo. 1000を封じるために束が作ったのだ。今はこれを通じて、クロエのISに力を送っている。

「私たちも、迎え撃つ必要があるそうですね」

クロエは座っていた椅子から立ち上がると、No. 1000を封じ込めている球体に向かう。

「私たちは人の罪によつて産まれたモノ、産まれてもその意義を知らないモノ。だからこそ、確かめる必要がある」

クロエは玉座に座る束の死体に触れた。

「束様、貴方には感謝しています。闇しか存在しなかった私たちの世界に、貴方は光を与えてくださりました」

死体に触れるクロエの手は優しかった。

「ですが、それは私たちにとって余りにも強い、欲望を、罪を、心に生み出してしまった。だから、私たちは禁忌に触れてしまった。罪ならば、この身に受け入れましょう」  
手がそつと離れた。

「これは証明です。私たちの世を作り上げるための、楽園のための戦いです」  
戦いは近づく。



## 第108話

楽園、それは数十年前に海底火山の噴火によつて作り上げられた島の中に世界中の国が一つの意思の元に作り上げた都市。何処の国にも属しておらず、やがてはこの場所に国際連合の本部を置く事になっていた。

誰の国でもないからこそ、エツネリユード進化体達はこの場所を拠点として選んだ。

ゼロ達は楽園まで残り数分というところに来ていた。到着まで距離にしておよそ十数キロメートル、ISならばあつという間についてしまえるほどの距離。

「全員、出撃準備は済ませているか？」

黒鷹を操りながら、ゼロはコンテナの中にいる面々に声をかけた。それぞれの返事が返つて来て、出撃準備が完了してあることがわかる。

「これより先は敵の本拠地だ。何が起きるかわからん、気合をいれておけよ」

今回の任務を簡単に説明すると、敵に突撃してぶつ殺す。非常にわかりやすく助かる。

潜入は不可能。

だからこそ、最高戦力を叩き込む。

「……………全員、出撃準備に移れ」

出撃地点にはまだ距離があるというのに、ゼロはいきなりそんなことを言い出した。

出撃地点はもう少し内陸、楽園の都市部分での予定だったはずだが今はまだ海岸にも到着していない。

『兄さん、何かあったのか？』

異変を察知した百春が聞いてくる。

「ああ、コッチに向けて無人機が迫って来ている。この前の面倒くさい奴、それも数機」  
それはタツグマツチの時に襲来した無人機、あの時は専用機持ち達を大いに苦しめた。

しかも今回は数が多そうだ。

コンテナにいる面々に緊張感が走る。

「アレは俺が引き受ける。できる限り内陸部で下ろすから、任務を優先してくれ」  
皆、指示に従うことにした。

無人機からのエネルギー弾の砲撃が始まる。

ゼロは水面スレスレを飛行してこれらを躲し、無人機の群れを突き抜ける。

「都市部についたら可能な限りツーマンセルで行動しろ。敵の数は七人プラス無人機、二人一組で敵を一人撃破する気でいろ」

数が合わないが、それは仕方が無い。こちらの駒の数が足りないのだから。しかもゼロの目標はクロエ一人、あとの奴らを他が可能な限り引き受けてくれればいい。

「開始！」

その言葉の直後、付けられたコンテナが前方に射出されて中から専用機持ち達が飛び出した。それぞれツーマンセルを組んで飛んで行くが、百春だけは人数の都合で一人で行動している。

これは勿論百春の独断行動ではなく、ゼロからの指示である。

ゼロ曰く、「そろそろ飛べ」だそうだ。

専用機持ち達を射出し終えると、ゼロは急上昇を行って無人機の視線を惹きつける。

ゼロは早速射撃で一機撃破してみた。

「こっちだぜ」

大翼を羽ばたかせたながら、ゼロは空中を舞う。

黒鷹を長距離移動形態から戦闘用モードに切り替える。鳥の足が飛び出し、背中にはエネルギー砲が取り付けられる。

手始めに後部のミサイルポッドから大量のミサイルが無人機に向けて発射される。

それらはマルチロックオンシステムによってそれぞれ別の無人機に向かって飛んでいる。

無人機はこれを何事もなく撃ち落とすが、ミサイルからは爆発ではなく、大量の煙のようなモノが飛び出した。

煙を浴びると無人機の動きが僅かにおかしくなった。これはほんの僅かな時間だがISのセンサーを狂わせる事ができる煙、有人機にはあまり効果がないが、センサー頼りの無人機にとっては有効な武器である。

大翼にエネルギーが纏う。加えて先頭部にはチャクラの膜が覆われる。

超高速の突撃、動きのおかしくなった無人機に向けて最高の衝撃が迫る。

動きのおかしくなった無人機が元に戻るよりも早く、ゼロが無人機を大翼で切り裂いた。

更に空中で急旋回、今度は爪を広げて無人機を掴み、握りつぶす。握りつぶした無人機を手放して残った奴らを睨みつける。

散開していく無人機に向けて黒鷹は大口を開けてエネルギー砲で薙ぎ払う。

加えて全身のエネルギー砲を放って逃げ場をなくす。

エネルギーに飲み込まれて爆散していく無人機。

「コッチは一段落、さてと少し休んで突撃しますか」

「来ましたか……では、我々も迎え入れましょう」

一つの影の指示に従い、六つの影は樂園を守るために飛び出した。

## 第109話

都市部に進行した専用機持ち達を待っていたのは、進化体からの手荒い歓迎であった。

六人の進化体によって、専用機持ち達は見事に分散されてしまった。だが運の良い事に、百春以外は誰かとペアを組んでいた。

しかし、進化体の実力は高かった。生体同期型のISは反応速度が並のISよりも速い、黒零とほぼ同じくらい速い。

専用機持ち達の大半は苦戦をしいられる形になってしまっている。

「どうした、どうした？攻撃が一向に当たらんぞ」

「……………ふう」

そんな中、誰ともペアを組めなかった百春は一人で進化体の一人と戦っていた。

戦いは百春が押していたが、一撃も攻撃を当てられないでいた。相手は蛇のような動きで巧みに攻撃を躲けている。

普通の人間ならばできないような動きも、体全体がISになっている進化体ならばでききる。

回避不可能なはずの体制から簡単に躲かれてしまうことのもどかしさに、百春は焦りを感じていた。

できる限り目の前の敵を倒して、誰かの支援に向かいたい。たった一人で戦う百春は考えていた。

「考えごとか？この私、ヒューログ・ウロボックルを前にそんな余裕があるのか？」

ヘビの姿をISの腕から放たれる高威力のしなる一撃、鞭打。予測困難なその攻撃を百春は雪に付けられた盾で防いだ。

だが続けざまに鞭打の連続攻撃、両腕と全身をしならせながらヒューログは百春を攻め立てる。

百春はこれを雪の盾で受け止め、華の刃で流す。

ヘビの頭部を模した手の攻撃は喰らえば確実に吹き飛ばされる。

（冷静になれ、こんな時こそ。冷静になれ）

百春はゼロに教わったことを思い出していた。体を熱くたぎらせてもいいが、決して頭を熱くさせるなということ。

攻撃を凌ぎながら、深呼吸を行い、相手の動きを見極める。

予測完了。

盾と刀で鞭を払う。

作り上げた完璧な隙、この一瞬を逃すまいと百春の華を握る手に勝手に力が入る。

宙を花卉を切り裂いてしまえそうな流れるような太刀筋、正確無比の斬撃がヒューロツグに肉薄する。装甲に触れる直前に零落白夜を発動、一瞬だけの発動でできる限りエネルギーの消費を抑え込む。

斬る。

だが相手に与えた傷は深くない。寧ろ浅い。これでは決定打にはならない。

次の一手。

百春は左手を伸ばして指先からエネルギーの弾丸を飛ばす。

ヒューロツグは手の、ヘビの頭を模した、装甲で防ぐ。

二人とも小休止、互いに相手の出方を探る。

「……お前たちは何故こんな事をした」

華を構えたまま百春は尋ねた。この戦いが始まる前、事件が起きた時から考えていた。何故彼女たちがこんな事をしたのか。

「……知りたいのか？ならば盛大に教えてやろう……とはいつでも、私たちが戦う理由は其々違うのだから」

「……何？」

「私はな、いろんなモノが欲しかったんだ。宝石やバッグ、服に靴……それから普通



の生活。何もかもが欲しかった」

「……………」

「でもな、そんなモノは手に入らなかった。手に入れようとすればするほど、此の手から何もかもが零れていくのがわかったよ。普通を望めば望むほど、私は異常になっていった……………それがこれだよ」

見せつけるように両腕を広げた。声には悲壮が含まれていた。しかし、同情は求めていなかった。

「零れれば零れるほど、落とすまいと必死に求めた。だがそんなのは無駄だった……………だから、私は何もかもを手に入れるために戦うのだ」

ヒューログは構える。

「誰にも否定はさせない……………私は欲望の為に戦う。何もかもを手に入れるために！」

「否定はしない……………でも、受け入れる事はできない」

「そうか……………ならば聞こう。貴様は何の為に為に戦う！」

二人は接近する。互いの得物を持って、全力を振るう。

「皆を守る為だ！」

「そんなモノ、何も知らぬ小僧が吐く言葉だ！」

「ああ、そうだ！僕は何も知らない小僧だ！」

百春は昔から勉強はよくできた。だが学校の勉強ができるのであって、広い世界についてはよく知らなかった。とは言っても一般常識はよくわかっている。

彼が言いたいのはゼロ——一夏の住んでいる世界についての事だ。

「でも、だからこそ！」

華が舞う。

「誰かが泣くのは、辛い事だ！悲しい事だ！それが……嫌だ！」

思い出すのは遠い昔の記憶、こびりついているのは泣いている記憶。百春の前から大切な人がいなくなっていた。兄である一夏はその悲しさを超えていった。でも百春にはそれがうまくできなかった。

「理想論か、綺麗事か……不可能だと知っているだろ」

「それでも！理想論、綺麗事でも良い！借り物でも！願い、意思があれば、それに辿り着ける！此の手届く限り、守ってみせる！」

「そうか、ククツ。そうかそうか」

突然、ヒューロググが笑出した。

「何がおかしい！」

ヒューロググの手の爪と華の刃が鏝迫り合う。

「啖呵を切ったな織斑百春！言葉の重みも理解せずに、貴様は言葉を漏らしてしまっ

！」

「何が、言いたい」

「先ほど、別の奴から連絡があった。我優勢、とな。これが何を意味するのか、聡明な織斑百春くんならすぐにご理解いただけるだろう」

その言葉に百春は息を呑んだ。

劣勢……既に。

誰が……何処で。

百春の頭の中で情報が巡る。

既に分散してから数十分が経過している。確かに、何処かの戦場で決着がついていてもおかしくはない。

その直後、百春のISに救援信号が入った。送ってきたのは凰から、場所も示されている。

「さあ、どうする！」

「無論、助ける！」

百春は左手の指先からエネルギーの弾丸を撃ち出してヒューログの動きを止める。

そしてその間に百春はスラスターを噴かせて、戦場を離脱する。

今の白式に追いつける機体は数える程しかない。たとえ生体同期型ISであろうと、

不可能。

市街地を突き抜ける。最短の経路で、最速の時間で駆け抜ける。

「さあ、助けてみる！正義のヒーロー！」

救援信号を出した篠ノ之、風の二人は生体同期型のISを前にして危機的な状況に陥っていた。

「ああ、妬ましい。なんと妬しいことか。テメエラのその生き方が、五体満足、普通の人間……嫉む！」

黒豹の様な姿をした整体同期型ISに乗った進化体の一人、パンター・フラクロスは二人を眺つて楽しんでる。

眺るといふよりも拷問と言つた方が適しているのかもしれない。

一気に殺す様な真似はしない。この戦いは復讐なのだ。

自分たちの未来を奪つた大人達への、これからの未来を歩く子供達への復讐、それがパンターの戦い。

嫉妬の戦い。

「お前たちは良いなあ、恋をしている。アタシ達はできなかつた。恋なんてできなかつた

！見てきたモノは……クソみてえな、世界だけ。羨ましい、妬ましい、嫉ましい……な  
んで、テメエらは、テメエラがアアアアア!!」

黒豹の肉体から雷撃が迸り、周囲の建物を破壊する。

大きく発達した爪と爪をこすり合わせて、雄叫びをあげる。

ビルの頂上から月光を浴びる。

「全く、息巻いて出撃したは良いが、完全な足でまといになってしまったな」

「ほんと、自分が、自分が情けない」

篠ノ之も嵐も、パンターに圧倒された。爪や雷を使った技の他に、関節技を使用する  
戦い方を前に二人は簡単に倒された。

ISはまだ動くが、二人の肉体がダメージを負っている。戦うのは非常に困難であ  
る。

「どうやって、乗り切るか」

「どうやっても生き残ってやる」

二人は立ち上がる。得物を持って気合を示す。

「そうか、ならばこれからの我らを羨ましめ、妬ましめ、嫉ましめ。それが今の貴様らに  
できる償いだ！」

ビルの頂上からパンターが二人に向けて飛び降りる。爪を広げ、好戦的な笑みを内に

浮かべる。

「さあ！さあ！さあ——」

「させるかアアアアア!!」

高速で接近した百春が落下する。パンターを空中で蹴り飛ばした。

「なんがア!?!」

パンターは蹴られたことに驚きはしたが、直ぐに落ち着いてビルの側面に着地。そして壁を蹴って百春に迫る。

百春も華から、二刀流『月』に武器を持ち変える。

「テメエはヒューログの奴が相手してた！あの蛇イ！態と逃したな！」

「そこを退け！」

二刀流対二爪流。

高速戦闘、百春はパンターよりもヒューログの方が強かったと感じた。パンターの戦い方は直情的、だがヒューログの戦い方は洗練された、達人のソレのようであった。攻撃を弾いて、パンターを蹴り飛ばす。

そして今の内に二人の側に着地する。

「大丈夫か？」

「ああ、なんとか動けるくらいにはな。すまない、何も役に立てなかった」

「ゴメン、百春」

二人とも気まずそうに謝った。自分たちのせいで百春に迷惑をかけてしまっているのが、どうしようもなく悔しかった。

「気にしないで、それよりも怪我はないか？」

「アタシも箒も手と足に酷い怪我をしてる。射撃武器ならともかく、格闘戦は無理ね」

「……わかった、ならばここは僕に、任せて」

二人が戦えないと判断した百春は自分一人で戦うと決断した。月を構え、これから来るであろうヒューロググを含めた二体の進化体を相手にしなければならぬという事実を受け止める。

「……なんだ？この、冷たさ？」

百春は周囲の気温が著しく低下しているのに気づいた。いくら真冬だからといってここまで気温が急激に低下する事はありません。

なんらかの力が働いているのだと気づいた。

その後。

すぐ近くにあったビルの壁を何かがぶち破ってきた。

「……楯無さん？」

それはIS学園生徒会会長、更識楯無であった。

彼女の身に纏う機体は既にボロボロ、最大の武器であるはずのナノマシンを含んだ水すら展開していない。

「お姉ちゃん、大丈夫!？」

そして上空から妹の簪がやってきた。

「ええ、ちよつとハマしたけどまだ大丈夫よ」

そうは言っているが、機体はボロボロ。心配している簪も破損が目立つ。

つまりこの場で無事なのは百春一人だけである。

「何があつたんですか？」

「相手と私の相性が死ぬほど良くなかった。私の武器は水だよりなんだけど、その水が全部凍らされた。並の冷氣じゃ凍らないはずなのに、ナノマシンに異常を起こされて凍らされた」

「……成る程、ですか」

事態は百春が考えている以上の何倍も最悪な方向に突き進んでしまっていた。

どうすれば三体を相手取れるか考えてはみたが、良い結論は一向に浮かび上がってこない。

「おいおいおいおいオーイイイイ!!!!どうなってやがるんだ、どう言うつもりでいやがるんだア!?!なんで誰も倒せてねえんだよ、なんで集合してんだよ!怒りが頭に来ちまっ



て、逆に冷えちまうぞ！」

煩いのが来た。

空を見上げれば、今度は白熊のような姿をした整体同期型ISがいた。

名はポラー・カムベアス。

「煩いな、一々と。貴様はアタシでも羨まねえ。少しは黙つてろ」

「激怒、激昂、激烈、怒るぞオオオオオオ!!!」

「怒つてるだろオオオオオ!!」

空中で言い争いをする二人、その隙に百春は怪我した奴らを逃がして、一人で殿を務める事にした。

「おい、馬鹿ども」

すると二人の様子に呆れたのかヒューログが間に割って入ってきた。

「見ろ、貴様らが馬鹿なせいで他の奴らに逃げられてしまったぞ」

「何だとお？」

二人が見ると、確かに百春しかいなかった。

「いねえな……だが元々はテメエが彼奴を逃がしたのが始まりだろうが！アアアアン  
!？」

「ふふつ、気にするな。それよりも今はアレを倒そうか」

「テメエは後でシバクが、今は確かに向こうが先ダア！」

「ムカつく、逃がしやがって、ムカついて仕方がねえんだよオオオオオオ!!!」  
進化体三人が構えをとった。

一人でも苦戦したのに、それが三人。

「やってやるさ、やってやるさアアアアアア!!」

月を手に取り、百春は向かっていった。

## 第110話

思えば何かを失つてばかりの人生であつた。

幼い頃は両親と妹を失つた。

悲しかった。余りにも悲しかった。

失つた悲しさもあつたが、何もできない悲しさもあつた。

その頃から兄さんは泣かなかつた。何を考えていたのかよくわからないが、あの人は泣かなかつた。孤高を極めていた。

今考えれば、あの頃から強くなる機会はいくつもあつたはずだ。それなのに僕は全て捨ててきた。

怠惰だ。

守りたいと願つていたそれなのに、ただ剣道をやるだけだつた。本当に守りたいものがあるならば、覚悟を示すべきだつた。

力のない主張は無力だ。

平穩を失つた。

新たな力の誕生は、僕たちの世界を容易く変えてしまった。

共に切磋琢磨する幼馴染も失った。

彼女は強かった。憧れがあつた、一緒に練習して、遊んで、純粋に楽しかった。

兄を失った。

あの時は……結局何かわからなかつた。でも今ならば何かがわかる。

あの人の強さは僕とは違う。決して会いたいれないが、理解することはできる。僕にはあの人の強さを、あり方を否定することはできない。

明るく照らしてくれた友を失った。

兄を失った僕や姉さんを明るく励まし、照らしてくれた彼女を失った。

平穏を、また失った。

自分の愚かさで、またしても失ってしまった。しかも今度は誰のせいでもない、自身自身のせいで平穏な世界を失ってしまった。本来ならば今頃こんな場所にはいなかったのだろう。

ああ、だからこそ……

何も失いたくはない。

「ウオオオオオオオオオ!!」

静謐な都市に一人の男の叫び声が木霊する。肉体が震え上がる程の寒さを打ち払うために雄たけびが上がる。肉体に絡みつく恐怖心を振り払おうと櫓を飛ばす。

「オラァー! どうした!」

黒豹の鋭利な爪が百春に襲いかかる。

躲す、躲す、躲す。

爪の軌道を見切り、最小の動きで躲し続ける。無駄な動きはタブー、少しでも隙をみせてしまえば他の二人の餌食になる。

「なら、これだア!!」

爪から飛ばされる無数の三日月型のエネルギーの刃、それらは曲線的、そして直線的な軌道の二つが入り混じって百春に向けて飛ばされる。

百春もウイングスラスターを大きく羽ばたかせ、エネルギーマントを身に纏い全てを受け止める。

「背中がガラ空きだアアアアアアア!!!」

今度は背後からポーラーが攻めてきた。

体全体に冷気を纏い、巨体を動かす。

豪腕から振り下ろされるダブルスレッジハンマー。絡み合わせた手には氷解がまわりついている。

百春は上下反転させて、ハンマーを両足で受け止める……わけではなく、ハンマーの威力を利用して地面に落下する。

羽毛のような軽やかさで地面に着地、すぐに次の動きに移る。

降り注ぐエネルギーの刃、極寒の氷柱の雨を花のエネルギー斬で打ち消した。だがすぐに次の攻撃が迫った。

真正面からヒューロツグ、鞭のよに成る腕を巧みに振るい、百春を攻める。

百春はソレを躲していくが、躲した直後にパンターが放ったエネルギーの斬撃が肩に直撃した。

怯む。

そしてその直後に胴体を数度の鞭打が直撃した。加えてヒューロツグは百春の間合いの内側に入り込む。

「シャアアア!!」

蛇の鳴き声の直後、顎にアッパーが直撃した。

打ち上げられた百春、其処にパンターが飛び込んで何度も切りつける。

その際にスラストターが破損、空中での自由を失ってしまう。

最後にポラーのダブルスレッジハンマーが直撃、百春は無残に地面に叩きつけられる。

だが百春は膝をつかなかった。両足で地面に着地して、踏ん張ってみせた。其処には負けたくないという強い意思を感じる事ができた。

「どうした、まだ戦うのか？今のお前では我々には勝てないぞ」

一箇所に集まる進化体、ヒューロググは自分達の勝利を確信して余裕をみせている。

「生憎だね、最近少し負けず嫌いになったんだよ……それにここから先に行かせたら、皆倒されちゃうだろ？」

百春は花を構える。

脚の装甲には破損が目立つ。流石に一人でも苦しい相手を三人も相手するのは無理がある。

「色々と無くしてきた人生だからね、失ってきた中でせつかく得たものだからね

……………辛いんだよ」

それを聞いてヒューロググは笑った。

「……………そうか、失いたくないか……残念だな、我々にはこれ以上失うモノがないからな。

君とは違って、コレからは得る事しかできないんだ。何もかもを手に入れてみせるさ」  
ヒューロッグ達はそれぞれの遠距離攻撃用の武器を構える。そして最大威力までエネルギーを貯める。

「これでお終いだよ……お別れだ、失う者よ」

放たれた一撃、迷う事無く百春に向かっていく。

「……ああ、負けたくないな」

花を持つ百春の手に力が入る。

心が肉体を突き動かす。

負けたくないという強い意思が勝手に肉体を動かしてくれる。

「そうだよね、シロノ——」

走馬灯が頭の中を駆け巡る。

今一瞬に過去永遠が繰り返される。

黄金の煌めきが彼の目に見える。

刹那の為に全てが存在する。

全てを理解している。飛び立つための翼ならば既にこの肉体に宿している。

後は己の覚悟だけだ。コレを成せば、彼は大空に飛び立つ事ができる。

「行けるよねっ！」



共鳴。

『——ええ、行きましょう』

黄金の風が突き抜けた。

「……………は？」

目の前で起きた現象に進化体の三人は何が起きたのか全く理解できずにただ呆然としている。

百春が目の前から消え去っている。

エネルギーの爆心地にいたはずの百春はその姿を消していた。というよりも彼に当たるはずだったエネルギーそのものがなくなっていた。

「何処だ、何処に行きやがったチキオオオオオオ!!」

目標を見失ったパンターは怒号をあげながら周囲を見回す。

「逃げたのか？殺させるオオオオオオ!!」

ポーターも同様のようだ。

「……………後ろだ」

ヒューロググだけは百春の居場所に気づいた。

だが最初から居場所に気づいていたわけではない。一瞬完全に見失っていたのだ。

ヒューロググの機体は蛇の見た目に相応しく他の進化体に備え付けられているセンサーよりも精度が高い。

それでも完全に見失ってしまった。

速度だの何だのという次元ではなかった。

完全に消えたのだ。

そしてまた現れた。

この世界から乖離してみせた。

「なんだ……………アレ」

振り返った三人は、其処にいた百春——白式の姿に驚いた。

純白と黄金を基盤にした全身装甲、所々に煌めく星のような輝きの金色のラインが入っている。

そして特徴的なのは両肩にある巨大なウイングスラスター、今までは片翼だったのが両翼に変化しているのだ。

その姿、あまりにも神々しい。

白騎士とも黒零とも違う百春とシロノのための機体。

輝きは流星の如く。

黄金の戦士。

名は。

『『ビヤクシキ・マコト  
白式・真』』

## 第111話

煌き輝く黄金の戦士『白式・真』、その内から湧き上がる力に百春は衝撃を受けていた。自分が機体と一体化しているのがよくわかる。自分にはないはずの巨大な翼の先端迄神経が通じているのが感じられる。

ギョロリ、ヘッドギアにある空のような青い瞳が三人を睨みつける。

「あれ、スゲえな」

「わかる」

「落ち着け、冷静に倒す」

進化体三人は覚醒した百春を甘く見てはいない。先ほどよりも警戒している。

「だが手始めだ！」

「良いなあ！」

パンターとポラーの二人はヒューロッドの指示を無視して百春にむけて突撃した。

「真月」  
シンゲツ

白式の両手に進化し『月』が握られた。ソレは余りにも美しい、何かの芸術作品のよ  
うに無駄がない。『月』からは基本的に形は変わっていないが、今迄色のつけられていな

かった柄などに白色が加えられた。

深呼吸、迫り来る進化体二人を前に百春は落ち着きを見せる。焦りはしない、この機体に乗っていれば負ける気などしなかった。

「シャアア!!」

「オラア!!」

真つ向から二人が突撃してくる。

「……行こう、シロノ」

白式が動く。

一瞬であった。

二振りで勝負を決めた。

美しい——そして迷いのない太刀筋であった。

「……嘘だろ?」

「え?」

二人は地面に倒れた。あれ程迄大暴れしていた進化体がこんなにも簡単に倒されてしまった。

「……成る程、確かに強くなっているようだ」

ヒューログもそのヤバさを感じている。今日の前に立っている白式は機体として

の格が違う。ある種の到達点にいる。

故に油断などあり得ない。自身の持つ全てを使って勝利をもぎ取るつもりだ。構えにより一層の力が入る。

百春も真月を収縮する。

「二刀繚乱、真花<sup>シヅカ</sup>」

刀が咲いた。

美しい花の刀が。

右手に持った真花を振る。

「……零落白夜」

黄金の煌き、朝焼けの太陽よりも美しい光が白式を包み込む。それは今迄の零落白夜の輝きとはまるで異なる。進化したが故に到達した百春とシロノによる『真なる零落白夜』。

互いに次の一撃に全力をかけるつもりのようなのだ。

白式の黄金の翼が広がり、黄金の粒子が放出され始める。

白式が動く。

真花の切っ先をヒューロググに向けて突きつけながら突撃する。

それはさながら荒野の決戦、静謐な世界に二人の鼓動が響く。

「うぎゃー」

突っ込んでくる百春をヒューログは待ち受ける。自身の高性能センサーを利用した最高のカウンターで百春を倒すつもり。

だが、百春はその思考を超越した。

消えた。

百春がヒューログの目の前から消え去った。

「……………え？」

センサーと肉眼から百春の存在が消えてしまい、ヒューログは呆気に取られた。

そしてそれは致命的であった。

目の前に百春が突如現れた。

それにヒューログが気づいたのは切っ先が肉体に触れるか否やという時であった。この段階ではもう手遅れ、カウンターを行う事ができない。

「ああ……………そうか」

ヒューログは死を認識した。

だがいつまでたっても刃はヒューログの肉体を貫かなかった。

「……………何故殺さない？」

「僕は君たちが完全な悪だとは言い切れない。だから殺さない、殺せない。彼女たちもタダ気絶しているだけで殺してはいない」

百春はヒューログの視線を自身の後ろに向けさせた。そこには地面に倒れた二人がいるが、確かに外傷はなく、ユツクリと息をしている。

百春には彼女たちが悪いのか、それとも彼女たちをこんな風にしてしまった人間が悪いのか、わからなかった。

「こんな事をしたのにか？」

「……ああ、君たちはこの戦いを存在証明だと言った。それに君は言っただろ、何もかもが欲しい……でも君が一番欲しかったのは高価な物じゃない。あれは嘘だ。本当に欲しかったのは、普通の生活、違うか？」

切っ先を突きつけたまま、百春が問いかける。

「……どうだかな。忘れてしまったよ」

「ソレも嘘だ」

その言葉を真っ向から否定する。

「……はあ、確かにそうだ。私は普通の生活が欲しかった。あんな暗い研究施設の生活じゃなくて、明るい学生生活を送ってみたかったよ。だが無理なんだ。私は、こうなつてしまったから」



ヒューロググの瞳は何もかもを諦めていた。

「……なんだよ、ソレ。そんなの辛いだろ……」

切っ先が震える。それは怒りによるものか、それとも悲しみによるものか。

「失つてばかりなんて辛いだろ！失つてばかりなら、これからは得る事を考えろよ！悲しいことじゃなくて、明るいことを！僕も手伝うから、皆に謝って、それで、それで」

百春の感情が爆発する。

ヒューロググもまさかそんなことを言われるとは思つてもいなかったのか、再び呆気に取られている。

「……そうか、ありがとう。私みたいな奴の為にこんな事を言ってくれて。最後に、君が欲しくなったよ」

ヒューロググの声色が先ほどよりも優しくなった。

「最期なんて言うなよ」

「言つてしまふさ。私は負けた。ならば、罪は償わねばならん……君に負けて良かったよ」

その言葉の直後、ヒューロググは自身の肉体に真花を躊躇いなく突き刺した。

「なっ!?!」

まさかそんな行動を取るとは思っていなかったのか、真花から手を離してしまった。

「訂正するよ……まだ、失えるモノがあつた。一番大切なモノだ……命があつたよ」  
より深く刃が突き刺さつた。

「あ……ああ。何やつてんだよ!!」

百春は膝から崩れ落ちるヒューロッグを前に、漸く事態を受け止めた。

ヒューロッグは傷口を抉るように真花を抜き、投げ捨てる。

百春はヒューロッグを抱きかかえて受け止める。

「コレでいい。コレが私の贖罪だ」

「何言つてんだよ！罪があるなら最後まで向き合え！死ぬ事は贖罪じゃない、生きて行動を行うのが贖罪だろ！」

百春は予めゼロから貰つておいた亡国機業特製のゲル状の応急処置用の止血剤を傷口に塗る。ヒューロッグを殺してはならないと肉体が突き動かされる。

「やめてくれ、惨めになる。私は死ぬと決めたんだ」

「だつたら、惨めでいろ。惨めでもいい、生き続ける事を考えろ。そうすれば、今よりもっと良い事があるはずだから」

「………そうか、それは私ではなく、クロエの奴に言つてくれ。彼奴は、背負いすぎた」

「お前も生きるんだよ！」

「………君に幸運がある事を祈つてるよ。ありがとう………そしてお休みだ」

ヒューロググが静かになる。

機体が解除されて、彼女の美しい顔が露わになる。その顔に後悔はなく、満ちていた。「……………虚しいだろ、虚しいだろうがアアアアアア!!」

慟哭がゴーストタウンに響いた。

## 第112話

「さあ、わたしの美しさの前に跪け。我は失敗作ではない。貴様らが失敗作になったのだ」

場所は変わり、時は遡る。

楽園の都市部、百春たちが戦っていた場所とはまた違うエリアでラウラとアドルフの兄妹は進化体との戦闘を繰り広げていた。

二人の眼前には空中を優雅に舞い、そして燃やしている鳥を模したISがいる。

搭乗者の名前は『フェニックス・マグマニオン』、自分の美しさに自信を持っている生粋のナルシストタイプの人間だ。

「見ろ、わたしの機体を。なんと美しことか。この腕と一体化した巨大な翼、何もかもを掴む鳥の腕、そして何よりもこのトサカ！啞々！啞々！完璧すぎて狂いそうっだ！」

空中で回転しながら自身の姿を敵に見せつける。

「面倒な相手だ」

「本当に……厄介だ。相性が悪いのか？」

フェニックと戦っているラウラとアドルフの二人は確な攻撃を当てられない現状に非常にイラついていた。

攻撃を当てようとしても、ソレは空間に投影された幻影。別の場所にいる本体からカウスターを貰ってしまう。

更にフェニックの機体は火炎も厄介で、その火炎の熱さに冷静な判断を失ってしまうこともある。

「アドルフ……お前も少し戦い方を自重しろ。いくらナノマシンがあると云っても限界がある」

ラウラは隣に並び立つアドルフを見る。

アドルフの乗っている機体は破損箇所が目立っている。

「仕方がないだろ、カウスター狙いで攻撃しないと本体にはダメージを与えられない。それに、コッチにはゼロのような一撃必殺がないからな。地道にやるしかないんだよ」

肉を切らせて骨を断つ、それがアドルフに浮かんだ作戦であったがこれがうまくいかない。

機体の性能は向こうの方が高く技術もある。

「だとしても、もう少しまともな作戦はないのか？」

「……………一つだけあるが、それは最終手段だ」

「なんだ？」

「彼奴らと同じように俺たちもコアを体内に埋め込む。彼奴らができて、俺たちに出来ない理由はないだろ？」

「それはなんとも無茶苦茶だな!!」

飛んできた火炎弾を躲して、二人はフェニックに向かう。

「無駄なことだ!」

フェニックの姿が空中に無数に投影される。それら全てがISのセンサーに反応する超高性能の空間投影。

加えて高速で動き回っている。

アドルフが投影されたフェニックの群れの中に単身突撃する。

「マルチロックオン」

空間に投影された映像目掛けてアドルフは複数同時にロックオンする。

機体に取り付けられた全ての遠距離武器からありとあらゆる弾丸が撃ち出させれる。

弾丸は次々と貫いていくが未だフェニック本体を捉えることができていない。

貫けば貫くほどフェニックの数は増えていく。

だがいくら撃つてもフェニックの実体を捉えることが出来ない。機体の中にある残

弾が次々と減っていく。

焦りが生まれる。

この場で勝負を決めたいアドルフはフェニックの実体をあぶり出すことに精を出している。

「アドルフ、後ろだ！」

ラウラの声が響いた。

背後から機体の反応、ソレは間違いなくフェニックの反応。

この機会を逃すわけにはいかないと二人は集中する。

アドルフの真後ろからフェニックが攻撃を仕掛ける。火炎を纏わせた翼でアドルフの首を狙う。

アドルフの機体に絶対防御は積まれておらず、この一撃は間違いなく致命傷を与えることになる。

ソレは避けねばならない。

「ラウラー！」

「わかつてる！」

無駄な指示は一切ない。

アドルフの背後に現れたフェニックに向けてラウラがISに搭載されてあるAIC

を発動して、機体を束縛する。

空中でフェニツクの動きが止まる。

アドルフは銃撃を停止させて、空中で反転して近接戦闘用の得物を構える。

狙うは敵の急所、一撃必殺の決め手を持たないアドルフは確実に殺すためにそうするしかない。

狙うは心臓、真正面から一撃。

——だが。

(……………違う)

アドルフは違和感を覚えた。

ソレは長い間戦い続けたことによつて手に入れることのできた経験に基づく直感と言えらるだろう。

アドルフの勘が目の前にいるフェニツクを否定している。アレは違うと教えてくれる。

「ラウラー！解け！ソレは違う！」

アドルフは叫ぶ。

しかしソレはラウラーに届いたが、彼女は意味が理解出来ずにA I Cを解除しなかつた。ここでフェニツクを逃がせば、次はないと思っっているから。



「……ッ！」

そして何時の間にかラウラの背後にフェニックが迫っていた。今度は紛れもない本物であると勘が告げる。

ラウラはそれに気づいていない。A I Cを初登するデメリットとして周囲への注意が散漫になってしまふからだ。

「させるか！」

アドルフは機体にかかっているリミッターを解除する。本来ならばフェニックに確実にトドメをさせる時に使うべきだったとアドルフは思っているが、この場合はもう仕方が無い。

跳ね上がった機体性能はアドルフの肉体を容易く傷つける。機体に振り回されないようにアドルフは意識を集中させる。

超高起動性能により、A I Cの網を掻い潜りラウラに接近する。

そしてシユバルツェア・レーゲンに備え付けられたレールガンを引きちぎり、ハンマー代わりにフェニックの頭部を殴りつける。

「ガアッ!？」

予想外の一撃にフェニックは怯む。

そしてソレをアドルフが見逃すわけもなくレールガンを投げ捨てて連続攻撃を叩き

込む。順番は無茶苦茶だがここでケリをつけるようだ。

休む暇なく攻撃を叩き込み続ける。

フェニックも炎翼で応戦するが、アドルフはソレに関しては致命傷になるであろう攻撃だけを防ぎ、残りは最小の威力になるように装甲で受け止めている。

だがそれと共にアドルフの纏う装甲が破損する。

「低性能風情が!!」

両の炎翼がアドルフの首を狙う。

「舐めるな!」

アドルフはソレを両手で受け止めて、両脇に抱えこんで地面に向けて自由落下を始める。

「アドルフ!死ぬ気か!?!止まれ!」

アドルフが自分ごとフェニックをあの世に道連れしようとしているのをラウラは気づいた。

「任務くらいは達成してみせるさ」

落下速度があがり、勢いが増す。

「離せ、醜悪者!!」

「貴様はここで殺す。最低でもそれくらいはしてやるさ」

覚悟は決まっている。拘束する腕に力が入る。

「ブレイメン・サンセット!!」

閃スープレックスによく似た体勢で二人が地面に落下した。

だがアドルフは硬いアスファルトに直撃する寸前に肉体にかかる僅かな違和感を覚えた。

ソレが何なのかはすぐに理解することができた。

地面に直撃し、両者地面に転がる。

「何しやがる、ラウラア!」

アドルフがああの時感じたのはAICによる束縛の感覚、それのおかげでアドルフは死ななかつたが、逆をいえばフェニツクに致命傷を与えることはできなかった。

「死にいく馬鹿がどこにいる! 兄弟を殺して生きた命なら、大切にしろ!」

ラウラはこの場になって、任務よりも兄弟としての情を優先させてしまった。ソレは彼女にとって良いことなのか、悪いことなのか、見る人によって変わるのであろう。

「……そうか、そうだな」

妹にそんな事を言われるとは思っていなかったアドルフは衝撃を受けた。

「この、この——」

フェニツクが立ち上がる。

肉体から火炎が発生している。ソレは先ほどよりも熱く、激しい。

「劣等生物ガアアアア!!!」

フェニツクは二人に向けて無数の火炎弾を放った。

「私の美しさを傷つけた事を後悔しろ!」

二人に襲いかかる火炎弾、ラウラは絶対防御の使えないアドルフの盾になるがそんな事を許せるほどアドルフは気弱ではない。

ラウラの背中を掴み、自分の背後に隠す。

最大迄開放した機体性能を利用して迫り来る火炎弾を呼び出した盾で弾き続ける。

だがそれでも防御が追いつかず機体が破壊され続ける。

「アドルフ、やめろ!」

「黙ってる!」

そして、火炎弾を全て捌ききった後には大破したアドルフの機体が残っていた。

「ああ……」

アドルフがとうとう膝をつき、崩れ落ちそうになったところをラウラが支えた。

「無事か?」

「ああ、何とかな……だが、これは困ったな。本当に最終手段を取るしかないようだ」  
そう言つてアドルフは自分の機体からI S コアを抜き取った。

「こんな事はしたくないのだがな、信じていいんだな」

アドルフの持つＩＳコアが返答するかのように、仄かに輝いた。

「……待て、止めろ。余りにも無謀だ」

「だがしなれば、無駄死にだ。それはしたくないだろ」

ラウラを振り払い、アドルフは一人で立つ。

確実に相手を殺すために選択し続ける。その結果がこれだ。

「……わかった。お前がやるなら、私もやろう。それが、遺伝子強化体としての務め、兄さん一人は地獄に連れていかないさ」

ラウラもコアを取り出した。

「……後悔するなよ」

「しないさ、元々試験官の中から生まれたんだ。こう思えるようになれたんだ。悔いなんてするものか。冷たい試験官の中で生まれたんだ。最後は熱くいたいさ」

二人は体内の中にある多機能ナノマシンの性能を限界ギリギリまであげる。そうでもしなければ心臓にコアを突っ込んだ瞬間に死んでしまう。

「ヤアアアアア!!」

胸に埋め込まれたＩＳコアが心臓を飲み込む。痛覚があつたのかもしれないが、脳が無意識のうち全てを遮断してくれた。

もしそうでなければ今頃痛みで気絶していたに違いない。

ナノマシンがより一層活発化する。限界まであげたはずなのに、コアの影響からか性能が引き上げられているような気がする。

機体と己が一体化していくのを感じる。

こんな無茶苦茶、この二人にしかできない。

「これは、手が遅れたな！」

今まで静観していたフェニックスが二人に向けて火炎弾を放つが、ソレは二人を守るように現れたエネルギーの壁に阻まれた。

二人は非常に運が良かった。

何故なら普通にこんな行動をとっても機体は進化しない。

だが今回は事情が違う。

彼らの周囲にあった強烈な自我を持った『始まりの五つのコア』の影響で、ソレラもまた目覚めてしまった。

というよりも強引に引き上げられてしまったというのが正しいのか、それはよくわからない。

今言える事は、ソレラもまた進化したという事だ。

光が収まる。

そこに現れた新たな I S。

シユバルツェア・アプグルント

「黒の深淵」

イルズイオーン

「幻影」

黒を基調とした二機の I S。その性能の高さを、二人は全身で受け止めている。

「なんだ、それは。そんなモノは美しくない。美しさが足りないのですよ!!」

フェニックスが再び周囲に分身を映し出す。その数は先ほどよりも多く、夫々が独立した動きで飛び回っている。

二人はその動きを目で追いかける。

「……やれるな」

「ああ、任せておけ」

ラウラは一歩前に出ると、足を広げて構えを取る。

生まれ変わったラウラの I S の特徴は両肩に付けられた巨大な砲身だろう。今までは片側だけだったのが両側に、さらに動きやすいように稼働領域もあがっている。

そして何より撃てる弾丸の種類が増えた。

「A I C発動！」

突き出したラウラの両手からA I Cが発動される。今までは右手だけだったのが両手に、さらに発動範囲まで広がった。

A I Cの網がフェニックを絡み取る。

「エネルギー砲……」

両肩の砲身にエネルギーがたまる。今回は敵が複数いるため拡散砲撃に切り替えている。

「発射」

両肩から撃ち出されたエネルギーの波はフェニック達を飲み込み、本体の居所を露わにさせた。

「おのれ、おのれ」

エネルギー砲の直撃を受けたフェニックは運良くA I Cの範囲外まで飛ばされた。

「余所見していいの？」

その声の直後、何時の間にか背後にいたアドルフにフェニックは蹴り飛ばされた。フェニックはアドルフが蹴りをいれるまでその存在に気づいていなかった。

それはまさしく『幻影』、スピードもパワーも今までとは比べ物にならない。



その姿はまるで忍者のようだった。機動力に長けた見た目に相応しく、速度でフェニックスを圧倒し始める。

元々ゼロと肩を並べられるほどのアドルフの格闘術の技量が、ソレを再現できる程の高性能の機体に乗る事で高い力を発揮している。

動かそうとするのではなく、機体が思ったように動いてくれる。

地上に引きずり落とされたフェニックスに対してアドルフは一気にかたを付ける為に連続攻撃を仕掛ける。

フェニックスも反撃を仕掛けようとするが、アドルフの反応速度の前に全てが防がれてしまい、カウンターを貰ってしまう。

「ラウラー！」

フェニックスを蹴り飛ばして、ラウラーに渡す。

「任せろ」

ラウラーが手に備え付けてあるプラズマブレードを起動する。プラズマブレードは激しく赤色に発光する。

「ベルリンの赤い雨」

乾坤一擲、激しい赤の一閃。

フェニックスの片翼を切り落とした。

「アドルフ！」

蹴り飛ばしてアドルフの元に返す。

「行くぞ！」

アドルフの右足に赤いエネルギーが宿る。ソレは黒零にも付けられてある装備の一つ、威力だけなら此方の方が高い。

スラストターを利用して高速で回転を始める。

独楽のような回転の状態で、迫り来るフェニックスに向けて飛び回転蹴りを放つ。

「ブロッケン の 帰 還 ！」

残ったもう一つの翼を切り裂いた。

「まだまだ、まだ私は美しい！」

両腕を失ってもフェニックスは止まる事がない。嘴を開けて巨大な火炎球を作り上げる。

機体が限界を迎えているのか、ヒビ割れ始める。

「美しく、美しく!!」

火炎球が撃ち出される。その熱は周囲にある建物を溶かす。

「ココは私に任せろ。最高威力だ」

ラウラの両肩に備え付けてあるエネルギー砲がエネルギーを蓄える。

「収縮、一点放出！」

両肩から放出される圧倒的な量のエネルギーが火炎球を飲み込んでしまった。

圧倒的な破壊を前にしてもフェニツクが折れる事はない。

「まだまだ、まだ私は戦える。折れる事は美しくない。だから私は戦い続ける。この身が美しくある為に！」

フェニツクは美しさに固執する。その理由は二人にはわからない。そして興味がない。

「そうか、ならば死ね」

何時の間にか、フェニツクの真上にアドルフがいた。手には小太刀。

「単一能力——『静かなる終焉』」

世界から音が止まった。

フェニツクが自分の死に気がついたのは、首裏に小太刀が突き刺さってから数秒後のことであつた。

体にしみ込むように死が体の中に広がって行くのを感じる。

恐怖はない。ただ回避不可能な現実が目の前に突きつけられている。拒むことはない、穏やかな心で事実を受け止める。

アドルフの発現させた単一能力『静かなる終焉』、ソレは黒零の

零落極夜に似ているが違う。

零落極夜は絶対防御やエネルギーを黒色に塗りつぶすように破壊する。それに対して『静かなる終焉』は絶対防御を透過する。

死という結論を与えるのは同じだが、過程が違う。

「そうか……死ぬのか」

フェニツクの肉体から力が抜けていく。

「私は美しく散れるかな………」

フェニツクは動かなくなった。最後まで美しく続けようとした。

それでも、死んだ。

「……………静かに眠れ」

## 第113話

「さあ、もう終わり？」

「まださ、まだ私は戦える」

「ここでも一つの戦いが終盤を迎えてようとしていた。

二対二の激しい戦いであつたが、ある出来事がきっかけで戦局は大きく片方に傾いてしまった。

それはI Sの進化。

「でも、もう終わりよ」

誘宵アリスは進化した自身のI S『アイリス・エクストリーム』の機能をフルに活用しながら、目の前にいる敵を追い詰めていた。

「まだねえ、死にたくないのよ。私はね、身が焦がれる程の恋をしていたいの」

赤いカブトムシのような生体同期型I Sを操るのはヘラクリウス・アンカトウス、少し男のような名前ではあるが列記とした女性だ。

名前はコードネームのようなモノ、そこに性別は含まれていない。

最初はアリサと互角に近い勝負を繰り返していたが、進化したアイリスの前に一方的にやられた。

「恋をして、愛して、そして溺れてみたいの。誰かを強く思い、そして私の全身全霊を受け止め、捧げたいの」

ヘラクリウスは立ち上がり、自分の通常の両腕とカブトムシ型に相応しい左右一本ずつあるサブアームで構えを取る。

突き刺したりつかむ事が得意そうなクロウ状の手がアリサを狙う。

「だったら私はもつと負けられないわね。なにせこの体には恋と愛が詰まっているから、故に負けることは許さない」

アリサの両手に双剣が握られる。

この武器に名前はない、というよりもこんな武器のデータはアイリスという機体の中には入っていない。

では何故今使っているのかというと、アリサとアイリスがこの場で創り上げたからだ。

これこそがアイリスの手に入れた新たな能力『創造』、アイリスの拡張領域の中で武器を創り上げる。

ソレは剣だけではなく、銃などの遠距離用の武器を創り上げることも可能である。

故に戦い方に限りはない。

問題があるとすれば本人の実力。

「ごや」

「愛をかけて、恋の為に、溺れる程に、零れる程に」

勝負、四本の腕から放たれるエネルギーの弾丸をアリサは躲す。その動きに無駄は感じられない。

距離が詰められる。

両者ともに構えを取る。

流れるような動きの双剣を上段の両腕が受け止める。

そして空いた下段の両腕でヘラクリウスが殴りにかかる。

「そんなの」

アリサは双剣から手を離して素早くヘラクリウスの腹に蹴りを入れ、その反動を利用して後方に下がる。

「三叉撃」

アリサは新たに三叉撃を作り上げる。

荒れ狂う大海を征するかのように、三叉撃を振り回す。刃にエネルギーを纏わせて勝負をかけた。

上段右腕を切り落とし、怯んだ隙に左腕も切り飛ばした。

「これで、決めるー!」

三叉撃の三つの刃が一つに重なり、巨大な一つの穂を作り上げた。

エネルギーの刃による一撃、狙いは敵のコアのある心臓。躲す暇を与えない、次で終わらせるとアリサは決心している。

スラストターの加速を利用したアリサの出せる最速の一撃、ソレはヘラクリウスも反応が遅れてしまった。

ヘラクリウスは死を思い、悔いが生まれた。強い『セイ』への執着心、まだ死ねない、生き続けなければならぬとより一層強く渴望した。

「……………」

だが三叉撃は心臓を貫く事はなかった。心臓の目の前で刃は止まっている。

「どういうつもりだ? 情けか? そんなモノ——」

「気が変わったわ」

アリサは三叉撃を収縮して、ヘラクリウスに背を向けた。攻撃する気配はない、完全に背後に隙を晒している。

「そんなに愛を知りたいなら、知ればいいじゃない。その体で最後の最後、果ての果てまで愛を感じなさい」



振り返る事はない。

「その為の手助けくらいなら……あまり使いたくないけど、家の権力使ってあげるから」

「……ありがとう」

「感謝しないで。貴方が本当に私や一夏くんの敵になったら、その時は息の根を止める……だからそうならない様に全力で愛を見つけて見なさい」

馴れ合うつもりはあまりない。最低限の情を見せている。

何故そんな事をしたのかはアリサにしかわからない。

「あれ？そつちももう終わったの？」

声が出た。

アリサが声をした方向を見ると、ティファニアと進化体の最後の一人がいた。

何故かは知らないがティファニアが進化体をおぶっている。

ティファニアのISであるシエルも今回の戦いで進化しており、名は『シエル・エクストリーム』。

新たな能力として武器に属性を付与する『チップ』という能力が与えられた。

しかし、戦闘はまたいつの機会に。

「………何で？」

状況が飲み込めず、言いたい事がつもりに積もった結果、アリサは凝縮した一言を

放った。

「いや、なんか、戦ってたら、結果として、意気投合した」

「理屈がわからないし、理解が追いつかない」

先ほどまで殺意バチバチで殺しあっていた筈の四人なのだが、何時の間にかのほほんとした空気になっていた。

「なんでおぶってるの？」

アリサの目がティファニアの背中で作る気のなさそうにしている進化体に向けられる。

「戦ったら疲れたみたい。もともと怠惰な性格してるみたい」

「すまない、妹が迷惑をかけて」

ヘラクリウスは非常に申し訳なさそうな顔をしている。

「あ、お姉ちゃん。お疲れー」

「クワガスト、いい加減に降りなさい。少しは自分の力で歩きなさい」

クワガスト・アンカトウス、進化体の最後の一人でヘラクリウスの妹。

姉が赤いカブト虫型のISなのに対して彼女のISは青色のクワガタ虫型のIS。

姉とは違って非常にやる気がなさそうだ。

「降りなさい」

「えー、わかった」

渋々といった様子でクワガストはティファニアの背中から降りた。だが直ぐに地面に座り込んだ。

非常にやる気がなく、眠たそうだ。

「大変そうね」

「やはり、そう思うか」

殺し合いをしていた雰囲気はどこに行つたのか。そこには年相応の女子達がいた。

時を同じくして、太平洋上のとある沖合。そこに篠ノ之東の秘密のラボ圏潜水艦があつた。

ゼロからの指示を受けてエムとオータムの二人はこの場所にやってきていた。

目的は篠ノ之東がエムの為に作り上げたISを回収するためである。

「本当に此処にあるんだろうな」

「ゼロが言ってるんだ。間違いない。だが……何処にあるんだろうな」

格納庫に入る事に成功した二人だが、肝心のISが何処にあるのかは検討がつかない。電気のろくについていない薄暗い船内を探索するのは骨が折れる。

そう思っていたのが、一人でに室内の明かりが灯される。

そして。

「……いや、わかる。感じる。呼んでる。誰かが、誰かが私を呼んでる」

エムは誰かを探すかの様に周囲を見回し始めた。だが周りにはオータムを除いて誰一人いない。それでも、エムはこの場に誰かがいると確信している。

「……コツチだ」

エムは声のする方に走り出した。

「おい、待てよー」

オータムも後に続く。

呼んでる。

声のする方向に進んで行く。進めば進む程声が大きくなってくる。

そしてエムとはある部屋に辿り着いた。

「此処が………貴方が呼んだの？」

その部屋には一機のISが鎮座していた。自らを使うに相応しい人間が来るのを

ずっと待ち続けていた。

『蒼天』  
アオソラ

それがこの機体の名前。

篠ノ之東と亡国機業が合同で開発した第三のIS。

使用コアはN o . 0 0 2

最後の始まりが動き出す。

## 第114話

海上都市楽園、その場所の中心に聳え立つタワーの中に今回の事件の首謀者であるクロエ・クロニクルはいた。

「ああ、束様……」

恍惚感溢れる表情で、クロエは玉座の様なモノに座る籐ノ之束の亡骸を愛おしそうに抱きしめた。

束が座る玉座の背後には巨大なタンクが置かれてある。

「私は、私は知りたいたいのです。自分が生きる意義を、自分がこの世に生まれた意味を……だから、その為に、私は貴方を捨てなければならなかった」

クロエの目には涙が出ていた。

「唾々、仲間が倒されていく。生まれた事が罪だと言われている。断罪、また断罪………  
そして此処にも、来る」

クロエが惜しみながら束から離れる。

その直後、扉が破壊され黒零を纏ったゼロが室内に侵入してきた。

「……やはり、貴方でしたか」

「おう、今回の事件を終わらせにきてやったぜ」

ゼロは右手をクロエに突きつける。既に殺す準備は完了している。

だが一瞬、ゼロの意識がクロエから逸れてしまった。意識が向けられたのは東の亡骸、ではなくその後ろにあるコンテナ。

より詳しくいえばその中身なのだが。

<sup>アナザー・ゼロ</sup>  
「No. 1000……」

箱の中にNo. 1000が嚴重に閉じ込められている。

「へえ、よくわかりましたね。今はああやって黒鍵の催眠能力をあげる為にしようしています」

クロエの使っている黒鍵のコアでは流石に世界全体を覆い尽くし、人を眠らせることは不可能である。

しかし、No. 1000の力を使うことによってそれを可能にしている。  
「この力があれば、私は……できる」

クロエが自身の愛機である黒鍵を身に纏う。

「……何故こんな事をした？」

「気になるのか？」

「いや、ただ何となくだよ」

ゼロは大剣『零』を呼び出して床に突き刺した。

「以前も言ったさ、私ら自分が生まれた意味を、これから生きていく意義を知りたいのだ。もしなければ、此処までやってきた意味がないだろ」

黒鍵の装甲の一部を泥が覆う。その泥にゼロは見覚えがあった。

それは以前IS学園で戦った相手であった。

「VTシステムか……腹の立つモノを使ってくれるな」

大剣を床から引き抜いて肩に担ぎ直す。

VTシステムの研究を行っていた場所は篠ノ之束が破壊した。その際にクロエは奪うなりなんなりしたのでだろう。

「ご名答、だがその改良品さ。意識を奪われることは決してない……なあ、お前は私に教えてくれるのか？」

「んなもん、自分で考えてみるや」

ゼロが大剣を構える。

「そうか、ならば倒して、この計画を全て完了させて、確かめてやる」  
クロエが泥で作り上げた雪片を構えた。

煮えたぎる様な熱い戦意とは真反対に空間は静かに冷え切っていた。

「じゃー」



クロエがゼロに向けて突撃する。雪片を構え、完璧に模倣した織斑千冬の力を使ってゼロに襲いかかる。

「……一言言っておくぞ」

クロエが迫り目の前にきた時、ゼロは動いた。

### 零落極夜

究極の一振りがクロエを吹き飛ばした。真つ正面からたった一振りでVTシステムを破壊した。

弾き返され、No. 1000の封じられているコンテナまで吹き飛ばされたクロエ。

「織斑千冬はもう少し強いぞ」

それは昔から見てきたゼロだから言える言葉。そして自身の力で撃ち破った相手であるからこそその言葉が出せた。

「ク……クオハア！」

コンテナに打ち付けられた衝撃から血を吐き出すクロエ、VTシステムは零落極夜の  
一撃で破壊されてしまったのか元の泥になって床に零れ落ちている。

「もう、終わるか」

零落極夜を解除して、零の剣先をクロエに向けて突きつける。

「終わる？ 否、否！ 否！！ 否！！ 否！！ 終わるか、だと？！ 終われない！ 終わらない！」

ゼロの言葉にクロエは激しく反応してしまう。拳を硬く握りしめて床を殴り、闘志をもって立ち上がる。

機体は一撃で半壊、元々戦闘用の I S ではない黒鍵では完全に戦闘に特化している黒零と渡り合う事は不可能。

「私はよく知らない！ 此処で終われば全てが無に消えてしまう。だからこそ、私は戦う事を選ぶ。今此処に再度宣言する！」

意思がある。

意地がある。

故に戦う。

『力を貸してやろうか？』

甘い、脳髓の全てを溶かしてしまいそうになってしまう毒の声。

それは世界ではなく、二人の中に広がった。

「これは、No. 10000か？」

『そのようだな、彼奴が目覚めたようだ』

一夏とNo. 000は心の中で会話を行う。

『マズイな、あのコンテナごとN.O. 1000を破壊しろ』

ゼロはエネルギーを右手の指先からコンテナに向けて放った。

『させると思うなよ』

コンテナが内側から破壊され、漆黒のエネルギーでできた翼が飛び出す。翼はゼロの放ったエネルギーを容易く受け止める。

「さあ、力を貸せ。知る為の力を、変える為の力を、私が生きる証明の為に」

コンテナの内部からN.O. 1000が飛び出した。

通常のISコアとは違い黒い光を放ち、漆黒のエネルギーで作り上げた翼を持っている。

その姿はまるで破壊の天使。

この世に顕現したからには全てを破壊し尽くす。

「もつと、もつと力をオオ!!」

『よかろう。ならばせめて、我を楽しませろ。余す事なく力を求めろ、さすれば我は貴様の欲を全て満たしてやろう』

黒鍵の中にN.O. 1000が入っていた。

黒鍵に異変が起こる。

装甲が内側から湧き出て来る力に耐え切らなくなってきたのか徐々に胎動して

いく。

小さな胎動は時間と共に大きくなっていく。

「己の肉体を満たす為に求めるモノがいた、暴食」

一つ。

「ただひたすらに己の内から溢れる怒りを向けた、憤怒」

二つ。

「自分がないモノを持つ相手を妬んだ、嫉妬」

三つ。

「己の全てを優れていると思い他者を見下す、傲慢」

「自らの肉体を焦がしてしまうほどの愛と快楽を求める、色欲」

五つ。

「己の力ではなく他者の力によって歩みを求める、怠惰」

六つ。

「自分がないモノを求めて手を広げすぎた、強欲」

七つ。

「今此処に、我が身に大罪は七つ集う。この身は器、大罪を飲み干す為の器」

黒鍵からエネルギーが溢れ出し、変化が始まる。あつという間にエネルギーが黒鍵を

包み隠し、この世から分断させる。  
「我が名は、ワールド・ページ黒鍵・セブン・デッドリーシン七つの大罪」

## 第115話

降臨した破壊の化身、四枚の大翼を広げて空中に佇む。

「アレ……………ヤバイな」

ゼロは相手の性能を自分の目で見て、今迄の経験を通じて精確に分析する。

結果は最悪、敵の力は先ほどの何倍にも膨れ上がっている。油断をしてしまえば一瞬で勝負をつけられてしまうのではないのかと思えてしまう。

指先に力が入ってしまう。嫌な緊張感が肉体を走る。少しの油断も許されない。身体中の神経全てがクロエに向けられている。

「コレなら、コレなら」

自身の内側から溢れ出てくる力にクロエは感嘆している。凶器と化した手を大きく広げる。

そして——クロエは世界から消え去った。

「……ッ!？」

ゼロにはその現象が理解できなかった。

確実に自分の目の前にいたはずのクロエの反応がレーダーから消え去り、そして肉眼でも確認できなくなってしまうた。

ステルス機能でレーダーから消えたのでも、超高速移動でレーダーの範囲外になくなったわけでもない。

間違いなくクロエはこの世から消え去ってしまった。

「な!? 何処……………ッ!？」

背中に悪寒が走った。

長年戦い続けてきたことによつて得られた勘がゼロの肉体を強制的に動かす。限りなく反射運動に近かった。

振り返りながら零を盾のように構える。

衝撃。

吹き飛ばされるゼロ。

「嘘だろ!？」

振り返った先にいたのは先ほど消えたはずのクロエがいた。

こんな経験今までに一度もなかった。

速いとか機動力が良いと言う話ではない。もしそうならばこんな事にはならない。速度によって何かを傷つけるはずなのに、周囲には傷一つない。

「冗談だろ……こんなの、こんなん！」

ゼロの頭の中には二つの可能性が浮かんできていた。だがゼロは今すぐにでもその二つの考えを否定したかった。否定しなければ正気で要られそうになかった。

「……時間停止」

時間停止、時間を停止させたから急に現れたように感じている。だがその考えはすぐに否定した。

何故なら時間を停止できるなら停止させてる間に攻撃を行えば良いはずだ。それなのにしない。

つまり答えはもう一方の方。

「瞬間移動か！」

瞬間移動ならば消えた理由も攻撃しない理由も説明がつく。

目の前からクロエが消え去り、真横に現れる。

そしてゼロは攻撃を防ぎながら吹き飛ばされる。

「オーバーテクノロジー過ぎるだろうが!!」

防戦一方、攻める方が得意なゼロが一方的に押し込まれている。だがそれでもゼロは



巧みにクロエの瞬間移動に反応している。

今までの経験が全く通用しない相手ながら、自分の全てを信じて攻撃を防ぎ続ける。壁を突き破って屋外に投げ出されるゼロ、スラスターを使って高速で地面に向けて移動する。

その間もクロエは瞬間移動を行いながら距離を詰めてくる。

「ははー！」

クロエが瞬間移動ではなく単純なスラスターでの高速移動でゼロとの距離を詰めた。

ゼロは左手で零を持って突き刺しにかかるが瞬間移動で躲される。

その事はゼロも予想済み、だからこそ次にかける。

背後に向けて攻撃腕を構える。

その直後クロエが射線上に姿を現した。

「大当たり！」

ゼロは躊躇いなく零落極夜のエネルギーを放った。

クロエは攻撃が予想外だったのか慌てた様子でその攻撃を躲した。

一か八かの賭けには勝ったみたいだが、攻撃は躲されてしまった。

「もつと、もつと力をオオオオオオオ!!」

攻撃されたのがよほど癩に触ったのか怒号を上げながらNo. 1000に力を求め

る。

そしてそれに呼応するように黒鍵が不気味に光を放つ。

「少し、キツイか？」

黒鍵の今の性能は黒零の性能を凌駕している。

そのため技量で優つていても勝つ事は困難になる。

だからゼロとしては誰かが応援に来て欲しいというのが正直な気持ちであった。

負けたくないという個人のプライドは今は何処かに捨て去らなければならない。優

先すべきはより安全な状態での任務の達成。そう教え込まれてきた。

「……いや、必要ないみたいだ」

ゼロのセンサーに一つの反応がある。それは二人に向けて超高速で接近してきている。

「なんだ、まあまあ助かるよ」

少しだけ嬉しそうな声色でゼロは呟いた。

「兄さんは素直じゃないね。正直に喜んだらどうだい？」

助っ人にやってきたのは織斑百春、そしてその愛機『白式・真』。

黄金に光る大翼を携えながら今見参。

「他の奴らはどうした？」

「いつでも戻れるように撤退準備を始めてる……箒たちが戦えそうにないからね。ボー  
デヴィツヒさんに指揮を任せてる」

「そうか……少し見ない間に立派になったな。一安心だ」

「……ありがとう。今なら兄さんにも追いつける。二人で倒そう……いや、止めよう」

二人は空中で並んで得物を構える。ゼロは零を、百春は真花を。

二人とも姉の背中を見て育ってきたが、今はもうその憧れから巣立ち自分の力を持つた。

「相手は瞬間移動を使えるから、間合いは意識するな。常に相手は自分の周辺にいると  
考えろ」

クロエに対するアドバイスを百春に送る。

「瞬間移動……なら!」

白式の黄金の大翼が唸りを上げる。

「お前……」

ゼロも百春が何をしようとしているのかに気づいた。

「行くよ、シロノ」

仮面の奥で百春は笑った。

「二人になったところで!」

クロエが瞬間移動を行う。

そしてそれに僅かに遅れて百春もこの世から飛んだ。

「……嘘だろ」

百春が行ったのは間違いなく瞬間移動。衝撃的な光景であったが、これ以上無駄事は考えていられないと思ひ戦いに集中する。

空中で激しい瞬間移動合戦を繰り返す二機、クロエの動きについていけるあたり百春の技量は確実に上がっている。

ここ最近のゼロによる厳しい特訓のおかげかはわからないが、百春の実力は飛躍的に昇して、今は国家代表と肩を並べる事ができるほどになっている。

今のゼロにできる事といえば二人の動きを可能な限り予測する事だけだろう。

「ならばこっちもー」

ゼロは二人に追従する。

戦いは激化していく。

楽園の市街地で始まった戦闘は次々と周囲の建物を破壊していく。

戦えば戦うほど黒鍵の性能が上がっているように感じてしまう。

最初は二人がかりで押ししていたが、徐々にクロエの力が増してきているせいか押され始める。

「リアー！」

ゼロが零をクロエに向けて振るい、クロエが瞬間移動で躲す。

「そっ！」

そこを百春が背後に瞬間移動を行って真月で切りつける。

……だが。

クロエは更にもう一度瞬間移動を行って攻撃を躲した。

「嘘だろー！」

瞬間移動を行うにはインターバルが必要になる。

百春はその時間をクロエの今までの行動から測っていたのだが、クロエはその時間を超えた。

確かに百春が計算した時間は正しかったのだが、クロエがそれを超える進化をしてしまったのだ。

大翼から降り注がれる大量のエネルギーの弾丸の雨、二人はそれぞれ盾を使って凌ぐ。

「コレは、少し——」

「面倒だな」

二人は背後を取られないように背中合わせになりながら戦う。

相手が瞬間移動を行ってもすぐに反応できるように、相手を信頼しきっている。

「勝てる手段はある?」

「あれば今頃実現させている。先ずは、この攻撃を防ぐ。勝機はその先で見つけて見せる」

クロエの放った無数の球体状のエネルギーを捌き続けながら、二人は地面に降り立つ。

四方八方から瞬間移動されるよりかはマシだと判断したからだ。

「これなら、どうだ!」

クロエの両手に水色のエネルギーが出現する。ソレは意識をもっているかの様に不気味に蠢いている。

投げつけられる二つのエネルギー、空中でカブトガニの様な姿に変えて二人に襲いかかる。

大口を開けて二人を狙う二匹のカブトガニは挟撃を仕掛ける。

「おい!」

「わかってる!」

二人は夫々単一能力を発動させてカブトガニを切り落とす。

そしてこのタイミングを狙ってクロエが瞬間移動で間合いを詰めた。

「喰らえ！」

エネルギーを纏った爪が百春を狙う。

だがそんな事は百春も事前に察知している。爪が振るわれるよりも早く瞬間移動を行ってクロエの背後を取る。

ゼロはその瞬間、自身の感覚を加速させる。次にクロエが行うのは確実に瞬間移動、クロエの方が短い感覚で行う事ができるので百春はもう使う事が出来ない。

今までの全ての戦いによる経験がゼロに答えを示してくれる。それは勘をこえた説明不可能な感覚であった。

「わかる」

体が表示された答えの為に動く。

右手にエネルギーを溜め、虚空に向けて構える。

「わかる！」

右手の指し示した場所にクロエが出現した。

「なっ!?!」

クロエは突きつけられた右手を見て、驚愕した。

瞬間移動で逃げようとするが発動まで時間がある。

それを逃がすゼロではなく、躊躇いなく零落極夜の砲撃を行った。

クロエは咄嗟にスラスタ―を使って直撃は免れたが、大翼の一つを失ってしまう。

「ナメルナー！」

大翼は直様復活した。No. 1000の回復能力はどうやら並のモノではないらしい。

大翼を広げて空中を高速で飛び回るクロエ、ソレを百春とゼロの二人は連携攻撃をし掛けて互角に戦いを繰り広げていく。

ソレでも戦えば戦うほどクロエの力が増していく。底なしの壺から力を引き出している様な感覚であった。

「ちよつと、不味くない？」

「元から、だろうが！」

百春が瞬間移動でクロエとの距離を詰め、ゼロが予知に限りなく近い直感で二人に追従する。

ゼロの動きは機体の限界ギリギリを攻めている。黒零の機体性能は並のISと比べれば抜きん出ているが、今ここにいる他の二機と比べれば劣ってしまうのが事実である。

機体性能が足りないからこそ、ゼロは身につけた技術でその差を埋めている。

ゼロの目は僅か先の未来を感じている。



その未来に追いつける様に自分の肉体を、機体を行使する。  
極限の動き、一切の油断がない。

だが――

ゼロの動きが突然鈍った。

(……唾々、そうなんだ)

ゼロの予知に機体がついていけなくなった。

(……………だが)

ゼロは身体中に力を入れる。機体とは即ち自分自身、機体の怪我は己の怪我。

「気張れやアアアアアア!!」

No. 000に対して櫓を飛ばす。

それに答えるかの様に黒零が僅かに光り、機能が全て回復する。

直ぐに戦線へと復帰、百春の加勢に入る。

「……………ん?」

ゼロは気づく、此方側に近づいてくる未確認の機体が一機ある事に。

「百春!三秒凌ぐぞ!」

「どうして!？」

「いいから!」

三秒、それが何を示しているのか百春には検討がつかない。だがゼロの言う事を素直に信じる事にした。

百春が瞬間移動を行い、クロエとの距離を詰め、クロエはそれに反応して瞬間移動を行うが逃げた先にはゼロが既に待機していた。

浴びせ蹴りでクロエを地面に叩き落す。

「こんなモノデエ!!」

クロエは空中で体制を立て直そうとする。

その時、一本の閃光が闇夜を貫いた。

センサーの範囲外からの超長距離射撃、クロエは反応する事が出来ずにその身で直撃を受けてしまった。

「何が?」

百春はまず真っ先に同級生であるセシリア・オルコットによる狙撃であると思っただけ、彼女ではこの距離の射撃は不可能だと思っただけ除外した。

「遅いな」

「無茶を言うな、コレでも最高速でやってきたんだ」

ゼロは狙撃手の正体に気がついている様だ。

「織斑マドカ、蒼天。参戦する」

ここ、楽園に全ての始まりが集まった。

## 第116話

「来たか、マドカ」

「え？マドカ？どう言う事？」

「兄さんたち、話は後だ。今はアレを倒す」

三人がこうして揃うのはいつ以来の事なのだろうか、もはや誰も覚えてはいない。

そしてこれからゆつくりと家族三人で仲良く談笑する時間も許されてはいない。

クロエから放たれたエネルギーの弾丸を躲した後、三人は夫々得物を構えた。

「一気に決めにかかるぞ！」

ゼロは二人に対して短期決戦を仕掛ける様に指示を飛ばす。

ゼロが乗り込む黒零は既に限界を迎えかけている。先ほどの段階で一度限界を迎えている。それを強制的に修復させたので、長時間の戦闘は不可能だ。

それに加えてN.O. 1000を取り込んだ黒鍵は今も性能を上げ続けている。覚醒したコアを使ったIS三機がかりといえど、長時間戦えば勝てるかどうかかわからない。

「了解したー！」

マドカが蒼天の装甲の一部である砲撃型ビットを分離させ、そしてエネルギーを反射させるリフレクトビットを呼び出した。

腕の一振りでもリフレクトビットが周囲に散らばっていき、マドカとクロエを複雑な線で結びつかせる。

「エム、俺と百春に対してリフレクトビットのデータを送り続ける。俺たち二人はその隙間を掻い潜る」

「わかった、任せて」

エムは蒼天専用の遠距離エネルギーライフル『快晴』を呼び出す。サイレント・ゼフィルスに積まれてあったスター・ブレイカーよりも射程は長く、連射性能も一撃の威力も高い。

「咲き誇れ、咲き狂え。数多の鳶に絡まり、終われ」

快晴そして二機の砲撃型ビットがエネルギーの弾丸を放ち、空中に散りばめられた無数のリフレクトビットがエネルギーを乱反射させる。

エネルギーは次々と撃ち出され、次々と反射を繰り返していくうちに空中に巨大なエネルギーの網を作り上げる。

網を作り上げる。

その網の形は一秒ごとに変化を続け、隙間はIS一機がギリギリ通過できる程敷かな

い。

「兄さん達、任せたよ！」

黒鍵の動きをエネルギーの網が阻害する。加えて一秒よりも短い単位で変化し続ける網は対処困難。

下手に瞬間移動を使えば移動した先でエネルギーの網が機体を焼き払う。

「行くぞ、百春！」

「ああ！」

ゼロと百春が網の中に突撃する。高速で変化し続ける網に対してエムから送られてくる情報を参照しながら完璧に対処してみせる。

ゼロは「零」、百春は「真花」を呼び出してクロエに攻撃をしかけ続ける。

一切の躊躇いを見せない。一切の油断も見られない。

「ナメルナー！ナメルナー！」

それでもクロエは押される事なく、両腕の爪で攻撃を捌き続ける。

エネルギーの網の直撃を受けながら、クロエは決してひるむ事などあり得ない。

己の願いを貫き通さねば、ここまでついてきてくれた仲間達に対して立つ瀬がない。

「私は、勝たねばならんのだ！」

黒鍵が不気味に光り、己と世界の間拒絶するかの如く不可視の壁を生み出してし

まった。

「これ、は!？」

「チャクラか!」

種さえわかつてしまえばどうという事はない。

ゼロは黒零に備え付けられてあるチャクラ発生装置を起動させる。

クロエが発生させたチャクラの壁の硬度は高い。ゼロも強い意思を以ってチャクラを発生させる。

ゼロとクロエ、それぞれのチャクラが真つ正面からぶつかり合う。

二つの拒絶の力が相手のチャクラと干渉を始める。混じり、拒み、やがて二つの壁は相殺を始め、消滅に移る。

「こ、これは!？」

クロエはゼロの自我が産んだ強烈な精神の壁に思わず気圧されてしまう。

それ程までに今のゼロはキテイル。

「ウオヴラアアアア!!!」

クロエの発生させた拒絶の壁をゼロは強引に両手でブチ開けた。

なんとういう力任せ。そこには卓越した技など存在せず、本能的な野生が道を切り開いた。

「そんな、馬鹿な!？」

あまりにも強引すぎる行動にクロエさえ戸惑っている。

「最大放射!一斉射撃!」

そしてその僅かな隙をエムがつく。

最大までエネルギーを溜めた一撃がクロエの背中を襲った。

三人は一気に勝負を仕掛ける。

このタイミングを逃してしまつたら次に勝てるタイミングはやってこない。

「一気に畳みかけろ!百春!」

「真・雪月花!」

真花、真月、真雪、進化する事で手に入れた三つの武器を一つに合体させて一つの武器、弓型の「真・雪月花」を作り上げる。

今の百春が放つ事ができる最大最強の一撃。

弓を引き絞り、限界ギリギリまで武器にエネルギーを蓄える。

ほぼゼロ距離から放たれた最強の一撃は黒鍵を圧倒的なエネルギーで飲み込んだ。

並のISであったならばこの一撃でケリがついている。

それなのに、黒鍵はエネルギーの激流を真っ向から受け止めている。

「こんなモノで、この程度のモノデハアアア!!」



凶悪で凶暴な黒鍵の両手が雪月花のエネルギーを引き裂いた。

「しょ……正気か？」

撃った百春は勝ちを確信していた。

だがクロエと黒鍵は百春の予測を軽く凌駕してみせた。

最大最強の一撃は凄い。クロエの中に勝ち筋が見えた。

小さな点は大きくなり、細い線はより太くなり、勝利という到達点への道筋が現れる。

「私が、私が生きる意味はわかるようになる！ 貴様らに勝ち、世界を見て、そして……理解するのだ!!」

ようやく、ようやくなのだ。

あと少しで手が届く。

だが。

「零落極夜」

絶望は突然突きつけられる。

悪魔はこの一瞬を狙っていた。

クロエが勝利を夢見た瞬間に『敗北』という現実を見せつけてきた。

クロエは慌てて瞬間移動を行おうとするが瞬間移動は発生しない。どうやら先ほどのエムの一撃で瞬間移動を発生させる為の機材がイかれてしまったようだ。

「歯ア、食いしばれよッ!!」

右腕に零落極夜を纏わせ、加えてチャクラでブーストさせた全身全霊の一撃。

容赦なくクロエの胸に叩き込まれたソレは彼女を地面へと引き摺り下ろし、地面に落下しても威力は消える事なく彼女を硬いアスファルトの道路に引き摺った。

「こんな、まだ、まだ負けられない! 私を信じてくれた仲間の為に、私は戦わなければならない!」

咄嗟に後ろに飛んで威力を殺しはしたが完全には殺せなかった。胸部装甲に僅かな罅が入っている。

「ヌアラアッ!!」

ゼロも地面に降り立ち、クロエに全力でタックルを喰らわせ、揉みくちやになりながら地面を転がる。

そこから先は野蛮だった。

武器を捨て、両拳を握り固めて全力で殴り合う。

二人とも飛び立とうとはしない。

両足で地面を強く踏みしめながら、拳を振るう。

「何故、私は生まれた？何故だ。あんな狭い菅の中で、何故生まれた？教えろ、教えろ」  
「知るか！」

殴りあいながら問答、頭に血が登っているゼロは今現在録な思考を持っていない。

「人間が生きる意味なんてなあ、簡単にわかつてたまるかよ！俺だってわからねえよ、俺だって聞きてえよ！わからねえよ！それでもなあ、生きていかなきゃいけねえんだよ！」

故に感情的になつてしまう。

「それなら、私はどうすればいい！私はどうやって生きていけばいい！」

クロエの拳をゼロは一切かわそうとはしない。彼女の主張を受け止めるように、全ての攻撃を胴体で止めている。

「ソレを、考えろ！」

「ウルサアアアアイ!!」

硬く握り締められたクロエの拳をゼロは優しく受け止めた。

予想外の行動にクロエの動きが止まった。

「わからねえなら、そんなに知りてえなら、俺が手伝つてやる。誰かを愛する為に生まれた。何かを発見する為に生まれた。何かを成し遂げる為に生まれた。意味なんて幾らでもあるんだよ……だから、止まれ！」

「……………なんで、なんでそんなに、私に語りかけてくれる。私は酷い事をしたのに」

「あの人に……東さんに言われたんだよ『頼む』ってな。あの人はお前を思っていた。だから俺はお前の為に行動を起こす。あの人が思ったお前を信じて！」

理由なんてモノはそれだけで良い。

「良い……のか？」

「まあ、流石に毎日お前に付き合うのは無理だな。俺を愛してくれる女性がいるからな」  
ユックリとクロエの手がゼロの手から離れ、硬く握り締められていた拳は優しく解かれる。

「そう……か」

黒鍵のエネルギーで作られた大翼が霧散する。

クロエはもう戦う気力がなくなったのだろう。彼女の気配から闘志が消え去る。

それはゼロも同じ。

「……………ごめんなさい」

「なんで謝るんだ？」

「だって、こんな事をしてしまったから。世界中の皆に迷惑をかけてしまったから」

「そうか、なら俺も一緒に謝ってやろうか？そんでその後はクリスマスパーティーだ。」

急げば間に合うかもしれねえぞ  
「ありがとう、ごさいます」

戦いは終わった。

聖夜の夜、楽園での激闘は今この場で終わった。  
だが。

「終わったか？」

閃光がクロエの肉体を貫いた。  
戦いはまた始まる。

## 第117話

「ああ……ああ」

エネルギーに肉体を貫かれ、クロエは膝から崩れ落ちる。地面に倒れそうになった彼女の肉体をゼロは咄嗟に抱きしめた。

「おいーおいー」

ゼロは消えかかりそうになるクロエの意識を必死に呼び止める。

「私は……私は」

「黙ってる！傷は浅い！すぐに治療すれば命は全然助かるんだよ！それにテメエはナノマシンがあるだろうが！……死ぬな、殺すぞ！」

傷口を救急キットを使用して塞ぐ。

「……そうか、なら……少しだけ眠らせてもらおうよ」

そう言つてクロエは瞳を閉じた。

ゼロは慌てて脈を測る……まだある。死んではいけない。だが治療が必要である。

「良かった……だが誰が……?!」

一機のISが此方に迫ってきている。そしてそのISの反応を見た瞬間に嫌な汗が

大量に流れた。

「ガーベラアアア!!」

「久しぶり、会いたかった」

ネオ所属、ゼロとは長年の因縁がある好敵手ガーベラ。

このタイミングで、ゼロ達とクロエ達両者が疲弊しきつたこのタイミングでネオは現れた。

最悪だとゼロは心の中でぼやいた。

敵はあと何機いる。

少なくともガーベラともう一機、クロエを狙撃した機体がいるはずだ。

「さあ、楽しみましょう!」

ガーベラが接近しながら大斧を構える。ゼロはクロエを抱えている為に対処するのが困難になっている。

「させないよ」

瞬間移動で百春が二人の間に入り込み、左腕に付けられてある『真雪』の盾で大斧の一撃を受け止めてみせた。

「兄さん!」

「エム、任せた!」

近づいてきたエムにクロエを渡す。ビットを使えるエムならば両手が塞がっていても戦えると判断したからだ。

その時だ。

クロエの搭乗する黒鍵からN.O. 1000のコアが分離した。

黒い光を放つ球体、球体から妖精のような翼を伸ばし、大きく翼を羽ばたかせている。その光景を見たこの場にいる全員の動きが止まった。N.O. 1000に魅入られている。

あまりにも蠱惑的で、あまりにも魅力的で、あまりにも禍々しかった。

N.O. 1000が飛んでいく。漆黒の羽を羽ばたかせ、災厄の化身はある場所に向かう。

その先にいたのは一機の全身装甲タイプのIS、漆黒のボディにはこれと言った特徴は一切見られない。必要最低限の装甲しか付けられていない

本当に特徴がない。

あえて言うなら、右手に持っている弓型の遠距離用のエネルギーライフルだけだろ  
う。

「煩い、奴だ」

声はボイスチェンジャーにかけられている為無感情に聞こえる。



黒いISはNo. 1000を左手で掴んだ。No. 1000は翼を縮小させ、ISの左手に収まってみせた。

「チツ！」

No. 1000をネオに奪われるわけにはいかない。凶悪凶暴すぎるじゃじゃ馬は今この場で回収しなければならぬ。

迫り来る黒零に対して漆黒のISは弓を突きつけ、そして矢をつがう事なく指先にあたるトリガーを引いてエネルギーの矢を放った。

「効くか！」

ゼロは零落極夜を開放させた右手でソレを打ち消し、瞬間移動と錯覚できるほどの超高速の瞬時加速で黒いISとの距離を詰めた。

ゼロの拳が黒いISの頬を捉え、装甲を砕いた。

続けざまに連続攻撃を仕掛けようとしたが、No. 1000が黒い色の強烈な光を放ってゼロを押し返した。

「ほう、こんな事も出来るのだな」

黒いISが声をはなった。

その声はボイスチェンジャーによって変えられていなかった。先ほどのゼロの一撃で破壊されてしまったようだ。

その声を聞いた瞬間にゼロ、百春そしてエムの心臓が僅かに止まった。それ程までにその声は衝撃的だった。

それは男の声だった。

それだけならまだマシだった。

黒いISにのるその男の声は三人がよく知っている人間の声だった。

「全く、何が最高の兵器だ」

男がISのヘルメットを外し素顔を晒した。

「……………兄、さん？」

仮面の奥にあったのは、よく見慣れた『一夏』の顔だった。

## 第118話

「どうした、そんなに驚いて……自分の顔なんて見飽きているだろう」

『一夏』は驚いて動きを止めているゼロを見て笑った。

ゼロの頭の中に大量の情報があがり、今までの情報が点と点で繋がっていく。

何故と理由が繋がり、真実が彼の目の前に生まれる。

そして真実を知って、怒りを覚えた。

「随分と、人様の体で好き勝手してくれるんだな」

明確な嫌悪感を込めて『一夏』に向かう。コイツは殺さなければならぬと心の奥底が命令している。

「何をそんなに怒るか、コレは我々が作り上げた肉体なのだぞ」

「だが元々は俺の肉体だろうが！」

大剣『零』を『一夏』目掛けて振るう。

「おお、おお。随分と気性の荒い。亡国機業は育て方が悪いな」

『一夏』はNo. 1000のコアを利用して零の攻撃を防ぐ。機体の性能自体は黒零が優っているが、No. 1000の力が攻撃を阻害し続ける。

決めきれないもどかしさがゼロを襲う。

「流石にこの程度の機体ではマズイな……………来い、僕達よ」

八つの閃光がゼロを襲った。

禍々しい殺気を放ちながら迫ってきた八機のIS、そのどれもが普通のISとは異なる気配を放っていた。

生体同機型IS。

それが八機。

動物を模した八機のISがゼロに牙を向けた。

「ナメンナヤ」

一瞬でその動きを全て見切った。長年の戦闘によつて鍛えられた観察眼は並ではない。バラバラの特徴を持つ八機の動きに反応する。

武器、手、足、ISに搭載されてある全てを使つて迫り来るIS全てに見事カウンターをいれた。

八機のISは弾き返され、空中でその動きを止めた。

「動物園じゃ……………ないんだぜ」

蠋螂、襟卷蜥蜴、兎、蝙蝠、狼、狐、仙人掌、鰻。

その姿、なんと多種多様な事か。

これがもし敵機でなければジツクリと機体を観察したいとゼロは思っているが、今現在はそんな事をほざける余裕なんてどこにもない。

「此奴らは、我らネオの八神官と呼ばれるモノ。そして、今貴様らの目の前にいる我こそがネオの最高権力者。総帥であるぞ！」

ネオの総帥、そして八神官。

最高権力者、何故そんな人間がこんな戦線の最前線にいるのか。

敵の戦力は本当にこれだけなのか？

もしかしたらすぐ近くに大部隊が潜んでいるのかもしれない。

最悪のタイムミング、完全に漁夫の利を狙っていた。

目標はN o. 1000だろうか……それを回収した今ネオの人間がこの場にとどま  
り続ける理由はない。

「さて……どうしたモノか」

ゼロは撤退してほしいと思う反面、どうにかしてN o. 1000を回収せねばなら  
ないという思いと板挟みになっている。

一対九は流石のゼロも辛いモノだ。これがもし量産機ならば平気なのかもしれない  
が、相手は最新型の生体同期型ISとN o. 1000のコアを使う男。

百春はガーベラと激戦を繰り広げており、エムはISを用いてクロエの治療に当たっ

ている為援護は期待できない。

ならばせめて離れた場所にいる他の奴らの増援を期待するが、この場所から待機地点までは少し時間がかかってしまう。

(……………エネルギー残量が少し不安だな。極夜を使うにしても最低限のエネルギー消費に収める必要があるな)

頭の中で戦闘プランが練りげられていく。今さつきあつた一瞬の攻防から相手の大凡の実力は把握した。

(一瞬でケリをつけてやる。反応を許さない速度と機動力で距離を詰めて極夜を使って一撃で…………)

零を握る指に無意識のうちに力が入る。ゼロでもこの数は面倒なようだ。

反撃されないように、どれから殺すかを見定める。

先ほどの一瞬の攻防からどれが良いかを判断。

(……………仙人掌)

殺す為の構えにはいる、その瞬間に『一夏』は僅かに後ろに下がった。

そしてそれを見たゼロの動きが止まった。

(今の……………わかったのか？機体の性能が追いついていないだけで、パイロットの実力は高いのか?)

再び膠着状態に逆戻り、どうにかして一手打って均衡を破壊せねばならない。その時だ。

更に四機の I S がゼロ達の元にやってきた。

「誰?!……………マジで誰?!」

やってきたのは、先の戦いで死んではいなかったクロエの仲間である進化体の四人であつた。

ゼロが誰と言うのも無理はない。ゼロは一切彼らの事を知らないからだ。

彼らが戦っている際中、ゼロは移動の疲れを癒す為に少しだけ休憩していた。

豹、白熊、甲虫、鋏形虫、四機の I S が増援として来てくれたのだが、ゼロは彼らの実力を知らないで正直少しかだけ迷惑だと思つた。

「クロエを殺させてたまるか!」

「彼女は我らの希望!」

「故に!」

「此処は引いてもらう!」

四機の I S はゼロと協調して戦う事なく、勝手に『一夏』に向けて突撃を行った。

「総帥、お下がりでください。此処は我々が!」

八神官のウチの一機、蝙蝠型の生体同期型 I S が総帥『一夏』を守るように進化体の

前に立ちふがった。

「よい、下がれ」

だが『一夏』はそれを必要としておらず、盾になろうとしている蝙蝠型のISに下がるように命令した。

「ですが、総——」

「下がれ」

「ッ!？」

有無を言わさぬ覇気が『一夏』の肉体から放出される。それは生まれた時から限られた人間にのみ持つ事を許された支配者の才能であった。

蝙蝠型のISは言葉に従って元いた場所に戻ることにしかできなかった。

「さあ、試させてもらおうか。最強、最高、最後のISコアの実力を」

『一夏』の手に握られてあるNo. 1000のコアが激しく闇の光を放った。

暗く暗く、明るく眩しいその光は見たモノに無意識の恐怖を与えるのには十分すぎるほどの説明不可能な力を持っている。

『一夏』に迫る四人の背中に嫌な汗が流れ、そして頭の中を激しく走馬灯が激流のように流れて行った。

「さあ、力をみせてみる!!」



『一夏』がNo. 10000を持つ右手を大きく振るった。その姿はまるで地上に神罰の雷を振り下ろす神のように神々しく感じられた。

だが振り下ろされるのは神の雷ではなく、悪魔の刃。

闇の光が四機に襲いかかる。圧倒的な力、全てを包み込み一瞬で彼女たちを闇の世界に引きずり墮とす。

「……………え？」

一瞬だった。

世界が闇に染め上げられる。

闇の光の刃が彼女たちを無惨に斬り裂き、命をその搾りかすが無くなるほど闇は輝いた。

四機のISが命を枯らし、何もかもを奪い去って地に墮とす。

「はははは!!なんとと言う力!これが終わりの力!……………少しお転婆すぎるがな」  
刃を振り下ろした『一夏』の右腕の装甲はズタボロになっていた。

今の力は余程のものだったのだろう。一瞬で四機の絶対防御を無視して殺戮の限りを尽くした圧倒的な破壊力、なんの調整も行われていない機体では耐えきれなかったのだろう。

「……………さて、目的は済んだ。戻るぞ」

『一夏』は少しでも満足げな表情を浮かべながら空へと上がって行くこうとする。

「行かせると?」

「ああ、行かせてもらうよ。君も死にたくはないだろう?お互いに手打ちにしようか?それに、まさか部隊が此処にいる人間だけだと思ったのか?」

『一夏』の言葉の直後、この場にいる三人の I S 学園側の人間の I S に救援信号が入る。「此処以外にはネオの部隊を複数、君たちの仲間の元に向かわせてある。早く戻らないと、彼女たちが危ないかもね」

「……………成る程ねえ。ムカつくが有効だな」

「そうだ、だから下がれ」

威圧してくる。

「テメエを倒したらな」

ゼロも威圧で返す。

「まあ、此方にも他の部隊はこきせてあるのだがな」

上空から複数の I S 反応、敵の増援。総帥や八神官が撤退するまでの時間稼ぎの為にやってきたのだろう。

恐らくは捨て駒、命は保証されていないだろう。

「それでは、下がらせてもらうよ……………ガーベラ、戻るぞ」

「はい！総帥」

百春と戦っていたガーベラも『一夏』の撤退に手を貸す。

「百春、エムとクロエを連れて下がれ。俺が殿を勤める」

「わかった」

百春は後ろに下がってエムの元に向かう。

「マドカ、彼女の容体は大丈夫か？」

「大丈夫だ。今の所は傷口は塞いであるし、なにより彼女の体内に流れるナノマシンが治療を始めている。命は助かる」

「それは、良かった……なら、下がるよ。護衛は僕がやる。彼女を優しく運んでくれ」

二人はこの戦場からの撤退を開始する。エムがクロエを優しく運び、百春が万が一のことがないように彼女たちを護衛する。

そしてその間にゼロは襲いかかってくる敵を屠りながら、逃げていく『一夏』を追いかけようとするがネオ側の殿を任されたガーベラが行く手を阻む。

「そこ、どいてくれるか？」

「それはムリね、いくら貴方の頼み事でも。それにね……貴方と戦うと心が暖かくなるの！」

ゼロの大剣『零』とガーベラの持つ大斧が激しくぶつかり合う。

互いに夫々所属している組織の最高戦力。

戦場で何度も刃を交えてきた二人、何方が勝ち、またある時は決着がつかなかったこともあった。

互いに相手に負けたくないという意識が無意識のウチに芽生えてきてしまっていた。

その意識がなんなのかを説明できる人間はいない。二人だけがわかる。二人だけの世界。

「ねえ」

何分間戦つただろうか、時間すら忘れて戦っている。

「そろそろ終わりにしない？ 私たちの目的は完了させた。これ以上戦う理由がないの

……」

「……………そのようだな」

ガーベラに行くくてを阻まれてしまった為に『一夏』はすでに何処かに消え去っている。今から追跡するのはほぼ不可能。

その事実にはゼロは内心舌打ちをした。

「それに、全力じゃない貴方と戦つてもつまらないの」

クロエとの戦いで体の部位の幾つかが傷を負っている。このまま戦えば確実にどこかで限界を迎えてしまう。

まあ、そうなくてもゼロは脳波を使って強引に機体を動かすのだが。

「貴方とはもつと本気で戦いたいの。心の奥底から濡れるような戦いをね……だから、またね」

手を振りながらガーベラは去っていく。そしてすぐに全速力で何処かへと消える。

それをただ見ていたゼロ、追うことはできたかもしれない。だがそれは単独ではあまりにも危険すぎる。

それに。

「唾々………」

体は限界を迎えかけていた。

今日一日ほぼ休むことなく戦い続けてきた肉体は疲労のピークを迎えかけていた。

仰向けに大の字になって地面に倒れこむ。周囲には敵も味方もいない。ただ周囲には無数の死体が散らばっているだけ、そのどれもが人の形をなしていない。

先ほど出されていた救援要請は既になくなっている。どうやらアリサ達が上手く撃退させたのだろう。

「……最悪だ……最悪だ。一番奪われてはならないものを奪われてしまった。弱い、弱い、弱い。もつと、もつと強くならないと……俺達オレたちは強くならなければならない」

聖夜の夜、血塗れの大地の中心で嘆いた。

一つの戦いが終わった。

それはこれからの大きな時代の流れの序章にすぎなかった。

## 第119話

「ん……んん」

クロエは目が覚めた。

眼前には見知らぬ天井、そして清潔感のあるベッド。此処がどこなのか全くわからな  
い。意識を失う前の最後の記憶は誰かから攻撃を受けて、ゼロに抱きしめられた記憶。

「……」

そういつた雰囲気ではなかったとはいえ、クロエは男性からあんなに強く抱きしめら  
れ感情をぶつけられたのは初めての経験だった。

「……………」

クロエの体のウチが思わず熱くなり、彼女の顔は茹でダコのように真っ赤になってしま  
う。

「……………」

「……よう、起きたか」

彼女はベッドの上で仰向けになったまま、首だけを動かして声の主を見た。

そこにいたのはゼロ、疲労しているのかいつもの覇気は何処かへいつてしまってい

る。

ISスーツから亡国機業の制服に着替えている。平然としてはいるが、制服の奥には肉体を治療する為に様々な治療具をつけてある。

「……………ここは、何処なのですか？」

「東さんのラボ兼潜水艦だ。蒼天を運搬する為にすぐ近くまできていたからな。利用させてもらったよ……………大変だったんだぜ、お前の治療」

「……………そうですか、ありがとうございます」

クロエはベッドのリクライニング機能を使って、ベッドをへの字型に折り曲げ座る。

「他の皆は……………」

この場所は治療室のようだが、彼女の仲間の姿は一切見当たらない。他の場所にいるのだろうか、それとも別の場所にいるのだろうか。

「死んだし、殺した」

答えはこの世の何処にもいない、だ。

「……………そう、ですか……………結局、私だけが生き残ってしまったのですね。自分の生きる意味を知ろうとして、仲間をまきこみ、東様を殺して……………それで、それで、私だけが生き残った」

クロエは震える両手を自身の顔に押し付けた。



激しい後悔と懺悔の念が彼女の体に襲いかかる。自分のせいで、仲間を恩人を殺してしまった。

「私はどうすれば良い……私は何故生きてる」

「……………」

彼女はゼロが少しでも目を離せば今すぐに自殺をしまいそうになるほど精神が弱り切っている。

だからこそ、今の彼女には生きる支えになる何かが必要である。

「テメエ、死のうと考えてないか？」

「その何が悪いのですか!? そうでもしないと私の罪は償われない。死という贖罪しかないんです」

クロエは声を荒げた。今の彼女に冷静な判断をする能力はない。

「やっぱ馬鹿だ。死は贖罪じゃねえ、逃げなんだよ。テメエの仲間はテメエを生かす為に死んでいったんだよ、それなのにテメエが死のうとしてどうする。それはテメエの仲間の気持ちを無駄にすることになるぞ、それに束さんの想いも」

「束様の……………想い」

「あの人はお前を恨んではない」

「そんな事、わかるはずがない! あの方は私が殺したんだ」

「わかるんだよ。ほら、見てみる」

ゼロが部屋に備え付けられたモニターを指差した。その画面には何も映っておらずクロエは何故指したのかよくわかっていない。

「……何が——」

「ヤッホー！進化した皆のアイドル、篠ノ之東だ——」

ゼロはリモコンを使って無言でモニターを消した。

「……今のは？」

「何も見なかった。オーケー？」

「……………はい」

有無を言わさぬ強烈な圧力がかけられた。クロエは素直にはいというしかなかった。

「ちよつと、ちよつと！……いっくん酷いよ！」

画面が点灯して再び電脳妖精に変化した篠ノ之東が姿を表した。

「人が真面目に話をしている時は空気を読んでください。俺でもこんな時は巫山戯ませんよ。終わった後は巫山戯ますが」

「東さんにシリアスは似合わない!!」

何故か妙に喧嘩腰の二人、そして二人を見てオロオロと戸惑うと同時に画面に映る束の姿に驚いているクロエ。

正直言つて後一人冷静な人間が欲しい所だ。

「あ……あの、これはどういう……事、なのでですか？」

「あ？この人生きてた？生きてんの？生きてるって言つていいの？」

ゼロは説明を行おうとしているが、何という風に説明をすれば良いのか上手くわかっていない。

「東さんはI S コアに宿る意識、電腦妖精と同じ存在になれたのだ。流石東、超天才」  
「生きてねえけど、イキツてはいるな。うん」

「いっくん、少し東さんに対する当たり強くない？東さんも傷つくんだよ。意外にも」  
「そんな事はいいですから、早く伝えたい事伝えてください」

ゼロはクロエを親指で指差しながら東を促す。

「くーちゃん」

優しい声音で東は画面越しにクロエに声をかけた。その声には一切の怒りが込められていない。

「……………東さま」

自分が殺した人間が目の間にいる。そして同時にこの世で自分を救ってくれた人間でもある。

クロエの体が緊張で硬直してしまう。

「くーちゃん、私は今回の事を怒ってはいません」

「……………え？」

飛び出したのは予想外の言葉。

「……………どうして、怒っていいのですか？私は……………貴女を」

「私には、他人を怒る資格なんてないから」

それは悟りを開いたような言葉であった。

「この世界が今現在混沌としている原因は私にある。くーちゃんがI S コアを埋め込まれたのだから、私がソレを開発しなければこんな事にはならなかった」

怒る資格を持たない。

それは全ての罪を受け入れる覚悟を背負っていると言っても過言ではない。

「くーちゃんが考えて起こした事なんでしょ？自分の生まれた意味を知る為に……………だから、生きて。貴女が私を殺したことに罪悪感を覚える必要はないです。代わりに前を向いて生きてください。それが、私の願いです」

優しい聖母のような笑みを浮かべる束。今の彼女にはクロエに対する恨みも怒りもない。いや、もともとそんな感情は持っていない。

「……………ごめんなさい。ごめんなさい」

クロエの瞳から涙が零れ落ち、彼女は激しく泣き始めた。嗚咽を漏らし、子供のよう

に己の感情の全てを曝け出す。

「良いんだよ、泣いて。今は誰も責めたりしないから」

束もゼロもソレを止めることはない。

束は優しい声をかけながら、ゼロは腕を組んでクロエを見守っている。

「私は、私は！束さまの想いに何も気がつかなかった！」

今の彼女にはこの時間が必要なのだ。

「落ち着いたか？」

「……………はい」

クロエが泣き始めてから数十分後、彼女は漸く泣き止んだ。彼女は涙を流しすぎたのか、目の周りが少しだけ腫れている。

「今のこの姿つてき、案外気に入ってるんだよね。なんか肉体に縛られていない感じがして良い」

篠ノ之束が画面の向こうで笑い、ソレを見たクロエもまた少しだけ楽しそうに笑った。

「それでよお、テメエはこれからどうするつもりだ？行く場所はあるのか？」

「……ソレは……ないです」

クロエ本人に戸籍は存在していない。試験官ベイビーとして極秘裏に生まれた彼女の存在は世界の闇だけなのだ。

今のままでは表の世界に居場所などありはしない。

「テメエが良ければ、俺の部下として亡国機業に入るか？俺丁度部下が欲しかったし、入るなら居場所は確保できるぜ」

「良いのですか？」

「安心しろ、亡国機業は国籍思想宗教性癖に縛られることのないグローバルワイドな団体なのだ」

「いえ、そうではなく……私みたいなのがいて良いのでしょうか」

「良いだろ」

ゼロは迷うことなく即答した。

「卑屈になりすぎるな、もっと胸を張って生きろ。お前は東さんに生きろと言われた……なら死ぬ時まで自分に自信を持って。過去は変えられない。でもなあ、だからといってこれから変えることのできる未来を諦めて良い理由にはならないんだよ」

この男、真面目なことも言える。

「……………自信を持って、生きる、ふふつ、そうですね。ならば貴方の言葉を信じてみます。これからよろしくお願いします……………ゼロさま」

「よろしく頼むぜ、クロエ」

二人は硬い握手を交わした。

「うんうん。大団円、大団円」

画面の奥で篠ノ之束が満足気な表情で頷いている。

「まあ、取り敢えず帰ったらゴメンナサイ、そしてよろしくお願いしますだ」

ユツクリと握手を解除する二人、そしてゼロは画面に映る束を見た。

「すいません、No. 1000を奪われてしまいました。俺の実力不足のせいです」

「いつくんは自分を責めないで、元はといえば私が作ったものだから……………でも、アレは早く止めなければいけない。アレは間違いなく最凶のコアだから」

一つの戦いが今終わった。

だがこの戦いは世界を巻き込む巨大な戦禍の始まりにすぎない。

「時はやがて満ちる。同志達よその時の為に備えよ。世界はやがて我らを知るであろう、自分たちが排斥した生命の強さを、そしてこれからの世を統べる王の事を。同志達よ、戦え。我らが理想郷の為に!!」



# 最終章 妖精戦争

## プロローグ

その日I S学園は崩壊した。

完全なる敗北。

その日の始まりは今まで何百何千と起きていた何事もない日常であった。そしてその日は何事もなく平穏無事な日常がただすぎていくはずだった。

ただ平穏な時間が過ぎてくれれば良かったも誰もが思い、その思いが叶う事なく踏みこじられた。

そして平穏、平和という言葉が彼らの元に再び訪れるのはいつになるのだろうか。

ネオがI S学園に襲撃をかけた。

それは昼を少し過ぎたくらいの時間だった。

それが何気なく過ぎし続けてきた平穩の終焉であった。  
時が止まった。

圧倒的な力の前にI S学園は敗れ去った。勿論、I S学園も襲撃を仕掛けて来たネオに対して徹底抗戦を行った。

戦える人間は全員戦場になってしまったI S学園を駆け抜けた。戦えぬ生徒達を逃がす為、襲いかかるネオの猛者を倒す為にI Sを纏い戦った。

それは一般生徒や教員、そして用務員も含めて全力を尽くして戦った。  
やがて来るであろう政府や組織からの援軍を待つて戦い続けた。

だがそれでも、敗北した。

代表候補生でもなんでもないI Sに乗って戦っていた一般生徒は次々とネオの兵士に倒され逃げる一般生徒たちにもネオの毒牙が迫った。

そして代表候補生たちも次々にネオの幹部達に倒されていった。

国家代表や覚醒したコアの持ち主でさえネオの兵士のあまりの数の多さに苦戦をしいられた。

『最凶』の前にかつての『最強』は敗れ去った。

大空を飛ぶ為に再び手に入れた新たな大翼も、『最凶』の前に無惨にもがれた。

そもそも今回の作戦にネオが投入した戦力は明らかに過剰であった。

通常なら小国を落とせてしまうほどの戦力をこの一戦に投入した。

自分たちの存在を何も知らぬ一般市民に知らしめるように、今現在の世界の最高戦力 I S——その象徴とも言える I S 学園を壊滅させた。

その出来事はこれから起こるであろう、地球全土を巻き込んだ歴史上類を見ないほどの規模の大戦争の始まりの出来事に過ぎなかった。

そして第三次世界大戦が勃発する。この戦争は今までの第一、第二次世界大戦の時とは様相がちがった。

『I S』が世界に登場してからの初めての世界大戦。戦場の中心は世界と同じように『I S』にかわる。

そして裏から世界を牛耳ってきた『亡国機業』と『ネオ』、二つの世界的組織の代理戦争。

この戦いはこれからの世界の命運を決める為の敗北を許されない戦い。

やがてこの戦争は、I Sのコアの中に存在する意識——電脳妖精の名を用いてこう呼ばれるようになる。



## 第121話

事件が起きる数ヶ月前、雪が溶け心地の良い春風が吹き始めた頃の事だ。

来年度の入学試験が終わり、学園は一段落を迎えていた。今年度のI S学園の受験者の志願者倍率は例年以上のモノとなった。

理由は前年度入学者の織斑百春の存在、世界で唯一と呼ばれている男性I S操縦者の存在が各国の間を駆り立てた。

今年度の入学者には新入生に加えて、世界各国から代表候補生たちが編入生としてI S学園に入学することになった。

去年一年の間に何人もの生徒が学園を去った為に、人数に空きがあるのだ。

そして今日はその編入生たちがI S学園にやってきている。

彼女たちを案内するのに、生徒会長である更識楯無に白羽の矢が立った。

一行は学園の建物全域を歩いて回った後、最後にこれからの学園生活でI Sの訓練を行うことになるアリーナにやってきた。

楯無と代表候補生達はアリーナの管制室でアリーナの内部の様子を観察している。

アリーナの中には二機のISがいる。

黒と白、対象的な色彩の二機のISが今にも戦いを始めようとしていた。

「……アレが、織斑百春の操る『白式』」

純白と黄金、そして背中にある巨大な一對のウイングスラスターが特徴的な全身装甲型のIS、白式。

IS学園に編入する代表候補生たちもソレの噂については聞いていた。

第二次移行から更なる進化を果たした世界で最初のIS。スペックだけを見れば現行のISの中でも一二を争うほどの超高性能。

第二次移行までは装着型のISだったのだが、今現在の白式は全身装甲型に変化している。

最初の頃は百春自身、全身装甲型のISの操縦には戸惑っていたが、今となっては完璧に乗りこなしている。

「もう一方は……」

「何処の国のISかしら、見た事がない」

相対する漆黒のIS、名は黒零。

進化した白式と同様に全身装甲型のIS。

性能は進化した白式には劣るが、それでも並のISと比較すれば性能はかなり高い。

コレの存在を編入してくる代表候補生たちはよく知らなかった。

「生徒会長、あのI Sは何なんですか？」

代表候補生のウチの一人が尋ねた。

「亡国のゼロ………とでもいえばわかってもらえるかしら？」

楯無の言葉に反応して各国の代表候補生たちは目を見開かせて反応した。

彼女達もその存在については聞いたことがあった。だが実際にいるとは思ってもしなかった。

表の世界で輝く自分達とは対象的な存在。アリーナにいる白式が表の存在であるならば、黒零は裏の存在。

陰陽、互いに強烈な存在感を放っている。

「アレが、裏の世界の二強。亡国の黒いI S」

「こうして合間見えることができるなんて思ってもいなかった………何故ここにいるんだ？」

「ん？それはね、傭兵として雇ったからよ」

楯無の口から簡単に嘘が紡がれていく。

「百春くんを強くする為には必要だったのよ。亡国のゼロの力が………そのお陰で百春くんの実力は遥かに高くなってる。私も今の百春くんに勝てるかは怪しい」

「国家代表でもか……実力が高いな……そう言えば、あの噂は本当なのか？亡国のゼロの正体が男だというのは」

亡国のゼロには様々な噂が流れている。

曰く、実力は世界最強級ブリコンヒルデ。

曰く、戦場で出くわしたならば死を覚悟するしかない。

曰く、使用しているコアはオリジナルであるが、特殊なモノを使用してる。

曰く、男である。

「………どうかしら。後で確かめてみると良いわ」

楯無はアリーナの内部を見ながら、代表候補生に向けて問いかけた。

「ならばそうさせてもらおう。今は試合を見学させてもらおう」

アリーナの内部で動きがある。

沈黙を保ち、一切動いていなかった二人がほぼ同時に構えをとった。

「ッ!？」

二人が放った強烈な意識がアリーナを埋め尽くし、管制室にいる楯無達の元まで届いた。



代表候補生達の骨が震える。

自分たちに向けられているモノではないと十分に理解はしているのだが、それでも戦慄してしまう。

余波でこれなのだから、直接当てられたらどうなるのか。マトモに立ち向かえるのか、代表候補生達に嫌な汗が流れる。

「……始まる」

楯無がその言葉を呟いた直後、アリーナにいる黒と白は戦いを始めた。

初動、白式が世界から消えた。

「何が起きた!?!」

事態を上手く認識できていない代表候補生達は思わず食い入るように管制室に備え付けられてあるモニターを見た。

そして次の瞬間、ゼロの背後に空間を引き裂いて百春が現れた。

背後を完全に取った。百春は手に持っている真花でゼロを背後から切りかかる。

『甘い!』

ゼロは全身のスラスタを駆使して背後を振り返りながら、硬く握りしめた右拳を振った。

『だよね!』

百春は剣撃を中断させ、体を四分の一回転させて足の裏で拳を受け止めるとその反動を利用して後ろに飛んだ。

『流石に今のは予測されるか……』

『お前は同じ手を何度も使い過ぎてる』

一瞬の攻防、それでも実力の高さを代表候補生達は感じ取った。

「……瞬間移動」

「それに反応してのカウンター……そしてソレを防ぐ技術。無茶苦茶だな」

代表候補生達は感心しているがコレはまだ始まりに過ぎない。

『なら、次は！』

白式の左手と同化している武装『真雪』が唸りをあげる。

指を綺麗に合わせて黒零に向けて突きつける。

指先からエネルギーが放たれる。一切の無駄のない圧縮されたエネルギーの閃光が

ゼロに襲いかかる。

『つたく……チャクラ』

ゼロが左手を前に突き出し、目の前に不可視の壁を作り上げてエネルギーを受け止める。

る。

そして後方にエネルギーを受け流した。

「なんだ今の？」

チャクラの存在を知らない代表候補生達はゼロが何をしたのかわからない。

『行くぞ』

『さあ、来い！』

今度は小細工なしの真っ向勝負による接近戦。互いに距離を詰めて殴り合いを始める。

ゼロは休むことなく握りしめた両手や両脚、さらに全身を武器にしながら百春を攻め立てる。

殴打や蹴りだけでなく、所々混ぜられるプロレスや柔道の技の数々に百春は手を焼かれる。

百春はソレらを左手と同化している真雪の盾で巧みに防ぎ続ける。

受け止められる攻撃は受け止め、受け止めきれない攻撃は流し、または盾を使って攻撃自体を行う前に防ぐ。

数ヶ月前の百春では止めることのできなかつた攻撃も、この数ヶ月のゼロによるスパルタ訓練のお陰で止めることができるようになった。

「凄い、美しい蹴り」

編入生のウチの一人、タイの代表候補生であるヴィシユヌ・イサ・ギャラクシーはゼ

口が繰り出す蹴りの練度の高さに思わず褒めてしまった。

「確かに、一発一発の完成度が高い………本当に訓練なのか？互いに殺す気で戦っている気がするぞ」

「あの二人はそうなのよ。殺す気じゃないと訓練にならないからって」

二人の戦いは次の段階に移行している。

夫々両手に得物を持って、超高速戦闘を行う。

百春が瞬間移動で攪乱を行うがゼロはそれに惑わされる様子はない。

冷静に冷淡に、攻撃を見極める。

背後から攻撃してこようが反応して、カウンターで返す。

互いに決定的な一打がでないまま訓練は続く。

ゼロも百春も既に並の領域にはいない。夫々が既に己の武の道を突き進んでいる。

織斑千冬という憧れから乖離した二人は既に羽ばたいている。

『『零落——』』

白式からは黄金の光が、黒零からは漆黒の闇が溢れ出る。

『極夜』

『白夜』

単一能力による最強の一撃。

防御を破壊する必殺の一撃を容赦なく相手に向けて振り下ろす。

……その刃は二人の寸前で止められた。光と闇が収まり、二人は武器を取めた。闘志を収めて二人は空中でユツクリと距離を取りながら地面に降りた。

一定の距離を保ったまま礼を行う。

「終わったみたいね………会いに行ってみる？」

楯無の提案に代表候補生達は無言で頷いた。

戦争が始まるまで後何ヶ月。

## 第122話

「だいぶ強くなったじゃねえか。これなら簡単に戦場で死ぬことはねえな」

「それ褒めてるの？」

「褒めてるさ、今の teme は白式の性能も合わさって強え。そこんところは自信を持てよ」

今年から IS 学園に新たに設営された男性用のロッカールーム、そこに訓練を終えた一夏と百春はいた。

今の時期は春休み真っ最中、授業がないためにいつもより長く朝の訓練を行っていた。

「明日は訓練休みだが、明後日はやるか？」

「明後日は申し訳ないけど、中止にしてみらえるかな……親友の妹と用事があるんだ。いつもは百春から進んで訓練をしてくれと言うのに、今日は珍しい。」

「その子ってアレか？ 嵐がこの前言っていたあの五反田蘭って子か？」

一夏は百春の浮いた話に興味を示した。一夏本人は弟のこの鈍感さをどうにかした

いと常日頃から思っていた。

「ああ、そうだよ」

一夏はたまにはあるが鈴音と話すことがある。

五反田蘭の話題が出たのは一夏と百春、そして鈴音の三人で会話をしていた時のことだ。

その時から一夏は蘭という人物が百春に好意を持っていると鈴音の態度から感じ取っていた。

「用事ってなんだ？」

「彼女がI S学園に合格したから、その合格祝いを一緒に買いに行くんだよ」

「デートか！」

こういう時だけは思春期の少年らしい反応を見せる一夏。弟の前なのだから肩肘をはる必要がない。

「デートって……ただの合格祝いの買い物だよ」

この野郎、一夏は内心で毒付いた。

「デートだろ」

「……デートなの？」

さっきまで少し笑っていた百春の顔が真剣になった。

「デートだよ」

「デート……だと?」

「デートさ」

「デートなんだ……」

百春はロツカーに手をつきながら、目を閉じた。

「お前なあ、その子はお前に好意を持つてると思うぜ。じゃねえと男と女の二人きり、春期の人間が誘うと思うか?」

もしこの場に百春に好意をよせる人間がいたならば全力で一夏を殴りに行っていただろう。

小舅一夏、面識が一切ない五反田蘭を援護している。

「……………そうなのかな? そうだよね。蘭、俺に好意を寄せていたのか。気づいてあげれなかつたな」

「じゃあねえよ、俺たちはそういうのに鈍いからな。俺もアリサがいなかつたらお前と同じようなもんだつたよ」

一夏も百春も愛というモノをよく知らなかつた。

だから一夏は愛に飢えていた。

故にアリサからの愛を受けた。



「……兄さん、デートつてどうすれば良いの？僕はよくわからないんだ。兄さんはそういうこと詳しいでしょ？教えてくれよ」

「偏見だな……いや、偏見じゃねえな」

この男、案外遊んでる。

「教えてくれと言われてもな……お前とその子の関係はよく知らねえし。まあ、お前はセンスは悪くねえ………なんとかなるだろ。自信持つていけや、俺の弟なんだから心配ねえよ」

一夏なりの激励の言葉だった。

「……そう言ってくれるとありがたいよ。頑張ってみるさ………そういえばさ、前から気になってたんだけど、何であの瞬間移動に反応できるの？」

百春は頻繁に一夏と模擬戦を行い、その度に 白式・真になってから手に入れた瞬間移動能力を駆使して戦っているのだが、一夏は瞬間移動に簡単に対応してみせる。

一夏以外の人間が相手だったら対応されることもほとんどないのだが、一夏は瞬間移動を使わずに百春の世界に追いつく。

「……なんで？………なんでだろうな、俺にもよくわからねえんだがな………直感と言うか、なんというか………変な言い方かもしれないねえが、未来が見えるんだよ」

「………未来が見える？」

百春にはわからない感覚だった。

未来が見えるとは一体どういうことなのか、百春は頭の中で考えてみるが答えは見つからない。

「まあ、大雑把な言い方だけどな……クロエと戦っている途中から何となくだけど相手の次の動きを頭の中で見えるんだよ……多分だけど、I S コアとの極限のシンク口状態に陥ってるのが理由だと思う」

理由は一夏にもわかつてはいない。

だが使えるのなら使ったほうがよい。

「無茶苦茶だね、未来が見えるなんて」

「お前の瞬間移動も大概だよ。未来が見えなきや反応するのが辛いからな」

「……出来ないじゃないんだ……それよりさ、服着ないの?」

「あ?暑いんだよ」

一夏はシャワーを浴びてから、暑いらしく一切服を着ようとしていない。

一切の恥じらいなく、威風堂々と全裸のまま仁王立ちで運動後のスポーツ飲料を飲んでる。

もしこれが男女入り乱れる場だったならば変態と呼ばれるだろうが、ここは男だけのむさ苦しい場所。糾弾する人間は誰もいない。

「急に女の子が入ってきたらどうするの？」

「馬鹿野郎、ここは男子更衣室だぞ。女子は入ってこねえよ。入ってくる奴がいたらそれはいは——」

「失礼しまーす！」

「待って、オニール」

いきなり廊下と更衣室を繋ぐ扉が開かれ、似たような髪と顔つきの水色と橙色の髪の毛の少女が入ってきた。

——あ、ヤベエ。

一夏が気がついた時には既に手遅れだった。音に反応して体ごと振り向いたのが災いして、入ってきた少女たちに向けてモノを見せつけるような形になってしまった。

「初めまして、お兄ちゃんた——」

「オニール、いきなりはいるのはや——」

悍ましいモノを見た。

一夏のまたの間に存在するソレを見て、少女たちはあまりの衝撃に立ったまま気を失ってしまった。

「……兄さん、それはマズイよ」

百春の何とも言えない視線が一夏の背中に突き刺さる。

「いやあ、まて。冷静に考えろ、確かに状況はマズイ。だがな冷静に考えろ、ここは男子更衣室だぞ。男が全裸でいて何が悪い。むしろいきなり入ってきたこの子達の方がマズくね?」

「どつちみちマズイよ」

さてどうしたモノか。服を着なければマズイと一夏は思ったが、もうどうしようもなかった。

「二人とも、いきなり更衣室に入るのは礼儀がなつてないわよ」

ここで登場生徒会長の更識楯無と来年度から編入してくる三人の代表候補生。

彼女たちの目に映るのは立ったまま気絶している可憐な二人の少女と全裸で仁王立ちしているむさ苦しい男。

さて、どちらが悪い?

裁判が始まろうとしている。

「これは、どういう事か——」

「君たちが、新しく編入してくる代表候補生達だね。私はこの学園で用務員を務めている蝶羽一夏だ」

なので裁判を始める前に閉廷させる。

主導権を握るのは自分だと言わんばかりに一夏は自分から楯無達に親しみやすい笑顔向けながら話しかけた。

「……隠さないの？」

楯無が閉じた扇子で一夏を指す。

「隠す？なぜ隠す必要がある。俺は自分の肉体に完璧な自信を持っている。恥かしい場所など何も無い」

「その気持ちわかる」

腕を組んだ状態の白色の髪の少女が一夏の意見に同意している。

「……………それに、言わせてもらうがここは男子更衣室だ。男子更衣室で男が全裸でいて悪い事があるだろうか…………いや、ない！だからこそ言わせてもらう、俺は全裸をやめない！」

仁王立ちのままに宣言する。

それを聞いた楯無は呆れ、白色の髪の代表候補生はウンウンと頷き、台湾とタイの代表候補生は顔を赤面させながら取り敢えず一夏の体を見ていた。

……………なんだこの状況。

「兄さん、服は着ろ」

「……………しゃーねえ」

弟に言われ、ようやく一夏は服を着た。

襟を直し、おかしい箇所がないのかを確認する。

「……………では改めて自己紹介を行わせてもらう。今現在この学園で用務員勤めいる蝶羽一夏だ……………そして世にも珍しい男性IS操縦者の一人だ……………以後お見知りおきを」

完璧な、親しみやすい笑顔を浮かべながら一夏は挨拶を行った。

平穩の終わりは近づいている。

## デートを遂行させろ

決戦<sup>デート</sup>当日、百春はI S学園から直通しているモノレールに乗り待ち合わせ場所の駅にきていた。

集合時間まではあと二十分近くある。少し早く来すぎたと思ったが、一夏がさっさと行けと言っていたので、さっさと来た。

この日のために一昨日の訓練が終わった後から、デートの対策会議が行われた。

メンバーは一夏、百春、アリサそしてアリサの友人数名によって用務員室で密やかに行われた。

場所は若者が集う大型ショッピングモール『レゾナンス』、そしてその周辺。

レゾナンス内部とその周辺にある店については既に情報が調べられてありデートに相応しい場所はピックアップされてある。

そしてお勧めのデートスポットも調べ上げた。

女性陣の意見を取り入れながら、

柔軟に対応可能なデートプランを練り上げた。

問題はないはず。

余計な障害が発生しなければ。

「と言うわけで、俺たちは百春<sup>ジヤ</sup>に好意<sup>マ</sup>をよせる人間<sup>ノ</sup>を排除しよう」

此処で言うジヤマモノは百春に好意よせている専用機持ち達の事である。

もし百春がデートを行うという事を知れば彼女たちは確実にこのデートを邪魔するであろう。

だから知らせた。

正確にいうと百春がデートをするという噂をワザと流して、彼女たちの耳に入るようにしむけた。

「でも良かったの？百春くんがデートするなんていう情報を流して。そんな事を知ったら彼女たちは邪魔をするはずよ」

「だからこそさ。彼奴らは確実に邪魔をする。偶然を装ったりしてな。それに来るのか来ねえのかわからねえ奴ら相手にするよりも、最初から来るってわかっている奴相手にした方が楽じゃねえか」

一夏とアリサも私服に着替えて百春のデートを影ながら支援できるようにしてある。



二人ともスタイルや顔が良く、加えて服装のセンスも良いために其れなりに目立つ。そんな事を言っているがこの二人、デートする気満々である。

最近ではデートがマンネリ化しているために何か刺激を求めていた二人、丁度良い機会なので弟のデートを勝手に利用させてもらおう事にした。

「さーで、それでは」

携帯の通話アプリを起動させて複数人同時通話状態にする。

「今回の作戦に協力してください。皆さんに連絡です。代表候補生を見つけたら直様此方に連絡をください。捕まえて元最強ヤツカイナを向かわせて説教させます………それではみなさん、今日は楽しみましょう」

こいつ、酷い。

携帯から「オー！」というやる気の入った返事が聞こえ、一夏は通話を切った。

「良いねえ、ノリの良い子達は」

一夏は亡国機業での立場上、同年代の人間と比べて人に対して指示を出すのに慣れている。

今回も大勢の人たちに協力してもらっている。

私服に着替えた複数の I S 学園の生徒たちが街に散らばり、百春たちの様子や代表候補生の動きを報告する事になっている。

なので一夏自身が直接動いて何かをする事はない。司令塔として状況を判断して行動すれば良いだけだ。

「お、来た」

待ち合わせ場所に百春のデートのお相手である五反田蘭がやってきた。

「服装に気合が入ってるのね。よっぽど今回のデートが楽しみだったみたい。これは応援しないとね」

「……楽しそうだな」

「それはそうよ、だって私の義妹になるかもしれない子なのよ。どんな子なのか気になるじゃない」

ニッコリとアリサが笑った。

「……………まあ、なんだ。そういうのは、アレだよ。色々終わってからだな。今はやらなきゃならない事があるから、それが全部終わったら……………な」

一夏も恥かしいのかアリサの方を見ずに答えた。

このオトコにもこんな一面があるようだ。どうやら内面にはまだまだ思春期の男子の心が残っているらしい。

「やあ久しぶりだね、蘭。合格おめでとう」

「はい！ありがとうございます！」

二人のデートが今始まろうとしている。それを見守る人間が幾人、それを妨害しようとする人間もまた幾人。

「服、似合ってるよ」

「は、はい!」

弟のために兄は珍しく力を貸している。一年前では絶対に考えられなかった光景だ。

「じゃあ、行こうか」

「いやあ、まさかこんなに簡単に全員見つかるなんて思ってもいなかったぜ」

レゾナンス入店から数十分後、百春のデートを邪魔しようとした一部の専用機持ちたちは一夏達の巧みな連携によってアツサリと捕獲された。

勿論百春には気づかれてはいない。細心の注意を払っていたから。

捕まえたのは篠ノ之箒、凰鈴音、セシリア・オルコットそしてシャルロット・デュノアの四名だ。

篠ノ之は今にも百春と蘭のデートを邪魔しようしていたところをラウラに見つかり捕獲された。

嵐とセシリアは物陰に隠れていたが、怒りのあまりISを部分展開してしまったところを楯無に捕まえられた。

そして最後に残っていたシャルロットは呆然とした様子で通路の真ん中に立っていた時に一般生徒によって捕獲された。彼女は今も心ここにあらずといった様子だ。

今はレゾナンス内部にあるカラオケ店のパーティールームの中に四人を連れ込み、他の協力者と共に千冬の到着を待っている。

「何故私たちが縛られなければならない!」

「そうよ、あたし達は何もしてないわよ!」

後ろ手に縛られながら抗議する専用気持ちたち。ISで暴れられては困るので現在は楯無が彼女たちの機体の待機形態を預かっている。

「してないだけでこれからするつもりだったんだろ? 推定有罪って奴だよ!」

「そんな理由まかり通りませんわ!」

「通る通らねえじゃないんだよ、通すんだよ………俺はな、今回の彼奴のデートを邪魔してほしくないんだよ。これは単なる俺のワガママなんだよ、兄としてのな!」

弟にはできる限り幸せになってもらいたいし、恋愛をして欲しい。

そんな願いで今回は動いていた。

「それにさ、今回くらいはあの子のターンにさせて上げろよ。テメエら今まで何回チャ

ンスあつたと思つてんだ？あつたチャンスも悉く潰してきて、それなのに一人の少女に  
ようやく回つてきたチャンスも潰そうとしている。だから今回は彼女の味方をしてあ  
げた………まあ、もしかしたらワンターニキルを決めるかもしれないねえがな」

ケラケラと笑いながら近くにあつたドリンクバーで注いだジュースの入つたコップ  
を煽つた。

「それにさ、俺は彼奴に幸せになつて欲しいんだよ。だから俺は彼奴の恋を応援するん  
だ。わかるか、この気持ち」

弟には恋をしてほしい。

そして平和な家庭を築いてもらいたいと思つている。

「だったら、私の恋を応援してくれ！幼馴染のよしみだろ！」

拘束された状態で篠ノ之箒は抗議した。

彼女は百春と幼馴染であり、それと同時に一夏とも幼馴染なのである。悲しい事に一  
夏本人はそんな事を一切思っていないのだが。

「応援？お前の？面白い事いうんだな、すつげえ面白いぜ」

そんな事を言っていないながら一夏の表情は一切笑っていないかつた。温度を感じさせな  
い無の瞳が箒を捉えている。

「なにが、可笑しい？」

「可笑しいさ。普通に考えてみる、誰が好き好んで木刀やI.S.を使って暴力をふるったりする奴と弟を結びつけようと思うんだ？お前らの噂は聞いてるぜ、なかなか酷い事をしていたらしいな……これがお前たちの恋を応援しない理由だ。理解できたか？理解できたな」

一夏の言葉に箒たちは無言を貫くことしかできなかつた。凶星だつた。何も言い返すことができなかった。

「シャルロットさんも何か言い返してくださいませ」

縛られているオルコットは、同じく隣で縛られているデュノアに反論を促した。

「え？……ああ、うん。そうだね」

だがどうの本人は心ここにあらずと言つた様子で、オルコットの話は一切聞いていなかったようだ。

「そろそろ来る頃だし、コッチは任せるぞ。後は頼んだぞラウラ・ボーデヴィツヒ」

一夏はコップをテーブルの上に置いて、近くにいた今回の捕獲任務を手伝ってくれたラウラに声をかけた。

「任された。教官がくるまでこいつらは見張っておく」

ソファーに足を組んで座つたまま、甘いケーキを食べながら返事をした。

「アリサ、俺たちもデートに行かないか？」

「ええ、良いわよ」

アリサと一夏は立ち上がり、テーブルの上に全員分のカラオケ代と二次会費用をおき、部屋と廊下を繋ぐ扉を開けた。

出口に向かう廊下を歩きながら、どこかの店にいくかの相談をする。二人とも今回の作戦を立てた都合上、頭の中にはこのレゾナンスの敷地内に入っている全ての店舗の情報がある。

欲しいモノがどこで購入できるのかすぐにわかる。

カラオケ店の出口についてたとき、一人の女性とでくわした。

「よう」

「お前たちは何処かに行くのか?」

出会ったのは織斑千冬、代表候補生達が百春のデートの邪魔をしないように見張って貰うために一夏が呼んだのだ。

今日は休日だというのに、服装はいつものスーツ姿だった。流石に替えは何着かあるようだが、微妙にシワができてきているのを一夏は見逃さなかった。

私服を買えと言いたかったが、口に出すのを直前でやめた。

「これから俺たちもデートなんだよ……………あんたも早く良い人見つけろよ。俺たちに先こされるぞ」

すれ違いざまに肩を軽くポンと叩いて、浮いた話を一切聞かない元世界最強である姉を励ます。

姉に対しては色々と言いたい事がある。

部屋を綺麗にしろだとか、酒の量を減らせとか、少しは家事ができるようになれとか、色々。

そんな思いを全て込めて肩をポンと軽く叩いたのだ。

「馬鹿もん、武勇が広まりすぎて寄ってくる男がいないんだ……」

振り向けなかった。

「……なら、自分から行けば良いだろ」

「……………逃げるんだ」

「……………すまねえ」

「……………あやまるな」

姉にはいつかきつと素敵な男と出会おうだろうと思いつながら、アリサと共にカラオケ店を後にした。

部屋に向かう千冬の背中それはそれは小さかった。



「私は下着を買ってくるけど、一夏くんもついてくる?」

軽く食事を済ませ、コレからの季節に着る服を買った二人。

一夏はある程度の用事を済ませたので、今はアリサが行きたい店にやっけてきている。

その店はランジェリーショップで男である一夏が入るのは難がある。

「いや、俺はやめておくよ」

「どうして? 私の付き添いなんだから大丈夫よ」

「そんな問題じゃなくてな、そういう時の楽しみに取っておきたいんだよ……俺はな」

この男にもつまらない性癖の一つや二つあるようだ。

「ふうん、それじゃあ楽しみにしていて。私買ってくるから」

ヒラヒラと手を振りながら、ショップの中に入って行った。

アリサを見送った一夏は近くにあった有名コーヒーショップでコーヒーを買って、空いていた席の一つに座った。

店内は他の客で煩雑しており、席が空いていたのも運が良かったと言えるだろう。

コーヒーを飲みながら、タブレット端末で送られてくる百春のデートの様子を見る。

どうやら順調のようで、一夏が心配する必要はなさそうだ。

「相席大丈夫ですか？」

店が混んでいるので、相席を求められた。声の主は女性、年齢は一夏と同じくらいだろうか。

「ああ、大丈夫だ」

ゼロは声をかけてきた女性を一瞥する事なく、返事を行った。

「それでは失礼して」

女性は一夏の対面に座った。

一夏はその間一度も女性を見る事はない。タブレットでネットニュースを見ている。

「それで、用件はなんだ………ガーパーラ」

一夏は目線だけを動かして、目の前にいる女性を鋭く睨みつけた。

「へえ、気づいていたの」

目の前に座っているのは、病的なまでの白色の肌、雪のような白色の髪、そして美しい琥珀色の瞳。

一夏が何度も戦場で戦ってきた人間、ネオのガーパーラだ。

彼女も休日なのだろうか、年齢にあった私服に身を包んでいる。センスは良い方だ。

「テメエはこの店に入った時から俺に向けて殺気を飛ばしてきてただろうが」

ガーパーラの存在に関してはこの店に入る前から気がついていた。

「あら、殺気で私かどうかわかるのね。嬉しい」

ニコリと美しく笑い、上機嫌に鼻歌を歌いながら名前の長そうな飲み物をストローでかき混ぜている。

こうしていれば二人とも普通の一般人に見えるのだが、一度戦場に出れば一騎当千の活躍を見せるそれぞれの軍の中の最強の存在。

彼此五年近く戦場で戦ってきた。既に相手の細かな癖や息遣いは完璧に把握している。

一夏も自身と並ぶ操縦技術を持つているのはガーベラだけだと思っている。それほど彼は彼女のことを警戒している。

「それで、この用件は？」

二人ともこの場所で殺し合いをする気はないようだが、互いに自分の愛機の待機形態を相手に見せて牽制している。

この場では殺し合いをしない。するならば相応しい場所で行いたい。

もしこの場で殺し合いをすればこの建物はすぐに壊滅し、死者の数は膨大になるだろう。

互いにそれぞれの組織の現在の最強戦力、こんな長閑なシヨッピングの雰囲気は似合わない。

「今日はね、貴方に会いにきたわけじゃないの。あのデュノアの小娘に伝えたいことがあったの」

「……なんだ」

「お父さんとお母さんは元気だから心配しないでね……つて。ほら、この前のフランスの戦いで別の部隊の子が誘拐してきたみたいなのよ……安否を心配してると思っただから伝えにきたのよ」

デュノア夫妻はあのフランスでの事件から消息不明になっている。

その原因が目の前にいる。

「……ふうん」

だが一夏は一切興味がなかった。本当に心の底からどうでも良さそうだった。

「それだけか？」

「もう少し楽しみましようよ。私はもつともつと貴方と話してたいの。普段は戦場でしか会えないから、こんな機会嬉しくて仕方がないの」

その姿はまるで年相応の恋する乙女のようにだった。長年片思いをしていた男の子と一対一で話すことができ、その嬉しさを隠すことができない。

そんな様子だ。

「コッチはそういう気分じゃねえな」

「私はね、貴方に恋してる……いえ、愛してるの」

彼女の美しい琥珀色の瞳は狂気の花に彩られていた。長年かけて一夏と戦い続けてきたことによつて彼女の中で芽生えてきた『狂気』がそれは美しい花を咲かせた。「私は貴方と戦いたいの。心の底から、心の果てまで全てを十全にそして完全に満たしてしまえるほどの戦闘で、私の殺意を示したいの。貴方との戦いだけが私を満たしてくれる。貴方と戦っている時が一番生きていけると実感できる。貴方は私と戦ってくれる。貴方との戦いは、私にとつては情事そのものなの。戦いの中で、私は私の全てを貴方にさらけ出している。感情も、理性も、本能も、何もカモを、貴方との戦いだけがさらけ出させてくれる。他の誰でもない、貴方との戦いが私にとつては何処までも心地が良いの。だからこそ、貴方が男で、そして貴方様だとわかつた時には心が肉体から乖離してしまいそうなほど嬉しくて、そして……興奮してしまいました。すいません、はしたないですよ。でも仕方がないので、だつて貴方を愛してるから、ア・イ・シ・テ・イ・ル・カ・ラ。もし許されるのであるならば、私は貴方の、貴方様の子を産み、育てたいのです。でもそれは許されないことなのでしょう、何故なら貴方様は我らの主に相応しい人物であり、私は貴方様の僕なのですから。ですが、もしーもしー産まれたのだとしたら、とても聡明で、女の子だつたら可憐で美しく愛嬌のある子に、男の子だつたら強く逞しく面構えの良い子になる事は間違いないでしょう。何故なら我らの子なのですから

………なんと幸福、思うだけでも素晴らしい!!!  
止まらない。」

「嘩々、初めてあった時から貴方はとても、ドス黒く、まるで黒真珠のように気高く、強く、冷徹に、その美しさを放っていた。だから、求めた！私は求めた。貴方を、貴方様を!!それが届かぬ願いなのだとしても私は求め続ける。この思いが決して叶うことのない一方的な、エゴで、色欲という大罪に塗れた穢れたものであっても構わない。それなら私は更に愛を燃やし、全ての理を、道を、因果を焼き払って貴方を手に入れる………だから、相応しい舞台で、戦いましょう!!!」

なんとというか、その気迫に思わず押されてしまいそうになる。圧倒的な、心の奥底から溢れ出てきて止まらない感情が空間に広がっている。

「………そう」

一夏の返答は非常に短いモノだった。

「そろそろアリスが買物を終えると思うから、帰ってくれないか?………ほら、俺今デート中なんだよ」

一夏はコーヒーを飲み終えると、静かに席から立ち上がった。

今の話をして、すぐに別の女の話題を出す一夏の精神は随分と肝が座っているようだ。意識せずにやったことなのだろうか、それとも相手を挑発するために態とやったこ

となのだろうか。

「今日は帰れ、ここは舞台じゃねえだろ。戦うなら、舞台の上で……だろ？」

「……ええ、そうね。今日は帰る。でも次は、次戦う時は心奥底まで楽しみましようよ」  
ガーベラも席から立ち上がり、まだ残っているコーヒーマグを持ったまま何処かへと立ち去って行った。

ひとまずはこの場で凄惨な殺戮が起きることは無事に回避した。だが足音はまた一歩、彼らの平穩に近づいてきた。

「お待ちせ、待った？」

アリサの買い物が無事に終わり、二人は合流した。アリサは店の紙袋を持っており、一夏はそれを持つとしたがアリサが拒否した。

下着が入っているので、気を使って遠慮したのだろう。

「いいや、待つてないぜ……それに、俺もお前に対して酷い事をしてしまった」  
「?なにがあつたの？」

「ちよつとな、因縁のある相手と出くわしたんだ。まあ、もう終わったがな」

「……そう、それなら良いんだけど……それで、これからどうするの？」

「晩御飯を済ませてから、帰るか？丁度この辺りに何回か行ったことのある店がある。味も心配はない……無論、金は俺が払う」

「ありがたい、それじゃあ行きましょ……でも、百春くんの恋路を見守らなくて良かったの？」

今回の外出の目的は百春のデートを見守ることだったが何時の間にかその事を疎かにしてしまっていた。

「まあ、大丈夫だろ」

兄なりに弟の事を信頼しているようだ。

「俺たちも俺たちで、デートを楽しもうぜ……この限りある平穩をね」

一夏は本能的に足音に気がついていて、だからこそ、今この時間を愛しい人と共に楽しもうとしている。

その後学園に帰った一夏は、百春からデートが楽しかった事を聞いて、満足した。



## 終わりが始まった日

その日はいたって静かな一日であるはずだった。

新入生が入学してから早一ヶ月と半、学園は一時的な落ち着きを見せている。

一年生たちは学園での生活に慣れ始め、楽しい学園生活に心を踊らせている。

二年生たちは進級したことによって後輩ができ、手本になろうとより一層学業に力が入っている。

最上級生の三年生はこれからの進路に向けて励んでいる。

これから夏休みが近づくに連れて、学園はまた騒がしくなっていくのだが、今はその騒がしさもなりを潜めている。

「……んで、何のようだ」

ゼロは今も用務員としての仕事を続けており、時間ができれば誰かの訓練を手伝っている。

男性IS操縦者という正体も知られてはいて、世間にも知られてはいるが、裏についている組織があまりにも強すぎて下手なことはできない。

本人も襲ってくる刺客は容赦なく殺している。

「ちよつと……………君にお願いがあるんだ」

朝の仕事が一段落した頃、ゼロは廊下でシャルロットに呼び止められた。

シャルロットがゼロに話しかけるのは始めてのことであり、ゼロも表面上は無警戒を装っているが心の奥では何があっても対処できるように警戒している。

「ならさつさとしろよ、コッチは仕事で忙しいんだよ。簡潔にまとめろよ」

何かが起きた際にいつでも拳銃を取り出せるようにISに命令を送った。

「……………僕の両親が誘拐されたの……………知ってるよね？」

デュノアの両親は数ヶ月前のネオによるフランス、パリの襲撃直後から行方不明になつており、ゼロはガーベラからネオに誘拐されたことを告げられている。

勿論その事はデュノアも知っている。

シヨッピングモールでガーベラから告げられてある。

「この前ね、連絡があつたんだよ……………ある事をしなければ両親は殺されるんだ」

デュノアの目に涙が浮かぶ。

辛いのだろうか……………

そんなモノは知らねえ。

デュノアがいくら涙を流しても、デュノアに関して何の感情もないゼロにとっては非常にもどうでも良い問題なのだ。

「だから………君の I S を貰う!!」

デュノアがいきなり I S から拳銃を呼び出してゼロに向けて構えた。構えられた銃。

引き金はすでに指がかけられてある。何の迷いもなくその引き金は引かれるであろう。相手に対して感情を持っていないから躊躇いは存在しない。

ゼロの銃の引き金が――

廊下に発砲音が響き、ゼロの拳銃から飛び出た殺傷能力が一切ないゴム弾がデュノアが持つ銃に直撃して手から弾き落とした。

デュノアの異変を察知していたからこそ、先に動く事ができた。

「遅いな、不意打ちかませよ。テメエが正面から俺とやれると思うなよ………今のはせめてもの情けだ」

ゼロは空いているもう一方の手に別の銃を呼び出した。

「今度はガチだ。テメエのドタマぶつ飛ばすくらい分けねえぞ………せめて理由くらい聞いてやる」

「君の I S を奪えと命令されたんだ。じゃないと父さんと義母さんを殺されるんだ。漸く手に入れかけた家族の幸せなんだ!! だから君の I S を奪う!!」

「そうか、だったら安心しろ。俺には関係ねえ! 同情一切しない。テメエの両親が死の

うと関係ない！俺にはコイツが必要なんだ。だからテメエに渡す筋合いなんて一切ないんだよ！わかったか？だから、諦めろ！！」

「そんなの諦められるわけ無い！！」

「そうかだつたら——」

話してもラチがあかないと感じたのかゼロはデュノアの肩に狙いを定めて引き金を引こうとした。

「何してるんだ兄さん！」

廊下の奥から、銃声を聞いた百春がやってきた。百春からみればゼロがデュノアを襲っているように見える。

「あいつ……」

一瞬だけゼロの意識が百春に向けられ、デュノアから意識が外れてしまった。

『リイン・カーネーション』！！！！」

一瞬の隙をついてデュノアが愛機であるリイン・カーネーションに身を包み込んだ。

両親の愛の象徴とも言える『リイン・カーネーション』、ソレを使って両親を取り戻す為にゼロに戦いを挑む。

「僕は二人を取り戻す！！」

「知らねえよ、『黒零』」

だがそんな事はゼロにとってはどうでも良い事なのだ。

間合いを詰めた両者は狭い通路の中で組み合う。

「君のI Sを奪えば、両親は帰ってくるんだ。そしたら……そしたら、百春に告白して、幸せな暮らしを皆でするんだ」

「そうか、おめでどう」

ゼロはデュノアの腕を弾くと胴体に素早く攻撃を繰り返し、最後にデュノアの頭を両手で挟んで外に投げ捨てる。

「そして殺す……テメエは今から敵だ」

「兄さん、待って！」

事態を詳しく知らない百春がゼロに近寄ってくる。

「何が起きたんだ!? どうして戦ってるんだ!」

「あいつが俺の相棒を奪おうとした。彼奴は敵になった。だから殺す……百春、俺が彼奴を殺す前に彼奴を止めてみる。できなければ彼奴は殺す」

ゼロはデュノアを追撃する為に廊下から飛び降りた。

「一体……何が起きてるんだ……」

「おら、どうした？俺を殺さないで両親は救えないぞ」

ゼロが弄ぶように次々と追撃の蹴りや殴打をデュノアに直撃させていく。敵となれば今まで戦ってきたように一切の容赦はしない。

だが百春に止めてみると言った手前、簡単に殺しはしない。

「君には勝てないのはわかってる……だから、僕は悪魔の力を借りる」

次の瞬間、デュノアの乗るリイン・カーネーションのバイザーが降りて彼女の顔を隠した。

「これはネオから与えられた力。君を倒す為に僕は兵器になる」

リイン・カーネーションのボディカラーが変わっていく。

オレンジから漆黒に変わっていく。

彼女の実母が愛した花の名を冠する機体が、彼女の手によって穢されていく。

今の両親を守るために、彼女はその身を闇の中に染めていく。

「これは兵器の力、僕とISの意思を無視して敵を倒す為の最適解を選び続ける最悪のプログラム」

「成る程、胸糞悪い」

ISの意思を重視するゼロにとってみればISの意思を無視するこのプログラムは非常に腹立たしかった。

「僕は、君を倒す」

「やってみろよ」

これは終わりの始まり。

IS学園崩壊まで、あと数時間。

## 第125話

「ああ、さつきよりか大分まともじゃねえか。まあそれもそうか、そうじゃねえと意味がねえよな。親の愛情の象徴ともいえる機体をそんなになるまで堕ちて穢したんだからな」

「なんで、なんで……この力を使っても勝てないんだ！」

IS学園中庭で繰り広げられているゼロとデュノアの戦いは両者実力が拮抗しておらず、ゼロによる一方的な戦いが広がっている。

ネオによって渡されたプログラムによって変質してしまった『ライン・カーネーション』は搭乗者の意思を無視して敵を倒すために必要な最適解の戦闘手段をとり続けた。

しかし、その動きはゼロと『黒零』に見切られ、カウンターを逆にもらってしまった。けっして『ライン・カーネーション』が弱いわけではない。プログラムが行う動きはゼロにとっては非常にヨミやすいものなだけであった。

正確無比にゼロを倒そうとするがあまり、最短経路で倒すための戦いをしているために、攻撃が来る場所が非常に予想しやすい。



プログラムのおかげで性能は最大限引き出せてはいるが、厄介さで言ったら元のデュノアのほうが上だったのかもしれない。

あえて言うならば、遊び心が存在しないというべきなのだろうか。

「簡単にヨメてしまうな、おおよそ試作機か何かを渡されたか…… それともそんな玩具で俺に勝てるかと本気で思っているのだろうか」

ゆっくりとわざと歩いて、地面に膝をつけているデュノアに歩み寄っていく。相手が次にどんな手を打ってくるのか、ゼロは待っている。そして何が起きても対処することが可能であると彼は確信している。

その時だ。

黒零のセンサーに新たに数機のISの反応があった。そのどれもがIS学園のものではなく、また束が作ったISコアの反応とも異なっている。

「……………無人機どもか」

ゼロを取り囲むように複数の無人ISが出現した。それらはパリで多大な被害を生させた機体によく似ているが細部が少し異なっているので改修機なのかもしれない。

ゼロの視線が無人機の両肩に備え付けられてある巨大なバインダーに向けられる。アレはパリでの戦いのときに使われた自動兵器、あれだけで千を超える数の市民が殺さ

れたことをゼロは記憶している。

そんなものがこのI S学園に解き放たれたらどうなるのか、考えるだけでも冷汗が無意識のうちに出てしまう。

今は一か所に固まっているが、もし無人機すべてが学園中に分散してしまったならばゼロ一人で対処するのは、非常に困難である。

「……何が目的だ？」

何故現れたのかを考える。デユノアがあらかじめ仕込んでいたものなのか、それとも別の誰かが何らかの目的で仕込んでいたのか。

後者なら少なくとも他にネオの人間がいる事になる。

「……………俺以外が目的か？俺をここに縛り付けておく事が目的なのか？」

ゼロは一つの結論に辿り着いたが、それに対する確信は一切なかった。

直感とも言えるモノであり、道筋は一切作り上げられていない。

「だとすれば、敵は……………」

ゼロの視線が不意に下に向けられる。それがなぜそんな事をしたのか一切わからない。

だが、わかる。

「下か」

学園の地下には様々なものがある。例えば学園のセキュリティを管理するメインコンピュータールーム、いくら学園のセキュリティが侵入者に対して簡単に破られてしまうようなガバガバなものであったとしても、ないよりかあったほうが心強いのだ。だから敵はそこを狙っているのかもしれない。

上にいる無人機やデユノアは本来の目的の為の囮、だがデユノア自身はその事を知らないのかもしれない。

いや、むしろ知らないほうが敵にとつては都合なのかもしれない。何も知らずに行動してもらえば、勝手な行動をとられる心配がないと思われるからだ。情報を与えず、人質を取ることと判断能力を奪い操りやすくする。

「面倒な事態になりやがったな。すでに敵が侵入している可能背が非常に高いな……こいつらをさっさと殺して、下に行くか。それとも、他の奴に任せて俺が下に行くか……」

相手が動く気配はない。今のうちに誰かが来てくれればうれしいのだが……  
「兄さん！」

白式を身に纏い、百春とその後ろから風鈴音が増援として来てくれた。百春の実力があれば何も心配する必要がないとゼロは心の中で思った。

「いったい何が起きてるんだ！どうしてシャルと戦っているんだ!?それにシャルのIS

の色だっていつもとは違うし——」

「話は後だ。ここは任せたぞ、俺は地下に向かう。すでに敵が侵入している可能性が高い」

「……………? どういうこと?」

百春はゼロからの返答を求めるが、ゼロは何も言わずに近くにあった地下への進入口に入っていった。残された百春と鈴音はゼロの様子から何か面倒なことが起きていると察することができた。

そしてまた、厄介なことを押し付けられたということも理解することができた。

「兄さんは面倒ごとを押し付けるのが得意みたいだね」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ」

残された二人は武器を構える。取り敢えずは目の前にいる敵を倒すのが先決である。

凰の乗る『甲龍』は第二次移行を完了させている。

こうなったのはつい先日ので、本人曰く『振り切れた』から第二次移行をする事ができたそうだ。

機体名は『凰仙甲龍』、この進化によって甲龍の持つ龍砲は更なる進化を遂げる事ができた。

装甲は胸部を中心に強固になり、機動能力も破壊力も飛躍している。

性能は『リイン・カーネーション』に劣ってはいるが、鈴音は今のデュノアに負ける気はしない。

「シャルロット……あんだ、自分が何をしているのか理解してるの？」

非固定ユニットの龍砲の全ての銃口がシャルロットに向けて突きつけられる。

彼女の中では今のデュノアは敵認定されているらしい。

「鈴にはわからないさ……こうするしかないんだ。彼を倒さないといけないんだ………こうしないと、僕は………私は幸せになれない」

既に彼女の精神はネオによっておいつめられ、正常な判断ができない状態にまで陥ってしまっている。

「シャル………」

「百春、私と一緒に来て………アイツを倒そう………そうすれば、そうしたら、幸せになるから………みんな、幸せになるから」

もはや壊れているのかもしれない。

「それはできない」

縋ろうとする手を百春は払いのける。今の彼にデュノアの手を掴む気はない。

彼には決意がある。

「僕には、僕の世界がある。その世界は今の君の世界とは相入れない………だから、僕は

その手を拒む」

「……………そうか、アイツが、アイツが君を誑かしたんだ……………なら、私は——」

その時、鈴音の放った龍砲の弾丸がデュノアを吹き飛ばした。

「……………鈴」

余りにも突然な出来事に百春は呆然と驚くことしかできなかつた。

「百春、無人機は任せたわ。私はあの馬鹿を止めてくる……………安心して、今の彼奴に負ける気はしないから」

強い覚悟を持つているということは、百春からも感じられた。

「ここは何も言わずに任せた方が良さそうだ。」

「わかつた。任せた」

「ええ、任せられたわ」

デュノアを鈴音に任せて、百春は無人機の元へ向かつて行つた。

「さて、彼奴を止めて来ますか」

## 第126話

——失恋したかもしれない。

——でも、彼を愛した事を悔いる事はないだろう。

「龍砲!!」

「なめるな!」

両肩から放たれた龍砲はデュノアの動きに簡単にかわされてしまう。

近接格闘ならば鈴音に部が有るが、中遠距離になるとデュノアに部が有る。

そのため鈴音は常に距離を詰め、デュノアは距離を取ろうとしている。

「この距離ならリン・カーネーションの方が有利だよ。中距離ならね!」

銃を乱射しながら距離を取り続けるデュノア、その動きは彼女の意味によるものではなくプログラムによって発生している。

「そうね、今までならね」

一閃。

世界を貫く、超圧縮された龍砲の弾丸がデユノアの肉体に直撃し、機体を大きく弾いた。

デユノアにとっては予想外だった。甲龍の龍砲の射程距離も威力も十分理解しているつもりだった。

だが今の一撃はソレを超えていた。

「今のは……………」

戸惑うデユノア、予想外の出来事に機体の動きが止まる。

「第二次移行する際に手に入れた龍砲の新たな力よ。極限まで圧縮させた超遠距離、超高威力の龍砲。そしてそれとは反対に拡散させる龍砲。それが鳳仙甲龍の新たな力の一つよ」

「そんなにベラベラと喋って大丈夫なの？手がわかるよ」

そんなデユノアの発言を聞いて、鈴音は笑った。言われなくてもわかっていると言いたげであった。

「あんた、いつもより馬鹿ね。勝てるから教えてるに決まってるじゃない……………それにね、手がコレだけなわけじゃないでしょ」



鈴音は勝気な笑みを浮かべた。

甲龍の非固定ユニットである龍砲が不気味に漂い、鈴音の目の前にやってくる。

「接続」

龍砲の後方に穴が空き、そこめがけて鈴音が勢いよく両手を突っ込んだ。

繋がる。

「今のあたしはこの間までのあたしとはまるで違うわよ。今のあたしは……………フ  
リキレテル」

丸みがあった龍砲から五本の指が飛び出す。新たな手を開いたり閉じたりさせながら、鈴音は機体の状態を確認する。

「どうしたの、シャルロット。そのバイザー越しでもわかるわよ、あんた今酷い顔してるわね」

「……………リイイイイン!!!」

「うるさいわね、少しは黙りなさいよ。あたしは百春と違ってあんたの悩みを聞いてあげるほど優しくくないのよ」

鈴音が両手に接続された龍砲ごと構えを取る。いつもより長大で強力な腕は迫力も違う。

「あたしにできるのはね、あんたをぶん殴って止めるくらいよ!」

自慢の推進力を生かしてデュノアとの距離を一気に詰めた。

左手を硬く握りしめ、デュノアめがけて全力で振るった。

「なめないですよ！」

デュノアはその一撃をしゃがんで躲し、すぐにスラスタ―を使って後ろに下がった。

「あんたが、ね!!」

だがこれは鈴音の狙いであつた。

続けざまに大きく開いた右手を前に突き出して広域衝撃砲を掌から放った。

衝撃波はデュノアを飲み込み、彼女の動きを止める。

龍砲を本体と繋げることによって、エネルギーを直接貫うことが可能になつたので威

力は遥かに上昇している。

「鈴は悔しくないのか!!」

近接戦を挑まれ、振り切れなくなつたデュノアは近接用の武器と盾を呼び出して鈴音の攻撃をなんとか受け止める。

拳に龍砲を装着することによつて通常の殴打だけではなく、龍砲も放てるようになった。

それ故に相手は距離を詰められたら対処が困難になる。

「……………何が」

「百春が……あの蘭って子に盗られちゃうかもしれないってことだよ!!」

このところ百春はIS学園に進学して来た五反田蘭と仲良くしている事が多くなつた。

それがデユノアにとってはどうしようもなく、嫌だった。

自分の前から百春が、好きな人がいなくなるのではないのかという不安でいっぱいだった。

彼女からみれば蘭はいきなりやって来た泥棒猫のような存在、だが鈴音から見れば蘭は昔からの恋のライバルであり、むしろデユノアがいきなりやって来た泥棒猫のような存在なのだ。

「そうね……確かに嫌かもね」

「そうでしょ! だったら——」

「でもねえ、蘭は真正面から戦って勝ち取ろうとしている。例え少し猫をかぶっていたとしてもあんたよりは可愛いものよ……それにね、あたし思ったのよ。百春が幸せならそれでもいいかもって」

鈴音が左手でデユノアの右腕を掴んだ。

「でもあんたの考えは百春を幸せにしない!!」

空いた右手の龍砲が元の形に戻る。

「まだ勝負は決まったわけじゃない。今からでも百春を振り向かせる事ができるかもしれない……………だからあたしは、正々堂々と胸を張って百春にアタックする」

鈴音の右手にエネルギーが蓄えられる。

「これからは躊躇わない。蘭とだつて戦つてみせる。自分を磨いてもつと良い女になつてみせる……………たとえ負けても構わない。未来のあたしは過去のあたしに自信を持つて言える」

究極まで圧縮された龍砲の一撃、今現在の甲龍が使う事のできる最強の攻撃。

「『あいつに恋をして良かった』つてね」

渾身の右ストレートと同時に極限まで圧縮された空気の弾丸が龍砲から放たれた。

龍砲の弾丸はリイン・カーネーションの胸部に直撃。一瞬で機体は大地に引き寄せられ、叩きつけられた。

「それにね、あたしが恋した人には幸せになつて欲しいじゃない……………たとえそれが、あたし以外の誰かが隣にいても」

鈴音は既に決めている。

もう後悔はしないと。

そして今までの自分の浅ましさを悔やんでいる。

「だから、あんたも少しは目を覚ましなさいよ……………この一撃で」

鈴音はデュノアが倒れている地面に向けて龍砲が接続されてある両手を前に突き出した。

「カタをつける!」

両腕の龍砲に力がたまる。

発射口は口を狭め、エネルギーを圧縮させて力を高める。

「龍砲!!」

両手の砲門から放たれた弾丸は地面に倒れ行動不能になっているデュノア目掛けて落ちて行った。

反動も凄まじいモノで、鈴音もスラスタを使ってなんとか態勢を維持させてみせた。

撃ちだされた弾丸はデュノアの乗る機体に直撃し、クレーターを作り上げながらデュノアを地面にめり込ませる。

ライン・カーネーションの色が黒色から元の鮮やかな色に変色する。  
動きが止まり、活動停止を示す。

鈴音はそれを確認するとユツクリと高度を下げてデュノアに近づく。

その際に両手につけていた龍砲が腕から分離して元に戻る。

「気分は晴れた?」

地面に降り立った鈴音は未だ地面に仰向けに倒れているデュノアに向けて、少しだけ突き放すように話しかけた。

「……………鈴、僕は……………僕はどうしたらいいの？」

「知らないわよ。それを答えて上げられるほど、アタシはあんたの事を知っているわけじゃない……………」

せいぜい一年の付き合い。その時間で相手の全てを知れるとはとうてい思えない。ましてや相手は恋のライバルなのだから。

「僕は……………幸せになりたい。みんなと一緒に……………みんなと」

目を腕で覆い隠しながら、デュノアは泣いた。それは何が原因で流れた涙なのか、彼女にはよくわからない。

「だったら、自分で考えなさい。あたしは百春の援護に向かう……………ちよつと嫌な予感がするからね」

鈴音はデュノアを残して、無人機と戦う百春の元に向かって行った。

「僕は……………どうすれば」

愛する人間と両親を天秤にかけながら、一人残されたデュノアは涙を流した。

## 第127話

「……………一人か」

鈴音がデュノアと戦っていたちようどその頃、ゼロはIS学園の最深部にあるメインコンピュータールームの目の前までやって来ていた。

メインコンピュータールームに続く通路は所々狭くなっており、ISに乗ったまま通るには不便だったので、ゼロは今ISには乗っていない。

コンピュータールームの内部には二人の人間がいる事が確認できている。中に突入すれば戦闘になるのはまちがいない。

だが銃を使う事ができない。

メインコンピュータールームの中には重要な機材がある為に銃だと誤って傷つけてしまう可能性がある。そのため、ゼロは今両手に漆黒の刃の刀を持っている。

「二人だけとは舐められたモノだ……………いや、余程自信があるといった方が正しいだろう」

メインコンピュータールームにいるのが二人だと言う事はわかっている。

特別な機械を使ったわけではないが、そういうのは何となくわかってしまうのだ。勘  
というか、第六感的な奴だ。

「さて、行きますか」

行動開始。

ゼロは手始めに扉を一太刀で両断してみせた。そしてすぐに扉を払いのけて中へ侵  
入。

中にいたのはやはり二人………双子？なのだろうか、どちらも似たような体格で、  
似たような顔立ち、似たような服装、違うところと言えば白銀の髪に入っているメッ  
シユの色とオッドアイだろう。

メッシユの色は片方が赤で、もう一方が青。

そしてオッドアイは両方とも橙色と水色なのだが、それぞれ左右が逆になっている。

「来たね」「来たのね」

双子はゼロの方を向くなり、いきなり拳銃を突きつけてきた。この拳銃は特殊なデザ  
インをしております

、元はIS用の武器なのかもしれない。

だがゼロは拳銃を向けられても止まる事はない。まずは二人をコンピューターから引  
き離すために全速力で突撃した。



引き金は迷いなく引かれ、ゼロの頭目掛けて真っ直ぐに二発の弾丸が飛んで行った。このままいけばゼロの頭を貫く……はずだったのが、弾丸はゼロの目の前で、まるでそこに壁があるかのように急停止した。

「アレはチャクラ」「非常に厄介」

ゼロは訓練を重ねる事で、ISを待機状態にしてもチャクラを展開できるようになった。

そのおかげでISなしの肉弾戦においても、かなり優位になった。

ゼロの振るう刃を躲しながら双子は巧みな連携でゼロに銃弾を放ち続ける。

その連携はゼロから見ても『上手い』と素直に評価できる動きではあった。

連携に全くの異和がない。

完璧な連携。

普通の連携が必ずしも足し算になるとは限らないが、この双子の連携は掛け算のように互いの力を高め合っている。

一対一なら負ける事はないが、今の一対二の状況ならば負けてしまうかもしれない。

「厄介だな……チツ」

ゼロはセキュリティを確認するために、コンピューターの画面を確認して思わず舌打ちしてしまった。

画面に映し出されていたのは、セキユリティ解除の画面。しかも完了してある。つまり今のI S学園は無防備な状態に近い。

この学園のセキユリティを守るプログラムは世界でもトップクラスに頑丈なはずだが、この双子はそれを突破してみせた。

「無駄な争いは意味がない」「任務は果たした。撤退する」

双子は目的を達成するやすぐにゼロが切り開いた扉か室外に出て行った。

「待てやー……ッ!?!」

その直後、コンピュータが爆発を起こした。正確にいうならばコンピュータにつけられていた爆弾が爆発したのだが。

ゼロは爆炎から身を守るためにI Sを展開し、地面や天井を突き破って最深部から一気に地上へと飛び上がった。

「最悪だ………初動が遅れてしまった」

爆炎を突き抜けた先にはいつもとは違う日常が広がっていた。

一般生徒には避難指示が出されており、教師の指示に従って避難場所まで急いで逃げている。

戦う事のできる専用機持ちや、指示をしている以外の先生はI Sに乗り込んで無人機達と戦っている。

無人機の数も先ほどまでよりはるかに多い。下手すれば五十は超えている。

「一夏くん！」

ゼロが地上に飛び上がると直様近くにいたアリサが飛んできた。

アリサはゼロに近づきながら、持つている遠距離用の狙撃武器で次々と無人機のセンサー部分を撃ち抜いて弱体化させている。

両手に加えて、スカート型の装甲が変化して出来上がった隠し腕とも呼べる二本の腕……合計四本の腕全てに狙撃用の武器が持たされてある。

流石に四本の腕全てを一気に操る事はアリサの脳に負担がかかってしまうので、スカートの二本はアイリスのコアに操縦を任せてある。

「これどういう状況なの？」

「最悪な状況だ。本当に最悪な状況だ……ネオの奴らが本気で戦争を仕掛けにきたみたいだ」

ゼロも指先から次々とエネルギーの弾丸を放ち続けて無人機の動きを止めていく。

「雨後の筍みたいに数がドンドン増えてるわね……確かにこのままだと完全に対処しきれなくなる」

今現在IS学園の各所では専用気持ちや教職員、そして上級生たちが無人機の対処をしている。そしてそれ以外の生徒たちは避難場所に急いで向かっている。

「いつこんな数の無人機の待機形態を設置させた？……………ヤバイな。本隊が……………」

曇天を見上げながら、ゼロは忌々しそうに呟いた。

「皆！焦らないで！避難場所はすぐそこだから」

戦闘に参加していない一般生徒は、核シエルター以上の強度を誇るとされている緊急避難所に向けて歩みを進めている。

一年生は非戦闘員である上級生の指示にしたがいながら、秩序を守りながら避難場所に向かっている。

避難する人たちを数人の上級生がISに乗って護衛している。

「百春さん、大丈夫かな……………」

避難する生徒の一人、五反田蘭は思い人である織斑百春の事を心配しながら避難場所に向けて歩みを進めていた。

彼女はこの学園に入ってから百春に対して猛烈なアピールを仕掛けていた。昨年的一年間はろくにアピールができなかったから、それを埋めるかのように猛烈すぎるア

ピールをした。

それ故に篠ノ之やオルコット、デュノアといった百春に恋をする面々に目を付けられていたが、彼女は誘宵アリサに何故か可愛がられていたので何も手を出されなかった。

「無事でいてください」

彼女が今できる事は、戦っている人たちの邪魔にならないようにすみやかに避難する事だ。

それは彼女自身がよく理解している。

力がないから、自分ができる事をするのだ。

「キヤアアアアアアアア!!!」

避難する生徒たちの一角から悲鳴が上がる。

蘭が驚いて声のした方向を見ると、そこには数機の無人機が避難する生徒を今にも殺そうとしていた。

「させない!!」

だがそこに上級生が無人機にタックルをかまして、逃げ惑う生徒たちから強引に引き離した。

「急いで逃げて!」

だがこの瞬間、避難する生徒を護る護衛役はいなくなってしまった。

その一瞬を見計らっていたかのように新たな無人機が蘭の目の前に現れた。

「あ……………」

蘭の目から無意識のウチに涙が零れ落ちていった。

死ぬ事を理解してしまった。

恐怖で足が竦んでしまう。動こうとしても体は命令を聞いてくれない。

これから蘭がどう動いても目の前にいる無人の兵器は彼女に対して無慈悲に武器を振り下ろすだろう。

（ああ、百春さんに告白すれば良かったなあ……………）

蘭は走馬灯を見た。

これまでの人生の記憶、楽しかったものから辛かった記憶まで。

そして後悔した。

百春に告白すれば良かったと。

「好き……………でした」

蘭は瞳を閉じた。悔いしか残っていないが彼女にやれる事はない。

彼女が今思う事は百春への恋心だけだった。

もう一度やり直せるのであれば今度は一切の躊躇いなく、エゴイズムに塗れてアップローチをするのだろう。

(告白する。絶対に告白する)

死ぬ覚悟はしたが、それでも怖い。

いつ武器が振り降ろされるのかわからない。

……………だが、いつまでたつても刃が振り降ろされる事はない。

もしかしたら既に切られていて、本人が気づいていないだけなのかもしれない。

「蘭、大丈夫？」

優しい声が無人機がいる場所から聞こえた。

その声に蘭は驚き、ユツクリと目を開けた。

そこにいたのは純白と黄金の色合いの調和を完璧に取れた騎士だった。背中からは一対の大きな翼を生やし、右手には美しい剣を持っている。

そして騎士の足元にはついさつきまで蘭を殺そうとしていた無人機が両断され、機能を停止させていた。

それどころか先ほどまで足止めされていた無人機たち全てが破壊され、機能停止している。

その正体を蘭は知っている。

「あ……ああ……」

蘭の目から再び涙が零れ落ちていった。

今度は悲しみなどによるものではない。安堵や嬉しさが入り混じった、悲しみのない涙が彼女の目から流れ落ちて行った。

力が抜け、その場に尻餅をついてしまった。

「立ち上がれないなら、チョット待って」

騎士は蘭を優しく抱き上げた。いわゆるお姫様抱っこの形だ。

「え、えーちよ、ちよつと待ってくださいー」

恋心を抱く人からそんな事をされるのは嬉しいのだが、余りにも突然で、そして命の危機を脱したばかりなので戸惑いの方が大きくなってしまっている。

スラスター使つてスムーズな動きで逃げる生徒の元まで蘭を連れていく騎士。

そこに一人のＩＳに乗った女子生徒が近づいてきた。彼女は蘭達を護衛していた生徒の一人で、真つ先に無人機に突撃したのだ。

「ゴメンなさい、私たちがもつとしっかりしてたら」

「大丈夫だよ、相川さん。このまま護衛を続けて、それが終われば彼女たちと一緒に避難所に来てくれ」

「え？でも、私たちだって戦え——」



「ダメだ」

相川と呼ばれた少女の言葉を騎士は強く抑え付けた。

「敵がこのまま攻撃を終えるとは思えない。もう少しすれば必ず本隊がくるはずだ。そうなければ少なくとも代表候補生以上の実力がないと太刀打ちできない……だから、わかつてくれ。君たちには死んで欲しくないんだ！」

「……………わかった。無事でいてね」

納得はしたくないが、納得せざるを得なかった。

実力が足りない。

それだけで戦えない理由には十分すぎるのだ。

悔しいが領くしかなかった。

だからこそ、できる限りの檄を飛ばす。

「相川さんも無事でいてね」

「うん」

騎士に返事をして、相川は避難する生徒たちの護衛に再び向かった。

「蘭も、大丈夫？ 僕はもう行かないといけなから」

「は、はい……あ、あの」

背を見せて今にも飛び立とうとする騎士に、蘭は思わず声をかけてしまった。

止めてはいけないとわかっているのに、これだけは言わずにいられなかった。  
感情が溢れ出し続ける。

今なら言える。

「百春さん——」

命を救ってくれた恩人で、思い人である百春の背中を見ながら、蘭は勇気を振り絞る  
事を決めた。

「何？」

「好きです！ずっと、ずっと、好きです！」

思いがけないタイミングでの告白であった。

百春は急な告白に驚いて固まってしまった。

そして言った本人である蘭もまた、何故突然こんな事を言ってしまったのかと思い、  
顔を真っ赤にしながらか固まっている。

「あ……ああ、その」

先に動いたのは百春だった。

照れているのか、器用に機械の手でヘルメットを搔いている。

「嬉しい」

その言葉を聞いて蘭は。パアツと顔が明るくなった。

「でも！今はそれに答えられない」

今度はシユンとした顔になった。

「この戦いが終わって、色々片が付いたら……その時だ」

「……はい！」

百春が乗る白式の大きな翼が淡い光を放つ。

「百春さん無事でいてください」

「ありがとう！」

百春は敵がいる場所に向けて一気に飛び立った。

残された蘭の顔には自然と笑みがこぼれていた。

不謹慎かもしれないが、喜びがそれを上回ってしまう。

「百春さん、無事でいてくださいね」

「さあ、ソロソロ行くとするか。平和ボケしている者共に見せてやるぞ。理想郷を」

## 第128話

曇天を貫いてI S学園に向けて降下してくる無数のI S達、明確な殺意を持ったネオの猛者共平和ボケをしている生徒たちに向けて襲いかかろうとしている。

「なんだ……………アレは？」

I S学園二年生、篠ノ之箒は空を見上げながらそんな事を呟いた。

彼女やその周りにいる代表候補生達——オルコット、鈴音、簪の三人——の足元には無数の無人機の残骸が転がっている。全てが彼女達の手によって破壊されたものだ。

「何って言われましても……………」

近くにいたセシリア・オルコットは、ご自慢の愛機に備え付けられてある超望遠スコップを使って空に浮かぶものを見る。

彼女の乗る機体ならば天高く浮かぶ十二かを見ることが出来る。

「……………巨大な建築物でしょうか？ですが、完全に空に浮かび上がっています」

したから見たそれは美しい円を作り上げていた。つい先ほどまでソレを見られなかったが、突然としてソコに現れた。

浮遊要塞とでもいうべきものなのだろうか、超巨大な建築物がIS学園の真上に浮かんでいる。

「何か来ます！」

セシリア突然大声をあげたかと思うと、直様手に持っていたライフルを構え天高く掲げた。

浮遊要塞から八つの光が射出され、高速でIS学園に向けて落下して来た。

そして八つの光に続くように大量の機体が浮遊要塞から飛び出してくる。

「敵襲ですわ！全てコアの反応があります！」

その言葉と同時にセシリアは迫り来る八つの光に向けて弾丸をはなった。

そしてそれに追従するように他の専用機持ちたちも天にむけて遠距離用の攻撃を放った。

だが迫り来る八つの光はその攻撃の全てを躲して箒たちとの距離を一気に詰めた。

速い、普通のISの速度よりも明らかに速い。

光は美しい軌跡を描きながら箒たちに襲いかかる。

「何だ!? こいつら!」

箒はその攻撃を両手に持った刀でいなしていく。

候補生は互いの背中を庇い合うように背中合わせになって一点に固まる。

「どうする! これ結構キツイわよ」

鈴音は双牙天月を構えながら龍砲を放って牽制を続ける。

「凌ぐしか……ない」

更識簪は荷電粒子砲をあたり一面にばら撒きながら相手の動きを止めようとする。

だがそれでも八つの光は止まる事なく彼女たちの周囲を高速で飛び回っている。

やがて光はそれぞれ分散して少し高くなっている場所に着地した。

「何だ、つまらん奴らだ」

八つを包み込んでいた光が収まると襲撃者たちの姿が見えるようになった。

蜥蜴、兎、蝙蝠、蠅螂、狐、仙人掌、鰻、狼。

襲撃してきた八人の姿は様々だ。

統一感があるわけではないが、全員が生物をモチーフにしている事がよくわかる。

「ねえ……あれって」

「ええ、確か大晦日の時に襲撃してきた奴らでしょうね。報告されてた特徴と一致する

………最悪ね」

八人はあの大晦日の最後に現れた八機の生体同期型ISであった。

専用機持ちたちの間に緊張感が走る。

今日の前にいるのは先ほどもまでの無人機よりも遥かに強い。正直なところ、今の彼女たちがタイマンで勝てる相手ではないだろう。

それが八機。

絶望的な状況である。

「救援を呼ぶのは確実ね、アレの相手は私たちじゃ厳しい」

救援を呼ぶにしても誰に助けてもらうか……今のこの学園の最高戦力はゼロと百春の2人、そして次に実力があるのはアリサ、楯無そしてラウラの三人。

少なくともこの三人の力は必要になる。

だがそんな事は敵も考えているのかもしれない。既に彼らに対して何らかの対策をしているであろう。

特にゼロと百春の2人にはそれなりの戦力を送り込んでいるのは間違いないと見える。

「ヒヤハハハハ！こりゃあ良いぜ。代表候補生程度だったら、この数いても余裕だろ」

鰻をモチーフにした形のISが下卑た笑い声をあげながら、四人に向けて武器を突



きつけている。

「油断するな、我々の目的は『王』のために場を作り出す事であろう」

鰻の近くにいた狼をモチーフにしたI Sが、鰻の言動を諫めた。

「そうだ、それこそが我ら『八神官』に与えられた使命であるはずだ。ゆめ、忘れるな」  
そして蝙蝠型のI Sが周りにいる他の奴らの気を引き締らせるために鋭い視線を送った。

「あーあー、相変わらずお前はお固い野郎だ。蝙蝠野郎のクセに『王』への忠誠心は凄えんだな。蝙蝠からワンちゃんに改造したらどうだ？」

鰻はゲラゲラと笑い、触手ような手で拍手しながら蝙蝠に向けて軽口を放った。

「鰻とは……ナヨナヨした、軟派な貴様に相応しい姿だな」

「おーおー、言いたければ言えよ。柔軟に受け流してやるからさ。ヒヤハハハハハ!!!  
痛ッ!?!」

鰻の頭に弾丸がぶち込まれた。

相当な威力があつたのか鰻は少し吹き飛ばされた後に頭を抑えながらゴロゴロと地面を転げ回っている。

「痛え!!痛え!!」

「少し黙っている、傷は浅いだろうが………どういふつもりだ。貴様の親がどう

なつてもいいのか？ シャルロット・デュノア」

蝙蝠が空を見上げると、其処には巨大な対物ライフルを構えたシャルロット・デュノアが其処にはいた。

鈴音との戦いで生じてしまった傷は元に戻っており、万全の状態でこの戦いに挑んでいるようだ。

「僕は決めたんだ。父さんたちも守る。そして君達も倒すつて……………それで僕は幸せになる。全部勝ち取るつて決めたんだ!!」

デュノアが脇に抱えた対物ライフルから弾丸を放った。弾丸は真つ直ぐに進み、蝙蝠を狙うが寸前の所で空に飛び上がられてかわされてしまった。

他の七機も同様に空へと飛び上がった。

「そうか、ならば死んでもらうか……………来い」

蝙蝠が右手でフィンガースナップを行うと、何処からか二機の無人機がやってきてシャルロットの前に立ちふさがった。

二機はそれぞれ右手と左手が異様な形をしており、まるで夫婦のような姿をしている。

無人機の異様な形の腕——それは腕の関節が三つ以上あり、長さも自身の大きさと同じくらいになっている。

そして何よりも先に目に付くのはその腕の先にある鋭利な爪であろう。

「貴様の相手はこいつらだ……………貴様にはそれが最も相応しい」

「甘く見ないでくれるかな」

デュノアは対物ライフルを収縮させると、直様両腕にパイルバンカー付きのシールドを装着させた。

「やれ」

蝙蝠が手を振り下ろすと同時にデュノアに向けて襲いかかった。

左右からの挟撃、得物である爪を構えながらよくできた連携攻撃を仕掛けた。

「無人機如きに!!」

だがデュノアは無人機の動きを見切り、攻撃を躲した後にパイルバンカーを二機に突きつけた。

「これで——」

(……………アレ?)

鈴音はデュノアと無人機の戦いを見て、心の底にある疑問が浮かんでしまった。

そして心の奥底から溢れ出る悪寒が鈴音に警鐘を鳴らす。

(……………何か……………おかしい。何かおかしい)

鈴音は敵の様子を観察する。

(……………あ)

そして気がついた。

敵が全員楽しそうに仮面の奥で笑っているという事を。

まるでこれから起きるであろう十二かに対して期待しているような、胸糞の悪い笑みを全員が浮かべている。

「シャルロット!!止まれ!!!」

鈴音は慌てて、パイルバンカーを撃ち込もうとしているシャルロットに向けて大声で叫んだ。

止めなければ、ダメになる。

心が告げているのだ。

「……………終わりだア!!」

パイルバンカーは無情にも無人機の心臓付近に突き刺さった。

絶対防御が発動する事なく、すんなりと鉄杭が突き刺さった事にデュノアは違和感があつたが、ソレを振り払ってすぐに蹴りを入れて距離をとった。

ピクリと無人機が動く。

「まだ動くならー！」

デュノアは両手にマシンガンを持って、止めを刺すためにありつただけの弾丸を放った。

無人機の装甲には無数の弾丸の直撃痕が残り、装甲を貫通している。

その証拠に無人機の奥から赤い液体がダラダラと零れ落ちてくる。

「……………え？」

シャルロットの動きがようやく止まった。

気がついてしまったのだ。

無人機の奥から溢れ出て来るものがオイルなどではなく、人間の血である事に気がついてしまったのだ。

「……………え？……………え？」

「あーあー、ヤッチャッター。やつちやつたなあ、シャルロット・デュノア。ギャハハハハハ!!!」

鰻がゲラゲラと大きな声で笑っている。

「撃ったな？ 貴様は『親』を撃ったな!？」

蝙蝠は仮面の奥底で嘲笑い、侮辱しながら、シャルロットを指差した。

「お、親？」

シャルロットの体に悪汗がしたたる。

「そうだそいつらの正体を見ろ!!」

蝙蝠がもう一度フィンガースナップを行うと無人機に被せられたヘルメットが解除された。

「……あ……ああ」

ポロリと、彼女の手から銃が零れ落ちて、重力に従って地面に落ちてしまった。

血に濡れた四つの目がデュノアを優しく見つめる。その目は目の前にいるシャルロットに心配させないようにと、残された体力で装っている。

「言つただろ、貴様の両親には死んでもらうと……だから、貴様に殺させた。貴様が悪いのだ。我々の提案を断つた貴様が悪いのだよ……」

冷徹な、心が一切込められていない声色で蝙蝠がシャルロットに告げる。

認めたくない現実が其処にはある。

無人機の奥から現れたのはシャルロットの両親であった。

体を強引に無人機に固定され、一切の抵抗ができない状態で攻撃をくらい続けた。

「……………すまない、シャルロット」

「貴女にこんな思いをさせてしまって……………」

目線は臍げで、すぐ近くにいたシャルロットの顔を見る事ができない。今の彼女がどんな表情をしておるのかわからず、それがとても辛かった。

「ゴメンなさい……………ゴメンなさい……………」

シャルロットの指先が震える。自らの手で守りたかったものを破壊した感触が未だ消えずに、今にも手が千切れて落ちてしまいそうになるくらい重く感じてしまう。

「まあ、もう少し楽しませてやるよ」

無人機が壊れかけの肉体を強引に動かす。ただ目の前にいるシャルロットを殺すためにプログラミングされた行動を咄々と行う。

振り下ろされる凶爪が無抵抗なシャルロットの肉体を傷つけていく。

「シャルロット、私たちが殺せ」

「このままじゃ、貴方が死んでしまう」

両親からの必死の懇願も今のシャルロットには何も聞こえない。受け止めたくない現実を目の前にして、両目から涙を零しながら拒絶するように泣いている。

「できない、そんなのできない!!だって、そんな事したら……………誰か、誰か止めて——」

「ならば私が止めてやろう」

蝙蝠が右手を天高くあげる。

それはまるで演奏を始めようとする指揮者のように、この場にいるデユノア一族を除いた全ての人間の視線が蝙蝠の指先に向けられる。

「死刑執行」

蝙蝠の腕が振り下ろされた。

一瞬の沈黙。

IS学園の皆は次に何が起きるのかと警戒を行う。

そして、デユノア夫妻の乗る無人機が爆発した。

「……………え?」

爆風を絶対防御で防いだシャルロットだったが、その心に受けた衝撃だけは誰にも防ぐ事だけができなかった。

呆然としながら、機体に付着してしまった親の血をマニピレーターで拭き取り、視線を向ける。

「……………なんで?」



平穩を壊して、圧倒的格上に挑んでも守りたかつた家族が目の前で消し飛んでしまった。

——何故こうなってしまった？

自身を責めると同時に心の奥底から尽きる事のない怒りがこみ上げてしまう。

「どうだ、止めてやったぞ。感謝しろ」

シャルロットの心情を一切無視して蝙蝠はアザわうかのように声をかけた。

「お前が……………お前が……………」

ギリリツと奥歯を強く噛み締め、拳を硬く握りながら、シャルロットは爆発を促した蝙蝠を殺意に満ちた目で睨みつけた。

「違う、お前だ。お前の選択が殺したんだよ」

蝙蝠は嘲笑った。

「お前が殺したんだろうがアアアアア!!!」

シャルロットは両手に近接戦闘用のブレードを呼び出して蝙蝠との距離を一気に詰めた。

「怖え、後は任せたまよ。蝙蝠野郎」

他の七人は蝙蝠との距離をとってシャルロットの相手を蝙蝠一人に任せる事にする。

そしてシャルロットの相手をする事になった蝙蝠はシャルロットに一方的な攻撃を

され、それを全て防ぎながらシャルロットを連れて別の場所に移動した。

「ちよつと今のシャルロットを一人にするのはマズイわね、援護しにいくわよ」

残された鈴音、箒、簪、セシリアは頭に完全に血が登っているシャルロットを助けるためにスラスターを吹かせて援護に向かう。

「おっと、お前は行かせねえぞ!!」

八神官の一人、蠅螂型のI.S.が箒の前に立ち塞がり両腕に付けられたご自慢の鎌を全力で振るった。

「チツ!!先にいけ、私はこいつを倒してから後を追う!」

両手に構えた武器で鎌の攻撃を防ぐ。

「できるの?お前如きが!!」

鎌を振り下ろし、続けざまに蹴りをいれる。

「やれるさ、やってみせるさ!!」

「織斑先生、生徒の避難は完了し、教員も全員出撃しました。私もすぐに迎撃に向かいま

す」

生徒主導によるシエルターへの避難は完了し、戦う事のできる生徒と教員は襲撃者たちの迎撃に向かっている。

織斑千冬もまた自ら I S に乗って襲撃者の迎撃に向かうことになっている。

千冬は少しだけ緊張していた。現役の頃はそんな事を感じたことは一度もなかったのだが、今は感じてる。

「私も……鈍ったな」

『牙の抜けた獣』、一夏にそう言われた千冬はかつての自分を取り戻すためにこの数ヶ月間かなりハードな訓練を積んできた。

それには一夏も手伝っており、彼曰く「少しはマトモになった」だそうだ。

「機体は少し心許ないが………やるしかないようだ」

これから乗る I S —— 倉持技研の最新型第三世代 I S 『打鉄・三ノ型』 —— コレに対して千冬は僅かな不安があった。

それは使用されているコアが意識のない量産型のコアだからだ。

量産型のコアでは I S の力を完全に発揮することはできない。

「……………こんな時——」

『フフツ、お困りのようだねえ』

部屋に備え付けられたスピーカーから突然声が聞こえた。

「ツ!?その声、どういうことだ!!」

千冬は声の主に覚えがあった。だがおかしい、声の主は既に死んでいるはずだ。

『私が誰かって? 私は兎の風来坊、その名は——』

「おい、束」

『……………ちーちゃん、人がせつかくノリノリなんだから邪魔しちゃダメでしょ』

「黙れ、この際貴様がどうして生きてるのか知らんがどうでもいい。何のようだ?」

『お困りの様子のちーちゃんに束さんからのプレゼント……………カモン!!!』

束の言葉の直後、天井を突き破ってクリスタルの八面体が落下してきた。

「……………コレは?」

『束さんの最新作……………ちーちゃんが昔使ってたIS、暮桜のコアを使用した傑作』

八面体が開かれて中から一機のISが姿を表す。

それは朝焼けのように美しかった。

『その名も暁桜』  
アカツキサクラ

## 第129話

「死ねよやアアア!!」

ゼロは高速で敵の背後に回り込み、両手で頭を掴むと力任せに首をへし折って息の根を止めた。

相手の動きがなくなったのを確認すると直様地面に投げ捨てて周りに視線を向ける。  
(……厄介だな。零落極夜の回数を極限まで減らさないと、コツチのエネルギーが尽きてしまう)

エネルギーの消費を減らすために極端に格闘戦を仕掛けている。使うならば確実に殺すことのできる一瞬だけ。

周囲に転がったネオの兵士の残骸を踏み潰しながら、ゼロは敵がいるであろう場所に向かう。

どこかで補給を一度挟みたいが、もしそれをやってしまうと戦線の維持ができなくなってしまう。

何故ならI S学園には亡国機業の部隊とは違って人を殺せる人間が少ない。

特に学生の中ではラウラや楯無を除けばほとんどいない。

「さつきから嫌な気配がしやがる。ガーベラ、あのボケとか……………それに……………ヤバイな」

機体から送られてくる情報を脳で直接確認しながら、次の行動を考える。

学園のアチコチで先頭が繰り広げられている。何処を手伝えれば良いのか、最善の一手を考える。

「……………ツチ!!」

突然の機体反応、合計四つがゼロに向けて閃光となつて襲いかかる。

ゼロの周囲を取り囲み、牽制をかける。一糸乱れず、ゼロを中心に正円運動で取り囲む。

そしてほぼ同時に閃光がゼロに向けて突撃した。

一つ目、ゼロはコレを躲して背中にチョップを叩き込む。

二つ目、しゃがみ込んで相手の懐に入り込んで渾身のアッパー。

三つ目、仰向けに倒れながらの蹴り上げ。

四つ目、迫り来る相手に向けて拳真つ正面から叩き込む。

「……………あの時の奴らか」

ゼロを襲ったのは八神官のウチの四人。狐、蜥蜴、仙人掌、鰻の四機。

ゼロに襲いかかったのはいいが、カウンターをくらって傷を追ってしまった。

「イイぜ、相手してやるよ。あの時とは状況が違う」

楽園で戦った時は、クロエとの戦闘後であったために逃げるという選択肢を取らざるを得なかった。

だが今は万全の状態といっても過言では無い。

「四機いてもガーベラ一人を相手にする方が厄介だな」

ゼロは漆黒の両刃大剣『零』を呼び出して左手で掴んだ。

『零』は普通のISなら装備としては重いため両手で掴んで振るうのだが、黒零は性能にモノを言わせて片手で軽々しく振り回す。

「あのキチガイより我々が弱いと言うか……………甘くみるなよ!!」

狐はガーベラと比較されるのが余程癪だったのか、直上的にゼロに向けて感情をぶつけてきた。

「んじやア来やがれ。証明して見せろや」

「甘くみるな!!」

ゼロに向けて神官たちは突撃した……………

(コイツらさっさとブツ殺さないと面倒だな……………早くしないとアレが来る。確実に近くにいやがる。No. 1000が……………)

「チイツ!!」

「ほら、どうしたの? 織斑百春!!」

場所は変わって此処ではガーベラと百春が一騎打ちを繰り広げている。

教員や他の生徒たちが百春の援護を行おうとしたのだが百春自身がソレを拒んだ。

誰かが援護に入ればその人間が確実に足枷になってしまうという事を本能的に理解してしまっているのだ。

失礼かもしれないが、事実だという事を。

「お前に構ってる、暇は、ない!!」

「私も貴方をさっさと倒して、ゼロと戦いたいのだよ!!」

互いに目の前にいる相手と戦いたいという思いはそれほど無い。だが両者は目の前にいる人間を無視しておくどれ程の害を味方が被るかということを理解している。

だから戦う。

百春は白式・真になることによつて新たに手に入れた双剣——真月を両手に構えた。ガーベラも両腕から片腕一本ずつ、合計二本のエネルギーでできた鞭を発生させた。



超高速で振るわれる鞭の先端の速度は音速にも迫るほどなのだが、百春はその動きを機体で予測して真月で防ぐ。

「ならねえ!!」

ガーベラは鞭の振り方を変えて真月に鞭を巻きつける。

「なら!!」

百春は直様真月を収縮させて、今度は代わりに左腕に備え付けられた多機能攻撃腕『真雪』をガーベラに突きつけた。

躊躇う事なく指先からエネルギーの弾丸を放つが、ガーベラは目の前にチャクラの壁を張って攻撃を全て防いだ。

「今度は!!」

真雪がエネルギーを纏い、通常の手よりも遥かに大きなエネルギーの手を作り出す。

「そんなの、コッチもできるんだよ!!」

どうやらガーベラの乗る白薔薇にも同じ装備があつたらしい。百春の真雪がゼロの黒零を元にしたモノだから、彼女のもそうなのだろう。

ガーベラの右手がエネルギーを纏い、百春と同じようにエネルギーの巨大な手を作り出す。



ラストナンバー、No. 1000と呼ばれるコアがすぐ近くに來ているのだ。

「來られたか……ならコッチも早くしないと!!」

ガーベラはエネルギーの手を今度は突撃槍の形に作り変えて素早い突きを百春に食らわせた。

弾き飛ばされる百春は空中で態勢を整えながら背中のウイングスラスターを羽ばたかせてエネルギーの羽を弾丸にして飛ばした。

だがガーベラはコレを一振りで払い落とした。

「……………ここは、兄さんに任せるか」

IS学園メインアリーナ、此処ではかなり大規模な乱戦が繰り広げられていた。

代表候補生四人と教員六名、それに対するネオの戦力は生態同期型が一体と無人機が十機近く。

完全な乱戦であるのだが、質の差でIS学園側が僅かに押ししていた。

「ふむ、流石にこの数が相手では多少の性能の優劣は対して関係ないという訳か」

蝙蝠は雷撃を周囲にいる代表候補生達に飛ばしながら、多少有利な戦いを繰り広げていた。

「諦めたらどう?」

シャルロットは蝙蝠に向けてマシンガンを放ち続けているのだが、その弾丸はまるで予測されているかの如く簡単に躲かされてしまう。

「そういうわけにはいかないんだよ。此方も総帥のために道を作る必要があるからな」

「総帥?」

聞き慣れぬ単語にシャルロットが反応する。

「これ以上は——」

「もうよい」

「——ツ??????」

若い男の声がスピーカーを通じてアリーナ全体に響いた。

何事かと思ったIS学園側の人間の動きが全て止まり、そして何故か無人機の動きも止まっている。

「……………何故？」

ギリギリと蝙蝠の首が動き、観客席の一角を見た。それにつられて他の人間達も見た。

そこにいたのは一人の青年、白を基調とした軍服らしきモノに身を包んだ、何処かで見た事のある青年だった。

右手にはマイクがあり、どうやらコレを使ってアリーナのスピーカーから声を出したのだろう。

男はマイクを近くに投げ捨ててユツクリと立ち上がった。

「……………蝶羽一夏？」

アリーナないにいたセシリア・オルコットは、その顔の男、ゼロこと蝶羽一夏の名を呼んだ。

何処からどう見ても彼だ。

「違うでしょ!!」

その近くにいた鈴音はセシリアの

発言を否定し、一切の躊躇いなく圧縮した遠距離砲撃モードの龍砲を『一夏』に向け

て放った。

その一撃は『一夏』に直撃し、煙を巻き上げた。

「鈴さん!!!何をやってるのですか!!」

セシリアは鈴音の行動に思わず驚いてしまった。

「撃つしかないでしょ。アレは敵よ、一夏じゃない。それくらい判断しなさいよ」

鈴音としては撃たない理由が一切なかったようだ。

「全く、とんだジャジャ馬娘だな」

煙が晴れるとそこには無傷の『一夏』がアリーナの観客席に何事もなかったかのように座っていた。

そして彼の周りの観客席も何故か傷がついていなかった。

「さて、儂も行くとするか」

『一夏』はユックリと立ち上がり、軍服の右腕の袖を捲った。

腕には漆黒のガントレットがつけられており、『一夏』はソレを胸の前に掲げた。

「顕現せよ………『理想郷』アルカディア」

眩い闇に包まれ、『一夏』はこの世界から姿を消した。

「……………え？」

余りにも突然の現象に思わずIS学園側の人間は素っ頓狂な声をあげてしまった。

何が起きた。何故消えた。

訳がわからないと言った様子だ。

——それはまるで空間が歪んでいるかのような音だった。

音の発生源は世界から。

ソレは空間を撃ち破って突然現れた。

小さな眩い闇が現れたかと思うと直様闇は肥大化した。

そしてソレを内側から弾き飛ばしたモノが世界に現れた。

特徴的な漆黒の全身装甲。

両肩からは特徴的な、蝮の触手の様なモノがそれぞれ二本ずつ合計四本飛び出しており蠢いてる。

余りにも不気味なのだが、何処か不思議な神々しさを感じる。

悪神や邪神と形容するのが正しいのかもしれない、そんな印象の機体だ。  
名は理想郷<sup>アルカディア</sup>、ネオが誇るNo. 1000のコアを使ったIS。

「さあ、来い。試運転だ」

今此処に、最悪が顕現した。



## 第130話

「チツ!!」

「どうしたどうした!!道場剣術様よお!!さっきから、ケツが引けてるぞオ!!」

蠅螂——デスタンツ・マンティスクは自慢の鎌を振るいながら戦っている相手である篠ノ之箒を追い詰めていた。

箒の持つ武器の一つは既にデスタンツの鎌によって両断されており、残った脇差しだけで戦っている。

「くっ!!こんなところでは!!」

箒が遠距離用の武器、穿千を呼び出して右手に掴むとデスタンツの顔面に狙いを定めて迷いなく引き金を引いた。

「キシヤア!!」

だが弩から放たれたその一撃は上半身を直角に、仰向けにそらすことによつて躲されてしまう。

躲されたところに足払いをくらい、そして体制がおかしくなったところで腹にヤクザキツクを食らってしまった。

大きく吹き飛び、壁に激突することによってようやく停止した。

「くそ!!」

箒は自分の身にかかった瓦礫や埃を払い落としながら立ち上がり、

再度強く刀と弩を握りしめた。

「やるのか? まだ」

鎌が光によってキラリと光る。

「そうだ、私はまだ戦——」

「じゃあ殺す!!」

箒にトドメを刺すべく蠅螂が箒に向けて突撃した。

箒もそれを迎え撃とうと武器を構えた。

だがそんな二人の間に突如一振りの太刀が地面に突き刺さった。

二人は思わず動きが止まり、思わず太刀が飛んできた方向を見ると一機のISが此方に猛スピードで迫っていた。

「アレは………暮桜? 千冬さんが乗ってるのか? でも、違う」

迫ってくる機体は織斑千冬の愛機である暮桜に告示していたが、ソレとは違って全身装甲タイプに変わっている。

それが暮桜ではなく新たに束によって作り上げられた『暁桜』であることを箒は知ら

ない。

千冬は地面に着地すると同時に太刀を掴み、デスタントツに向けて瞬時加速を行った。

「面白え。来な、出来損ないの失敗作。この鎌で貴様を——」

『零落白夜』

「——ッ!?!」

だがデスタントツの自慢の鎌よりも早く、千冬は零落白夜の白刃で機体を真つ二つに両断して見せた。

瞬時加速の後に二重瞬時加速を行った更なる速度でデスタントツを葬り去った。

それがつい最近まで実践を離れていた人間の動きだとは、箒には思えなかった。

「申し訳、ありま……せ……ん……ん」

体を両断されたデスタントツは膝から崩れ落ち、動かなくなってしまった。

本当に一瞬の攻撃であった。箒は強くなったつもりでいたが、千冬はそれ以上に強いということを再認識させられる結果になってしまった。

「籐ノ之——」

千冬は振り返ることなく、箒に声をかけた。

「は、はい!!」

その氣迫溢れる後ろ姿に箒は思わず狼狽えてしまった。こんな千冬さんなんて今ま

で一度も見たことがない。

「私はメインアリーナに行く。お前は他の奴らと合流して戦え……………良いな？」  
有無を言わさぬ気迫。

「……………は？」

箒は返事するしかなかった。

「ならばよい」

千冬は何処へ飛び去って行った。

『一夏』はユックリと両手を広げた。その一挙手一投足を皆が注目する。

触手が蠢き、鋭く尖った先端が動きを停止させている無人機に向けられる。

触手の先端から無人機に向けて一筋の閃光が放たれ、コアを容易く貫いた。

「……………え？」

地面に力なく崩れ落ちて落下していく無人機達を見ながら、誰かが思わず戸惑いの声をあげてしまった。

何故仲間を撃ち抜いたのか理由がわからない。

「……………総帥？何をお考えなのですか!？」

それは蝙蝠にも同じだったらしい。

「ヘルバット……下がれ。死にたいなら下がらなくてよい。死にたくないなら、下がれ」  
蝙蝠——ヘルバットに向けて『一夏』は追い払う様な動作を行った。仲間ではあるが興味がないさそうだ。いてもいなくてももうでもよい、死んでも死ななくてもどうでもよいのかもしれない。

「……総帥……」

「ヘルバット、二度………か？」

重い、余りにも重いプレツシャーが『一夏』からヘルバットに向けて放たれる。

ソレはまさに王と呼ばれるモノに相応しい風格であった。有無を言わさぬ絶対的な力の象徴。

直接向けられているわけではないのに、思わずIS学園側の人間達はその迫力に一步引いてしまった。

「………はい」

ヘルバットは頭を一度深く下げたのち、ここから素早く立ち去る様に飛び去った。

「待て!!」

シャルロットが親の仇であるヘルバットを追いかけようとしたが、理想郷が触手の先端から放ったエネルギーがその行く手を阻んだ。

「何処へいく……貴様らの相手は儂だ。感謝しろ、儂自らが直々に貴様らを殺してやる」

『一夏』が周りにいる人間に向けて手招きをして挑発を行う。

余りにも余裕、此れだけの数の差があるというのに『一夏』には余裕がありすぎる。

「さあ、試してみるか………No.1000の力を」

『一夏』は腕組みをしてみせた。まるで自分からは攻撃を仕掛けないと言わんばかりだ。  
「……舐められた、モノね！」

鈴音や簪、そして新たに配備された第三世代機である『打鉄・参ノ型』に乗った教員二人が『一夏』を取り囲みながら、ほぼ同時に突撃した。

「遅い遅い遅い遅い!!! どうした、一人の人間を四方八方から十人で取り囲んでおいて一つも傷をつけることができないのか? 温い、滾らせる!!」

四方八方から襲いかかるISの攻撃を4本の触手で巧みに捌き続けながら、『一夏』は戦えば戦うほど己の欲求に渴望し続ける。

四本の触手は『一夏』の意思によって自由自在に動き回り、追ってきたISに対して凶刃を突きつける。

しかし、攻撃を凌ぐだけで『一夏』から攻撃を仕掛けることは未だない。IS学園の人間たちはいつ攻撃に移るのかと肝を冷やししながら、今できる全力の攻撃を続ける。

「化け物がつー！」

「攻撃の手を止めるな！」

教員たちも必死に攻撃を仕掛けるが一向にダメージを与えられない。だがこのまま相手が防衛に徹していてくれたならもしかしたら勝機があるのかもしれない。

そんな期待が彼女たちの中に流れていく。  
休みなく降り続く弾丸の雨。

「……………この程度ではなあ」

『一夏』の乗り込む漆黒の I S が怪しい光を放つ。

そして次の瞬間には世界を拒絶した。

理想郷を中心に透明な膜がドーム状に展開されて降り続く弾丸の雨を優しく受け止めた。

「性能テストにもならんぞ！」

理想郷が世界から消え去った。

I S 学園の人間は何が起きたのか理解ができずに動きが止まってしまった。目の前にいたのに完全に姿を消してしまった。ステルスといったものではない。存在自体が消失している。

「……………ッ!!」

真っ先に相手のした行動を理解できたのは風鈴音であった。

「瞬間移動!!」

彼女は何度か百春と模擬戦をしたことがあったので事態をすんなりと簡単に飲み込むことができた。

なんども見たことがある瞬間移動だから、それがどれだけ厄介なものであるのか彼女はよく理解している。

取り囲んでいたのが簡単に無駄になってしまった。

敵はどこだ。

周囲を索敵する。

「ほう、やるではないか」

その音に全員が反応して一斉に銃口を向けた。

『一夏』は瞬間移動を使ってアリーナの観客席に飛んでベンチにドツシリと座っていた。いつからそこにいたのかわからない。もしかしたら自分たちが戦っていたのは幻術で本物は最初からあの場所にいたのかもしれない。

「このままでも面白いがそろそろ——」

「全員集中砲撃、発射!」

言葉を言い終えるよりも早く、十機のISによる一斉砲撃が『一夏』を襲った。

一機のISに向ける火力ではない。周囲の被害を一切考えずにもてる火力を全力で



使用している。

爆炎で『一夏』の姿が消える。IS学園の人間はこれで終わってくれと願うばかりだった。

「——全く。少しは楽しませてくれると思ったのだがな」

爆炎がチャクラによって吹き飛ばされる。

「期待外れも甚だしい……………いや、コイツが強すぎるだけか」

爆炎を吹き飛ばし、無傷の漆黒のISがそこにはいた。そして彼の周囲もある程度の距離まで一切の傷がなかった。そのエリアを越えれば爆炎によって無残になっているのだが。

ユックリと『一夏』が立ち上がり、一歩また一歩と観客席を降りていく。ただ階段を降りているだけだというのに、言い表せぬ威圧感が彼女たちを攻め立てる。

「ココからは……………儂の番だ」

『一夏』が腕組みを解除した。

また世界から消える。

そして

「……………え？」

言葉と同時に衝撃が彼女たちに一方的な暴力の恐怖を知らせてくる。

一人の教師がいつのまにか吹き飛ばされ、彼女が元いた場所にはいつのまにか『一夏』がいた。

「流石に手加減をすれば、死なぬか。頑丈な鎧で助かったな」

吹き飛ばされた教師は壁にめり込み、今にも息絶え絶えだ。

破壊、破壊、破壊！

攻撃力が桁違いすぎる。

「怯むな、怯えるな、怯れるな」

漆黒のI Sが両手を大きく広げ、触手が不気味に動く。次の獲物を決めるように触手の先端が動き続け、やがて一人を指し示した。

「少しは儂を本気にさせてみる。誉ある専用機持ちとI S学園の教員なのであろう。それともなにか、たかだか一人相手をするのに……恐怖しているのか？」

瞬時加速、ただでさえ通常の色度、が速いのに急加速による最高速度の到達は反応させるのを許さなかった。

イカレタ速度だ。通常の間人ならば急加速による衝撃によって一瞬で意識が飛んでいつてしまいそうになるのに、この男は平然と乗りこなしている。

一人の教員との距離を詰める。不幸なことにその教員の乗るI Sはラファール・リヴァイブ、現在の装備は遠距離を中心としており近距離戦闘に対応しづらくなっている。

る。

だがそれでもパイロットの実力でカバーするしか………できなかつた。

そもそも機体の性能に差がありすぎた。第二世代と世代不明の超最新機体、どちらが性能が高いかなど言わずもがなである。

教員の首に触手が巻きつけられ、振り上げられ、叩きつけられる。何度も何度も何度も何度も、スクラップになるくらいの威力で叩きつけられていく。

「……あ……ああ」

弱々しく声が漏れる。吊るされながら、手足はダラリと力なく身体からぶら下がっている。

「この程度なのか」

触手を解いて教員を地面に落とした。

「次——」

振り返ると目の前から荷電粒子砲とセシリアのライフルから放たれた閃光が目の前まで迫っていた。

「となると」

『一夏』が両手を前にかざすと迫って来た二つの閃光はそれぞれ理想郷の掌の中に虚しく吸い込まれていった。

まるで渦の中に飲み込まれていく様な、穴の中に落ちて行くようだった。

「ほう、これは良いな」

手を握ったり開いたりしながら、『一夏』はフルフェイスの装甲の中で笑った。

「もつと、来い」

性能差はIS学園側が思っていた以上に酷いようだ。

「ちよつと厄介ね……………エネルギーは吸収される。かといって実弾はわけのわからぬモノに防がれる。近接格闘を挑めば触手に阻まれる……………本当に……………厄介」

ギリリと奥歯を噛み締めながら、鈴音は冷静に相手の実力を見極める。

「そんなの、物量差で押し切るのみですわ!!」

セシリアは周囲にBT兵器『ブルー・ティーズ』を展開させて、『一夏』一人に向けて一斉射撃を行った。

「吸収できると言っても、今の様子だと掌のみ。でしたら、キャパシティを超える量のエネルギーを浴びせればいいだけですわ!!」

なんとも言えない脳筋すぎる思考回路だったが、今のセシリアの策はある意味有効なのかもしれない。

エネルギーの雨を降らせる。

「……………つもらん」

『一夏』が瞬間移動で世界から消え、セシリアの背後に出現した。

「……………え？」

「この程度の事も予測できないほど、弱いのか？」

理想郷は体を弓なりに大きくしならせながら、ダブルスレッジハンマーでセシリアを殴り地面に叩きつけた。

(……………チョット、性能の差がありすぎるわね)

鈴音は今の一連の戦闘で、自分達と相手の戦力差を客観的に比較した。

数の上では自分達が有利なのだが、相手はその数の有利を簡単に覆ってしまうほどの力を持っている。

「もっと……………まだ性能テストは終わっていないぞ!!」

理想郷の両方の掌から、薄くて小さな丸鋸の形をしたエネルギーが発生して掌の近くで超高速回転を始めた。

「……………アレは」

鈴音はその武装がなんなのかすぐにわかった。黒零や白式の腕に備え付けられてある『多機能式攻撃腕』、一つでさえ厄介な武装が二つもつけられてる。

「どれだけ厄介なのよ!」

理想郷が一度腕を振るえば無数の丸鋸が掌から放たれて曲線軌道を描きながらIS

学園の人間に迫っていく。

何度も何度も腕を振るうたびに丸鋸が射出され、気づけばその数は五十を超えるほどになっていた。

軌道も速度もバラバラな丸鋸の攻撃はI S学園の人間の軌道を阻害し、動けなくなつたところを無数の刃が傷つける。

「だったら、コッチモ!!」

鈴音は浮遊する二つの龍砲を回転させながら、周囲に向けて乱れ打つ。狙いなど定めることなく、ただ当たれば良いという感情だけで衝撃砲をうち続ける。

「……ほう」

空中に浮遊し、両腕を組んだ状態の『一夏』が感嘆の声を上げた。

丸鋸が龍砲の弾丸によって砕かれていく。数十あった丸鋸は既にその数が片手で数えられるほどになっている。

「流石にこの程度では……なあ」

理想郷は観客席から地面に降り立ち、ユックリと余裕を感じられるくらいの歩きを開始した。

「その余裕が!!!」

地面に落ちていたセシリアが腰部につけられてある自身の切り札の一つであるミサ

イルのBT兵器を理想郷の側面から放った。

「そうか」

理想郷が迫り来るミサイルに手を向けると、ミサイルは空中で静かに静止した。

「は!?!」

その意味不明な光景にセシリアは声を出してしまった。

「そら、可愛い生徒からのプレゼントだ」

理想郷はミサイルに向けていた手を横薙ぎに振るうと、ミサイルはその軌跡にそうよう動きながら、逆側面に放たれた。

その先にいたのは一人の教員、彼女は交わすこともできずにミサイルの直撃を食らってしまった。

「……………これでは、碌な性能テストになりそうもない。儂はまだ碌な武装を試していないのだぞ」

ゴキリゴキリと首を動かしながら音を鳴らす『一夏』、退屈と言わんばかりに腕を横に大きく広げながらあくびをしてみせた。

「シャルロット! いくわよ!」

「うん!!」

鈴音とシャルロットが時間稼ぎの為に『一夏』に勝負を挑む。

鈴音は龍砲を両手に装着させて接近戦を挑み、シャルロットも中近距離から鈴音の援護を行う。

甲龍の掌から放たれる龍砲を容易く交わしながら、『一夏』は常に周囲に対して意識を向けている。

ソレはまるで複数の脳を並列に繋ぎ合わせているような圧倒的な情報処理能力であった。

真正面で鈴音と戦い、背後に來たシャルロットには触手で攻撃を行う。

「本当に、本当に厄介!!」

鈴音が撃ち込む龍砲は『一夏』がかざした手から発生するチャクラの壁によって簡単に受け止められてしまう。

(あの壁……………どうにかしてブチ破らないと……………そしたら最大威力の龍砲を叩き込む)

一瞬でも隙が生まれれば……………鈴音にとっての勝ち筋が生まれる。だがどうやればその隙が生まれるか……………

「フルバースト!!」

『一夏』の背後からシャルロットが持てる火器を全てつぎ込んだ一斉射撃を行う。

『一夏』もコレを躲さずに掌を後ろに向けてチャクラの壁で受け止める。



「今、この瞬間!!」

『一夏』が背後に気を向けた瞬間に鈴音は両腕を前に突き出した。

龍砲の発射口を絞って威力を強引に高める。シャルロット仕留めた甲龍の最高火力の一撃を『一夏』に叩き込む。

極小まで圧縮された龍砲の一撃を間近で放たれた『一夏』は理想郷の方に備え付けられた触手を全て前方に突き出し、四つの頂点を一点に集めて砲撃を受け止める。

「ハハッ!!良いではないか、ソレくらい破壊力がないと何も楽しめぬからなア!!」

だが鈴音の放った全力の砲撃は、触手の先端によつて四つに引き裂かれ後方にあつた観客席を無残に破壊した。

「え?」

「驚いている暇はないぞ!!」

チャクラの壁でデュノアを弾いて大きく仰け反らせ、四本の触手を鈴音の腕に絡め合わせて振り回す。

振り向きながらデュノアのいる方向に向けて手を振り上げると、不可視の衝撃波が波打ちながら彼女に襲いかかり重い機体ごと彼女の肉体を宙に浮かした。

そして触手を使って数度鈴音の体を地面に叩きつけると、触手を解いて真上に投げる。

そして自身も飛び上がり、鈴音の肉体をオーバーヘッドキックで蹴り飛ばす。

鈴音が飛ばされた先にいたのは同じく空中に飛ばされていたデュノアがいた。

デュノアは鈴音に巻き込まれ、二人とも壁に受け身を取ることが出来ずに激突してしまっただけだ。

「さあ、次だ!!」

大きく手と触手を広げ、次の攻撃を待つ。完全にハイになっていると言えるだろう。

「クアッド・フアランクス!!」

「山嵐!!」

それは最早一機のI.Sに向けて放って良い量の火薬や弾丸、ビームではなかった。

総数だけでいえば千を軽く越す破壊力が圧倒的な力を持った一に向けられている。

「火薬の光か、ここまで多いとまるで満点の星空だな……………」

『一夏』はチャクラの壁で全ての攻撃を受け止める。この壁の前では全ての攻撃が無意味に終わってしまうのかもしれない。

「ならば全てを黒く塗りつぶしたくなるではないか!!」

理想郷の体の各所に搭載されてあるスラスターから漆黒のエネルギーが溢れ出す。

『一夏』が身体を一回転させると、スラスターから飛び出していふエネルギーが彼に向けて飛んでいた全ての弾丸を消滅させた。

それどころか長大に伸びたエネルギーは周囲にいたISを薙ぎ払った。

理想郷の背中には溢れ出すエネルギーによって禍々しい姿の蝶の羽が発生しており、機体の異質さをより一層際立たせている。

「これで、終わりにしよう……………ほう」

一機のISが此方に迫って来ている。そのISのコアの反応に『一夏』は覚えがあった。

周りにいる奴らにトドメを指すのを止めて、空を見上げた。

その直後一機のISがアリーナに着地した。

「これは……………少しは楽しめそうだな」

「黙れ、貴様は今ここで私が殺す」

かつての世界最強、織斑千冬は『一夏』の前に立ちはだかった。

## 第131話

——織斑千冬はもう終わった人間だ。

誰かがそう言った。

かつて——ISの発展途上の時代に活躍した人間であつて、今現在ある程度の技術が確立された中でも最強ではないと言つた。

——否

奴は強い。

ここ数年は表立つて戦うことがなかつたために実力が落ちていた事は間違いない。

だがここ最近はかつて失つた闘争本能の牙を取り戻し、かつて以上の鋭さを見せた。

織斑一夏——ゼロといふかつての自分を凌駕する力を持った人間、もしくはバケモノの影響によつて今の千冬はかつてないほどの戦士になつていた。

先ほどまで多くの人間による混戦状態になっていたIS学園のメインアリーナには今現在二人の人間しか残っていない。

残っていないというよりは、その二人が作り上げる領域に入る事のできる実力を持っていないというのが正しい言葉なのかもしれない。

千冬の指示によってこの場から他の人間は立ち去った。先の戦闘によって生じた無人機の残骸はそこいらに転がってはいるが人の影は一つもない。

かつて暮れに沈んだ千冬の翼は暁の元で今再び大空へと向けて飛び立とうとしている。

千冬は本気中の本気だった。

目の前にいるのはかつて千冬が闘った相手とは違う。千冬が今まで闘って来たのはその殆どが対戦相手であって敵ではなかった。

だが今目の前にいるのは紛れもない外敵、かつてないほどの殺気を心の奥底に潜めながら、心の表面は波一つ立ててはいない。

「ハア!!」

迫って来た四本の触手を躲して掻い潜り、理想郷の懐に潜り込んだ千冬は何の迷いもなく手に持っている刀『雪片・改』を首めがけて振るった。

『一夏』はコレを上体を逸らして躲した。そして躲された触手を引き戻して背後から千冬を襲う。

だがその程度の事は千冬も予想済みだ。真上に飛び上がって触手の攻撃を回避して、今度は真上から切りかかった。

だがそれは四本の触手によって受け止められる。

「……厄介だな」

「かつての『世界最強』ブリュンヒルデに褒めてもらえるとは、作ったモノとしては非常に光栄に思わせてもらおうよ」

触手が千冬を押し返し、直様先端を向けてエネルギーの線を放った。

千冬はコレを両肩の非固定ユニットで受け止めた後に地面に着地した。

「………遠いな。いやはや、出来損ないだと思っていたが………思ったよりお前の首は遠いな」

「………出来損ない?」

千冬は『一夏』の言葉に少し引つかかるところがあった。

「となれば、此方も武装を展開するしかあるまい」

理想郷の左手に武器が呼び出される。それは日本刀と和弓が混じり合ったような独特のデザインであった。日本刀の鐔にあたる部分には片方に矢先、そしてその反対側には指で掴むためのグリップがある。

『嘆きの弩』

理想郷は右手の人差し指と中指で鐔に取り付けられたグリップを掴み、ソレを後ろに引いた。

するの鐔の反対側にある矢先にエネルギーが蓄えられる。

千冬も雪片を構えながら、いつ撃たれても反応できるようにスラスタを軽く噴かせている。

両者の間に緊張が走る。

理想郷の指がグリップから外れそうになるその瞬間を千冬が見逃す筈はなかった。

咄嗟に横に瞬時加速を行い今いた場所を離れる。

その直後……いや、それとほぼ同時に矢先からエネルギーが放たれる。そのエネルギーは矢先から放たれたただけあって矢の形を作りながら、地面を砕き、つい一瞬前まで千冬がいた場所を通過して観客席ごとアリーナの壁を砕いた。

「威力が、高い！」

「休む暇はないぞー！」

次々と撃たれて来る矢を躲しながら、千冬は『一夏』の隙を伺う。

「ならば」

『一夏』が世界から消えた。

瞬間移動、ソレを千冬が察したのは消えたすぐ後の事であった。

息を飲み、『一夏』の出現を待つ。

どの方向から来ても対処できるように神経を尖らせて、全方向に意識を向ける。

「ッ!？」

千冬は咄嗟に振り返りながら、雪片を掴んでいない左手を前に突き出した。

何故手を延ばしたのか千冬にも良くわかってはいない。だが出したのだ。

ソレとほぼ同時に『一夏』が千冬が手を伸ばそうとしている先に出現した。

「……反応したか」

千冬が出現地点を予測したのに驚いてはいたが、『一夏』はそんな事関係なしに右手から弓のグリップを放した。

至近距離から放たれる矢を躲すことはできない。伸ばした左手の先に矢が触れる。

「防げ!!」

千冬の叫びに応えるかのように、『暁桜』は光を放ち不可視の壁を左手の前に出現させ



た。

それが『チャクラ』の壁だということとは『一夏』が真つ先にわかった。

壁が矢を受け止め、千冬が左手を上にも上げると矢は進行方向を変えて真上に飛んで行った。

「ぶつつけ本番だったが、何とかなるモノだな!!」

『一夏』にできた一瞬の間について千冬が雪片で攻撃を行うが、『一夏』はそれに素早く反応して弓につけられてある刃でソレを受け止めた。

「驚かされたよ、まさか隠し球チャクラがあるとは予想もしていなかったよ」

互いに力を込めて刃を相手に押し込もうとするがうまくいかず、痺れを切らした二人は同時に後方に下がった。

「コレがあれば、貴様にも刃は届く筈だ」

「……………なら、此方も秘密兵器を使わせてもらおうでしょう」

「先ずは一匹だ。逃がさんぞ、お前たちはココで、殺し尽くす」

ゼロはグチャグチャの残骸になったエリマキトカゲ型のISの頭部を左手で鷲掴みにしている。

残った胴体は四肢の至る所がちぎれていたり、ちぎれかけたりで元がどんな姿をしていたのか想像するのも困難になっている。

エリマキトカゲを目の前に投げ捨てたゼロはソノ頭を何のためらいもなく踏み碎いた。

「どうする、次は……………何れだ？」

黒零の瞳が赤く光り、周囲にいる他の三機に睨みをきかせる。

三機ともエリマキトカゲと比較すれば軽傷ではあるが、装甲の一部が破損している。

「……………ツチー！」

三機のISが取った行動は撤退であった。遠距離攻撃を地面に放って目くらましを行い、三方向に散らばって逃亡した。

「逃げるか……………追うか……………いや、その必要はなさそうだ」

ゼロは咄嗟に三機を追いかけようとしたが、その直前にスラスタを噴かせるのをやめた。

「ソッチは任せたぞ!!」

ゼロは踵を返して三機が進んだ方向とは別の方向に移動して行った。

逃げる奴を追い上げるよりも他の奴らの手伝いをした方が良いと判断したからだ。

「任せて、一夏くん」

「貴方、自分で倒しなさいよ!!」

狐の前にはアリサが立ちふさがり、鰻の前には楯無がたちふさがった。

そして残された仙人掌は足止めされた二人を無視して何処かへと立ち去って行った。

「一夏くんが弱らせてくれたんだから、あまり文句は言わない方がいいと思いますよ」

アリサが自分の機体のカラーデザインに合わせた三叉撃で狐の腹を勢いよく突いた。

突き飛ばした狐にむけて三叉撃を投げつけ、今度は二丁の銃を呼び出して両手に構えて、落下していく狐にありったけの量の弾丸を浴びせる。

「こんなもの!!」

狐は三叉撃を弾き飛ばし、迫り来る銃弾を両手で防ぐ。

「なら、これならどう?」

アリサは今度は両刃の大剣を呼び出して狐に向けて投げつけ、自身もスラストスターを使つて大剣の真後ろを高速で落下する。

落下してきた大剣の剣先を狐が受け止める。

そこをアリサが高速で落下してきて速度を維持したまま、大剣の柄を踏みつけて狐の腹に強引に剣先を押し込んだ。

「……………流石に、絶対防御までは貫けないみたいね……………今の武器だったらの話だけ」

アリサの手にまた別の武器が呼び出される。

今度の武器は大斧、足で踏んでいる大剣と同様にお姫様のようなスカート型の装甲がある『アイリス』には不釣り合いのように思えてしまう。

「この武器でダメなら、また別の武器を使うだけよ……………私たちの単一能力は武器を生み出すことだから」

「……………は？」

「私の機体に収縮されてある武装はない。今使っている武装も含めて、全てが即興で生み出されているの」

アリサの周囲に次々と武器が出現して、次々と消えていく。

そのすべての形が異なっている。

「勿論、お気に入りの形は記録してあるけど……………殆どが私が想像して生み出しているの」

反則的だと狐は思ってしまった。

武装が即興で作られるということは、相手との間合いを計ることがほぼ不可能だという事と同義である。

そして攻撃の受け方も変わってきてしまう。それを一瞬で判断さなければならぬ。

極一部の異常な戦闘センスをもつ人間たちならば対処できるのかもしれないが、残念ながら狐にはそこまでのセンスはなかった。

「時間がないから、一気に決めさせてもらおうわ」

アリサが別の武器に持ち替えた。

「急がないと、他のところもたなそうだから」

他の場所でも戦闘は行われている。

それらの場所ではネオの方が優勢になっている。なので、今日の前にいる敵に長い時間をかけるわけにはいかない。

「……絶対防衛が発動しても関係なく倒してあげる」

次々と武器を試していくアリサ、そして狐の悲鳴がIS学園に響いた。

「……………」

「……………」

圧倒的攻防、互いに相手を殺すための一撃を放ち続ける。

殺意の点と点を結び合わせて線を作り上げ、そして相手が作り上げた殺意の線を己の刃で切り裂きほどく。

千冬と『一夏』、其々が極限まで集中力を研ぎ澄ませて相手の命を狙う。

並のパイロットであれば既に数百回は決着がついてしまうほどの攻撃でさえも、この二人の前では容易く封じられてしまう。

千冬は雪片を振るい、『一夏』は弓から新たに持ち替えた刀を使用している。

黒と金に染め上げられたその刀の美しいこと……

二人はほぼ同時のタイミングで相手との間合いを取った。  
一氣に片をつけるために千冬は構えを取った。

「零落白夜」

機体が黄金の輝きを放ち、彼女の必殺の一撃が発動する。

目の前にいるモノを倒すことだけに意識を集中させる。

それ以外の念は邪念、かつて世界の頂点に立った戦士の嘘偽りない必殺の一撃が発動する。

「成る程、それが零落白夜か……ならば此方も切り札を出させてもらおう」

『一夏』が構えを取る。

千冬が二重瞬時加速で距離を一氣に詰める。

常人が視認できる限界ギリギリの速度、それでも『一夏』は仮面の奥で余裕の笑みを浮かべている。

千冬が『一夏』の存在を己の間合いに捉え、刃を振り始める。

「希望を塗りつぶせ——」

そして『一夏』は絶望を口に出した。

「零落極夜」  
世界は黒に染まる。



## 第132話

——世界は闇に染め上げられる。

たった一振りの攻撃だけで、相手を絶望させるには十分すぎる。

今まで夜空の星のように見えていた戦いの点、それらを繋ぎ合わせて作り上げる星座のような勝利の道筋は一瞬で黒く塗りつぶされてしまい、彼女の目では見えなくなってしまう。

二撃目、次は何が起こる。たった一振りで勝利への勝ち筋が消えてしまっている。ならば次は何がかき消されてしまうのだろうか。

二つ目の黒はそれとは真つ向から相反している純白によって防がれた。

「……零落極夜……だと？」

白の黒の激しい交錯の中、千冬は敵が発動させた単一能力に対して驚いていた。

それでも攻撃の手を休めることはない。休んでしまったらその瞬間に殺されてしまうというのを理解してるからだ。

何故敵が零落極夜を発動させたのか理由はわからないが、ソレがどれだけ危険なモノ

なのかを千冬は理解している。

プラスの感情が力になる零落白夜とは対照的に、零落極夜はマイナスの感情が力になる。

誰かを護りたいと願うのに対して、此方は誰かを殺したいと叫ぶ。

一見すれば色が違うだけの技のように見えるがその本質は全く異なるモノである。

「行くぞ!!」

漆黒の斬撃が世界を切り裂く。

千冬は零落白夜を発動させてその全てを防いでいく。体に直撃を喰らえばそれだけで勝負がついてしまう。

先の交錯の際もあと少し反応が遅れていれば確実に殺されていた。

「……………まさか、『失敗作』がここまでやれるとはな……………知っているか？お前は儂が作り上げたクローンの一体だということを」

明かされる出生の秘密。

「……………ああ、知っているさ」

その衝撃的な事実を千冬は当たり前のよう知っていた。いつから知っていたのか

……………

「……………だが、わからないところがある。私は完成系だと聞いていたが、『織斑計画』の

プロシエクト・モザイク

な

プロジェクト・モザイカ

『織斑計画』、かつて日本で行われていた究極の人類の研究、その研究の成果が千冬とマドカの二人なのだ。

「……ああ、そうだな。確かに貴様は『織斑計画』としては完成系かもしれないな。究極の人類、貴様のこれまでの活躍を見ればわかるだろう……まあ、あの天災が出てきたせいで計画は中止になったのだがな」

天災、篠ノ之束の存在によつて『織斑計画』は終わらされた。

「人工の天才が天然の天災に負ける……か。所詮はその程度だったということか」

『一夏』は自虐的に笑いながら、刃の切っ先を千冬に突きつけた。

「………だがな、『織斑計画』のもう一つの目的……儂が目指したのはそんな目指した

モノではない。頂点を作り上げる？ そんな必要があるのか？ この肉体こそが、この頭脳

こそが……頂点の証明なのだからなア!!」

理想郷の触手が蠢く。

「……貴様もあの計画に参加していたのか……何者なのだ、貴様は!!」

「その肉体で………何故、貴様という意識は生まれた。生まれるはずではなかった。それなのに、なぜ生まれた？ 貴様が生まれなければ、儂は……儂は、再び出会えたはずなのだ」

理想郷が世界から消える。

そして次の瞬間には千冬の背後に出現し、彼女の首を狙う。

「チッ!!」

千冬は咄嗟に躲すが、完全には躲しきれずに左肩の非固定ユニットが零落極夜の刃によつて破壊されてしまう。

「貴様に教えてやろう。『織斑計画』プロジェクト・モザイクの目的は確かに究極の人類を人工的に生み出すこ

と……だが儂はそれを利用してもう一つの計画を行っていた……儂にとつての『織斑計画』は『誕生』ではなく、『再誕』なのだよ。故に貴様は、失敗作なのだ!!」

一撃一撃に殺意が込められている。その殺意は火山のように激しいモノではなく、日本刀のように美しく鍛え上げられたモノだ。

「故に殺す。その姿をもつ貴様は……死ね!!」

『一夏』が千冬を圧倒し始める。

暁桜と理想郷を比較すれば、理想郷の方が性能が高い。もし仮に操縦者の性能が同等でらコアとの繋がりも同等であるとすれば、どちらが有利になるかは明らかである。

「どうした、失敗作!!」

取れる戦闘手段の数が暁桜と理想郷では圧倒的に違う。

千冬は零落極夜と瞬間移動のコンビネーションに対して防戦をしいられてしまう。

それでも、千冬は追い詰められてしまう。理想郷の力の前に。

「これで、終わりだ」

千冬に向けて、零落極夜が振るわられた。

「ノロマー！！」

高速で動き回る兎の形を模したIS、兎の形に相応しく空間を跳ねて敵を翻弄し続ける。

速度だけでならば黒零よりも早いかもしれない。

通常のISならば追いかけるのは非常に困難、専用機であっても苦戦は必死になるだろう。

かれこれ学園側の数機のISが破壊されており、これ以上の被害が出るとなると戦線の維持ができなくなってしまう。

「……………速いな」

現在この兎を相手にしているのはドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒ。その愛機は以前起きた楽園での戦いの際に進化し、シニバルツェア・アテグレント黒の深淵となった。

高速で動き回る兎に対してラウラは両手のAICを駆使してその動きを制限させて

一撃を狙う。

「そんなので止められると思うなよ!!」

兎は飛び回りながらエネルギーの斬撃を飛ばす。

斬撃はラウラに向けて飛んでいくが、彼女はコレを僅かな動きで躲したり、A I Cを応用した盾で受け止める。

「そんなんで攻撃を止められるなん思うな——」

「ならば貴様を止めてやろう!!」

シユバルツェア・アプグルント  
黒の深淵の両手の指が全て射出される。

指はB T兵器のように空中を自由自在に飛び回る。だがその動きは全てがバラバラであるが、兎の動きを確実に阻害している。

「ちよこまか、ちよこまか!!」

兎は自分に向けて飛んできた一つの爪に向けて蹴りを入れようとする。

だが兎の脚は爪に届くことはなかった。

兎の脚は目に見えない何かで縛り上げられているかのように爪の目の前で動きを止めてしまった。

「これは………A I C!?!」

その正体に兎が気がついた時には全てが手遅れであった。

他の指が兎に迫り、A I Cの見えない網がソレを雁字搦めにして身動きを一切取れないようにした。

進化した黒シユバルツェア・アプグルントの深淵に新たに装備された武装、爪につけられた小型のA I C、一つ

一つの拘束力は低いが遠距離の敵を捉えることもできる。

「どうした……動かかないのか？ならば、これで終わりだ」

黒シユバルツェア・アプグルントの深淵の両肩につけられたレールカノンから放たれた弾丸が兎の肉体を砕いた。

——闇と闇が衝突する。

「……………ほう」

零落極夜を受け止められた『一夏』は受け止めた相手を見て笑った。

「……………良いタイミングじゃないか」

闇と闇が交錯し、『一夏』は距離を取るために瞬間移動を使って大きく後ろに下がった。

「大丈夫か、姉さん」

「……一夏」

攻撃を受け止めたのは黒零に乗った一夏であった。

「ああ、私は大丈夫だ」

「だったら、姉さんはココから離れて別の奴らの援護に向かってくれ。他は押され始めている……こいつは俺が抑えておく」

「だが、勝てるのか？」

千冬が実際に戦ったからわかる。

一夏では『一夏』には勝てない。

二人の戦闘能力は同等ではあるが、黒零よりも理想郷の方が機体スペックが高い。

戦えば勝てる可能性は少ない。

それでも、一夏は一人で相手をすることを望んでいる。

「勝てないかもな。だが、それは二人掛かりでも同じことだ。だったら、俺が一人でコイツを止める。俺だけができる事だ」

「……任せても良い——」

「話は終わったか？」

理想郷が瞬間移動で迫ってきた。

一夏は持っている大剣『零』を使って『一夏』の攻撃を受け止めた。



「行け!!!」

「任せた!!!」

これ以上の会話はしていらなかった。一夏は理想郷を足止めして、千冬はスラストを噴かせてこの場から素早く離脱する。

「逃すか——」

「させるか!!!」

理想郷が去っていく千冬に向けてエネルギーを放ち、一夏が零落極夜でソレを切り裂く。

続いて迫ってきた触手を躲し、手刀で二本切り落とす。

「ほう……流石だ!!流石だ!!」

理想郷の残った触手と両手の指先から数えきれないほどのエネルギーの弾丸が放たれるが、一夏は零落極夜を使うことなく全ての弾丸を躲してみせた。

「クハハ!ソレだ流石は儂の肉体、完璧だ。ソレこそが頂点だ!!」

「俺の身体を使って好き勝手喋ってんじやねえよ!!」

理想郷が嘆きの弩を呼び出し、瞬間移動で一夏との距離を一気に詰める。

一夏は背後に出現した理想郷に向けて防御姿勢を取る。撃ち込まれてきたエネルギーの矢を左手から出したチャクラの壁で受け止めると、背後に流しながら右手で殴り

かかる。

触手に受け止められ、硬い金属音が響く。

「その口ぶりだと……何もかもを知っているようだな……十歳の奴め、余計なことを教えよって」

「ああ、知っているさ。その肉体が俺のクローンだってこともな。あの砂漠の研究施設で、見たぞ!!」

かつてゼロ達が襲撃して壊滅させたネオの施設、その場所にあつたのは無数の一夏のクローンと誰かのクローン。

ソレら全てはゼロ自身の手で全て破壊された。

「成る程な……そうともコレは貴様のクローンだ。儂には新たな肉体が必要だったのでな……作らせてもらったよ」

「蝶羽大数、テメエは俺が殺す。この俺が、全部終わらせてやる」

「殺せるのか、儂を」

「殺してやるさ、爺イ!!」

ゼロの瞳には、普段以上の決意と殺意が混在していた。

## 第133話

「蝶羽大数、それがネオの総帥……………そしてお前のもう一人の祖父の名前だ」

かつて、モノクローム・アバターの副隊長に昇進した際に亡国機業の総帥轡木十蔵からその事を告げられた。

その時から奴を殺す事を覚悟していた。

それが自分のやるべき事なのだと、自分が終わらせる事なのだと理解した。

「おい、ゼロ……………なんだそいつ、どういうことだ？」

かつて砂漠の研究施設で無数のクローンを見た。

ソレらはある一つを除けば全てが俺のクローンだった。

あの大晦日の日に察した。奴の目的が老いてしまった自分の肉体を捨てて、新たな肉体……………俺のクローンを利用しているということ。

この日がくる事を覚悟していた。

この場で終わらせなければならぬ。

他の誰でもない。この場で。この俺が。

——終わらせるんだ。

触手の攻撃を掻い潜り、ゼロの鉄拳が理想郷の装甲を捉える。エネルギーまとったその一撃は並のモノではない。

理想郷は咄嗟に後方に飛んで衝撃を最低限のところにとどめる。

「ハハハ!!」

理想郷の触手から縦横無尽に曲がるエネルギーが飛んでくる。エネルギーはゼロの動きを阻害する網のようになり、足を止まらせる。

「零落極夜」

ゼロは零落極夜を一瞬だけ発動させて、大剣『零』でエネルギーの網を切り裂く。

エネルギーの残量は限られているために必要最低限な時にしか零落極夜は使わない。

此方からのエネルギーによる攻撃も理想郷には吸収されてしまうためにエネルギーを使わない格闘戦を挑むしかない。

戦力的にいえばゼロが不利だが、どうにかするしかない。

チャンスは限られている、ソレを逃すわけにはいかない。

瞬間移動の移動先を未来視のような超直感で理想郷の攻撃に反応を続ける。

一瞬、刹那でも気を抜いてしまえば命を取られる。

「流石は儂の孫だ。完璧だ、完璧な戦闘センス、瞬間移動を超える未来視。蝶羽、轡木の集大成だけなことはある」

理想郷の瞬間移動のクールタイムが短くなる。それはかつてのクロエ・クロニクルが行った時よりも明らかに短い。

「……チッ!!」

イラつきのあまり、ゼロは思わず舌打ちをしてしまった。

瞬間移動しながら攻撃をしてくる理想郷の攻撃を正確無比にさばき続ける。

「……………そっ!!」

右手に零落極夜を纏わせる。

未来視で感じ取った情報を元に理想郷が瞬間移動で飛んでくるであろう場所に向けて全力の一撃を放つ。

「やはり……………ナア!!」

だが相手はその事を読んでいた。

理想郷の持つ『破滅の弩』の刃が黒零の左肩の装甲を捉える。

鉄拳が理想郷の顎を捉えるとほぼ同時に弩の刃が装甲を破壊する。

吹き飛ぶ両者、互いにチャクラを使い落下する衝撃を皆無にして観客席に着地する。

「……………おい、ゼロ」

ゼロはI Sの意思であるNo. 000——ゼロと会話を行う。

『何だ』

「……………思考をお前にも担ってもらおう。今の俺の思考速度じゃアレの瞬間移動に反応できなくなる」

実際今のところ、瞬間移動に反応するのは限界ギリギリだ。

『……………良いのか？ I S の処理能力に人間が耐えられるかはわからんぞ。それに、I S の速度で限界まで肉体を動かせばあの時のように体が崩れるぞ』

（大丈夫だ。耐え来れなければ、ズタズタになろうが機体を動かせ）

ゼロの心配を無視して、ゼロはさらなる力を求める。このままでは勝てないと判断したからこそ、ムリをしても力を手に入れないといけない。

（……………わかった。限界がくれば止めるぞ）

ゼロの脳とN o . 0 0 0 の情報処理領域が直接つながる。人の領域で追いつけないのならば I S の領域で思考を行えば良いだけ。

「……………少し、キツイな」

I S の領域で処理した情報がゼロの頭に直接入り込んでくる。

ゼロ本人も今自分がかかりムリをしているのだと言うことを理解しているが、コレをしなければ相手に勝つことができないと言うこともまた理解している。

超高速で行われる思考運動と反射運動の融合。

「もつと、本気を出せよ。理想郷ア!!!」

無限の叫びに呼応するかのように背中から黒紫色のエネルギーで作り上げられた蝶

のような大きな羽が形成される。

さらに脹脛など、体の至る所にあるスラストから余剰なエネルギーが放出される。だがその放出されたエネルギーも理想郷の中に吸収されていく。

己の放出したエネルギーを己で吸い上げる様は、まるでウロボロスのように、無限を表現している。

「それで良い、それでいいぞ。儂をもっと楽しませろ。この時間を、孫との触れ合いの時間をな!!!」

理想郷がチャクラを発動させた状態で左腕を天高く掲げる。

ゼロは認識したチャクラのエネルギーから威力を予測し、次の相手の動きを見る。

理想郷の左手が僅かに動いた直後、ゼロは上に跳躍して相手が一手打ち込むよりも早く回避した。

「なア!!」

横薙ぎに振るわれた理想郷の左手が不可視の衝撃波を生み出して、観客席と背後の壁を木っ端微塵に破壊する。

一息いれる事なく、ゼロは理想郷目掛けて二重瞬時加速で一気に距離を詰める。普通のISならば耐えられない加速度であるが、チャクラの盾を利用した防護壁が衝撃を和らげている。



「そうか……全力でコミュニケーションを取ろう！孫よ!!」

理想郷の触手四本がゼロ目掛けて飛んでくるが、ゼロは大剣『零』で二本を切り落とした。

「なるほど」

「フウ!!」

理想郷を大剣で突き刺しにかかるが、情報処理による未来視によって瞬間移動による回避がわかってしまう。

だがそれでもゼロは止まらない。回避されたあとの事を予測する。

未来視の通りに瞬間移動され、刃は空を突いて観客席に突き刺さる。

その後突き刺さった大剣を引き抜くのではなく、収縮を行い、さらに呼び出しを行う。

背後から瞬間移動で迫ってきた理想郷の攻撃を、大剣を背中に回して防ぐ。

「ほう……今のはセンサーからの感知外からの攻撃だった筈だが……視えているな。未来を！」

触手が二本迫る。

ゼロは振り返り、少しの後退を行いながら迫ってきた二本の触手のうち一本を右手で掴み引きちぎり、残った最後の一本を大剣で切り裂いた。

「なら——」

理想郷は嘆きの弩の刃で零を弾き飛ばそうとするが、ゼロは予め零を収束させておき、コレを事前に防ぐ。

更に空を切った嘆きの弩を手ではたき落とした。

「間違いない、未来が視えているな。流星は我が孫だ!!」

二機は徒手状態で近づき、手と手を掴んで押し合う形になる。

「クハハハ！これは良い、何という才能の塊だ。しかもISの処理領域に補助をさせて精度をあげているな」

両機の押し合いは互いに一步も譲らず、機体がピクリとも動かない。

「こうでもしなければ追いつけないのでな……………多少の無茶をしても貴様を殺すんだよ」

ゼロの頭は今まで生きてきたどんな時間よりも激しく思考を行っている。

少しでも気を抜けば一瞬で頭がイかれてしまいそうになるほどの情報が頭に叩き込まれ続ける。

ゼロが理想郷を押し飛ばす。

「……………そうか、ならば僕は貴様の視る未来の先で生かせてもらう。貴様の視る未来は僕にとつての過去になる……………さあ、追いついてみる」

理想郷が瞬間移動で消え去り、ゼロは次の未来を視る。一瞬の筈なのだが、ゼロの脳内ではできる限り引き延ばされた未来が流れる。

「……そっ……」

ゼロは右手で手刀を作り、そこにエネルギーの刃を纏わせる。そして理想郷が出現するであろう位置に向けて、手刀を突き出した。

「……言っただけだ。貴様の視る未来は儂にとつての過去だとな」

ゼロが刃を突き出した先に理想郷は確かに出現したが、ゼロの突きを事前に予測していたかのように簡単に躲けてみせた。

ゼロが視た未来では理想郷に攻撃が当たるはずだった。

だが理想郷は……蝶羽無限はその未来さえも置き去りにしていった。

理想郷はゼロの背後に回り込んで、回転を効かせた大振りの蹴りを彼の背中に叩き込んだ。

(……コイツ、今の動きは間違いない。読んでたとかそういう次元の話じゃない。コイツも未来が視えていやがる)

それはゼロの勝機の消滅とほぼ同意義の事であった。

機体の性能は明らかに理想郷が優れており、パイロットの性能も実際に戦ってみてわかったがほぼ同じ。

相手に瞬間移動という最大の武器がある以上、ゼロが勝つにはソレの先を視る事ができる未来視が必要不可欠であった。

だが相手がゼロ以上の精度の未来視ができる以上、ゼロ本人のソレは何の意味もなさなくなった。彼が視た未来は蝶羽無限にとっては既に過去なのだから。

吹き飛び、上空に飛ばされたゼロに対して理想郷は態と痛ぶるかのように武器を使わずに蹴りや殴打といった攻撃だけを行う。

ゼロも未来視を行って防御を行おうとしてはいるが、理想郷の未来視がゼロの先を行っているために防御をかくぐらわれてしまう。

瞬間移動によって四方八方から襲ってくる理想郷。

(もつと、もつとだ!)

理想郷のしている未来に追いつくためにゼロはNo. 000に対してさらなる力を求める。

『止めろ、これ以上いけば死ぬぞ』

(それでもだア!!!)

No. 000の制止を振り切ってゼロは強引にISから力を引き出す。ただでさえ今のゼロは限界に近いというのにこれ以上進めば間違はなく破滅に進んでしまう。

「……視える」

ゼロは身体中の血管や神経が焼き切れてしまいそうな激痛に耐えながら、理想郷の動きを視る。もしかしたら彼は痛みを感じていないのかもしれない。それ程までに集中している。

（だがヤバイな。一気にカタをつける！）

理想郷の蹴りを腕で受け止め、続けて右フックを受け止める。

「……………ほう、儂と同じ領域まで視えるようになったか。その若さでそこまで視れるとはな……………だがいつまで持つかな？」

「無論、貴様を殺すまでだ!!」

ゼロは大剣『零』を呼び出して、切りかかるが瞬間移動で躲されてしまう。

——もつとだ。まだ足りない。

瞬間移動で動き回る理想郷の動きは既に目で追いかける事すら困難な領域に入ってしまったている。

——奴の先を行く。

瞬間移動で飛んでくる理想郷に対して攻撃が入り始める。

ゼロは激痛と共に今までに感じた事のない感覚が自分の中で生まれつつあるのに気がついた。

それは今の戦闘には関係ない筈なのだが、決して邪念ではなく、寧ろ何処までも透き通っていくような感覚だ。

激痛と共に心地よさが生まれる。

「……超えてきている？そう来なくてはなア!!」

理想郷はゼロからの反撃を食らう。それも一度や二度ではない。

理想郷の視えている未来の先にゼロが動いている。限界を超え、安全圏を無視した無茶がこの短時間で理想郷を超越した。それなのに理想郷は何処か楽しそうに戦っている。

「コレで——」

瞬間移動すら凌駕してしまいそうな音さえも越えてしまいそうな超高速機動が理想郷を追い詰める。

——零落極夜

焼き溶けてしまいそうな肉体の痛みに耐えながら、ゼロは零落極夜を発動させる。光をすべて飲み込んでしまいそうな漆黒の刃が世界の色を塗り替える。

「——終わりだ!!」

度重なる攻撃によって防衛が崩壊した理想郷の胴体目掛けて、ゼロは『零』を突き立てた。

「.....あ」

刃が理想郷に刺さる事はなかった。

あと一秒あれば確かにゼロは理想郷をこの場で殺せてたのかもしれない。

だがその一秒はゼロにとってはあまりにも長すぎる一秒であった。

自らの限界を超え、人間という枠の外に踏み入れ用とした代償はあまりにも大きかった。

体全体から力が抜けていく。



機体は制御を失い地面へと落下して行き、受け身を取ることすらできずに地面に叩きつけられた。

激痛すら過ぎ去って何も感じることはない『無』がゼロの体には広がっていた。今までの人生の中でこのような感覚に陥ったことはない。

自分の体の筈だが、今は他人の体のような違和感しかない。

黒零は手足を動かすことができなくても操縦者の脳波だけで動かすことができる。それが唯一の救いであつた。

動かなくなったズタボロの肉体を無視して脳波だけで黒零を動かす。

ギリリ、ギリリと音虚しいを立てながら人間の肉体を単なるパーツの一つにしている。

そこに残っているのはもはや……肉体を失いながらも魂だけで戦う亡霊ファントムのようだ。

『止める、それ以上動くな』

No. 000が制止するがゼロはそれを振り払う。

ゼロはここで自分一人で理想郷を止めなければIS学園にどれだけの被害が及ぶのか理解している。

だから戦わなければならない。

「……………その執念、意思の強さは認めよう。あと一秒だけ貴様の肉体が持てば、勝っていたのは貴様だった。儂にはその未来まで見えなかった。だが……………勝ったのは儂だ」  
理想郷が地面に降り立ち、右手に織斑千冬の戦いの際に使った黒と金の刀を持つている。

「——零落極夜」

黒と金の刃が完全な漆黒に染め上げられる。

「せめてもの情け、貴様の魂は儂が必ず理想郷につれていこう。そして……………もう一度……………もう一度……………儂は」

漆黒の刃が振るわれ、ゼロの左腕が肉体から斬りはなされた。

## 第134話

「アハハハハハハ!! もっと、もっと暴れさせろオ!!」

破壊、破壊、破壊、破壊、破壊。

圧倒的なまでの破壊の音が周囲に響き渡る。

あたり一面は既に崩壊させられた校舎の瓦礫に溢れており、今も敵が攻撃を行う度にその量は増え続ける。

並のISでは出せないような圧倒的な威力のエネルギーの弾丸が次々と撃ち込まれる。

「……困りましたね」

IS学園の教師である山田麻耶は一方的に攻め込まれている現状に焦りを隠すことができない。

この場には彼女の他に数名の教師がいるが、たった一機のISを前に圧倒され続けている。

そのISは通常のISの三倍近いサイズだ。腕や足の長さだけでも並のISの全長

と同じくらい、手足の太さは比較にならない。

そして火力は比較にならない。その手足から放たれるエネルギー砲の直撃を食らってしまえばシールドエネルギーの大半は削り取られてしまうだろう。

その火力と肩を並べることができるのは白式や黒零といった覚醒したISSコアを使用した機体だけかもしれない。

しかも速度や機動力も並ではない。覚醒してないコアを使用しているISSではもしかしたら最高の性能なのかもしれない。

一個のISSコアではここまでの性能を引き出すことはできない。

だからこのISSには――

「複数のコアが使われていますね」

敵のISSの解析を行った山田麻耶は

その現実を信じたくはなかった。

敵のISSには少なくとも10個のISSコアが使用されている。手足と胴体にそれぞれ二個ずつ、胸にある一個のISSコアだけが篠ノ之博士が作り上げたオリジナルで、残りは量産型のコアだ。

だがそれらはデュノアの使っているデュアルコアのようなものではなく、ただ単に同時に使用されているだけだ。

それでもこの火力なのだ。

「……あんな数のＩＳコアを動かして体に負担はないのかしら」

通常であれば複数のＩＳコアを同時に使用するのは体にかかるの負担がかかる。デュノアの使っているデュアルコアであれば話は別なのだ。

あの数のコアを使用すると、下手をすれば肉体に痺れなどの後遺症が残ってしまう。それだけ脳に負担がかかってしまうのだ。

実際、かつて実験で複数のコアを同時使用した際のパイロットの体には負荷がかかり、後遺症を患ってしまった。

だが麻耶の目の前で暴れまわるＩＳの操縦者には後遺症を恐れる事によって生じる躊躇いは一切感じられなかった。

「出せ！あの黒いのと白いのを！！殺してやる！殺してやる！アタシの体を奪っていったあいつらを殺してやる！！」

暴れまわるＩＳをこれ以上は放置しておけない。

数機のＩＳで巨大なＩＳを取り囲む。

「……ああ？そんな雑魚数機でスカーク様のルインシユナーの相手になるわけねえだろうが！！」

スカーラの四肢を数機の I S が超硬度のワイヤーで縛り上げる。

そしてその間に残った教員たちは敵の胴体めがけて一気に攻撃を仕掛ける。

「アハ！何処までも平和ボケしている。そんなので止められるかよ！この雑魚どもが！！」

ルインシュナーの四肢が胴体から分離される。分離された四肢は空中で自由自在に動き回り、それぞれを縛っていた I S に攻撃を仕掛ける。

「な!？」

I S 学園の教員たちはルインシュナーからの予想不可能だった攻撃に対して、対応が一手遅れてしまった。

縛り上げたワイヤーは意味をなさず、空中を自在に動き回る手足は幾度も殴打を繰り返す。

「このスカーラが、ただのデカブツを使ってたまるか!」

更には単なる胴体にすぎなかったパーツが変形して一機の通常サイズの I S に変わった。

左手には盾、そして右手には剣、今までの異形な巨体からは想像できないほどの普通の I S がそこにはいる。

「今なら、普通の I S だ!!」

打鉄の後継機にあたる第3世代の機体に乗った教員が真つ向からスカーラに迫る。

「舐めんなよ!!」

スカーラは迫ってきたISの攻撃をかわし、首裏を盾で殴り、最後に浴びせ蹴りを食らわして地面に這い蹲らせる。

「お前らみたいな平和ボケした相手に殺されるわけないんだよ!!」

周囲に飛び回っていた手の一つが、一人の教員をその巨大な手で鷲掴みにした。

そのまま壁に貼り付けにし、掌からエネルギーを放つための準備を始める。

「かわしてみろよ!!かわしてみろ!!」

手に込められているエネルギーは普通のISでは耐えられるものではない。

下手をすれば絶対防御を貫通されてしまうかもしれない。

殺意の塊が教員の間に突きつけられる。

「じゃあ終わり」

放たれたエネルギーがISを貫き、鷲掴みにしていた教員を投げ捨てた。彼女は僅かに息が残っている。今ならばまだ助かるかもしれない。

だが動けない。

これ以上戦力を削れば確実に戦線は崩壊してしまう。今は助けるための人材を向ける事すら難しい。

「さあ、戻ってこい」

散らばっていた手足が胴体のある部分に集まり、変形を行って再び合体を行った。

「……………ああ、そろそろクスリが切れる頃合いか。この機体強いのはいいが、クスリ打たないと肉体が持たないのは厄介だな。今度からは予備を準備しておくか……………最後は大暴れだ!!」

ルインシュナーの全身のありとあらゆる場所に取り付けられた砲台から四方八方に向けて、大小大きさの異なるエネルギー弾が周囲一面に放たれ、校舎を破壊していく。

「止めてみろよ、止めれるモノならなあ!!」

——その時、光が視界を埋めた。



場所は変わって、百春とガーベラが戦闘しているエリア。

戦いは苛烈を極めており、すでにかかなりの時間戦闘を行ってはいるが決着がつく気配がない。

極限に近い集中を行い続ける両者、その集中はいつ途切れてもおかしくはない。

だがそんな気配は一切感じられない。

「……………攻撃が通じなくなってきた？」

違和感を覚え始めたのはいつからか、ある時を境に攻撃が空間を捻じ曲げられることによつて防御されている。

空間の捻れは百春とガーベラの間が存在する距離を崩壊させる。捻じ曲げられた空間に阻まれて刃がガーベラまで届かない。

「……………単一能力か」

これを見て百春が真つ先に疑ったのは零落白夜や零落極夜のような単一能力の存在

であつた。

「……………いや、違う」

敵がそんなのを発動させた気配は一切感じられなかった。オートで発動するものであれば最初から発動させておけば良かったはずなのに、攻撃が通じなくなつたのは戦いが始まつてから時間が経過した頃だつた。

「……………単なる技術……………空間……………そうか」

百春の頭に一つの考えが浮かんだ。

そしてすぐさま対応に移る。

真華を手にとり、相手との正しい間合いを探る。間合いが狂つてしまうのであればそれを修正すれば良いだけ。

真華で袈裟懸けを行う。

だがその攻撃はやはり空間が捻じ曲げられることによつて防がれる。

だがそこまでは百春も織り込み済み。空間の捻れをよく観察する。

「成る程」

返す刃で逆袈裟懸けを行う。

「何度も同じ手を」

再度空間が捻じ曲げられてしまい、攻撃が防がれそうになる。

「今！」

だが空間の捻れは突如真逆の方向に力をかけられて元の空間に戻ってしまう。

「ッ!?!」

ガーベラは僅かに反応が遅れてしまった。

元の空間で、正しい間合いによって動かされた真華はガーベラが乗る『白薔薇』の胴体を僅かに傷つけた。

「チャクラで空間を捻じ曲げて防御していたのか……種がわかれば怖くはない。コッチが真逆の力をチャクラでかければよいだけだ」

百春はガーベラの相手が自分で良かったと思った。相手がチャクラを使って防御してくる以上、此方もチャクラを使えなければ攻撃が通らない。

もしこれがチャクラを使えない人が戦っていたら一方的に倒されるだけだっただろう。

「……………傷つけられた……………私が……………ゼロ以外に？」

ガーベラが百春によって傷つけられた装甲をワナワナと震える指でそつと優しく撫でた。

「許さない、私を傷つけていいのはゼロだけなのに……………だから殺す」

「殺されないよ……………死ねないからぬ」

「そう……………ん？…………… チッ！」

ガーベラが突然今の戦いを放棄して何処かへ飛び去って行った。それはまるで何かから逃げるような様子であり、百春はその事が非常に気になった。

「……………何が？……………マズイ——」

——その時だ。

莫大な量のエネルギーが天から放たれ、IS学園は光に包み込まれた。

## 第135話

——生きています。まだ戦える。

左腕を失ったゼロは消えかかる意識の中で、近くに落ちてあった『零』を呼び寄せて右手で掴んだ。

流れ出る血は黒零が自動で止血を行ってくれる。傷口に止血用のジェルを塗りつけ、応急処置を済ませる。

「……………倒すつもりで胴体を狙ったのだがな、まだ戦う意思が残っているのか」  
理想郷の刃は間違いなく黒零の胴体の装甲を破壊して動きを停止させるはずだったが、ゼロが攻撃をくらう直前によけた事で腕だけが吹き飛んでしまった。

亡霊のようにユラユラと揺れながら、覚束ない足取りで一步一步理想郷に近づくとゼロ。

すでに肉体はズタズタ、機体にもガタがきてしまっている。

普通の人間ならばとつくに地面に倒れ動けなくなってしまうている。

だがゼロは伊達では無い。

もはや執念と言ってもよい感情だけで動いている。

「……もう、終われ」

理想郷の蹴りがゼロを吹き飛ばし、ゼロは地面を転げ、仰向けに倒れた。

「ああ……ああ」

声にもならないような声が倒れたゼロの口から漏れる。まるで魂が口から漏れていくかのようにだんだんと小さくなっていく。

「もう終わらせよう。この場所を破壊しつくしてな」

理想郷の背中から生えるエネルギーの翼が更に巨大になる。

はるか上空に飛び上がり、弓を構える。

翼に蓄えられた莫大な量のエネルギーは不気味に蠢き、弓に吸い込まれていく。

「零落極夜」

理想郷の紫黒色のエネルギーが零落極夜の影響で宇宙のような純粋な黒色に変わる。

「まだだ……」

ズタズタになった身体に鞭を打って強引に起き上がる。シャレにならないほどの激痛を体全体から浴びながらも、意思のみで立ち上がる。

ヘルメットに天空の理想郷が放とうとしているエネルギーの予想威力が表示されて

いるが、笑うしかなかった。

防ぐ手段がないほどの超高威力のエネルギーの矢。どれだけ計算を行っても今の黒零の力では受け止める事が出来ず、かわせばエネルギーの矢の衝撃でこの学園全体が吹き飛んでしまう。

加えて零落極夜を発動させてあるのだから、絶対防御であろうと容易く貫通し操縦者を一瞬で殺してしまうだろう。

仮に黒零の機体状況が最善であったとしてもこの攻撃を防ぐ事ができるかは怪しい。

「……………ふう」

息を吐くが何も生み出さない。

背中では燃え盛っているかのように激熱を帯びている。まるで彼の背中にある蝶と蛾の羽の様が何かを伝えようとしているかのようだ。

ジワリジワリと背中の燃え盛るような熱が背中から腕を伝い、右手に伝播する。

右手に伝わった熱から『零』の鼓動を知った。生物のように刻んでいるわけではないが、この武器は鼓動を刻んでいる。

それが何を示しているのか――

「使えと言うのか？賭けに出ろと？」

今の『零』では攻撃を受け止める事は出来ない。理想郷が放とうとしているエネルギー

ギーの総量はこの大剣一本でどうにかなるものではない。零落極夜を使用しても、無効化できなかつたエネルギーがゼロを飲み込み、余波が学園を破壊し尽くすだろう。

そうなればこの学園にいる全員が死んでしまうかもしれない。

「……………アリサも死ぬのか」

真つ先に考えたのは姉や弟に関してではなく彼が愛している一人の少女『誘宵アリサ』だった。

ここで彼がこの攻撃を防がなければ誘宵アリサも攻撃に巻き込まれて死んでしまうかもしれない。

それがどれだけ辛いことか、自分が死ぬよりも辛いかもしれないと彼は思った。

「……………そんなことさせるか。護る。護るんだ!!」

『護る』、戦いの場においてその気持ちが生まれたのは初めてだった。

今までそんな感情は必要としていなかった。必要だったのは敵を『殺す』という感情のみ。敵を殺せば必然的に仲間を護ることに繋がるとゼロは信じていた。

だが今は違う。

殺すという感情を放棄して純粋に護る為だけに己の感情を機体に乗せる。

弟の百春が護る為に戦うと言っていた意味を本質的には理解していなかったが、今は理解できる。



「行くぞ、No. 000!」

『零』を掴む右手により一層力がこもる。次の一瞬でこの島にいる全ての人間の運命が決まる。

それなのにゼロは取り乱すことはない。己にできる事を全力で行うだけだ。

ゼロは理想郷が弓を構えている上空に向けて、今出せる最高速度で飛んだ。

「まだ向かってくるか………あの傷では立ち上がるのも不可能だと思ったのだが、流石は我が孫だ」

此方に向かってきているゼロの存在については気がついてはいるが、何か対策を行う事はない。

今のゼロではどうにもする事はできないと理想郷は気がついているのだ。

「各員には避難指示は出してある。巻き込まれれば不運だったということだ………」

さあ、滅びろ!!」

天空にいる理想郷がIS学園目掛けて矢を放った。

この一撃を表現するのであれば、『神罰』。

天空に住む神から下界に住む人間に向けて放たれる裁きの雷、人が抗う事ができないほどの威力をもったソレが容赦なくIS学園に向けて撃たれた。

『神罰』が降ってくる。

もうこの場からでは回避することなど不可能。真つ向から受け止めることさえ今の黒零には不可能と言っても良いだろう。

それでも正面から受け止めるという選択肢しかゼロは持ち合わせていなかった。残ったエネルギーの大半を零落極夜に回せ!!防いだ後のことは考えるな!!」

この攻撃を防ぐ。

その為にゼロは今やれる最善策を取るしかない。

「……零落極夜アアアア!!」

残ったエネルギーの大半を零落極夜に回した。

『零』の刃からは発動された零落極夜が溢れ出して刃を包み、ボロボロになった右腕の至る所についてある罅からは刃から放出しきれなかった零落極夜が溢れ出している。

純黒の煌めき、それは今までのものよりも綺麗でまるで宇宙のようだった。

刃の腹を盾のように構える。左腕があれば良かったのだがそんな事は今言えない。

零落極夜で切り裂いた所でできるのは一部を打ち消すことであつた全てを切り裂くことはできない。

切り裂けなかつたエネルギーがIS学園を襲つてしまえば何の意味がない。だから刃を盾にして真つ正面から受け止めるしか方法がないのだ。

『神罰』を真つ向から受け止めた。

「受け止められる訳がなからう」

『神罰』を撃つた理想郷はその反動から性能が僅かに低下していた。

此方も残つていたエネルギーの大きさを今の一撃に回していた為、早いうち戻りたいと考えている。

理想郷の眼下には『神罰』を必死で受け止めようとしているゼロがいる。

そんなことを使用としても無意味だと理想郷は思っている。

この攻撃を防げるわけがない。

今放つたのは最高の性能を持つ理想郷による最強の一撃、いくら覚醒したコアを使用したISだからといつてもポロボロの機体では受け止められる訳がない。

だが。

「……なんだ」

違和感だ。

『神罰』が落ちていかない。

予測では既にボロボロの状態であった黒零は『神罰』を受け止めることができずに一瞬で崩壊していくはずだった。

それなのに黒零は未だに機体の形を保ったまま『神罰』を受け止めている。

「何だ、何が起きている」

焦りが生まれる。

まさかここまで黒零が粘るとは理想郷も考えてはいなかった。

「超えてくるか!!ワシの予想を、流星は我が孫!!さあ、可能性を見せてくれ!お前の輝きを!!」

『神罰』の下から、極夜の光が空を埋め尽くさんと広がっていく。その光はあまりにも神々しく、そして禍々しい。相反する二つの感想ではあるが、そう表現するのが最も適していると言えない。

その光は理想郷が放ったものではない。

黒零が放ったものである。

極夜の光に『神罰』は押され始める。

理想郷はその事が信じられなかった。あの上体の黒零にここまでの力が残っていたなどと予測もできなかった。

いや、そもそも眼下にいる黒零が先ほどまで自分と戦っていた黒零と本当に同じ機体だというのが信じられない。

「これが人とISの可能性か……良い!!ここにきて貴様らの繭を打ち破るか!ならばもつと見せてみる!」

黒零には殆どエネルギーが残されていないはず、そして理想郷も殆どエネルギーが残っていないかった。

瞬間移動をするだけの力も残っていない。

それだけ今の『神罰』に力を込めていたのだ。

それなのに黒零——ゼロはソレを超えてこようとしている。

それが堪らなく嬉しかった。己の孫はこれほどまでの才を持っていたのかと、祖父としての狂った気持ちがある。無限を動かしている。

今この瞬間だけ、無限は自身の立場を忘れてしまっていた。

——そして『神罰』は打ち破られた。

『神罰』に込められていたエネルギーを全て零落極夜によって無力化させたゼロが『神罰』を突き破って理想郷の前に出現した。

装甲の大半は既にボロボロのヒビ割れ状態になっており、少しでも力を加えれば全て崩れてしまいそうな脆さを感じられる。

背中からは溢れ出てきた零落極夜のエネルギーが左右それぞれ模様の異なる蝶のような羽を形成している。

ヘルメットは『神罰』を受け止めた際の衝撃によつて吹き飛ばされており、頭を晒したまま理想郷に向けて突撃をしかけている。

目は白目を向いており、正気を保っているとはとても思えないが、なんの迷いもなく理想郷がいる場所目掛けて突撃しているのでなんらかの意識があるには間違いない。

白目を向き、理想郷をこの場で必ず倒すと言う意思を隠そうともしない彼の面はまるで鬼のようだった。

「——ウオオオオオオ!!!」

魂の奥底からの叫び声をあげながらゼロが放つ零落極夜の輝きが更に一段階深く、美

しく煌めく。

理想郷は殆ど反応ができなかった。

エネルギーを『神罰』に回していた事による性能低下も原因の一つではあるが、あまりにも予想外の出来事だったのも原因だ。

背中から生えた蝶の羽による加速を受けてゼロは一瞬で理想郷との距離を詰めると右腕に持っていた『零』を振り上げる。

「ツラアアアアアアアアア!!!」

残った命の全てを振り絞るかのようにゼロは全身全霊この一撃にかけている。

零落極夜をまとった『零』の一撃が反応が遅れた理想郷目掛けて振り下ろされる。

「ツチ!!」

理想郷は切り裂かれる寸前の所で後方に下がり、胸の装甲だけ。破壊させた。

後少しでも回避が遅れていたら間違いないと胴体を真っ二つにされていた。

理想郷は自身の幸福に感謝していた。

「——ああ」

全身全霊をかけた攻撃が躲され、限界を突破して動かしていた肉体にもとうとう限界がきてしまったのか、ゼロは地上に向けて落下していった。

まどつていた零落極夜は消え去り、彼本人も意識がなくなっているのかピクリとも動かない。

「……死ぬか、生きるか……」

ゼロが落下していく様子を見ていた理想郷は体の向きを反転させる。

もうこれ以上戦闘を行う気がないのか武器を収縮させた。

「我が同胞達に告げる。我らの存在を世界に知らしめる事は完了した。これより作戦は次の段階に移る……基地に戻り次第準備を始めるぞ、これより先は新たな世界の始まりだ」



## 第136話

力感のなくなった四肢が落下の影響を受けて空に向けられている。

理想郷への最後の攻撃を与えた後に気絶してしまったゼロは地上へ向けて無抵抗のまま自由落下を始めていた。

本人の意思は最後の攻撃をしかける前には殆ど無くなっており、攻撃をした後は無気力な抜け殻になってしまっている。

黒零もエネルギーが底を尽きたのか機能が停止してしまい、非常用の装置すら起動しなくなっている。

このままいけば間違いなく地面に叩きつけられて死んでしまう。

「何だ、何故奴らは撤退した」

襲撃をしかけてきたネオが撤退していく様子を百春は疑問に思いながら、周囲の様子

を確認していた。

「それに、さっきの光……………零落極夜？兄さんに何があつた」

校舎は既に半壊……………いや、それ以上の状態になっており、学校としての機能は殆ど消滅している。

この状態から元の状態になるには何ヶ月かかるかわからない。

百春は無事であるが、負傷者多数出ており中には戦いによつて死亡した教師や生徒もいる。

唯一救いがあつたとしたら避難をしていた生徒達が全員無事だったという事だろう。負傷者は全て今の戦いに出ていたものだけ。

全員が無事で済むことなど戦いではあり得ない。

「急いで、負傷者の手当にいかないと」

百春自身疲労はしているが負傷はしていない為に負傷者への救護へと向かうことにした。

今行けば助かる命が必ず何処かにあるはずだ。

「何処に……………ん？」

ISからのアラート表示、百春はまた新たな敵かと身構えたが敵が来たわけではないようだ。

空を見上げるように指示が来たのでそれに従う。

「……………何だ、何が落下して来ている」

百春は上空から落下してくる何かに気がついた。それは垂直に、IS学園に向けて落ちて来ている。

ISに備え付けられてあるスコープを覗き込み、映し出される映像を拡大して落下物の正体を確かめる。

「……………兄さん」

百春の背中から嫌な汗が流れた。

兄である一夏が空から落下して来た。

しかも気絶しているのかピクリとも動きはしないし、左腕が無くなっている。

百春は何が起きているのか全くわからなかったが、ヤバイ事が起きているという事だけは理解できた。

一夏の強さに関して、百春は一切の忖度なしに客観的に最強候補であると評価している。

そんな兄があんな状況になっているのが信じられなかった。

「あれ、ヤバイ!!」

呆然としている場合ではなかった。

このまま行けば一夏が地面に叩きつけられて死んでしまう。

救助に向かおうと動き出そうとしたその瞬間、別の場所から藍色の機体が最高速度をもつて一夏の元へ飛んで行った。

「一夏くん!!」

誘宵アリサだった。

彼女は他の全ての事を後回しにして落下してくる一夏を助ける事を最優先事項とした。

彼女は一度落下してくる一夏の上空へと上がり、落下していく彼の軌道に自身も合わせしていく。

そして彼に追いつくと速度を同じにしてそのまま優しく抱きしめた。

チャクラを使用して衝撃を限りなく零に抑え込みながらユツクリと減速を行い先ほどまで一夏が戦っていたメインアリーナに着地して行った。

「俺も……向かわないと」

自分に何ができるかわからないが、百春もメインアリーナに向かった。

「一夏くん!!しっかりして!!」

アリーナに着地したアリサはすぐさま地面に救護用マットを敷いてそこに一夏を仰向けに寝かせた。

ISは既に自動で解除されており、元は左腕に付けられていた待機形態の漆黒のガンレットはつける場所をなくして、地面に転がり落ちている。

着地を行うまでに一夏の呼吸がない事を確認している。更に最悪な事に心臓も停止しており、このままの状態では数分もしないうちに完全に死んでしまう。

それをそれ阻止するためにアリサはゼロに対して心臓マッサージを行っている。

医療班は他の負傷者の元に向かって居るはずだからこの場所にくるのはかなり時間がかかる筈だ。

だからアリサがどうにかするしかないのだ。

IS『アイリス』から送られてくる応急救護の手段と手順を参考にしながら、アリサは手際良く作業を行い続ける。

アイリスに備え付けられてあつた救命道具を活用しながら、アリサは一夏に必至で呼びかける。

「嫌だ！嫌だ、また一夏くんを失うのは嫌だ」

普段は冷静な様子からは考えられないほどアリサは現状に対して取り乱してしまっている。

一夏が死にかけているという現実には彼女にとって受け取り難いものであった。

二度も失つてたまるか、あの時の悲しみを繰り返してたまるか……そんな思いが彼女の心の中を占領していく。

「私は、一夏くんを幸せにする。だから、生きて！」

そこに少し遅れて百春がやって来た。

「誘宵さん！兄さんの様子は!？」

「結構危ない。急いで本格的に治療しないと、死んじゃう……………」

手を止めることなく、アリサは治療活動を続ける。

死という結末から抗うために。

百春が自分にできることは何かないかと探し出したその時であった。

『ああ、聞こえていますか？』

突然誰かからI S コアを通じて通信が入った。

「誰!？」

『此方は亡国機業、今そちらに向かっています。あと一分もしないうちに到着します』  
亡国機業という名前に二人は反応した。一夏から所属している組織の名前として  
聞かされたことがあるからだ。

(……………の声?)

そして百春には通信を行って来た相手の声に聞き覚えがあつた。

そんなことを考えているうちに巨大な何かがアリーナに飛来した。

それはメカメカしいデザインをした巨大な倉庫であつた。

二人は僅かに警戒し、百春はいつでも防御を行えるようにチャクラを発動させる。

倉庫の扉が開かれ、中から一人の少女が降りて来た。その少女の姿を見た瞬間、二人  
の顔が驚愕に染められた。

「……………クロエ・クロニクル」

その少女はかつてこの世界に向けて自分の存在意義を問いたモノだった。

「亡国機業、総帥直属部隊、部隊長補佐、クロエ・クロニクルです。皆さん、お久しぶり  
です」

## 第137話

気がつけばゼロは部屋にいた。

白で纏め上げられた部屋であった。彼はこの部屋に備え付けられてあるソファアークに座らされていた。

ゼロはこの部屋に見覚えがあった。ISの意識の中、数回この部屋にやってきたことがあったからすぐにわかった。

「起きたか？」

ゼロが座っているソファークとは低めのテーブルを挟んで対称的に置かれてあるソファークに一人の男が座っていた。

「No. 000……」

「元氣そうだな、ゼロ」

ゼロの目の前に座っていたのはNo. 000のISコアの意思だ。

二人は黙った。



何も言い出せないまま、ただただ重苦しい雰囲気は二人の間を占領していく。

二人ともN.O. 1000に負けてしまったことを引きずってしまっているのだ。一夏は死にかけるような敗北をした経験がなかった。

五分か、十分か、それくらい長い時間が流れた時、漸く口を開いた。

「負けたな」

「……………ああ、そうだ」

二人とも最善の手を尽くして、自身の限界を凌駕した。

それでも負けた。

原因は何だったのか、ゼロの肉体が耐えられなかったからか、黒零の性能が理想郷よりも劣っていたせいかな。

考えれば考えるほど敗因を思いついてしまう。

「俺の肉体があと一秒動けていたら殺せてた」

「それを言うなら、お前の速度に着いてこれなくなっていたオレにも原因がある」

互いに相手に非はない。自分のせいで負けてしまったと思っっている。

「……………」

二人は黙った。

これ以上続けても話は平行線から動くことはないと思っただけだ。

ただただ重苦しい雰囲気は二人の間に広がってしまふ。こうなってしまうえば喋り出すのは困難だ。

何分時間が過ぎたのだろうか、一夏<sup>ゼロ</sup>が漸く口を開いた。

「その……なんだ……結局はアレだ。どつちかが悪いんじゃないやなくて、どちらも悪かった。俺たちもつと強ければ、あいつらを倒せた……そういうことでいいだろ」

二人は黙ってしまった。

どちらが悪いではない。どちらにも足りない部分があつたのだ。

だからこそ互いにソレを補い、より高い次元に高め合う必要がある。

「次は勝つ……勝たなきゃいけない。俺たちは勝たなきゃならねえんだ」

「当たり前だ。No. <sup>アレ</sup>1000に負けたままでいられるか」

二人ともリベンジする気満々だ。負けたままでは死んでしまふ。奴らを倒さねば意味がない。

その思いはただ単に負けた時よりも大きかった。相手は二人の別の別の側面とも言える存在であつたから……ただ負けるよりも何倍も何十倍も悔しかった。

「そろそろ戻れ、お前を待つモノたちが目覚めを待っている」

「それは呼び出した奴のセリフじゃねえが、まあいいや……またな」

目が霞む、視界が狭まる。眠気に襲われたわけでもなく、気絶していくわけでもない。ただこの世界から、一夏の意識が消えて行った。

目が覚めたら視界がオレンジ色だった。

「ッ!?!」

事態が飲み込めず、起きてそうそう慌てる一夏。だがすぐに自身が置かれている状況を理解することができた。落ち着きを取り戻し、力を抜いた。

亡国機業でよく使われている液体を用いた治療装置、それに間違いなかった。一般では出回っていない代物である。

カプセルの中を特殊な液体で満たして、その中に治療したい患者をいれる。時間はかかるが、失った手や足を再生させる事ができる。

開発者曰く死ななければ治せる。

よくSFとかで見かけるアレ。

亡国機業の技術力が開発させた代物だ。

液体の中にいる筈だが呼吸をするの苦しきは一切ない。普通の呼吸を行うよりも心地の良い呼吸が行えているような気がする。

この場所にいるということは、誰かに連れて来られたのだろう。

ゼロはジツクリと自分が眠っている間に起きた事を考える。

誰かに治療され、本部まで運ばれてきた。

チラリと視線だけを左側に移すと、そこには理想郷によって切り裂かれた筈の左腕が綺麗に傷跡なく生えていた。

斬られた腕をそのままくつつけたのか、それとも何らかの技術を使って一から早したのかわからないが、何の問題もなく動かす事ができるのでよしとした。

(あとどれくらい治療すれば良いんだ?)

ゼロとしてはいち早くこの治療装置から出て、現在の状況を確認したかった。

だがこの治療装置は治療が終わるまで中から開ける事はできない。

なのでゼロとしては早く誰かにきて欲しかった。

「おや、起きられたのですね」

部屋の中少女の声が聞こえた。

最初から部屋の中にいたのだろう。ゼロが視線を声の元に向けると、そこには椅子か

ら立ち上がったばかりのクロエ・クロニクルがいた。

彼女はゼロが入れられているカプセルの前までやってくると装置を弄り始めた。

治療装置の中に入っていた液体が抜かれ、蓋が開けられる。

ゼロは装置の中から外に出ると近くに置かれてあったタオルで体を吹き上げ、そして綺麗に畳まれてあった服を着た。

「どれくらい眠っていた？」

「二週間ほどですね。腕を再生させるのに時間がかかりましたし、他の部位もダメージを受けすぎていました」

どうりで体がいつもより重く感じてしまうわけだとゼロは思った。この二週間動かなかったことよって筋肉が衰えてしまっている。どうかして短期間で前と同じような筋肉を手に入れる必要がある。

「この二週間の間に何があった？」

「此方に纏めてあります」

クロエはゼロの考えを予め予想していたのか、タブレット端末を手渡した。

クロエはこの亡国機業に所属するようになってからはゼロの秘書のような立場になっっている。

ゼロが仕事を行いやすいようにサポートを行うのが彼女の役割だ。

渡されたタブレット端末の電源を入れて、纏められた情報を確認する。

十分ほどでゼロはまとめられた情報を読み終えた。

「……………第三次世界大戦か」

そのの始まりは世界各地で同時に発生したＩＳを用いたテロ行為だった。

世界の大都市でＩＳが出現し、多くの人間の命を奪った。各国は警戒し、やがてある国が宣戦布告を行った。

それにより戦禍の炎は爆発的に広がり、忽ち世界を巻き込む戦争になってしまった。

「亡国機業としての動きは……………」

「今の所は各地で暗躍するネオに対して動いているだけです。ネオが本格的に動いた際に対抗できるように準備しているといったところでしょうか」

ゼロはタブレットで情報を確認しながら、治療室を出たとある場所に向かっていく。

「ＩＳ学園……………崩壊か」

タブレットの中に入っていた情報に気になるものがあった。

あの戦いでＩＳ学園は崩壊した。

犠牲者は戦闘に参加した教師、生徒合わせて数十人。避難していた生徒達の中に犠牲者は奇跡的にいなかった。

それだけは救いだっただろう。

「今はどうなっている」

「校舎が崩壊してしまったために、現在は休校になっています。生徒達の多くは自分の国に帰り、教師達は後始末に追われています」

「……そうか」

しばらく廊下を歩き続け、クロエは黙って後ろから着いて来ている。

とある部屋の前で立ち止まると、ノックもせずに入っていた。

この部屋は整備室で、一機のISが静かに鎮座していた。

「……修理は完了しているみたいだな」

機体の名前は黒零、ゼロのISで、亡国機業最強の機体である。

先の戦いで半壊状態になっていたが、この場所で修理されたのだろう。完璧な状態で相棒の目覚めをこの場所で待っていた。

『そうだね、この子を修理するのは手がかかったよ』

『結構派手にぶち壊したよね、いっくん』

部屋に備え付けられた二つのモニターにそれぞれ映し出されるデフォルメ調の可愛らしいキャラクター。

一人は亡国機業技術局局长、亡国機業の天災『リリス』。

もう一人はISの生みの親、一夏にとっては近所の天災『篠ノ之 束』。

二人とも元は人間としての肉体を持っていたが、今現在はISの意識と同様に電腦精靈になっている。

肉体をなくし、電腦の世界に生きる存在になっている。

「ここまで派手にしなければならぬ相手だった。とは言つても、負けてしまつては意味がないのだがな……今すぐにも動かせるか？」

『動かせる。だが、少し待つていて欲しい。この機体に細工をしている途中なのだ。明日まで待つて欲しい。……それに、目を覚ました事を報告しに行った方が良い。心配していたぞ』

アリスが画面の中で『GO!』と書かれてあるプラカードを掲げている。

「ならそうさせてもらおうか」

『くーちゃんはこのに残つて、私たちの手伝いをしてね』

「わかりました、束様」

クロエはゼロに対して一礼すると、部屋の中に備え付けられてある執務机に座つた。

「なら明日から動かせる様に調整お願いします。今日は……大人しくしておきますから」

ゼロは束達に頭を下げ、この部屋から出て行つた。



「……………で、なんで俺の部屋で寛いでんだ？」

「え？良いじゃん。私と一夏の仲じゃん」

一夏が自室に戻ると、彼が普段使っているベッドの上ではティファニアが我が物顔で寛いでいる。

数ヶ月間部屋に戻っていなかったので埃が溜まっていると思っただが、綺麗に掃除されているようだ。

「随分寝てたね、二週間くらいだけ？ここまで酷く負けたのって始めてじゃない？」  
ティファニアはベッドに寝転がっているが、丁寧なことに靴をしっかりと脱いでいる。

「まあな、訓練とかで負けることはあつたが、実践でここまで酷い負け方はしたことねえよ。完敗だよ」

上着を脱いでハンガーにかけると、一夏はドツカリとソファァーに体重を預けて座つた。

「なんか飲み物ない？」

「んん？コーラはこの前補充したからまだ残ってると思うよ？」

「……………もしかして、ティファ……………日常的にこの部屋使つてねえか？今の様子からも察してるけど」

ソファアールから立ち上がった、冷蔵庫からコーラを取り出すと再びソファアールに座った。

「……………勝てる？」

誰に、とは聞かない。

ティファニアがそんなことを聞いてくるなんてこれまでは一度もなかった。

一夏は今現在の亡国機業の最強だ。スコールやティファニアよりも遥かに強い。

その一夏が負けたと言うことが亡国機業全体に嫌な空気感を広げている。

「……………勝つ」

勝てるとか勝てないとか、そんなことを言うつもりは彼には一切ない。勝たなければならぬのだ。

二度の敗北は許されない。

次の敗北は亡国機業の敗北を意味する。

「……………重くないの？そんなに背追い込んで。普通の男子高校生だったら、今頃は普通に学生して、普通に勉強してる。それなのに背負うの？」

一夏は少しだけ黙った。

今になってこんなことを聞かれるなんて思ってもいなかった。聞ける機会などいくらでもあったはずだ。

なぜ今こんな事を聞いてきたのかは聞かない。今だからこそ聞いてきたのだと、一夏も理解しているのだ。

「背負うさ、俺だから。それにさ、俺に重いんだったら他の人には背負えねえだろ。俺以外に誰が背負える？背負えないね」

自信満々に一夏は答えた。

それが本心なのかはわからない。

ただ一向に気高く振舞っている。少しだけ不安になっているティファニアを心配させないように、自信満々な態度を見せている。

「ふーん、じゃあ私もついて行ってあげる。一人じゃ辛いでしょ？」

「……ありがとう。だが、俺を甘くみるなよ。これくらい背負ってみせるさ」

一夏はコーラを飲み終えると立ち上がり、執務机に向かおうとする。

「だーめ」

だがティファニアが起き上がって、ベッドの横を通り過ぎようとした一夏を引きずりこんだ。

「今日くらいはユツクリしようよ。私、久しぶりに一夏と楽しみたいし。こういう時間

もたまにはあつていいんじゃない？」

抱きしめられる形でベッドに寝かされたので、すぐ目の前にティファニアの顔がある。

一夏の拘りで最高級の品物で揃えているためにただ単に寝転がるだけで、夢の世界に行きそうになる。

「……いや、ダメだ。身体がなまりすぎてる。筋肉の方は、寝ている間に電氣流してたから大丈夫だが……実際に機体を動かさないとわからないこともある……だが、眠いな」

時間的にいえば現在はお昼寝がしたくなる午後三時、先ほどまで数週間眠っていたが……いや、寧ろ眠っていたからこそ、眠くなっている。

「うん、だから今日くらいは——」

「楽しそうだね、ティファちゃん」

部屋の扉が開かれる音が聞こえ、ここにはいないはずの誘宵アリサがそこにはいた。何故か知らないが亡国機業の制服を着ている。

「……あれ？アリサちゃん、スコールの所に行ってるんじゃないの？」

ガバリと勢いよく、ティファニアが起き上がった。

「ええ、行ってたよ。それで、一夏くんが目覚めたって聞いたから急いで戻ってきたの」

「あれ？なんでアリサがいるんだ？」

一夏も眠たさをごまかしながらユツクリと起き上がった。

「おはよう、一夏くん」

「うん、おはよう。なんでアリサがここにいるんだ？」

「一夏くんが心配だからついてきちゃった。勿論、お父さん達には許可もらってる」

友達の家泊まりに行くような気軽さで、アリサは亡国機業の本部にやってきたようだ。

「ついでに百春くんも来てるよ。彼の場合は別の理由もあるけど」

「マジか、あいつも来てるのか」

一夏はユツクリと立ち上がった。

「良かった。心配したんだよ」

アリサは一夏に優しく抱きつき、一夏もそれに応えるようにそつと抱きしめた。

「悪い、ちよつと無茶苦茶しすぎた。先に謝つとく、俺はこれからも無茶する。無茶しないと駄目だからさ」

悪いとは思っている。だがそれ以上に自分がしなければならないことを理解している。

自分以外の誰も、あの理想郷に勝つことができないと長年戦ってきたことによつて生

まれた直感が告げている。

「うん、それはわかっている。でも、ちゃんと戻ってきてよね」

「おう」

「……………あのー、私もいるんだからさあ、二人だけの世界にならないでいただけますかねえ？」

二人の世界に入り込んでいる一夏とアリサの間に、ティファニアが割って入り込んだ。

「……………すまん」

「わかればよろしい……………そろそろ時間だし、ご飯食べにいく？」

ティファニアからの提案に二人は頷いた。

世界は混沌に包まれ用としているが、ここだけは平穏が広がっている。